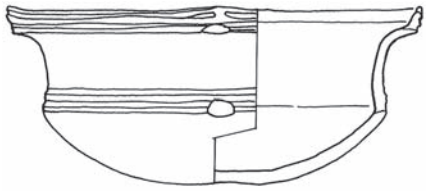
福岡市埋蔵文化財調査報告書第925集

入部（いるべ） XII

－重留遺跡第1次調査報告－



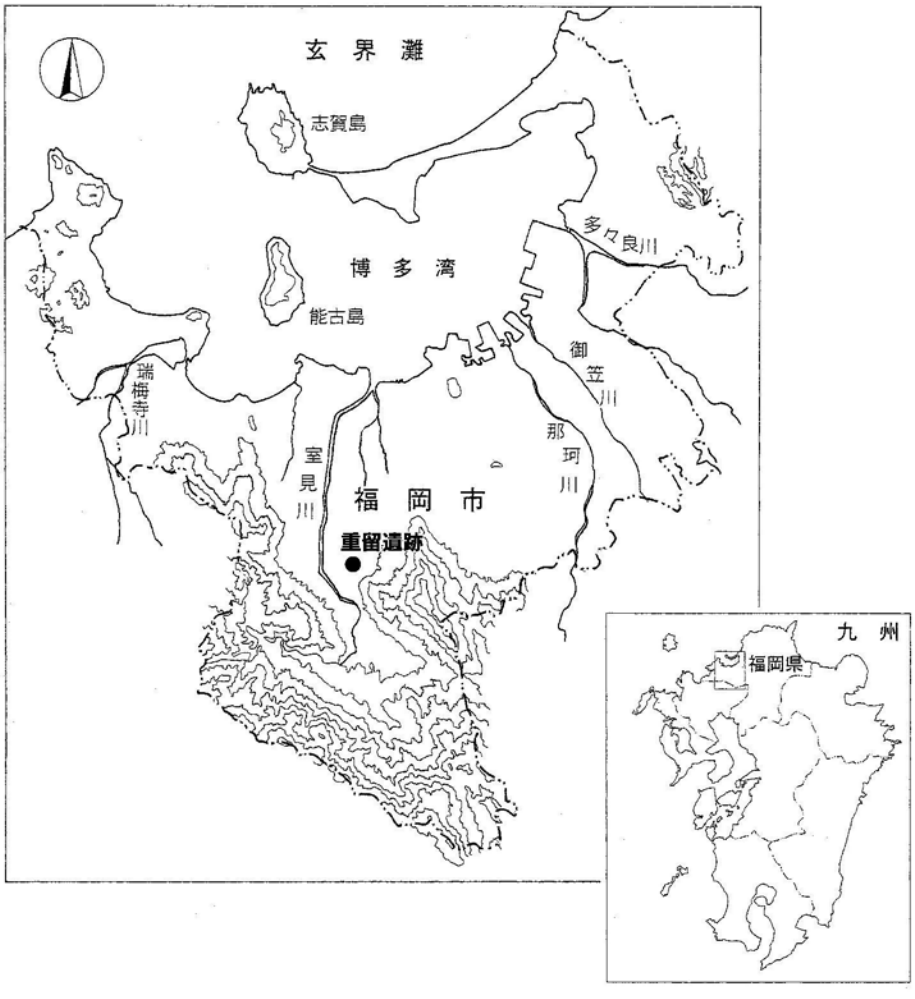
２００７

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第925集

入部（いるべ） XII

－重留遺跡第1次調査報告－



平成19年
福岡市教育委員会

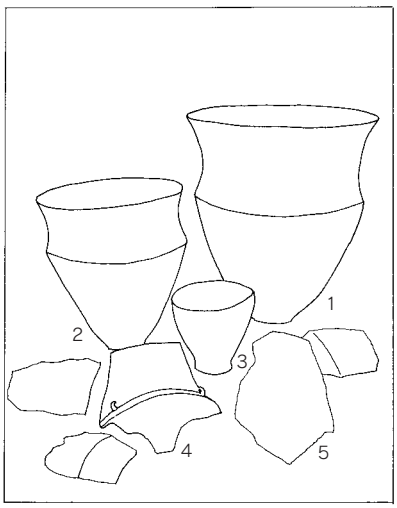
▲SC01上面

▼SC01中面

SC01（床面）

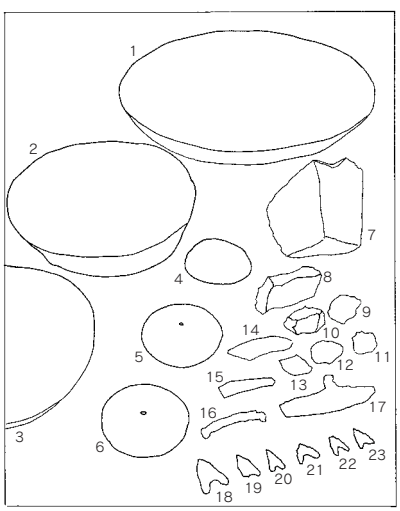
SD01河川（B-2区 南より）

粗製深鉢



1. 137頁 397（埋甕）
2. 145頁 428
3. 81頁 304
4. 209頁 861
5. 145頁 428

浅鉢、土製品、石器類



1.　86頁 215
2.　167頁 602
3.　116頁 321
4.　171頁 662
5.　171頁 661
6.　120頁 327
7.　232頁 黒曜石原石
8～13　186頁 石核
14.　15　178頁 縦長剥片
16.　176頁 697 異形石器
17.　174頁 696 石匙
18～23　173頁 石鏃

打製石斧と磨製石斧

序

福岡市は、古来から海外の人たちや新しい文物を積極的に受容し、独自の文化や風土を作り上げてきました。現在もアジアの拠点都市として発展を続けています。市内にはこのような海外交流を示す遺跡が、数多く残されています。特に本市の西南部に位置する早良平野には、弥生時代開始期の環溝集落である有田遺跡群、弥生時代のクニの成立を物語る吉武高木遺跡など、わが国の歴史上重要な遺跡が点在しています。

本書は、早良区入部地区県営圃場整備事業に先だって昭和62年度から平成7年度にかけて実施した発掘調査のうち、初年度の昭和62年度に調査した重留遺跡第1次調査の成果を報告するものです。短期間の調査でしたが、本市では初となる縄文時代の集落跡を発見しました。報道発表したところ市民の方々の高い関心を集め、遺跡説明会には500人を超す見学がありました。

発掘から整理、報告に至るまで、福岡県農林事務所、福岡市農林水産局、福岡市入部土地改良組合、さらに地元の方々など関係各員に多大なご協力をいただきました。心から感謝を申し上げます。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、さらに学術研究の資料としても活用いただければ幸いです。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会

教育長　植木とみ子

遺跡見学会（昭和63年3月13日開催）

遺跡調査番号	8748		遺跡略号	ＳＧＴ-１	
地番	早良区大字重留地内		分布地図番号	重留８４	
開発面積	750ha	調査対象面積	50,000m²	調査面積	23,000m²
調査期間	昭和63年1月12日～昭和63年3月30日				

例言・凡例

1．本書は、福岡県営入部地区圃場整備事業に伴い福岡市教育委員会が実施した発掘調査のうち、初年度に当たる重留遺跡第1次調査の報告書である。なお本書の作成作業は国庫補助を受けて行った。

2．入部地区圃場整備事業の全体面積は750haで、この範囲には古墳や8か所の遺跡が所在している。各遺跡については、それぞれ福岡市埋蔵文化財課の調査次数を付けているが、本事業に関する調査報告書は、事業名の「入部」を書名とし、副題として調査地の遺跡名とその調査次数を付している。

3．入部地区圃場整備事業の発掘調査報告書は、これまで11冊が刊行されている。本書で報告する重留遺跡第1次調査については、すでに「入部Ⅰ」に掲載しているが、調査概要を速報的にまとめたものであった。調査終了後に縄文時代遺物の実測作業を進めたものの本報告に至らなかった。昨年度より再整理にかかり、多くの方々の協力を得て発行することになった。なお書名はこれまでの報告書名と番号を引き継ぎ、「入部Ⅻ」とした。

4．本書の編集は力武卓治が行い、縄文時代を米倉秀紀、弥生時代以降を常松幹雄と力武が分担した。本文記述については、それぞれ文末に執筆者名を記している。

5．本書に用いた遺構、遺物の実測、トレースについては、常松、力武の他に次の者が分担した。

遺構実測：　小川泰樹、荻村昇二、池田由美、滝良子、大峰宏樹、田中宣親

遺物実測：　米倉秀紀、池田祐司、田中克子、永渕昭子

遺物図トレース：　米倉秀紀、山崎賀代子

6．遺構写真は常松と力武が分担し、遺物写真は力武が撮影した。なお空中撮影はPHOTOオオツカ（大塚清美）による。

7．検出遺構は、ローマ字の略号をつけた。また本書では、遺構名と号数が分かるように、SC01竪穴住居跡、SK01土壙ように記述している場合がある。

竪穴住居跡：SC　土壙：SK　埋甕：SR　ピット：SP　河川：SD　河川構築遺構：SX　散布地：SA

8．出土遺物は、縄文時代のすべてを通し番号とし、弥生時代以降の遺物は、遺構ごとに通し番号としている。また実測図、写真の縮尺は基本的に次のように統一している。

遺物図　　縄文時代　土器（1/3）　土製品（1/2）　石器（1/1、1/2）

弥生時代以降　土器（1/4　須恵器1/3）　木製品（1/4）

遺物写真　縄文時代　土器（1/2、1/3）　土製品（1/2）　石器（1/1、1/2）

弥生時代以降　土器（1/2、1/4　須恵器1/3）　木製品（1/8）

9．山崎純男文化財部長は、縄文土器に付いた圧痕から縄文時代の生業、農耕、さらに自然環境復元などの研究に精力的に取り組んで、目覚ましい研究成果を次々に発表されている。今回も本遺跡出土土器の観察をお願いしたところ快諾されて、コンテナ50箱分数万点に及ぶすべての破片について観察、検討を行い、その結果を報告文にまとめていただいた。新しい研究成果を本書に盛り込めて報告書としての内容の充実を果たせたことを心から感謝している。

10．各次調査で得た出土遺物、実測図や写真などの記録類は、福岡市埋蔵文化財センター（福岡市博多区井相田2-1-9　電話092-571-2921）に収蔵、保管する。誰もが検索し、実見することができるので、考古学などの研究だけでなく、学校教育や生涯学習など多方面での活用を期待している。

本 文 目 次

第１章　はじめに ---------- 1
　第１節　調査に至るまで ---------- 1
　第２節　調査の組織と構成 ---------- 2
　第３節　調査地の位置と周辺の調査例 ---------- 6

第２章　調査の記録 ---------- 7
　第１節　調査の概要 ---------- 7
　第２節　区割りと試掘結果 ---------- 7
　第３節　弥生時代～古墳時代の調査 ---------- 14
　　１．調査概要 ---------- 14
　　２．ＳＤＯ１河川の遺構と遺物 ---------- 17
　　ＳＸＯ１河川構築遺構 ---------- 22
　　ＳＸＯ２河川構築遺構 ---------- 24
　　ＳＸＯ３河川構築遺構 ---------- 26
　　出土遺物 ---------- 29
　　３．ＳＤＯ２河川の遺構と遺物 ---------- 49
　　出土遺物 ---------- 52
　　４．C区の遺構と遺物 ---------- 54
　　ＳＫＯ５土壙 ---------- 55
　　ＳＫＯ４土壙 ---------- 56
　　その他の遺物 ---------- 56
　　弥生時代以降遺物の観察表 ---------- 57
　　５．小　結　（弥生時代～古墳時代前期の早良平野） ---------- 61

　第４節　縄文時代の調査 ---------- 71
　　１．調査概要 ---------- 71
　　２．竪穴住居跡（ＳＣＯ１、０３～０５） ---------- 76
　　３．土　壙（ＳＫＯ１～０５） ---------- 115
　　４．埋　甕（ＳＲＯ１） ---------- 136
　　５．包含層（Ａ－１区散布地）の遺物 ---------- 139
　　６．トレンチ出土遺物 ---------- 200
　　７．２・３区の出土遺物 ---------- 220
　　８．その他の石器関連遺物 ---------- 232
　　縄文時代遺物の観察表 ---------- 235
　　９．小　結（縄文時代のまとめ） ---------- 255

付　篇　　福岡県重留遺跡における土器圧痕の検討 ---------- 259
　　山崎純男（福岡市教育委員会文化財部）

挿　図　目　次

図1　重留遺跡と早良平野の遺跡　1/5,000 …… 3
図2　入部地区補助整備事業範囲と遺跡群　1/10,000 …… 4
図3　重留遺跡と周辺調査　1/5,000 …… 6
図4　重留遺跡第1次調査地の区割り　1/200 …… 8
図5　試掘調査の出土遺物実測図　1/3 …… 10
図6　朝日・毎日・西日本新聞記事（昭和63年3月8日）と「入部遺跡だより」表紙 …… 14
図7　試掘位置と弥生～古墳時代の河川　1/100 …… 16
図8　SD01河川南端部と土層図（B-1区）　1/400 …… 18
図9　SD01河川中央部と土層図（B-2、3区）　1/100・1/200 …… 19
図10　SD01河川北半部と土層図（A-2、3区）　1/400 …… 21
図11　SX01河川構築遺構図　1/40 …… 22
図12　SX02河川構築遺構図　1/40 …… 24
図13　SX03河川構築遺構図　1/40 …… 26
図14　SD01河川の遺物図 1　1/4 …… 28
図15　SD01河川の遺物図 2　1/4 …… 30
図16　SD01河川の遺物図 3　1/4 …… 31
図17　SD01河川の遺物図 4　1/4 …… 33
図18　SD01河川の遺物図 5　1/4 …… 35
図19　SD01河川の遺物図 6　1/4 …… 36
図20　SD01河川の遺物図 7　1/4 …… 37
図21　SD01河川の遺物図 8　1/3 …… 38
図22　SD01河川の遺物図 9　1/3・1/4 …… 38
図23　SD01河川の木製品図 1　1/4 …… 41
図24　SD01河川の木製品図 2　1/4 …… 42
図25　SD01河川の木製品図 3　1/4 …… 44
図26　SD01河川の木製品図 4　1/4 …… 45
図27　SD01河川の木製品図 5　1/4 …… 46
図28　SD01河川の木製品図 6　1/4 …… 47
図29　SD01河川の木製品図 7　1/4 …… 48
図30　SD02河川図　1/200 …… 49
図31　SD02河川の遺物図 1　1/3・1/4 …… 51
図32　SD02河川の木製品図　1/4 …… 53
図33　C区全体図　1/800 …… 54
図34　C区の遺物図　1/3 …… 55
図35　C区SK05土壙図　1/60 …… 55
図36　C区SK04土壙の遺物図　1/4 …… 56
図37　次年度調査区の遺物図　1/3 …… 56
図38　早良平野の地形と遺跡 …… 62
図39　早良平野における墓群の構成　1/500 …… 65
図40　埋葬方位の特性 …… 66
図41　A－1区縄文調査区全体図　1/400 …… 73
図42　縄文調査区遺構配置図　1/200 …… 75
図43　SC01実測図（上面）　1/40 …… 77
図44　SC01実測図（中面）　1/40 …… 78
図45　SC01実測図（床面）　1/40 …… 79
図46　SC01炉跡実測図　1/4 …… 80
図47　SC01床面出土遺物図 1　1/3 …… 81
図48　SC01床面出土遺物図 2　1/3 …… 83
図49　SC01床面出土遺物図 3　1/3・1/2 …… 86
図50　SC01覆土出土遺物図 1　1/3 …… 88
図51　SC01覆土出土遺物図 2　1/3 …… 90

図52　SC01覆土出土遺物図３　1/3 …… 94
図53　SC01覆土出土遺物図４　1/3 …… 96
図54　SC01覆土出土遺物図５　1/3 …… 98
図55　SC01覆土出土遺物図６　1/3 …… 100
図56　SC01覆土出土遺物図７　1/2 …… 103
図57　SC01覆土出土遺物図８　1/1 …… 104
図58　SC01覆土出土遺物図９　1/2・1/3 …… 105
図59　SC03実測図　1/40 …… 107
図60　SC03出土遺物図　1/3 …… 108
図61　SC04実測図　1/40 …… 109
図62　SC04出土遺物図　1/3 …… 109
図63　SC05実測図　1/40 …… 110
図64　SC05出土遺物図１　1/3 …… 112
図65　SC05出土遺物図２　1/3・1/2・1/1 …… 113
図66　SK01実測図　1/10 …… 116
図67　SK01出土遺物図　1/3 …… 116
図68　SK02実測図　1/20 …… 119
図69　SK02出土遺物図　1/3・1/2 …… 120
図70　SK03実測図　1/20 …… 122
図71　SK03出土遺物図　1/3・1/2 …… 124
図72　SK04実測図　1/20 …… 126
図73　SK04出土遺物図　1/3 …… 127
図74　SK05実測図　1/20 …… 130
図75　SK05出土遺物図１　1/2・1/3 …… 132
図76　SK05出土遺物図２　1/2・1/1 …… 134
図77　埋甕実測図　1/20 …… 136
図78　埋甕出土遺物図　1/3 …… 138
図79　A－1区包含層出土前期～後期土器・所属不明土器図　1/3 …… 140
図80　A－1区包含層出土A類深鉢土器図１　1/3 …… 142
図81　A－1区包含層出土A類深鉢土器図２　1/3 …… 143
図82　A－1区包含層出土B類深鉢土器図１　1/3 …… 145
図83　A－1区包含層出土B類深鉢土器図２　1/3 …… 147
図84　A－1区包含層出土A・B類深鉢土器図　1/3 …… 149
図85　A－1区包含層出土C類深鉢土器図１　1/3 …… 151
図86　A－1区包含層出土C類深鉢土器図２　1/3 …… 153
図87　A－1区包含層出土C類深鉢土器図３　1/3 …… 155
図88　A－1区包含層出土C類深鉢土器図４　1/3 …… 157
図89　A－1区包含層出土C類深鉢土器図５　1/3 …… 159
図90　A－1区包含層出土C類深鉢土器図６　1/3 …… 160
図91　A－1区包含層出土その他の深鉢・鉢土器図　1/3 …… 163
図92　A－1区包含層出土深鉢土器底部図　1/3 …… 164
図93　A－1区包含層出土浅鉢土器図１　1/3 …… 166
図94　A－1区包含層出土浅鉢土器図２　1/3 …… 168
図95　A－1区包含層出土浅鉢土器底部図　1/3 …… 170
図96　A－1区包含層出土土製品図　1/2 …… 171
図97　A－1区包含層出土石器図１（石鏃）　1/1 …… 173
図98　A－1区包含層出土石器図２（スクレイパー・石匙）　1/1 …… 174
図99　A－1区包含層出土石器図３　1/1 …… 176
図100　A－1区包含層出土石器図４　1/1 …… 178
図101　A－1区包含層出土石器図５　1/1 …… 181
図102　A－1区包含層出土石器図６　1/1 …… 182
図103　A－1区包含層出土石器図７（石核）　1/1 …… 186
図104　A－1区包含層出土石器図８（クサビ形石器）　1/1 …… 188
図105　A－1区包含層出土石器図９（石斧・同未製品）　1/2 …… 190

図106　A－1区包含層出土石器図 10（石斧・同未製品）　1/2 …… 191
図107　A－1区包含層出土石器図 11（石斧・同未製品）　1/2 …… 192
図108　A－1区包含層出土石器図 12（石斧・同未製品）　1/2 …… 193
図109　A－1区包含層出土石器図 13（石斧）　1/2 …… 194
図110　A－1区包含層出土石器図 14（磨石類）　1/3 …… 198
図111　7号トレンチ出土遺物図　1/1・1/2・1/3 …… 201
図112　9号トレンチ出土遺物図　1/1・1/2 …… 203
図113　10号トレンチ出土遺物図　1/1・1/2・1/3 …… 205
図114　11号トレンチ出土遺物図　1/1・1/2・1/3 …… 207
図115　14号トレンチ出土遺物図 1　1/3 …… 209
図116　14号トレンチ出土遺物図 2　1/3 …… 211
図117　14号トレンチ出土遺物図 3　1/3 …… 213
図118　14号トレンチ出土遺物図 4　1/1 …… 216
図119　14号トレンチ出土遺物図 5　1/1 …… 218
図120　17号トレンチ出土遺物図　1/1 …… 219
図121　2・3区の出土遺物図 1　1/2・1/3 …… 221
図122　2・3区の出土遺物図 2　1/1 …… 223
図123　2・3区の出土遺物図 3　1/1・1/2 …… 225
図124　2・3区の出土遺物図 4　1/2 …… 229
図125　2・3区の出土遺物図 5　1/2・1/3 …… 231
図126　1区出土黒曜石原石実測図及び玄武岩剥片略測図　1/3 …… 232
図127　追加資料実測図　1/1・1/2 …… 234
図128　今山遺跡第6次調査頂上部出土有肩打製石斧未製品 …… 256
図129　各種の使用痕・加工痕ある剥片 …… 258
図130　調査区周辺地質図　1/50,000 …… 258

写　真　目　次

写真1　早良区内野上空から早良平野を望む（昭和52年撮影） …… 2
写真2　入部地区圃場整備事業の工事用看板 …… 7
写真3　試掘作業風景（B－1区　1月18日撮影） …… 9
写真4　試掘の出土遺物 …… 10
写真5　SD01・02河川北半部（A－2、3区　北西より） …… 15
写真6　SD01・02河川（南西より） …… 17
写真7　SD01河川（B－2区南より） …… 20
写真8　SD01河川北半部発掘作業風景(南より） …… 20
写真9　SX01河川構築遺構の発掘風景 …… 22
写真10　SD01河川西側溝（南より） …… 23
写真11　SX01河川構築遺構（西より） …… 23
写真12　SX02河川構築遺構の解体作業 …… 25
写真13　SX02河川構築遺構（北西より） …… 25
写真14　SX03河川構築遺構（南より） …… 26
写真15　SD01河川北半部の流木（西より） …… 27
写真16　SD01河川北半部（北より） …… 27
写真17　SD01河川の遺物 1 …… 29
写真18　SD01河川の遺物 2 …… 30
写真19　SD01河川の遺物 3 …… 32
写真20　SD01河川の遺物 4 …… 34
写真21　SD01河川の遺物 5 …… 36
写真22　SD01河川の遺物 6 …… 37
写真23　SD01河川の木製品出土状況（扉） …… 39
写真24　SD01河川の木製品出土状況（ネズミ返し） …… 39
写真25　SD01河川の木製品（ネズミ返し） …… 40
写真26　SD01河川の木製品出土状況（蔀） …… 43

写真27　SD01河川の木製品（蓆）…… 43
写真28　SD01河川の木製品（扉）…… 44
写真29A　SD01河川の木製品出土状況（竪杵）…… 46
写真29B　SD01河川の木製品出土状況（えぶり）…… 46
写真30　SD01河川の木製品（用途不明材）…… 48
写真31　SD02河川（東より）…… 49
写真32　SD02河川の遺物…… 50
写真33　SD02河川の木製品出土状況（二叉鍬）…… 52
写真34　C区全景（南より）…… 54
写真35　C区の遺物…… 55
写真36　C区SK04（北より）…… 56
写真37　C区SK04の遺物…… 56
写真38　縄文調査区全景…… 72
写真39　A－1区散布地（SA01）…… 74
写真40　SC01（上面）…… 77
写真41　SC01（中面）…… 78
写真42　SC01（床面）…… 79
写真43　SC01炉跡…… 80
写真44　SC01床面出土遺物 1…… 82
写真45　SC01床面出土遺物 2…… 84
写真46　SC01床面出土遺物 3…… 85
写真47　SC01床面出土遺物 4…… 87
写真48　SC01覆土出土遺物 1…… 89
写真49　SC01覆土出土遺物 2…… 91
写真50　SC01覆土出土遺物 3…… 95
写真51　SC01覆土出土遺物 4…… 97
写真52　SC01覆土出土遺物 5…… 99
写真53　SC01覆土出土遺物 6…… 101
写真54　SC01覆土出土遺物 7…… 102
写真55　SC01覆土出土遺物 8…… 103
写真56　SC01覆土出土遺物 9…… 106
写真57　SC01覆土出土遺物 10…… 107
写真58　SC03～SC05…… 108
写真58-1　SC03の出土遺物…… 108
写真58-2　SC04の出土遺物…… 109
写真59　SC05…… 111
写真60　SC05の遺物出土状況…… 111
写真61　SC05出土遺物 1…… 114
写真62　SC05出土遺物 2…… 115
写真63　SK01…… 116
写真64　SK01出土遺物…… 117
写真65　SK02…… 117
写真66　SK02…… 118
写真67　SK02出土遺物 1…… 121
写真68　SK02出土遺物 2…… 122
写真69　SK03…… 123
写真70　SK03出土遺物 1…… 125
写真71　SK03出土遺物 2…… 126
写真72　SK04…… 127
写真73　SK04出土遺物…… 128
写真74　遺跡説明会（昭和63年3月13日）…… 129
写真75　SK05…… 131
写真76　SK05出土遺物 1…… 133
写真77　SK05出土遺物 2…… 135

写真78-1　SR01埋甕 …… 136
写真78-2　埋甕 …… 137
写真79　発掘作業風景 …… 139
写真80　A－1区包含層出土前期～後期土器・所属不明土器 …… 140
写真81　A－1区包含層出土A類深鉢土器 …… 144
写真82　A－1区包含層出土B類深鉢土器 1 …… 146
写真83-1　A－1区包含層出土B類深鉢土器 2 …… 147
写真83-2　A－1区包含層出土B類深鉢土器 2 …… 148
写真84　A－1区包含層出土C類深鉢土器 1 …… 152
写真85　A－1区包含層出土C類深鉢土器 2 …… 154
写真86　A－1区包含層出土C類深鉢土器 3 …… 156
写真87　A－1区包含層出土C類深鉢土器 4 …… 161
写真88　A－1区包含層出土その他の深鉢・鉢土器 …… 163
写真89　A－1区包含層出土深鉢土器底部 …… 165
写真90　A－1区包含層出土浅鉢土器 1 …… 167
写真91　A－1区包含層出土浅鉢土器 2 …… 189
写真92　A－1区包含層出土浅鉢土器底部 …… 170
写真93　A－1区包含層出土土製品 …… 171
写真94　A－1区包含層出土石器 1（石鏃・スクレイパー・石匙） …… 175
写真95　A－1区包含層出土石器 2（スクレイパー他） …… 179
写真96　A－1区包含層出土石器 3（UF他） …… 183
写真97　A－1区包含層出土石器 4（石核） …… 187
写真98　A－1区包含層出土石器 5（クサビ形石器他） …… 188
写真99　A－1区包含層出土石器 6（石斧・同未製品） …… 195
写真100　A－1区包含層出土石器 7（石斧・同未製品） …… 196
写真101　A－1区包含層出土石器 8（石斧・同未製品） …… 197
写真102　A－1区包含層出土石器 9（磨石類） …… 199
写真103　7号トレンチ出土遺物 …… 202
写真104　9号トレンチ出土遺物 …… 204
写真105　10号トレンチ出土遺物 …… 206
写真106　11号トレンチ出土遺物 …… 208
写真107　14号トレンチ出土遺物 1 …… 210
写真108　14号トレンチ出土遺物 2 …… 212
写真109　14号トレンチ出土遺物 3 …… 214
写真110　14号トレンチ出土遺物 4 …… 217
写真111　14号トレンチ出土遺物 5 …… 218
写真112　17号トレンチ出土遺物 …… 220
写真113　2・3区出土遺物 1 …… 222
写真114　2・3区出土遺物 2 …… 224
写真115　2・3区出土遺物 3 …… 226
写真116　2・3区出土遺物 4 …… 230
写真117　2・3区出土遺物 5 …… 231
写真118　黒曜石の原石と剥片、玄武岩の剥片 …… 233
写真119　土製品 …… 234

表　目　次

表1　入部地区圃場整備事業地内調査一覧 …… 5
表2　弥生時代以降遺物の観察表 …… 57
表3　縄文土器観察表 …… 235
表4　縄文時代土製品観察表 …… 249
表5　縄文時代石器観察表 …… 250
表6　石斧計測グラフ …… 257

第1章　はじめに

第1節　調査に至るまで

1985年（昭和60）、福岡県農林事務所と福岡市農業土木課から、福岡市教育委員会文化課（現 埋蔵文化財第1課）に福岡市早良区重留（しげとめ）及び東入部一帯の県営圃場事業計画案が提出された。この事業は、博多湾に向かって逆三角形に形成された早良平野の南端部に近い水田部の約1,000haを対象とした大規模な計画であった。

この事業計画地の北側隣接地では、四箇田（しかた）団地や四箇田小学校の建設に先立って、昭和49年より周辺部の小規模開発をも含めて発掘調査を継続しており、縄文時代泥炭層の検出など多大な成果を上げていた。一方その南側は、事業計画地の平野部に限ると昭和52年に福岡市消防学校建設地の清末（きよすえ）遺跡が唯一の調査例で、事業地内の水田下にどのような遺跡が眠っているのか明らかでなかった。しかし昭和53年より始めた詳細な分布調査では、主に表採に頼る方法であったが、北側より重留、四箇古川、四箇船石、四箇東、清末、岩本、安通（やすどおり）、東入部の8遺跡と拝塚（はいづか）古墳を『福岡市遺跡分布地図』に登録しており、さらに多数の遺跡の存在が予想された。室見川の対岸、飯盛山の扇状地の吉武高木、大石、樋渡遺跡では、弥生時代の甕棺墓や墳丘墓から豊富な青銅器類が発見され、大ニュースになったのは、わずか2年前のことである。その興奮が依然として続いており、次は室見川右岸における弥生時代遺跡の解明が次の関心事となった。本事業計画地はまさにその範囲にあることから、発掘調査に大きな期待が寄せられたのは当然の事であろう。これに応えるように5年後の東入部遺跡第6次調査では、方形の溝で囲まれた弥生時代前期～中期後半の甕棺墓群から、吉武遺跡に匹敵するような豊富な副葬品が実際に発見されたのである。早良平野において昭和の終わりから平成の始め頃のわずか数年の内に調査したこれらの遺跡は、日本の歴史、特に弥生時代のクニの成立を考える上できわめて重要な位置を占め、学界の注目を集めることになった。

ところで先の事業計画案を受けた文化課では、翌1986年（昭和61）3月に試掘調査を実施した。広範囲の対象地だったために、各水田ごとの細かな試掘ではなかったが、弥生時代と中世を主にする遺構がほぼ事業計画地全域に広がっていることを確認した。

文化課では、昭和60年前後から圃場整備事業に伴う発掘調査を市内各地において実施し、その都度、発掘調査の技術を高め、圃場整備事業に適した有効な方法を習得してきた。また問題点についてはその都度、検討、改善を重ねた。地元との対応についても定期的に協議、説明会を開き、町内へのチラシ配布などで発掘調査の周知化を進め、埋蔵文化財行政への理解と協力を得るように努めてきた。これらの経験から、なによりも大事なことは事前の綿密な試掘が不可欠であり、その精度が圃場事業の計画自体を左右するという結論であった。試掘によって調査対象地を最小限度まで絞り込むことができ、調査・工事の期間短縮、保存地区の拡大、そして費用節減などあらゆる面で好結果を得ることができるのである。

とはいえ試掘を本調査前に実施することは、そう簡単なことではない。しかも圃場整備事業の場合、当然発掘調査や工事期間が長引くほど、農作物による収入が途絶え、農家の負担は大きくなる。従って秋の収穫期と翌年の田植え時期までの間のおおよそ5～7か月が、発掘調査と造成工事に与えられた期間となる。通常の遺跡調査は、調査面積と遺跡の内容に応じて調査期間が割り出され、発掘費用が積算されるのに対し、圃場整備事業ではその逆で、最初に調査期間が決まり、造成工事と同時スター

トという場合が多い。しかもその広大な対象面積は、私たちの工夫や努力を無視するだけで、どんなに効率的な作業を進めても際だった効果は望めない。

特に本事業計画地の入部地区は、野菜や花卉類などの栽培が盛んな二毛作地帯で、本調査前年の試掘の実施は困難が予想された。

写真1　早良区内野上空から早良平野を望む（昭和52年撮影）

埋蔵文化財課（当時）では、昭和62年度当初から第2係の力武と常松を担当とし配置していたが、県農林事務所による地元調整が整わないまま稲刈りの季節を迎え、ついに試掘を省略せざるをえなくなった。試掘をしないで本調査突入ということが、どのような結果を招くか自明のことであったが、福岡県農林事務所による地元への説明会が開催されたのは、年を越した1月8日のことである。しかも造成工事業者との契約がすでに締結されており、発掘調査と造成工事の両者が、同時併行して年度内工事完了を目指すという最悪の事態となった。

第2節　調査の組織と構成

事業主体　福岡県農林事務所農地整備鉱害課　福岡市経済農林水産局農業土木課
福岡市入部土地改良組合

調査主体　福岡市教育委員文化部埋蔵文化財課（昭和62年度当時）
課長　柳田純孝　第2係長　飛高憲雄

調査担当　力武卓治　常松幹雄　庶務　岸田隆

発掘作業員　牛尾豊　榊光雄　田中宣親　樋口宏樹　広田義美　真名子時雄　南川隆　結城弥澄　大嶺佳之　山崎光一　牛尾秋子　牛尾奈美枝　牛尾二三子　菊池栄子　倉光ナツ子　榊スミ子　正崎泰代　白坂フサコ　惣慶とみ子　結城千賀子　結城ノブ子　平川史子　細川ミサヲ　山西人美　結城シズ　多田映子　吉岡勝野　池田由美　瀧良子　樋口久子　松尾真澄　高田玉恵　結城澄子　今橋磨美
池田祐司（九州大学）　永淵昭子（熊本大学）　荻村昇二　小川泰樹（明治大学）

発掘調査員　田中克子

整理作業員　池田由美　宮崎まり子　渡辺敦子　柴田志乃　池田礼子　諸岡直江

調査に当たっては、事業者である福岡県農林事務所、福岡市経済農林水産局、入部土地改良組合と造成工事業者である後藤建設のご協力を得た。なお県営入部地区圃場事業は、平成12年7月28日に竣工式を終えている。

1. 入部圃場整備事業地　**2. 重留遺跡1次(本遺跡)**　3. 四箇遺跡群　4. 吉武遺跡　5. 金武遺跡群
6. 浦江遺跡　7. 清末遺跡　8. 田村遺跡　9. 鶴町遺跡　10. 干隈遺跡
11. 飯倉遺跡　12. 原深町遺跡　13. 有田七田前遺跡　14. 有田遺跡群　15. 西新町遺跡
16. 藤崎遺跡　17. 姪浜新町遺跡　18. 福重稲木遺跡　19. 橋本遺跡　20. 拾六町ツイジ遺跡
21. 野方久保遺跡　22. 野方遺跡　23. 今宿五郎江遺跡

図1　重留遺跡と早良平野の遺跡（1/50,000）

図2　入部地区圃場整備事業範囲と遺跡群（1/10,000）

表1　入部地区圃場整備地内調査一覧

次数	調査年度	調査対象面積㎡	調査期間	調査遺跡	次数	遺跡略号	調査番号	調査面積㎡	調査担当	報告書名	埋文集	時　代	主な遺構・遺物
1	1987(昭62)	50,000	1988.0112～1988.0330	重　留	1次	SGT-1	8748	23,000	力武・常松	入部　Ⅰ 入部　Ⅻ	235 925	縄文～中世	縄文晩期竪穴住居跡4？、埋甕、土壙、弥生～古墳河川、井堰、縄文土器、石器、弥生～古墳木製品(竪杵、エブリ、又鍬、ねずみ返し、扉)、種子
2	1988(昭63)	15,000	1988.0621～1989.0407	重　留	2次	SGT-2	8801	39,500	井澤・常松 野村・菅波	入部　Ⅰ	235	縄文～中世	縄文後～晩期埋甕7、溝、竪穴住居跡1、弥生前～中期竪穴住居跡18、甕棺墓63、貯蔵穴51、古墳竪穴住居跡65、方形周溝墓28、奈良～平安掘立柱建物、焼土坑、倉～室町井戸19、掘立柱建物10
				拝塚古墳	1次							古墳	前方後円墳1、方墳1
3	1989(平元)	16,200	1989.0801～1990.0326	重　留	3次	SGT-3	8931	37,500	井澤・常松 野村・池田	入部　Ⅱ	268	縄文～中世	縄文溝、弥生竪穴住居跡7、土壙墓10、甕棺墓104、土壙16、掘立柱建物跡6、古墳竪穴住居跡24、玉造工房跡3、掘立柱建物跡4、土壙墓1、古代・平安土壙墓2　掘立柱建物跡12、井戸2、製鉄遺構9、鎌倉～室町木棺墓1、土壙墓1、井戸4、江戸掘立柱建物跡3
				岩　本	1次	IWM-1						弥生～中世	
				四箇船石	1次	SHF-1						弥生～中世	弥生前期甕棺墓
4	1990(平2)	22,294	1990.0718～1991.0308	清　末	2次	KYS-2	9072	10,044	濱石・長家 池田・小畑 宮井・菅波	入部　Ⅲ	310	古墳～中世	古墳竪穴住居跡、中世大型掘立柱建物跡、井戸、土壙、条里坪境溝
				岩　本	2次	IWM-2	9073	2,421		入部　Ⅳ	343	弥生・古墳・中世	弥生前期～中期末竪穴住居跡18、甕棺墓、土壙墓、古墳前期竪穴住居跡15、中世掘立柱建物跡、井戸、焼土坑
				四箇船石	2次	SHF-2	9071	3,605		入部　Ⅲ	310	弥生・中世	弥生溝、中世井戸、溝、土壙
				東入部	1次	HGI-1	9074	5,453		入部　Ⅷ Ⅸ	577 613	弥生・古墳・鎌倉	弥生前期末～中期前半甕棺墓、土壙　古墳集落、鎌倉集落
				四箇古川	1次	SHK-1	9070	771		入部　Ⅲ	310	中世	中世土坑、溝、ピット
5	1991(平3)	34,381	1991.0513～1992.0305	入　部	5次	IRB-5	9102	34,381	濱石・長家 池田・榎本	入部　Ⅳ	343		詳細分布調査
				清　末	3次	KYS-3	9163	4,492		入部　Ⅴ	424	縄文、古墳、中世	縄文後期包含層、古墳竪穴住居跡9、中近世掘立柱建物跡、井戸、溝
				東入部	2次	HGI-2	9165	16,271		入部　Ⅸ ～Ⅺ	613 652 685	縄文～弥生、古代～中世	縄文包含層、弥生集落、墓地(前期～中期後半　甕棺墓170、土壙・木棺墓5　青銅器・鉄器、古代～中世集落
				安　通	1次	YDR-1	9164	13,051		入部　Ⅳ	343	古墳、古代～中世	古墳竪穴住居跡2、中世掘立柱建物跡、製鉄遺構、土壙、溝
6	1992(平4)	13,832	1992.0520～1993.0131	東入部	3次	IRB-3	9216	13,832	濱石・長家 屋山	入部　Ⅵ	485	古墳、古代～中世	縄文包含層、弥生甕棺墓1、古墳竪穴住居跡、掘立柱建物跡、古代～中世掘立柱建物跡、製鉄遺構、土壙墓
7	1993(平5)	17,000	1993.0501～1994.0228	東入部	7次	HGI-7	9312	17,000	濱石・榎本	入部　Ⅶ	516	弥生～中世	弥生前期～後期竪穴住居跡8、掘立柱建物跡14、土壙10以上、古墳竪穴住居跡6、掘立柱建物跡5、平安～鎌倉掘立柱建物跡50以上、製鉄遺構、
8	1994(平6)	5,000	1994.0707～1994.1125	東入部	10次	HGI-10	9427	5,000	池崎・屋山	入部　Ⅵ	485	弥生～中世	弥生中期円形竪穴住居跡10、方形竪穴住居跡25以上掘立柱建物跡6、中世掘立柱建物跡6以上、井戸1，大溝1
9	1995(平7)	2,600	1995.1004～1996.0214	東入部	11次	HGI-11	9529	1,330	荒牧			弥生・中世	

第3節　調査地の位置と周辺の調査

先述したように本圃場整備事業が計画された入部地区は、博多湾に向かって逆三角形に開口する早良平野の三角形頂点部から北側に広がった水田部で、標高は22m～39mを測る。油山と西山が東西から迫り、早春にはシロウオが遡上する室見川は、この付近から北に方向を変え、早良平野の中央部を直線的に貫流している。調査当時の昭和63年頃は、周囲に豊かな自然が残り、一面に広がった水田では季節ごとに農作業の姿が見られた。どんなに日照りや長雨が続いても、毎年秋の彼岸には約束してたかのように満開となる畦道の曼珠沙華は、豊かに稔った黄金色の稲穂と相まって、すばらしい田園風景を織りなしていた。しかし、水田の向こうに望めた博多湾や生の松原の風景を四箇田団地の高層ビルが遮り、都市化の波が平野に接する丘陵部や幹線道路沿いに急激な速度で押し寄せ始めていた。

平成12年に入部地区圃場整備事業も終わり、整然と区画された水田では、市街化調整区域のために辛うじて以前同様の耕作が続けられてはいるが、平成17年には、室見川左岸の西区橋本と中央区天神との12㎞を結ぶ市営地下鉄七隈線が開通した。約24分という短時間で本市中心部への通勤、通学が可能となり、今後さらに都市化が進むのであろう。

本圃場整備事業地内だけでも表1のように多様な遺構、遺物が確認され、当初の期待をはるかに上回る成果を得て、この地一帯の歴史が次第に明らかになってきたが、都市化による周辺部の発掘件数の増加に比例して、残念ながら数多くの貴重な遺跡が永遠に消滅してしまった。

この地の歴史的環境については、各調査報告書において詳細に記されていることから本報告書では繰り返さないが、5. 小結の中に、弥生時代における早良平野の最近の調査成果について少しまとめている。

図3　重留遺跡と周辺調査（1/5,000）

第2章　調査の記録

第1節　調査の概要

写真2　入部地区圃場整備事業の工事用看板

前述のように埋蔵文化財課第2係の常松と力武は、昭和62年度の年度当初から入部地区の試掘と本調査を担当することになっていたが、秋になっても何の連絡もなかった。この間、南区野間B遺跡第1次（5月23日～7月20日）、2次（10月3日～10月30日）調査、早良区脇山A遺跡（8月4日～12月28日）と発掘調査を続け、さらに年度末には、西区吉武遺跡大石地区の暗渠工事に伴う再発掘が控えていた。また埋蔵文化財課の調査担当職員に共通のことだが、力武は4年前に調査した博多区築港線の調査報告書作成を同時に進めるという状況であった。

本圃場整備事業の対象面積が50,000㎡と広大であること、加えて周辺部でのこれまでの調査結果から、本圃場整備地内にも遺跡の存在が当然予想され、稲刈り後に着手して年度内終了という県農林事務所の計画が、もともと無理な工程であることは誰もが指摘することであった。だからこそ地元との協議が一日も早く整うことを望んでいた。ようやく年が明けた1月4日になって1月8日に地元説明会を開く旨の連絡が入った。19年も前のことなので記憶が曖昧だが、当日の調査日誌には、協議が整わなかった経緯や理由を特に記入していない。おそらく県農林事務所担当者から特にその説明がなかったのだろう。代わりに年度末の3月工事完了と朱筆していることからすると、調査期限を遵守せよとの強い指示があったのだろう。

九州とは言え玄界灘に面した本市は、冬期は山陰式気候特有の厳しい寒さとなり、早良平野の奥まった入部地区では積雪も珍しいことではない。さらに2月になると時雨模様の日が続くなど、発掘作業には最悪の季節を迎える。これからの天候不順は、発掘日数をさらに短く限定すると思われた。

この地元説明会終了後、早々に調査用プレハブ設置や耕作土を剥ぐ重機の手配、さらに雇用する発掘作業員への連絡を済ませ、次週より発掘調査を開始することにした。

第2節　区割りと試掘結果

本来の試掘は、遺構の有無やその内容確認を第一の目的としているために、遺構、遺物を探す事に集中するが、今回は遺構が存在しない部分については、造成工事がすぐに可能となり、その面積が広いほど造成工事がスムーズに進むことになる。つまり遺構、遺物の存在しない場所を先に探し出すということも重要であった。特に幹線道路や排水路などの構造物建築部分については、工事日数もかかることから、造成工事業者側の重機の協力を得て耕作土を剥ぎ、工事可能な範囲の確定を急いだ。

また通常の発掘調査では、開発工事と関係なく調査用のグリッドを独自に組むことが多いが、両者の期間が切迫している今回は、造成工事業者との関係、特に綿密な協議の積み重ねが事業遂行に大きく影響することから、その工程協議で不必要な混乱を避けるために、共通の工事地区名の呼び方が有効と判断した。そこで工事設計図に従って、排水路や支線道路を基線にした区割りを行うことにした。

まず中央を東西に走る1、2号取付排水路を境に、北側をA区、南側をB区とした。これに直交するように南北方向の現在の農道があり、これと平行して東側に14号支線道路が新設され、これら2本の道路でほぼ縦に3区画できることから、西から1、2、3の数字をつけ、北西隅から東に向かってA-1区、A-2区、A-3区とした。さらにB列も同じように西端からB-1、B-2、B-3区と呼んだ。また東端の南北方向の15号支線道路をC区としたので、合計すると7区画である。各区画とも南北に長い長方形区画である。このように幅や長さを測量で正確に割り振っていないので、その面積は同じではない。

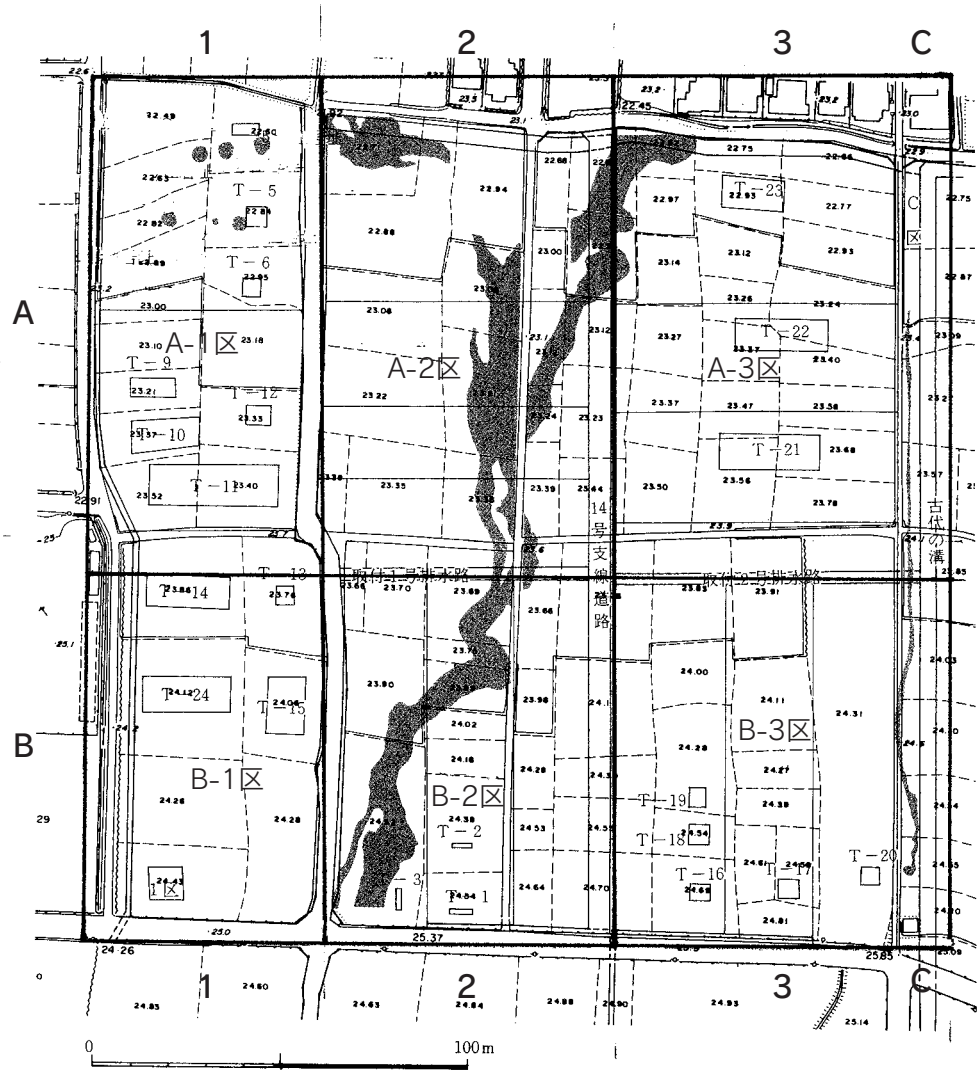


図4　重留遺跡第1次調査地の区割り（1/200）

次ぎに造成工事業者の協力で耕作土を剥いだ14号支線道路の他に1号～23トレンチを設定して試掘を行った。また切りや盛りなどの造成工事に影響がなく、明らかに保存される水田については、試掘をしていない。逆に造成で削平が確実な部分は、できるだけ試掘トレンチを大きく広げて、時間をかけて慎重な遺構検出を行った。

試掘の結果、縄文時代から近世までの多様な遺物が出土し、遺跡が全面に広がっていることを確認した。第4節の縄文時代篇で後述するように、特に縄文時代の遺物が集中し、遺構の存在が期待できたA-1区では、実測方眼紙に合わせてグリッドを別に組んだ。また、B-2区からA-2区方向の蛇行する長い落ち込みがあり、自然河川と思われた。この落ち込み埋土の上面からは、土器片の他に木片が出土し、井堰などの水利施設の構築も予想された。この他にも各時代の竪穴住居跡や土壙、そして溝など生活遺構が当然存在すると考えられたが、不思議なことにピットや溝などの痕跡はまったく見られなかった。試掘の設定場所が外れたのか、試掘の面積の狭さのせいで見落としたなどが考えられた。このため遺構の追求と検出を本格調査の重要課題とした。B-2区からA-2区方向の河川推定部では、その流れを追って両岸を探すためにある程度広く耕作土を剥ぐため、可能な限り耕作土を剥

写真3　試掘作業風景（B－1区　1月18日撮影）

がし、河川に沿った、あるいは流れを利用した生活遺構の把握を試みた。

調査日誌のように短期間の発掘調査ではあったが、縄文時代晩期の集落、弥生時代から古墳時代の河川などを検出した。調査の課題であった各時代の生活遺構確認については、ついに掴めなかった。全面の耕作土を剥がさず試掘のみに頼ったことも一因とは思えるが、決して見落としたわけではない。存在しないことを確かめたことも大事な調査結果であろう。もし遺構が全面に残っていたとすれば、福岡県農林事務所の当初計画通り３月末にすべての作業を終えることはとても不可能だったろう。

かって常松と力武は、同じような圃場事業の吉武遺跡の発掘調査を担当し、その厳しさを経験したことがあり、短期間調査の制約や限界も十分に理解していた。今回はたまたま遺構が限られたことが幸いして期間内に収まったものの、試掘抜きの本調査はあり得ないことで、絶対に繰り返してはいけない。事業者も私たち調査側も肝に銘じるべきことであった。

本報告書では、検出した遺構、出土遺物の報告に当たり、時代を大きく縄文時代と弥生時代以降に分けている。弥生時代から記述を始めているのは、遺物量の少ない弥生時代以降の遺物から先に資料整理を再開し、昨年の平成17年度に弥生時代以降篇、平成18年度に縄文時代篇と2年に分けて発行という計画だった。しかし昨年は資料整理が間に合わず、平成18年度になって予算措置をし、発行することになった。ところが今度は原稿書き直しや編集変更の余裕がなく、そのまま合本せざるをえなかった。調査経緯などを何度も繰り返すなど、読みずらくなっているのはこのためである。

また偶然にも各時代の遺構は、複雑な重なりがなく、主な遺構はA-1区に縄文時代、A-2、B-2区に弥生～古墳時代、C区に古代以降と平面的に大きく分かれ、地区名に置き換えて考えることもできることから、あえて時代順に記述することをしなかった。

試掘出土の遺物

耕作土や試掘のトレンチで出土した遺物のうち、縄文時代の遺物は、第4節にまとめているが、それ以外の遺物をここで記述する。入部地区圃場整備事業の初年度に当たり、縄文時代や弥生時代の関心度に比べ、ともすれば忘れがちな中世から近世についても、今後十分な関心を寄せて調査する必要があると判断し、発掘作業員に中世～近世遺物も見落とさないで取り上げるように指示、徹底した。出土遺物量の比率からすると、中世から近世遺物はきわめて少ないが、整理作業でも実測可能なものはすべて図化するように努めた。

1～7はA-1区の主に耕作土中から出土した。1は三足土鍋の脚部か。円形断面で上端の径は1.87㎝×2.04㎝。外面はタテナデで、わずかに湾曲している。2～4は白磁。2は薄手の作りで、外面の草花文染付はコバルトが黒色に発色していいる。3は高台径4.8㎝。胎土は黄白色でやや軟質、高台畳付き以外は全体に透明釉を掛けている。4は発色がよく、胎土も密。高台内に銘文があるが破片で読めない。5の胎土は小豆色を帯びた茶色を呈し、焼成は堅い。高台径は6.8㎝、畳付きをアーチ状に切り込んでいる。その数は不明。6は白磁の紅皿。口径は4.6㎝。型押しで作られ、全体に厚めの施釉である。5は陶器。径29.8㎝の口縁部は内面に肥厚している。タテに10本のの櫛目があり摺鉢を考えたが

器壁があまりにも薄く、別用途か。口縁部の両面だけに褐釉が掛かり、外面は厚く釉垂れとなっている。密な胎土が用いられ、焼成も良好である。

8～13は各試掘のトレンチ（T1、2、、、と表記）で出土した。なお縄文時代の遺物については第4節にまとめている。8はT6出土。碁笥状高台の明染付。見込み内底に草花文を染付けている。9はT16出土。高台付土師椀。精良な胎土で全体に摩耗している。高台径は6.8㎝。10はT18出土の須恵器坏身で、受け部径12.8㎝。11も同じ須恵器坏身で、T19出土。受け部径はやや大きく14㎝。12はT21出土。口径10.3㎝、器高1.2㎝、低径9.4㎝の土師皿。底部は糸切り離し後の板目が残る。13は中国龍泉窯系の青磁碗。小片のため大きさ、傾きとも不正確。外面の鎬蓮文の鎬は鈍く、内面見込みの草蔓文も彫りが甘い。釉は1㎜程に厚く掛かる。点数的には少ないが古墳時代から近世までの遺物があり、この他にも小片ながら中国、朝鮮の陶磁器類も見られた。

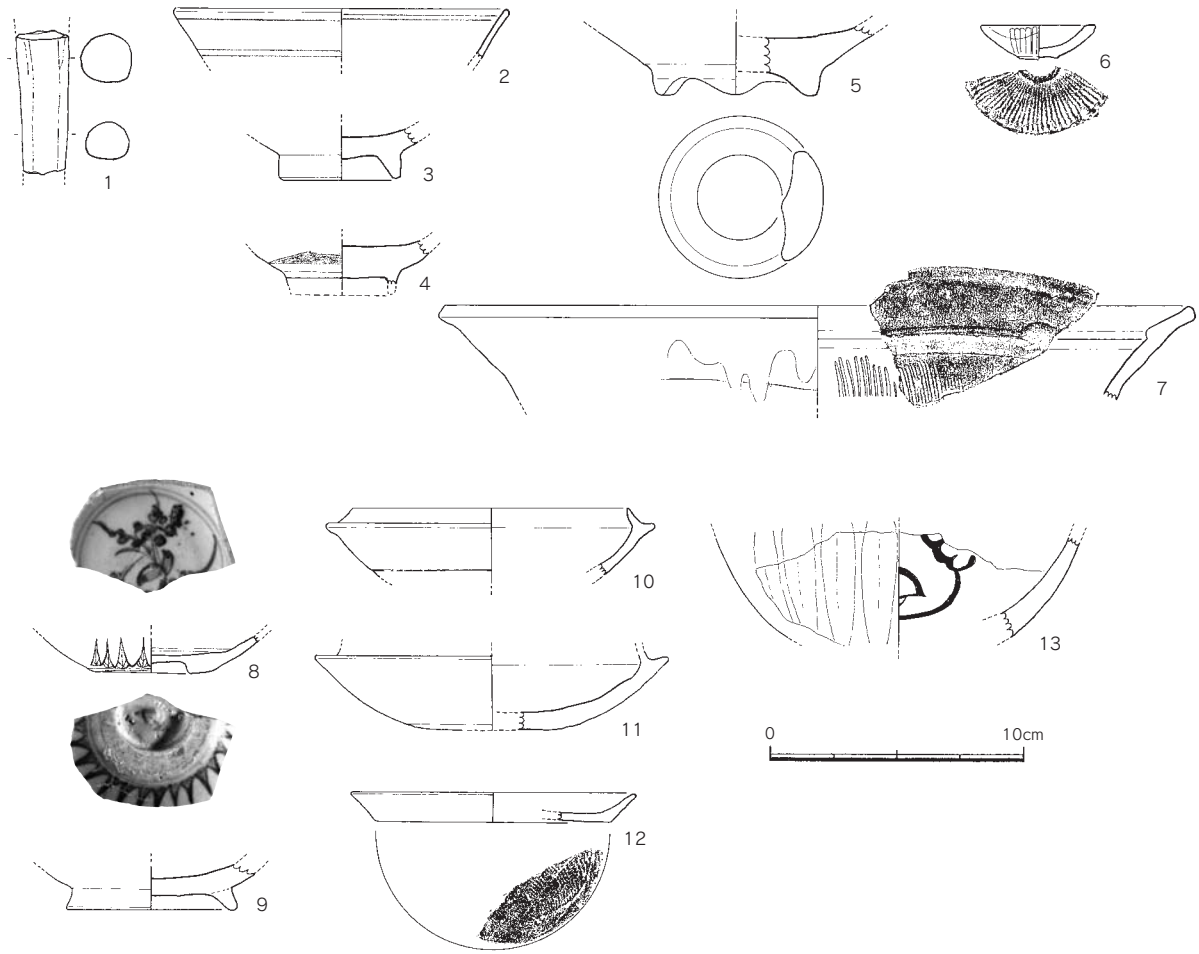


図5　試掘調査の出土遺物図（1/3）

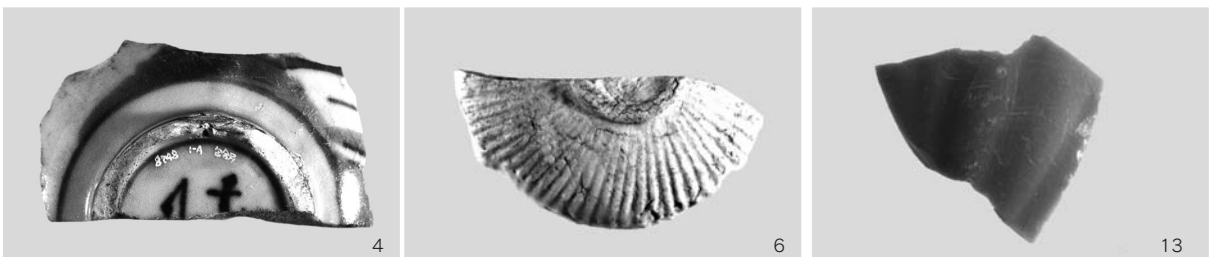


写真4　試掘の出土遺物

調査日誌抄

昭和63年1月

4	月	昭和63年の仕事始め。常松は脇山、飯調査事務所を点検に出向く。力武は城南整理室で前年からの博多築港線報告書作成作業を継続する。
6	水	飛高係長より1月8日に入部農協にて打ち合わせがあるとの電話。整理作業員に今後の調査、整理作業計画を説明。その後昨年12月末に発見された鴻臚館跡を見学する。
8	金	常松君と1時に入部農協へ。地権者を集めて第1回説明会。入部土地改良組合の中牟田満夫氏に発掘開始の挨拶をする。会議後に重留に立ち寄り現地撮影し、早急に準備にかかる。
9	土	ユンボの予約をし、早良区田村調査事務所の二宮氏に発掘作業員の手配を依頼する。
11	月	文化課会議で入部圃場整備事業の開始と問題点を報告する。福岡県文化課の酒井仁夫氏の訃報
12	火	重留遺跡で造成工事業者(株式会社後藤建設　因工事部長)と工程会議をする。業者も契約したばかりで工事工程の見通しができていないらしい。道路と水路の中心杭打ちを依頼する。また重機運転手に耕作土剥ぎの指示をする。
14	木	機材搬入開始。不足分は飯盛調査事務所から搬入予定。耕作土剥ぎの検討をし、3区画に大区分して造成工事業者に渡すことにする。13時に鴻臚館跡で明日の見学会の打ち合わせ。17時近くに進藤市長来訪。
15	金	鴻臚館見学会開催。文化部職員全員を配置。見学者は平和台野球場を1周する程の多さで、待ち時間が1時間を超す。公式発表は7,500人。
16	土	発掘機材搬入のために飯盛調査事務所へ。脇山調査事務所からも搬入する。常松は入部土地改良事務所で発掘作業員希望者に説明。
18	月	調査開始初日。田村調査事務所より発掘作業員10人が集合する。発掘計画を説明し、安全教育を行う。B-1区南西隅より発掘開始。すでに耕作土は剥いでいるので10m×10mの範囲で床土をユンボで掘り下げ、遺構検出をする。床土は鉄分が厚く堆積し褐色をしている。この下は青灰色粘土となる。昼休みを利用して発掘作業員と近くの船石支石墓を見学し、周辺の歴史を説明する。入部土地改良組合より作業員名簿届く。
19	火	南西隅の発掘継続。ユンボは14号支線道路の南端部を拡張。耕作土下は粘土層で遺構なし。県農林事務所の河野氏が造成業者と測量杭打ちに着手する。
20	水	遺構検出作業は南西隅から14号支線道路へ移動する。土器片2個とピット2個のみ。
21	木	鴻臚館跡で筑紫館と思われる布掘り遺構が発見されたと朝刊報道。文化課会議前に鴻臚館見学。終日文化課会議。
22	金	地元で募集した発掘作業員参加。安全教育より始める。発掘作業は水田にトレンチ設定し掘り下げを継続。発掘作業員が増え、発掘機材不足し、田村調査事務所より搬入する。午後から西側の北端部A-1区に移り、3枚の水田にトレンチを設定する。
23	土	調査事務所の設置工事始まる。ただし水道、電気はつかない。
26	火	調査事務所のプレハブに電気なく、発電機を手配する。近所より造成工事による排水の苦情があり、お詫びと説明に出向く。
27	水	発掘作業は水田番号56－3に設定した試掘グリッド掘りを継続する。うち3か所のグリッドで縄文土器が出土したため拡張する。
28	木	力武は城南整理室で報告書作成指示。常松より埋甕(SR01)出土の電話入り、重留に急行する。撮影を済ませ、田中克子調査員が実測にかかる。
29	金	発掘作業員募集のために西区峰遺跡の発掘現場に相談に出向く。埋甕のすぐ近くの小さな土壙(SK01)より鉢出土。実測、撮影をし、取り上げを済ませる。さらに西側では土器が集中する場所があり、竪穴住居跡の可能性が出てきた。
30	土	土器集中部は竪穴住居跡(SC01)に間違いなく、来週、慎重に掘り下げることにしてシートで覆う。

2月

1	月	城南整理室より4×5カメラを運び、SC01を撮影する。14号支線道路の平板測量。1/200縮尺で現在の水田畦畔を記入する。**「入部遺跡だより」第1号（B5版12頁　縄文時代の住まい特集）** 発行。発掘作業員に配布し、説明する。
2	火	西区峰遺跡より発掘作業員増える。造成工事業者、県農林事務所との工程会議。発掘経過報告と明け渡し範囲などを協議する。外部より造成土を持ち込まないことから、広範囲の明け渡しを求められる。　会議後地元の方々を案内し説明する。SC01を4×5カメラで撮影。午後から実測用の割付を済ませる。SC01の南側で各水田ごとにトレンチ設定し、住居跡の広がりを探る。また基盤土の堆積観察を目的にSC01の東側に南北トレンチを設定し土層図をとる。
3	水	SC01の実測完了。平板測量用の杭打ち作業。14号支線道路北端を基準にして西に90度振り、15mごとに杭を打つ。A-1区北半部の縄文土器散布地は、実測、取り上げに有効なグリッドを検討する。発掘作業はA-1区での遺構確認を急いでいるが、一部の作業員は14号支線道路の南端部の東側に小グリッドで作業をする。中世の高台碗が出土したのみで、まったく遺構はない。文化課事前審査班の大庭君と米倉君が西区椎原の試掘帰りに立ち寄る。

4	木	SC01の遺物取り上げ作業。報道発表の準備を始める。昨日より実測にかかったトレンチで貯蔵穴状の落ち込み（SK02）があり、上面を広げて全体を探る。調査事務所前の河川（河道）と思われる部分を掘り始める。
5	金	春一番吹く。SC01の壁が不明瞭のために、先に床面の柱穴を探す。調査事務所前の河川では夜臼式土器出土。土器散布地で竪穴住居跡と思われる落ち込みをSC02としたが、プランは不明瞭（本書ではSK05に変更した）。石鏃出土。平板図に測量杭を記入する。
6	土	城南整理室に立ち寄り、記者発表の写真準備。調査事務所前の河川は、発掘作業員20人で発掘継続。布留式土器や木製品が出土し始める。
8	月	工事側に広範囲を渡すために2区に移動する。12時より工程会議。地元協議が整わなかったことで多方面に影響が出ていると。県農林事務所の係長つい苛立ち威圧的な発言目立つ。担当の河野氏も間に入って困惑顔。我々も不快となる。
9	火	14号支線道路と1号排水路の交差付近で検出した河川の南側延長部を掘る。南西方向にさらに延びる。ここに作業員全員を投入し、土層帯を2か所で残す。造成業者に発掘工程表を渡す。常松と協議して各区ごとに最終日を決める。田中調査員は「入部遺跡だより」に掲載する埋甕など実測を進める。
10	水	15号支線道路に作業を集中する。中央に南北の排水路があるのみで特別な遺構なし。8日より着手した水田番号61－2、1の河川は2か所で土層実測。農具のエブリなど木製品2点出土。福岡市農業土木課の大塚氏より電話、吉武遺跡大石地区の発掘開始を催促される。ようやく調査事務所に電話がつく。
12	金	発掘作業員に安全教育実施。10日に実測出来なかった河川の土層を実測。この土層の南側で流木が出土。中に角材杭あり取り上げる。発掘作業は河川と15号道路の2班に分かれる。測量班は15号支線道路の平板測量をする。
13	土	河川と15号道路の2班で作業する。河川は2か所で枝分かれがあり、南側では本流から別れて逆台形断面の溝が南西方向に延びる。竪杵出土。15号支線道路の最南端で方形の落ち込み検出。ユンボで2号排水路の表土剥ぎ。15号支線道路の平板測量。午後は14号道路より西にグリッド杭を延ばす。この部分の撮影は、常松が担当し完了させる。
15	月	**「入部遺跡だより」２号**（B5版14頁 縄文時代の墓地特集）発行。3区の道路と2区の河川清掃。14号支線道路と1号排水路の交差部の3か所に別れて作業。15号道路最南端の方形落ち込みは完掘　遺物ほとんどなし。午後は文化課会議。
16	火	平板測量は河川に移動。明日の撮影に備えて白線引く。
17	水	雪の中で河川と14号支線道路部を高所作業車から撮影。明治大学の小川君本日より参加。入部土地改良組合の中牟田氏来訪。予定より10日間早く明け渡しができることを話す。県農業事務所の河野氏も来訪し、14号支線道路より急ぐことにする。
18	木	造成業者と工程会議。調査事務所部の工事開始日については余裕があると。発掘作業は、1号河川、 SX01井堰、14号支線道路、調査事務所西側の2号河川に分かれる。
19	金	SX01井堰は清掃を終え、常松が撮影する。1号河川は昨日よりユンボで延長部を剥いでいたが、東岸を確認。また木製品も出る。
20	土	昨日の継続作業。2号河川は切り合いがあり複雑。1号河川ではいろんな木製品が出土。
22	月	大学生増える。SX01井堰の実測。福岡市農業土木課大塚氏と飯盛遺跡大石地区暗渠設置工事の打ち合わせをする。金武中学校の歴史クラブが見学に来る。
23	火	この日で発掘作業30日目、1か月ぶりの雨となる。好天続き発掘作業予想以上に捗った。「入部遺跡だより」1、2号を見学者や地元町内配布などのために1,000部増刷。本日より福岡市歴史資料館で『鴻臚館展』始まる。初日の入場者961人。市民の関心の高さを示す。
24	水	1．2号河川に別れて発掘作業。2号河川で二叉鍬、斧柄を取り上げる。
25	木	重留で作業指示の後に飯盛遺跡へ。本日より大石地区の耕作土剥ぎを開始する。1号河川は縄文時代の流れをがありそうで土層で確認しようとするが、うまく土層に現れていない。4時前に再度飯盛遺跡へ。明日より発掘作業員投入予定。
26	金	まず飯盛遺跡へ。大石地区の再発掘作業開始。重留では1号河川の泥炭部の掘り下げ作業と南延長部西岸にトレンチを設定する。雨で4時に断念。
27	土	雨で城南整理室で**「入部遺跡だより」３号**（B5版13頁手書き　縄文時代の食糧・貯蔵穴特集　）を完成させる。
29	月	雨だが発掘作業強行する。小川君は遺構の実測に専念。埋蔵文化財課で博多築港線報告書の契約手続き。「入部遺跡だより」3号80部コピーし製本完了。
3月		
1	火	発掘作業は2号河川と1号河川の延長部、A-1区縄文時代地区の3か所に分かれる。A-1区では2m方眼を組む。ここに作業員の半数を集中する。散布地は北東方向に延びずに別の散布が出てくる。折尾1係長の案内で文化庁の岡本東三調査官来訪。発掘状況や次年度からの圃場整備事業計画などを説明し、船石支石墓へも案内する。「入部遺跡だより」3号を発掘作業員に配布、説明する。1号河川北壁で古墳と縄文の流れの重なりを検討する。

2	水	出土遺物が増え、コンテナ不足し城南整理室より搬送する。A-1区と1号河川井堰西岸で発掘作業。力武は築港線報告書作成のために昼食後に再び城南整理室へ戻る。
3	木	始業時に発掘作業員の安全教育を行う。3月7日に記者発表が決定し、その準備を始める。福岡市農業土木課の大塚氏と大石地区の協議をする。
4	金	「入部遺跡だより」3号を町内に配布する。毎日新聞記者が取材。来週の市役所での報道発表まで記事を待つようにお願いする。A-1区縄文土器散布地で遺構検出作業続ける。
5	土	朝から雨だが、残り日数少なく、雨中作業強行する。
7	月	本日、市役所会見室で報道発表。飛高2係長にお願いして現場作業を続ける。NHKテレビが現地取材し、夕方のニュース番組で放映する。
8	火	各新聞朝刊に竪穴住居跡などが掲載される。NHKテレビ再度取材で来訪。1号河川の縄文時代流木をローリングタワーから撮影する。発掘作業はA-1区縄文、2号河川に集中する。夕方は城南に戻り、報告書作成業務、常松は**「入部遺跡だより」4号**（B5版10頁　縄文土器特集）作成。
9	水	常松は1．2号河川の撮影継続する。
10	木	作業員全員で発掘区南端の道路よりさらに南に集中、遺構なく1日で終了。
11	金	作業員全員がA-1区に集中し、縄文土器の検出作業継続。
12	土	見学会準備。河川の排水作業や遺構プラカード打ち。明日なのに見学者増える。
13	日	10時より遺跡見学会開始。「入部遺跡だより」を配布（245冊）する。見学者数500人を超し、「入部遺跡だより」不足し、全員に渡せず。
14	月	雨で現場作業休み。残り半月を切り焦る。
15	火	次年度の試掘を始める。A-1区の気球撮影のため撮影業者に連絡。
16	水	1号河川を南へ延長して発掘。気球撮影は、A-1区の縄文遺構ごとに撮影進める。SK02貯蔵穴の土層を再検討する。
17	木	昨夜来の雨で発掘現場水没かと心配したが、夜中もポンプを動かしたので水没を免れ、発掘作業可能。1号河川の杭のレベリングを続ける。気球撮影の業者と打合せ。
18	金	1号河川の縄文大木をユンボで取り上げる。A-1区縄文土器散布地を4×5カメラで撮影。1号河川南延長部より分かれた川も完掘する。
19	土	1号河川SX02井堰の分解継続。ネズミ返しを組み込んだ緻密な構造にみんなで驚嘆する。A-1区の気球撮影開始。どうにか最終日ゴールの目処が立つ。
22	火	またも雨で発掘作業は断念したが、1号河川の南延長部平板測量とA-1区縄文散布地の実測は継続する。午後から雨本降りとなり作業断念。
23	水	次年度範囲の試掘継続。1号河川でドングリなど木の実多数出土。A-1区縄文土器散布地の平面図ほぼ終了。SC02（本書のSK05）では下層からも土器や石さじ出土。最後に残っていたSC05竪穴住居跡も常松君がレベル記入と取り上げ作業を開始する。
24	木	試掘、A-1区、種子選別土壌洗いの3班に分かれる。SC01は床面直上の土器を残してすべて取り上げる。撮影、実測後に再度取り上げる。床面中央で炉跡発見。深鉢土器を使った炉で、みんなで縄文人の夕飯を想像する。
25	金	雨だが引っ越し開始。城南整理室へ1号河川の縄文木など搬送する。
26	土	またも雨で力武は城南整理室へ。次年度報告書の準備作業。
27	日	A-1区の平板図に10㎝等高線を入れるなどまとめの作業を進める。SK03は土層図取り直して分層発掘する。SC01は床面の柱穴探しと炉跡の実測。
28	月	唐津市の発掘現場で発掘作業員の死亡事故報道。朝一番に安全教育で注意を徹底して作業にかかる。SK03を完掘。この遺構は、造成工事でも残る可能性があることから砂で丁寧に埋め戻す。SC03～05を撮影。
29	火	SCO1の炉はウレタン固定し、切り取り後に城南整理室へ運ぶ。
30	水	ついに最終日となり、調査事務所のプレハブ解体。A-1区の遺物取り上げとSC05の掘り下げ。北側に向かって破片出土したことから3本のトレンチを入れる。最後に残った機材を飯盛に搬送し　予定していた発掘作業のすべてを完了。文化課や造成工事業者へ完了の連絡を済ませ、周辺の家々にも挨拶に回る。

図6　朝日・毎日・西日本新聞記事（昭和63年3月8日と「入部遺跡だより」表紙）

第3節　弥生時代～古墳時代の調査

1．調査概要

A-1区北半部では、小規模ながら縄文時代晩期の集落が姿を現したことから、弥生時代以降についても集落遺構や墓地などの検出を目論んだ。しかし23か所の試掘トレンチでは、その気配すら感じられなかった。B-2区からA-2、3区方向の河川（河道）では、両岸を広めに発掘したが、この範囲でもついに捉えることはできなかった。弥生時代の生活遺構が存在しないのは、弥生時代の早い段階で集落地としてではなく、水稲耕作地化したためと予想し、調査の的を河川に絞り込み、水利施設や耕作地などの遺構検出に調査目的を転じ、ここに発掘作業時間を割いた。

河川と思われる落ち込みは、蛇行しながら北流している。その全貌を掴むために両岸を追い、必要に応じて川底まで掘り下げるようにした。現在使用中の農道や調査事務所、さらには時間的な制約から未掘部が残ったが、当初の目標通りその全体像が分かった。検出した長さはB-2区南端からA-3区北西端までの直線で220mを測る。両岸は複雑に出入りし、幅も均一ではない。また平面的には浅い溝が合流したり、途中で分岐したりしており、一時期の流れでないことは、出土する遺物の時代差からも推測できた。流れを大きく見ると、調査区中央部よりY字状に分かれてA-2区北西隅で発掘した東西

方向の落ち込みに連続する流れと、A-3区北西隅まで延びる流れがある。その幅からすると東側が本流と思われることから、発掘時には、本流をSD01河川（1号河川）、西の分流をSD02河川（2号河川）の遺構名を付けた。もちろん分流という用語自体は、本流に対する同時期の流れ、さらには人工的な分水という意味も多少持つと思われるが、果たして自然的なものか、時期が異なるのか、あるいは人為的な結果なのかを確認しようと努めた。このため流れの切り合いやその方向を見定め、さらに時期を決定するために、数地点で土層実測を行い、慎重に観察を試みた。しかし容易に疑問が解けるような単純な土層ではなかった。

調査が進むに従ってSD01河川には、岸や川底に打ち込まれた丸太杭や井堰状、井桁状に構築された遺構が数か所で見つかった。明らかに人間の手が加わり、積極的な水利、制御施設であったことが確認できた。しかしSX01～03の遺構略号を付けたこれらの遺構の機能、具体的な止水や揚水、あるいは護岸や分水の方法については、最後まで確定できなかった。本書では、さらに曖昧となるが河川構築遺構という呼び方に変えている。

2本の河川より出土した土器、石器、木製品は、SD01、02ごとに分けて記述しているが、縄文時代から中世までの遺物が出土している。古墳時代の遺物が主であり、中世遺物は堆積土の最上部から出土することから、2本の河川は、古墳時代にはほぼ埋没を終えているようである。この他に種子や流木などの自然遺物も多く出土したが、同定作業を経ていないので未報告となった。なおこのSD01、02より出土した縄文時代の遺物については、第4節で記述している。

写真5　SD01・02河川北半部（A－2、3区　北西より）

図7　試掘位置と弥生～古墳時代の河川（1/100）

2．SD01河川の遺構と遺物

構造物工事となる支線道路や用、排水路の建設部は、できるだけ早く工事業者側に渡す必要があったことから、工事業者の協力を得て調査区南側から耕作土剥ぎを始めた。すると耕作土、床土の直下には黄灰色粘質土が広がっていた。縄文時代の遺物が集中するA-1区北半部が、暗黄灰色の細かな土と粗砂が入り交じった基盤土であったのに対し、安定した基盤土となっている。この基盤土に黒褐色土の落ち込みがあり、上面には土器片や木片を含んでいた。部分的に掘り下げると、砂質の褐色土や粗砂が互層になってレンズ状に堆積し逆台形断面になったことから流れによる堆積と判断した。

早良平野で調査した鶴町遺跡、深町遺跡など弥生時代から古墳時代の河川とよく類似する堆積状況、そして断面、規模であることから、水利施設の検出、水利方法の解明などを期待して、その延長部を追うことにした。前年の昭和62年11月から調査が始まっていた公園建設地の四箇遺跡第23次調査は、北東方向200mに位置しており、弥生時代～古墳時代の河川が発掘されている。もしかしたらその上流に当たることも十分に考えられることであった。

図8は、B-1区南端部でのSD01河川の平面図であるが、南端で深さ89㎝、東岸は外側に浅い段が幅1.5m～5.5mでほぼ平行している。西岸には同時期の流れかどうか判断できないが、幅1.7m、深さ52㎝の細い溝が取り付いている。この溝底は、本流よりも約36㎝深い。流れは中央部で時計回りに緩やかにカーブして、東岸は農道下に入り込んでいる。ここで分流しているようにも見えるが、農道の東側では東岸の落ち込みを検出できなかったことからすると、分流しないでS字状に急激に反転して、さらに北流している。川底に網点で示した箇所からは古墳時代の土器片や流木などがまとまって出土した。 また木製品の竪杵、エブリもこの地区で出土している。川底の高さは、北端部に向かって約50㎝傾斜しているが、両岸の浸食は顕著ではなく、急激な速度の流れは想定できない。

写真6　SD01・02河川（南西より）

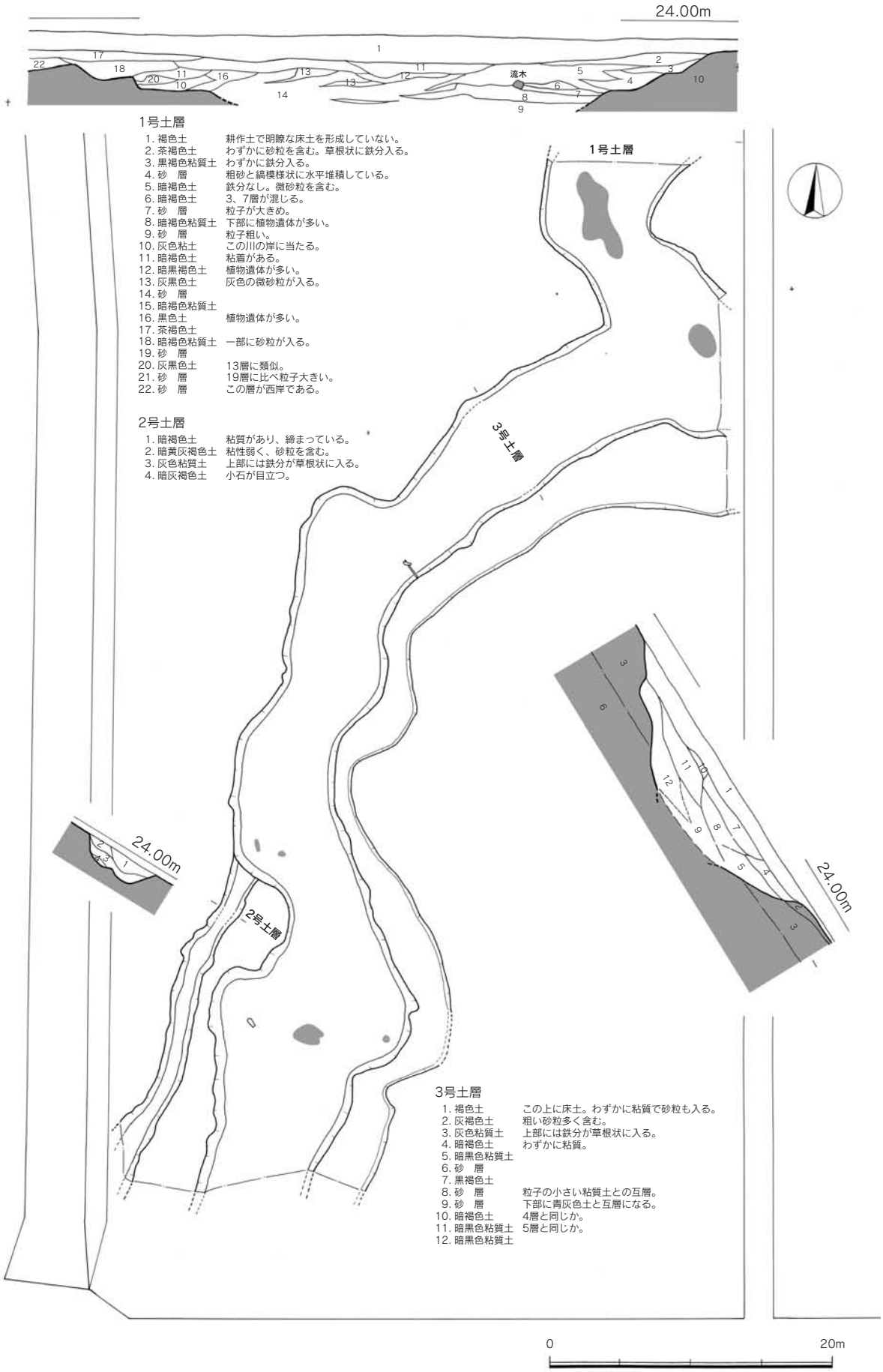


図8　SD01河川南端部と土層図（B-1区）（1/400）

図9は、現在の農道と取付1号排水路との交差部の平面図である。南側から延びてきたSD01は、方向をわずかに西に振って流れている。平面的には流れが東西に分かれて2本となっているように見えるが、西の流れの南端部は幅約1mの溝状で、北にS字状に湾曲しながら次第に幅を増している。興味深いのは両方の流れの底面標高の差である。西の溝に対し、東は1mを超す深さとなり、同じ流れとしてはあまりにも差が大きい。農道に遮られて中心部が不明なのが残念だが、東の流れには井堰状の

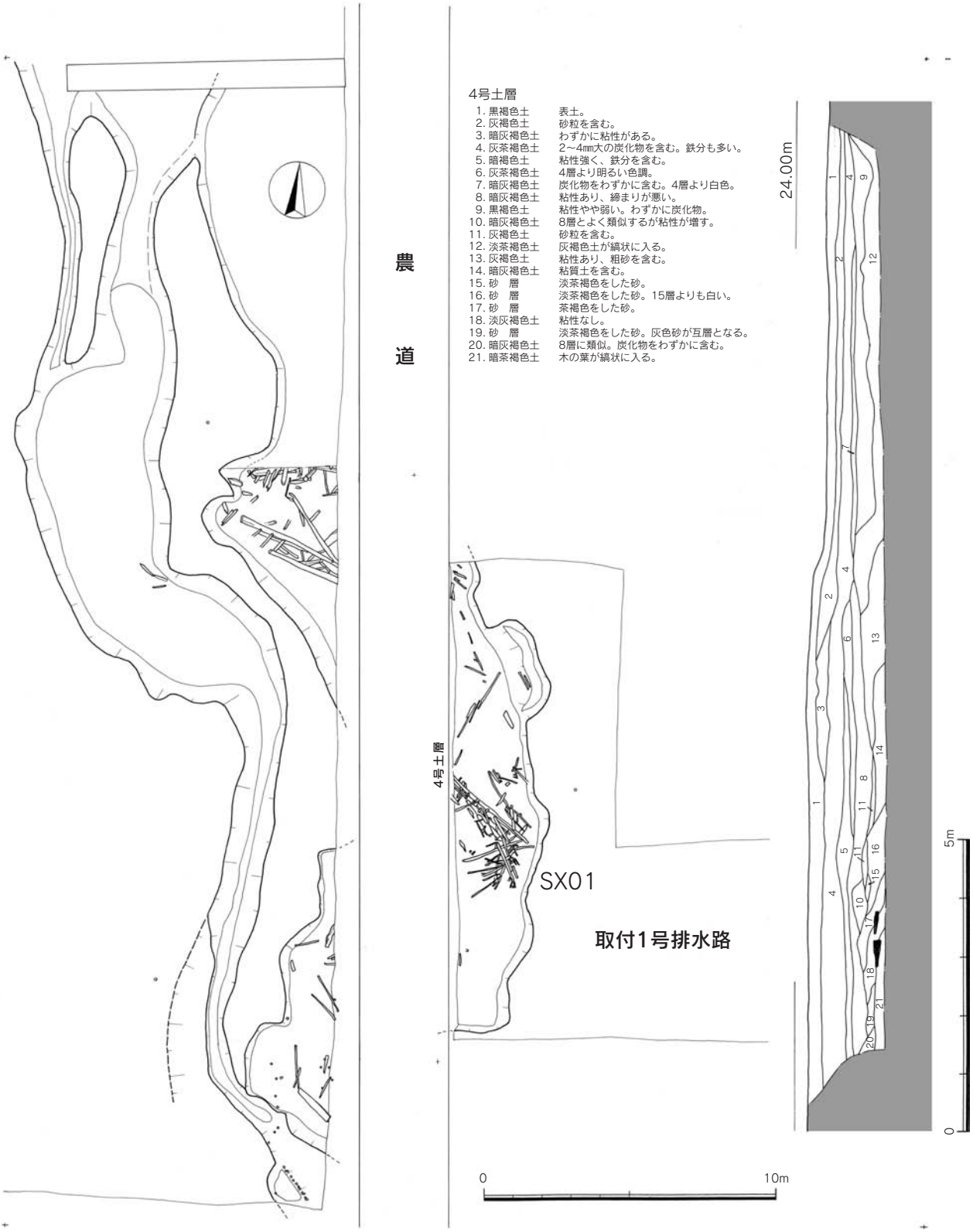


図9　SD01河川中央部と土層図（B-2、3区）（1/100・1/200）

SX01が構築されており、しかも道路を挟んだ西側でも同じような構築物が見られる。これらの2か所の構築物の横木方向は、5m程ずれていることから連続した一つの遺構としては捉え難いが、この場所で何らかの止水、調整をしていたことは確かであろう。ただSX02の横材が流れに対して斜めに位置しており、どのような効果を発揮していたのか、その揚水、分水方法などの仕組みに疑問点が多い。果たして井堰と呼んでいいのかを再度SX01の項で検討する。

図10は、SD01河川の北端部で、西のA-2区と東のA-3区のちょうど境界部に当たる。図化している長さは約86mである。南端部の幅は約5.7m、北端部は約24mを測る。この図の中央部当たりで流れの方向が変わっているが、方向はほぼ直線的である。ただ細かく見ると両岸には微妙な出入りがある。特に東岸には3か所でこぶ状に張り出している。自然の浸食か人工的な掘り込みか見分けにくいが、最も南側の張り出し近くには、SX02が構築されている。対岸の小さな張り出しには、10数本の細い木材を格子状に組んだSX03も見られる。SX01と同様にその構造や機能について後述する。

このSX02、03を過ぎると流れは少し北に向かい、もう一度緩やかに北東方向に湾曲して、発掘区北壁に延びている。その曲がり始めるあたりの発掘区西壁には、幅約14mに渡って流れを示す土層堆積が見られ、ここに西から別の流れが合流するようである。図7を見ると、現在の細い農道に沿って北流してきたSD01河川は、途中で分かれており、西の流れはSD02河川につながると思われるが、写真5、6のように調査事務所のすぐ南側でもY字状に分かれており、この北東側の延長部がSX02、03の北側に出てくるのであろう。ここにSX01～03の構造物を設置していることからすると、流れをコントロールし、利用しようという意図があったことは明らかであるが、流れ自体はきわめて複雑で、その堆積土層からすると出水を何度も繰り返して埋没したと思われる。完全な制御、治水は不可能だったために、逆にSX01～03が必要になったとも言えよう。

写真7　SD01河川（B－2区南より）

写真8　SD01河川北半部発掘作業風景(南より)

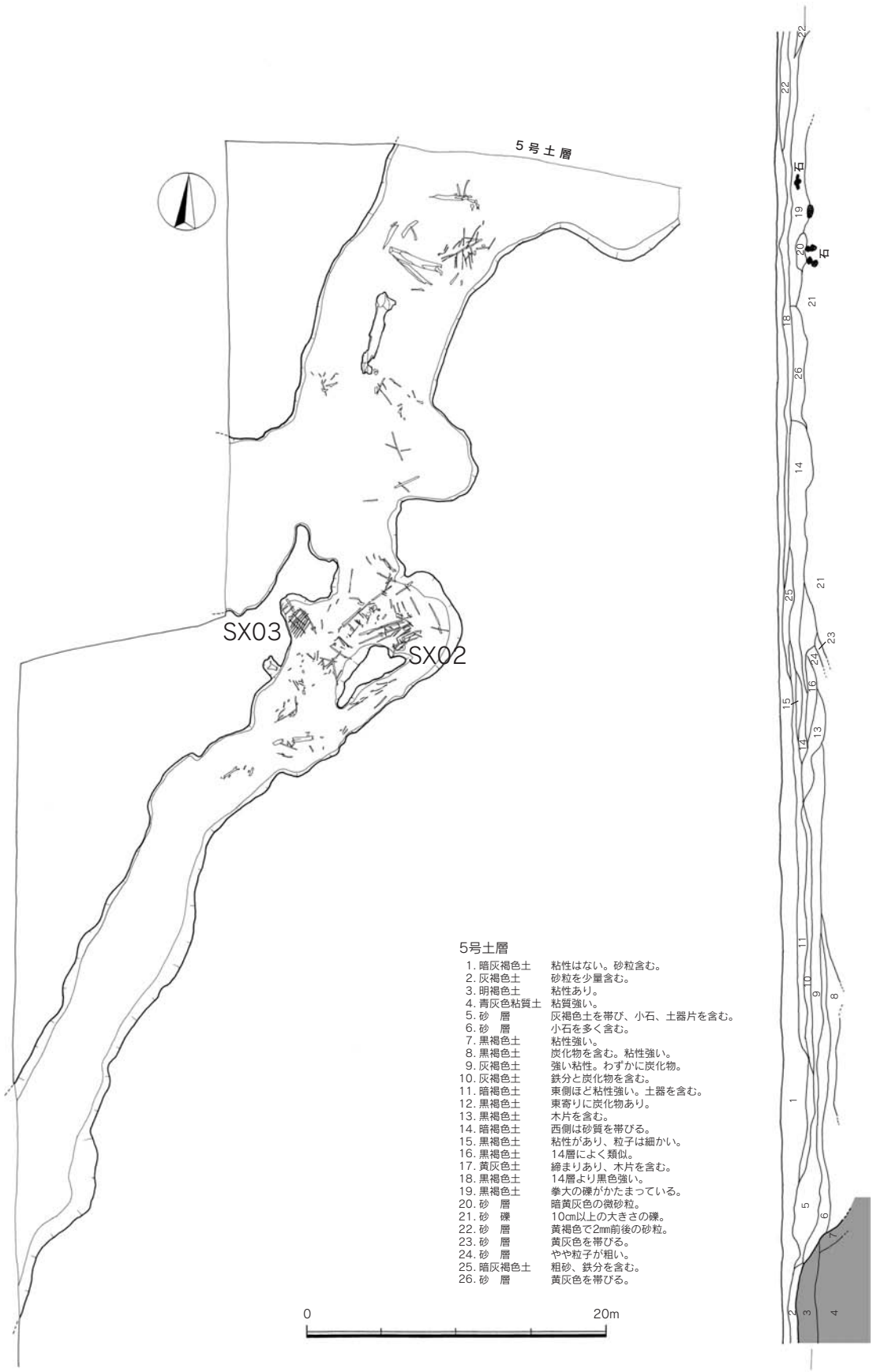


図10　SD01河川北半部と土層図（A-2、3区）（1/400）

SX01河川構築遺構

SD01のほぼ中央部に構築された井堰状の遺構である。前述したように農道下に潜り込んでいるために全体は知り得ない。平面、断面図と上流側から見た正面図を作成した。東岸と川底との差は約80㎝。東岸は安定した黄褐色粘質土で、崖面は急である。この岸に打ち込んだような立杭や掛け渡した横木はなく、少し隙間を置いて構築しているのが特徴である。むしろ、図右下方に立杭や短い横木で密に組んで護岸のような目的にも見えることからすると、故意に岸に接して細い流れを作って調整したかのようにも見える。本体部の組立構造は、まず長さ60㎝～2m、径7㎝前後の丸太材や板材を流れに対して約42度の角度で打ち込み、長さ1.6㎝前後の横木を架け渡し、この横木を固定するために打ち込み角度を変えた立杭で押さえている。同じように何度か繰り返して強度を増し、最後に径の大きい横木を上に乗せ押さえるようにして完成させている。この横木は、3.4m以上と長い。各横木は平行ではなく、図の下半は約27度の角度を持って岸の方向に近づいている。断面図で見る限り、立杭の打ち込みは、山形に交差していない。また縄や蔓などで緊縛

写真9　SX01河川構築遺構の発掘風景

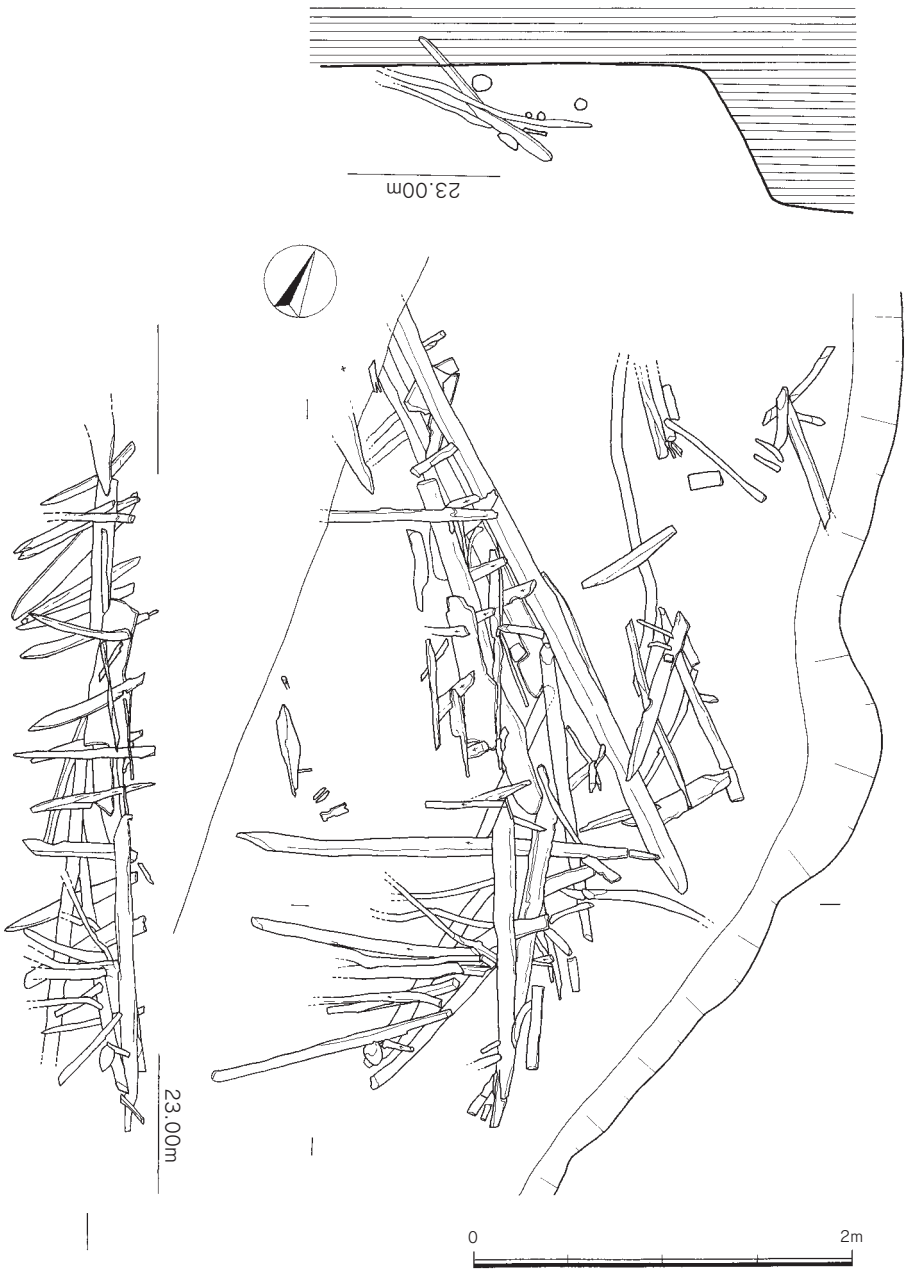


図11　SX01河川構築遺構図（1/40）

した痕跡はなく、材の間に特別な充填物も認められなかった。横木には板材も利用されているが、立杭の先端を尖らした以外に特に加工品はなく、建築廃材の再利用も見られない。立杭が土圧などでやや潰れたように曲がっているが、ほぼ原形を保っていると思われる。なお最も残りのよい立杭頭部と東岸との高さの差は、約20㎝である。図9に示した4号土層は、流れ方向の堆積状況を示し、埋没状況をある程度推測することができる。まずSX01の上流側が埋まり、井堰を超して新しい流れができ、数度繰り返して埋没しているようである。

写真10　SD01河川西側溝（南より）

このようなSX01の構造や農道の西に溝が取り付いていることからすると、井堰の機能が最も妥当性があると考えられる。しかし流れ方向に対し相当斜めに設置されていることを、どのように理解するかが問題である。自然の流れを完全に停止するには、水圧に負けないそれなりの規模と強度を保つ必要があり、大規模になるほど労働量も大きくなる。いったん洪水に見舞われると損傷も激しく、その補修の材料も手間も比例して大きくなる。おそらく西側の溝にいつ、どれだけの水量を流し込むかで、SX01の規模や構造、構築位置が決定されたと思うが、本流の水量や水速、そして補修、強化など施設維持の面などから、流れに斜め構造の必要最低限の規模になったのだろう。

写真11　SX01河川構築遺構（西より）

SX02河川構築遺構

図10の中央よりやや北側の位置に構築されている。南西から緩やかに湾曲してきた流れは、ここでいったん留まったように幅を増し、東岸に瘤状に張り出している。この張り出し部の内側寄りには、縦長の逆三角形状に岸と同じ粘質土が残っている。流れの浸食から免れたのではなく、流木の方向からすると東岸に沿って幅約2mの溝状の流れがあり、人工的に掘削した溝と思われる。とするとSX02の背後に流れがあったことになり、SX02の機能を考える上で重要な条件となろう。

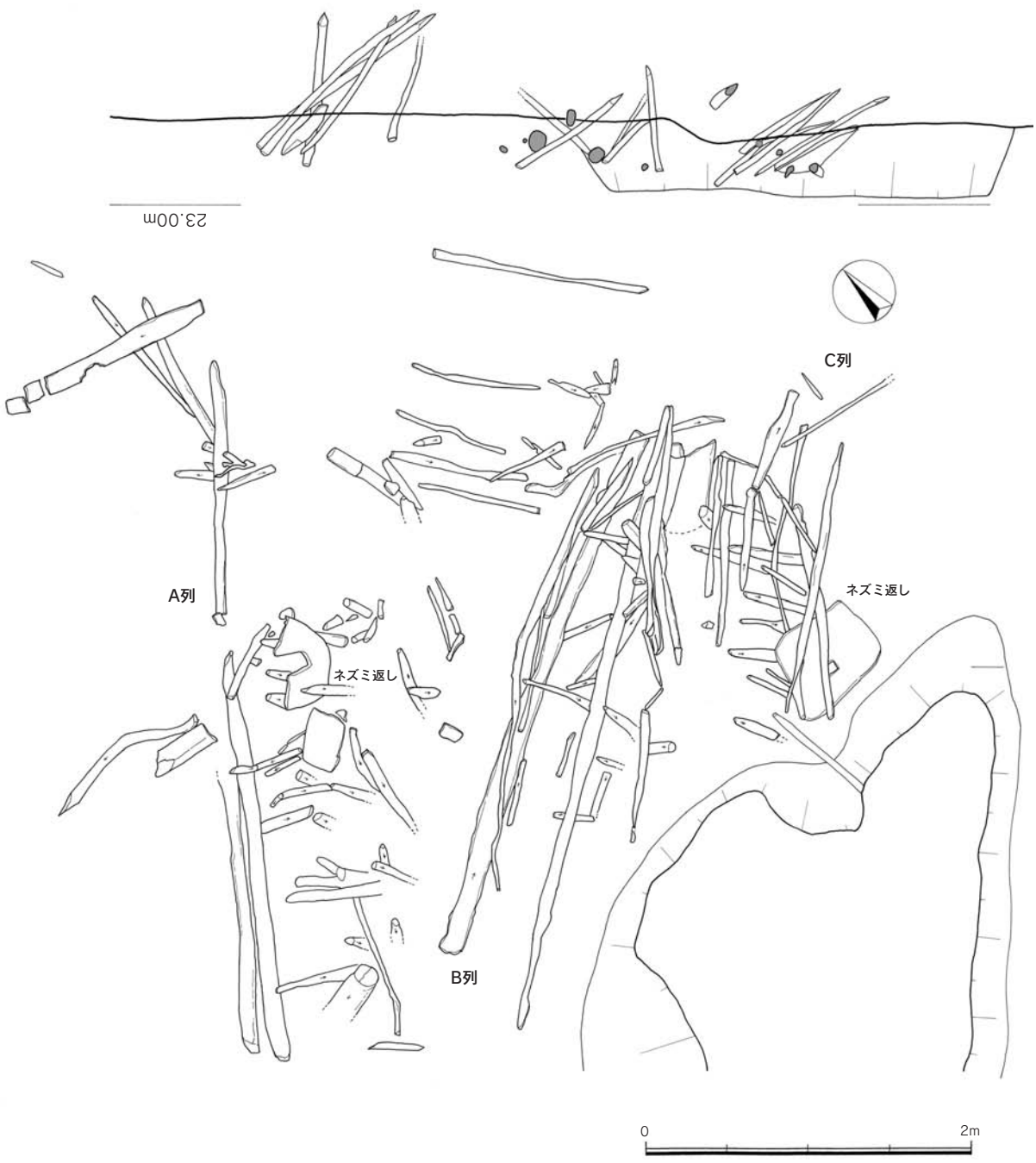


図12　SX02河川構築遺構図（1/40）

SX02をその横木から見ると、大きく3列構造になっていることが分かる。流れの内側から岸に向かってA、B、C列とすると、B、C列が平行しているのに対し、A列だけが方向を異にしている。またA列の立杭は、長めの丸太材が使用されているものの、長さ2m前後の横材は3本のみで、使用した材の本数は少ない。流れに対して前面に当たることから、材が流失してしまったとしても、やや粗雑な造作である。B、C列は横木が平行していることから一体の構造のように見えるが、両方を連結するような材が組み込まれているわけではない。また立杭の打ち込み角度はA、C列よりも浅く、逆方向から山形に打ち込まれた立杭も多い。C列は、1.5m前後の短い横木が使われ、立杭の本数が多く密な構造となっている。ここでも緊縛に特別な材料や方法が用いられているわけではないが、A、C列に高床式倉庫に用いられたネズミ返し2枚が、横木や立杭の中に巧みに組み込まれ、頑強な構造となっていることが注目される。

このようにSX02は、3列構造で、しかもその背後に溝状の流れがあったことから、井堰ではなく護岸的な施設と判断した。とすると3列は同時構築ではなく、補修の回数を示しているのかも知れない。

写真12　SX02河川構築遺構の解体作業

写真13　SX02河川構築遺構（北西より）

SX03河川構築遺構

河川や水田跡など低湿地の遺跡では、木製品の残りがよく、思わぬ発見があるものだが、中には用途が分からないものが多い。SX03もその一例であることを先に断っておく。SX03は、SX02より4m離れた西岸に構築されている。東岸は、SX02の背後に掘削された溝で外に瘤状に張り出しているために10mと幅広くなっている。一方SX03は、西岸を北西側に1m程抉り込んで敷設している。まず底面にほぼ接するように径約10㎝の太めの材を横たえる。この材の東端は二股状になり加工痕がある。柱など建築材からの転用と思われる。次ぎに底面から約20㎝程浮かして、径5㎝足らず、長さ120㎝～180㎝の細い材9本を5㎝～15㎝間隔で平行に並べている。これらは、水平ではなく、わずかに北東側が8㎝程高く、この下方には枕のように横木数本が直交して据えられている。また9本の材を並べる際に、数㎝径のきわめて細い枝状の4本の材を使って、縫うように上下を通している。平面的には格子状に交差させているが、結んだ材料もなく、またその痕跡も認められない。水辺の施設であることから、当然水流に洗われる機会も多かったはずで、組立後に土で覆ったり、立杭などで固定するなどの処置がない限り、このように整った形状では残らなかっただろう。住居の壁材など、もともとこの

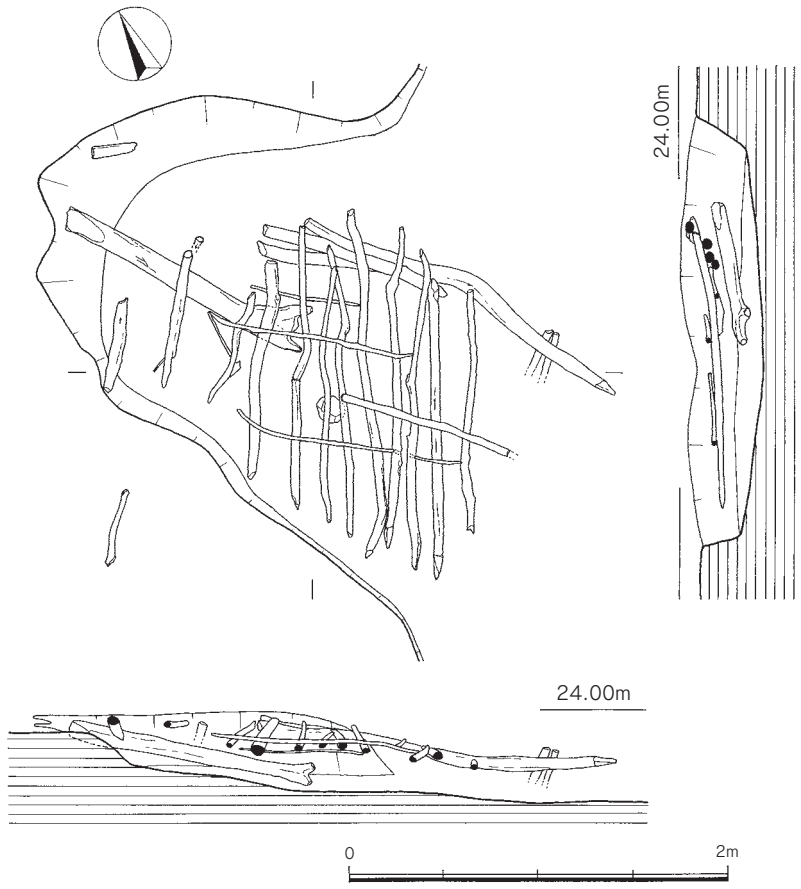


図13　SX03河川構築遺構図（1/40）

写真14　SX03河川構築遺構（南より）

ように組み立てられていたものが、流れ着いたとも考えられるが、瘤状に抉り込まれた部分に設置していることからすると、その可能性はない。発掘時には、何かの洗い場、晒し場的な施設と想像したが、19年を経た今でも福岡市内では類例の発見がなく、使用目的が明らかでない。

SX01～03のような構築遺構ではないが、SX02より北に16m離れて川底に横たわって見つかった大木についても記しておく。SD01の流れは、SX02、03を過ぎると、方向を北に転じ再度北東方向に緩やかに湾曲して広がっている。この流れの中央部に流木が集中しており、その中に長さ約5.7m、直径約0.7mの大木が流れと同じ方向で出土した。樹種は不明だが広葉樹で、縦に半裁したように芯部が平らになり、この面を上にしている。樹根が残っていないことから、この場所での

写真15　SD01河川北半部の流木（西より）

写真16　SD01河川北半部（北より）

倒木でないことは確かであるが、全体が腐食しているために加工痕はなく、半裁が自然作用の結果かどうか判断できない。ただ周囲からは大きめの木材が数本出土しており、たまたま流れ着いた状況とは思えない。SD01の出土遺物は古墳時代の遺物が主で、木製品とも共伴することから、SD01やSX01～03の時期を決めることができるが、この大きな木材の周囲では、図14、15の縄文時代晩期～弥生時代前期の土器が集中的に出土した。発掘時には、この時期の貯木場のような推測をしていたが、SD01の流れは、古墳時代まで断続的に同じ河道を流れていたことからすると、古い時代の木材だけがそのまま動かずに残っていたとはとても考えがたい。SD01北端部の多くの流木も古墳時代と修正しておく。

これまでSD01とその河道に構築されたSX01～03の発掘所見について記述してきたが、ついにSX01～03の機能を明確にすることはできなかった。ところで福岡市内では、弥生時代～古墳時代の同様な遺跡の調査例が増え続けている。このうち博多区君休遺跡（那珂久平遺跡）、同那珂深ヲサ遺跡、早良区鶴町遺跡、同深町遺跡などの発掘調査を担当したが、明らかに井堰と断定できても、止水、揚水の具体的な方法、そして導水溝や対象となった耕作地など全体像を完全に掴むことはなかった。本遺跡のSX01も井堰として水位を上げ、西側の溝に水を流し込んだと思われるが、その溝はSD01を離れ耕作地に向かった形跡はない。

2万㎡を超す調査面積でありながら、水田跡を発見していないことからすると、農業用水としてだけでなく、洪水から集落を守り、あるいは生活用水、また川魚を取る場所として多面的に利用し、制御していたことも十分に想定できよう。（力武）

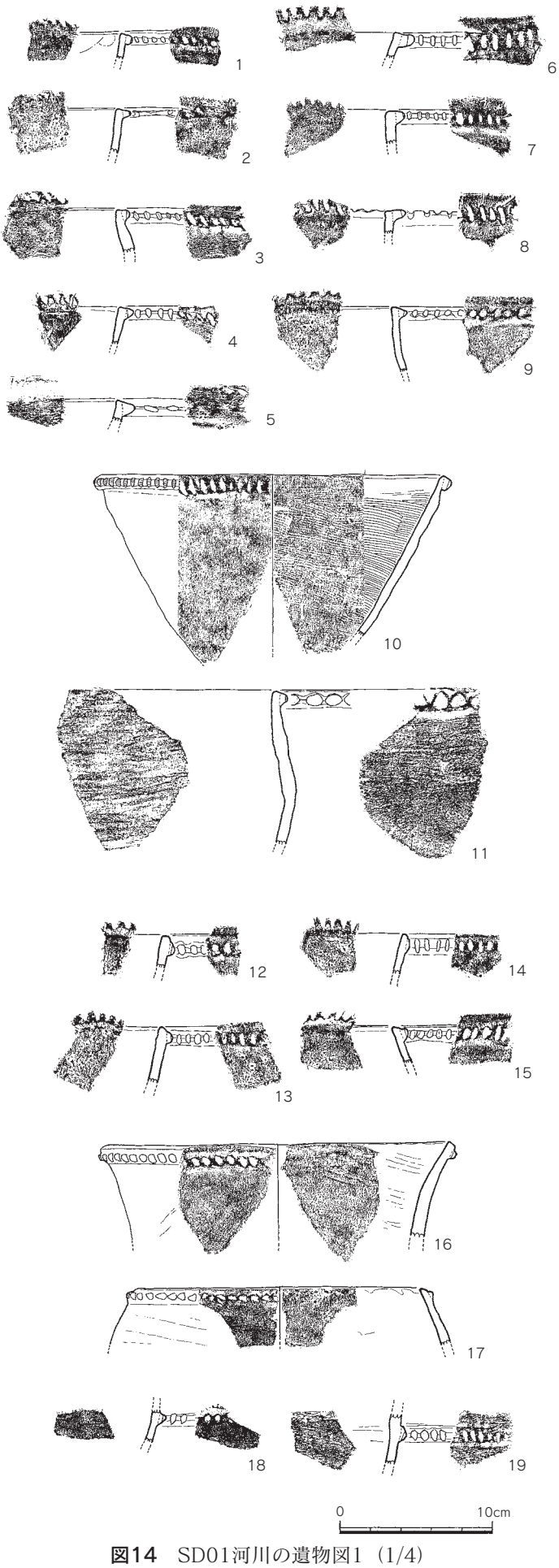
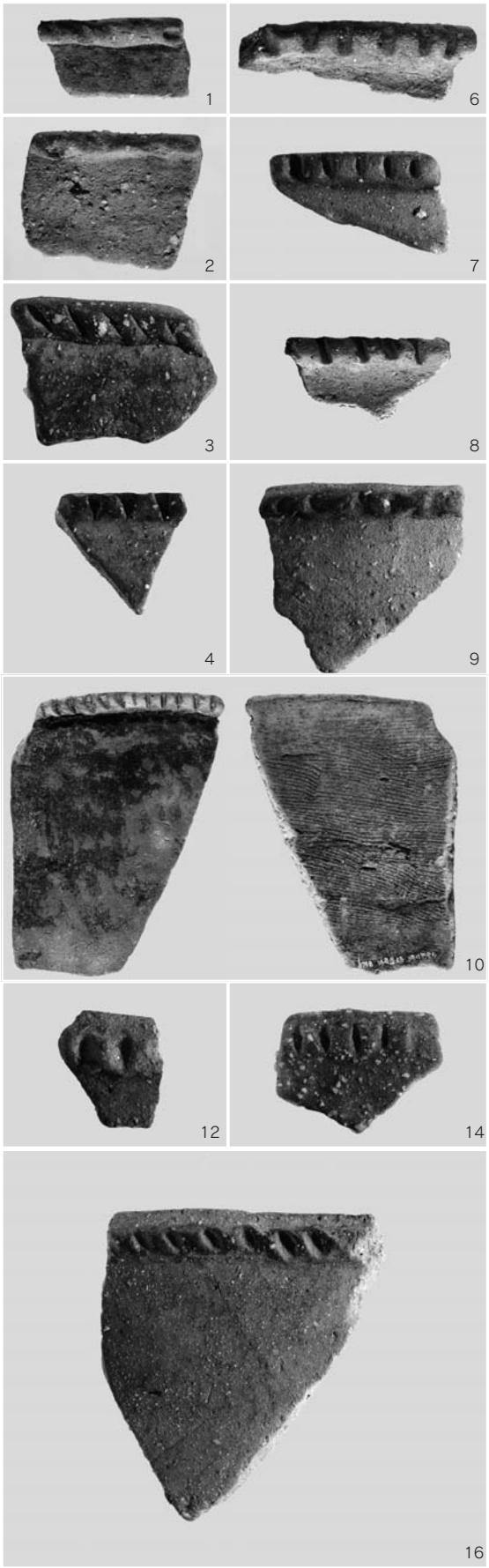


図14　SD01河川の遺物図1（1/4）



SD01河川の出土遺物

調査区を南北に貫流する河川は、途中で東西に流れが分かれていた。東西の河川から出土した遺物を概観すると、西に彎曲するSD02の遺物は、古墳時代初頭以降が主となるので、本来東側に彎曲する流路から派生したと考えられる。東側に彎曲するSD01の出土遺物は、縄文時代後・晩期、弥生時代前期と弥生時代後期から古墳時代古式土師器、須恵器、中世以後に大別される。古式土師器は、護岸の杭列付近でまとまって検出されており、その集中状況は水際の祭祀を彷彿とさせるものがあった。縄文時代後期や縄文時代晩期～弥生時代前期の土器は、流路堆積土のやや下層で検出された。今回の調査区のさらに北側の調査状況を勘案すると、縄文時代後期から弥生時代前期にかけての流路が検出されていることから、この地一帯の流路は、全時期を通してではなかったようである。

いわゆる夜臼式土器の突帯文土器は、突帯が口縁部に接するものと直下に付するものに大別され、さらに突帯の断面形が蒲鉾形と三角形に近いものとに分類できる。多くが小破片となっており、傾きはやや不正確である。ある程度の磨耗は受けているが、刻み目や器面の調整は観察可能である。1から10は、突帯が口縁部に接するタイプ。11は漏斗状にすぼまる体部が特徴的である。11はゆるく屈曲する体部をもつ。12～17は、突帯を口縁部直下に回らすタイプ。16は底部の立ち上がり付近にふくらみをもつタイプであろう。17は口縁部がすぼまるタイプである。18・19は胴部の突帯であるかもしれない。

写真17　SD01河川の遺物

弥生土器は、弥生時代前期中頃から中期、そして後期前葉にかけての資料はほとんど検出されていないことから、この期間は流れが停止したと思われる。もともと強引に流れを引き込んでいたものではなく、自然の流れを巧みに利用していたことから、おそらく洪水などで河道が大きく変わってしまったのであろう。

20～29は、弥生時代前期の甕のなかで、いわゆる板付式土器の如意状口縁をもつ器種である。これらは刻目の位置が口縁端部全面にくるものと、下端にくるものとに大別される。30は器高が40㎝近い大型の甕で弥生時代中期初頭まで下る時期であろう。拓本は先の突帯文土器と同じように、刻み目の状態を内面からも取り、口縁部上面の状況がより分かるようにした。

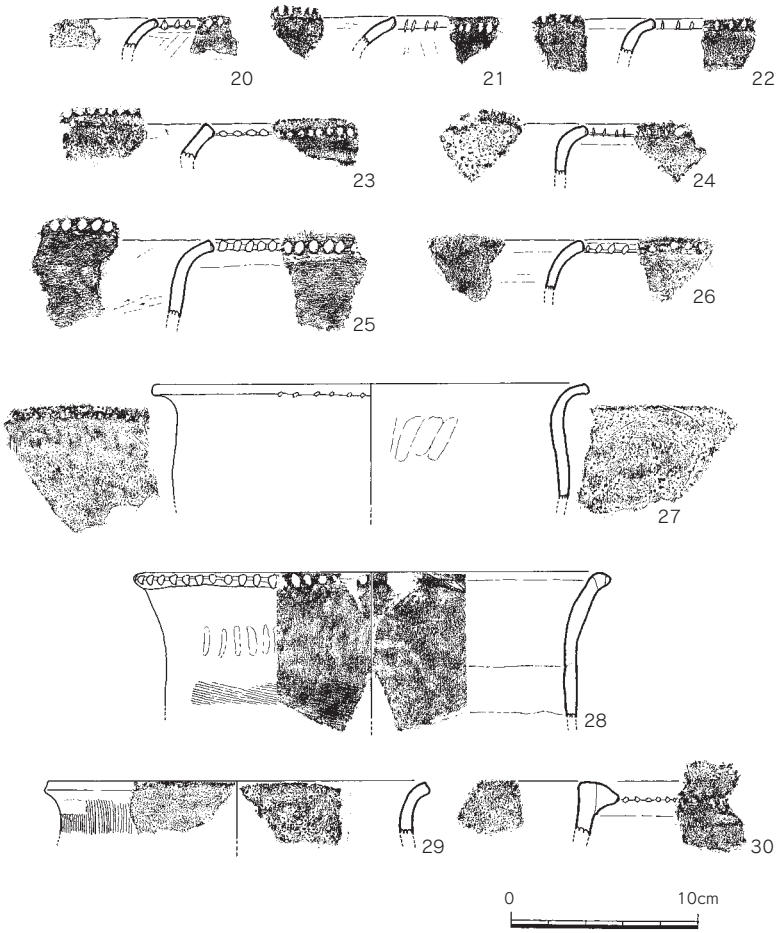


図15　SD01河川の遺物図 2（1/4）

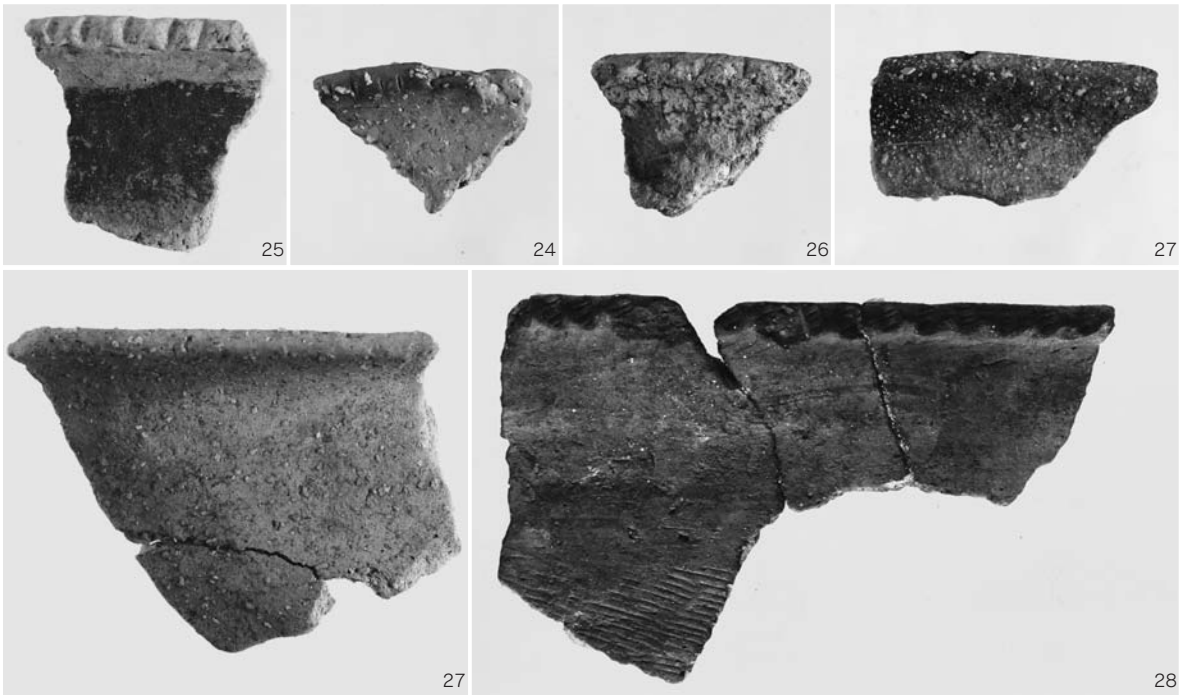


写真18　SD01河川の遺物

弥生時代後期は凸レンズ状の底部をもつ器種が数点ある。後期でも中頃に分類されるタイプである。また複合口縁壺も屈曲部は明瞭な「逆く字」を呈しており、後期前半に分類される器種は含まれていない。31は複合口縁壺の口縁部の破片である。屈曲部の断面は逆く字状を呈している。凸レンズ状の底部をもつ後期中頃の器種であろう。32は甕形土器の底部破片である。凸レンズ状の底部をもつことから後期中頃に比定される。33は、壺形土器の底部破片である。凸レンズ状の底部をもつことから後期中頃に比定される。34は大型土器の肩部の破片である。小片のため甕か壺か断じがたい。頸部突帯に「ハ字」の刻目をめぐらす。35～37は壺の口縁部から頸部にかけての破片である。35・36によると口径が50㎝ほどになる大型土器に復元され、これまで類例の知られていない器形となる。口縁端部が外反する点は、早良平野では西新町遺跡2次調査D区3号住居跡や牟多田遺跡出土の複合口縁壺の特徴と共通する。36の下端のカーブをみると頸部が近い様子であり、この付近で屈曲して大容量の胴部を形成するのであろう。内外にしっかりしたハケ目調整痕跡がみられる。在来の大型土器で、その時期は弥生時代終末から古墳時代にかけてと推定される。ただ有田遺跡122次調査（市報告書173集）の5－B土壙出土の土器に口径30cm弱の資料が含まれており、古墳時代でも後期まで下る可能性も否定できない。

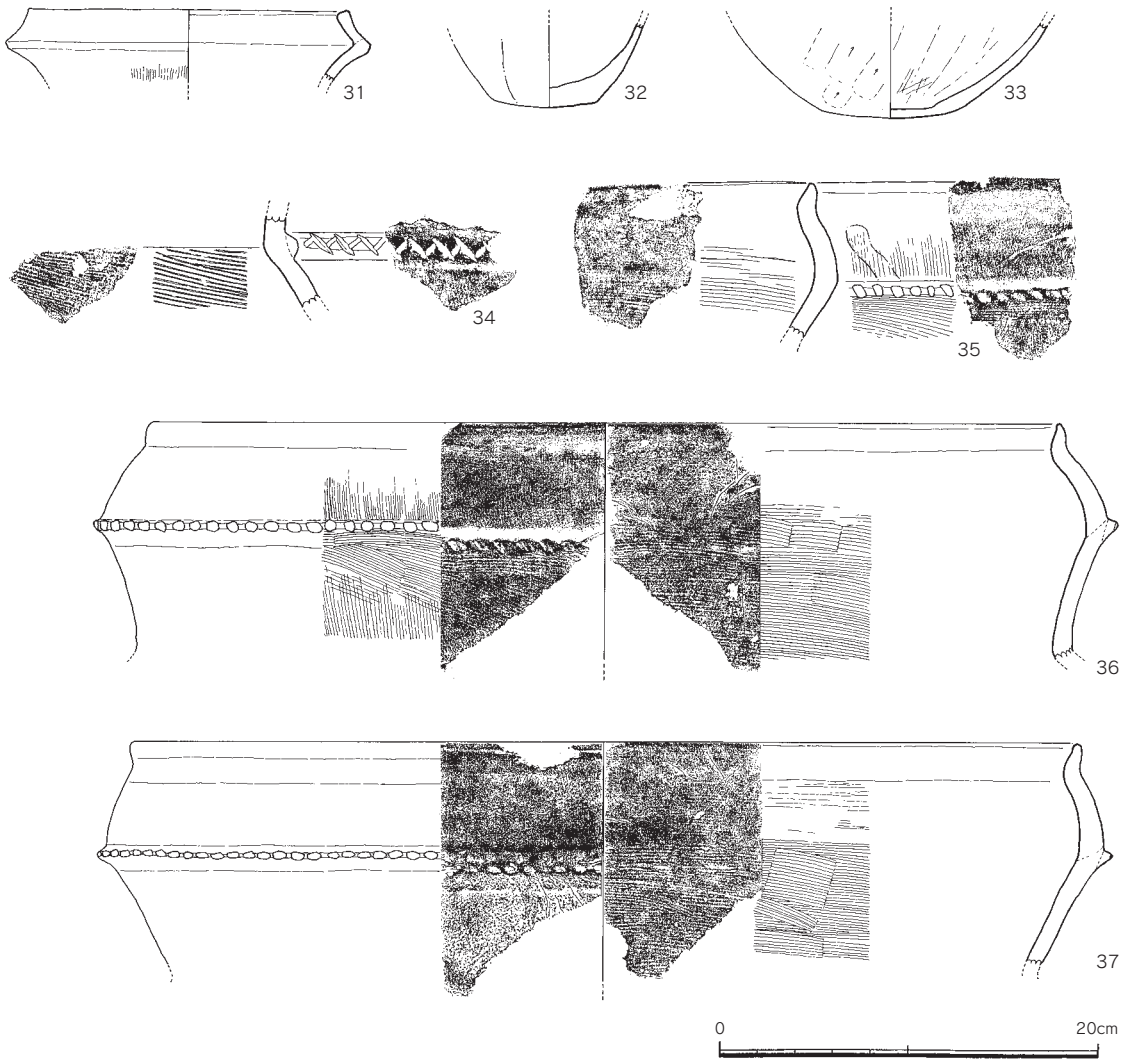


図16　SD01河川の遺物図 3（1/4）

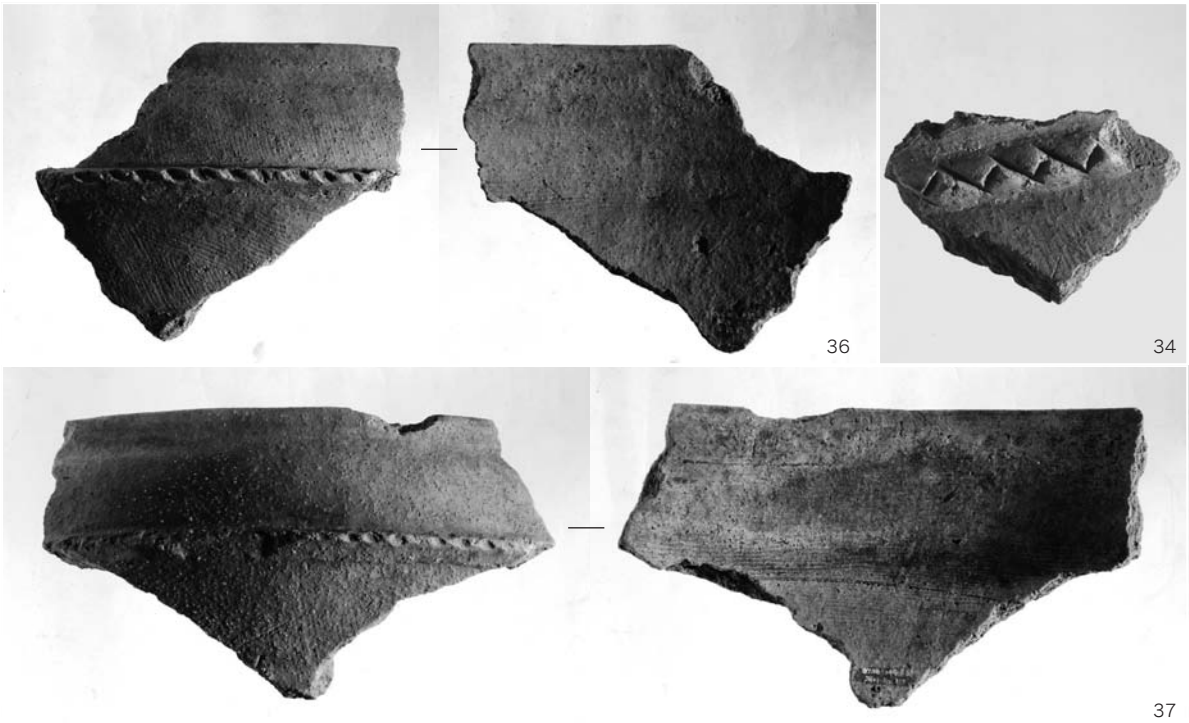


写真19　SD01河川の遺物

38は複合口縁壷の口縁屈曲部から端部にかけての破片である。屈曲部に刻目をめぐらす。39は直口壷の口縁から胴部にかけての破片である。内外に粗いハケ目調整を行なっている。40は完形品の直口壷である。胴部中ほどに重心をもち、尖底状の底部を有する。41は頸部を打ち欠いた壺形土器の胴部である。頸部と胴部に断面三角形の突帯をめぐらし、胴部には刻目を加えている。胴部中ほどに重心をもち、やや尖底気味の底部を有する。42は長胴の甕形土器の上半部である。内外にハケ目調整を施し、頸部はゆるく屈曲する。43は直口壷の口縁から頸部にかけての破片である。44は直口壷の口縁から胴部にかけての破片である。外面にハケ目調整を行ない、胴部内面に下から上への削りを施している。45は長胴の甕形土器である。内外にハケ目調整を施し、頸部はゆるく屈曲する。底部外面は繊維質の原体を用いて粗くナデつけられている。46は長胴甕の胴部である。外面は右下がりのタタキ成形、内面にハケ目調整を施している。底部は繊維質の原体を用いて粗くナデつけられており、小さな底部を残している。

47～49は、布留系の甕形土器である。47は、口縁部から胴部上半の破片である。口縁部は直線的に外反する。内面は下から上に斜め方向の削りを施す。48は、口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部は内湾するカーブをえがいて立上る。49は、口縁部から胴部にかけての破片である。倒卵形の胴部上半に横方向のハケ目調整を施し、肩部に波状の沈線をめぐらす。内面は下から上に斜め方向の削りを施す。50は、外来系の甕である。内湾するカーブをえがいて立上る口縁部は、布留系甕に通有の特徴だが、胴部のハケ目調整は縦方向のみで、その限りではない。やや長胴の胴部は、底部から頸部に向かって削りを施す。口縁部中ほどから口唇部にかけては色調の異なる褐色の粘土を用い、以下の暗灰色の胎土とコントラストをなしている。51は、甕形土器の胴部破片である。外面に縦方向のハケ目を施し、内面は斜方向の削りを行なうが、内傾する粘土の輪積痕跡が明瞭に観察される。52は、在来系直口壷の口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁はやや外反気味に立ち上り、内外面にハケ目調整痕を施す。弥生時代後期中頃から終末にかけての時期か。53は胴部中ほどに重心をもつ甕形土器である。外面にハケ目調整、内面に下から上方向の削りを施している。胴部中ほどに対角線上

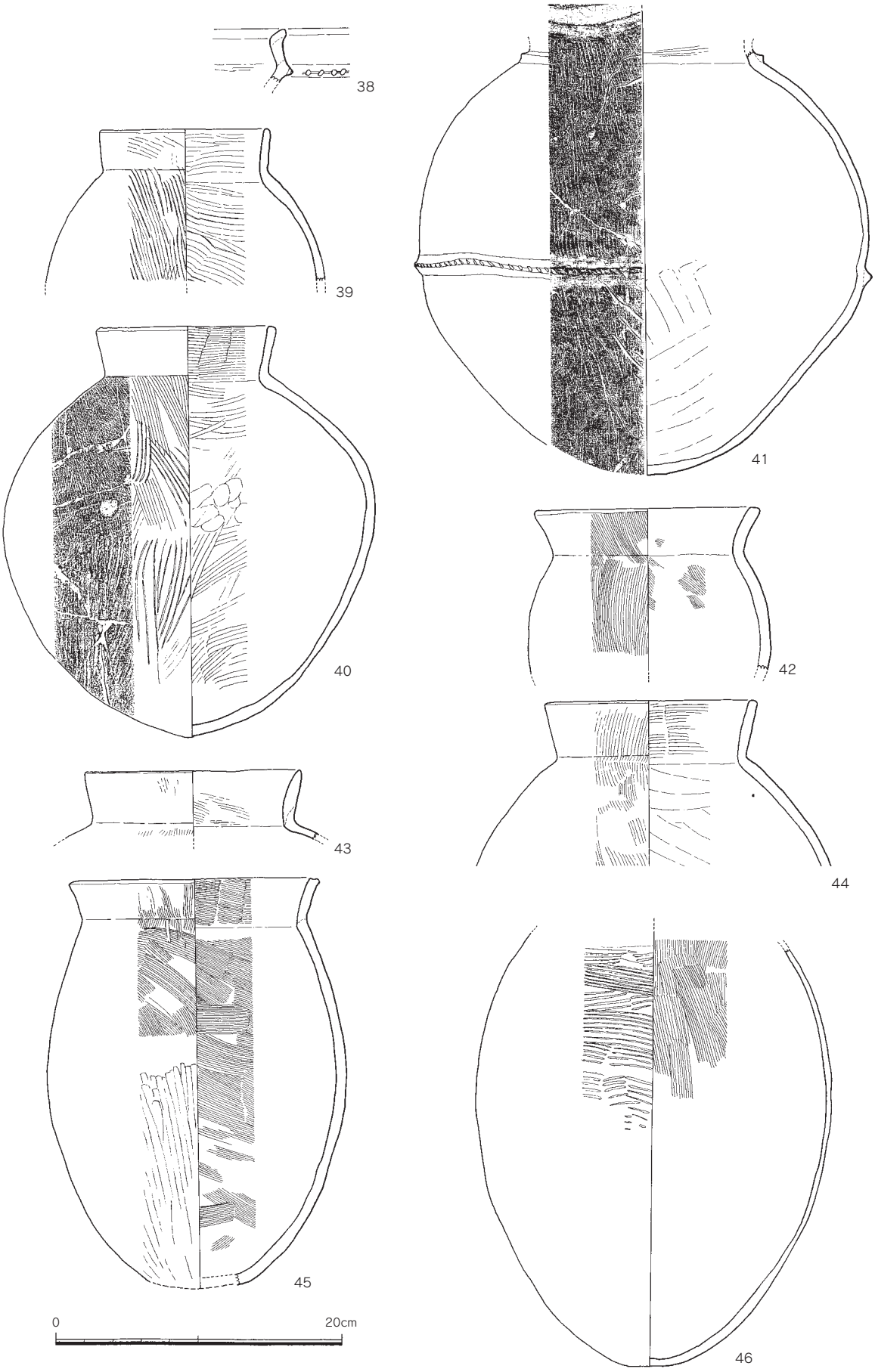


図17　SD01河川の遺物図 4（1/4）

41

40

45

53

50

57

写真20　SD01河川の遺物

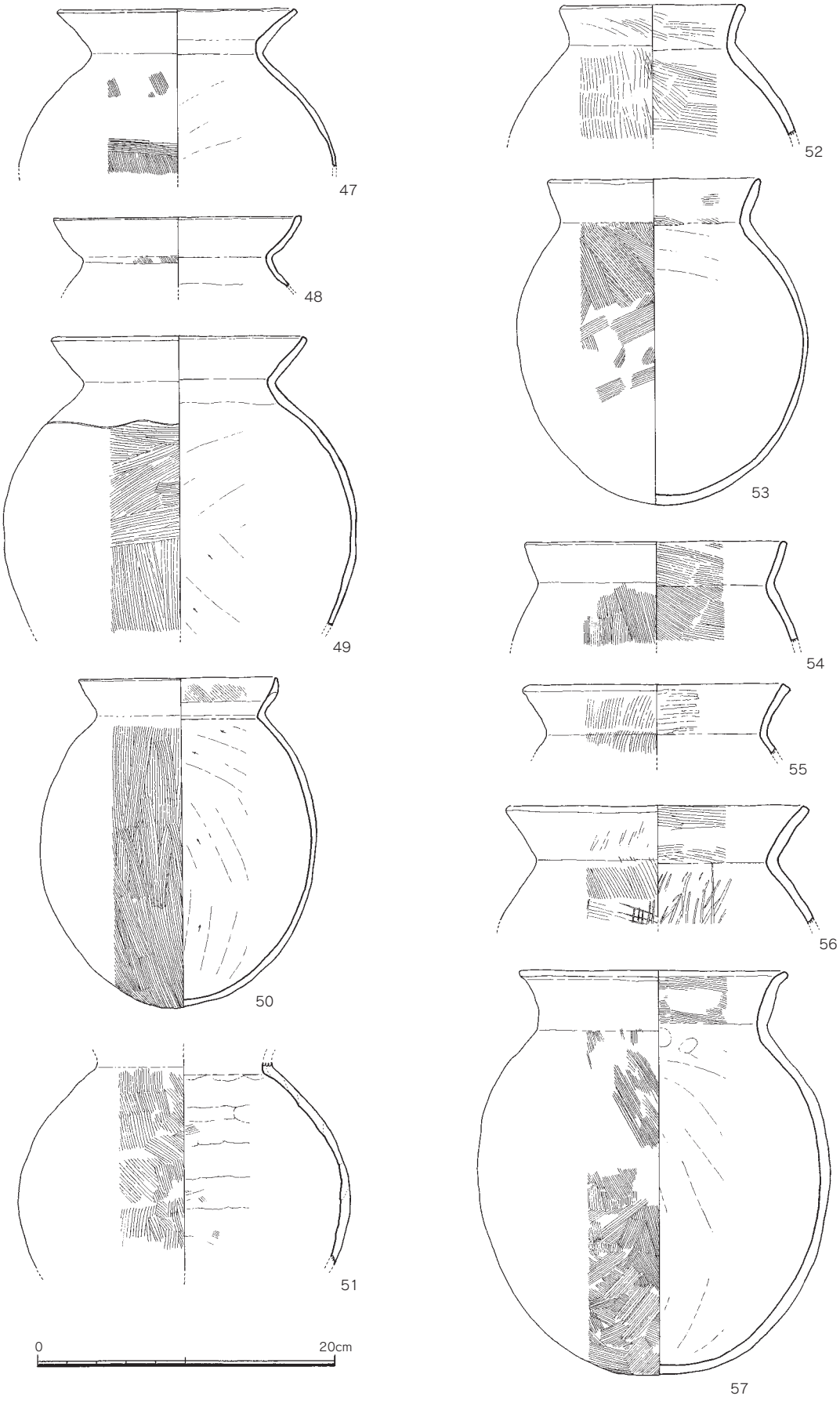


図18　SD01河川の遺物図 5（1/4）

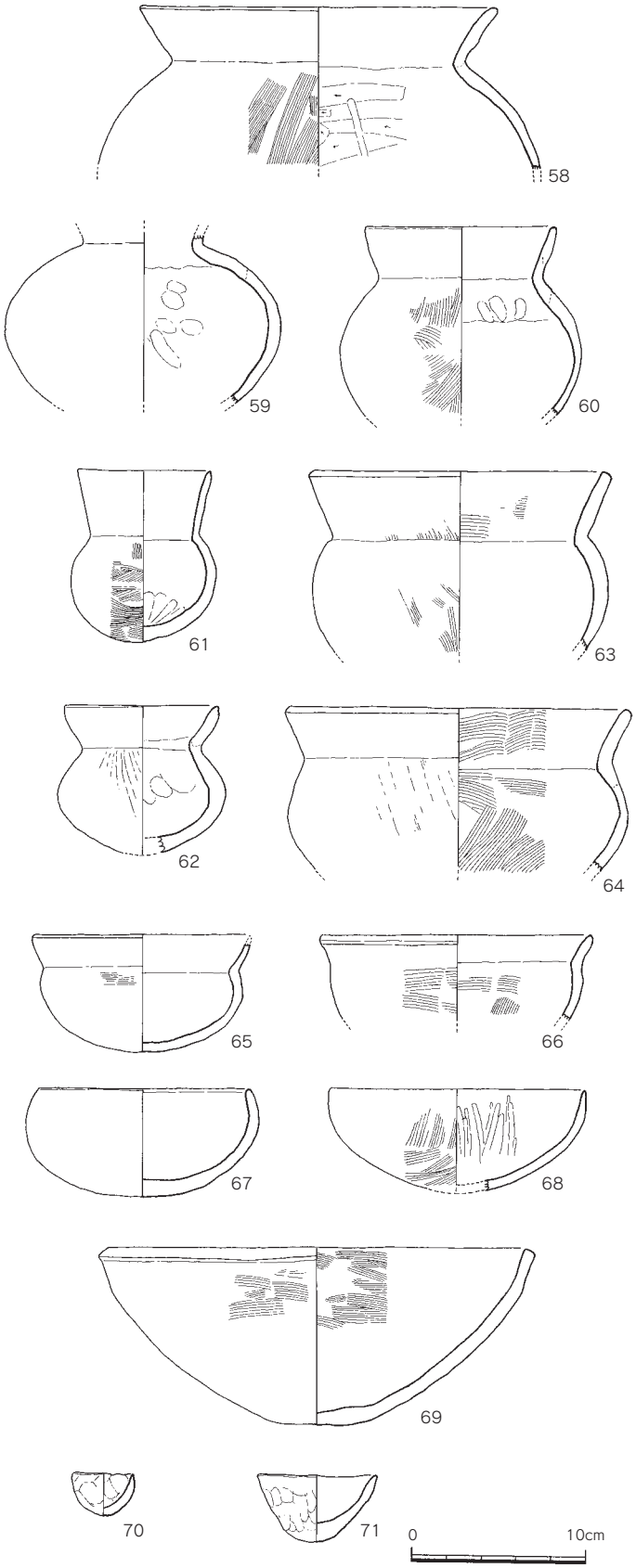


図19　SD01河川の遺物図 6（1/4）

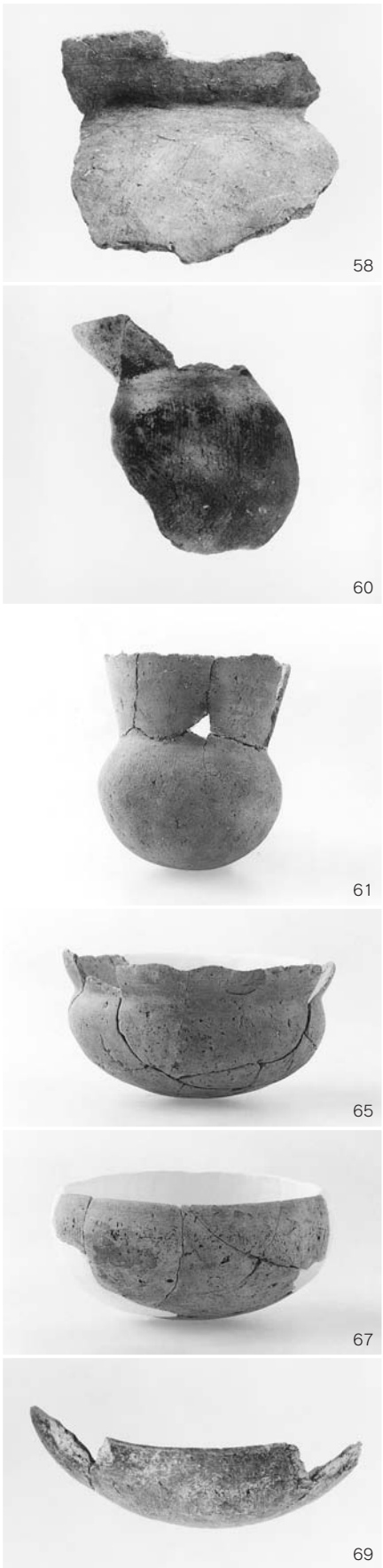


写真21　SD01河川の遺物

に対峙する焼成後の孔があるが、祭祀にともなう行為かどうかは不明のため図化していない。布留式の影響が薄れ、須恵器出現以前の土師器に位置づけられよう。54～56は在来系長胴甕の口縁部の破片である。何れも内外にハケ目調整の痕跡をとどめている。頸部の屈曲は、56がもっとも顕著で、タタキ成形時の痕跡をとどめている。57は、胴部中ほどに重心をもつ甕形土器で、外面にハケ目調整、内面に下から上方向の粗い削りを施している。在来の長胴甕に削りを採用したという点では53と共通する。

58～62は、土師器。58は、甕形土器の口縁部から肩部にかけての破片である。頸部の横ナデによって口縁下端部は肥厚する。肩部内面に横方向の削りを行なっている。59は、壷形土器の頸部から胴部にかけての破片である。扁球形の胴部に絞った口縁部をもつ器種で、口縁部は外反気味にのびるタイプであろう。胎土は明褐色で脆い。60は小型の甕形土器で、内湾気味に立上る口縁部をもつ。61は小型丸底壷で、球形の胴部に長くのびる口縁部を有する。器壁は、やや厚手である。62は、扁球形の胴部に外反気味にのびる短い口縁部を有する。褐色で精良な胎土をもつ。

63、64は、在来の鉢形土器である。短く屈曲する口縁部をもつ。この器種は弥生時代後期後半から古墳時代にかけて多くみられるが、同時期の壷や甕などとくらべて丸底化が早く、器形の変化が少ない傾向がある。65は、小型丸底の精製の鉢で、古墳時代前期に通有の器種である。66は短く屈曲する口縁をもつ鉢で、在来系の器種であろう。67は扁球形の鉢で、内側にすぼまる特徴から古墳時代に比定されよう。68、69は在来の鉢で、63、64などと併存する器種である。浅いボール状の器種で、単独で時期の比定は難しい。70、71は、手捏ねの鉢形土器である。

72～76は、土師器の高杯。受部のやや下寄りで外反するタイプで、72にくらべて73は深い受部をもつ。75、76の脚部は長く、布留系の甕などとセット関係にあっても不自然ではない。

77～82は古墳時代後期の須恵器である。77の断面が塗りつぶしていないのは、焼成が不良なためである。坏身、甕、高杯などの器種がある。

83～87中世の土器である。いずれも小片で、出土量も微量であるため、河川埋没後に中世の遺物包蔵地から流入したと考えられる。（常松）

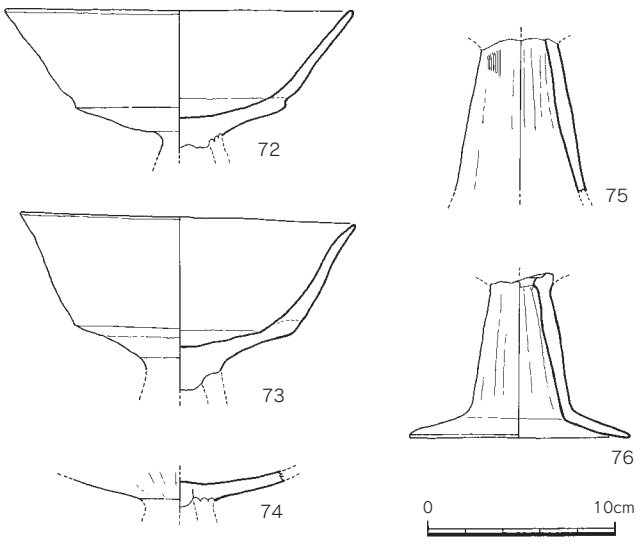


図20　SD01河川の遺物図 7（1/4）

写真22　SD01河川の遺物

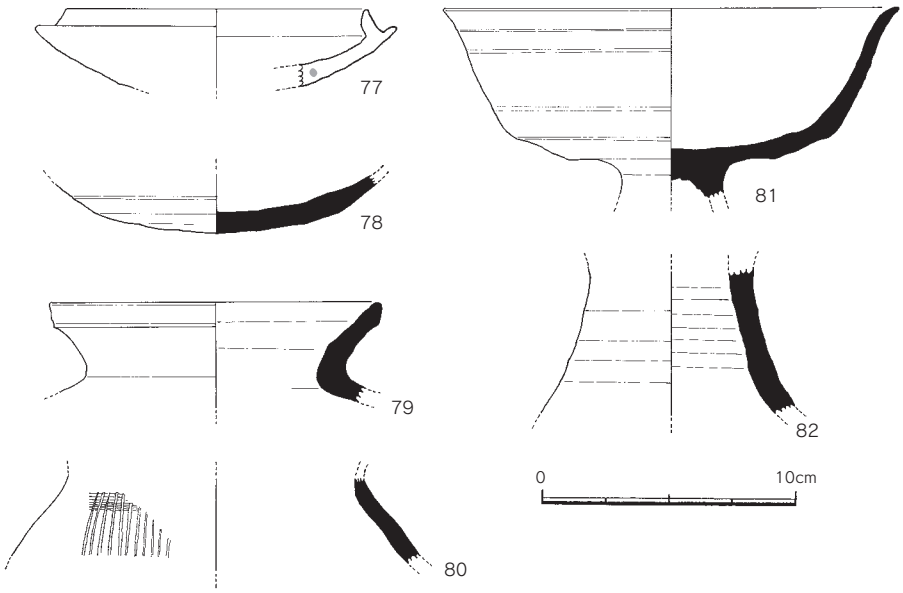


図21　SD01河川の遺物図 8（1/3）

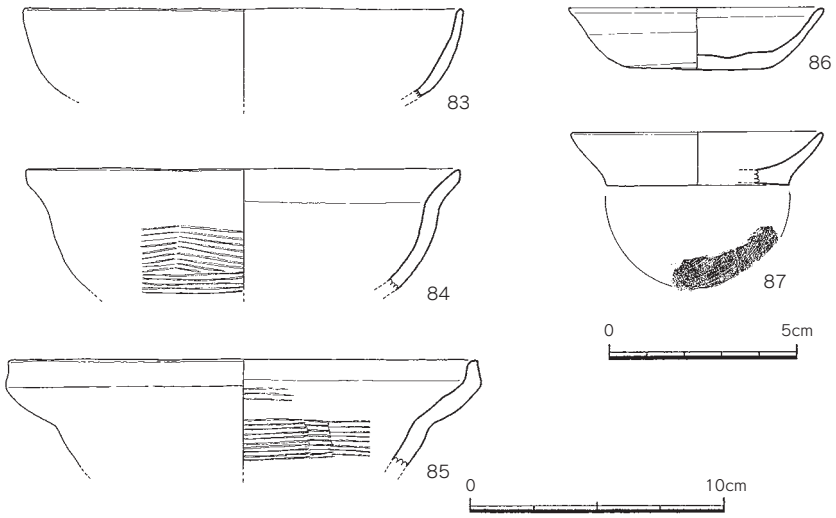


図22　SD01河川の遺物図 9（1/3・1/4）

木製品

SD01より出土した木製品10点を図示した。木製品の種類は、建築材、農具、その他に分類できる。ネズミ返しの2点は、SX02に組み込まれており、これ以外は流木と同じように河道に埋没した状況で出土した。SX01～03の構造材の多くは、端部が切断されており、また板材そのものが加工品であることから、本来実測すべき木製品である。発掘作業では、可能な限り多くの本数を取り上げ、重要遺物については、いち早く実測を済ませ、保存処理のために福岡市埋蔵文化財センターに搬送した。その他の木製品は、長年の間に乾燥、変形し、今回報告できなかった。なお全体や加工部の大きさがすぐに分かるように、寸法線と数値を記入しているので、図面で表現できない観察結果について記述している。

建築材　SX02より出土した2枚のネズミ返しは、大きさ、作り方など異なる点が多く、同じ高床式倉庫に使用された可能性は薄い。SX02は横材の方向から3列に分けたが、1は流れ中央寄りのA列立杭の間から出土した。出土時から半分が欠けており、破断面が著しく腐食、乾燥している。破損、廃材になってから、相当な時間経過があったのだろう。材質は広葉樹で、クスか。通常のネズミ返しが、平板か笠形であるのに対し、本例は一方だけに反りをつけ、断面がトンネル状になっている。均一な厚さではなく、粗雑な作りであるが、中央の孔は正方形に近く、建築材らしく規格的な加工である。2は、東岸寄りのC列からの出土で、明らかに主要な構築材の一つとして最初から組み込まれている。1に比べると異様な程に大きい。広葉樹が用いられ、樹種もよく似ている。厚さは均一ではなく、全周縁に向かってわずかな反りがある。全面にひび割れ、腐食が激しく、SX02の構造材として何度も水没と乾燥を繰り返した結果と思われ、SX02の使用が短期間でなかったことを裏付けるものであろう。ネズミ返しの大きさは、高床式倉庫の規模、柱材の直径に比例すると考えていたが、2例の方形孔と大きさの関係を見ると逆になっており、そう単純でないことを教えてくれる。

写真23　SD01河川の木製品出土状況（扉）

写真24　SD01河川の木製品出土状況（ネズミ返し）

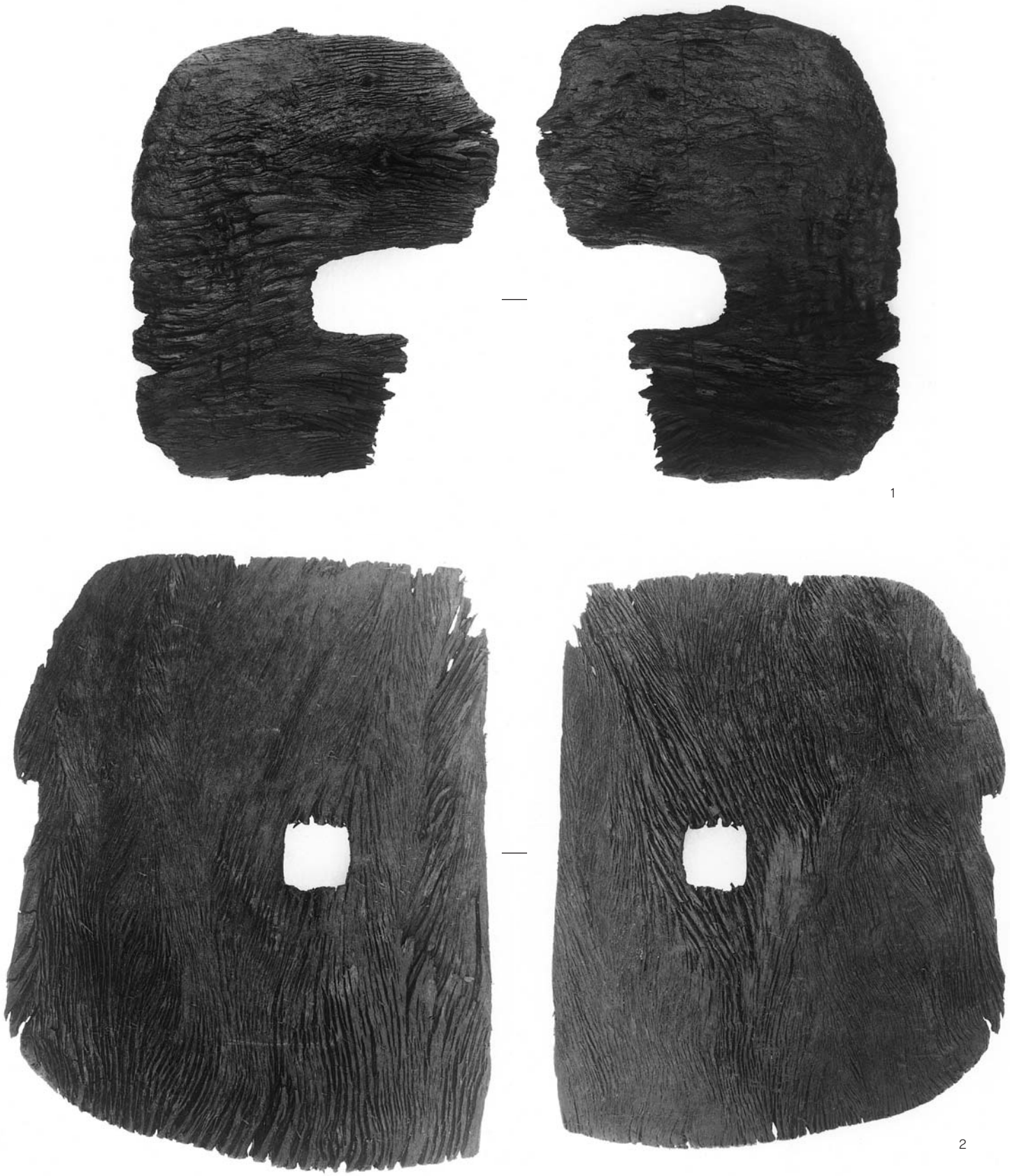


写真25　SD01河川の木製品（ネズミ返し）

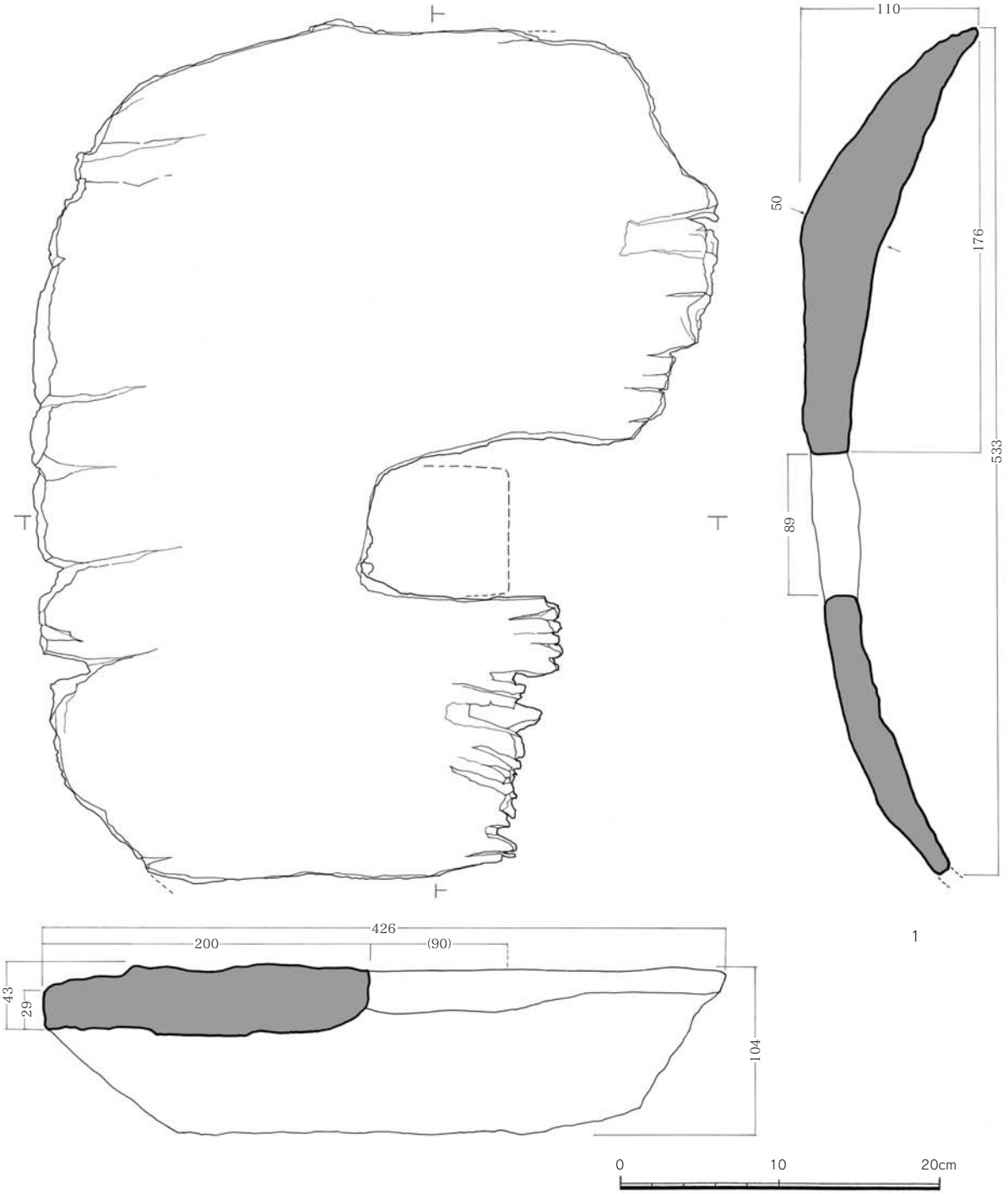


図23　SD01河川の木製品図 1（1/4）

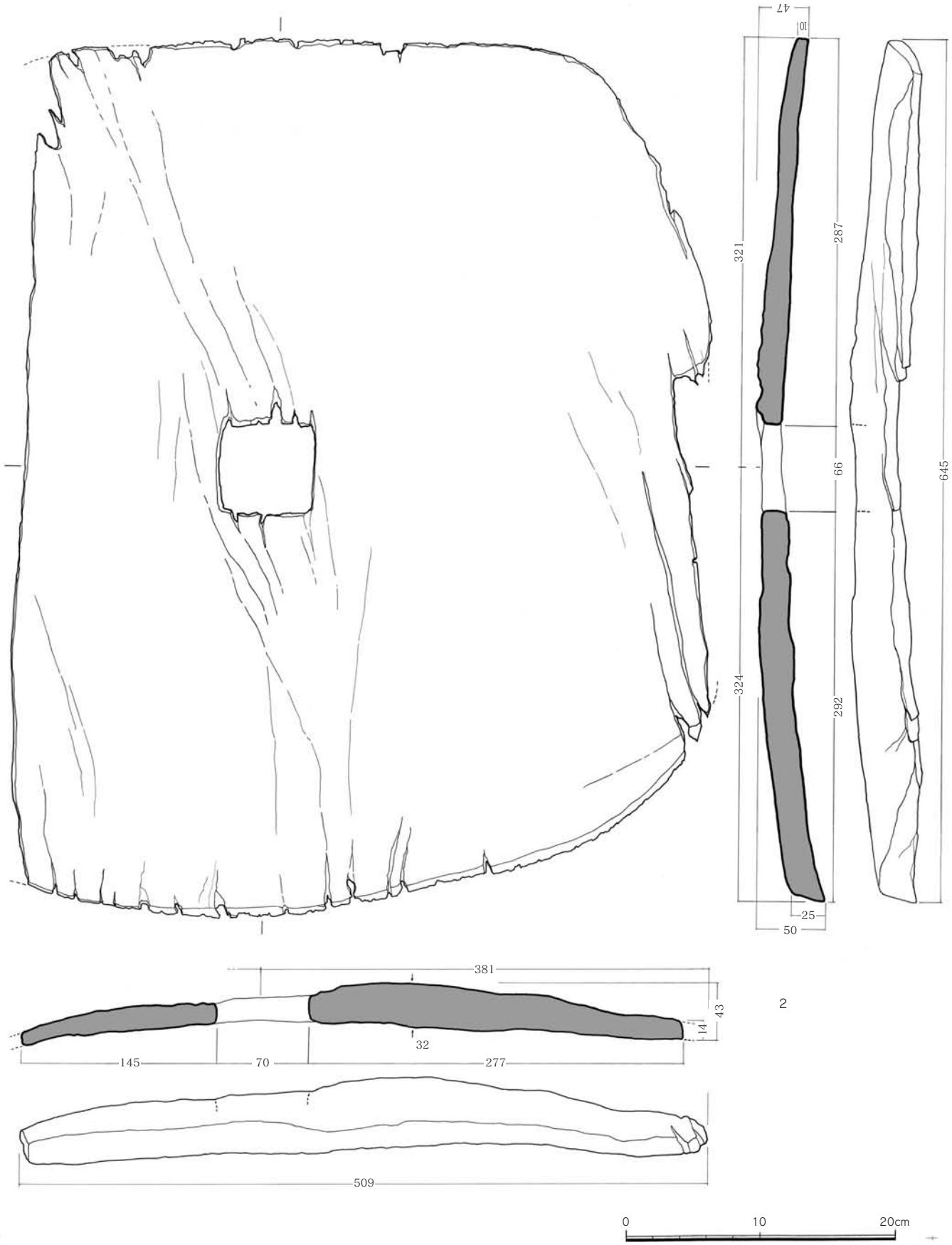


図24　SD01河川の木製品図 2（1/4）

3は、厚さ3㎝程の長方形板材で、長辺側の両端に突起を作り出している。この二つの突起は長方形断面で、長さは数㎜しか違わない。樹種は針葉樹で杉か。全面が腐食し、四辺側縁は特に著しく、木目が浮き出ている。出土時には小規模な入り口の扉材を推定したが、枠に入れ込む突起断面が長方形のために回転に不都合であること、さらに扉材にしては厚みが足りないことなど、やや疑問があった。また図右端に割れがなく原形の幅とすると、縦長でバランスが悪く、箱の蓋など別用途を考えようとしていた。本書を発行するに当たり、東北芸術工科大学の宮本長二郎教授に確認したところ、蔀材ということであった。紙面の割付上、突起を上下にしているが、本来は上部左右にして図示すべきである。蔀材は本市では初の出土で、取り付けてあった窓の形状、そしてどのような建物だったのか興味はつきない。なおすぐ近くから土師器甕（写真26）が出土している。

4も写真24のようにSD01の川底から単独で出土した。周縁が完全に欠けているが、中央に取っ手状の門受け部が残っており扉材であることが分かる。広葉樹の10㎝以上の厚い板材を用いて製作している。取っ手部は高さ約6㎝で断面はなだらかな山形に削り出し、その中央をアーチ橋のように狭くし、方形の窓を刳り抜いて門孔としている。削り痕が見られるが、大部分は滑らかな面となっている。ただ刳り抜いた門孔の大きさは、5㎝足らずであるが、方形

写真26　SD01河川の木製品出土状況（蔀）

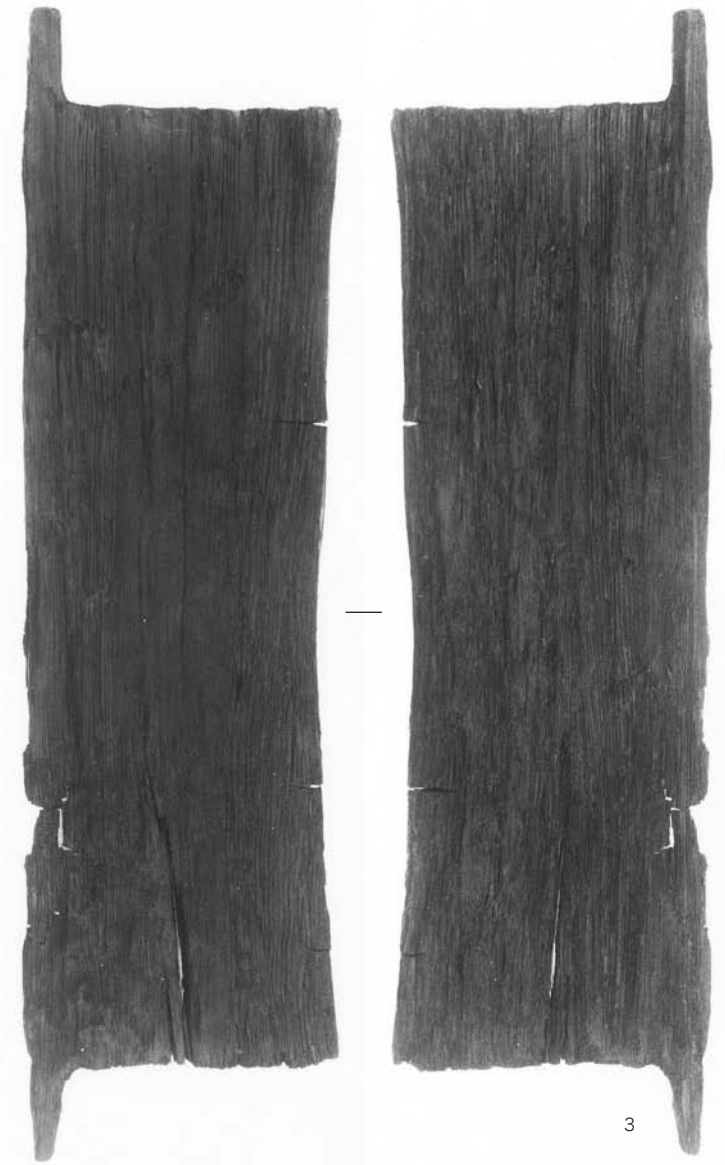


写真27　SD01河川の木製品（蔀）

断面の門を挿入するには十分な大きさで、大きめの門受けの加工と合わせて頑丈な扉だったのだろう。

先の1、2のネズミ返しと合わせて高床式倉庫が付近に建っていたことを示している。昭和52年調査の清末遺跡1次調査で2棟の掘立柱建物跡を検出したが、その建物の時代や構造を推定する上でも重要である。

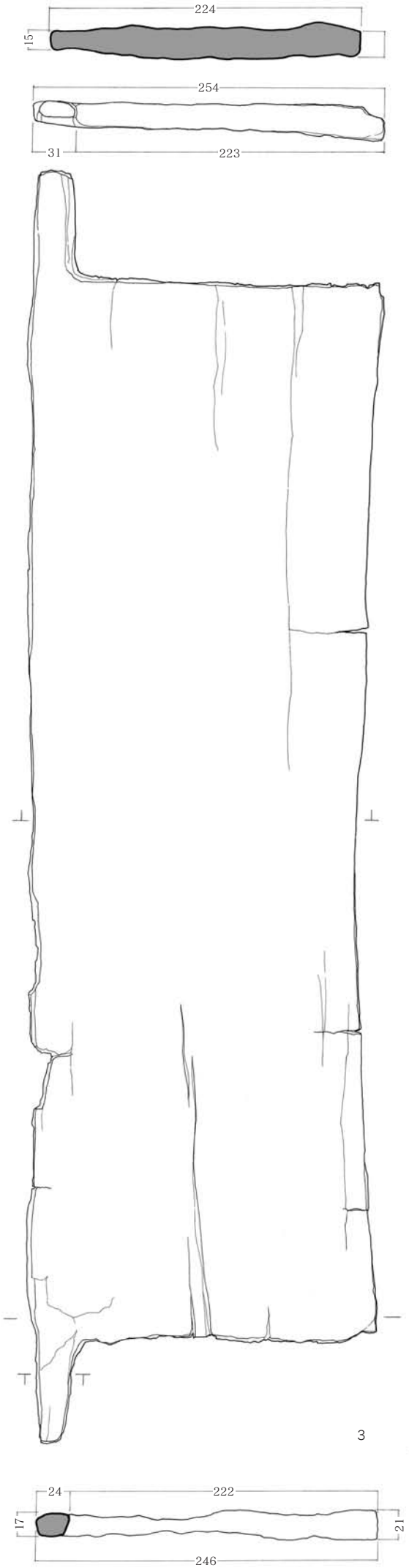


図25　SD01河川の木製品図 3（1/4）

写真28　SD01河川の木製品（扉）

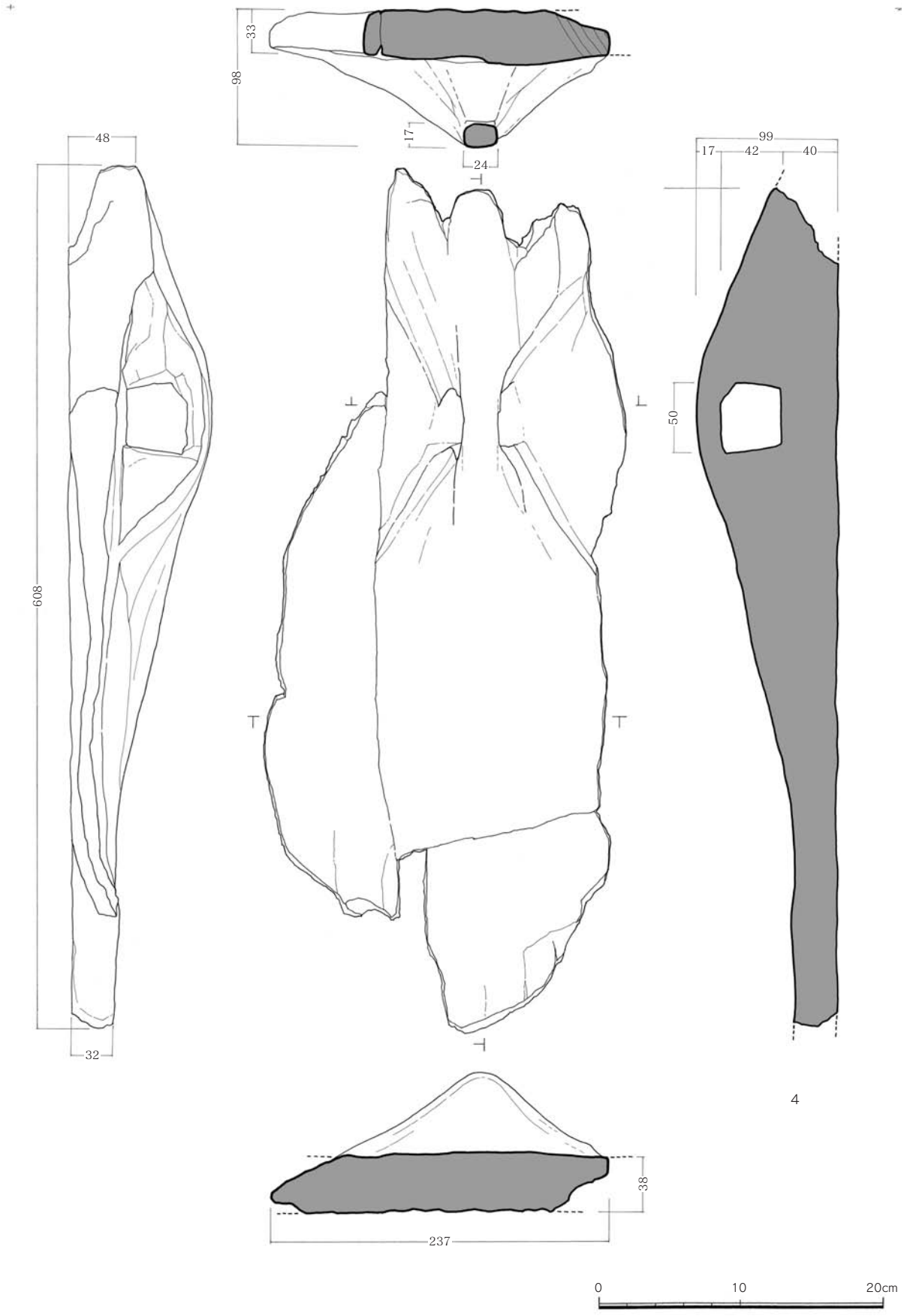


図26　SD01河川の木製品図 4（1/4）

農　具　竪杵、えぶり、平鍬、田下駄と推測した枠材を農具として報告する。

5の竪杵は、両端の搗き部が異なり、図上端が凸、図下端が平らに近い形状となっている。握り部には特別な加工はなく、全長も短めで、古墳時代竪杵の特徴を持つ。広葉樹の芯持ち材、全体に腐植が進んでいるために加工痕は残っていない。6は一部に熱を受けて炭化しており、両端が腐食し全形不明。針葉樹の角材で、6個の方形孔が開いている。横材を組み込むと思われることから田下駄の枠材を想定した。しかし方形孔は大きさも間隔も不揃いで、しかもあまりにも粗雑な断面であることから、横材の固定ができたか疑わしい。また田下駄にしては横材の本数が多く、別の用途か。7はえぶりで、柄入れ孔が残っていないが、

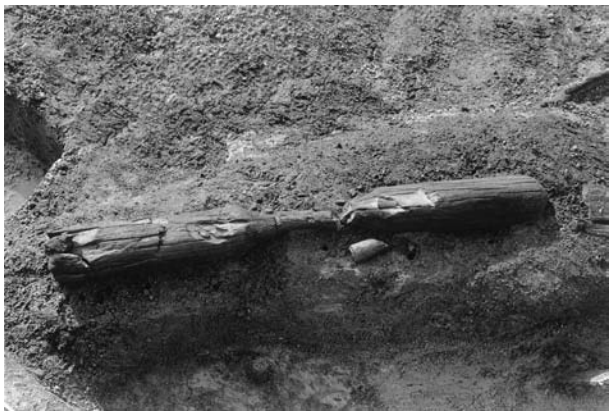


写真29A　SD01河川の木製品出土状況（竪杵）

写真29B　SD01河川の木製品出土状況（えぶり）

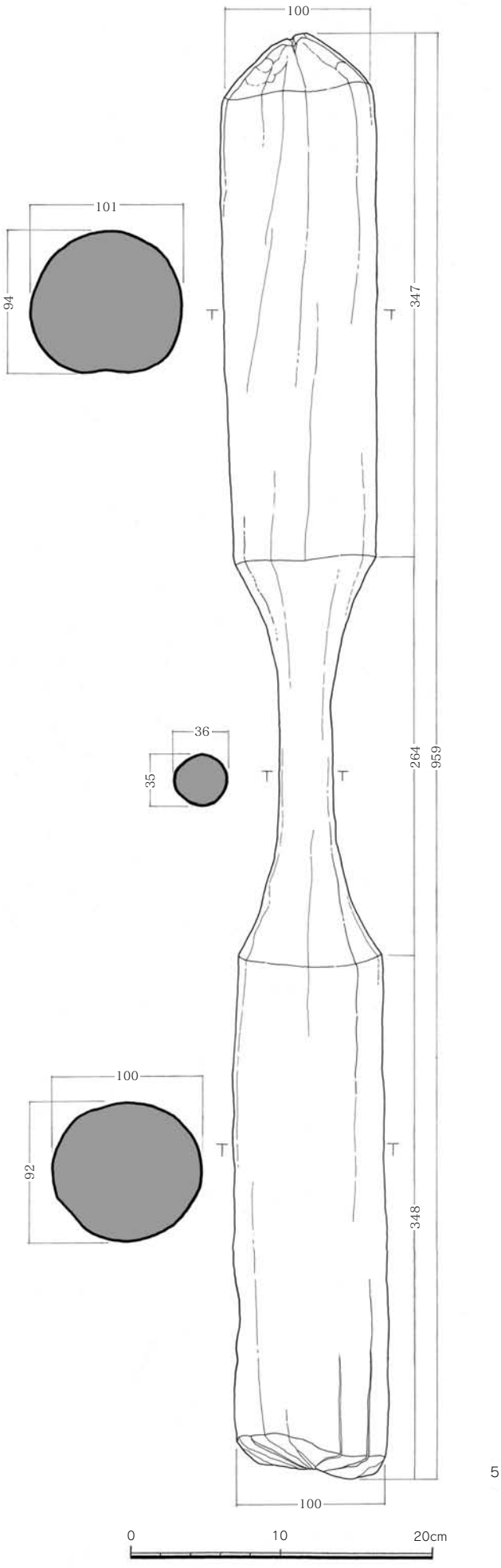


図27　SD01河川の木製品図 5（1/4）

5

その形状を推測することができる。今は台形状の歯が4本残っており、柄入れ孔の下方にも歯を想定し左右対称とすると9本歯となる。各歯の先端は三角形状に尖っていたとは思えないが磨耗が激しく、丸みを帯びている。樹種はカシであろう。8は板状の小破片であるが、よく観察すると柄入れ孔と肩部の一部が残っており平鍬であることが分かる。肩部のラインからすると、刃先が幅広くなる形状が想定できよう。また柄入れ孔の下方に切れ込みがないことから、又鍬の可能性は薄い。

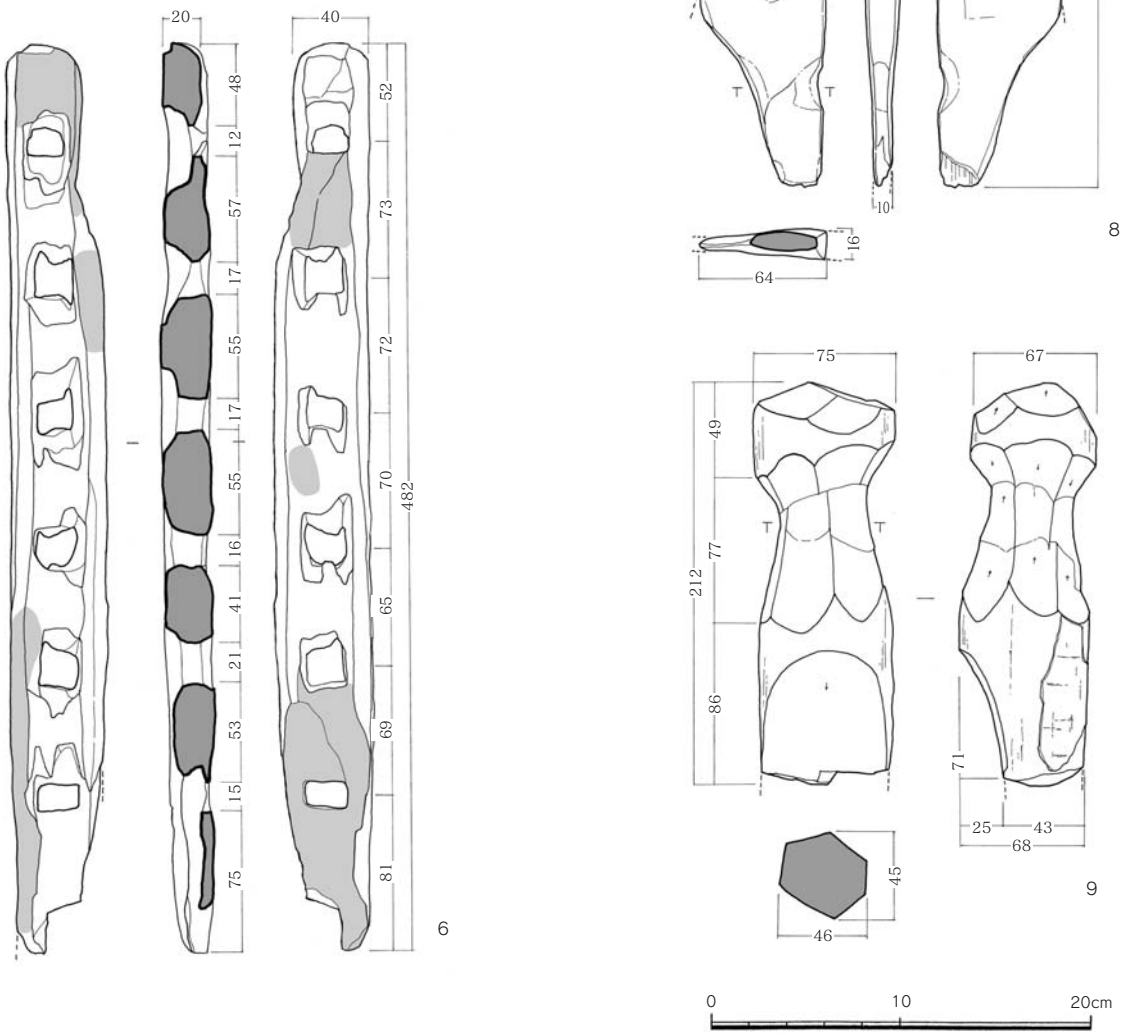


図28　SD01河川の木製品図 6（1/4）

用途不明　9は芯持ち材の一端を粗く切断し、次ぎにその下方で今度は上下から鋭く削り、6角形断面の括れを作っている。図下端は発掘時に折れて全長不明。一部にサクラとよく似た樹皮が残っている。10は広葉樹を用いた板材。図上端と右側縁は腐食し、元の姿を留めていない。図下端と左側縁の鋭利な切断面や緩やかな反りを付けた造形からすると、容器や棺桶の蓋など何か特別な用途を想定したくなるが、全形を知り得ないので用途不明とせざるをえない。（力武）

図29　SD01河川の木製品図 7（1/4）

写真30
SD01河川の木製品（用途不明材）

3．SD02河川の遺構と遺物

調査区南端からの河川は、調査区の中央部でY字状に分かれており、北東方向の本流のように見える河道をSD01した。一方の北西方向流れの延長が、A-2区の北西隅で検出できたことから、これをSD02として区別した。縄文時代の遺物が集中するA-1区とは、現在の農道を挟んで対峙している。平面的には大きな流れが蛇行しているように見えるが、土層観察によって、二つの流れが重なって幅広くなっていることが分かった。いま北側から流れA、流れBとすると、流れAが古く、後に流れBができている。流れAは、幅約2m、深さ約44㎝の溝が東側から流れ込み、西に向かって喇叭状に急に広がっている。その開口部周辺には、流木や土器が密集して出土した。

写真31　SD02河川（東より）

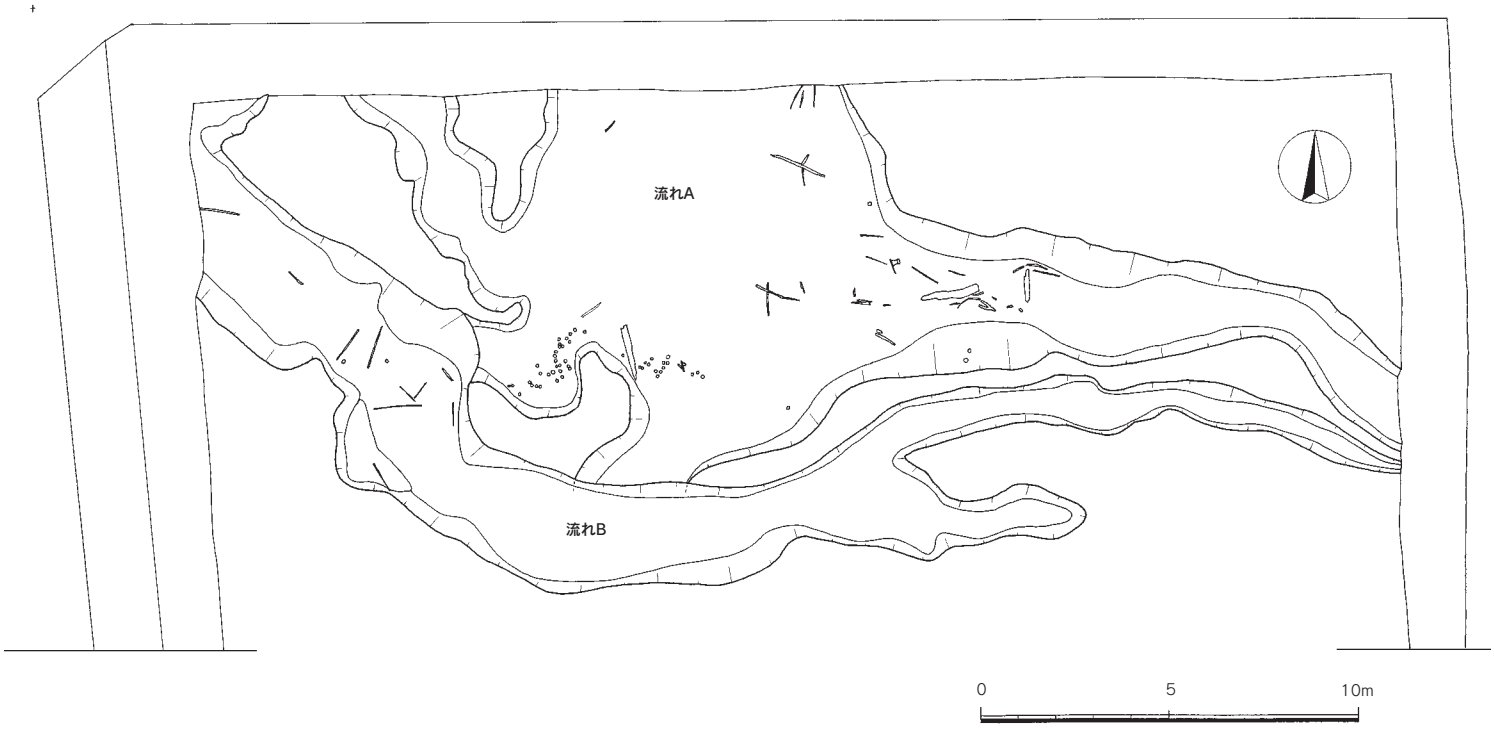


図30　SD02河川図（1/200）

また南岸は複雑に入り込んでおり、立杭が密に打ち込まれた場所がある。南岸からの落水部があり、その護岸対策と推測した。流れBは、流れAの南側に接するように東側から流れ込んでいる。その溝は、幅約80㎝、深さは54㎝、西側ほど幅広くなり、その最大幅は2.7mを測る。そのまま流れAの南側に沿って蛇行を続け、西側寄りに小枝状の流木が見られる。遺物量は少ないが、流れAと大きな時期差はない。SD02は、SD01に比べると縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物を欠く以外は、ほぼ同様の遺物が出土しており、ほぼ同時期の流れである。（力武）

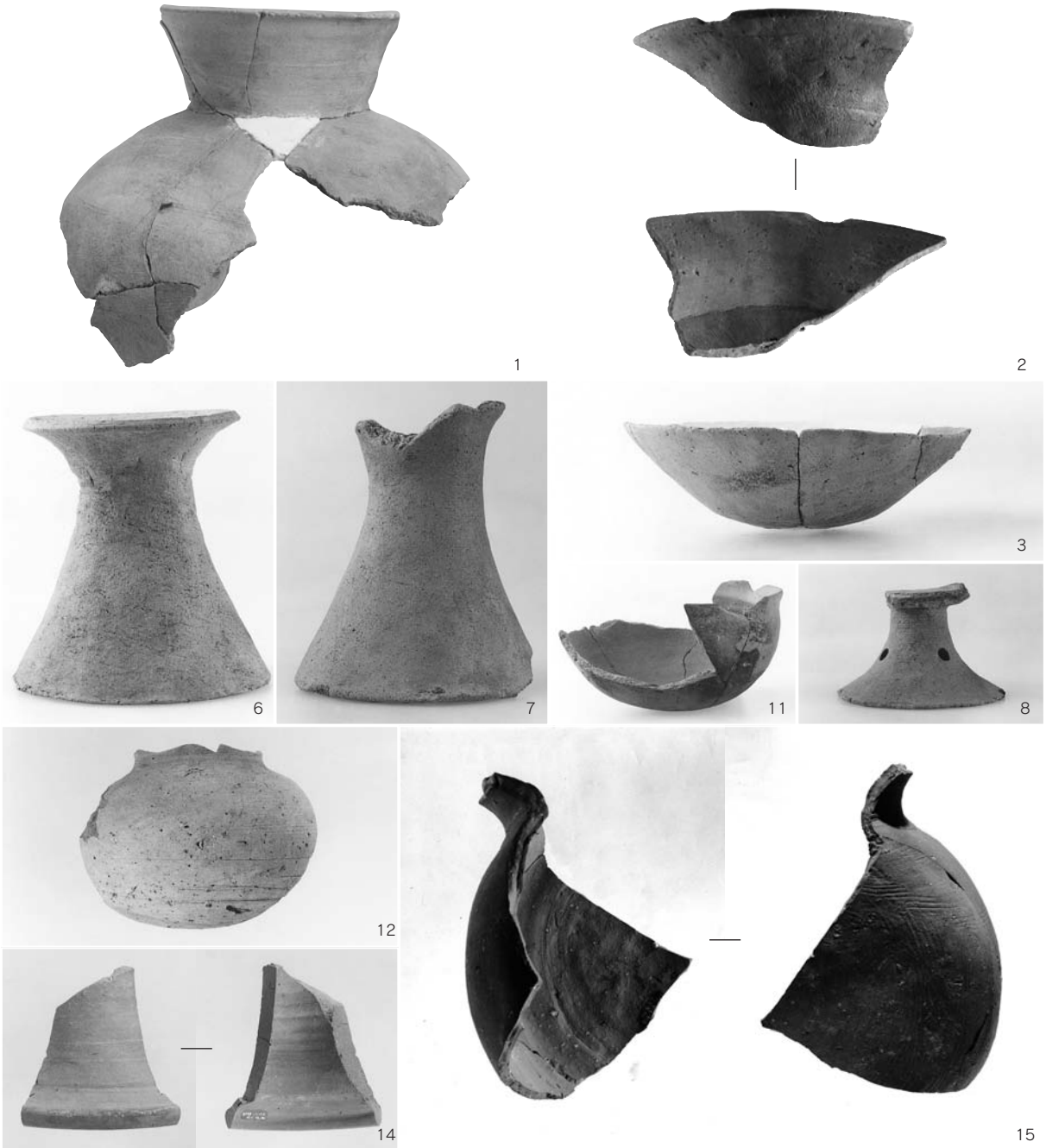


写真32　SD02河川の遺物

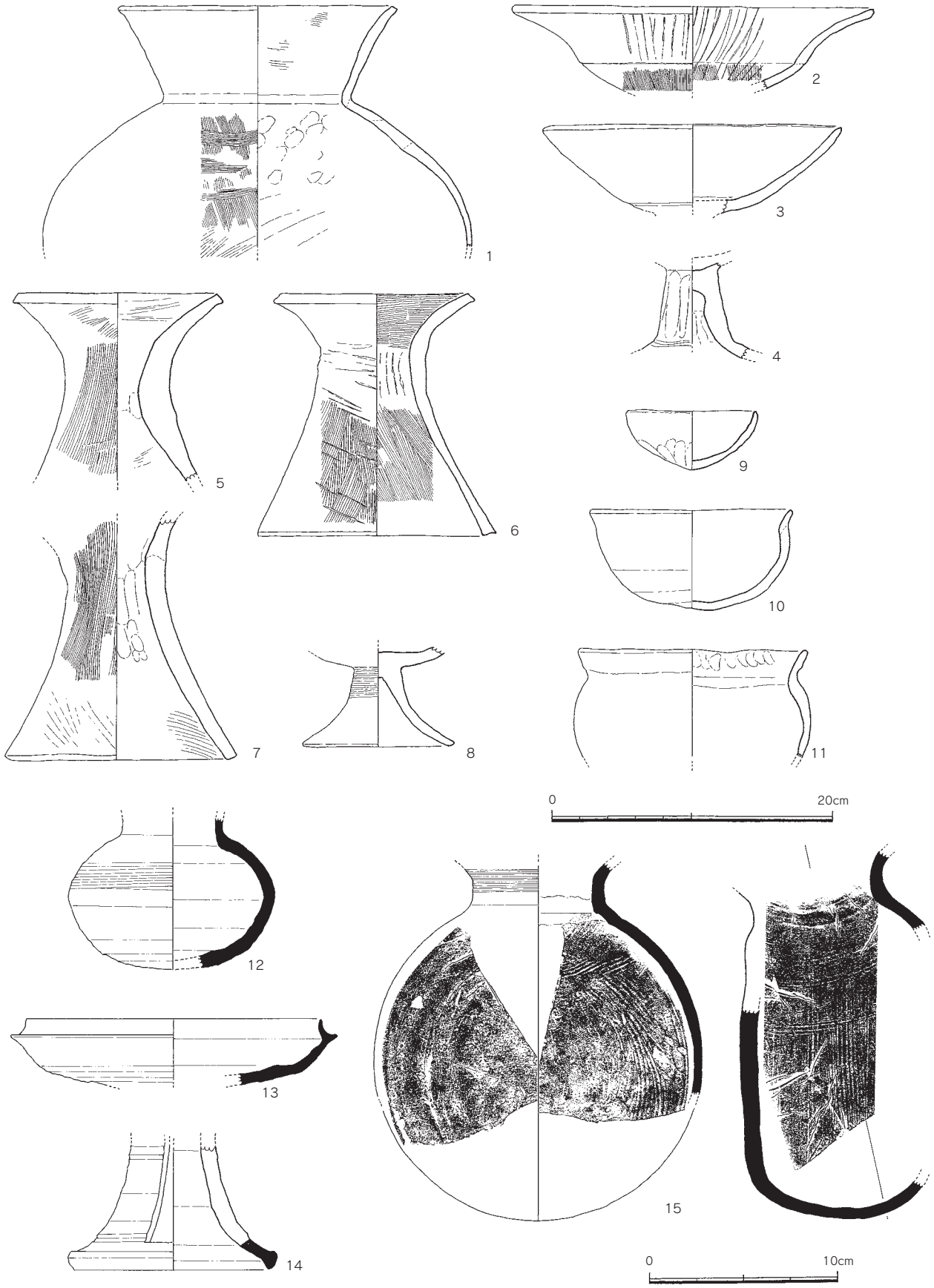


図31　SD02河川の遺物図（1/3・1/4）

SD02河川の遺物

SD02河川の遺物は、古墳前期以降に限られるため、本流であったSD01を西側に迂回させたと考えられる。

1は、土師器の壺形土器の上半部。球形の胴部にゆるく外反してのびる広口の口縁部を有している。胴部内面はヘラケズリ、外面はハケ目調整を施した後、ナデを加えている。淡灰色を呈し、胎土に砂礫を含む。2は、在来系の高杯形土器の受部。受部の中ほどで屈曲して朝顔状に開く。内外に丁寧なハケ目調整を行なった後、放射状の暗文を施す。弥生時代終末期から古墳時代はじめにかけての時期に比定される。3は土師器高杯の受部である。4は土師器高杯の脚柱部である。脚をヘラ状の調整具でナデつけ、脚との屈曲部に沈線を巡らせる。5～7は在来系の円筒形器台である。脚部は円錐形でゆるく外反して受部を形成する。何れもタタキ成形によるもので、とくに6は斜め方向のタタキの後、ハケ目調整を行なっていることがわかる。8は土師器で、小型高杯の脚部であろうか。脚柱部に3か所、等間隔の穿孔がある。9は手捏ねの鉢形土器。尖り気味の底部を有する。10は土師器の鉢形土器で、口縁部はゆるく屈曲して外反する。底部外面は、横方向に削りが加えられている。後述する須恵器をともなう時期か。11は器形としては鉢形に近いが、口縁部から胴部にかけて煤を付着していることから小型の甕形土器とした。ゆるく屈曲して外反する口縁部は頸部の横ナデの影響で肥厚している。

12～15は須恵器である。12は小型の直口壺。口縁端部を欠く。肩部にカキ目調整痕あり。13は高杯の受部で、もともと有蓋となるか。脚部以下を欠く。14は高杯の脚部で、長台形の透かしを彫りこむ。13と同一個体となるかは不明。15は提瓶である。体部成形時の回転軸を外した部位に口頸部をとりつけている。ふつう提瓶は肩部に環や鉤、ボタン状の突起を付するが本例にその痕跡はみられない。

木製品　流れAより二又鍬と斧柄の2点が出土した。1は完形品の二又鍬。表面の削り痕がわずかながら観察できる。細かく見れば柄入れ部と又部の中心軸がずれていたり、左右の又幅が異なるなど欠点もあるが、頭部と身部の割合、刃部の作りなどきわめてバランスが整った確かな加工が施されている。樹種はカシであろう。2は斧柄の完形品。厚みのある板材を削り出しており、頭部は板の厚みを残しているが、握り部に向かって次第に丸い断面とし、さらに端部はバットのグリップのように太くしている。頭部には軸に対して斜めに方形透かしを入れている。その幅がきわめて薄く、ここに板状鉄斧を挿入したのか、あるいは板材を入れ、ソケットにして袋状鉄斧を装着したとも考えられる。どちらにしても握り部が細く、衝撃に耐える鋭利な斧が装着されていたのであろう。（常松・力武）

写真33　SD02河川の木製品出土状況（二又鍬）

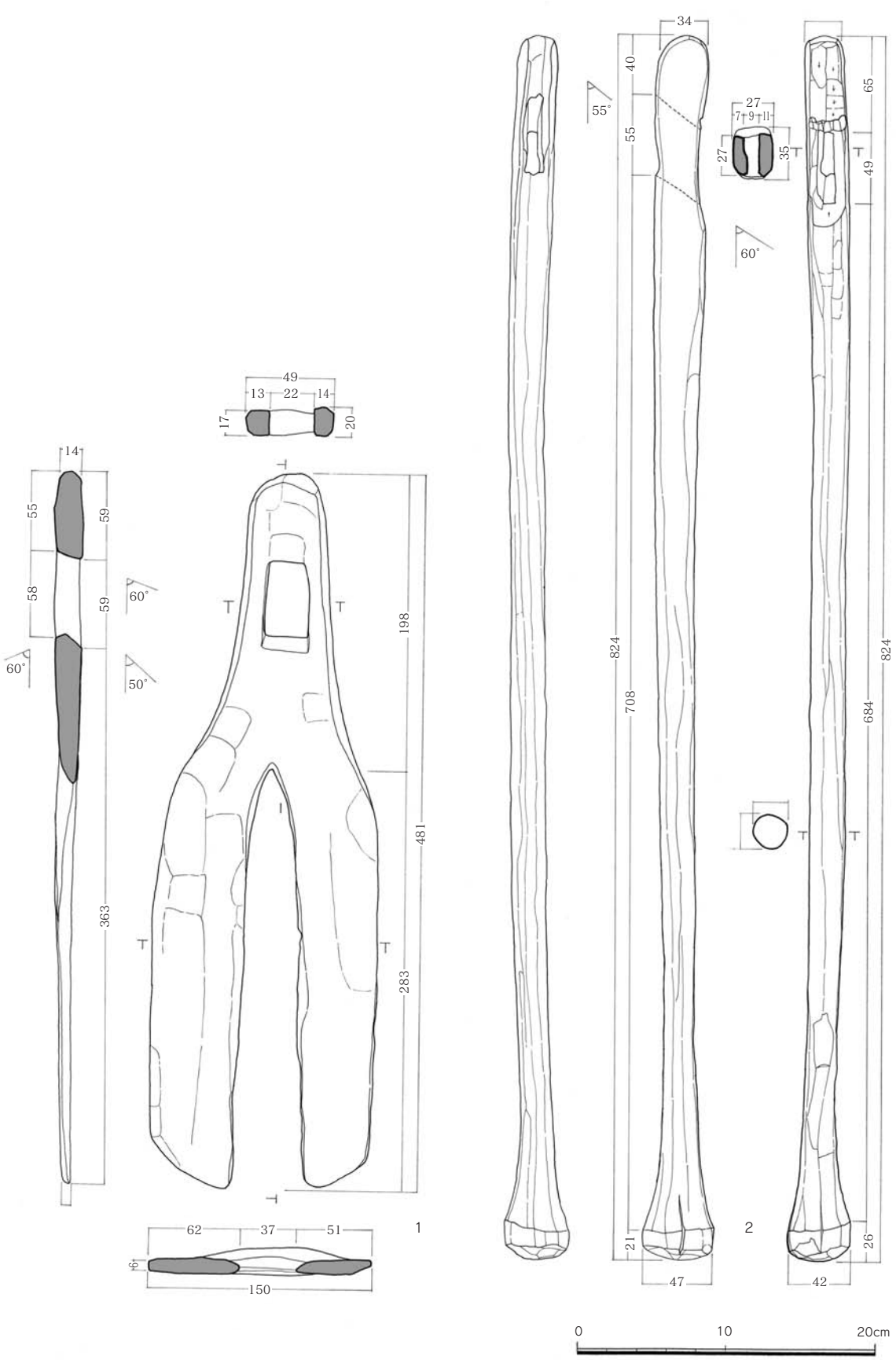


図32　SD02河川の木製品図（1/4）

4．C区の遺構と遺物

調査区東端には、15号支線道路と13号排水路が並んで南北方向に建設されることから、ここをC区とし、幅8m、長さ188mの長いトレンチ状に全面の耕作土を剥ぐことにした。北側から掘り進めたところ、北端より約40mで斜めに横切る細いSD01溝が現れた。無遺物で時期決定が困難だが、これを切って幅約50㎝、深さ約10㎝の細く浅いSD02溝が、さらに南に延びていた。この溝は、次第に幅と深さを増し、途中で緩やかに蛇行して続き、結局全長約140mとなった。その南端では、SK05土壙に達している。溝の他に5か所で大小の落ち込みがあり、これらを土壙とし、北側からSK01～05とした。このうちSK04、05について記す前にC区の遺構検出作業で出土した遺物を図34に示した。（力武）

C区の遺物

1～6は須恵器の坏蓋と坏身で、いずれも律令期に特徴的な器種である。5以外の断面を塗りつぶしていないのは焼成があまいためである。坏蓋は何れも甲高ではなく、下端部を轆轤成形により、つまみ出している。5は高台をもつ坏身。6の底部はヘラ切りの後、丁寧なナデが施されている。7は轆轤成形による土師質の蓋で、つまみ出した下端部は、拓本に示したよう

写真34　C区全景（南より）

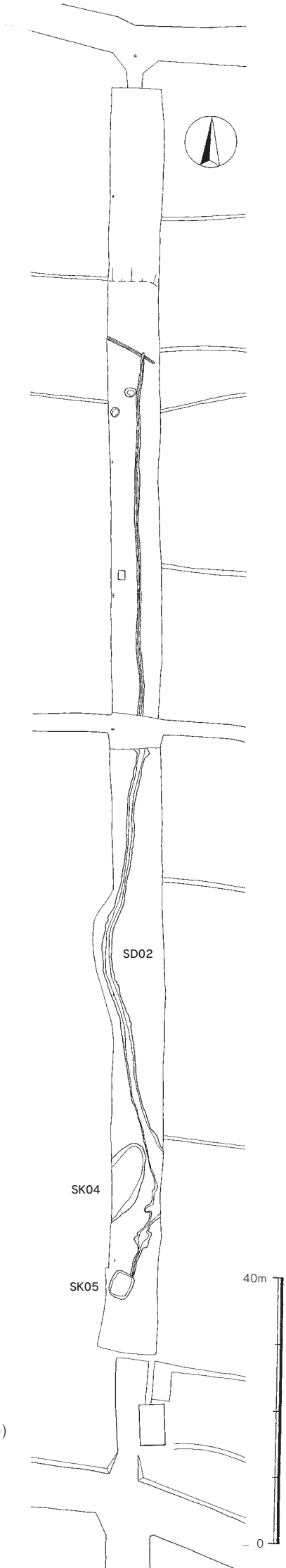


図33　C区全体図（1/800）

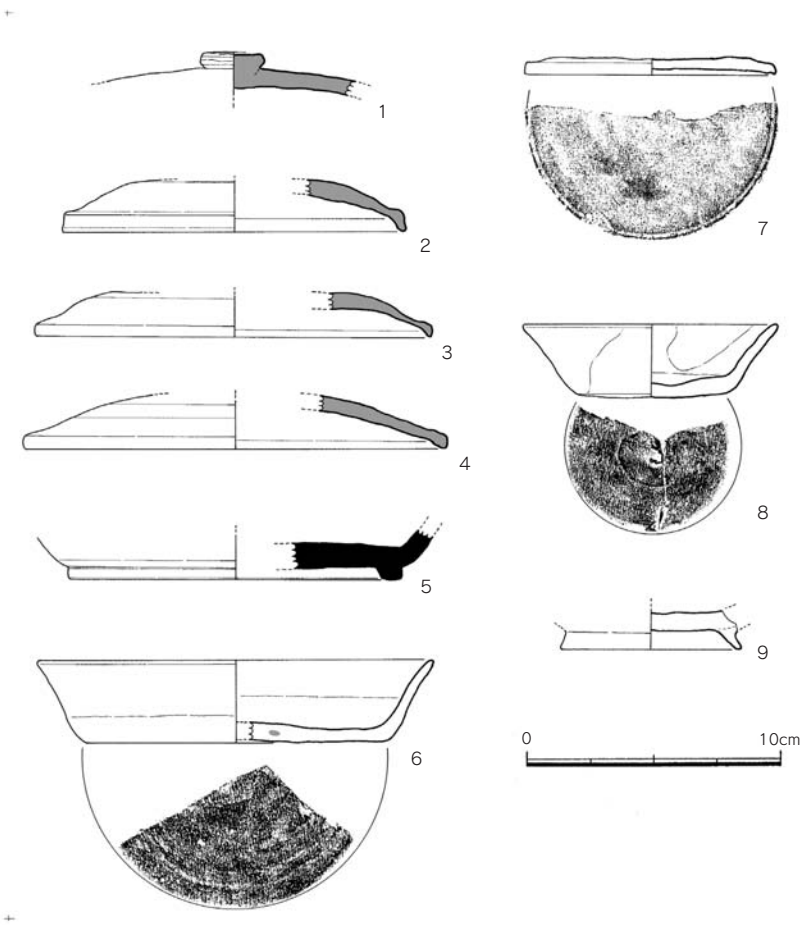


図34　C区の遺物図（1/3）

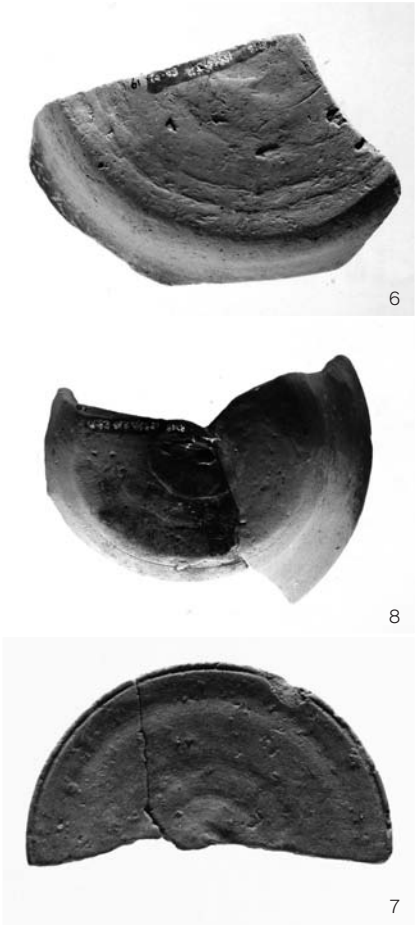


写真35　C区の遺物

に整った弧を描いている。8は土師器の坏で、底部にヘラ切りの痕跡がある。9は黒色土器碗の高台部の破片で、見込みに研磨を加えた痕跡がみられる。（常松）

SK05土壙　細い溝の南端に位置する。平面プランはわずかに南北に長い隅丸長方形。東側長辺3.3m、北側短辺3.0m。四壁は垂直ではなく、断面は逆台形。覆土は褐色土が4層に分かれ、レンズ状にゆるやかに堆積している。底面は北側に向かって傾斜しており、深さは北側が56㎝、南側で42㎝である。この北東隅に溝が接しており、互いの覆土が違わないことから、同時期と判断した。溝は自然の流れによってできあがることもあるが、SK05は明らかに人工的な遺構である。だが上面が削平された可能性を考慮しても、あまりにも浅く、耕作地に配水する十分な水量が確保できたとは疑問である。

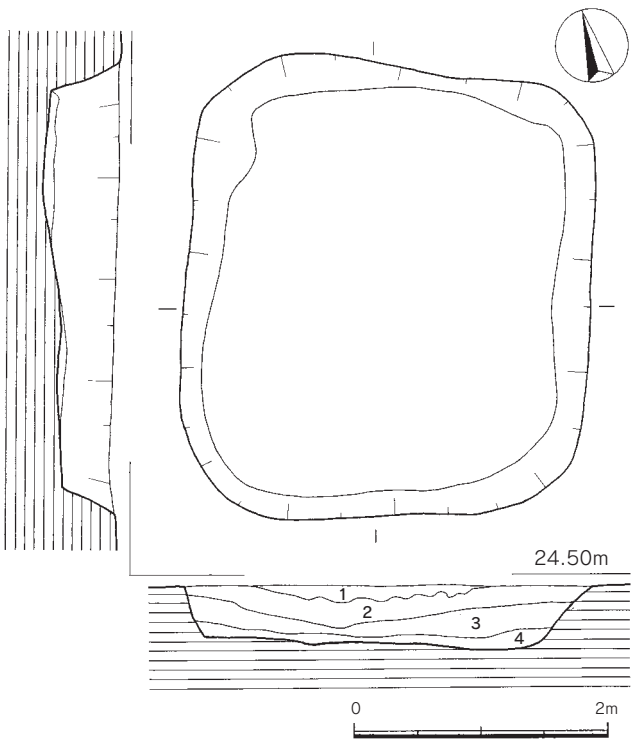


図35　C区SK05土壙図（1/60）

SK04土壙　SK05の北側約8mに位置する。西側は水田の下になり完掘していない。おそらく南西－北東方向の長楕円形の平面プランになるのであろう。長径は約3.2m、短径は約2.4m、中心部の深さは約60㎝であるが、西壁に接して高まりがあり、逆台形の断面にはならない。あるいは自然の凹地の可能性もある。覆土は褐色土で、3点の遺物を図示した。（力武）

SK04土壙の遺物

1・2は弥生後期の壺形土器の破片である。いずれも小片であるため頸部が円筒形か外反するか定かでない。3は内面にヘラケズリを施す土師器で、古墳前期に比定される。

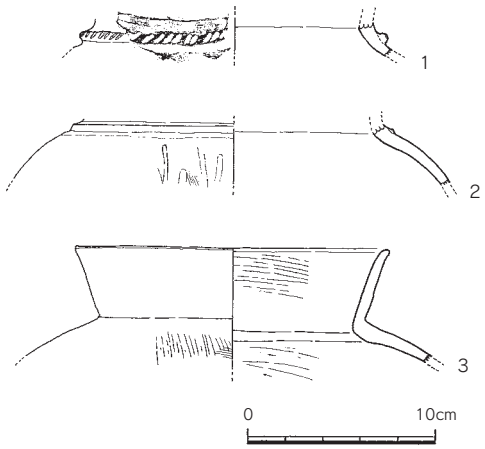


図36　C区SK04土壙の遺物図（1/4）

写真36　C区SK04（北より）

写真37　C区SK04の遺物

その他の遺物

図37は次年度調査区になるが調査区南の道路に沿って設定したトレンチで出土した遺物である。1は土師器甕の把手で、2～4はいずれも中世土器に該当する。5の褐釉陶器も含めて、調査区の南側に中世集落の存在をうかがわせる資料である。（常松）

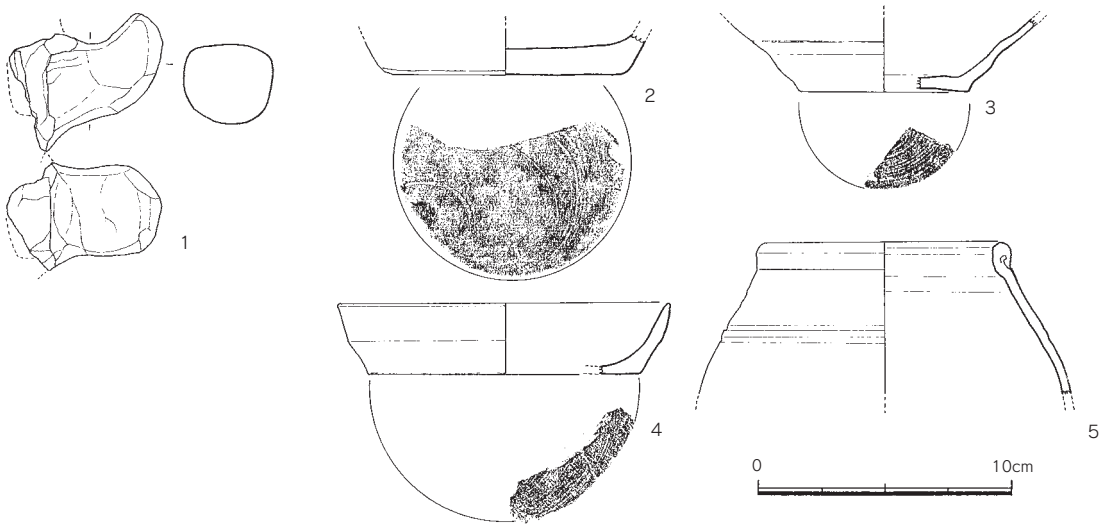


図37　次年度調査区の遺物図（1/3）

表2　弥生時代以降遺物の観察表

挿図番号	遺物番号	器種	調整		色調	胎土	焼成	備考	法量
			外面	内面					
14	1	甕	ナデ	ナデ	灰茶色	1mm大の砂礫を含む	普通	刻目は不明瞭	—
	2	甕	磨滅	磨滅	灰茶色	1～3mm大の砂礫を含む	普通	刻目は不明瞭	—
	3	甕	ナデ	縦方向のナデ	茶色(内)、黒褐色(外)	1～3mm大の砂礫を含む	普通	刻目は鋭く深い	—
	4	甕	条痕か	ナデ	茶色(内)、茶褐色(外)	1～3mm大の砂礫を含む	普通	刻目は鋭く深い	—
	5	甕	磨滅	磨滅	灰茶色	1～3mm大の砂礫を含む	普通	刻目は不明瞭	—
	6	甕	ナデ	ナデ	淡灰茶色	砂粒は少ない	普通	刻目は深さが一定しない	—
	7	甕	磨滅	ナデ	淡茶色(内)、淡茶褐色(外)	1～2mm大の砂礫をわずかに含む	普通	刻目は深い	—
	8	甕	ナデ	ナデ	灰色(内)、赤みのある灰色(外)	1～2mm大の砂礫を含む	普通	刻目は深いが均一ではない	—
	9	甕	磨滅	磨滅	灰茶色(内)、淡茶色(外)	1～2mm大の砂礫を含む	普通	小片のため傾きは要検討	—
	10	甕	ナデ	ハケ目状工具によるナデ	濃茶色(内)、暗褐色(外)	1～2mm大の砂礫をわずかに含む	普通	外面に煤を付す	—
	11	甕	条痕	条痕			普通		—
	12	甕	ナデ	ナデ	灰茶色(内)、灰茶色(外)	砂粒は少ないが、密ではない	普通		—
	13	甕	磨滅	磨滅	灰茶色(内)、灰褐色(外)	1～2mm大の砂礫を含む	普通	刻目はわずかに右下がり	—
	14	甕	磨滅	磨滅	灰茶色(内)、黒色(外)	1～2mm大の砂礫を含む	普通		—
	15	甕	磨滅	ナデ	淡茶色	1mm大の砂礫を含む	普通	刻目はわずかに左下がり	—
	16	甕	ナデ	条痕	茶色(内)、茶黒色(外)	1mm大の砂礫を含む	普通	刻目に棒状の原体を用いる	口径18cm
	17	甕	ナデ	ナデ	灰褐色(内)、黒褐色(外)	砂粒は少ない	堅緻	刻目に半裁竹管状の原体を用いる	口径22.3cm
	18	甕	磨滅	磨滅	黒色(内)、灰茶色(外)	精良	普通	刻目は細い棒状の工具を用いる	—
	19	甕	ナデ	ナデ	灰茶色	砂粒は少ないが、密ではない	普通	刻目の間隔は密	—
15	20	甕	ナデ	ナデ	茶褐色(内)、黒褐色(外)	1mm以下の小砂礫を含む	普通	刻目はわずかに左下がり	—
	21	甕	ナデ	ナデ	黒褐色	1～2mm大の砂礫を含む	普通	刻目は浅く間隔は均一ではない	—
	22	甕	ナデ	ナデ	黒褐色(内)、黒褐色～灰色(外)	1mm以下の小砂礫を含む	普通	刻目は浅く等間隔	—
	23	甕	ナデ	ナデ	灰茶色(内)、黒褐色(外)	1～2mm大の砂礫を含む	普通	刻目は浅く丸味がある	—
	24	甕	磨滅	磨滅	淡灰茶色	1～3mm大の砂礫を含む	普通	刻目は浅く間隔は均一ではない	—
	25	甕	ナデ	ナデ	赤茶色(内)、茶褐色(外)	砂粒は少ないが、密ではない	普通	刻目は口縁上刃しに連なる	—

	26	甕	ナデ	ナデ	淡茶色	わずかに小砂粒を含む	普通	刻目は浅く不明瞭	—
	27	甕	ナデ	ナデ	灰茶色	1～3mm大の砂礫を含む	普通	口縁下端に浅い刻目をめぐらす	口径22.6cm
	28	甕	ナデ	ナデ	灰茶色	1mm大の砂礫を少量含む	普通	刻目に原体の木目が観察される	口径25.2cm
	29	甕	ナデ	ナデ	茶色(内)、茶褐色(外)	1～3mm大の砂礫を多く含む	普通	刻目はない	口径20.2cm
	30	甕	ナデ	ナデ	灰色	1～3mm大の砂礫を含む	普通	刻目は浅い	—
16	31	壷	ナデ	ハケ目→ナデ	灰茶色	砂粒は少ないが精良ではない	普通		口径26.7cm
	32	甕	ナデ	ナデ	茶色(内)、灰色(外)	1～2mm大の砂礫を含む	普通	凸レンズ状の底部	底径5.5cm程度
	33	壷	ハケ目→ナデ	ナデ	灰黒色(内)、灰茶色(外)	1～2mm大の砂礫を含む	普通	凸レンズ状の底部	底径7.4cm程度
	34	壷か甕	ハケ目	ハケ目	淡灰色	砂粒は少ないが精良ではない	普通	木口による連続鋸歯文	—
	35	壷	ハケ目	ハケ目	灰茶色	1mm以下の砂礫を含む	普通	大型の器種だが調整は丁寧	—
	36	壷	ハケ目	ハケ目	灰茶色	砂粒は少ないが精良ではない	良好	大型の器種だが調整は丁寧	口径4.8cm
	37	壷	ハケ目	ハケ目	灰茶色	砂粒は少ないが精良ではない	普通	大型の器種だが調整は丁寧	口径5.0cm
17	38	壷	ハケ目→ナデ	ハケ目	淡褐色	1～3mm大の砂礫を含む	良好		—
	39	直口壷	ハケ目	ハケ目	淡灰色	1～3mm大の砂礫を含む	普通		口径11.8cm
	40	直口壷	ハケ目	ハケ目	淡灰色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径12.5cm
	41	壷	ハケ目→ナデ	ハケ目	暗茶灰色	1～3mm大の砂礫を含む	良好	頚部を打ち欠く	現高約3.0cm
	42	甕	ハケ目	ハケ目	暗茶灰色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		—
	43	直口壷	ハケ目	ハケ目	淡灰色	1～3mm大の砂礫を含む	普通		口径15.4cm
	44	直口壷	ハケ目	ハケ目	灰茶色	1～3mm大の砂礫を含む	普通		口径15cm
	45	甕	ハケ目→ナデ	ハケ目	黒褐色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径17.5cm
	46	甕	タタキ→ナデ	ハケ目→ナデ	褐色(内)、灰褐色(外)	1～2mm大の砂礫を含む	普通		—
18	47	甕	ハケ目	ヘラケズリ	暗灰褐色	1～2mm大の砂礫を含む	普通	黒色の鉱物粒を含む	口径16.3cm
	48	甕	ハケ目	ヘラケズリ	灰褐色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径16.5cm
	49	甕	ハケ目	ヘラケズリ	淡灰褐色	1～2mm大の砂礫を含む	普通	肩部に煤を付す	口径17.2cm
	50	甕	ハケ目	ヘラケズリ	暗灰褐色	1～2mm大の砂礫を含む	普通	口縁端部に褐色の粘土を使用	口径13.6cm、器高22.2cm
	51	甕	ハケ目	ナデ	暗褐色(内)、黄褐色(外)	1～2mm大の砂礫を含む	普通	輪積みの痕跡が明瞭	—
	52	直口壷	ハケ目	ハケ目	暗灰褐色	1～3mm大の砂礫を含む	普通		口径12.8cm
	53	甕	ハケ目	ヘラケズリ	黄灰色	1～3mm大の砂礫を含む	良好		口径14.3cm、器高22cm
	54	甕	ハケ目	ハケ目	茶色	1mm以下の砂礫を含む	普通	在来系の器種	口径17.8cm

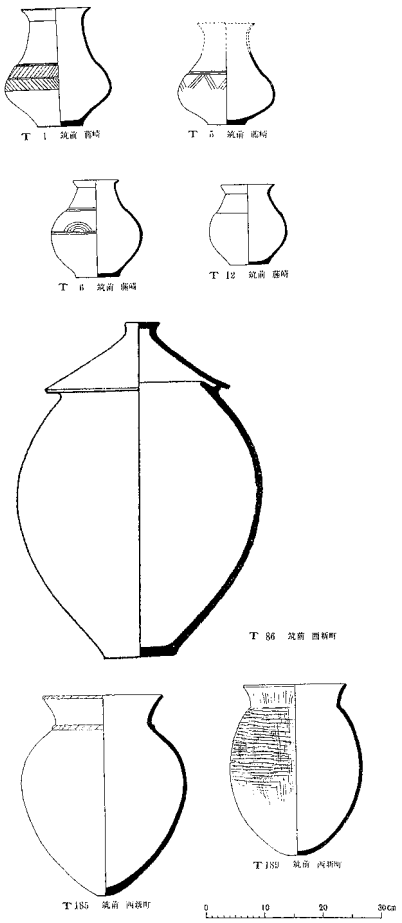
	55	甕	ハケ目	ハケ目	淡褐色	1～3mm大の砂礫を含む	普通	在来系の器種	口径18cm
	56	甕	タタキ→ハケ目	ハケ目	暗灰褐色	1～3mm大の砂礫を含む	普通	在来系の器種	口径20.3cm
	57	甕	ハケ目	ヘラケズリ	暗褐色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径18.2cm、器高27.3cm
19	58	甕	ハケ目	ヘラケズリ		1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径20.5cm
	59	壷	ナデ	ナデ	明褐色	1mm以下の砂礫を含む	普通		—
	60	甕	ハケ目	ヘラケズリ	灰褐色(内)、黒褐色(外)	1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径11cm
	61	壷	ハケ目→ナデ	ナデ	淡褐色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径8cm、器高10cm
	62	壷	ハケ目	ヘラケズリ	明褐色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径9cm
	63	鉢	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	明褐色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径17cm
	64	鉢	ナデ	ハケ目	淡褐色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径20cm
	65	鉢	横研き	ナデ	暗褐色	1mm以下の砂礫を含む	良好		口径12.5cm、器高6.7cm
	66	鉢	ハケ目	ハケ目	黄褐色(内)、淡褐色(外)	1～3mm大の砂礫を含む	普通		口径15.5cm
	67	鉢	ナデ	ナデ	淡灰褐色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径12.5cm、器高6cm
	68	鉢	ハケ目	研き	明褐色(内)、暗褐色(外)	1mm以下の砂礫を含む	普通		口径14.8cm
	69	鉢	ハケ目	ハケ目	明褐色(内)、灰褐色(外)	1～3mm大の砂礫を含む	普通		口径25cm、器高10cm
	70	鉢	手捏ね	手捏ね	茶色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径3.6cm、器高2.5cm
	71	鉢	手捏ね	手捏ね	茶色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径7cm、器高3.7cm
20	72	高　杯	ナデ	ナデ	赤橙色	1mm以下の砂礫を含む	軟質		口径18.6cm
	73	高　杯	ナデ	ナデ	赤橙色	1mm以下の砂礫を含む	軟質		口径17.7cm
	74	高　杯	ハケ目	ナデ	褐色	1mm以下の砂礫を含む	軟質		—
	75	高　杯	ハケ目	ケズリ	赤橙色	1mm以下の砂礫を含む	軟質		—
	76	高　杯	ナデ	ケズリ	明褐色	1mm以下の砂礫を含む	軟質		—
21	77	杯　身	横ナデ	横ナデ	淡灰色	精良	軟質	生焼けの須恵器	口径16.5cm
	78	杯　身	横ナデ	横ナデ	灰色	精良	普通	須恵器	—
	79	甕	横ナデ	横ナデ	灰色	精良	普通	須恵器	口径17.5cm
	80	甕	カキ目→タタキ	横ナデ	灰色	精良	普通	傾きは暫定的	—
	81	高　杯	横ナデ	横ナデ	暗灰色	精良	普通	須恵器	口径24.3cm
	82	高　杯	横ナデ	横ナデ	灰色	精良	普通	須恵器	—
22	83	土師質土器	横ナデ	研き状の横ナデ	赤茶色	精良	普通		口径17.4cm
	84	土師質土器	ハケ目	磨滅	茶色	1mm以下の砂礫を多く含む	普通		口径17cm
	85	土師質土器	横ナデ	ハケ目	灰白色	精良	軟質	鉢か	口径18.5cm
	86	皿	ナデ	ナデ	淡褐色	精良	脆弱	底部は糸切ヘラ切	口径13.5cm
	87	皿	ナデ	ナデ	淡茶色	精良	普通	底部は糸切	口径13.2cm

31	1	壷	ハケ目	ヘラケズリ	淡灰色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径20cm
	2	高　杯	ハケ目→暗文	ハケ目→暗文	明茶色	精良	良好	在来系	口径26cm
	3	高　杯	ナデ	ナデ	明褐色	精良	良好		口径21.5cm
	4	高　杯	ナデ	ナデ	明褐色	1～3mm大の砂礫を含む	普通		—
	5	器　台	ハケ目	ナデ	灰茶色	1～3mm大の砂礫を含む	普通		受部径15cm
	6	器　台	タタキ→ハケ目	ハケ目	淡灰茶色	砂粒は少ない	普通		受部径14.5cm、器高17cm
	7	器　台	ハケ目	ハケ目	淡茶色(内)、淡茶褐色(外)	1～2mm大の砂礫をわずかに含む	普通		—
	8	高　杯	ナデ	ナデ	明褐色	精良	軟質		—
	9	鉢	ナデ	ナデ	暗褐色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		口径9.3cm
	10	鉢	ナデ→ケズリ	ナデ	濃茶色(内)、暗褐色(外)	1～2mm大の砂礫をわずかに含む	普通		口径14.5cm
	11	甕	条痕	条痕	暗黄灰色	1～2mm大の砂礫を含む	普通	外面に煤を付す	口径16.4cm
	12	壷	轆轤成形		青灰色	精良	普通	肩部にカキ目	胴部径11.1cm
	13	高　杯	轆轤成形		青灰色	精良	普通		受部径15.8cm
	14	高　杯	轆轤成形		青灰色	精良	普通	長台形の窓	—
	15	提　瓶	轆轤成形		濃灰色	1～2mm大の砂礫を含む	普通		胴部径17.5cm
34	1	坏　蓋	轆轤成形		淡灰色	1～2mm大の砂礫を含む	普通	須恵器	—
	2	坏　蓋	轆轤成形		濃灰色	精良	普通	須恵器	口径13.6cm
	3	坏　蓋	轆轤成形		灰色	精良	普通	須恵器	口径16.6cm
	4	坏　蓋	轆轤成形		淡灰色	1～3mm大の砂礫を含む	普通	須恵器	口径16.7cm
	5	坏　身	轆轤成形		淡灰色	1～3mm大の砂礫を含む	普通	須恵器	高台径13cm
	6	坏　身	轆轤成形		淡灰茶色	砂粒は少ない	普通	須恵器	口径15.7cm、器高3.2cm
	7	蓋	轆轤成形		淡茶色	砂礫をわずかに含むが精良	普通		口径9.9cm
	8	皿	轆轤成形		淡茶色	精良	軟質		口径10.1cm、器高2.9cm
	9	土器椀	轆轤成形		暗褐色	1～2mm大の砂礫を含む	軟質	内黒土器	高台径7.2cm
36	1	壷	ナデ	ナデ	灰色	精良	普通	弥生後期の壷の一部か	頸部径14.6cm
	2	壷	ナデ	ナデ	茶褐色(内)、茶色(外)	1～3mm大の砂礫を含む	普通	弥生後期の壷の一部か	頸部径17cm
	3	甕	ハケ目	ヘラケズリ	茶色	砂礫少なく密	普通		口径16.5cm
37	1	把手	ナデ		灰白色	砂礫少ないが密ではない	普通		—
	2	土師質土器	轆轤成形		灰茶色	砂礫少なく密	良好	糸切底	底径9.5cm
	3	土師質土器	轆轤成形		明茶色	精良	普通	糸切底	底径6.8cm
	4	皿	轆轤成形		灰茶色	精良	普通	糸切底	底径9.7cm
	5	陶製壷	轆轤成形		褐釉、小豆色を帯びた灰色	砂礫少なく密	堅緻	口縁部は折り返しで形成	口径10cm

5．小　結　（弥生時代～古墳時代前期の早良平野）

入部地区圃場整備事業に伴う発掘調査は、本書で扱う1次調査の昭和62年度から平成7年度までの9次に渡って実施した。事業範囲は、室見川上流域の南北2km、東西は広い工事区間で1kmという広大な面積で、全調査面積は約22haを超している。それまでの吉武・飯盛地区圃場整備事業地の調査成果や2001年度から着手した金武地区農村振興総合整備統合補助事業地の調査成果を踏まえると、早良平野の埋蔵文化財に関する情報はここ数年で飛躍的に増大した。

1次調査で検出した弥生時代～古墳時代の遺構は、南北に貫流する河道と井堰や護岸遺構が主体をなしている。検出された土器から河道が機能した期間を推定すると、水稲耕作の開始期にあたる突帯文土器から板付式の古段階と、弥生後期中頃でも後半に近い時期から古墳時代前期にかけての二つの時期に大別される。本例のような支線的な河道は、周辺調査でも検出されており、扇状地には通有のものと思われる。1次調査北側の四箇遺跡24次の調査で検出された流路も出土遺物に時期差はあるが、遺構の性格としては同列にとらえることができるのだろう。入部地区のこれまでの調査成果を踏まえ、弥生時代から古墳前期の様相を概観し、合わせて早良平野での弥生時代研究の進展についても触れてまとめとする。



弥生式土器聚成図録に掲載された西新町・藤崎出土の土器（小林1938より）

調査の歩み－1　早良平野で弥生時代の遺跡が知られるようになるのは、早く市街地となった博多湾岸である。西新から藤崎にかけての砂丘遺跡で出土した土器は、弥生土器研究の最初の基礎的な業績である『弥生式土器聚成図録』（小林行雄編1938年　東京考古学会）に複数掲載されている。それら資料の多くは、70年を経た今日も九州大学や東京国立博物館の所蔵品として保管されている。当時資料を調査した森本六爾や小林行雄は、今日の日本考古学の地均しを行った人々である。そうした先達と同じ資料を手にできることは、研究を志す者にとって、運良く戦災を免れた土器、という以上の意味をもっている。

調査の対象が室見川上流域に目が向けられるようになるのは、戦後20年を経た頃である。博多湾岸から3㎞に位置する独立丘陵、有田遺跡群の区画整理にともなう調査を契機として九州大学考古学研究室が主体となって実施した通算5度にわたる総合調査であった（福岡市埋蔵文化財調査報告書第2集　以下号集のみ表記）。この時すでに、弥生時代から律令期に至る主要な地点について概要が明らかにされた。

有田遺跡の報告書の結びで森貞次郎は、早良平野の弥生遺跡を概観し、遺跡の分布域を（1）海岸の砂丘地帯、（2）山麓の丘陵地帯や扇状地、（3）室見川の広い沖積平野の3つに大別し、これに独立丘陵に立地する有田遺跡（4）を加えて整理した。

（1）藤崎・西新町・城ノ原　ラグーン地帯の縁辺として、初期稲作文化の定着に適した立地。その後も引き続き集落が営まれるが発展性に乏しい。

(2) **飯倉・白塔・都地**　洪積層の低位丘陵の縁辺に、前期末以降の集落が営まれ、飯盛山麓の大扇状地末端には後期終末前後の遺跡が顕著。

(3) **四箇**　集落を形成する低い洪積丘陵あるいは微高地に欠しく、標高20mをこえる高位扇状地にはじめて集落遺跡が認められる。

(4) **有田**　有田遺跡の位置する洪積層の独立丘陵は、北側の標高5m付近まで当時のラグーン地帯とみられ、西側の室見川の氾濫原は、一部に沼沢・荒地を残していた。1や2の集落としての性格を合わせ持ち、砂丘・ラグーン地帯と山麓地帯の接点をなす遺跡である。伝聞を含めて有田遺跡群で3口の青銅の武器が出土したことは、平野内の優位性を物語るものだが、大集落群が形成されるだけの可耕地帯をもたなかった。

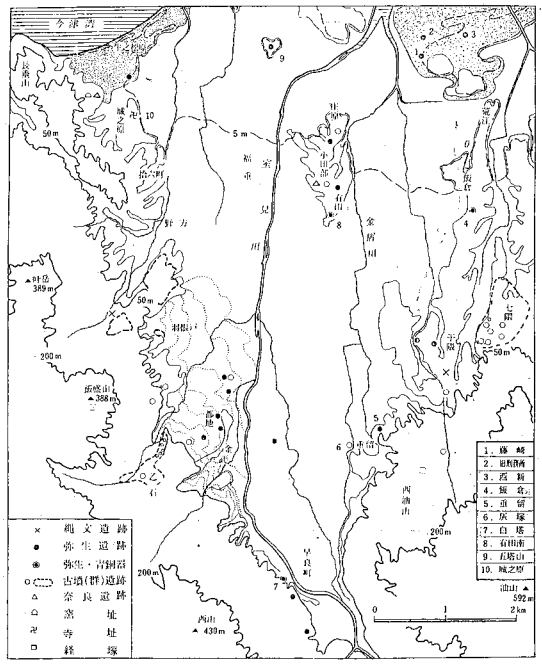


図38　早良平野の地形と遺跡

以上が平野の立地ごとにまとめられた所見である。これに青銅武器と銅鏡の出土例、前方後円墳の数を重ね、東西に隣接する奴国や伊都国とくらべてその数量が少ない理由として、室見川扇状地の中央部が低平多湿で、土地が肥えておらず拠点となるべき洪積台地や高燥な堆積面がなかったことが有力な集落を成長させるうえでマイナスに作用したことがあげられた。さらに水陸交通上あるいは産業資源の受容の上で拠点となる条件を備えていなかったことも後に権力成長を阻害した要因とされた。

また周辺域との関係では、奴国や伊都国という有力な共同体組織が形成されると、その中間地点の自立性が弱体化することを、早良平野の権力成長を阻害した要因にあげられた。

調査の歩み－2　以上の所見は、森が調査事例の少ない中で提示した1960年代のテーゼである。70年代の地下鉄1号線の建設は、西新・藤崎の（1）海岸の砂丘地帯を横断するトレンチを設定するものであった。80年代の吉武・飯盛地区の圃場整備事業を契機とする調査は、(2) 山麓の丘陵地帯や扇状地を面的に明らかにした。80年代から90年代にかけて実施された入部地区の圃場整備事業は（3）室見川の沖積平野の様相を解き明かすものとなった。有田遺跡群が位置する丘陵部（4）は、70年代以後の開発にともないこれまで200次を超える調査が継続してきた。

こうして森が有田遺跡の結びで提示したテーゼは、20年あまりの歳月をかけて順次検証されることになる。ここでは（1）墓制からみた早良平野、(2) 水田と農業土木、(3) 弥生後期～古墳時代の様相を中心に振り返ってみる。

1．墓制からみた早良平野

80年代の吉武・飯盛地区の圃場整備事業を契機として、従来の青銅器や玉類の分布を大幅に塗りかえる発見が相次いだ。さらに市街地の開発や郊外の基盤整備事業によって北部九州における平野内の墓地の位置づけがなされた（表1）。

弥生時代の墓制についてⅠ 前期、II 中期初頭、Ⅲ 中期前葉、Ⅳ 中期中葉、Ⅴ 中期後葉の時期区分で早良平野の様相を俯瞰する。

A 東入部遺跡（6区）・台地の縁辺に沿うように分布する土器棺墓群。壷と突帯文土器のセットや墓壙内に副葬された土器など早良平野における弥生時代はじめの様相をしめしている。上部構造が支石墓であったかは不明（613集）。

B 吉武高木遺跡・・・・個々の墓地に標石などの施設があったことは隣接する墓壙どうしが切り合っていないことからも明らかである。列墓の分布形態をとる区画墓といえよう。青銅器および装身具類の内容によって、中核墓と周縁墓に区分することが可能である（461集）。

C 吉武大石遺跡・・・・吉武高木遺跡の北に位置する列墓。個々の墓地構造は吉武高木にくらべて規模は小さい。石剣先端部の出土数が目立っている。吉武高木遺跡とほぼ同数の青銅利器を保有するが、装身具が確認されたのは1基にとどまる（461集）。

D 吉武樋渡遺跡・・・・Ⅳ期に造営された吉武樋渡遺跡の区画墓は、3m程度の墳丘を有するもので、青銅器から鉄器へ移行する段階の副葬遺物が集中している。墳丘をもつ区画墓に20基ほどの埋葬施設がのこる。青銅器や鉄器類を分散所有する。Ⅴ期の甕棺墓に小型の漢式鏡を副葬する（461集）。

E 東入部遺跡（8区）・II期段階から100基あまりからなる列墓を形成し木棺墓と甕棺墓各1基に細形銅剣を副葬する。Ⅳ・Ⅴ期になると列墓の南北にそれぞれ区画墓を形成する。北側の区画墓内は鉄器を副葬する系列墓4基を含むが、南側の区画墓に副葬遺物はみられない（652集）。

F 浦江遺跡5次・・・・Ⅳ期段階に築造された区画墓。26基の甕棺墓の多くは共通の方向性で整然と配されており、南東部に陸橋をもつ。5つ程度にグルーピングできる系列墓であろう。金属器などの副葬遺物は保有しない（863集）。

G 野方久保遺跡2次・・II期の甕棺墓2基から銅剣が出土した。そのひとつには把頭飾がともなう。城ノ越期の様相を示す稀少な事例である（863集）。

弥生前期の様相

早良平野において前期の壷棺を用いた墓群としては、室見川中流域右岸の田村遺跡5次調査が数少ない事例であった。ただ墓群は削平のため副葬小壷の在否は不明だった。入部の圃場整備では、3次の重留遺跡群の調査で、上甕に突帯文系の土器を用いる墓群の存在と墓壙内に副葬小壷が確認された。（268集）。東入部遺跡（6区）の上甕は、如意状に外反しておらず田村遺跡や重留遺跡群より古相を呈しており、夜臼Ⅰ式～II式にかけて継続したと考えられる（613集）。

中核墓と周縁墓

吉武高木遺跡の発見は、弥生中期初頭の青銅器や玉類が集中する特定集団墓の様相をはじめて明らかにした。吉武高木では、個々の墓地に標石などの外標施設があったことは隣接する墓壙どうしが切り合っていないことから推測される。大型の埋葬施設を構成する10基の甕棺墓と4基の木棺墓の位置をみると、木棺墓どうしは隣りあうことなく、ある程度距離をおいて分布している。そこで大型墓群のなかでも墓の構造や出土遺物の内容から、手厚く葬られた墓、「厚葬墓」とよばれるものを選び出してみよう。

木棺墓では、2号と3号が青銅器と翡翠の勾玉を含む装身具を保有しているという点で優位である。以上4基の埋葬施設は、大型墓群のなかで中核をなす存在として位置づけることができる（以後これらを中核墓とよぶ）。4基の主軸は、北東に36°から51°までわずか15°の範囲におさまっている。なかでも、3号木棺墓の被葬者は、副葬品の豊富さでは群を抜いている。

次いで117号甕棺墓と2号木棺墓は、墓壙の規模や構造から厚葬墓の傾向がみられる。111号甕棺墓、109号甕棺墓のように管玉の装身具だけをもつ被葬者は、女性であろうが、中核に近い位置にあることは、装身具を保有する人物の階層性の高さを示している。

中核墓の周囲には、銅剣を一振り副葬するが、装身具は持たない埋葬施設が付随している。これらは、墓壙の規模や構造ともに小さく、標石などの施設もコンパクトだったと考えられる。また墓の主軸方向は、北東に17°から46°まで、31°の範囲に及んでおり、中核の墓群を意識しながらも墓の方向性に厳密さが欠ける傾向がある。これらを中核墓群に対して「周縁墓群」とよぶ。中核墓を挟んで東西に対峙する1号木棺墓と4号木棺墓は、同列に配された木棺墓であり、細形銅剣を副葬する100号甕棺墓と115号・116号甕棺墓が対称的な位置にあることは、こうした墓群の規制を反映したものといえよう。

吉武樋渡遺跡

吉武樋渡遺跡の墳丘は、後世の撹乱で削平をうけていたが甕棺墓の分布と土層断面から南北27m、東西20mの長方形プランの規模と推定される。墳丘下で検出されたのは、甕棺墓30基、そして木棺墓と石棺墓各1基である。このうち甕棺墓6基と木棺墓から副葬品が出土した。墳丘墓で検出された甕棺は、Ⅳ期からⅤ期にかけての時期である。Ⅳ期の甕棺から出土した銅剣は、刳り方部の研ぎ出しが長いものや、関の端部を尖鋭に調整するなど吉武高木の初期青銅器とは異なる特徴がみられる。

また副葬品の構成として注目されるのは、Ⅳ期の段階は銅剣に鉄製武器が加わり、続くⅤ期の段階は鉄製の武器に加えて前漢の鏡「重圏文星雲鏡」が検出された。したがって墳丘の築造は、楽浪郡が置かれ、北部九州に前漢の文物が流入する前1世紀の古段階頃には始まっていたと考えられる。

吉野ヶ里遺跡の墳丘墓が築かれたのはⅢ期で、樋渡の築造時期を1段階さかのぼる（『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第132集佐賀県教育委員会1997）。樋渡の墳丘墓の後半期には、早良平野の東西に須玖岡本D地点や三雲南小路遺跡のような前漢鏡を大量副葬する厚葬墓が登場する。だが樋渡の銅鏡は小型で、墳丘墓の他の甕棺墓にも装身具類は一切伴っておらず、いまだ集団墓の域を脱してはいなかった。

埋葬方位の特性

弥生中期中頃の区画墓である浦江遺跡の報告は、区画の内外をつなぐ陸橋が甕棺墓群の方向性に影響を与えた例として注目される。区画内の墓壙の掘り込みは差し違えているものが多い。挿入方向は北からが9基、南からが11基、どちらともいえないもの4基である。

同じ早良平野の吉武高木遺跡の大型墓群には、二つの原理が看取される。まず、副葬品をもつ甕棺墓と木棺墓の主軸方向が北東方向に15°から51°の範囲におさまる点があげられ、これは墓の方向性に一定の規制がはたらいたことを示している。そしてもう一つは、武器をもつ被葬者の頭位が、すべて北東を向いていることである。

佐賀県の朝日北遺跡（旧神碕町）5区では、弥生中期の同型式の甕棺墓2基が並ぶ写真で知られる。両者の埋葬は同時期で、西の53号には熟年男性、東の54号は熟年女性が葬られていた。ここでは甕棺の向きは同じだが、男性の頭位が南、女性が北で全く逆を向いている（『朝日北遺跡』佐賀県文化財調査報告書第110集1992佐賀県教育委員会）。

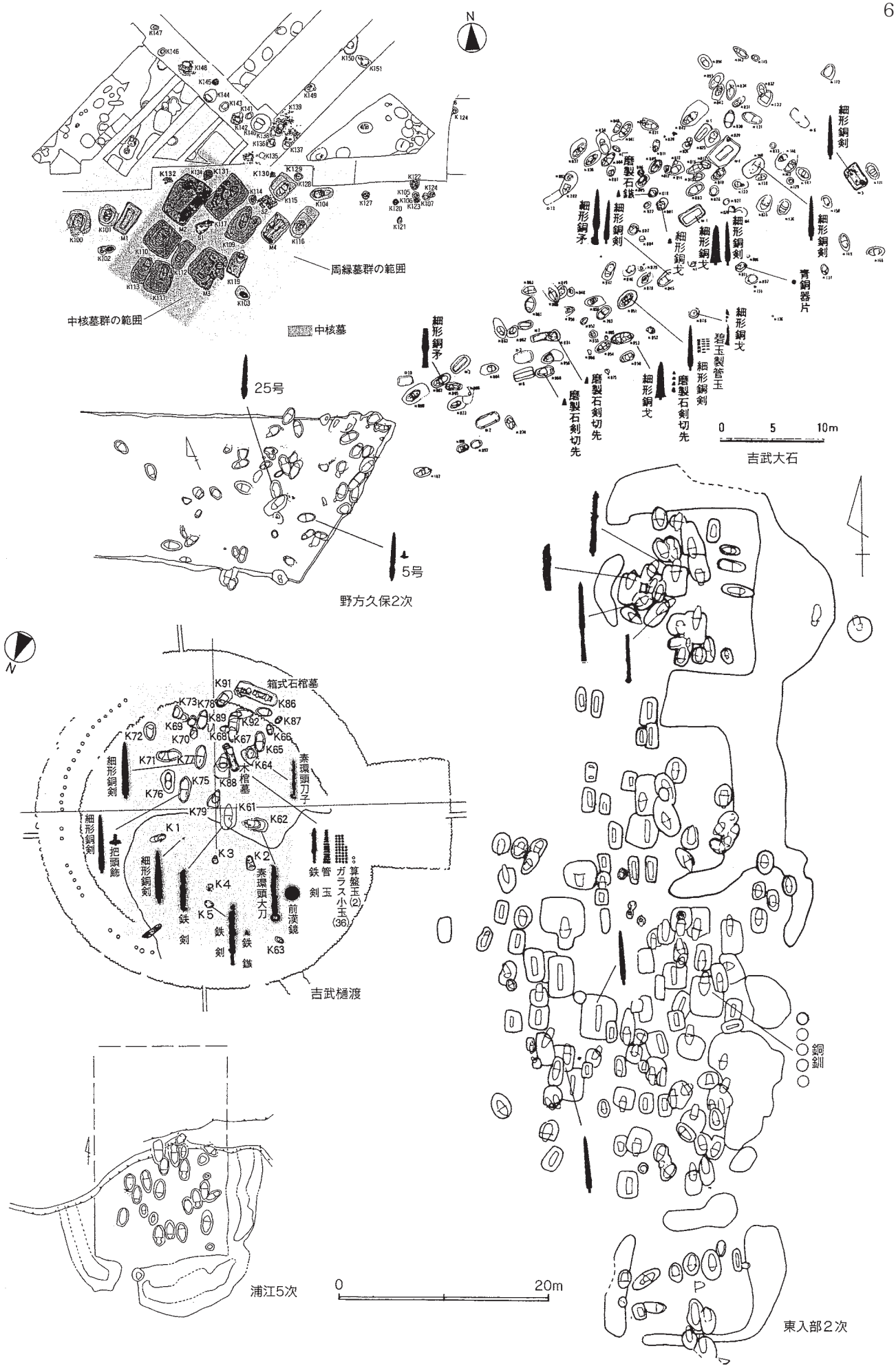
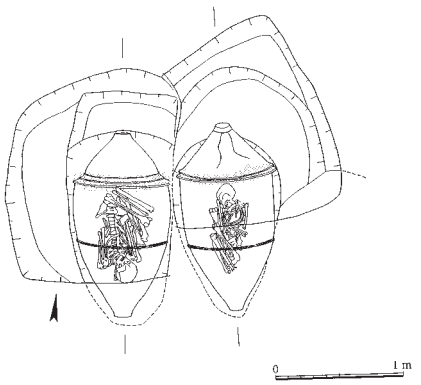
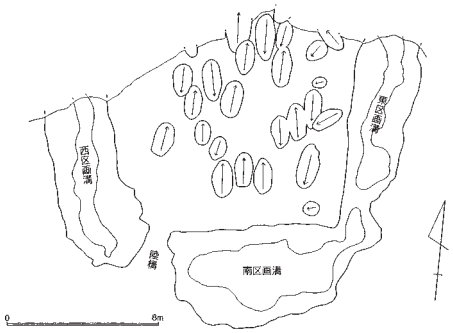


図39　早良平野における墓群の構成（1/500）

これまでの調査によって南海産の貝であるゴホウラの腕輪は男性、イモガイは女性というように素材によって男女が区別されている場合がある。さらに武器は男性被葬者にともなうことが多く、小型銅鏡は女性被葬者の持ち物というような発掘例が確認されている。そうした事例を浦江遺跡に適用すれば、甕棺の挿入方向は、性別によって方位が規制されたと推定される。



朝日北遺跡5区　53号♂・54号♀甕棺



浦江遺跡5次調査　甕棺墓挿入方向

図40　埋葬方位の特性

早良平野の墓制と課題

藤崎・西新町遺跡で検出された300基を超える墓群すべてを集団墓として包括するには集落域の実態解明がまたれる。墓群の造営に集団墓というより共同墓地的な要素が含まれているのかもしれない（62・137・138・824集ほか）。

ただ西新町遺跡では弥生中期の集落の所在が長く不明であったが、砂丘南西部の8次調査で円形プランの住居跡が検出されて以来、後背部のラグーン状の低湿地寄りで住居跡の存在が確認された。今後の居住域の広がりに注目したい（505・846集）。

砂丘の後背地の低丘陵や段丘に分布する野方久保、飯倉唐木（387集）、有田（2集）の各遺跡では中期前葉までは銅剣や銅戈が単発的に副葬される。かつて北部九州の甕棺墓に副葬された青銅器は、その希少性から有力者の象徴とみなされてきた。のちにこの問題は、どの遺跡を以って王墓の条件とするかというテーマに置き換えられた。多鈕細文鏡のように祭器であっても宝器とはいえない事例があるように副葬品の有無だけで遺跡の優劣が論じるには限界があるようだ。

東入部遺跡は、溝で区画された構造上類似した墓群でも、ひとつ河川や丘陵を隔てただけで状況は一変する（652・863集）。銅剣や銅矛の有無から言えるのは、青銅器をネットワークとする集団かどうかの判断材料が提供されたということで、それ以上の評価はできないのかもしれない。青銅器以外に鉄、翡翠などの玉類、南海産の貝、絹布、漆器、水銀朱など有機質、無機質のさまざまなネットワークが絡み合っていたと考えられるからである。であるなら副葬品や装身具の多寡による対比から導き出される所見には、十分な注意すべきであろう。

2．水田と農業土木

西日本の発掘調査で検出される水路や堰など灌漑施設を含む初期水田の在り方が、当初から完成されたスタイルであったと言われて久しい。これは大陸系磨製石器をともなう水稲耕作の伝播が、単に稲作のノウハウを吸収したというより、ヒトの移動を前提としてはじめて可能になったとされるためである。こうした説には、北部九州から山口にかけての弥生人骨の形質に、縄文人や後の古墳時代の人々と比べて高身長の傾向がみられるという人類学上のデータも後押しするかたちとなっている。

初期水田において、河川から一旦水路に導水した溝に設けられた井堰は、弥生中期後葉から古墳時

代になると河川にU字型にふくらみをもつ井堰を直接築くようになる。時として全長30m余りにもなる杭列が流路にそって幾重にも構築され、それら杭列が水流や水位を調整することによって幹線水路と連係した、より大がかりな取排水が可能となったのである。井堰に連結した灌漑施設として　河川（大型水路）→幹線水路→支線水路→水田　というルートが想定され、各矢印→部分には水路の規模に応じた井堰や取水口が位置する。ここでは早良平野を主体に水田や生産にかかわる事例を紹介する。

初期水田の構造　初期の埋没水田の構造について山崎純男は、「板付・野多目遺跡に代表される段丘上に形成された給水を主目的とする水路をともなう類型　1型」と「菜畑遺跡に代表される丘陵裾の谷部に開析された排水を主目的とする水路をともなう類型　2型」に分類した（「北部九州における初期水田」『日本における初期弥生文化の成立』1991）。

さらに田崎博之は、土壌環境の地下水位の高低を基準とする「地下水型」、「中間型」、「表面水型」という区分を加え、次の5類型に分類した。

初期水田の類型（田崎論文をもとに作表）

水田類型	地形・土壌環境	水路の有無および性格	埋没水田例
Ⅰa型	表面水型	有（給水主体）	野多目遺跡・岩本遺跡3次・笠抜遺跡SD5
Ⅰb型	中間型	有（給排水兼用）	板付遺跡G-7a・b区
Ⅰc型	地下水型	有（排水主体）	菜畑遺跡・拾六町平田遺跡1次
Ⅱa型	地下水型	無（土地環境利用型）	坂本A遺跡
Ⅱb型	地下水型	無（自然地形改変型）	比恵遺跡4次

このなかで地下水型は強湿田～湿田、中間型は半湿田、表面水型は半乾田～乾田に相当する。しかし突帯文期から弥生時代に移行する時期、両極にある強湿田や乾田は検出されていない。田崎はⅠ型を、大陸から伝播した水田稲作農耕を特徴づける水田類型とし、Ⅱ型を縄文時代後期～晩期中頃の初期農耕段階の生産形態を残したものと考えた（「福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発」『福岡平野の環境と遺跡立地』1998）。開田地選択の幅は、Ⅰ型の水田類型の浸透によって広がり、水田稲作農耕の定着が一気に達成されたと理解したのである。

このうちⅡ型は、地形条件の利用形態を象徴する水田区画をもとに二つに分類される。南九州の初期水田とされる坂本A遺跡（「横市地区遺跡群」『都城市文化財調査報告書第55集』2001　都城市教育委員会）は自然地形上もっとも低く水が溜まりやすい場所を不整楕円形に区画し、周囲を取り囲むように畦畔を設けて数枚の水田を造成している(都城市2001)。一方、比恵遺跡4次調査の水田は、自然地形の凹凸を畦畔で解消し、人工的に平坦な水田面が造成された例とした（田崎博之「日本列島の水田稲作」『東アジアの考古学Ⅳ－生業－』2002）。

早良平野における突帯文期の様相　有田の独立丘陵をめぐるV字状溝から出土した土器は、早良平野において初めての突帯文期のまとまった資料だった。有田遺跡南西の標高7mの丘陵後背部に立地する有田七田前遺跡では、突帯文単純期の遺物包含層が確認された。この中には朝鮮系無文土器や石包丁、磨製石鏃なども含まれており、大陸との交流を示す資料として注目された（95集）。

平野内の突帯文土器は、牟多田遺跡（27集）、鶴町遺跡（37集）、原談儀遺跡（492集）、拾六町ツイジ遺跡（92集）、石丸・古川遺跡（住宅都市1982）の調査によって、室見川中・下流域の沖積地における分布が明らかになってきた。有田遺跡のV字状溝は、80年代後半までの調査によって南北約300m、東西200m規模の楕円形を呈することが明らかとなった（234集）。

同時期の福岡平野をみると、板付遺跡の二重環濠の外濠は、もともと南北に延びる舌状の丘陵を掘削して横断する水路を設置したものである。さらに板付遺跡南西の笠抜遺跡では、水田面は削平のため残っていないが、調査区南端で南東方向に湾曲する総延長160mにわたる突帯文期の溝が確認された（752集）。吉留秀敏は、笠抜遺跡と寺島遺跡が同一の丘陵を横断する溝によって分かたれたものであることを明らかにした（「水稲農耕導入期の灌漑技術」『福岡大学考古学論集』2004）。

こうして福岡平野では、低位段丘上に集落域をおき、その両側に可耕地を広げるという経営が、突帯文土器の新段階には実施されていた。

入部地区の圃場整備では重留遺跡群の用排水路にかかる調査で、突帯文期の断面Y字の溝が検出された。舌状の丘陵を横断するという点では、笠抜遺跡に近い性格の遺構である可能性がある（268集）。室見川上流域でも、福岡平野と同様の土木技術が採用されていることは突帯文期の水田経営を考えるうえで重要である。

早良平野の治水　突帯文期から弥生前期の治水について考えるとき、Ⅰ型の初期水田が大陸系の土木技術の影響下に成立したとされることから、韓半島南部は有力な候補地となる。しかし韓国内で検出された希少な初期水田と九州北部の事例を比べると、畑作への依存度など水田経営の状況は必ずしも一様とはいえない。加えて石器の型式や後の木器組成の違いが生業のどのような差異を反映しているのか、解明すべき課題は多い。

溜井については韓半島の類例は少ないが、麻田里遺跡C地区(忠清南道論山郡)の丘陵裾部の谷底に掘削された土壙があげられる(田崎博之「朝鮮半島の初期水田稲作」『韓半島考古学論叢』2002)。時期は無文土器時代の中期とされることから北部九州の溜井に先行する可能性が高く、溜井についても系譜は大陸に求められる公算がつよい。溜井とされる遺構は、東区の三苫永浦（476集）と博多区の比恵遺跡群（255集）内陸部の筑後市などで確認されている（「津島九反坪遺跡」『筑後市文化財調査報告書第42集』2002　筑後市教育委員会）。大型土壙の平面プランは立地条件に左右されるため土留や暗渠溝など構造を含めて検討する必要がある。

弥生中期は、前期に形成・定着した集落から小規模な集団が新たな可耕地をもとめて分出された時期と言われてきた。その要因として集落の人口圧が従来の居住スペースの許容量を超えたことや水田稲作による食糧の再生産に付随する問題が指摘されている。

中期後葉になると、拠点的な中心集落の周囲に衛星的な集団が形成されるようになる。この時期の北部九州の集団墓は列埋葬から集塊状を呈する系列墓へ移行し、同時に銅鏡や鉄器などの漢式系遺物をネットワークとする集団間の階層構造として顕在化する。その図式の頂点に位置するのが奴国や伊都国の首長層であり、彼らがいだいた皇帝を頂点とする冊封体制への志向性は、厚葬墓に集中する副葬遺物に象徴される。中期後半が首長制社会形成期の節目として位置づけられる所以であり、首長層の内憂のひとつは治水問題で占められたであろう。

弥生中期後葉以降、福岡平野や早良平野の河川（大型水路）では、井堰の機能をもつ杭列群が上流に向かってU字型に築かれるようになる（196・536集）。そして水田開発の対象は沖積低地にとどまらず、さらに丘陵部に及んでいたことが、浦江遺跡5次調査の丘陵裾の尾根筋を掘削した取排水用の幹線水路から伺える（874集）。水田の立地は平野部から丘陵部へと広がり、景観が大きく様変わりしたことを物語っている。

3．弥生後期～古墳時代の様相

弥生終末期を表徴する西新式の名の由来となった西新町遺跡から藤崎遺跡は、早良平野に面した博多湾岸に形成された砂丘遺跡であり、東区箱崎から早良区百道にかけて延びる粒子の粗い海浜砂層（箱崎砂層）に細かな風成砂が堆積したものである。陸側の後背部は、ラグーン状の低湿地で、内陸部とも異なる一種独特の景観を呈していた。前方は海、後方は湿地、砂丘の所々に植物が自生する風景をイメージすることができる。

藤崎遺跡の西を流れる室見川、さらにその西の砂丘に営まれた姪浜遺跡においても調査が行われ、朝鮮系無文土器や三稜鏃などの遺物が検出された（478集）。

弥生後期～古墳時代にかけての土器相

土器相	土器棺	橋口編年	埋葬施設	漢鏡編年	参考年代
高三潴式(古)	(+)	KⅣa･b	井原鑓溝	漢鏡4期	(+)
高三潴式(新)	三津式	KⅣc	三津永田104号	漢鏡5期	上限64A.D.
下大隈式(古)	(+)		飯氏7号	漢鏡5期	(+)
下大隈式(新)	神在式	KⅤa	(+)	(+)	100A.D.+33+α
西新ⅠA期 西新ⅠB期	福井式	KⅤc	三雲寺口1号	漢鏡6期	(+)
西新ⅡA期 西新ⅡB期		KⅤd･f	津古生掛 祇園山1号	漢鏡6･7期	(+)
ⅢA期	山陰系二重口縁土器				

弥生中期後半を境に西新町・藤崎遺跡の遺構は途絶える。砂丘上に再び集落が営まれるようになるのは、西新ⅠA期にさしかかる時期である。藤崎遺跡の特殊性は、西新ⅡA期からⅢA期の方形周溝墓に大型の盤龍鏡や三角縁二神二車馬鏡をはじめとする銅鏡が副葬されていることである（80・824集）。被葬者が畿内・瀬戸内・韓半島を結ぶ交易に貢献したであろうことは、湾岸の砂丘に立地することや鏡の分有関係からも推測される。定型化した前方後円墳ではなく、主体部の構造も箱式石棺墓や組合せ式木棺墓である点で、基幹水系を支配する盟主層とは性格を違えている。

被葬者の使命は、畿内への安定的な鉄素材の確保であり、その目的のために湾岸部の「市」である西新町遺跡において交易を管理・掌握したと考えられる。西新町遺跡5次調査で出土した板状鉄斧は、主力商品が中継地に留まった希な事例である（375集）。西新ⅡB期からⅢA期にかけての西新町遺跡の資料は布留式甕や山陰系土器に加え多量の韓半島南部の土器を伴っている。陶質土器の流入は、住居跡に竈が付設するのと連動するもので、渡来人の集住域としての性格をうかがわせる（福岡県72～208集）。西新町遺跡の集落は、ⅢA期以降になると衰退する。その要因として、鉄素材の搬入が倭人伝ルートから宗像ルートへ移管されたことが考えられる。倭人伝ルートは、対馬から壱岐、唐津をとおり、糸島や博多湾を経由するルートで、宗像ルートは、現在の北九州市の西から対馬の最北端、比田勝港を経て、朝鮮半島をめざす東まわりの航路である。

宗像と対馬をむすぶ海上交通の指標、沖ノ島で調査された4世紀から10世紀にかけての祭祀遺構は、宗像ルートの保全にヤマト政権が積極的に関与したことを物語っている。

内陸部における墓と集落　有田遺跡の調査では31街区と17街区の土師器をもとに、古墳前期にあたる有田Ⅰ期とⅡ期の土器相が設定された（2集）。室見川左岸の野方中原遺跡では、弥生後期後半から古墳時代にかけての環濠集落の調査（30・313集）、今宿バイパスの調査では、湯納遺跡で良好な一括資料が提示され、80年代にかけて早良平野を主体とする古式土師器の編年作業が進んだ（武末純一「福岡県・早良平野の古式土師器」『古文化談叢第5集』1978）。

入部の調査では、2次調査区で全長70mを超える前方後円墳、拝塚古墳とその前方部に平行して築造された重留2号墳が検出された。何れも墳丘は削平をうけていたが、拝塚古墳は周濠の調査によって、葺石を巡らし、埴輪が置かれていたことが明らかとなった。また古墳の南西部では、28基にのぼる古墳前期の方形周溝墓群が検出された（235集）。

岩本遺跡群において検出された古墳前期の集落では、住居跡は方形プランのベッド状遺構をもち、4本柱の主柱穴をもつものも含まれている。その多くは、西新Ⅰb期を主体としており、在来の器種に加えて、布留系甕山陰系の鼓形器台などが目立っている（343集）。古墳時代の集落は岩本遺跡群西の東入部遺跡群にかけても広がっており、竪穴住居跡のほか土壙や溝が検出された（424集）。

室見川中流域の左岸では、樋渡古墳と隣接する方墳（吉武S群1・2号墳）（731集）と飯盛山裾部で検出された飯盛西遺跡の方形周溝墓群は、河川をはさんで対峙する関係にあることを示している。樋渡古墳は、墳形や主体部についての情報はなかったが、田圃のなかの小高い高まりとして存在は知られていた。径33mの後円部に、長さ7mの前方部をつなげた帆立貝式の墳丘に円筒埴輪をめぐらした首長墓であることは発掘によってはじめて明らかになったのである。

入部1次の調査区について

これまでの入部地区における調査によって、室見川の上流右岸に弥生前期から古墳時代にかけての集落や墓群の存在が明らかとなった。とくに東入部2次調査8区では、区画墓と集落が近接しながらも時期的に重なることは興味深い（652・685集）。その南に位置する東入部7次調査で検出された集落跡も前期末から中期前葉の早良平野の集落変遷を示すモデルとなるものである（577集）。

東に位置する岩本遺跡3次のような中期の埋没水田は、貞島川の旧河道の谷部に広がる生産基盤の存在を示している。その延長は、北側では重留遺跡群と四箇船石遺跡の間を抜けて、入部1次の流路に至り、さらに四箇遺跡群の23次調査区で検出された井堰状の杭列（196集）へつながり、可耕地面積を確保していたとみられる。

早良平野の様相を概観し、本遺跡（重留遺跡第1次調査）の位置づけを試みたが、これまでに蓄積された資料の膨大さから、まとまりのない記述となった。今後、本事業に伴う調査報告書を継続的に発行する計画なので、早良平野の地域史だけでなく、弥生時代の歴史的変遷の解明に迫れると思っている。（常松）

第4節　縄文時代の調査

1．調査概要

前述したように本調査前の試掘が十分にできず、より効果的な調査が必要であったことから、工事設計図をもとに切りや盛り造成などで地下の埋蔵文化財に影響が大きいと判断される範囲について、的を絞り試掘を密にして遺跡全体の様子を探ることにした。縄文時代の遺物については、各トレンチで弥生～中・近世までの遺物に混じって縄文土器や黒曜石が数点含まれているが、A－1区北側寄りの試掘トレンチ4～6号トレンチ（T4～6）に最も集中することから、ここに南北70m×東西50m、3,500㎡の調査区を設け、その広がりを把握することにした。

耕作土、床土を重機で剥ぐと、直下で縄文土器が出土し始めた。この面の標高は南端が22.80m、北端が22.30mを測り、約50㎝の比高差で北西側に向かって傾斜しているが、視覚的にはその差は感じられず、ほぼ平坦に見える。四箇遺跡や四箇東遺跡など周辺隣接地における縄文時代遺跡では、縄文時代遺物包含層や遺構面が耕作土、床土の直下で確認される事は少なく、本遺跡のような例はそれまでの知見と異なる状況であった。これはすでに遺構面は大きく削平され、遊離、沈下した遺物だけがA－1区に偶然に集まったのではないかという程度の認識であった。しかし土器の多くは、落ち込みと思われる大小の円形や不整形プランの中に含まれており、もしかしたらこの落ち込みは、竪穴住居跡や土壙になる可能性があった。またその他の土器も、調査区東側に片寄り、元の位置を留めたような割れ方をしたものもあることから、この面を遺構面とし、本調査区の基盤土と判断するに至った。この基盤土は、暗黄灰色の細かな土と粗砂が入り交じっており、西側ほど粗砂の割合が増える。またSK03土壙検出の糸口となった南北トレンチの図41の土層図でも分かるように、深さ1.8m下部に限ってであるが、水平的で整層的な堆積ではなく、もともと複雑な起伏のある地形で自然に土砂が堆積し、沖積地特有の微高地が形成されたと推測した。

また遺構面は、この一面のみで下部に時期の異なる文化層は認められない。弥生時代以降～近世の遺物は耕作土中に確かに含まれてはいるものの、この時期の明らかな遺構は皆無で、重複も認められなかった。おそらく本調査区では、信じがたいが今回報告する縄文時代晩期のみの土地利用で終わり、弥生時代になって早く耕作地などに転換したために、縄文時代の遺構、遺物が奇跡的に保存されたのであろう。このような予想から、縄文時代遺構の発見、確認を期待し発掘作業を進めることにした。

本調査区での発掘着手後間もなく、長径約85㎝の楕円形落ち込みに器高54㎝程の半粗製深鉢が斜めに埋置された状態で発見された。後世の攪乱時に偶然に穴に落ち込んだものではない。その深鉢の底部近くには小孔が穿たれ、埋葬遺構であることは明らかである。さらに隣接する直径60㎝ほどの円形落ち込みから精製浅鉢の発見が加わり、耕作土直下の遺構存在が決定的になった。しかも先の埋葬用の深鉢の欠けた口縁部から埋葬時の標高を復元すると、あと30～50㎝程と思われた。通常は耕作土直下の遺構保存は毎年繰り返される農作業で壊される機会が多く、保存はあまり望めないものだが、予想に反して削平は浅く、他の遺構も発見できるという期待が一層膨らんだ。本遺跡の北西側一帯はもともと1974（昭和49）年より始まった四箇遺跡の発掘調査によって、縄文時代遺跡が濃密に分布、展開していることがすでに分かっており、今回の期待も当然のことであった。しかし小面積の調査が多かった事から集落跡全体の把握までには至らずにいた。しかし今回は3,500㎡というある程度広い調査面積となり、さらに次年度からは南側に広大な調査対象地が控えており、早良平野に営まれた縄文時代集落の実態を明らかにする絶好の機会

が到来したのである。

しかし3月までという調査期間は、あまりにも短く果たしてどこまで迫れるのだろうか。幸い調査員や学生が多数参加していたことから、若い人員を最大限に活用する工夫をした。つまり遺構実測用A2判方眼紙の横幅に合わせて10m×5mのグリッドを組み、南東隅から西にA、B、C、Dとし、北には5mごとに1、2、3、4、、、の番号を付けてグリッド名を方眼紙の番号とした。実測縮尺は1／20で、遺物の位置、深さを記入し、その方眼紙ごとに通し番号を付して台帳に記入する方法によって、同時取り上げ作業の全面展開が可能になった。

このように作業の効率化と正確な記録保存を図る一方、調査成果の公表、活用を私たちの大事な任務として真剣に取り組んだ。マスコミや町内会への広報、案内、発掘作業員や見学者への説明、そしてパンフレットや「入部遺跡だより」の作成、配布、さらには工事関係者との打ち合わせなど

写真38　縄文調査区全景

図41　A－1区縄文調査区全体図（1/400）

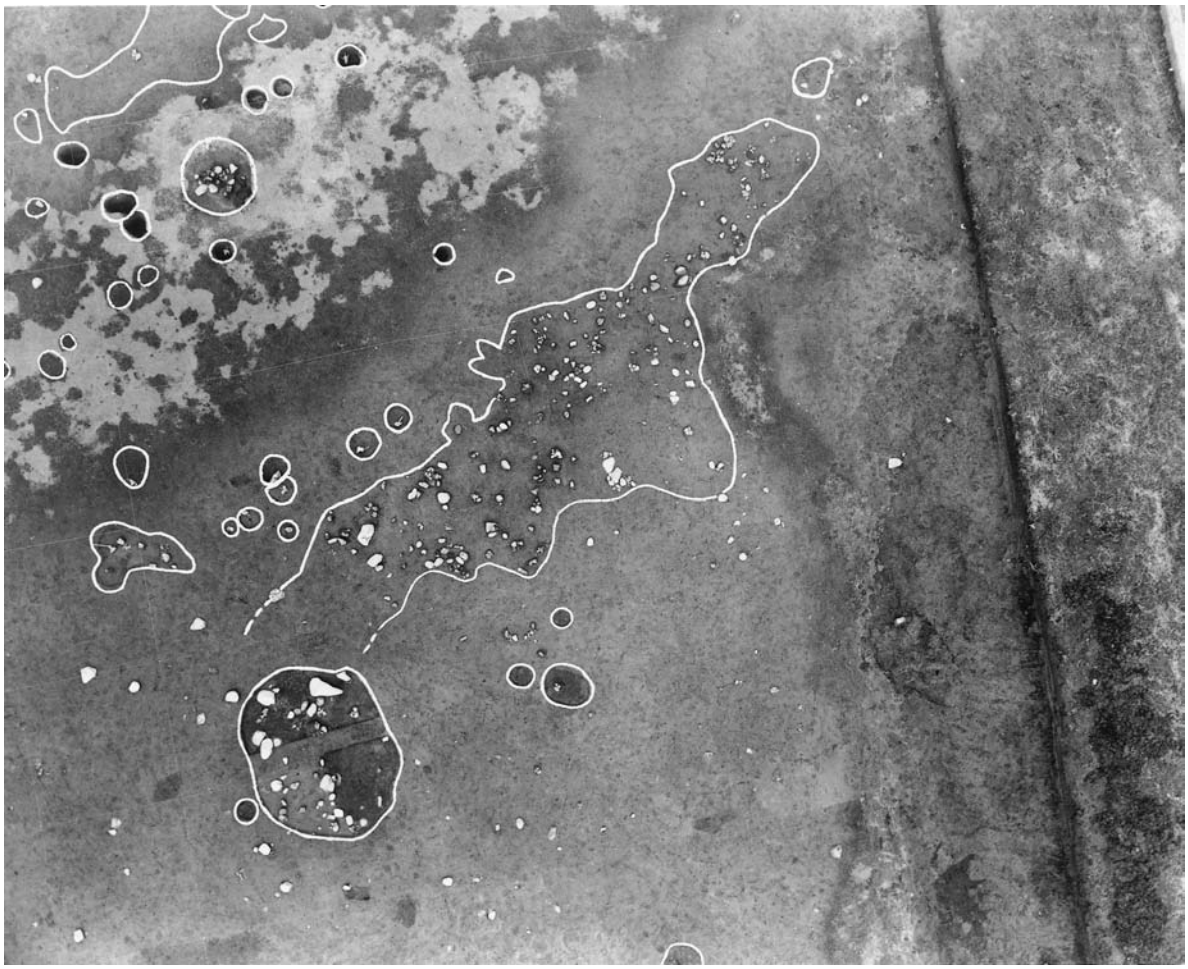


写真39　A－1区散布地（SA01）

である。

このようにあわただしく、それなりに充実した発掘調査であったが、縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡4軒（SC01～05、SC02は今回の整理作業で土壙SK05とした）、土壙5基、埋甕1基、包含層（現場では散布地と呼んだ）を検出し、小規模ながら縄文時代集落を掘り出すという成果を上げ、昭和63年3月30日にすべての作業を終えた。本節の縄文時代の調査では、この順で遺構と遺物について記述する。また弥生～古墳時代の河川などA－1区以外で出土した縄文時代の遺物については、出土場所ごとにまとめている。

ここでお詫びしたいことがある。「福岡市初の縄文時代集落発見」という事をやや誇張して広報活動に利用したきらいがあり、大いに反省している。今後、8年に渡って750haという広大な面積で行われる圃場整備事業の初年度から協議が整わず、調査着手が数か月も遅れたことへの憤り、調査担当者として有効な方法が見出し得なかった無力感、本市では初の本格的な縄文時代遺跡調査という責任感、だのに杜撰な調査をしている罪悪感。来年度こそは十分な調査体制と調査期間で臨みたい、そして室見川の対岸で発見された吉武遺跡に劣らない重要な遺跡がこの地一帯にも眠っているという事実を地元の方々に伝え、今後協力を得て円滑に調査と圃場整備事業を進めたいという強い願いがあった。

たとえこのような願望や目的があったにしても、発掘現場での判断は、学術的な裏付けを必要とし、決して憶測や自分に都合のいい解釈は許されることではない。本書では、その反省と18年も報告が遅れたという事に対してご批判、ご叱正をいただくために、調査後の修正内容と合わせて当時の認識や判断根拠もできるだけ記述するように心がけた。（力武）

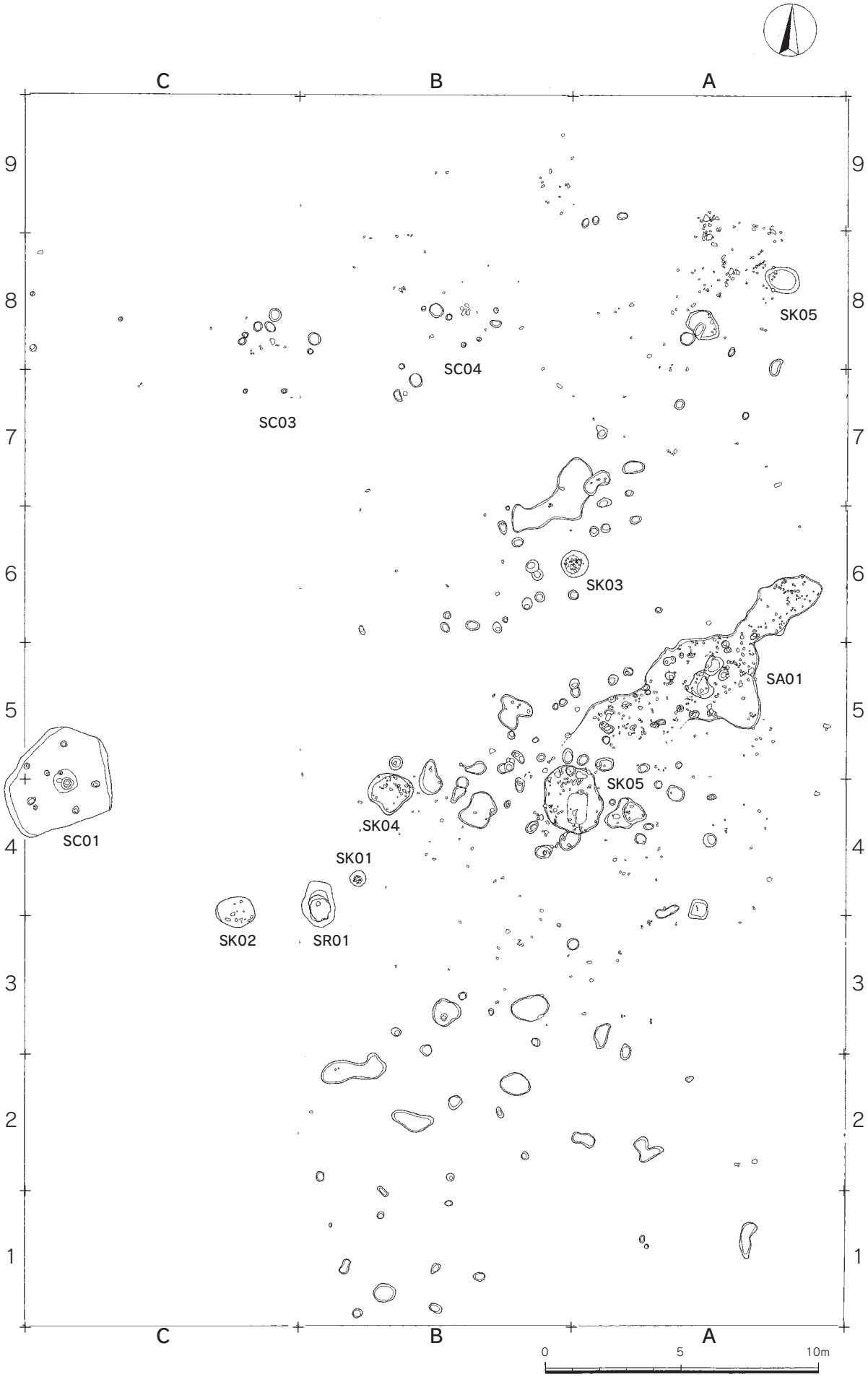


図42　縄文調査区遺構配置図（1/200）

2．竪穴住居跡（SC01、03～05）

先に記したように発掘現場では、5軒の竪穴住居跡を検出したとしていた。このうち壁や床、柱穴、そして炉跡など住居跡としての構造や装置をほぼ完全に備えているのは、SC01のみである。SC02は不整形な平面プランながら中央に焼土痕が認められ、遺物の出土も多かったことから竪穴住居跡としていたが、SC01に比べ、平面プランが歪であり、床面に柱穴も見られないこと、さらに土器散布地の中にあることなどから、本報告書では土壙に訂正し、SK05の遺構番号を付している。従ってSC02は欠番とした。SC03～05は、いまなお疑問点が多く否定的だが、そのまま竪穴住居跡として報告する。

SC01竪穴住居跡（図43～46・写真40～43）

SC01は、本調査区では最も西寄りに位置し、これより西側にはピットや土壙などの遺構はない。掘り下げ作業の順に従って上面、中面、床面の3枚の図面を作成した。また写真は撮影台を固定して4×5カメラを主にして出土状況を記録した。

上　面　上面では粗砂の基盤土に3.66m×3.81mの大きさのやや角張った不整円形の落ち込みがあり、砂質褐色土の覆土と大量の遺物があたかも盛り上がるような状況で発見された。遺物は縄文土器や石器などの他に自然石も多く含まれており、特に南西と北西端には、約50㎝前後の2個の大きい角礫が横たわっている。これらの遺物や自然石は、小さなまとまりに分けることもできるが、全体に分散しているように見える。おそらく自然的な流れ込みではなく、住居廃絶後、埋没する段階で人為的な遺物投棄を示すとも言えよう。なお遺物は番号を付けて取り上げたが、石器の種類や土器の器種に偏りがなく混在している。もちろんこれらの遺物は、当時の道具類の構成を示すものではなかろう。土器の破片は中面、床面出土に比べ小片で、互いに接合する破片は少ない。

中　面　上面の遺物取り上げ後、やや大きめの土器破片が床面に接するような状態で出土したことから、図面を作成した。また同時に壁の検出、平面プランの確認を行った。この時点で床面中央に焼土と炭化物が広がっていることが認められ、炉跡と判断した。土器や他の自然石は、炉跡や柱穴の上部に重なっていることから、この竪穴住居跡使用時の遺物ではないと判断した。平面プランは、隅丸五角形で各壁を仮に北端角から時計回りにA、B、C、D、E壁とすると直線長さは、A壁1.70m、B壁2.32m、C壁3.32m、D壁2.01m、E壁2.94mで平均長2.46mとなり、各壁の長さはは一様ではない。このうち壁がよく残るのは、B、D、E壁で、高さはそれぞれ9㎝、14㎝、16㎝である。
A、C壁はほとんど残っていないが、基盤土である粗砂が茶褐色に変色していることから床面と壁の境を区別できた。従ってSC01の大きさは、南北長3.56m、東西長3.94㎝で、床面積は約9.5㎡となる。

床　面　すべての遺物を取り上げ、床面と炉跡の清掃を済ませ実測作業を行った。床面は粗砂の基盤土に掘り込まれているためか、水平ではなく微妙な凹凸がある。粗砂と異なりわずかに硬化しているがこれは黒褐色土を薄く貼っているためで、炉跡周辺は粘土質となり厚さも4㎝程ある。熱のためか黄灰色を呈している。床面には炉跡以外に8個のピットがあり、このうち直径20㎝以上の大きめのピット5個を主柱穴と考えた。仮に北側から時計回りにSP01～05とし、これらを繋ぐと住居平面プランと同じ5角形となる。しかしSP01は住居平面プランの北コーナーと一致するが、他の4個のピットは各壁の中程に位置しており、住居平面プランと柱穴配置形は平均約32度ほどずれている。5個のピットが同時に屋根を支えていたのか確かめようがないが、住居中央からすると壁との間に柱が立つことになり、やや使いづらい感じがする。なお、床面、壁、柱穴、さらに貼り床などに改変や追加の痕跡が見られないことから、増築や建て替えはなく、一時期の使用だけで放棄されたと思われる。

図43　SC01実測図（上面）（1/40）

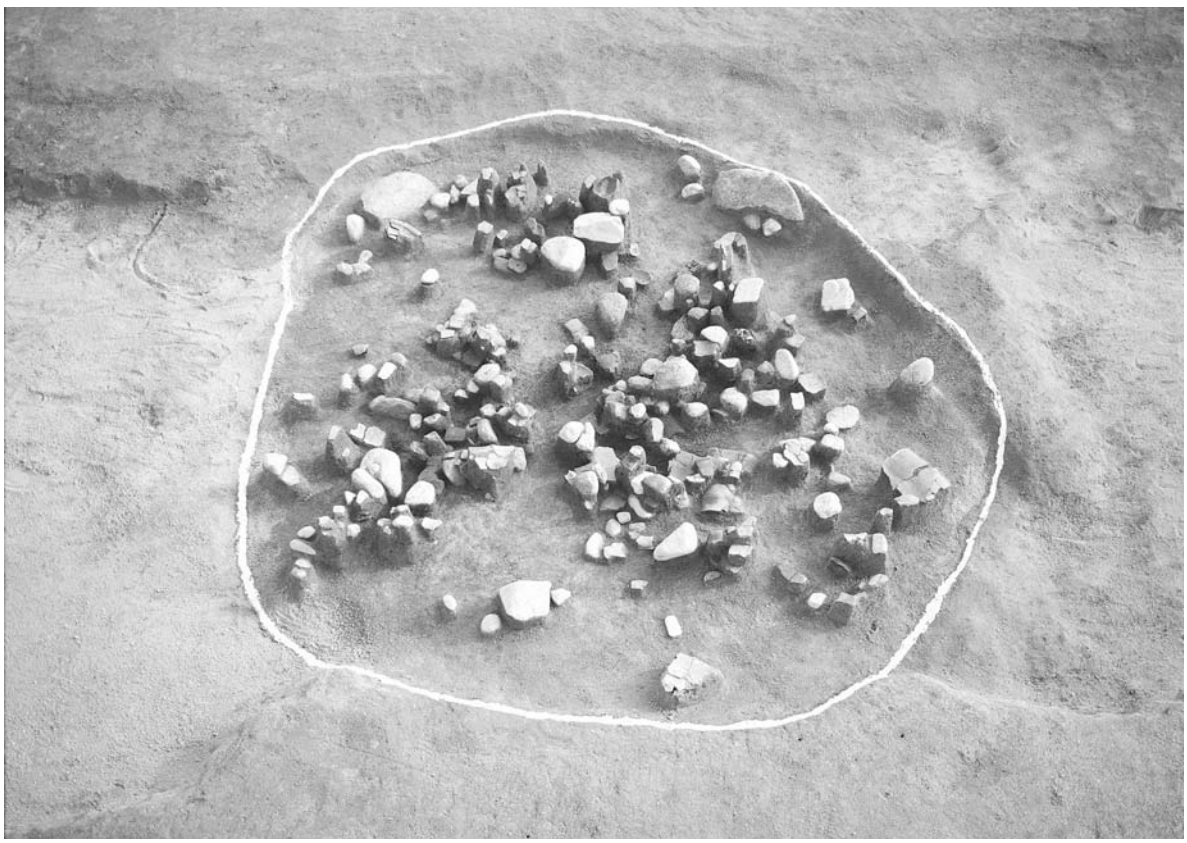


写真40　SC01（上面）

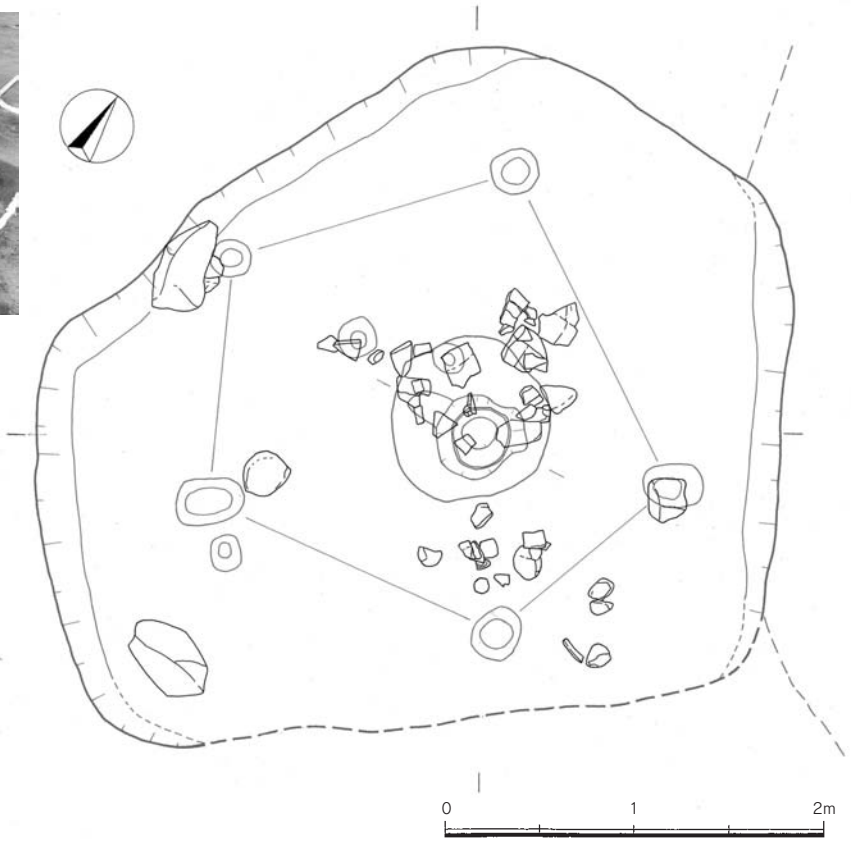


図44　SC01実測図（中面）（1/40）

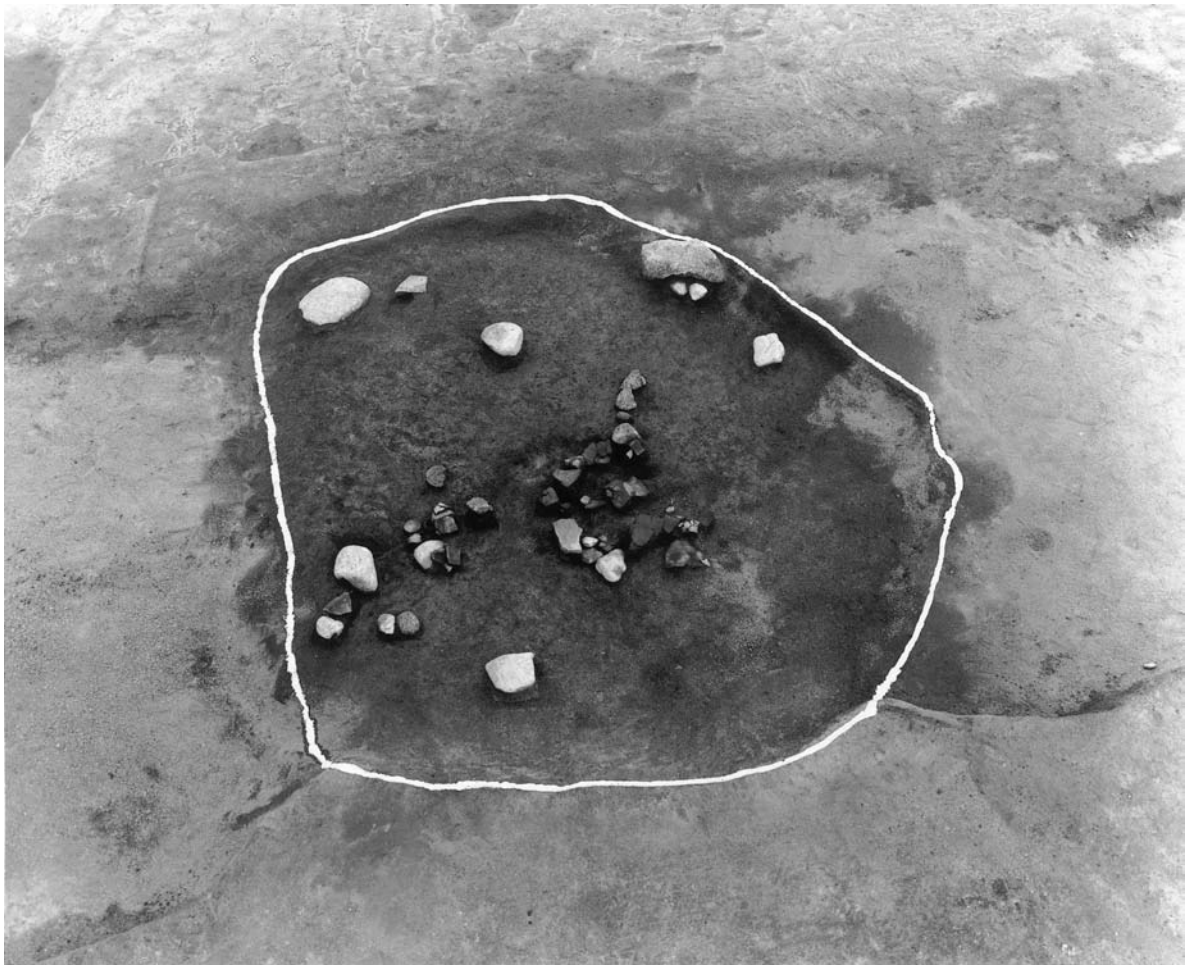


写真41　SC01（中面）

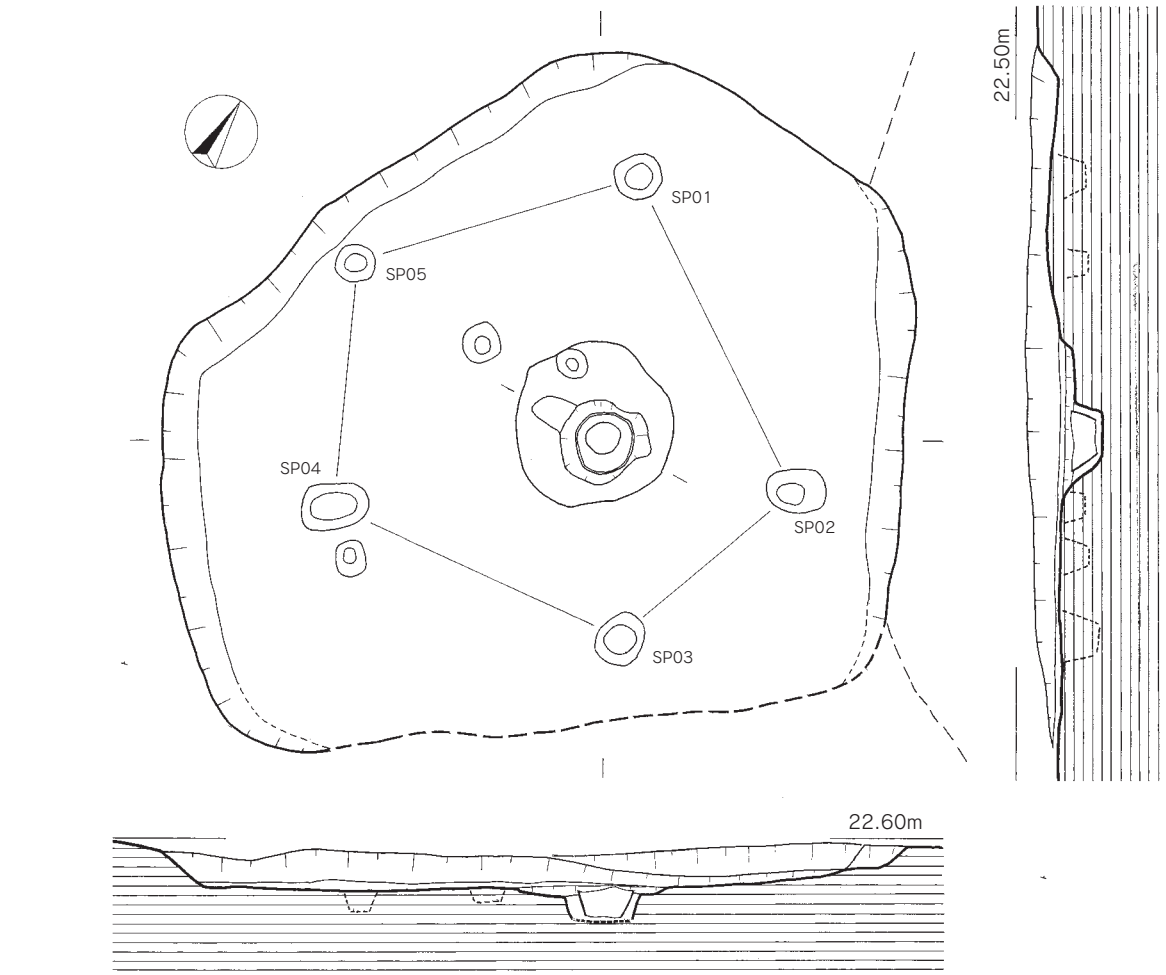


図45　SC01実測図（床面）（1/40）

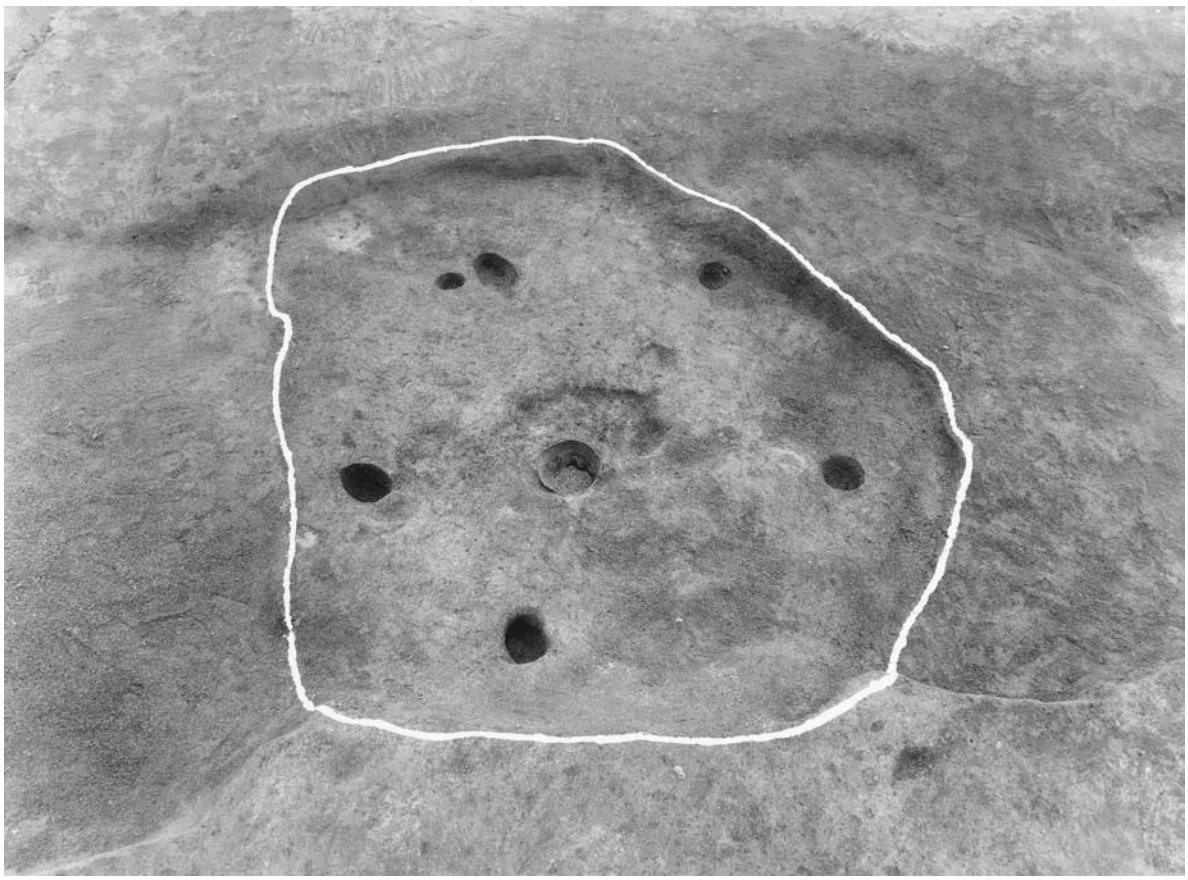


写真42　SC01（床面）

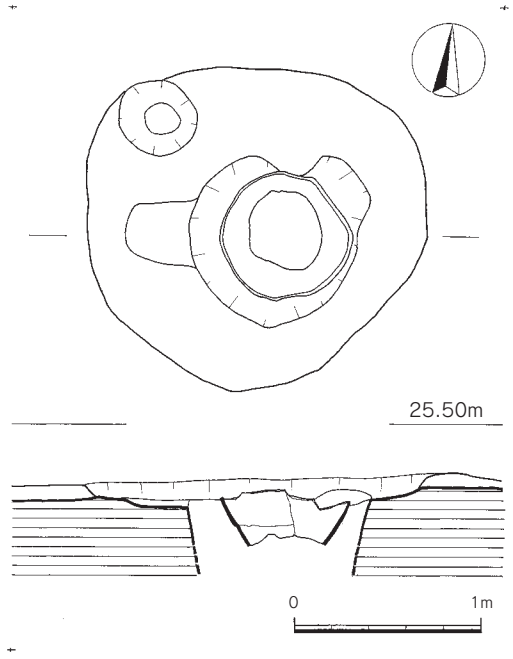


図46　SC01炉跡実測図（1/4）

写真43　SC01炉跡

炉　跡　床面のほぼ中央ではなくわずかに西寄りに設置されている。まず床面を長径90㎝、短径85㎝の楕円形に浅く掘り、さらに中央に直径48㎝程の穴を深く穿ち、口縁部と底部を打ち欠いて円筒状にした粗製深鉢を埋め込み、その周囲を粘土で塗り固めている。打ち欠いた深鉢の胴部の大きさは、上面で35㎝、高さは13㎝である。周囲は熱変で堅くなり、掻き出された焼土と炭化物が広がっているが、小範囲に限られ無造作な印象ではない。この竪穴住居跡に住む家族の慎ましい生活を想像したくなる。炉跡全体を発泡ウレタンで固定し切り取ったため、この土器の実測は済ませていない。（力武）

SC01出土遺物（図47～58、写真44～56）

SC01からは縄文土器・石器が浅いコンテナ数箱出土した。遺物は住居床面上から出土した遺物と覆土中から出土した遺物に分けられる。縄文土器は床面直上・覆土ともに深鉢に大きな破片が多く、浅鉢は小片が多い。石器は少なく、石鏃1点、スクレイパー1点、磨製石斧2点、打製石斧2点、磨製石斧未成品1点、磨石1点、石皿2点、砥石1点、使用痕ある剥片2点で、特に包含層から大量に出土している使用痕のある剥片が少ない。

床面直上出土遺物（図47～49、写43～46）

201～217は縄文土器である。201は大粒の砂粒を多く含む粗製の深鉢で、口径43.0㎝を測る。両面とも器面の凹凸がかなり激しい。調整は外面口縁部が横方向一部縦方向の条痕、口縁部より下は右下がり、胴下部は縦方向の粗い条痕である。内面は全面指による押圧もしくはナデであるが、口縁部近くでは横方向に粘土を削りとった部分が部分的に沈線状を呈している。煤・焦げの付着は確認できないが、口縁部直下外面が黒変している。粘土帯の接合部が数か所で確認できる。202は比較的胎土の良好な半精製の深鉢で、口径45.0㎝を測る。口縁部は外反している。外面口縁直下は横方向の指ナデのため沈線状を呈している。その下は主に右下がりの条痕である。内面は横方向の指ナデと思われる。内面は黒色に近く、外面は淡黄褐色であるが縦方向に幅2㎝ほどの黒色部分がある。煤等は確認

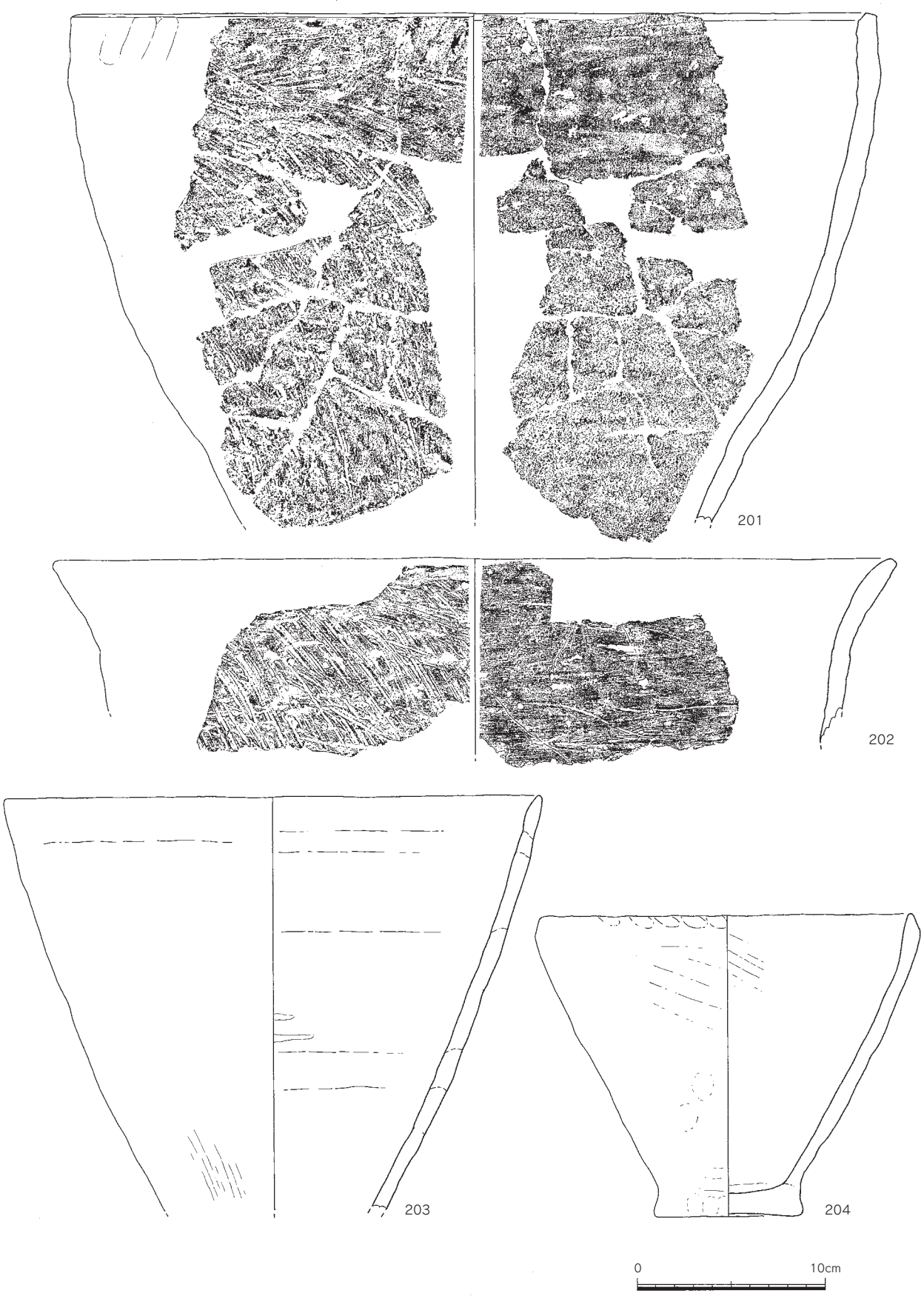


図47　SC01床面出土遺物図 1（1/3）

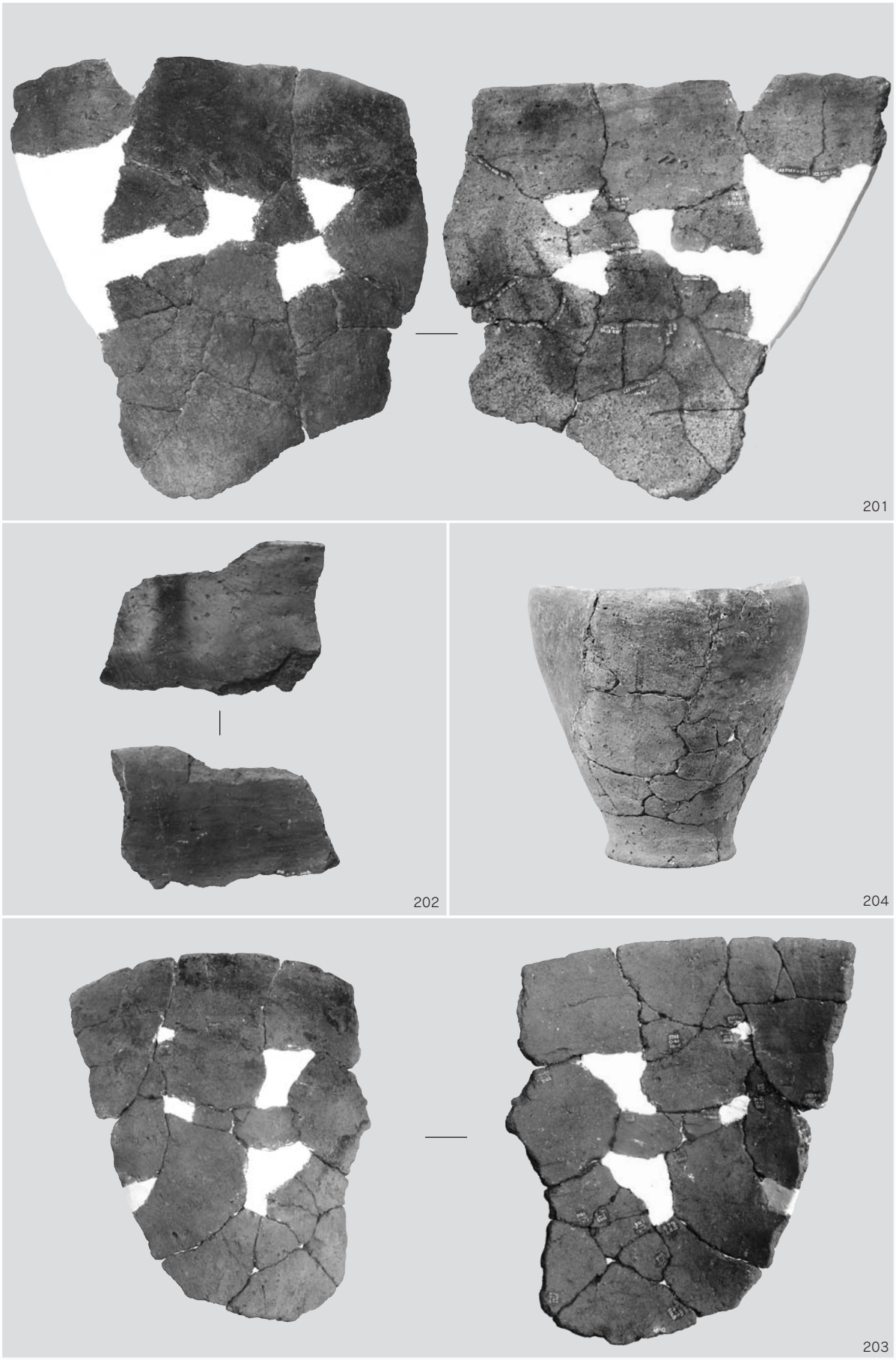


写真44　SC01床面出土遺物 1

できない。203は粗製の深鉢であるが、胎土はさほど悪くない。口径28.8cmを測る。外面はほぼ全面丁寧なナデ仕上げであるが、外面胴下部に条痕がかすかに認められる。内面は横方向の指ナデと思われる。内面に2か所横方向にヘラ状の器具で沈線状に削りとった部分がある。粘土帯の接合部が数か所で確認できる。外面口縁部から胴上部に煤あるいは焦げが付着している。204は口径20.6cm、器高

図48　SC01床面出土遺物図 2（1/3）

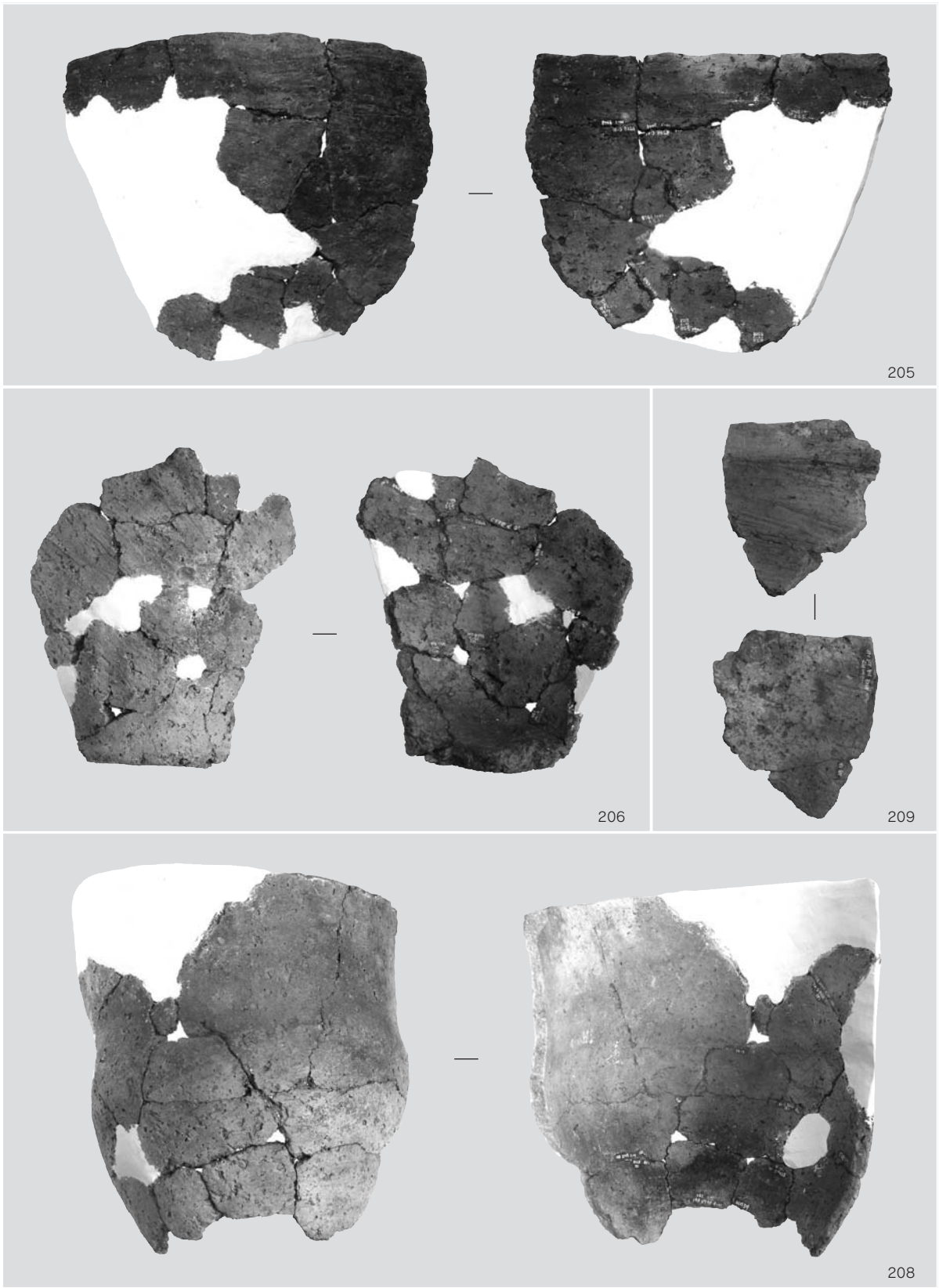


写真45　SC01床面出土遺物 2

写真46　SC01床面出土遺物 3

16.0㎝の小型粗製深鉢である。口縁端部外面は内傾しているが、これは端部を指で内面に押し出している結果である。口縁部両面にやや右下がりの粗い条痕が残る以外はナデで仕上げているが、特に外器面は凹凸が激しい。外面口縁部に煤か焦げが少量付着している。内面底部近くにも焦げ状のものがごく少量付着している。205は口径28.5㎝の粗製深鉢である。口唇部は面取りしている。外面は器面の凹凸が激しい。外面は口縁部に粗い横もしくは斜めの条痕があるが、他は指による削り気味の横ナデと思われる。内面も口縁部に主に横方向の条痕がある以外は横方向の指ナデで仕上げている。両面に小豆大からドングリ大の窪みが多くあり、炭化物がつまっているものもある。外面口縁部に煤がか

すかに残存している。206は底径9.6cmの粗製深鉢である。全体に細身の器形である。外面は斜方向の条痕、内面は条痕の後ナデ調製である。両面とも小豆大の窪みが無数にあるがその多くは胎土中の砂礫が抜け落ちたものと思われる。内面側下部の割れ口付近が黒変しており、加熱時に破砕もしくは破砕後に二次焼成を受けた可能性がある。207は粗製の深鉢で、口径27.8cmを測る。外面は主に横方向の粗い条痕で、内面は外面より浅い条痕を施し、胴下部はナデているようである。底部近くには厚さ

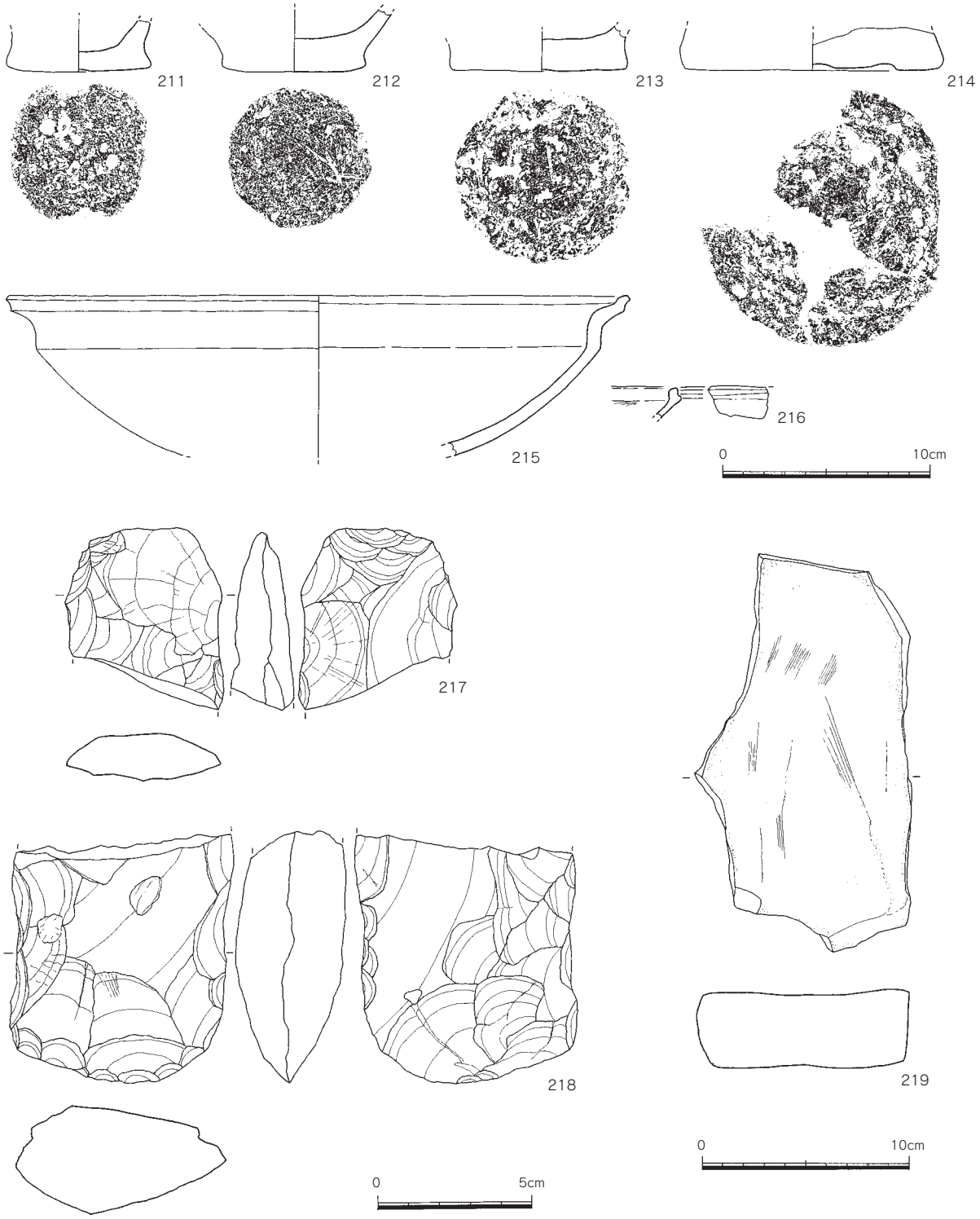


図49　SC01床面出土遺物図 3（1/3・1/2）

数㎜の焦げが付着している。また胴部中央にドングリと思われる圧痕がある。208は胴部中央に屈曲部を持つ。外面は屈曲部から上がていねいなナデで仕上げているが、かすかに条痕が認められる。屈曲部から下は左下がりの条痕である。器表面には痘痕状の無数の穴があるが、種子等の圧痕は少ない。内面は全面ナデ調整で、外面と同様に無数の穴があり、ドングリの圧痕と思われるものもある。内面下部に焦げが付着している。209は粗製深鉢で、口縁部と頸部が屈曲する。外面には粗い条痕を施し、

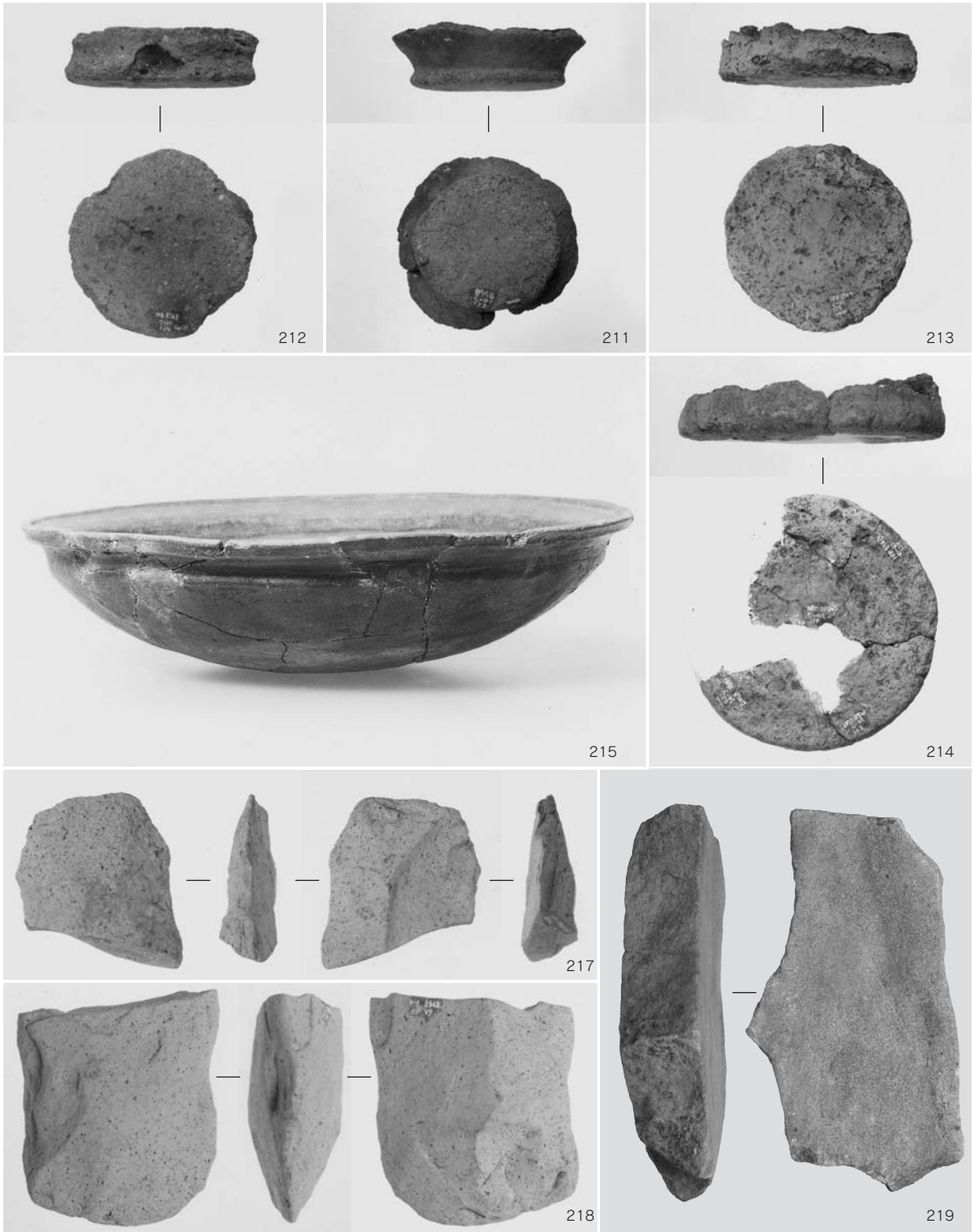


写真47　SC01床面出土遺物 4

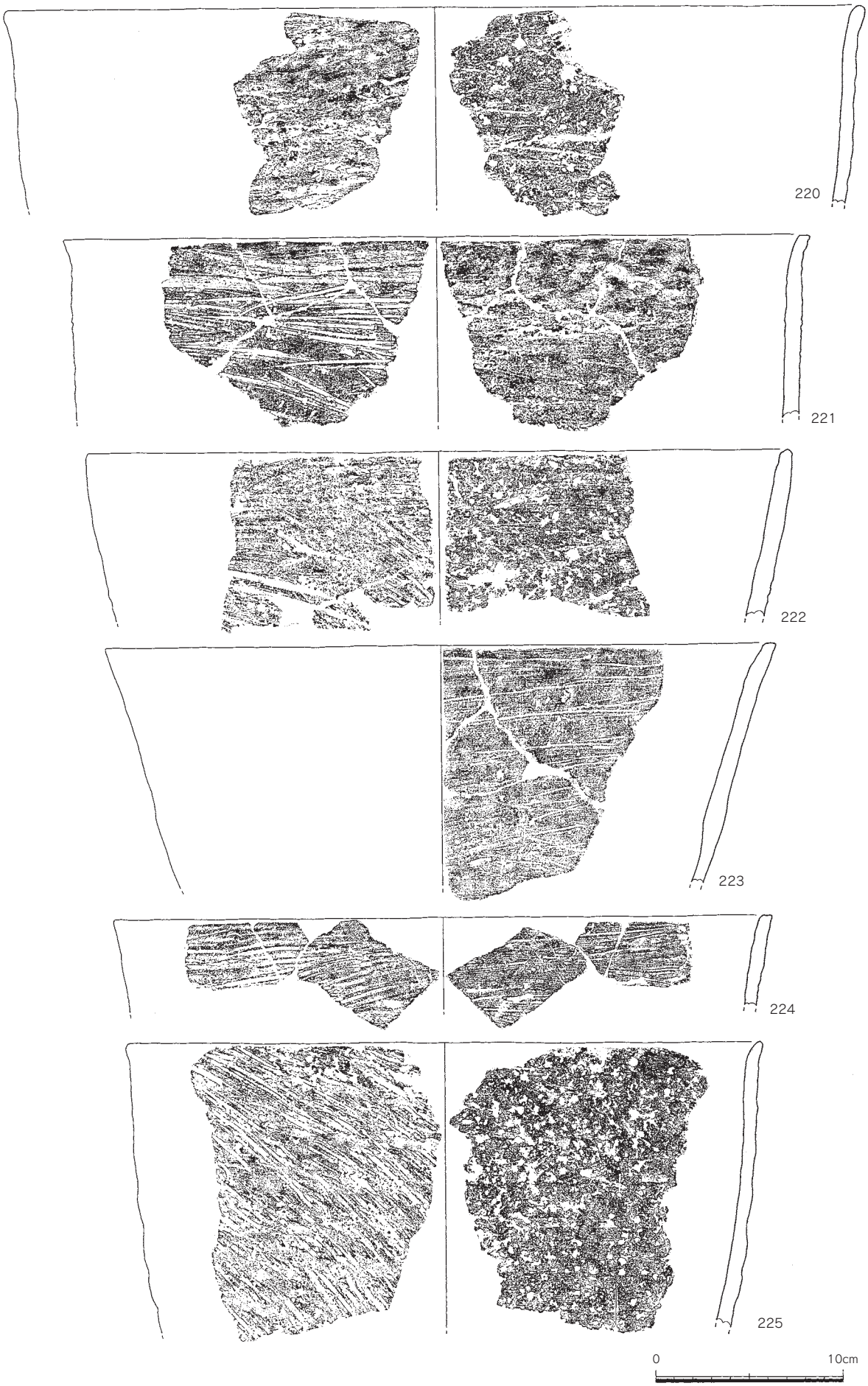
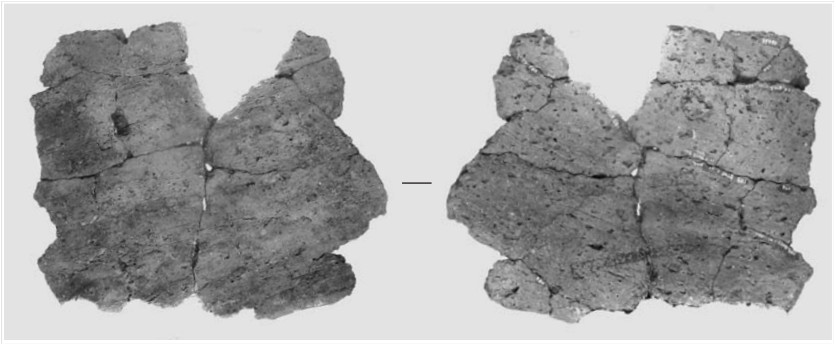
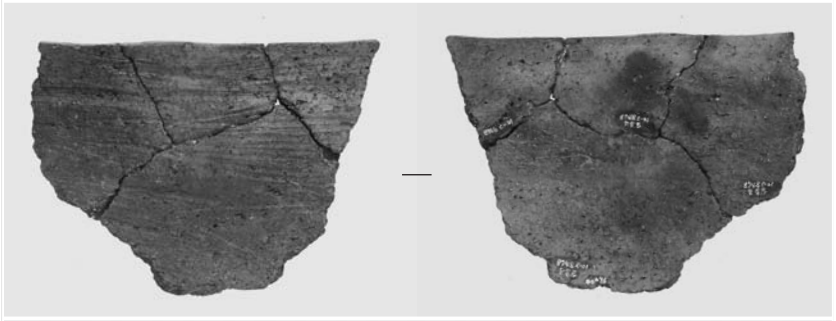


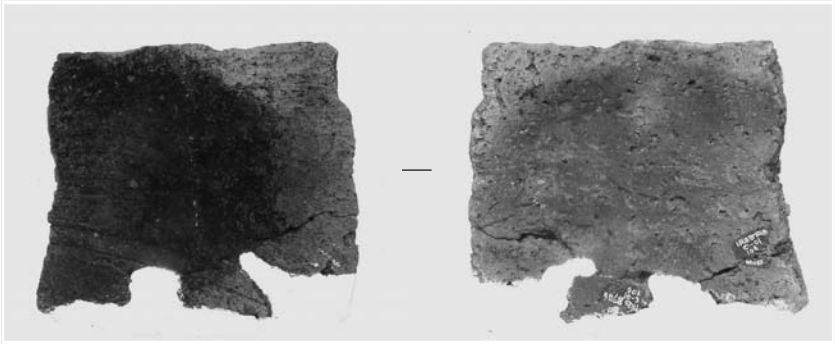
図50　SC01覆土出土遺物図 1（1/3）



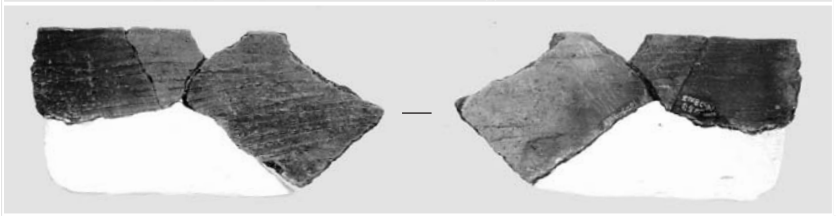
220



221

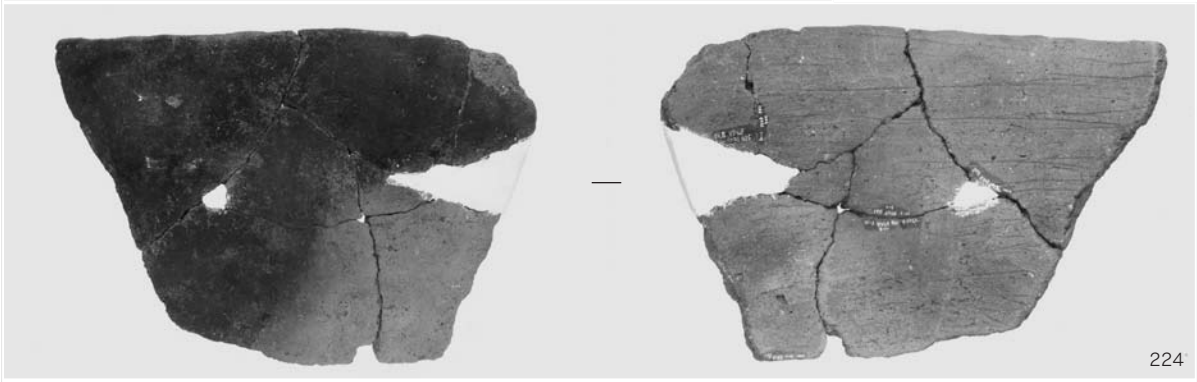


222

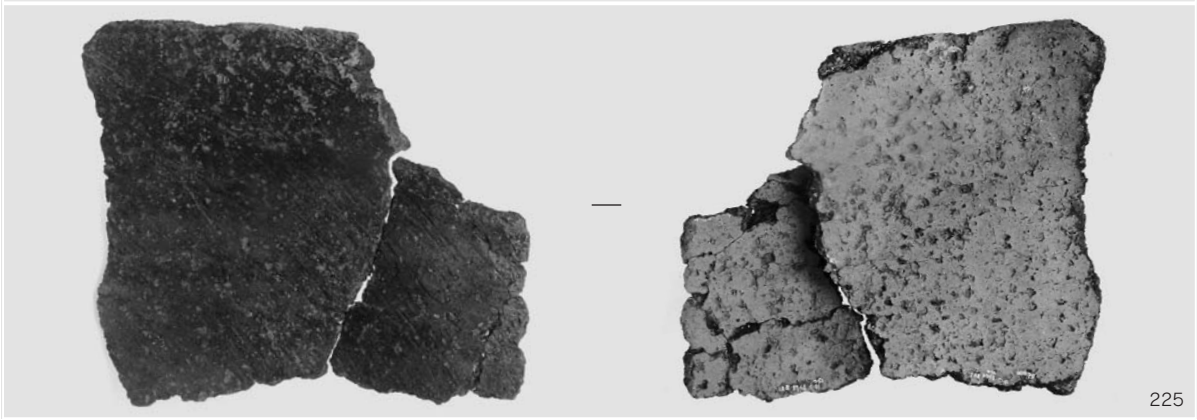


223

写真48
SC01覆土出土遺物 1



224



225

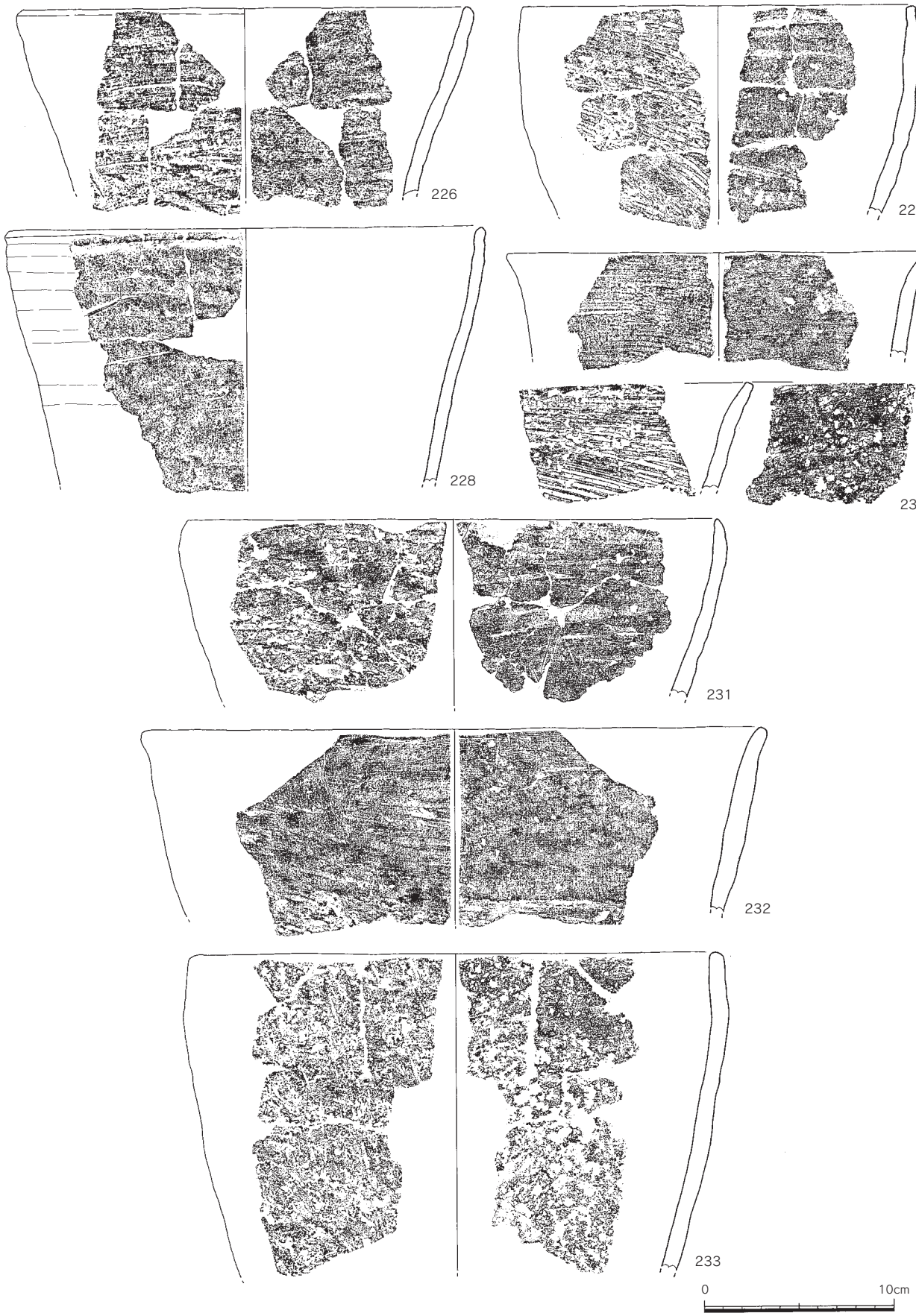


図51　SC01覆土出土遺物図 2（1/3）

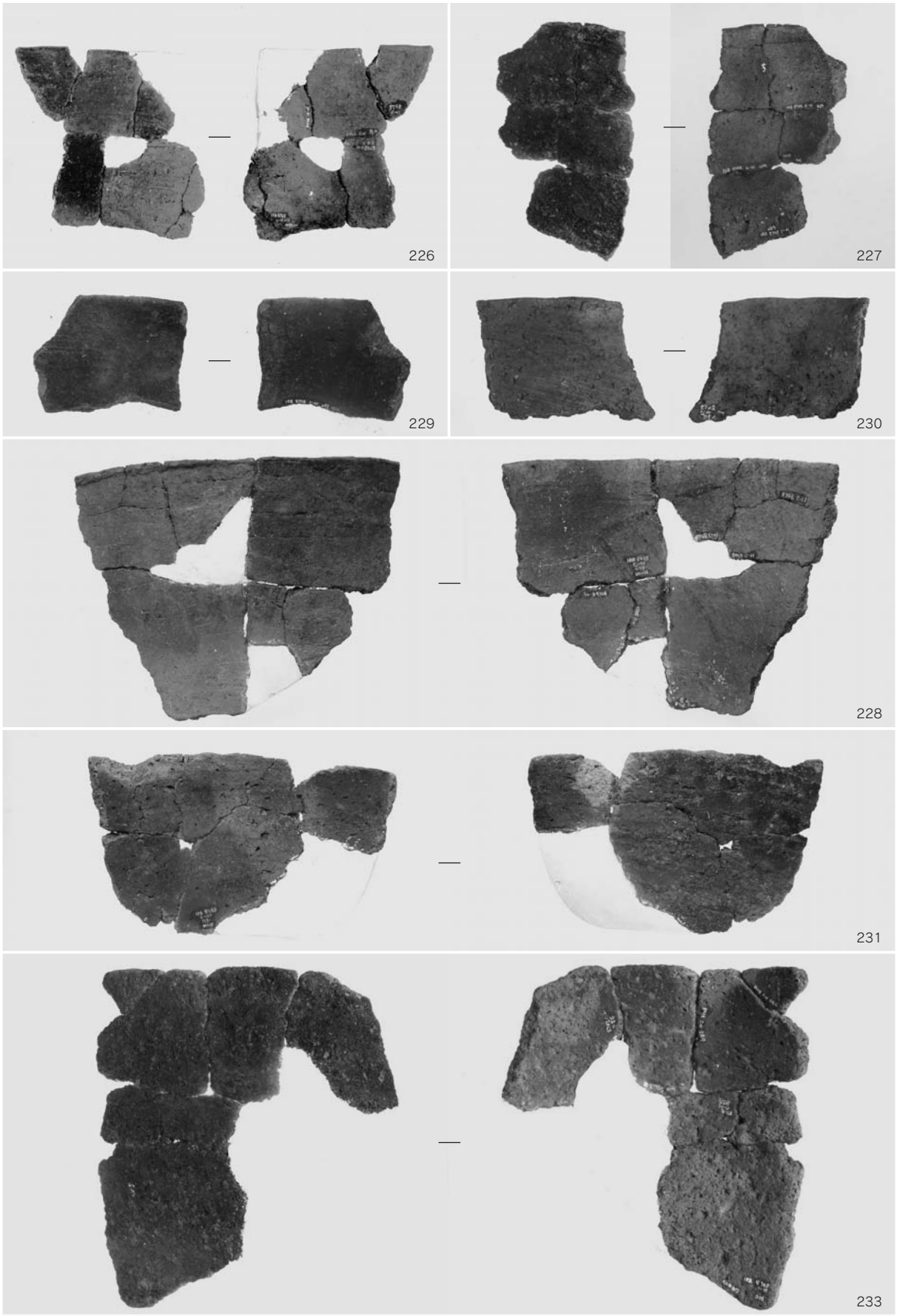


写真49　SC01覆土出土遺物 2

内面は条痕の後ナデを施している。210は粗製の深鉢である。外面口縁部は横方向の条痕の後ナデを施し、頸部の屈曲部から下は横方向の条痕、胴下部は右下がりの条痕を施している。黒褐色を呈し、煤状のものがわずかに付着している。内面は黒色を呈し、口縁部は横方向の条痕の後、指で斜めに押さえながらナデ上げている。頸部から下はヘラによるナデか。胴下部に焦げ状のものが付着している。

211～214は深鉢の底部である。底部 211の外底部には何らかの圧痕がいくつかある。212・213にも多くの小豆大の窪みが認められ、この内のいくつかは種子のようである。214は胎土に大粒の砂粒を多く含み粗い。外底部から外面が点々と赤味を帯びている。また214にも小豆大の窪みが多いが、圧痕かどうか明瞭ではない。

215・216は精製の浅鉢である。215は全体の1/3の破片である。口径30.2㎝を測る。外面はヘラ磨研で部分的にヘラの痕跡が残り、器面に光沢がある。内面はかなりていねいなナデ調製である。外面上半部は黒色に近く、内面は黒褐色を呈している。216は精製浅鉢の小片である。

217は小片のため明瞭ではないが、玄武岩製の打製石斧またはその未成品の刃部であると思われ、剥片素材に調整を加えたものと考えられる。色調は灰白色に近く、表面は小さな気泡が抜けたような痘痕状を呈している。218は玄武岩製の石器であるが、小片のためやや不明確ではあるものの、断面の厚み（3.6㎝）や全体の形態から磨製石斧の未製品と考えられる。上下もやや不明確ではあるが、先端部がU字形を呈していることなどから、刃部の破片と思われる。敲打痕はなく、調整（打裂）段階で折損した未成品と思われる。黄色みを帯びた灰白色を呈し、表面が気泡が抜けたように痘痕状を呈している。219は砂岩製の大型砥石である。図の表面のみを使用し、他の面は自然面もしくは折損面である。石の長軸方向にほぼ全面を使用している。特に中央から右下に斜めに残る使用痕はやや深めに線状に残っている。（米倉）

覆土出土遺物（図50～58、写真47～56）

縄文土器

220は粗製の深鉢であるが、他に比べて器壁（6㎜）が薄い。口径45.8㎝を測る。外面は器面の凹凸が激しい。条痕を右下がりに施しているが、貝殻腹縁ではないようである。内面は右下がりの条痕の後にナデ調整を施している。両面とも小豆大の窪みが無数にあるが、ほとんどが圧痕ではなく、土器整形時のものである。221は口径40.4㎝を測る粗製の深鉢であるが、やや胎土は良い。外面にはほぼ横方向の貝殻条痕を施している。内面は横方向のナデ調整で仕上げている。煤等は確認できない。222は径を復元しているものの、あまり大きな破片でなく、実際の径は図より大きくなる可能性がある。外面には粗い条痕を施し、内面には条痕の後にナデで仕上げ、小豆大の窪みが無数にある。外面の一部に煤ないしは焦げが付着している。223は半精製の深鉢で、外面は指押さえの後に丁寧なナデで仕上げ、条痕は確認できない。内面は横方向の条痕である。両面とも器面に凹凸が少なく、小豆大の窪みもほとんどなく丁寧な作りである。外面に部分的に煤が付着している。224は口唇部を面取りしている。外面は横方向の貝殻条痕を施し、口縁直下のみナデ消している。内面にも横方向の条痕を施した後、軽くナデているようである。225は粗製の深鉢で、外面に右下がりの粗い貝殻条痕を施す。上下方向に2㎝おきに凹凸があり、粘土帯の接合部分と思われる。内面は丁寧なナデで仕上げ、器面は平滑である。両面とも小豆大の窪みが無数にあり、痘痕状を呈している。外面口縁部に煤状のものが付着している。胎土には大小の砂礫を多く含み粗い。226は粗製深鉢で、外面に横方向の粗い条痕を施している。内面は全面横ナデを施し仕上げている。外面の一部に煤状のものが付着している。器面の凹凸や窪みはほとんどない。227も粗製深鉢で、3か所の粘土帯接合部で割れている。外面にはやや右下がりの粗い貝殻条痕を施し、内面は丁寧なナデで仕上げているが、破片の最下部にかすかに条痕

が残っている。外面の一部に焦げ状のものが付着している。228は口縁端をわずかに外側に折り返し、折り返した部分の下側を押さえているため、結果的にわずかに突帯文のような形態をしている。内面は横ナデで仕上げている。外面は全面ナデで仕上げているが、点々と鋭利な道具でつけた短沈線状の痕があり、ヘラによるナデであろうか。両面とも器面は平滑である。口縁直下の一部に焦げ状のものがわずかに付着している。229は半精製の深鉢で、外面は横方向の条痕を施し、内面は横ナデで仕上げている。230は粗製深鉢で、外面はやや右下がりの粗い条痕で、内面は条痕の後ナデで仕上げている。231は粗製深鉢で、外面には粗い条痕を施し、内面は条痕を施した後に横ナデで仕上げていると思われる。232は半精製の深鉢である。破片の外面下部に条痕があるが、大半はヘラで横方向にナデている。内面は横方向のナデである。砂礫を多く含まず泥質で重たい。外面は煤や焦げが点々と付着し器面が荒れているため調整は不明瞭である。また内面は器面の保持が悪いため調整は明瞭ではないが、ナデのようである。

234～245は胴部途中に屈曲を有し、大きく外反する頸部を有する。234は粗製深鉢で228と同じく口縁端外面を下に折っている。外面は横方向の条痕の後に全面をていねいなナデ仕上げであるが、かすかに条痕が認められる。外面にわずかに焦げが付着している。235は粗製深鉢で、外面に井桁状に沈線を無数に引いている。沈線は細い棒状施文具で施され、沈線の間隔には規則性はなく、途中から始まっているものもある。左下がりの沈線群を先に引き、右下がりの沈線群を後に引いている。外面はナデで仕上げているが、かすかに条痕が認めれらる。内面は全面丁寧なナデを施している。粘土帯の幅は2～2.5㎝ほどである。

236～241・245は外反する頸部の上に短い口縁部が付く。包含層出土遺物の項で述べる深鉢A類に該当する。236は口径35.2㎝を測る粗製の深鉢で、胎土に大小の砂礫を多く含む。外面は条痕の後ナデを施し、内面は横方向の条痕の後ナデを施している。外面に煤または焦げが少量付着している。237は半精製の小型深鉢（口径25.6㎝）である。胴部屈曲部直上に沈線を1条巡らしている。外面屈曲部から上は縦方向のヘラナデ、屈曲部から下は右下がりの条痕を施している。内面は指押さえ及びナデ仕上げである。238は厚い器壁（1㎝）を有する半精製の深鉢である。口縁部付近に煤または焦げが付着している。両面ともナデで仕上げている。239は屈曲部から上が短い。器壁が厚い（1㎝）割には重さが軽く、粘土の比重が軽い。両面とも小豆大の窪みが無数にある。内面は横方向のヘラナデで仕上げている。外面は横方向のナデであるがヘラナデか。内面最下部に焦げ状のものが付着している。240は小片のため径は不確かである。口縁部は小さな山形を呈し、その下に沈線が巡るが、山形の部分で沈線が逆「ノ」の字状に上がっている。調整は両面ともナデ仕上げである。外面には煤状のものがわずかに付着している。241は両面ともナデで仕上げているが、外面の下部にはかすかに条痕が確認できる。外面上部には煤状のものが、内面下部に焦げ状のものが付着している。245は全面横ナデ調整で仕上げている。

242～244・246は胴部の破片である。242は屈曲部すぐ上に沈線を1条施している半精製の深鉢である。屈曲部から上の外面と内面底部近くに煤あるいは焦げ状のものが付着している。243は小片のため径は不確実である。半精製土器で、鉢であろうか。両面ともヘラナデ調整を施している。破片の下部に煤が付着している。244は粗製土器で、外面は粗い条痕を施している。内面には目の細かい条痕を施している。246は粗製深鉢の胴下半部である。外面はヘラで粗く削り気味になでている。内面はていねいになでている。

247～259は深鉢の底部である。粗製土器が多いが、250～252は半精製土器で胎土に砂礫をあまり含まない。粗製土器には器表面に小豆大～ドングリ大の窪みが多い。248・249には外底部に木の実

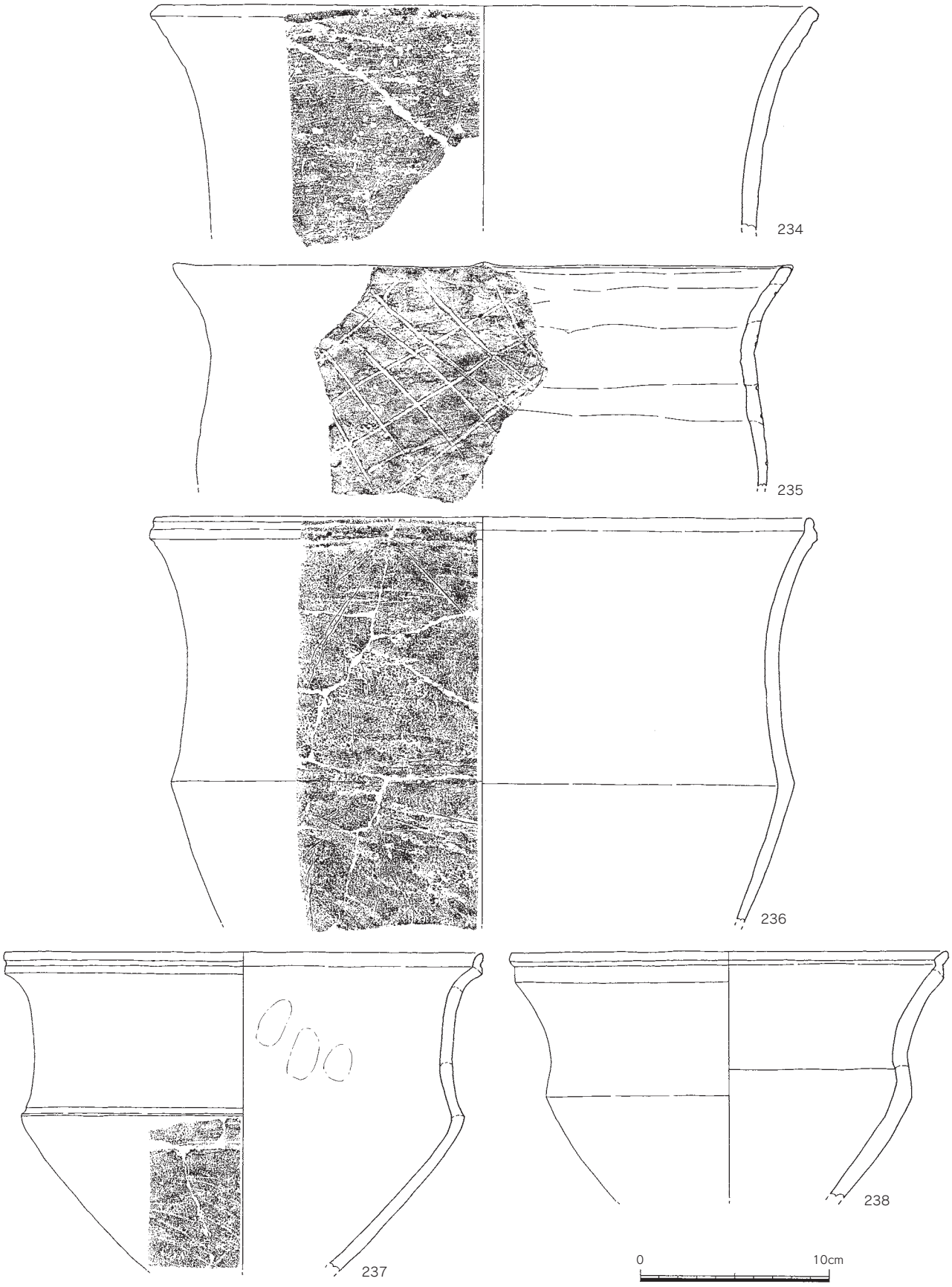
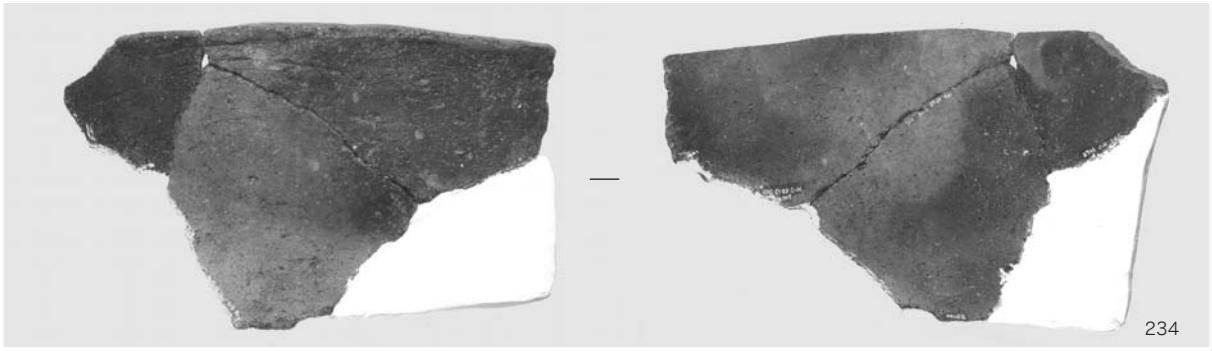
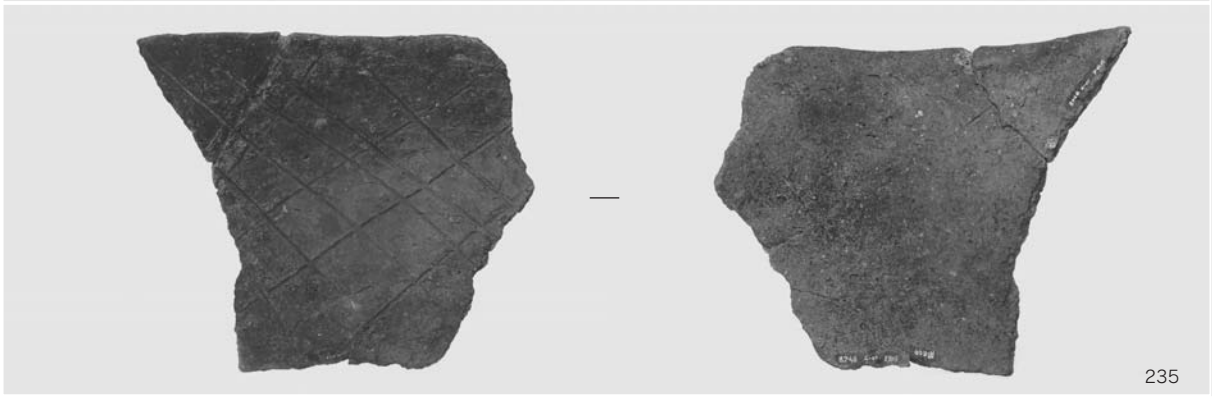


図52　SC01覆土出土遺物図 3（1/3）





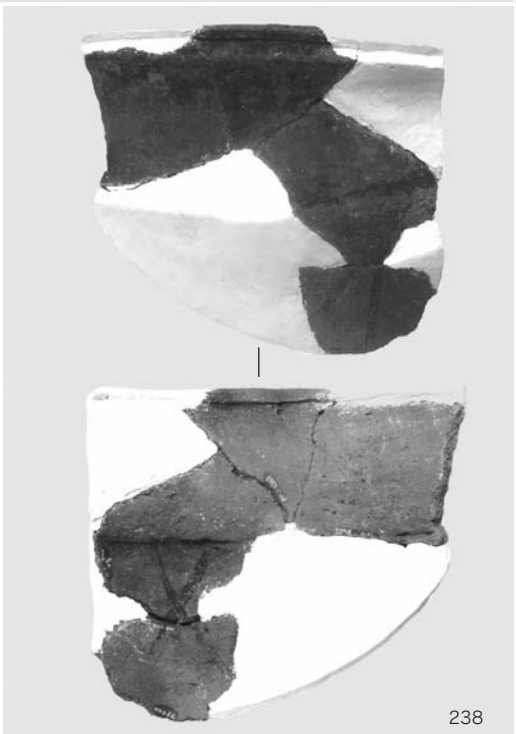


写真50　SC01覆土出土遺物 3

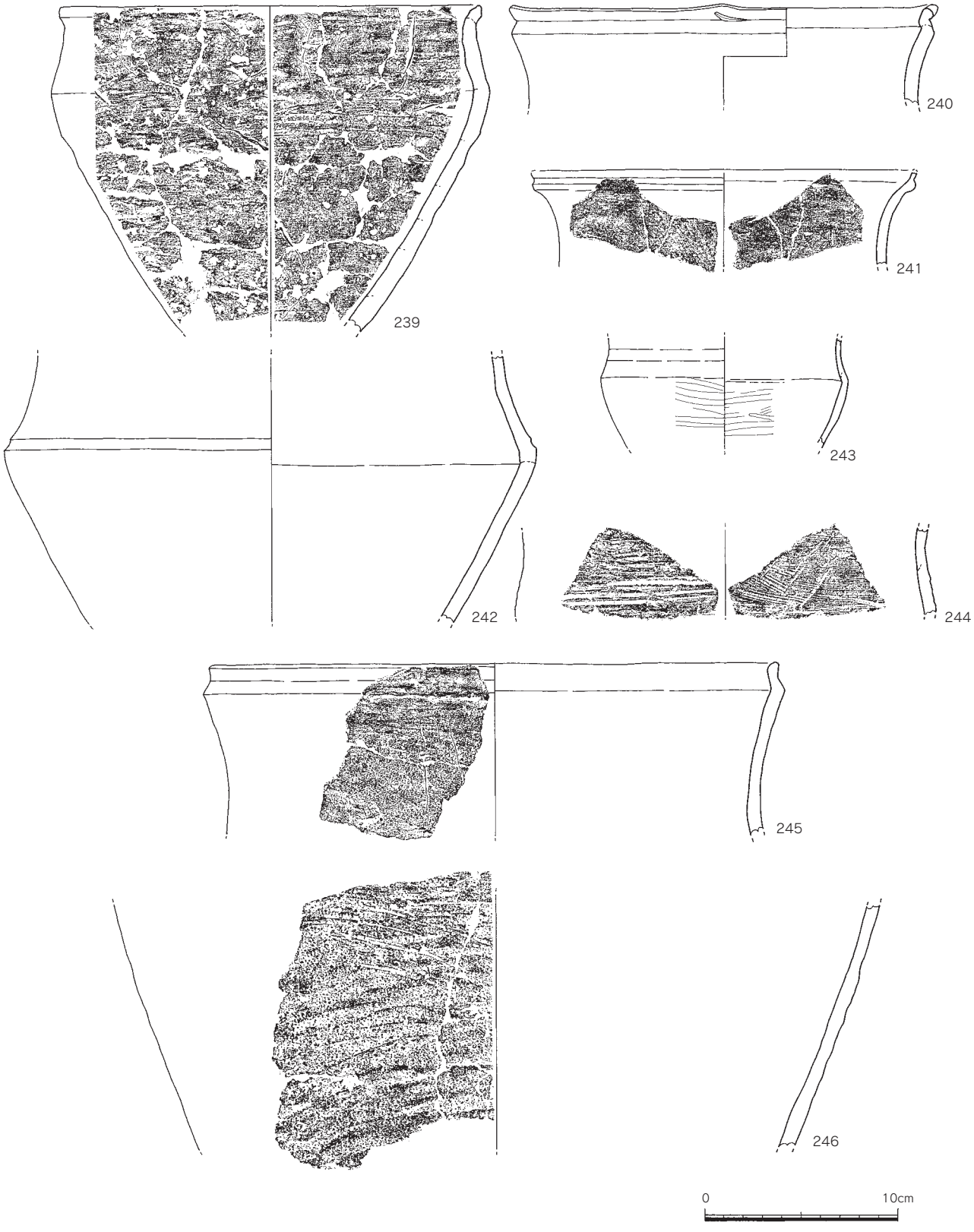


図53　SC01覆土出土遺物図 4（1/3）

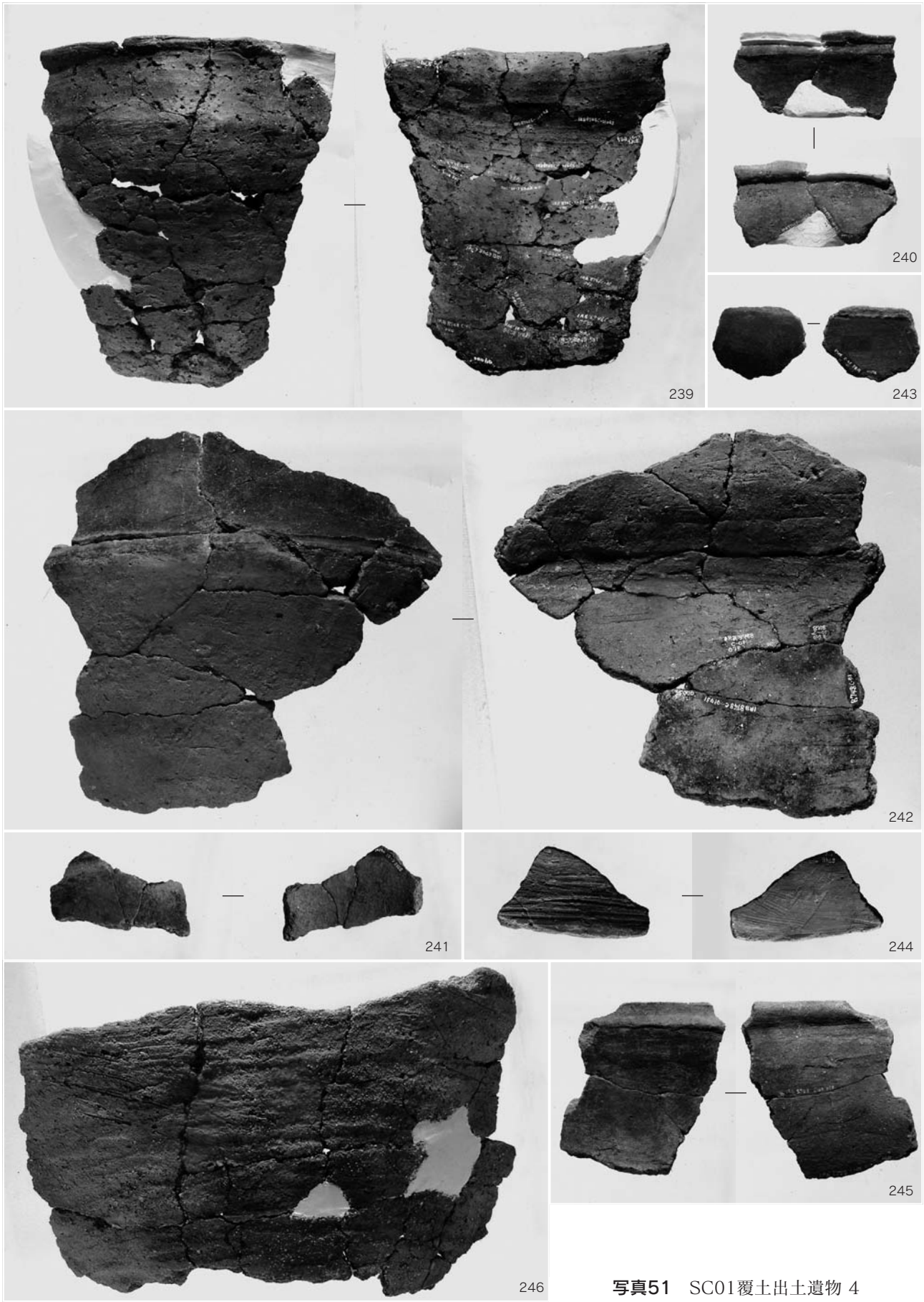


写真51　SC01覆土出土遺物 4

状の圧痕がある。250・252両面丁寧なナデ仕上げである。251は高台状の底部で、外底部には条痕を施している。内底部に焦げが付着している。254は摩滅のため不明確ではあるが、組織痕らしきものが認められる。255には木の葉の圧痕がある。259にはドングリの圧痕がある。

260～281は浅鉢である。260は精製土器で、外面は褐色、内面は黒色を呈し、両面ともヘラ磨きを施している。口縁部はわずかに山形を成し、山形の下の口縁部と頸部の屈曲部に長さ1㎝大の刻みを施している。261は胎土に砂礫をやや多く含む粗製に近い土器で、両面ヘラナデで仕上げているが、内面下部に横方向の条痕が残っており、深鉢の可能性もあるが、煤・焦げ等の付着はない。口縁部は

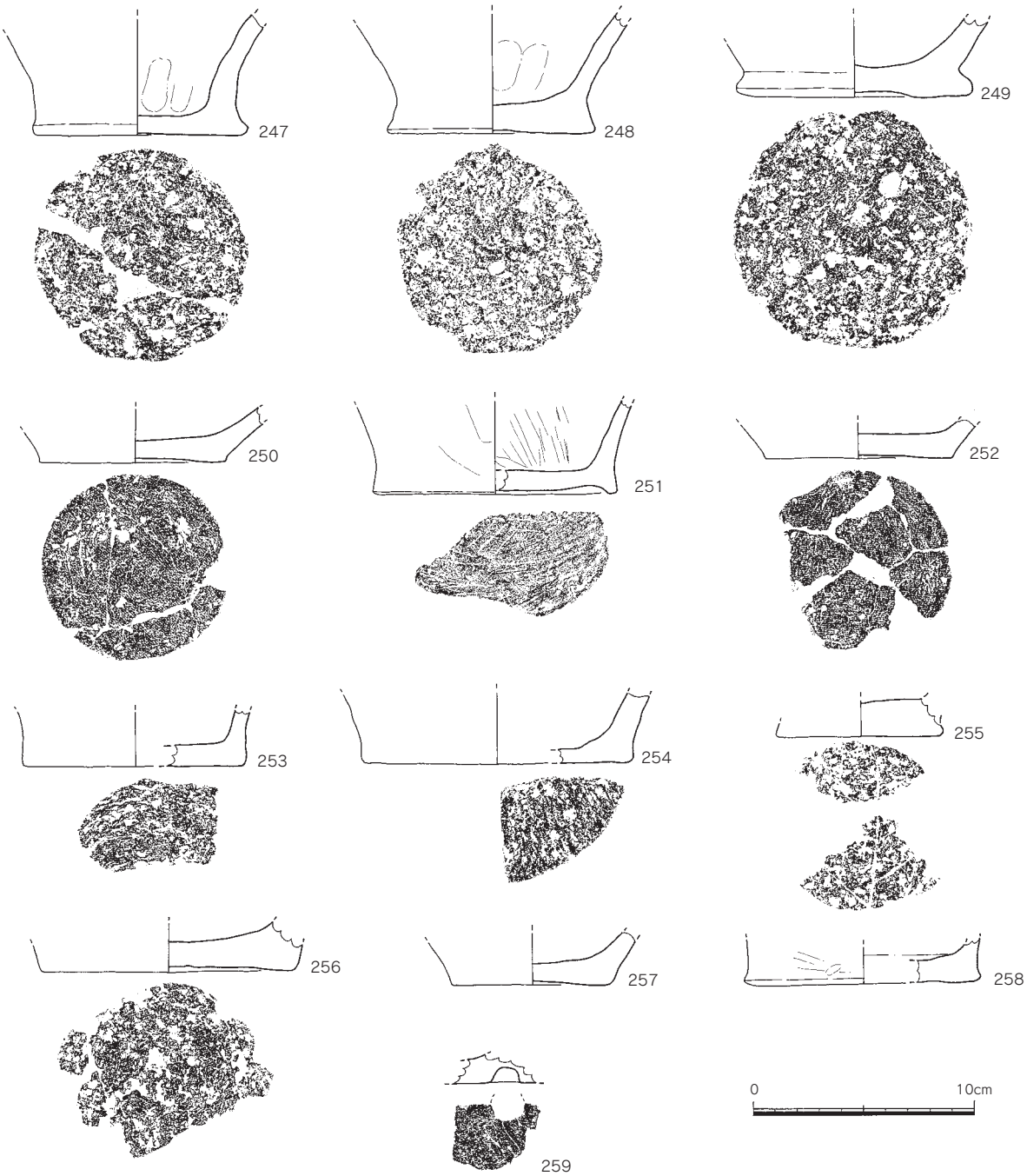


図54　SC01覆土出土遺物図 5（1/3）

わずかに山形を呈する。262は口径30㎝を測る半精製の浅鉢である。胎土に砂粒を多く含み粗い。両面ともヘラ磨研を施すが、胴部屈曲部以下はていねいではない。口縁下と胴部の屈曲部に押点を施している。263は口径30.8㎝を測る無頸の浅鉢で、胎土はやや粗いが、黒色～灰黒色を呈する精製土器である。両面とも幅2㎜前後のヘラ磨研を施している。口縁直下の2条の沈線間に押点を1つ施している。264は砂礫を多く含む半精製土器で、口径36.6㎝を測る大形の皿状浅鉢である。外面はヘラナデで内面もナデ仕上げでヘラナデか。外面口縁部付近に煤状のものがかすかに付着している。265は半

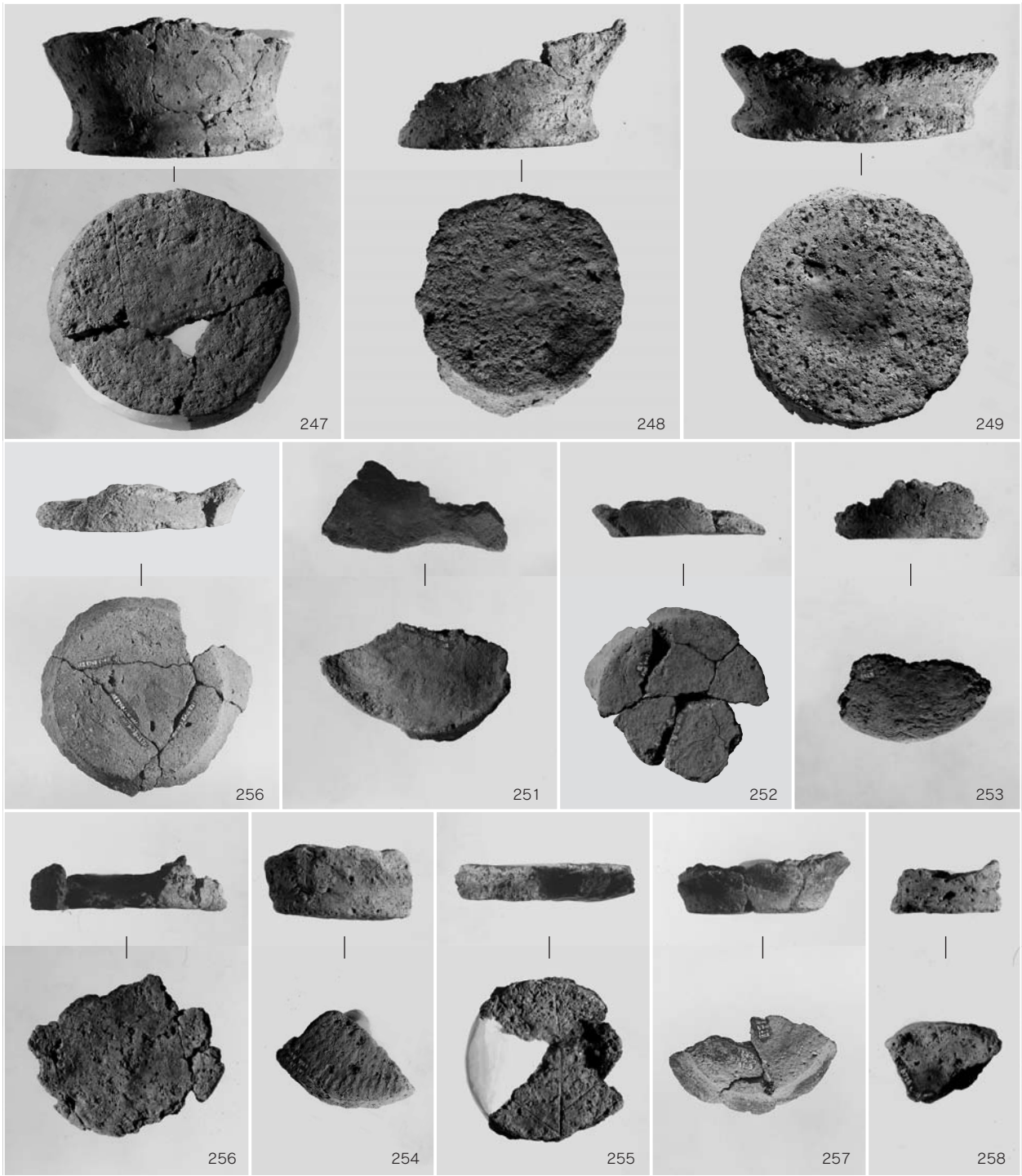


写真52　SC01覆土出土遺物 5

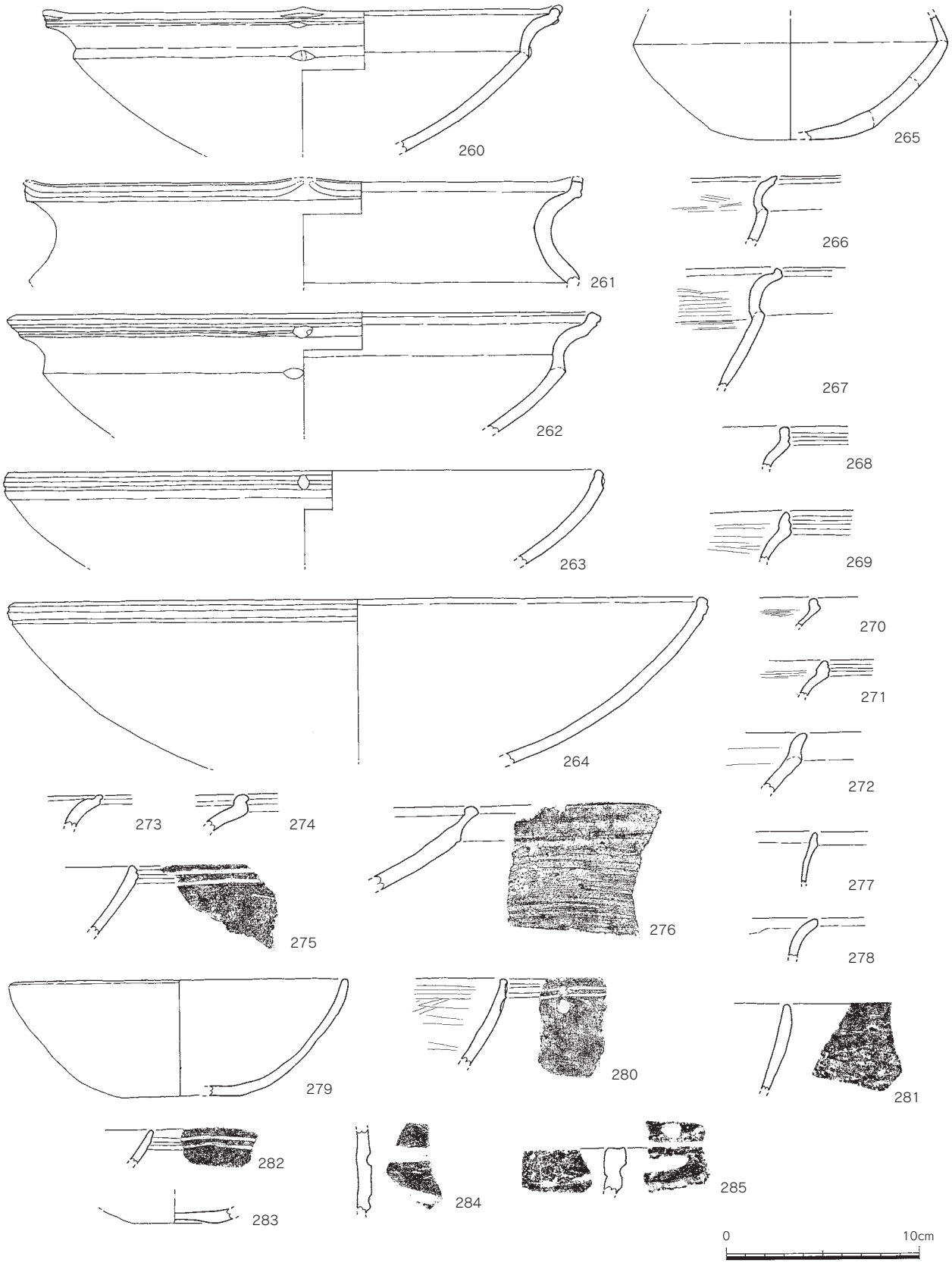


図55　SC01覆土出土遺物図 6（1/3）

精製土器で、外面はヘラ磨き、内面はナデ・ヘラナデで仕上げている。279は半精製の無文土器である。口径17.7㎝、器高6.1㎝の小型の椀状を呈する。両面ともヘラナデで仕上げている。283は底部片で、外面ヘラ磨き、内面ヘラナデで仕上げている。284・285は阿高系の凹線文土器で、胎土に滑石を多量に含んでいる。

土製品・土器片利用製品

286は深鉢の底部を利用した製品である。底部片の中央に両側から穿孔している。楕円の長い方の両辺中央付近がともに少し欠けており、紐の緊縛痕の可能性もあるが明確ではない。 287・288は有孔土製品で、287は厚さ3㎝と厚い。ともに圧痕状の窪みが多くある。289は焼けた粘土塊のようなも

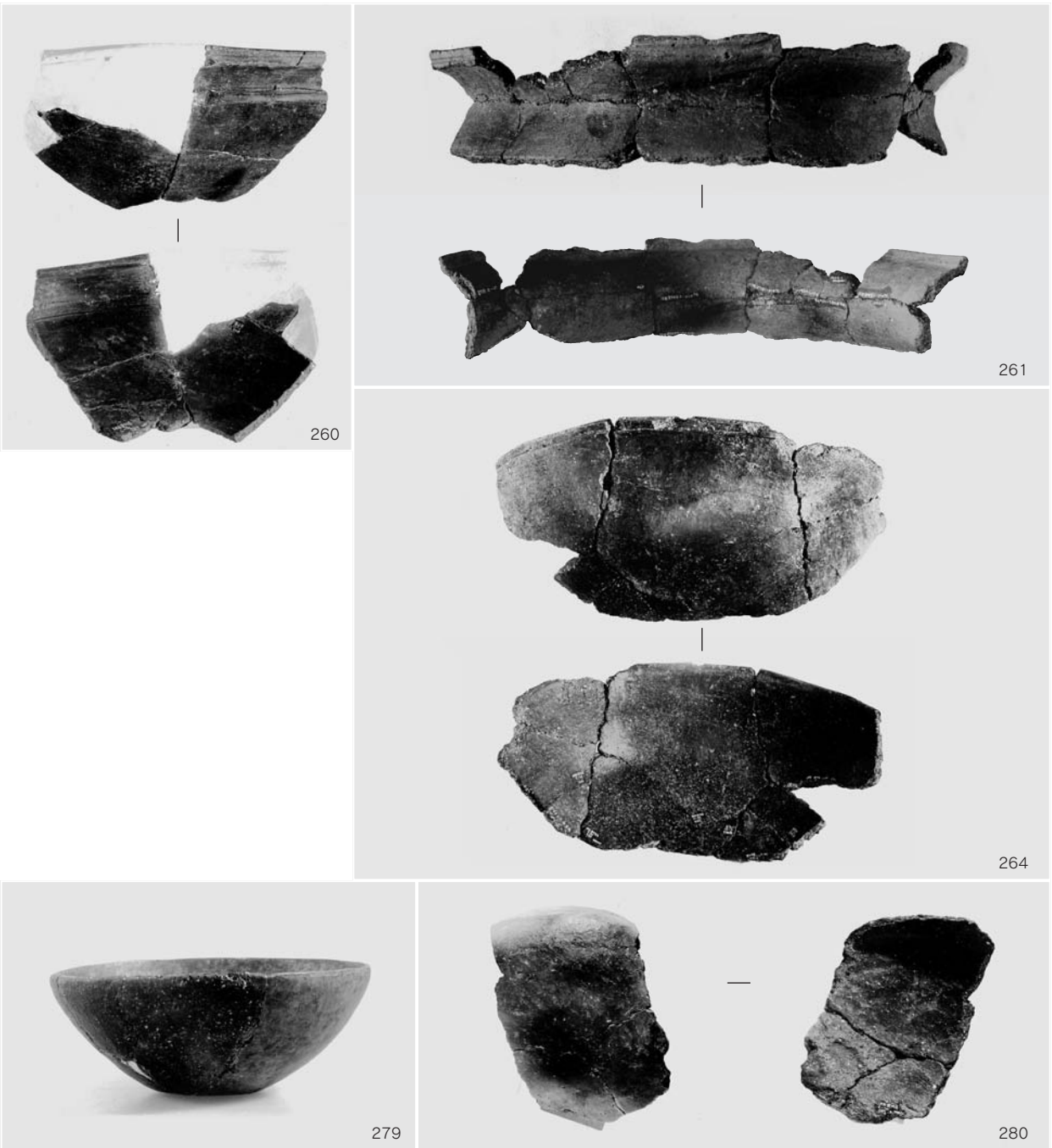


写真53　SC01覆土出土遺物 6

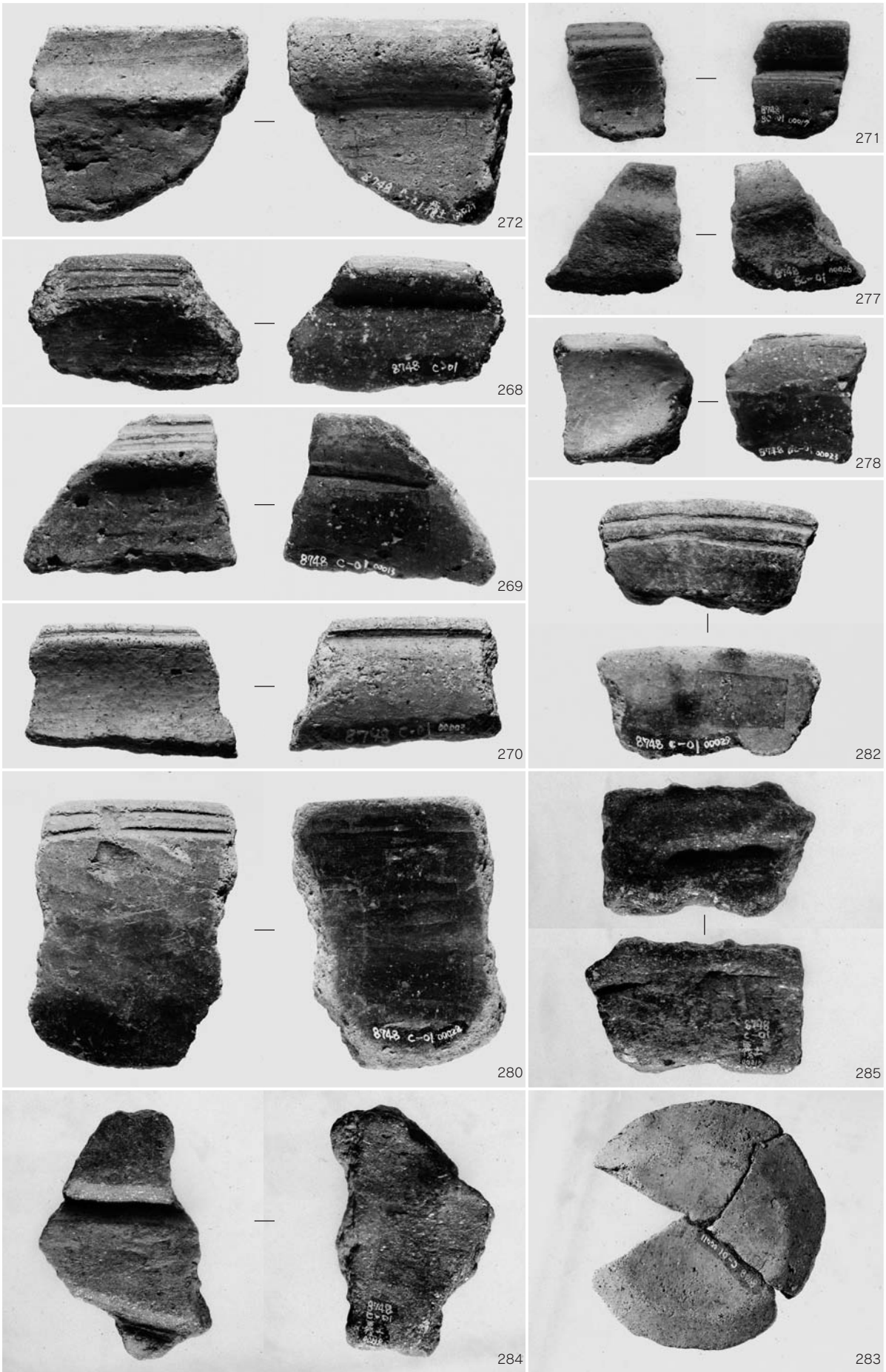


写真54　SC01覆土出土遺物 7

のである。左図の右上端だけ粘土の質が異なっている。290は条痕文土器の胴部片を利用した土製品で、破片の割れ口を擦り、全体を亀の甲形に整えている。（米倉）

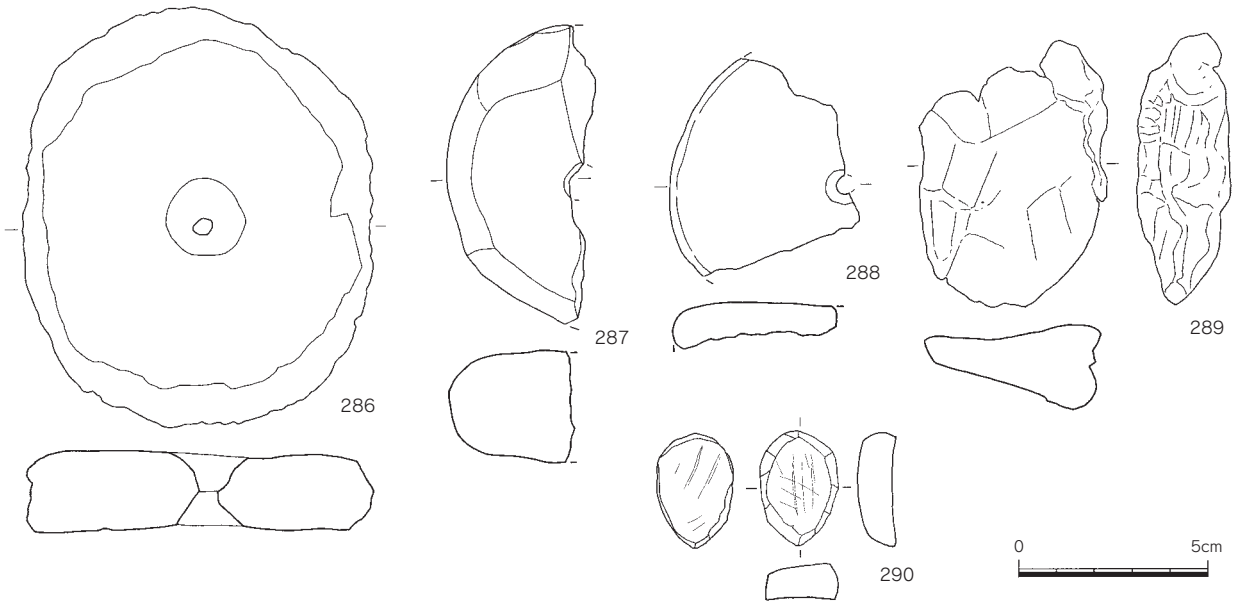


図56　SC01覆土出土遺物図 7（1/2）

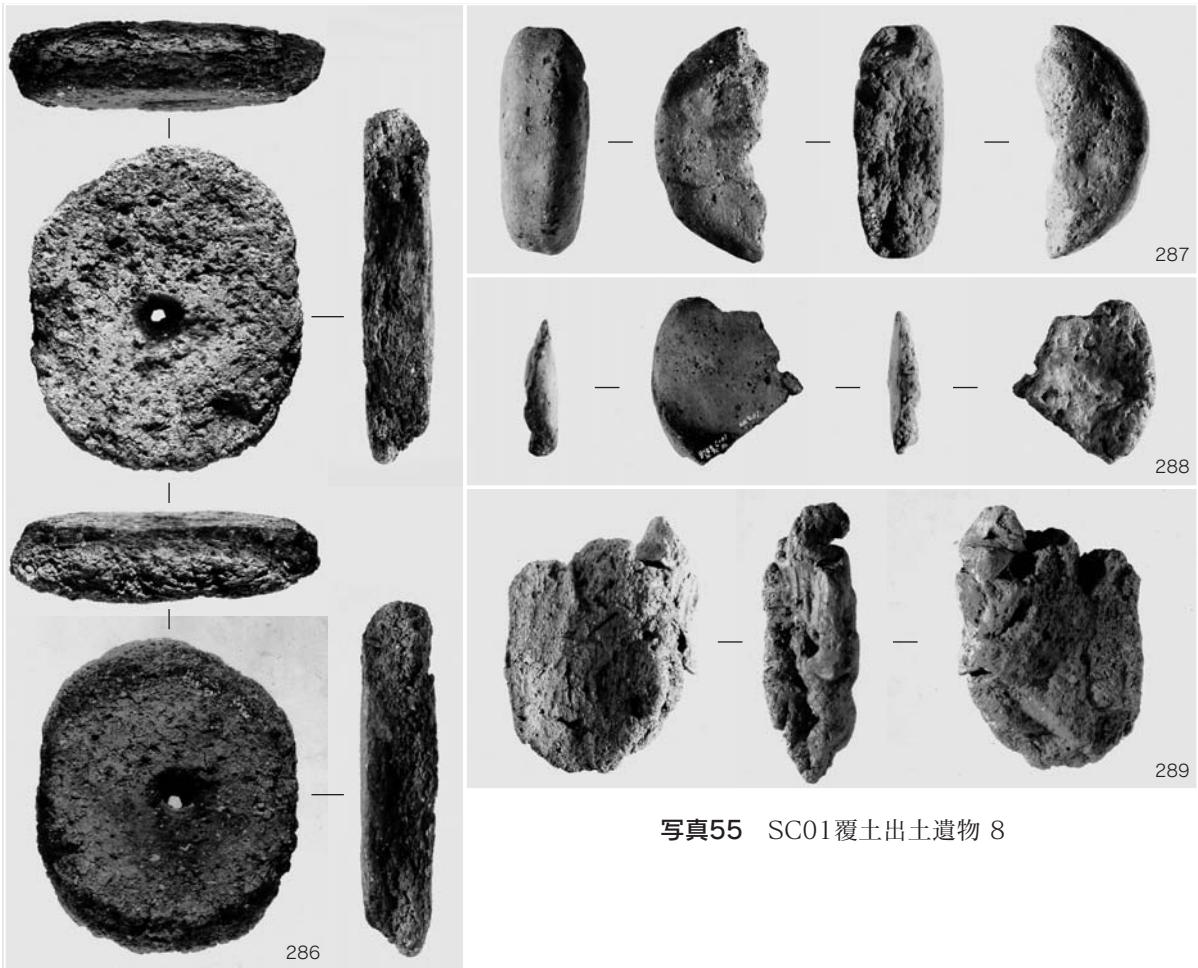


写真55　SC01覆土出土遺物 8

石器

291は安山岩製石鏃で、長さ2.2㎝、幅1.2㎝を測る。欠失部はない。292はサヌカイト製の横長剥片で、長さ3㎝を測る。下側縁には微細剥離が連続して見られるが、使用痕と思われる。293は漆黒色黒曜石製の縦長剥片で、両側縁とも使用痕が残っている。294も漆黒色黒曜石製の縦長剥片で、折損している。右側縁に自然面が残っている。両側縁は使用痕ではなく、細かな剥離を加えており、刃器ではない。297は玄武岩製扁平打製石斧である。薄い剥片を利用し、両面とも主要剥離面を残して、刃部・頭部・片側側縁に調整を加えている。刃部の摩耗があまり認められず、未成品もしくは使用度が低い製品の可能性もある。296は安山岩製の磨製石斧である。図の左面にはほぼ全面敲打痕が残り、刃部と刃部に近い部分のみ研磨を加えている。右面には調整による剥離面が残り、刃部及び刃部に近い部分に研磨を加えている。刃部は一部欠損しているが、残存部分の刃先は潰れており、敲石等に転用し、欠損部は転用後の使用によって生じたものと考えられる。幅6㎝厚さ3.3㎝を測る。295は磨製石斧である。両側縁にわずかに敲打痕が残っているが、ほぼ全面研磨で仕上げている。もともと石斧に近い河原石を選び、部分的に敲打を施した後に全面研磨を施して形を整えたと思われる。左面の中央やや下が窪み、その部分から下は特に入念な研磨を施して、ほぼ平坦面を作り出し、全体を丸ノミ状の形態に作っている。研いでいるため、結果的に平坦面を成して丸ノミ状を呈したとも考えられるが、この部分の研磨が特に入念で他の部分とはまったく異なり、刃先の形態も丸ノミの形態を成していることから、当初からこの形状を意識しているのは明かである。298は花崗岩製の、断面形が長方形を呈する磨石で、4面とも完全に擦られている。先端面には敲打痕が広く残り、敲石として使用している。平面図の裏面中央近くには径1㎝程の敲打痕状の痕跡が残っている。300は花崗岩製である。石の全体が風化が進んでいるのに対し、図の表面中央の窪み部分周辺のみが磨いた状況に近いことから凹石として図化したが、凹みや研磨が明瞭でないこと、反対面の断面形が三角形を呈して座りが悪いことから、石器でない可能性もある。299は砂岩質の石材の扁平な石器である。両面ともつるつるに磨かれているが、磨かれている部分に微妙な凹凸があること、研磨線がまったくないことなどから砥石ではなく、小型（長さ15.5㎝）の石皿ではないかと考えられる。両側縁と両平面の縁辺部は自然面である。（米倉）

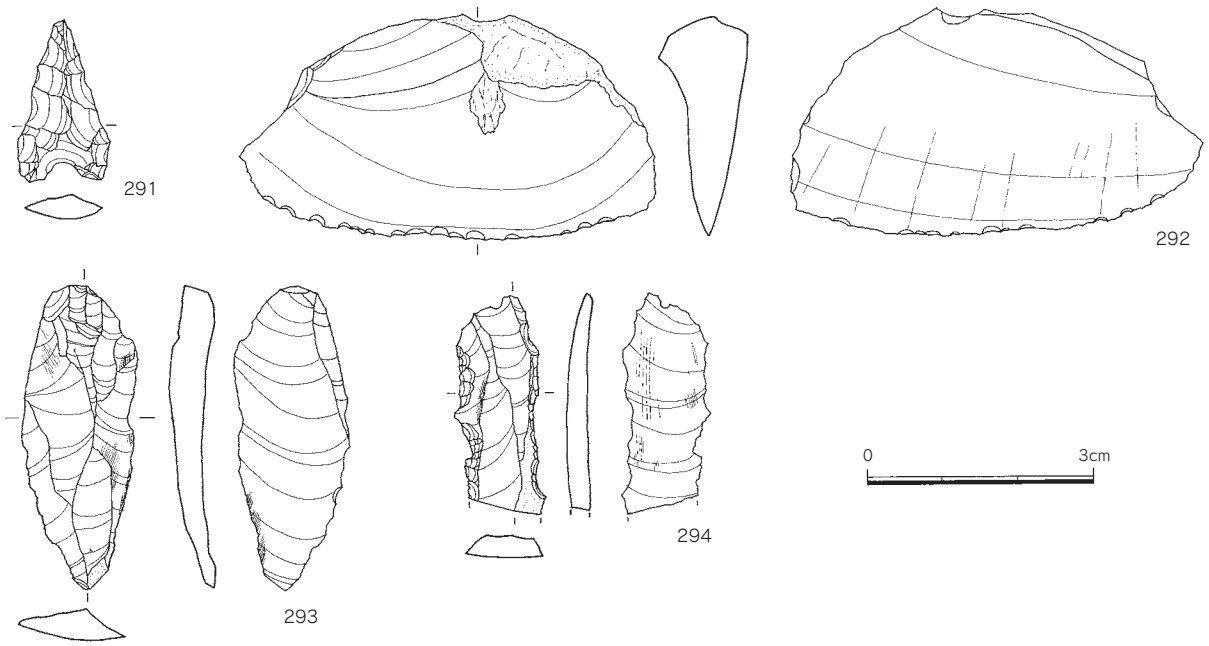


図57　SC01覆土出土遺物図 8（1/1）

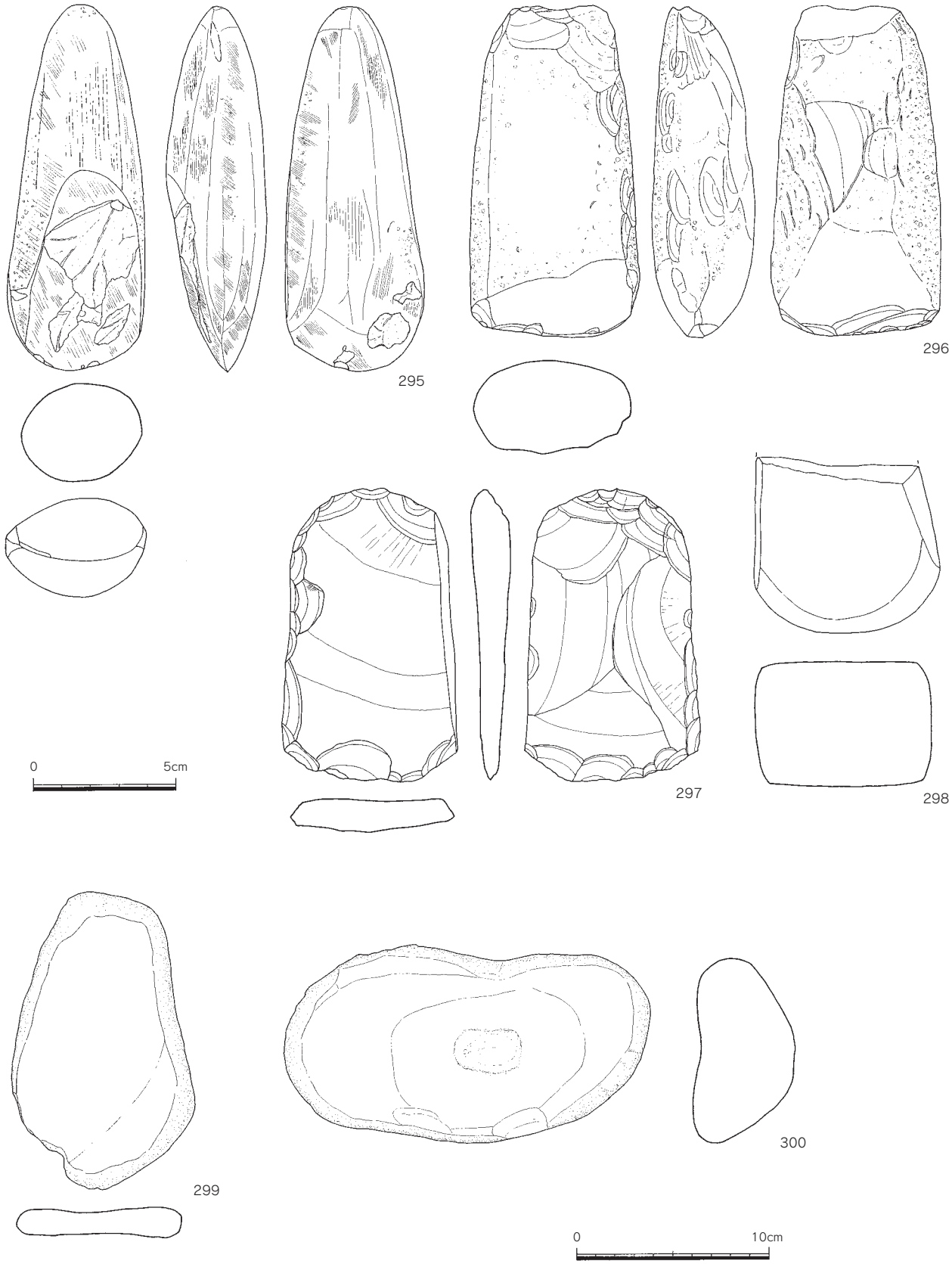


図58　SC01覆土出土遺物図 9（1/2・1/3）

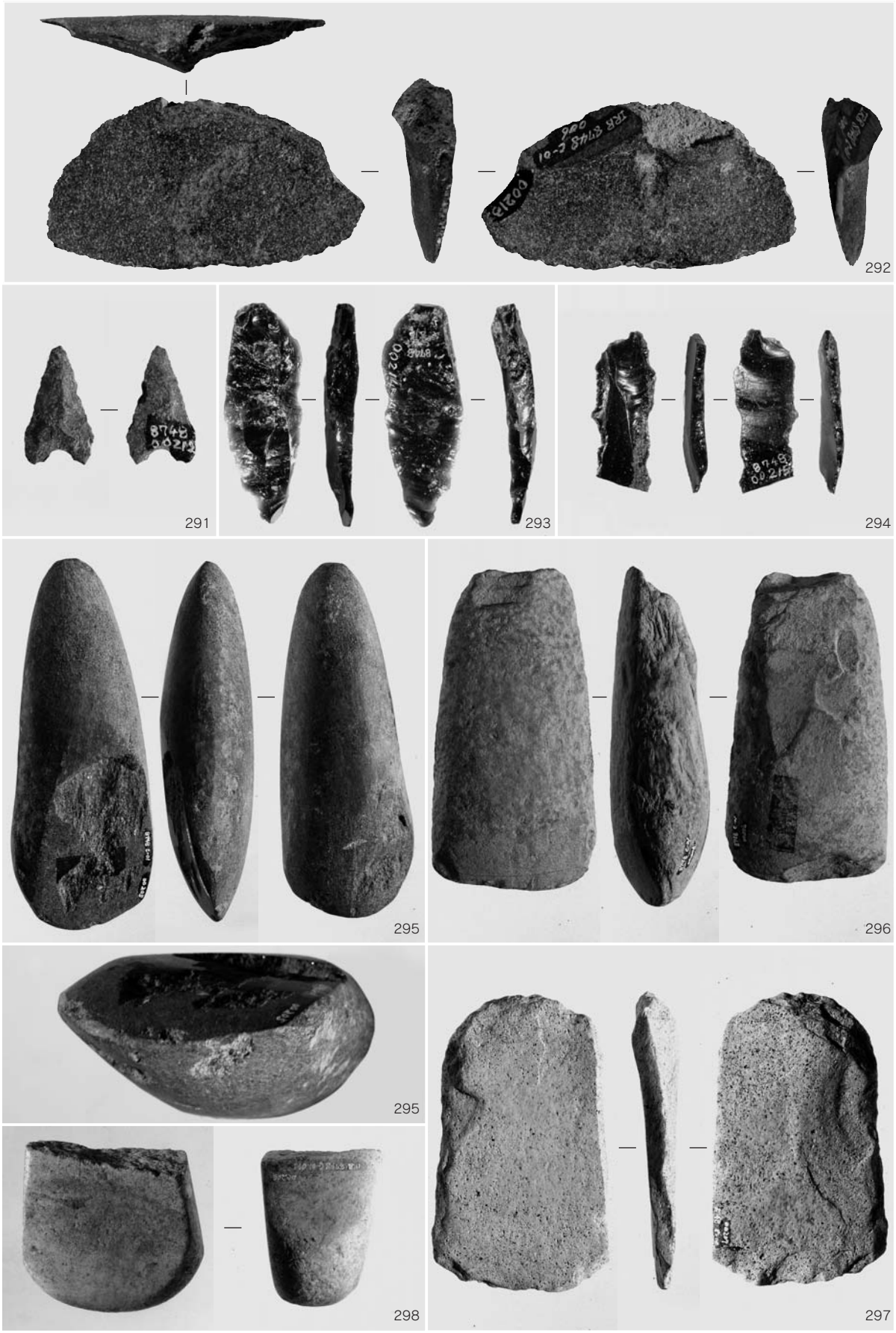


写真56　SC01覆土出土遺物 9

写真57　SC01覆土出土遺物 10

SC03竪穴住居跡

（図59、写真58）

SC03は、SC01より北東約14mで検出した。東側3mにはSC04、さらにその東約6mにはSC05があり、3軒がほぼ東西一直線に並んでいる。これら3軒は、土壙、埋甕、さらに遺物包含層（散布地）を取り囲むような位置に当たり、ピットやわずかながらも遺物が集中し、その範囲がSC01と大差のない直径4m前後に収まることから、発掘現場では竪穴住居跡として実測や撮影を行った。先にも記したように縄文時代集落の全貌を明らかにしたいという願いだけでなく、「入部遺跡だより」に掲載し見学者や発掘作業員への広報、説明に活用したいという狙いがあったのは事実である。今、実測図、写真、そして調査日誌などで冷静に判断すると、壁はなく、またSC01のよ

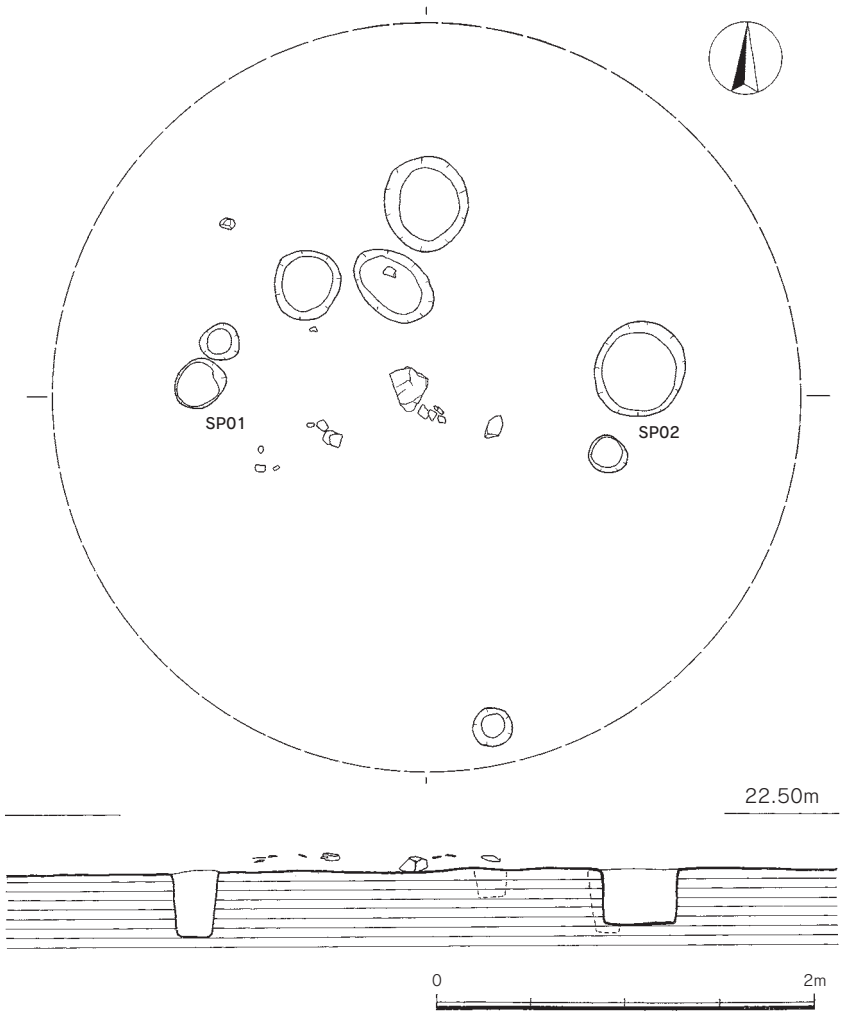


図59　SC03実測図（1/40）

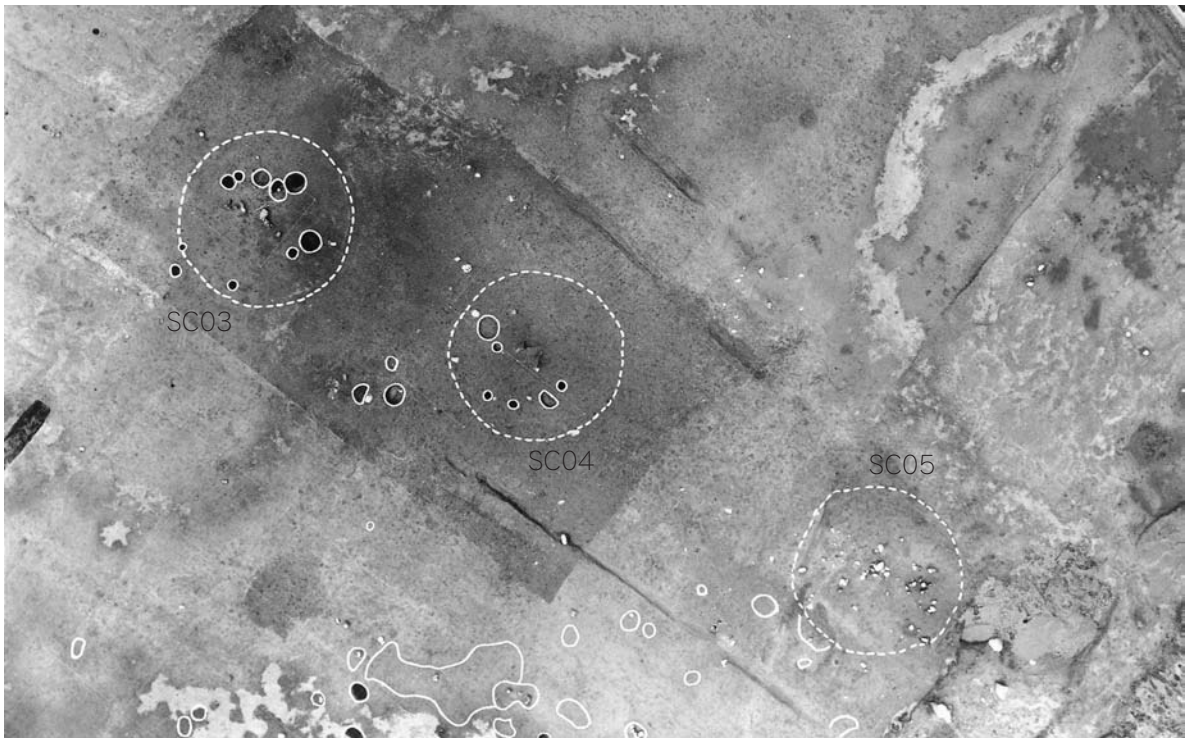


写真58　SC03～SC05

うに床面と識別できる変色や貼り床もなく、竪穴住居跡としての平面プランを掴むことは不可能である。また炉跡の焼土や炭化物も残っていない。検出した大小計8個のピットは、SC01の主柱穴と同じような形状と深さのものも確かにあるが、一か所に集まりすぎている。むろん現代人の常識で縄文時代の家屋構造を想像すべきではないが、SP1とSP2の二本柱としてもやや無理な感じがする。遺物は中心部で数点の縄文土器が出土

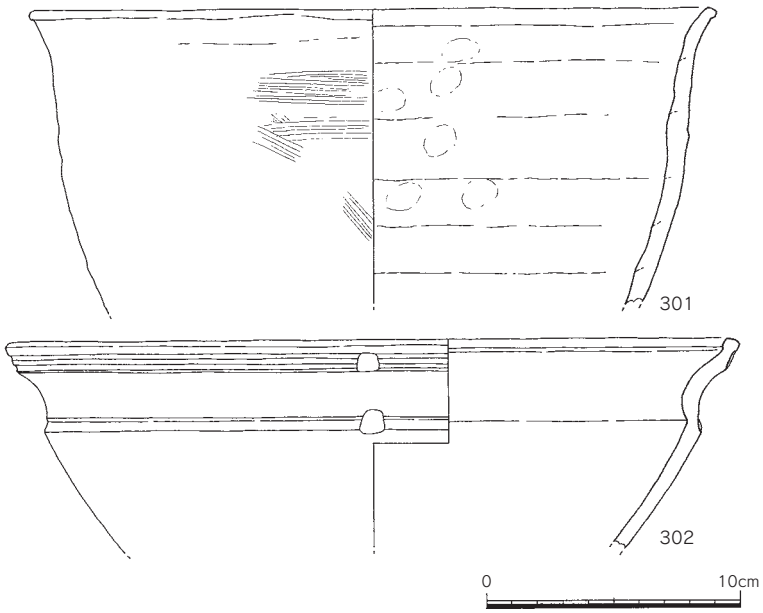


図60　SC03出土遺物図（1/3）

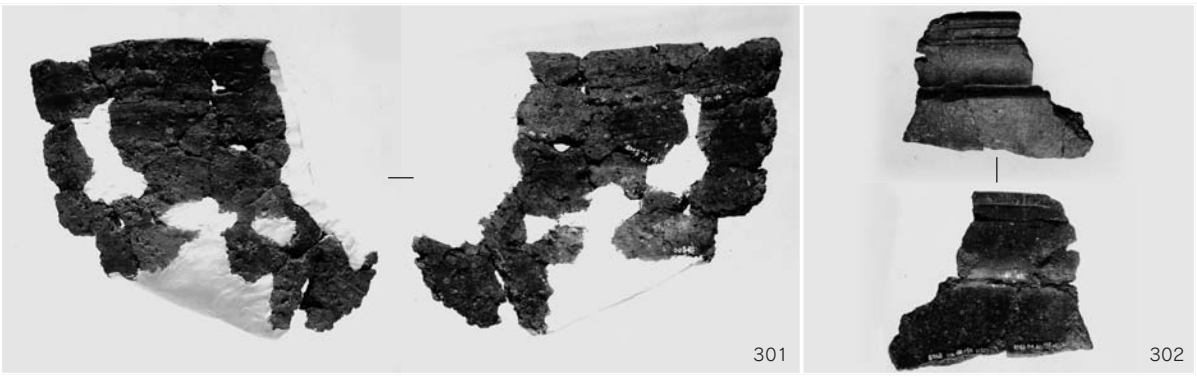


写真58-1　SC03の出土遺物

した。また有孔円盤の出土も確かに記録しているが、整理時に所在不明となり、掲載できなかった。土器は図化可能な2点を図示した。（力武）

SC03出土遺物（図60、写真58）

出土遺物は少なく、ビニール袋1袋に満たない。301は粗製の深鉢で、両面ともケズリぎみナデ調整である。外面口縁部直下には、横方向に指で押しながらなでている。かなり熱を受けているようだが、煤・焦げ等は確認できない。両面とも砂礫が抜け落ちた小豆大の凹みが無数にある。302は微細な砂粒を多く含む半精製の浅鉢である。両面とも調整はヘラ磨きである。（米倉）

SC04竪穴住居跡（図61）

SC04は、SC03とSC05に挟まれている。SC03と同じように壁がなく竪穴住居跡と断定する根拠が薄いが、炉跡と思われる茶褐色の焼土を中心にして大小7個のピットが囲み、わずかながらも土器も出土していることから、並ぶ3軒の中では最も竪穴住居跡の可能性は高い。中央の焼土を炉跡としたが、その厚さはわずか数㎝で下部が窪んでいるわけではない。石囲い炉やSC01のような土器を利用した炉とすると、削平は壁の高さだけでなく床面下まで達しており、炉跡最下部の焼土だけが辛うじて残ったことになる。とするとピットの深さもその分加算できるが、主柱穴としてはあまりにも浅すぎる。（力武）

SC04出土遺物

（図62、写真59）

出土遺物は少ない。303は粗製深鉢の底部で上げ底である。全面ナデ調整で仕上げている。かなり被熱している。（米倉）

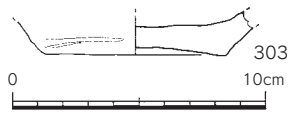


図62　SC04出土遺物図（1/3）

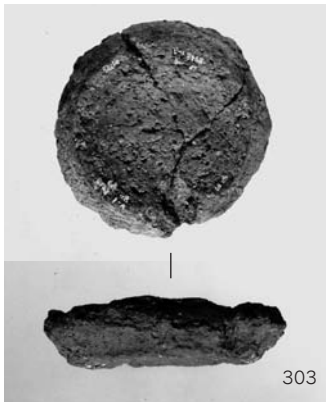


写真58-2　SC04の出土遺物

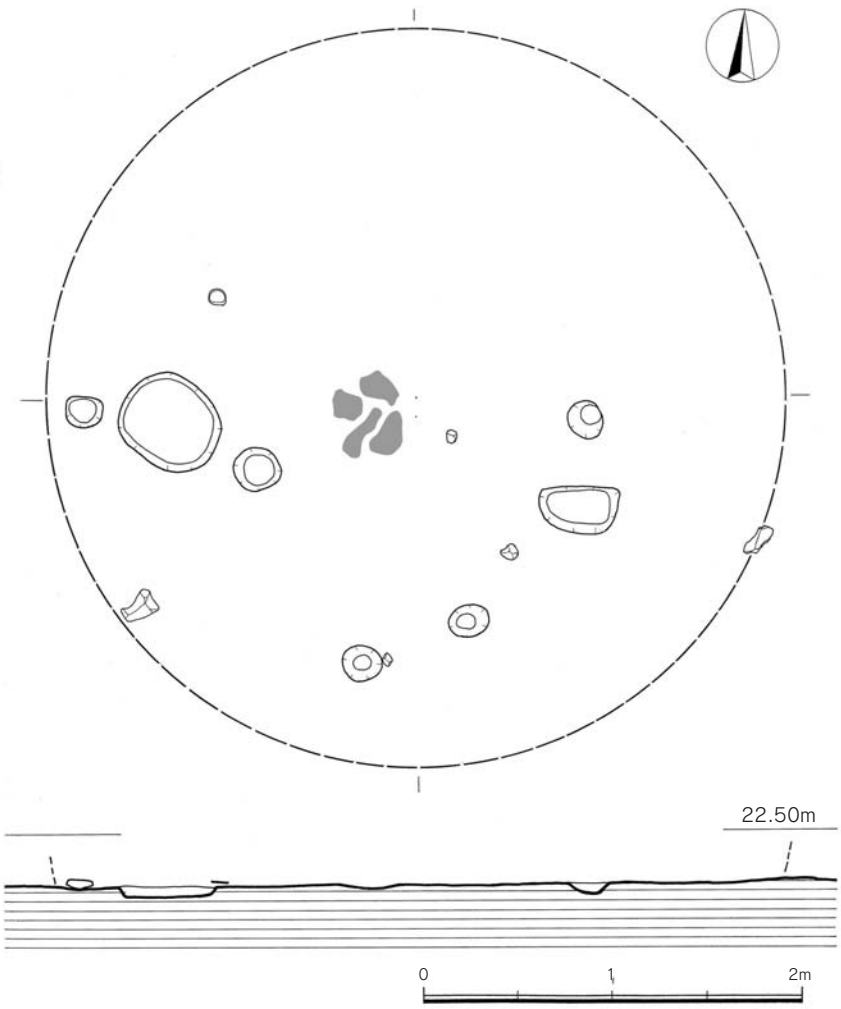


図61　SC04実測図（1/40）

SC05竪穴住居跡（図63、写真61、62）

3軒の竪穴住居跡のうち最も東側に位置しているのがSC05である。3軒の中では遺物量が多い。土器、石器の点数以上に小振りの自然石が目立つ。これらは部分的に集中するのではなく、全体に散らばっているように見える。同じように平面プランを直径4mほどの大きさを想定しラインを引いたが、南側に130㎝×95㎝、深さ15㎝程の不整楕円形の土壙が重なっている。この土壙との先後関係を明瞭に出来なかったが、この覆土には焼土が乗っている。これらの遺物や自然石を取り上げると、さらに下部の北側に片寄って大きめの土器破片がまとまって現れた。また東側では130㎝×90㎝の楕円形土壙を検出した。図63はこれら上、下面の遺物出土状況を合成したものだが、その南北断面では、北側に向かって傾斜しながら遺物が包含されていることが分かる。3本のトレンチを設け、土層の観察を行ったが、壁の立ち上がりや床面の確認は出来なかった。また柱穴と思われるピットもない。焼土のある南側の土壙を炉跡と考えたが、遺物の中心から外れ、さらに下部で見つかった北側に傾斜する遺物包含層からしても、竪穴住居跡と断定するのは無理だろう。言い訳になるが、下部の確認作業は最終日の3月30日に行ったもので発掘現場での判断は時間的に困難だった。（力武）

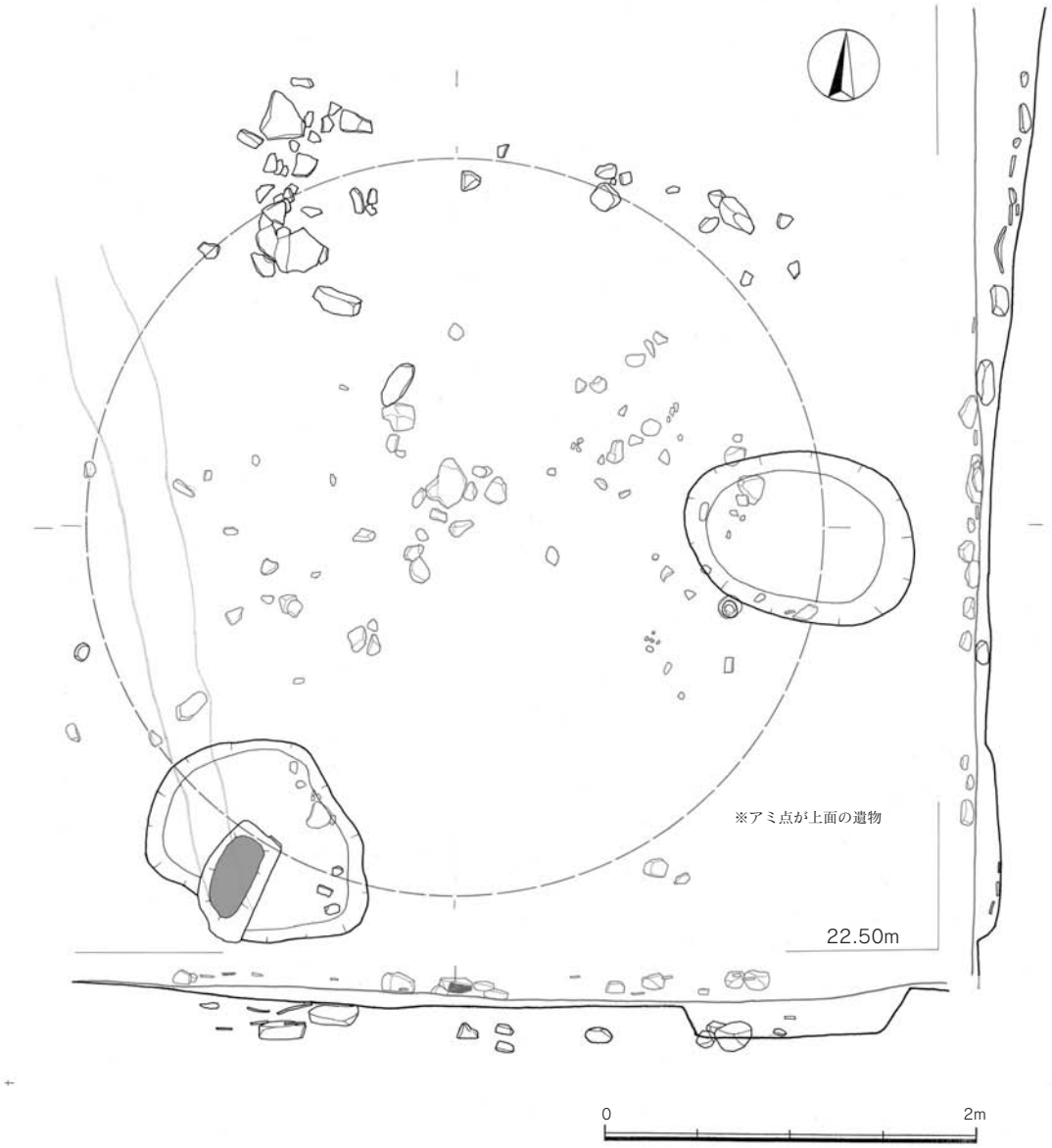


図63　SC05実測図（1/40）

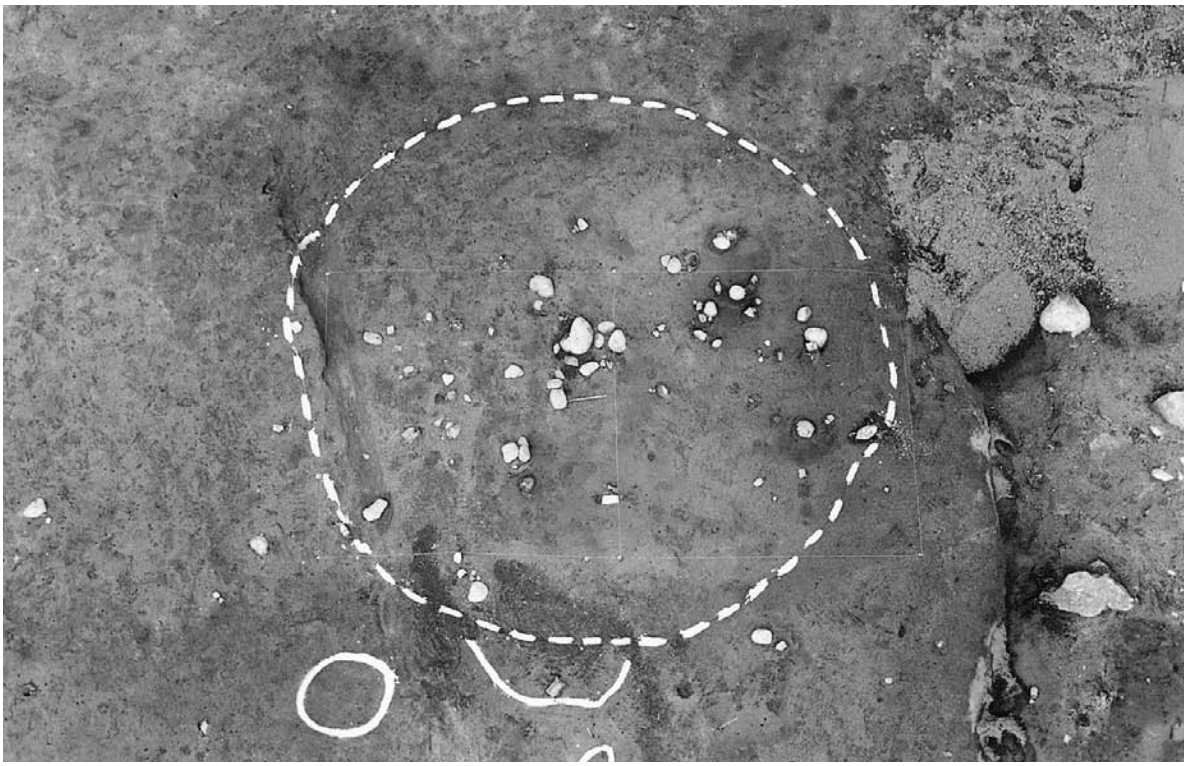


写真59　SC05

写真60　SC05の遺物出土状況

図64　SC05出土遺物図 1（1/3）

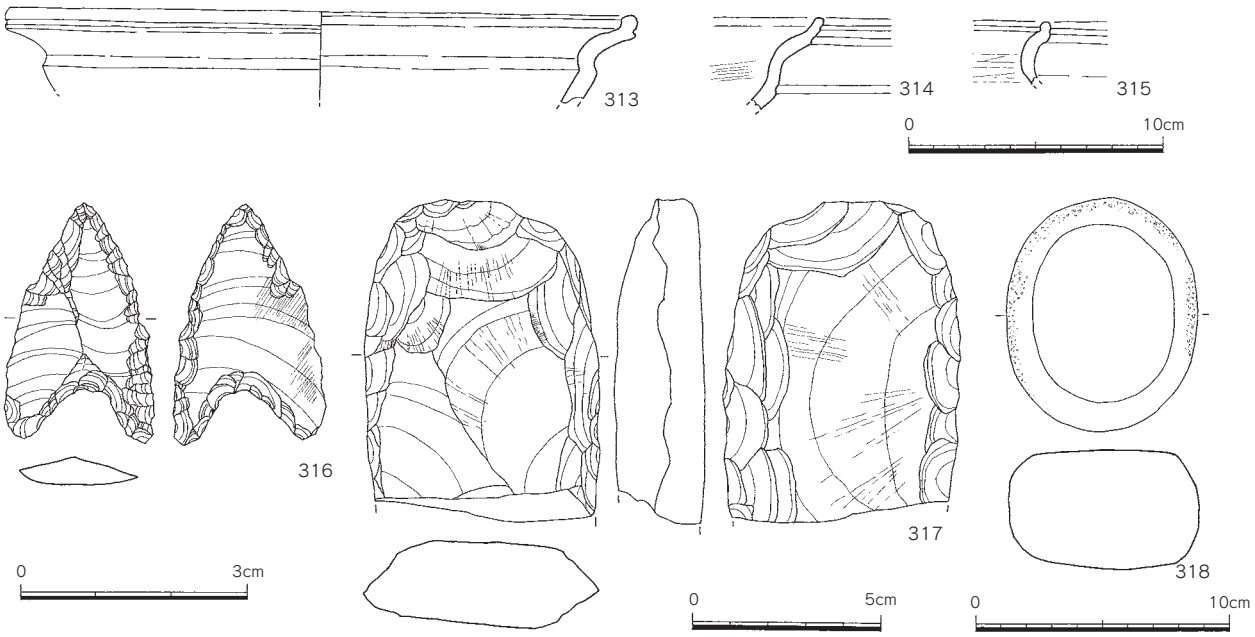


図65　SC05出土遺物図 2（1/3・1/2・1/1）

SC05出土遺物（図64・65、写真63・64）

コンテナ1箱が出土した。304は器壁が厚い（13㎜）半精製の深鉢である。外面は粗い貝殻条痕を施す。内面は胴下半部が横方向、胴上部は斜方向に幅1㎝前後で削っているが、ヘラによるものであろう。口縁部は指押さえの後、なでている。口唇部には刻目を施している。胴最下部に焦げもしくは煤が付着している。305は半精製の深鉢で、両面ともヘラにより横方向にナデで仕上げるが、外面口縁部はさらに指で横になでている。外面には煤状のものがかすかに確認できる。306は半精製の深鉢で、外面に横方向の貝殻条痕を施し、内面と外面の口縁端部はナデで仕上げている。内面に米粒大の圧痕らしきものがある。焦げ等は付着していない。307は半精製の深鉢で、口径28.5㎝、推定器高約約33㎝を測る。外面の調整はヘラによる削り気味のナデ、内面も基本的には同じであるが、肩の接合部分のみ指による押さえや横ナデも施されている。色調は外面が淡黄色系で、内面は黒褐色である。外面に黒斑はあるが、焦げや煤は確認できない。308は粗製の深鉢で、調整は外面が貝殻条痕の後に一部ナデ、内面は横ナデである。外面にわずかに煤が付着している。309も粗製の深鉢で、調整も308と同様である。310はかなり砂質な胎土の深鉢で、両面ともナデ調整である。外面にわずかに焦げ状のものが付着している。311は粗製の深鉢で、外面はヘラによる削り状の横ナデのため小さな突帯状を呈している部分がある。内面は横方向の条痕である。口縁部下4㎝のところに孔径約1㎝の焼成後穿孔が施されているが、補修孔か。312は両面とも条痕を施した粗製深鉢である。内面に条痕を切った沈線があるが、文様ではないであろう。313は厚手（器壁8㎜）の半精製浅鉢である。両面ともヘラによるミガキに近いナデである。314もヘラ磨きで、特に外面にヘラの痕跡が多く残っている。315も両面ともヘラ磨きを施している。

316は漆黒色黒曜石製の縦長剥片を素材にした打製石鏃である。両面とも主要な剥離面を残し、周縁部のみを調整している。317は玄武岩製の石斧である。横長の剥片を利用し、厚さ2.4㎝を測る。折損しているため、打製石斧か磨製石斧の未成品か明確ではないが、厚みと形状から小型の磨製石斧の未成品である可能性も考えられる。318は花崗岩製の磨石兼敲石で、いわゆる石鹸状磨石である。両平面は磨かれた結果完全に平坦になり、側面と稜を成している。側面も磨かれており、さらに図の下側以外に敲打痕がある。（米倉）

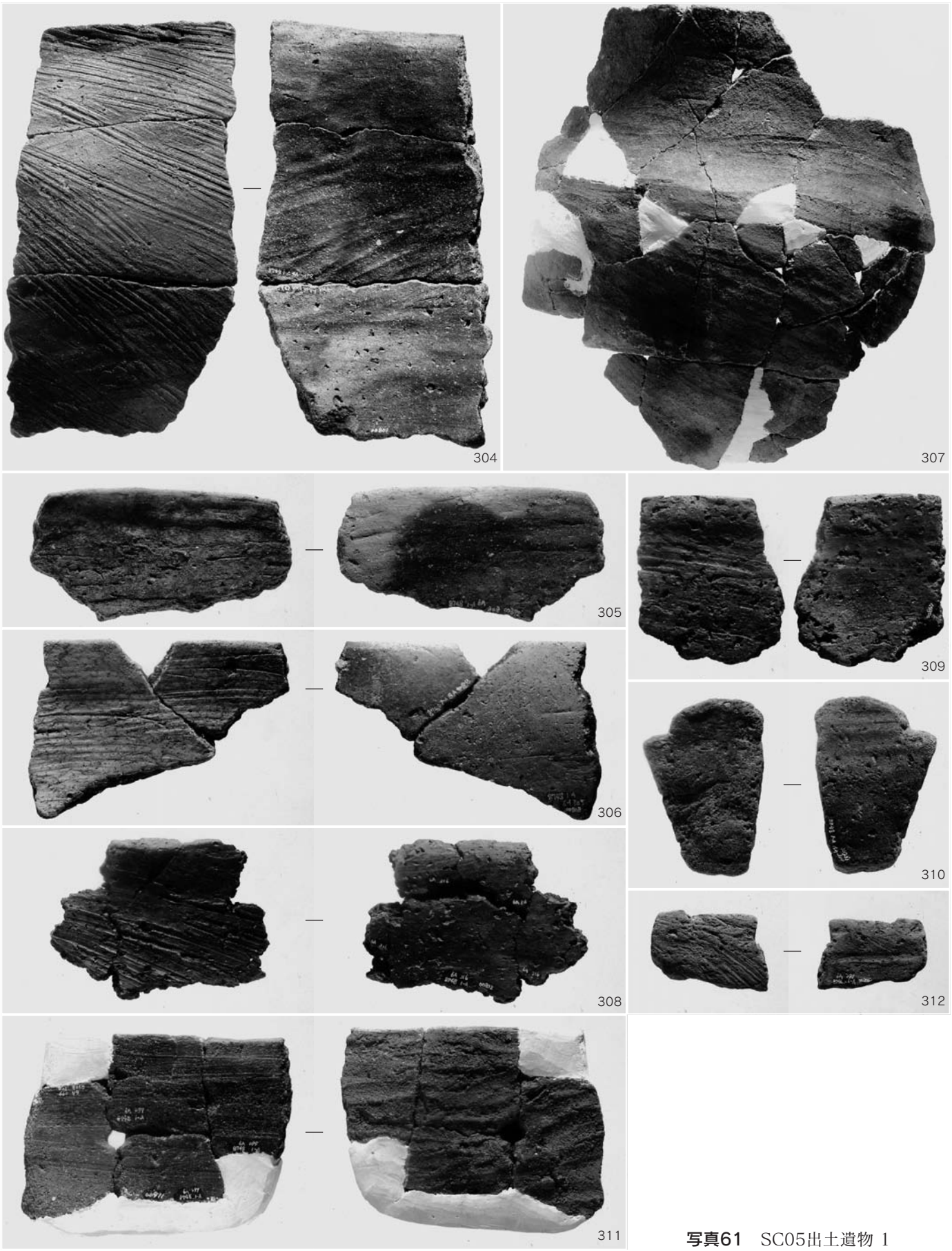


写真61　SC05出土遺物 1

写真62　SC05出土遺物 2

3．土　壙（SK01～05）

SC01の東側から北東方向に向かって多くの土器が散布しているが、この中には円形や不整形落ち込みの中に遺物がまとまって出土するものがあり、これらを土壙と仮に呼んだ。機能や目的を検討、確定したものではなく、用途不明のためにその形状だけで呼んだに過ぎない。とはいえ簡単に遺構の機能を断定するのも困難である。SK01は埋鉢、SK02は貯蔵穴と呼ぶのが適当かとも思えるが、ここでは土壙として報告する。また発掘時に焼土や土器の集中具合から竪穴住居跡としていたSC02は、SK05とした。（力武）

SK01土壙（図66、写真63）

SR01埋甕の北東約80㎝に隣接している。58㎝×60㎝の正円に近い平面プランの中に、拳大の丸い花崗岩2個と精製浅鉢が割れた状態で出土した。当初はSR01のすぐ側だったこともあって、埋葬に際しての供献的な遺構を想定した。浅鉢を取り上げるとその下には器種の異なる土器片があり、壙底はそのまま丸くなっている。断面図によるとこれらの土器、石ともに上部に浮いた状態を示している。上部は削平されていると思われるが、出土した土器は接合完形とならず、もともと破片の状態で石とともに置かれた可能性が強い。やはり供献的な遺構と考えていいだろう。（力武）

SK01出土遺物（図67、写真64）

319は粗製深鉢で、外面には前面に横方向の粗い貝殻条痕を施している。内面は摩滅のため明瞭で

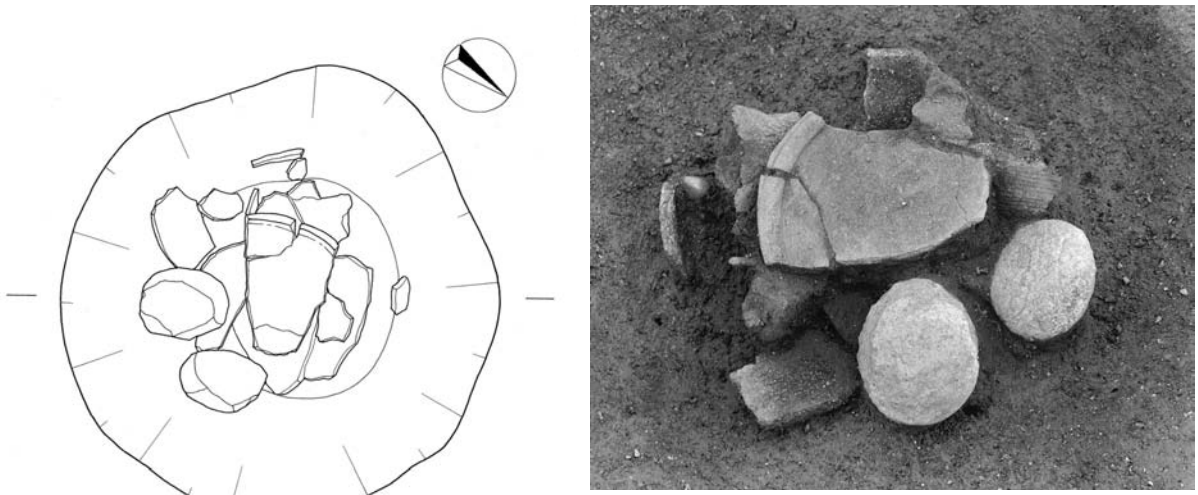


写真63　SK01

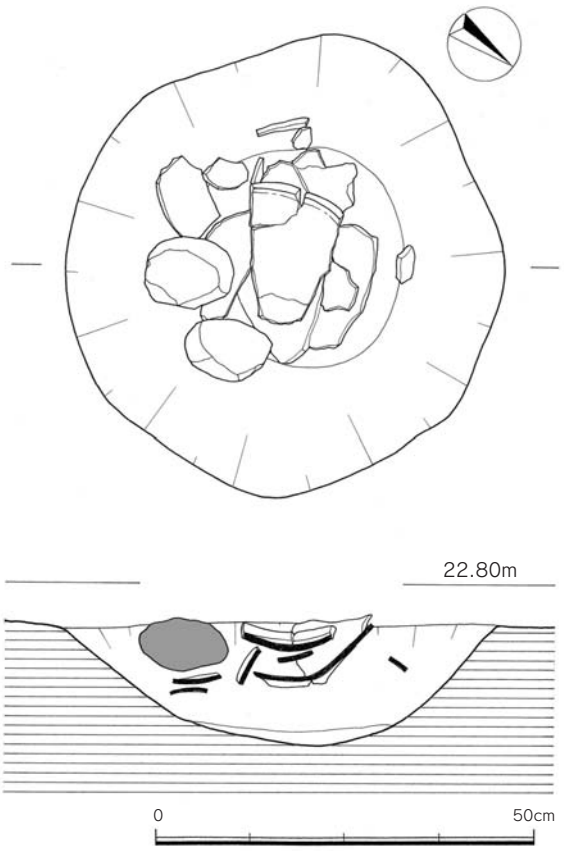


図66　SK01実測図（1/10）

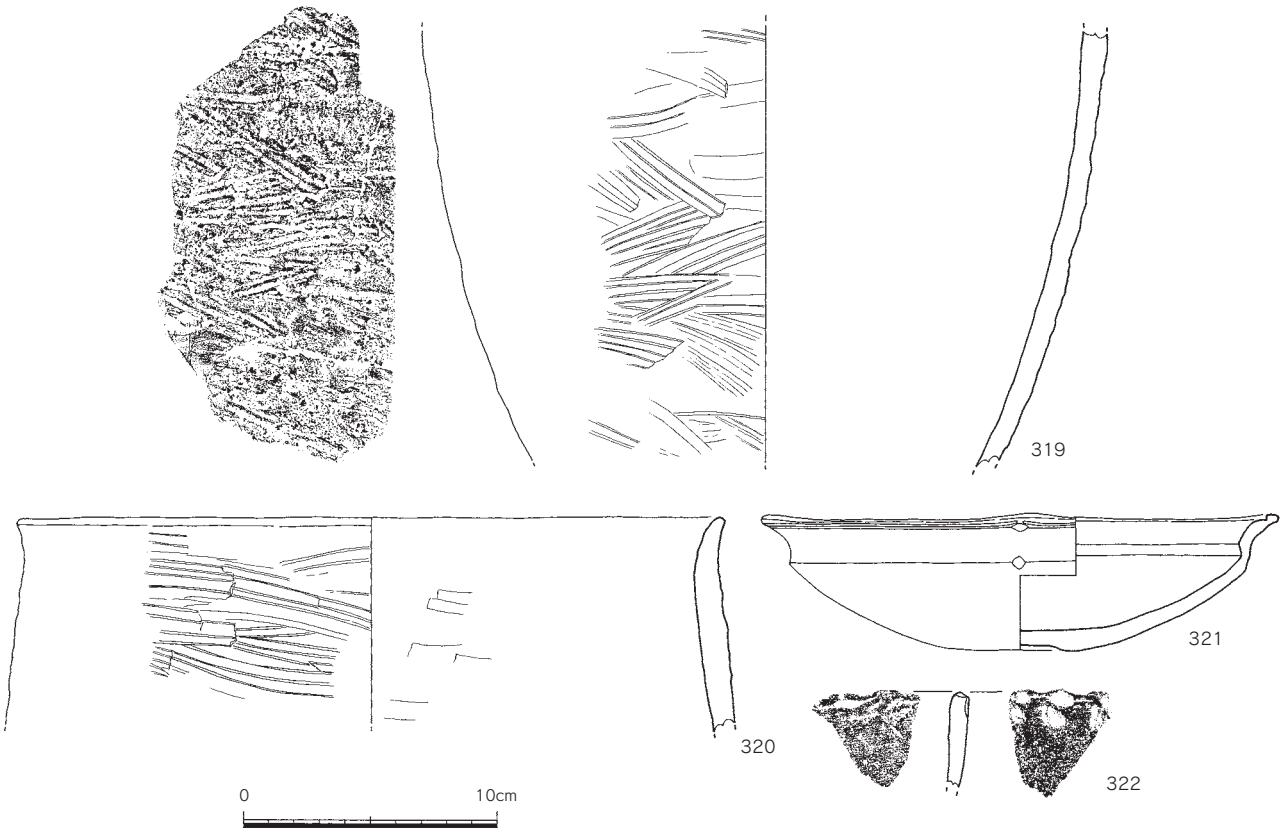


図67　SK01出土遺物図（1/3）

はないが、ナデのようである。他の粗製深鉢に見られる痘痕状の窪み群は認められない。煤・焦げ等は確認できない。320も粗製の深鉢で、口径28.0㎝を測る。外面に貝殻条痕を施し、内面はナデで仕上げているが、板状の工具痕跡が残っている。321は口径20.5㎝の半精製の浅鉢で、胎土に1㎜台の砂粒を多く含んでいる。両面ともナデで仕上げているが、外面底部付近は土器焼成時によるものか、火ぶくれ状に小さな剥離が多い。黒斑が底部と頸部付近にある。322は深鉢の小片で、口唇部に大豆大の刻み目を付け、口唇部直下のの口縁部外面にも同規模の刻み目を施している。調整は両面ともナデで仕上げている。（米倉）

写真64　SK01出土遺物

SK02土壙（図68、写真65・66）

SC01竪穴住居跡の南東側5mの位置に元は現代の水田畦畔が南北方向に延びており、その痕跡に沿って幅60㎝のトレンチを全長40mにわたって設定した。SC01は粗砂の基盤土に掘り込まれているが、SR01埋甕付近は灰色がかったシルト土で、複雑な堆積状況であったことから正確な土層把握が必要だった。トレンチの遺物は、SC01寄りの小範

写真65　SK02

SK02より埋甕、散布地方向

SK02の土層

SK02の発掘作業

写真66　SK02

囲に限って土製有孔円盤や打製石斧などが出土したことから、上面とトレンチ断面を見比べながら慎重に遺構検出を行った。すると上面ではトレンチを挟んで両側に楕円形の落ち込みが現れ、この落ち込みはトレンチ断面でもわずかに袋状に下方が膨らんだ様子が観察できた。このトレンチの他の場所では遺物出土は皆無であったことから、先の遺物はこの落ち込みに伴うものと確信した。上面のプランは、153㎝×115㎝の楕円形で、深さは約64㎝ある。迂闊にもその中央部をトレンチで壊してしまったが、東側の大半は残っていることから、土層実測後に分層発掘を行った。土壙内は褐色土と灰色土が交互にほぼ水平堆積し、7層を数える。4層目の褐色土には炭化物が多く含まれている。特に底面には炭化物を密に敷きしめたような状況である。その土壙底面はわずかに窪んでいるが、ほぼ水平に近い。遺物は数点の土器小片が上面で出土したのみで、下方の土層には含まれていなかった。花崗岩の角礫が上面と底面で数個出土し、底面の角礫は炭化物の上に乗っている。底面は粗砂に達し、時間をおくと溜まる程度の水が染み出してくる。ドングリなどの木の実は検出できなかったが、土壙の大きさや断面形状、土層堆積状況などから貯蔵穴の機能が考えられる。（力武）

SK02出土遺物（図69、写真67）

323は半精製の深鉢で、外面は指による横ナデ、内面は指押さえか。二次焼成のためかかなり脆くなっている。外面には煤状のものが付着している。324は粗製深鉢の口縁部で、外面には左下がりの条痕の後に右下がりの条痕を施している。内面はヘラによる横方向のナデで仕上げている。両面に小豆大の窪みが多くある。325は粗製深鉢の胴屈曲部の破片で、両面ともヘラによるナデを施している。両面に小豆～大豆大の窪みが無数にある。326は深鉢の底部で、両面ともナデで仕上げている。外底部に櫛状の工具痕もしくは何かの圧痕がある。327は直径約7.5㎝を測るやや大型の有孔土製品で、中心部が厚くなっている。中央に焼成前の穿孔が施されているが、孔の周囲は使用によって摩滅している。全面ナデ仕上げである。328は安山岩製の横長剥片で、エッジには連続する微細剥離があり、使用痕と思われる。329は玄武岩製の打製石斧もしくは磨製石斧の未製品である。片面は自然面で、反対側は周縁調整が進んでいるため明瞭ではないが、柱状節理で割れた石材から直接石斧を作り出そう

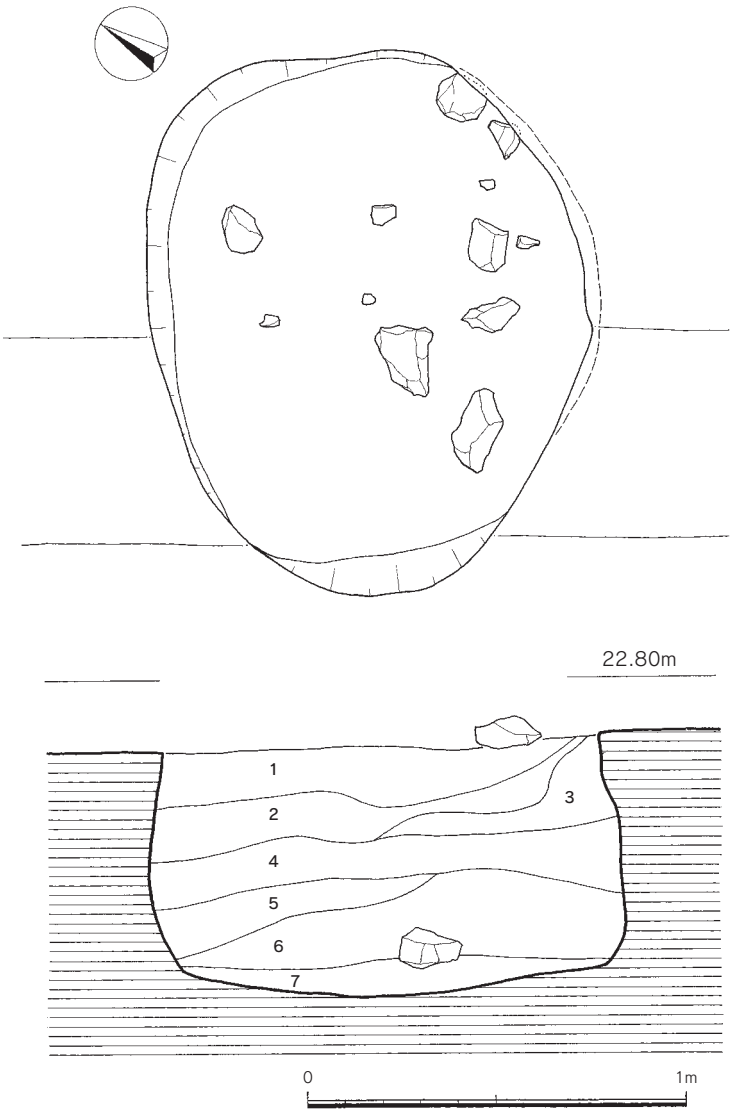


図68　SK02実測図（1/20）

土層名
1. 褐色土（わずかに砂粒含む）
2. 茶色土
3. 茶色土（2層に比べ砂粒少）
4. 褐色土（炭化物多い）
5. 灰茶色土（砂粒含む）
6. 灰茶色土（粒子小さい）
7. 淡茶色土（よく締まる）

としていると考えられ、3㎝近い厚さと全体の形態から磨製石斧の未製品ではないかと考えられる。灰白色を呈する。330も玄武岩製である。片面にわずかに自然面を残しているが、全体の調整が進んでいる。打製石斧、磨製石斧の未製品のどちらともとれるが、平面形は磨製石斧に近く、中程両側縁がわずかにノッチ状を呈している。最厚部で2.8㎝の厚みがあることと、形状からも磨製石斧ではないだ

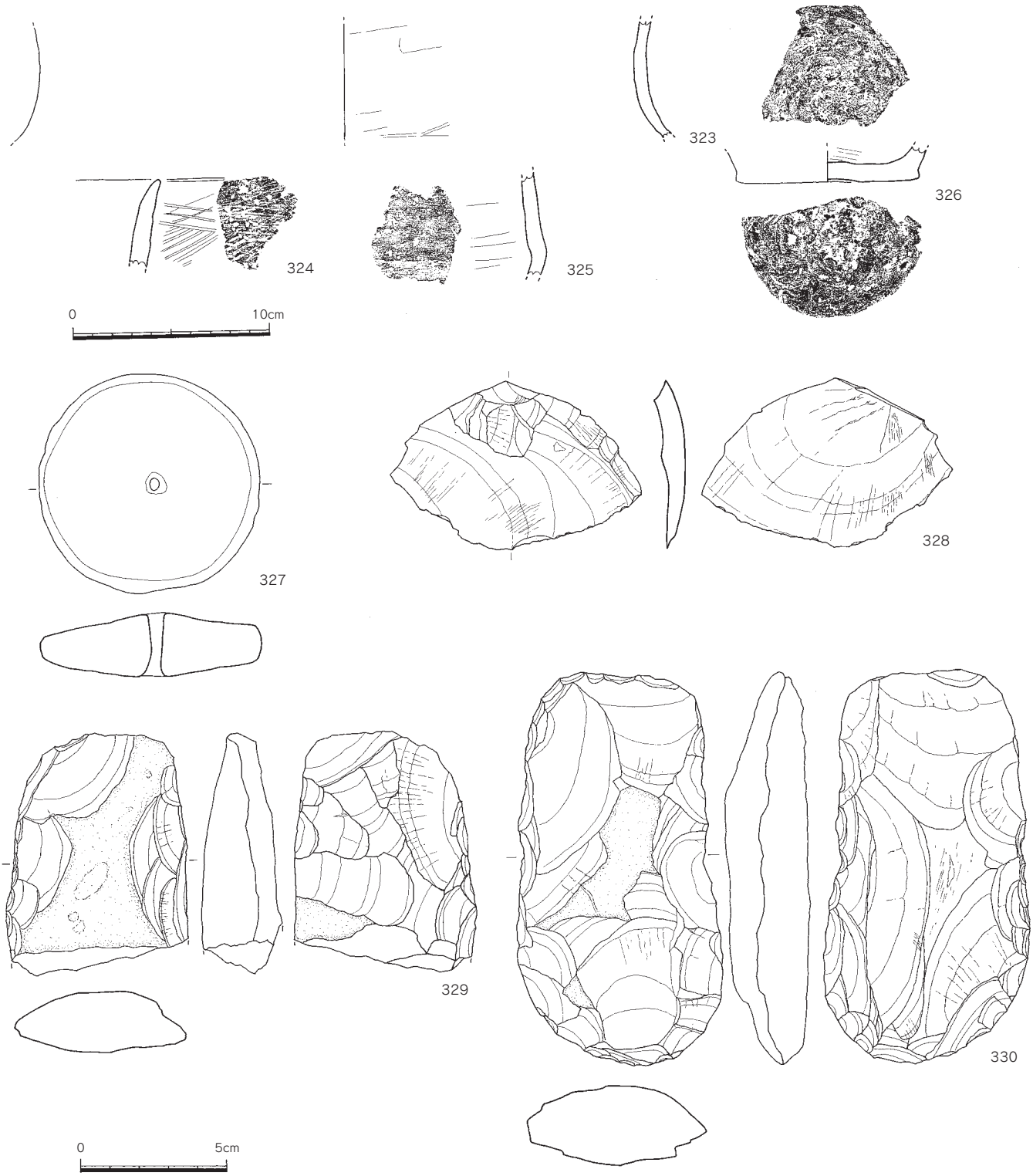


図69　SK02出土遺物図（1/3・1/2）

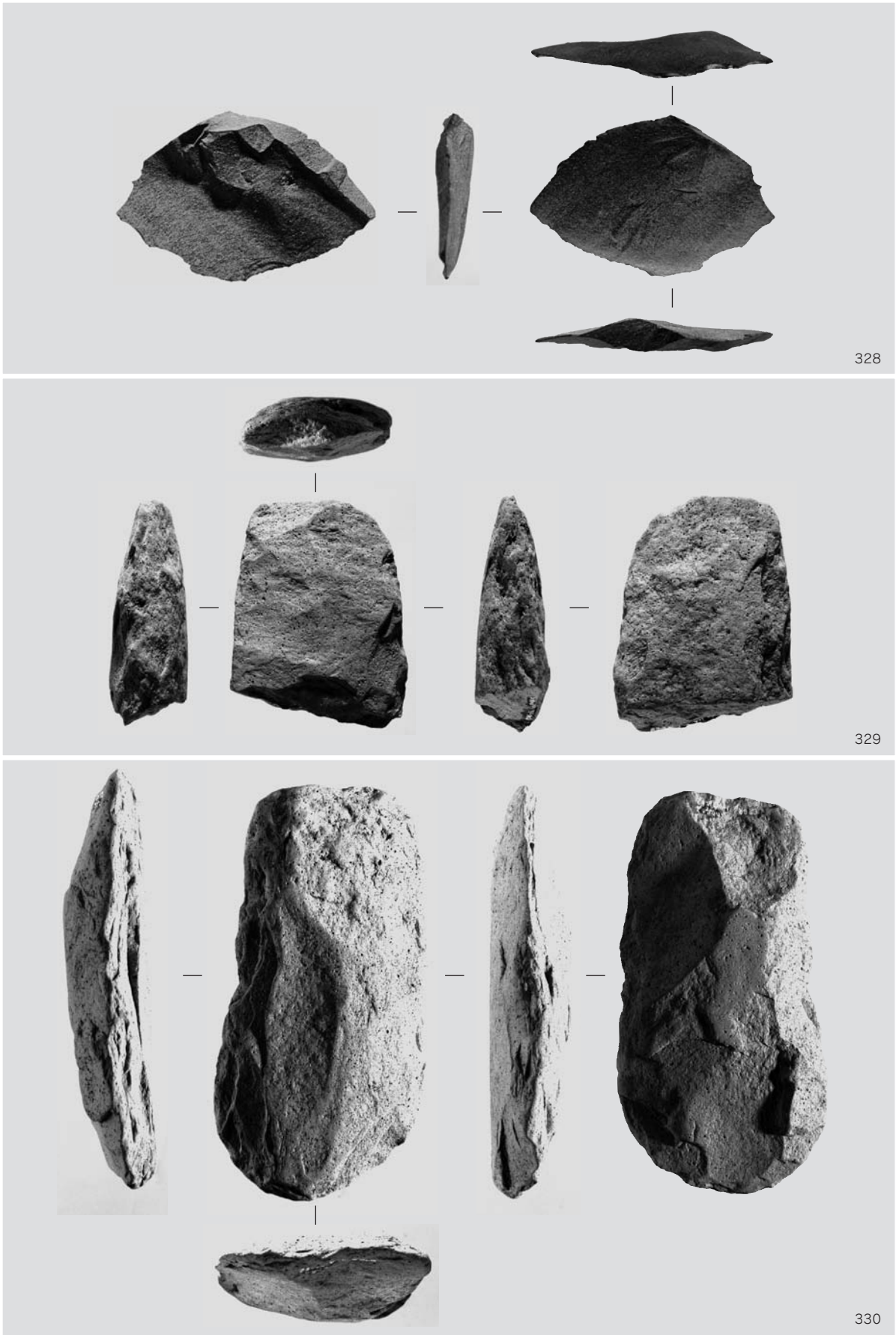


写真67　SK02出土遺物 1

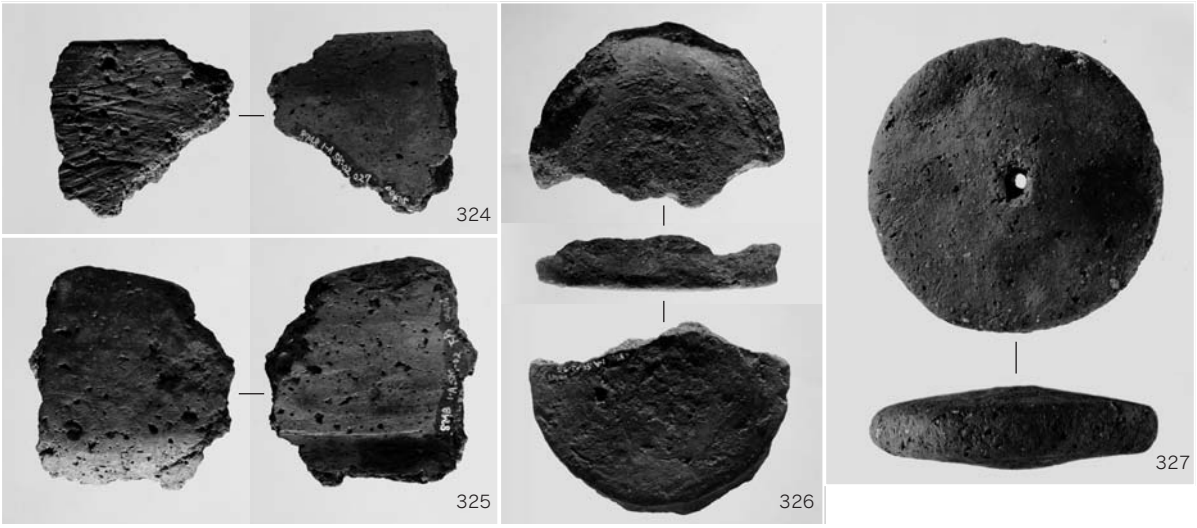


写真68　SK02出土遺物 2

ろうか。どちらにしろ右面の刃部部分は完全に調整が終わってなく、1㎝近い厚みがあり、鋭利でないことから未製品であろう。基部を大きく取りすぎているのが失敗部分であると思われる。灰白色を呈している。(米倉)

SK03土壙（図70、写真69）

竪穴住居跡、埋甕、散布地らが広がる範囲のほぼ中央にある。

正円の平面プランで直径100㎝を測る。検出時は数個の花崗岩角礫で囲んだ状態であったことから石囲炉を想定した。しかしその下部にもわずかながら小石や遺物があり、その都度、土層の観察を行いながら実測図を作成し掘り下げた。東側は割に緩やかであるが西側は急な角度で掘り込んでいる。41㎝の深さでほぼ平坦な底面となり、大きさは直径約60㎝である。埋土は上部より1層：粘性のない黄灰色褐色土、2層：やや粘性のある黒褐色土、3層：粘性のある灰褐色土の3層に分れた。下部ほど小石や遺物の点数は少なくなるものの、底面に接するようにして大きめの角礫が立っていた。結局、焼土や炭化物などは見られず、炉跡と積極的に断定する事は出来なかった。遺物は図示したように意外に多いが、土器は小片であり接合完形にはならない。また石器の打製石斧、石皿も破損しており、投棄用と思われるが、埋土の堆積にはある程度の時間経過を想定する必要がある。(力武)

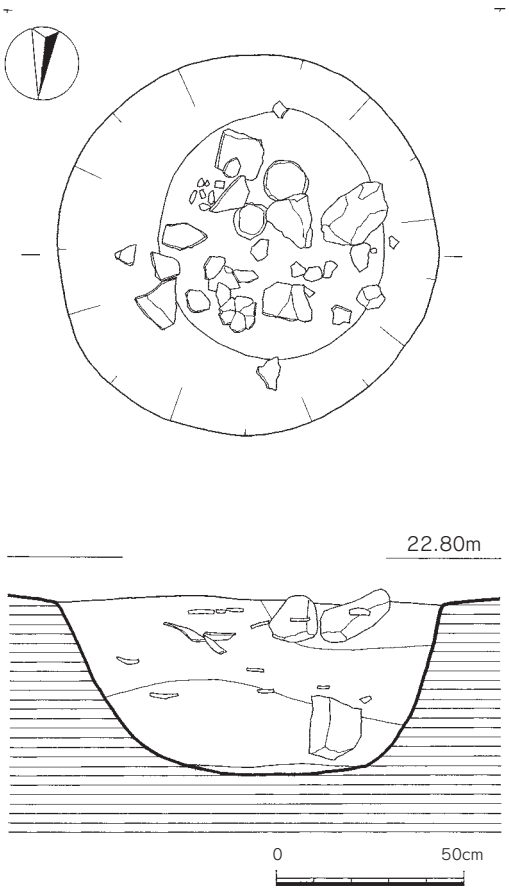


図70　SK03実測図（1/20）

SK03出土遺物（図71、写真70・71）

331は粗製深鉢で、外面は横から右下がりの貝殻以外の条痕を施し、内面は横方向の条痕の後、ナデで仕上げてい

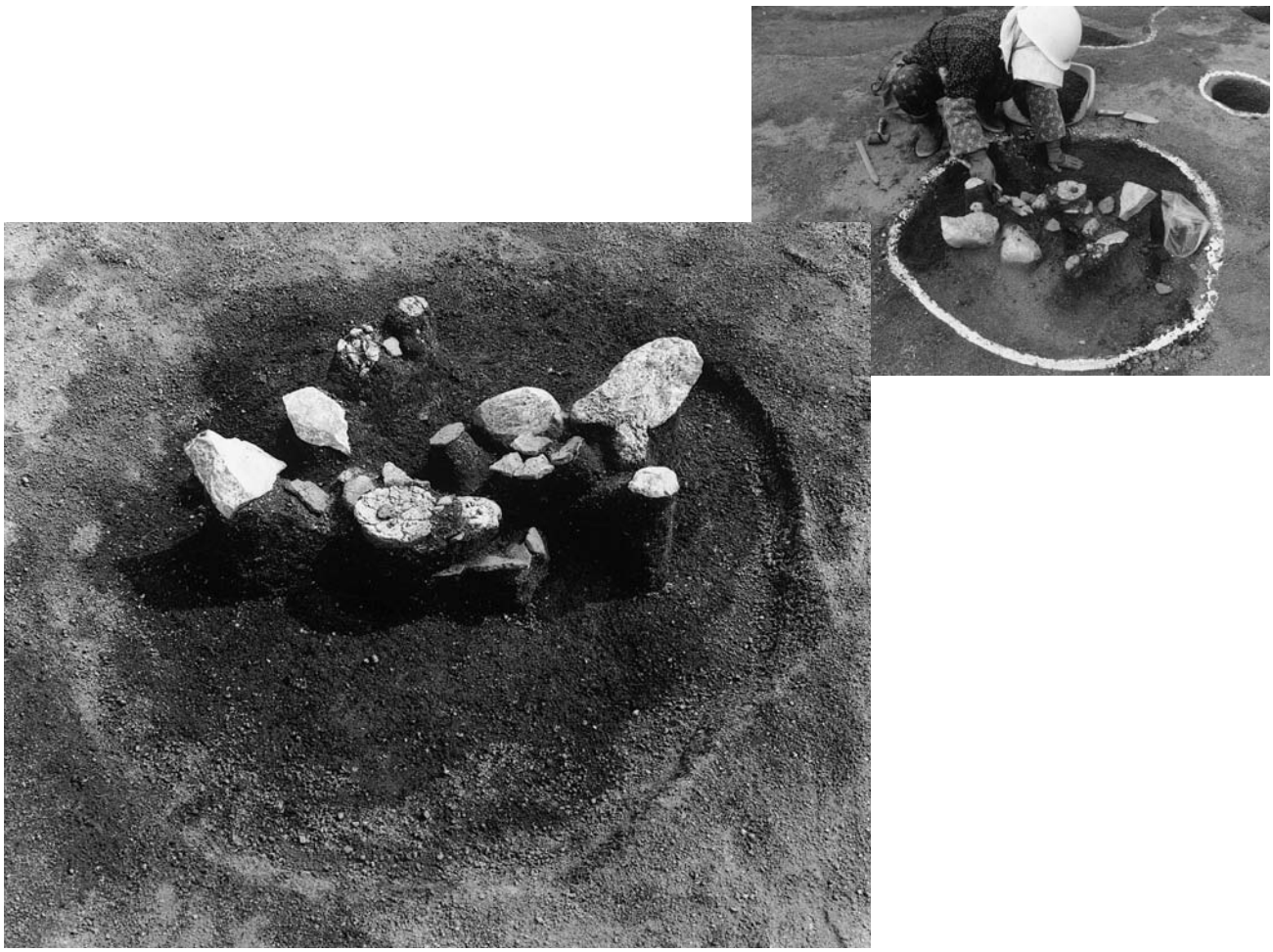


写真69　SK03

る。両面に小豆大の窪みが無数にある。煤や焦げは確認できない。332も粗製深鉢で両面ともヘラによる横方向のケズリぎみのナデである。両面に小豆～大豆大の窪みが多くあるが、特に内面に大きな窪みが多い。外面屈曲部から上に煤もしくは焦げが付着している。333は口唇部を平坦に作る半精製の深鉢である。外面には横方向の貝殻条痕を施し、内面はナデで仕上げているが、その前に条痕を施しているようである。334は粗製深鉢で、外面に条痕を施し、内面はナデで仕上げている。外面口縁部直下の一部を指で横に削り取り太い凹線文状を呈している。両面に小豆大～大豆大の窪みが無数にある。外面には煤状のものが付着している。335は硬質の焼きの良い深鉢で、外面はやや右下がりの貝殻条痕を施した後、口縁直下を凹線文状に指で削り取っている。内面はヘラで削った後、口縁部のみナデている。痘痕状の窪みはほとんどない。336は小片のため径は不確かであるが、小型の深鉢である。両面ともナデで仕上げている。内面は粘土の接合部が沈線状に残っている。337は粗製深鉢で、外面はヘラによるケズリ、内面はヘラによるナデである。338～340は深鉢の底部である。338は両面に無数の窪みがあり、かなり被熱している。339は外面に赤色顔料を塗ったような色を呈し、外底部が剥離している。340は微細な砂粒を多く含み、全面ナデ仕上げである。341～343は浅鉢の小片である。344は玄武岩製の石器で、磨製石斧の未製品と思われる。柱状節理の原石を割って素材とし、周縁調整を加えている。調整は片面はほぼ終了し、反対面の片側まで行った時点で折損したものと考えられる。幅の狭い加工用の石斧であろう。他の玄武岩に比べて灰色味が強い。345は玄武岩製打製石斧もしくはその未製品である。薄い剥片を素材としている。灰白色を呈している。346は花崗岩質の砥石もしくは石皿である。表面は全面研磨状につるつるしている。裏面は自然面で、火を受けているのか一部黒変している。（米倉）

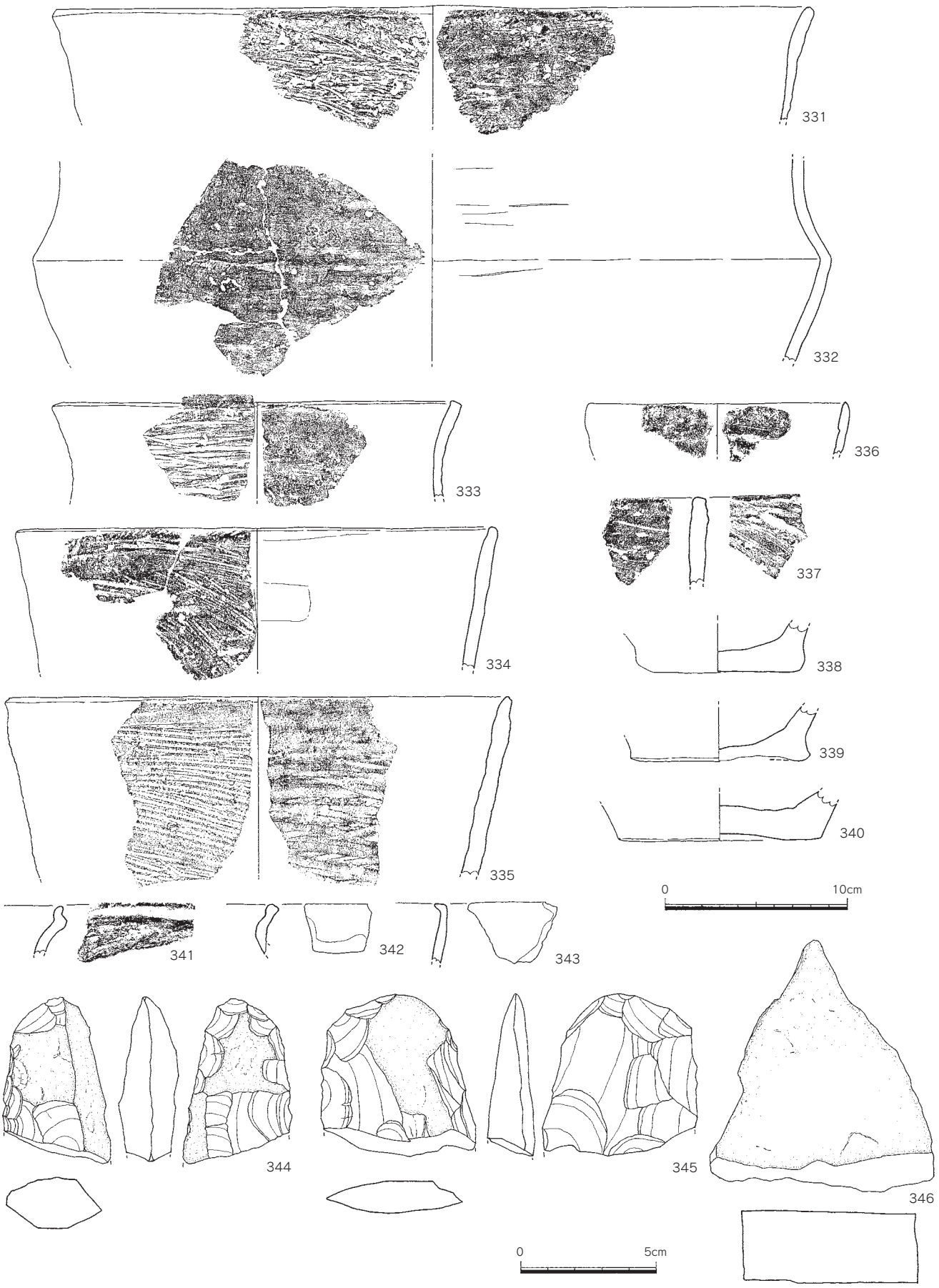


図71　SK03出土遺物図（1/3・1/2）

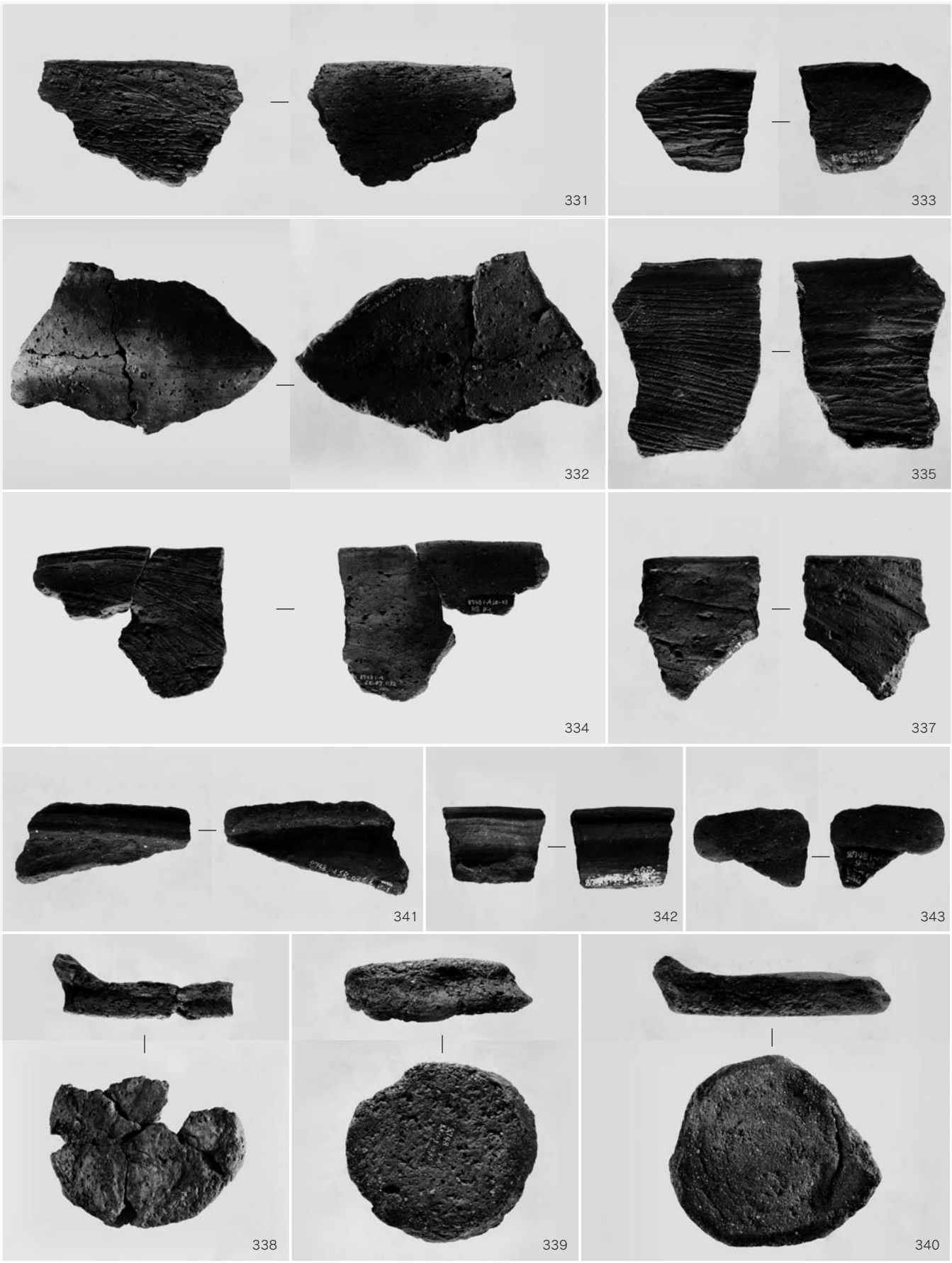


写真70　SK03出土遺物 1

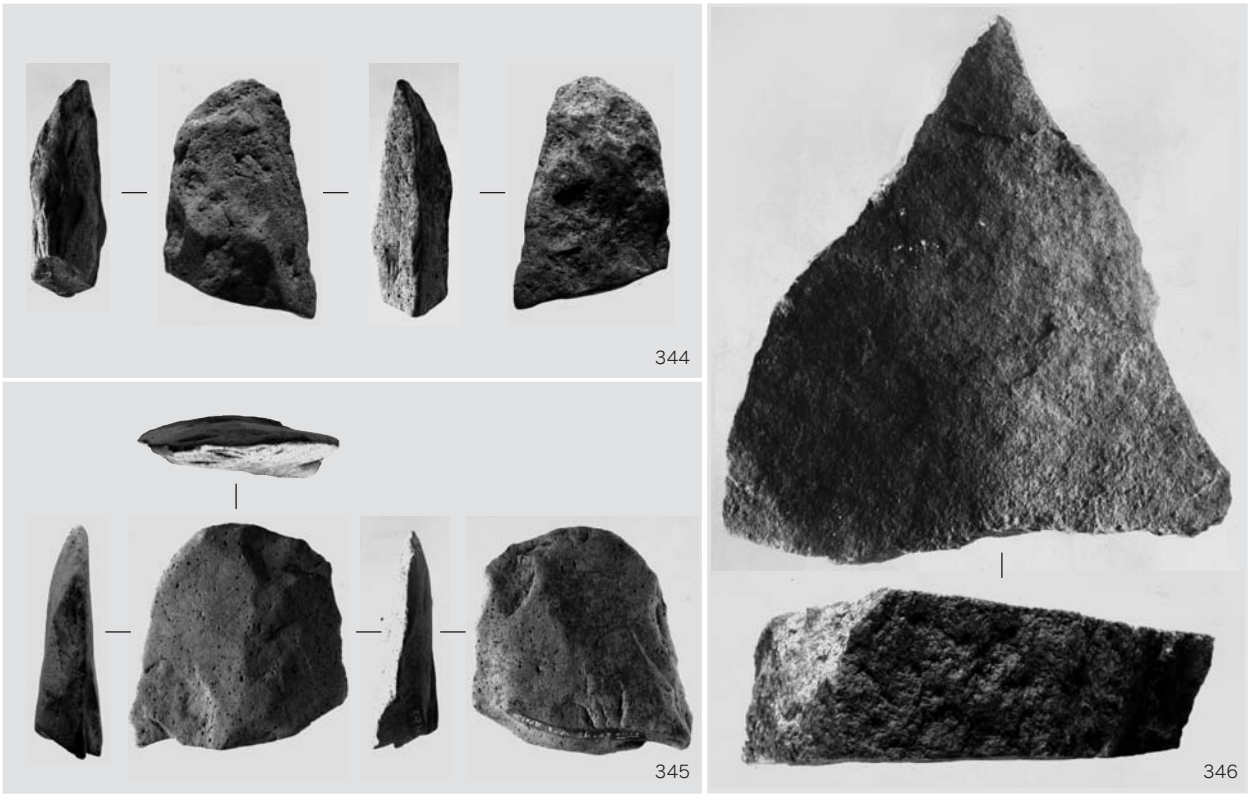


写真71　SK03出土遺物 2

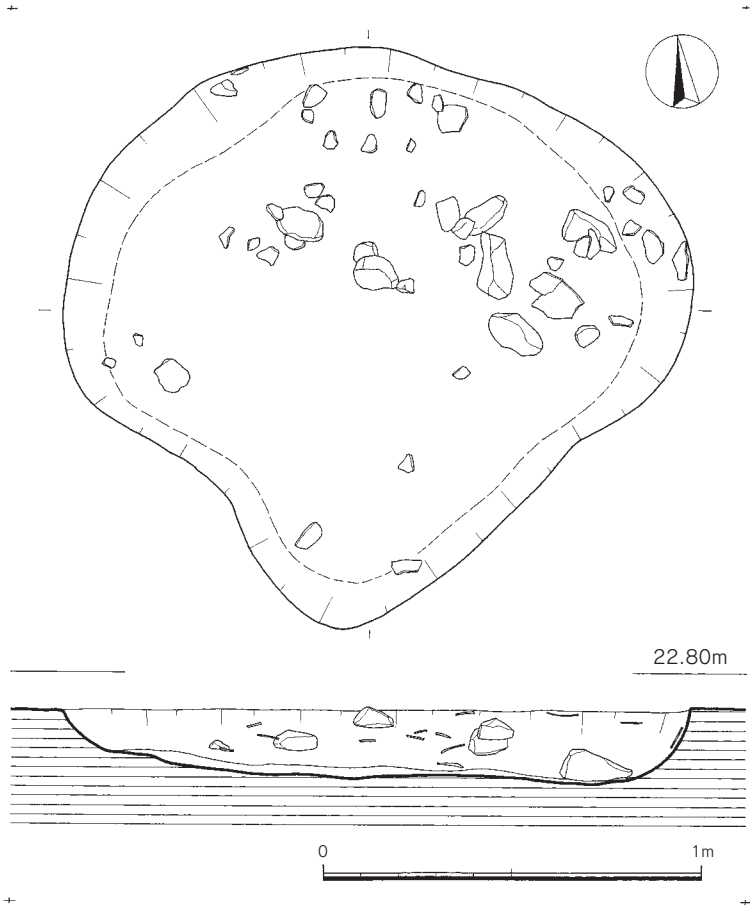


図72　SK04実測図（1/20）

SK04土壙（図72、写真72）

SR01埋甕の北東約3.4m、SC01竪穴住居跡の東約9.2mに位置する。平面プランは不整円形で南側が括れてすぼまっている。南北の長さは151㎝、東西の長さ165㎝、深さは最も深い東壁で20㎝を測る。壙内の埋土は、わずかに黒みがかった灰褐色土で、別に焼土や炭化物は認められず、また分層できるような堆積ではない。壙底は平坦ではなく東側に傾き、微妙な凹凸がある。遺物や自然石は壙内の中央より北東側にかけて多く出土し、断面図に示したように、中程の深さでの出土が多い。壁に貼り付いたような土器や壙底に接したような花崗岩角礫があり注意したが、この他にも特に人為的な痕跡とするものはなかった。遺物は番号を付けて29袋取り上げた。（力武）

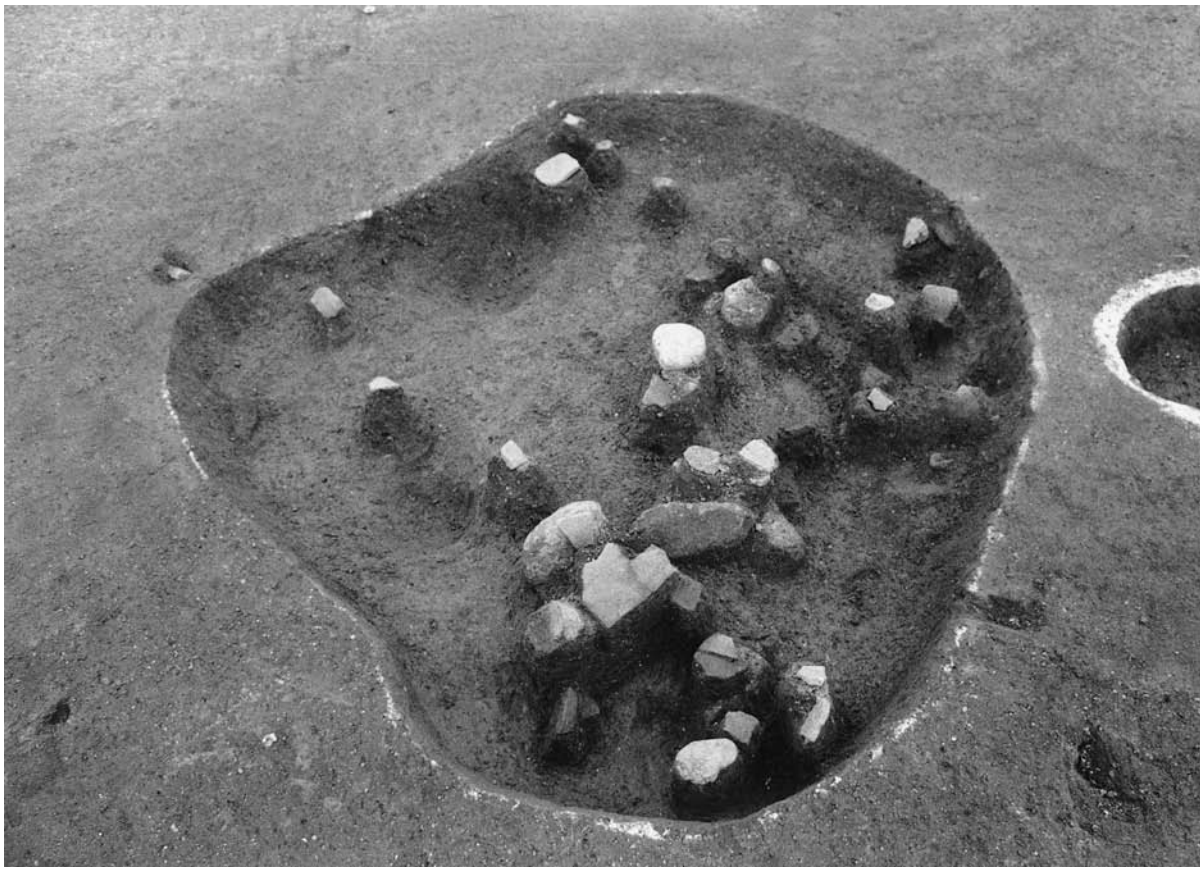


写真72　SK04

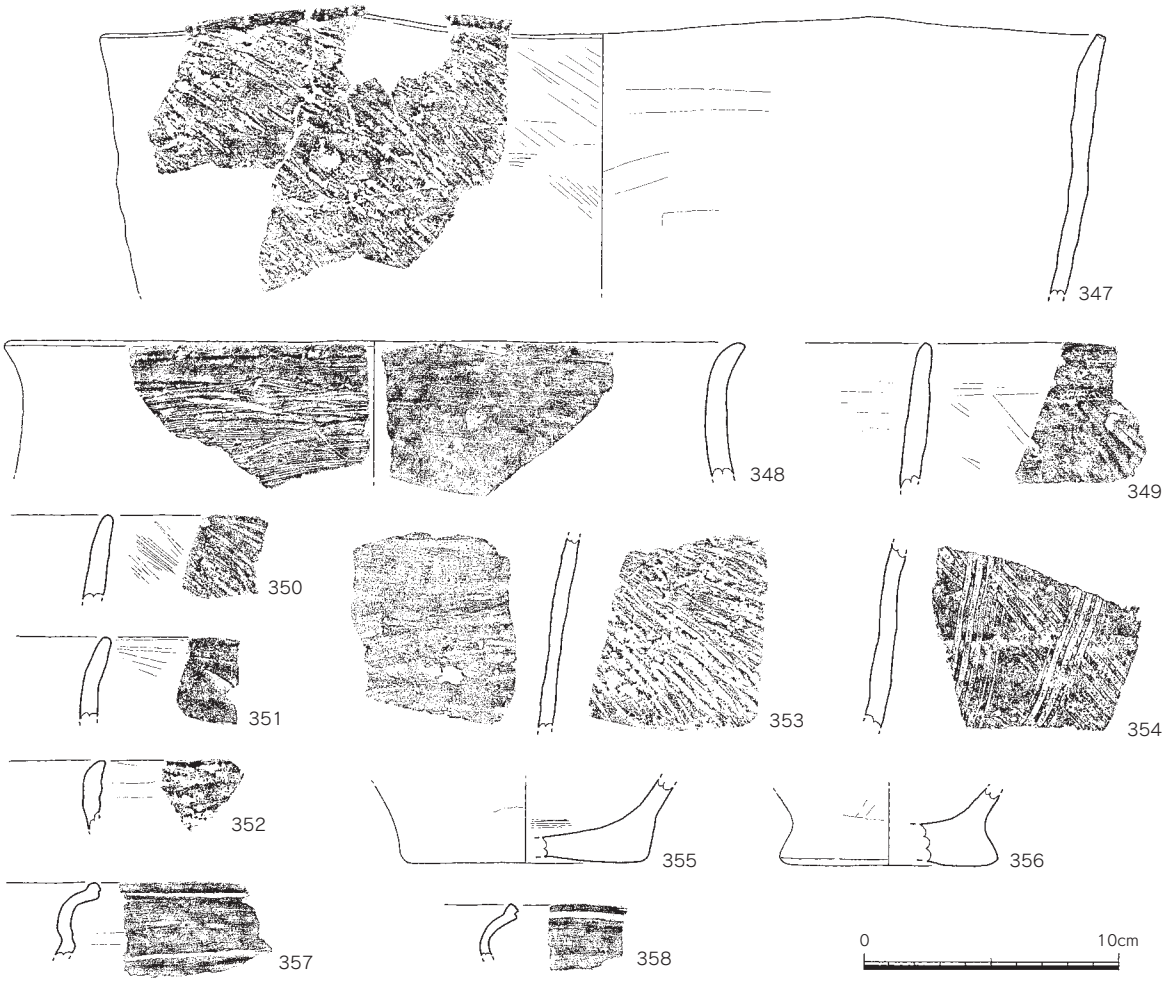


図73　SK04出土遺物図（1/3）

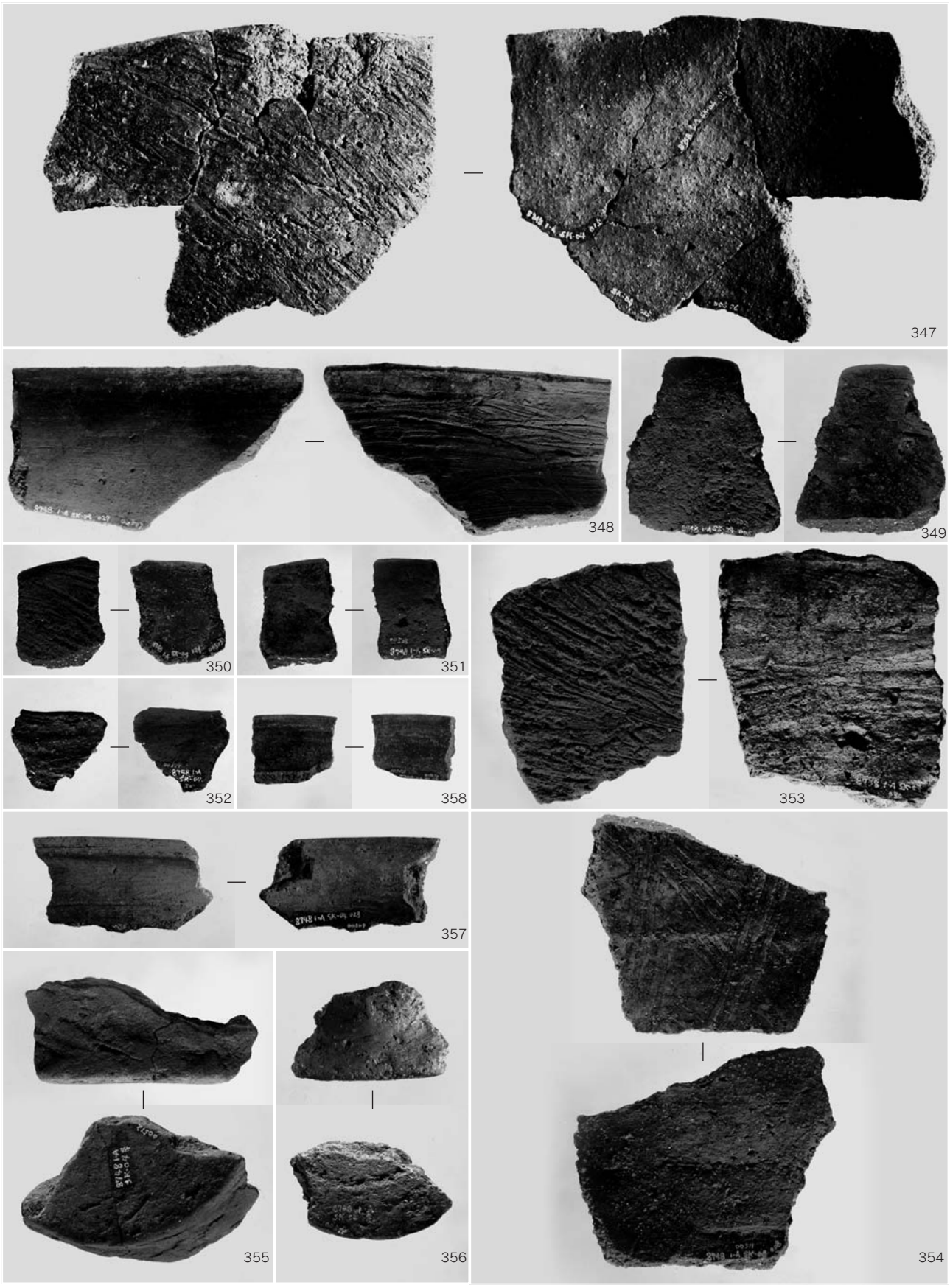


写真73　SK04出土遺物

SK04出土遺物（図73、写真73）

347は粗製深鉢で、わずかに口縁部は波状を呈す。外面は粗い条痕を右下がりに施し、内面はナデで仕上げている。微細な窪みが多くある。348は大粒の砂粒をほとんど含まない半精製の深鉢で、焼成も極めて良好である。外面は条線1本の幅が1㎜未満の狭い条痕を施している。内面は横方向のナデである。口縁端部に煤上もものがかすかに付着している。349～352は深鉢の小片である。353は外面に粗い貝殻条痕を施し、内面は条痕の後にナデを施している。大小の窪みが器表面にあるが、内面にはドングリの圧痕状のものがある。354は外面に貝殻条痕を施し、内面はナデ仕上げである。355・356は深鉢の底部片、357・358は精製の浅鉢である。（米倉）

SK05土壙（図74、写真75）

SC01竪穴住居跡の東約16mで検出した。発掘時は焼土や炭化物がやや広範囲に見られ、周囲には大小のピットが取り囲んでおり、竪穴住居跡であることを期待し、SC02の遺構番号を付して実測、遺物取り上げなどを行った。しかしその平面プランの大きさがSC01竪穴住居跡に比べ小さく、また土器散布の南西端部付近に当たることなどから、屋外炉のような性格も想定していた。先述したようにこの報告書では、次のような状況分析から土壙に修正しSK05としている。

判断に悩んだ焼土と炭化物は、熱変で硬化した72㎝×108㎝の長方形範囲に見られるが、下部に窪みや土器、囲み石などはなく、竪穴住居跡の炉跡ではない。ここを中心にして外側を囲む壁は、南北に長い不整楕円形プランで、大きさは南北長2.46m、東西長2.12m、深さは中央部の深さ15㎝である。周囲の壁は出入りが多く、竪穴住居跡のような直線や曲線などのように整ったラインではない。またこの周辺では、その目的は不明だが大小の自然石が多く出土し、検出面ですでにその頭部が突き出ている程であった。土器などの遺物は、これらの石の間から出土するが、ほとんどが細片となっている。さらに壙底はほぼ平坦ながら、柱穴のようなピットは一つも検出できなかった。これらの状況を総合して、屋外炉の可能性はあるものの、竪穴住居跡ではないと判断した。なお周囲には30㎝を超すような深いピットや、このSK05の壁に切られているピットもあり、竪穴住居跡の床面が削平された結果とも想定できることから、その配置で建物の可能性を何度も検討したが、建物としてはまとまらなかった。（力武）

写真74　遺跡説明会（昭和63年3月13日）

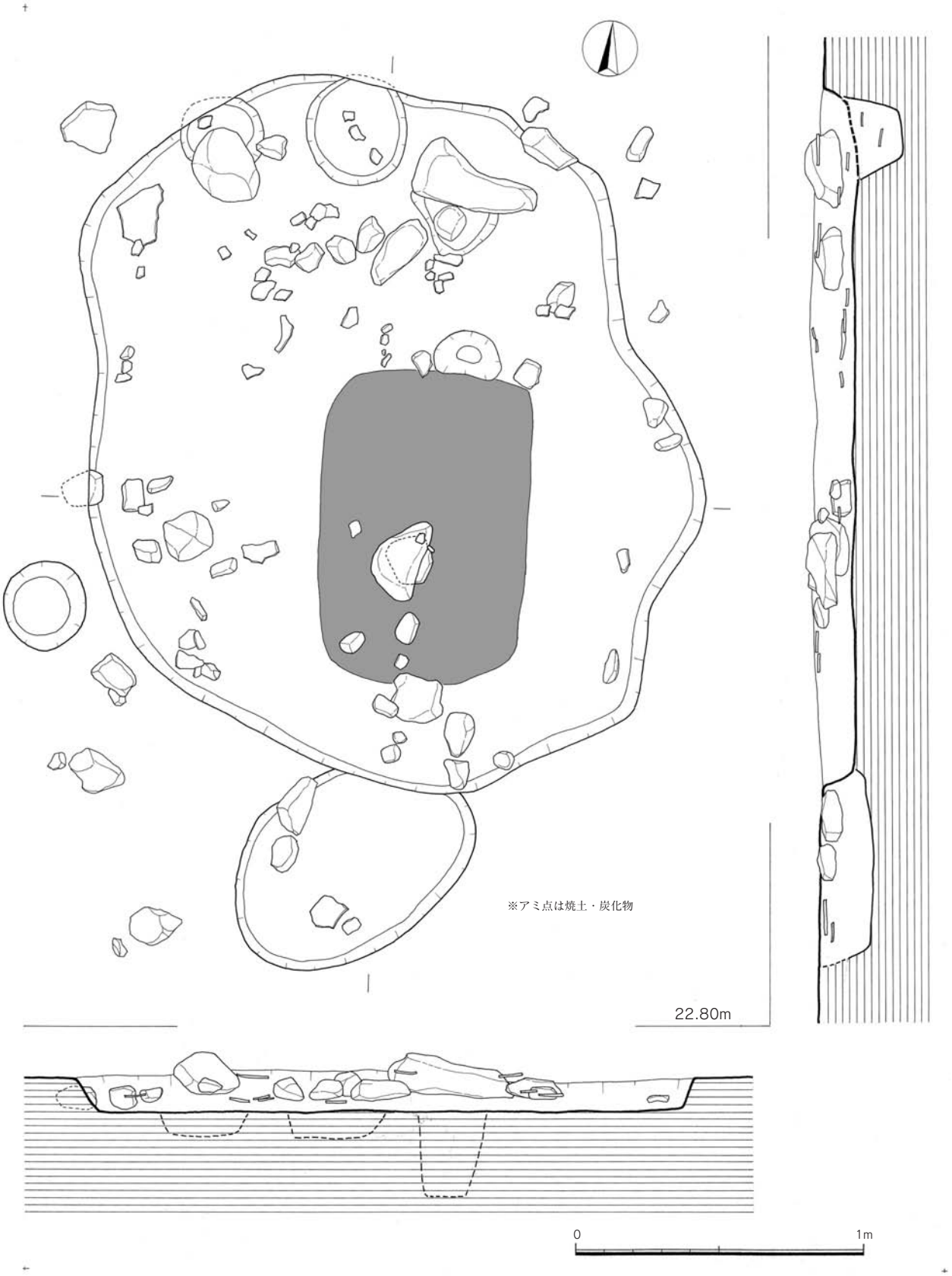
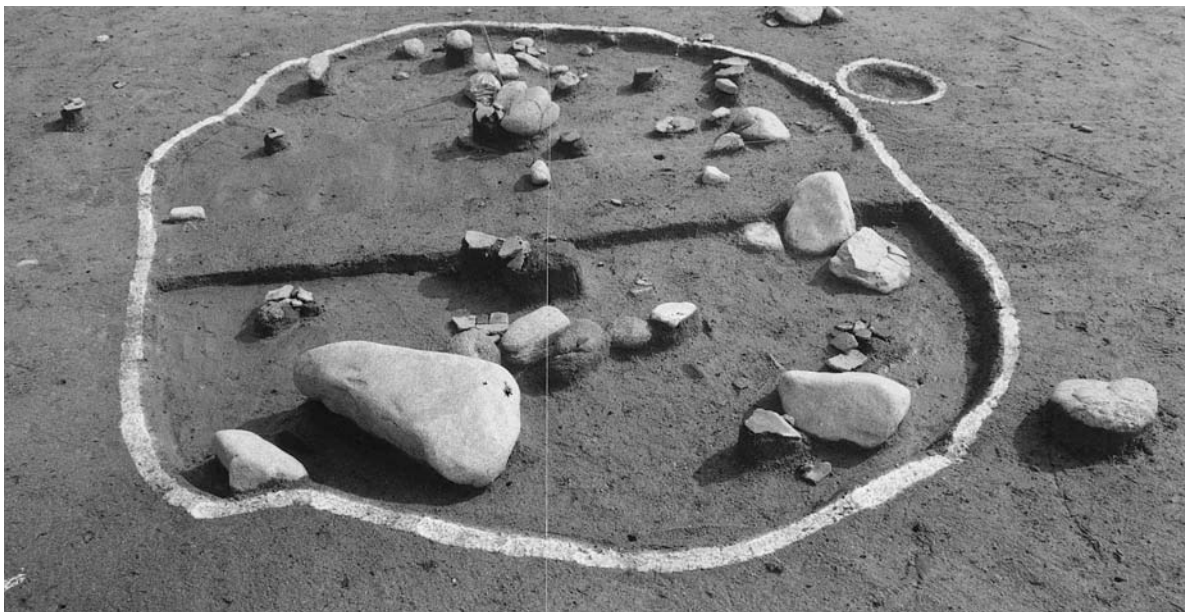


図74　SK05実測図（1/20）

南より

南西より

写真75　SK05



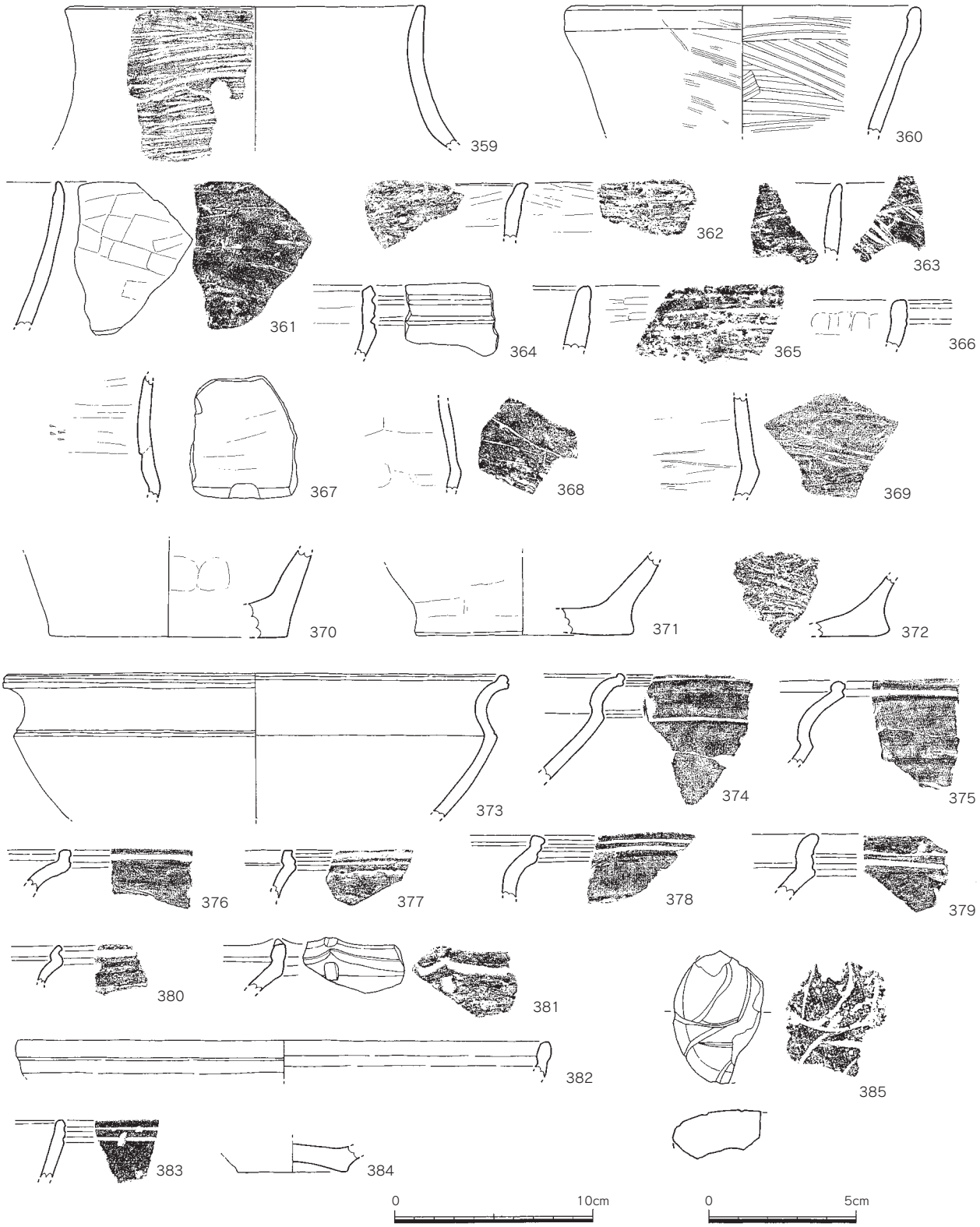


図75　SK05出土遺物図 1（1/2・1/3）

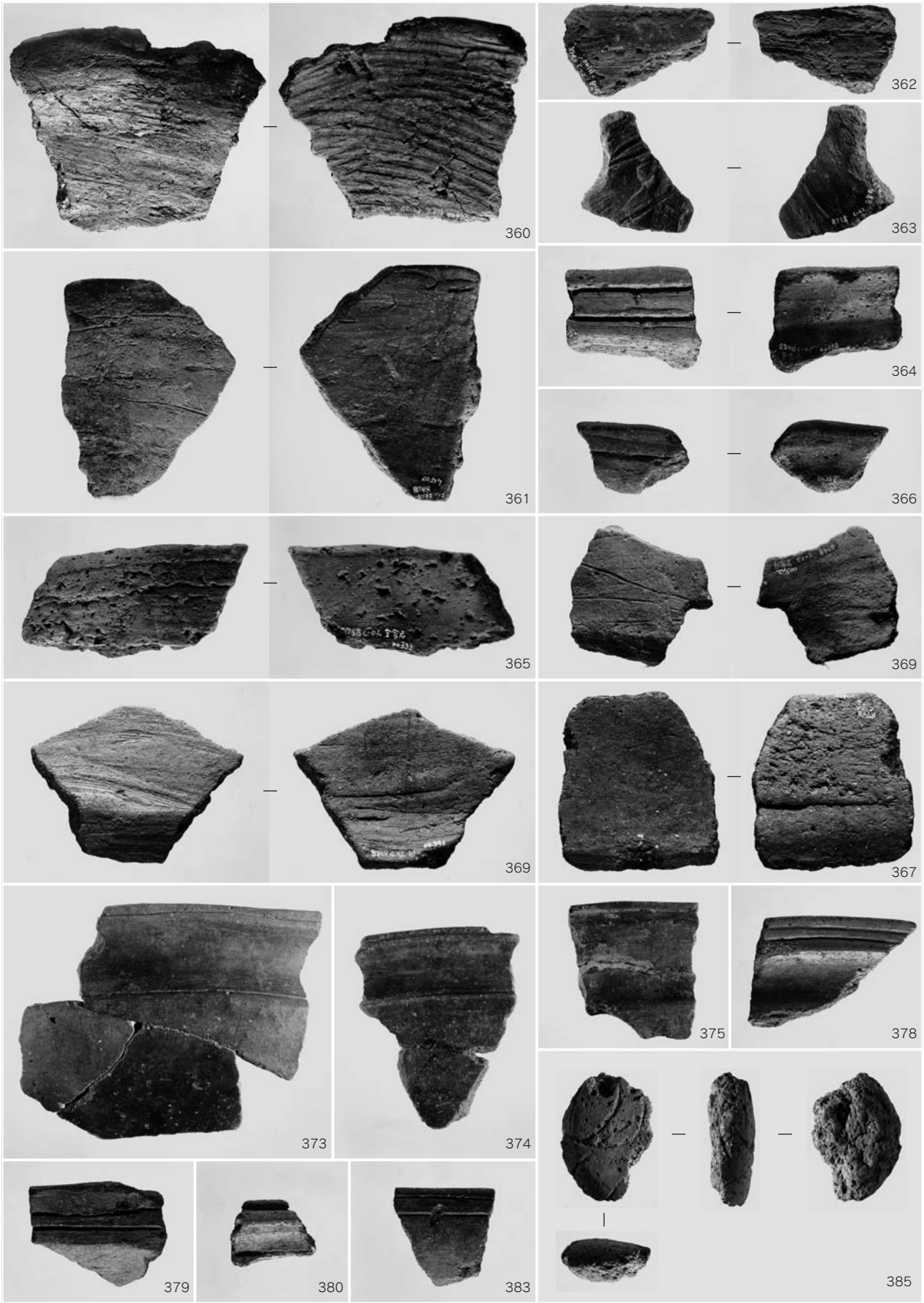


写真76　SK05出土遺物 1

SK05出土遺物（図75・76、写真76・77）

359は半精製の深鉢で、外面に横方向の条痕、内面はナデで仕上げている。360は深鉢もしくは鉢か。外面は条痕の後ナデを施し、内面は外面より目の粗い条痕を施している。淡黄褐色を呈し、外面に黒斑がある。361は半精製の深鉢で、外面は横方向のナデ、内面はヘラによるナデである。362は粗製深鉢の小片。363は半精製深鉢で、外面はヘラによるナデと思われるが、ヘラナデの際に沈線状になった部分がある。364はヘラ状工具による沈線を2条持つ半精製の深鉢で、両面とも丁寧なナデで仕上げている。365は粗製深鉢で、器表面に窪みを多く有する。366は粗製深鉢の小片。367～369は胴部屈曲部の破片。367は屈曲部やや上の内面に、粘土の接合部が沈線状に残っている。370～372は深鉢の底部片で、いずれも小豆大～大豆大の窪みが器表面に多数ある。373～377は精製浅鉢のいわゆる黒色磨研土器である。黒色もしくはそれに近い色で、両面ともヘラ磨研もしくは内面はヘラナデを施している。374も同様の土器であるが、色調が淡黄褐色系である。379はやや厚めの器壁で、深鉢かも知れない。380は淡黄褐色系の色調。381は半精製土器で山形を呈する。382は鉢か。383は黒色磨研土器で鉢か。384は浅鉢の底部で、外底部はていねいにナデている。385は土製品の破片で沈線で文様を描いている。

386は漆黒色黒曜石製で、石錐と考えられる。縦長剥片を素材にして、調整によって基部を作り出

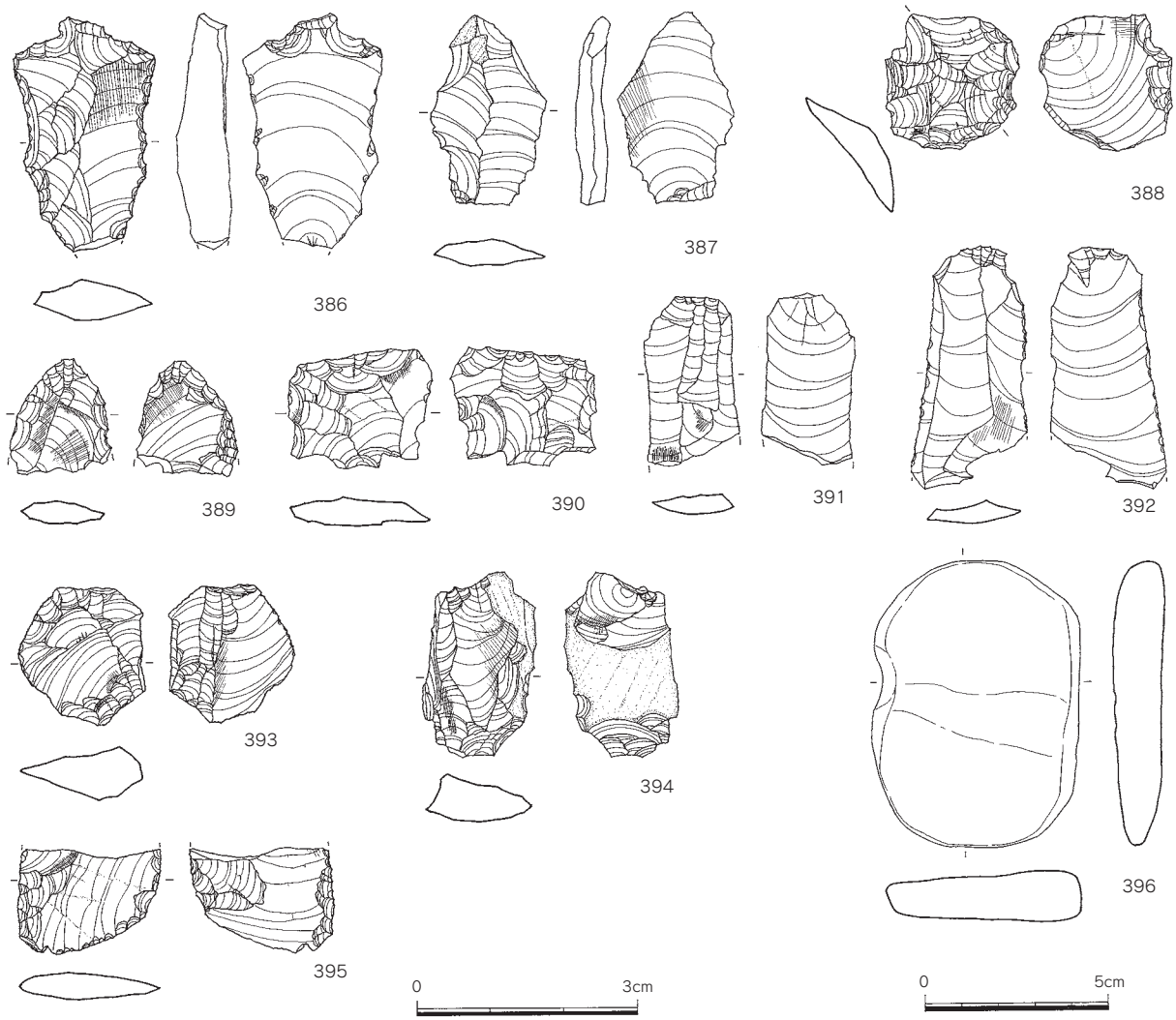


図76　SK05出土遺物図 2（1/2・1/1）

し、両側縁にも細かい調整を施している。先端部は欠失し、欠失部近くは断面が三角形を呈する。387はややパティナの古い黒曜石製の縦長剥片である。388は漆黒色黒曜石製の剥片で、A面は各方向から細かい調整を加えている。B面にも両側縁微調整を施している。389は漆黒色黒曜石製の石鏃で主要剥離面を残している。390は漆黒色黒曜石製である。一見つまみ形石器のようであるが、つまみに見える部分は折損面である。両面とも各方向から調整が加えられている。先端縁には使用によるもと思われる潰れが確認できる。391は漆黒色黒曜石製の縦長剥片で、両側縁に使用による微細剥離が認められる。392も漆黒色黒曜石製の縦長剥片で、両側縁とも使用している。くさび形石器のように上下両側に細かい調整が加えられており、さらに端部がつぶれたような状況を呈している。394は漆黒色黒曜石製で、両面に自然面を残し、両端から打撃を加えている。小型の残核もしくはくさび形石器のようなものか。395は漆黒色黒曜石製の使用痕がある剥片である。396は自然石を利用している。ほとんど自然面であるが、片側に抉りがあり、その抉り部分と反対側縁及び図の面の中央にひもずれと思われる痕跡が認められる。また図と反対面の中央に径1㎝程度の凹みがあり、凹みの周辺に縦方向の擦痕状の線が数条確認できる。（米倉）

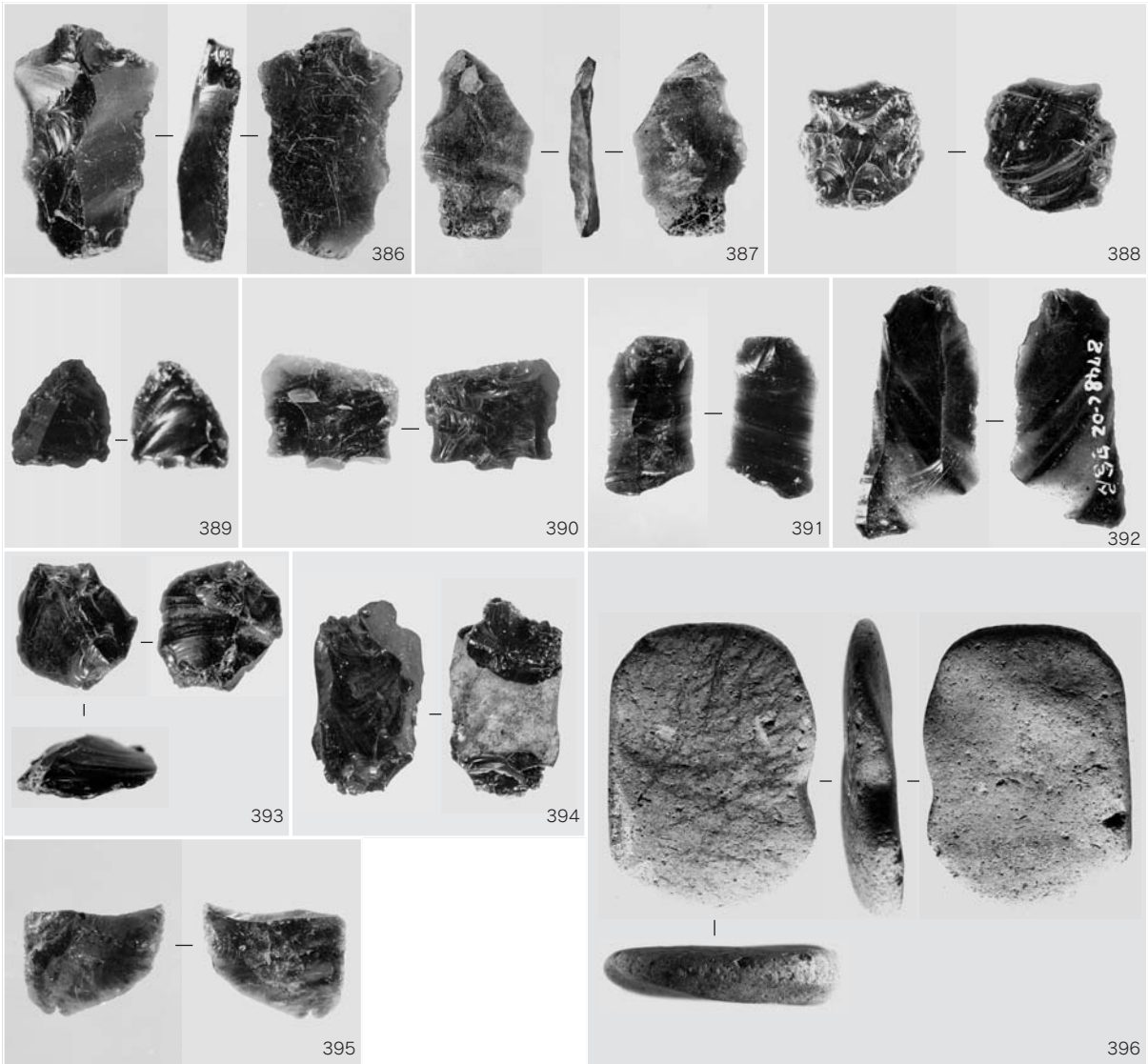


写真77　SK05出土遺物 2

4．埋　甕（SR01・図77、写真78）

試掘によって縄文時代の遺物がA－1区に集中することから本調査区を設定、拡張したが、明確な遺構として最初に確認したのが、このSR01埋甕である。その後、SC01竪穴住居跡、SK01、02土壙の検出が続き、縄文時代の集落遺構発見の端緒となった。

墓壙の平面形プランは、南北に長い楕円形で、長軸168㎝、短軸120㎝である。壁は周囲から斜めにそのままの傾斜で掘り込まれ、逆円錐状となり明瞭な平底とはなっていない。この中央部の深さは、検出面から80㎝を測る。なお検出面の標高は22.72mである。この墓壙の南側に片寄って粗製深鉢を長軸に沿って斜めに埋置しており、その角度は54度である。深鉢の底部、胴部ともに壙底や壁に接地せず10㎝程の間がある。墓壙に土を加えて安定を図りながら丁寧に埋置したことが想像できる。方位はN-10.5°-Eである。深鉢の口縁部のほとんどが削平されて失っており、上部の蓋の有無やその形状について確認できないが、もし深鉢だけの単棺だとすると、完全に土中に隠れるには30㎝～50㎝程の厚さが必要なことから、逆に削平の深さも推測可能である。この深鉢の器形などの特徴は後で記すが、胴下半部の底部近くには割ってできた穴がある。なお深鉢の中からは別の遺物を発見することはなかった。また本遺跡では埋甕はこの1基のみである。（力武）

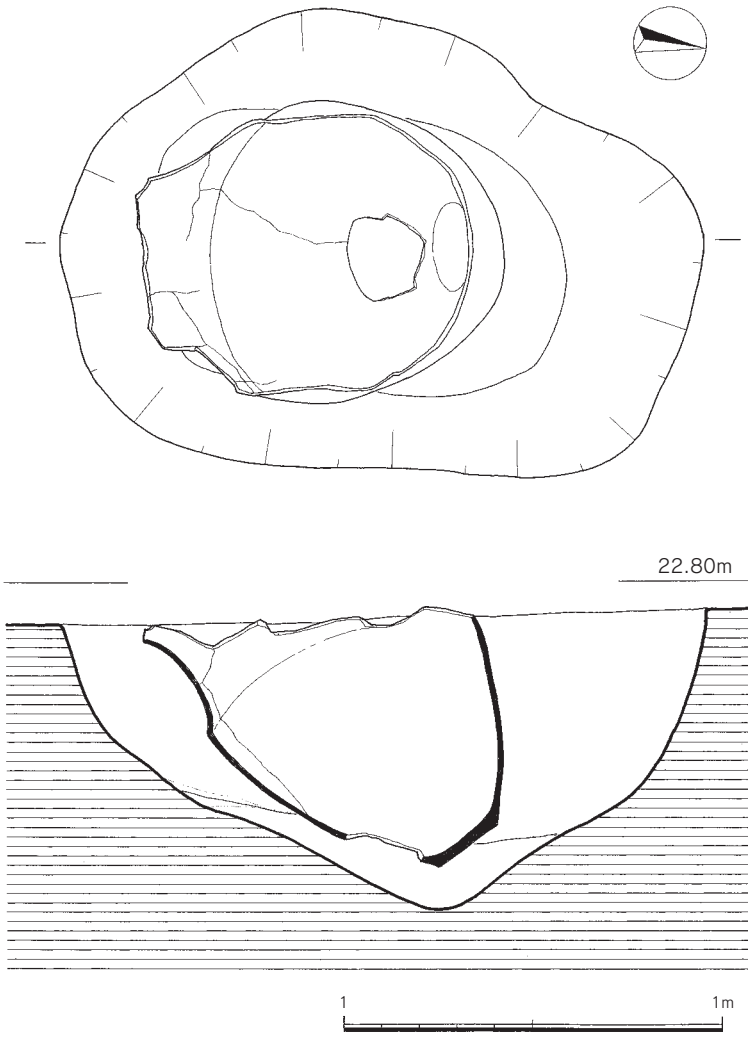


図77　埋甕実測図（1/20）

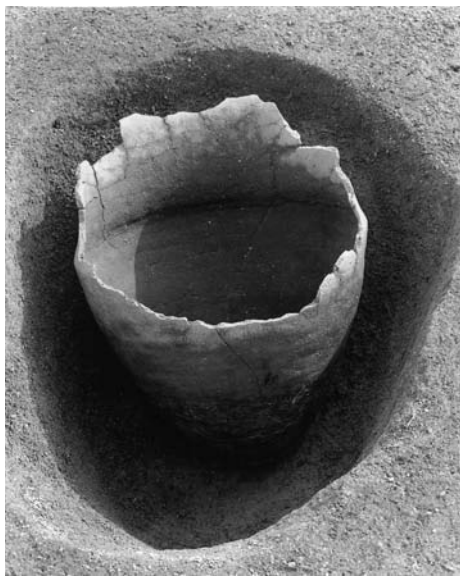
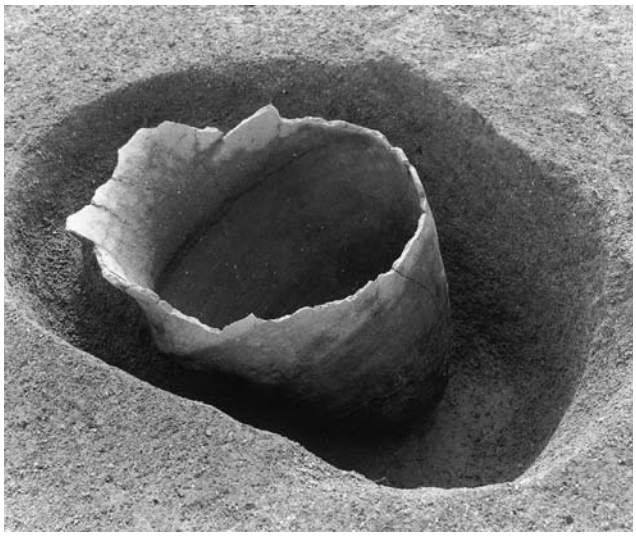


写真78-1　SR01埋甕



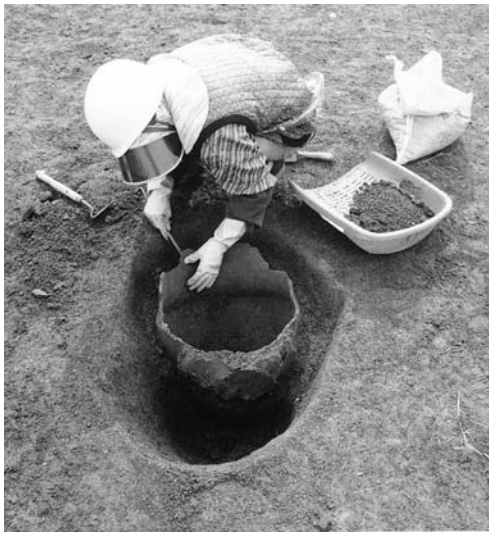


写真78-2　埋甕

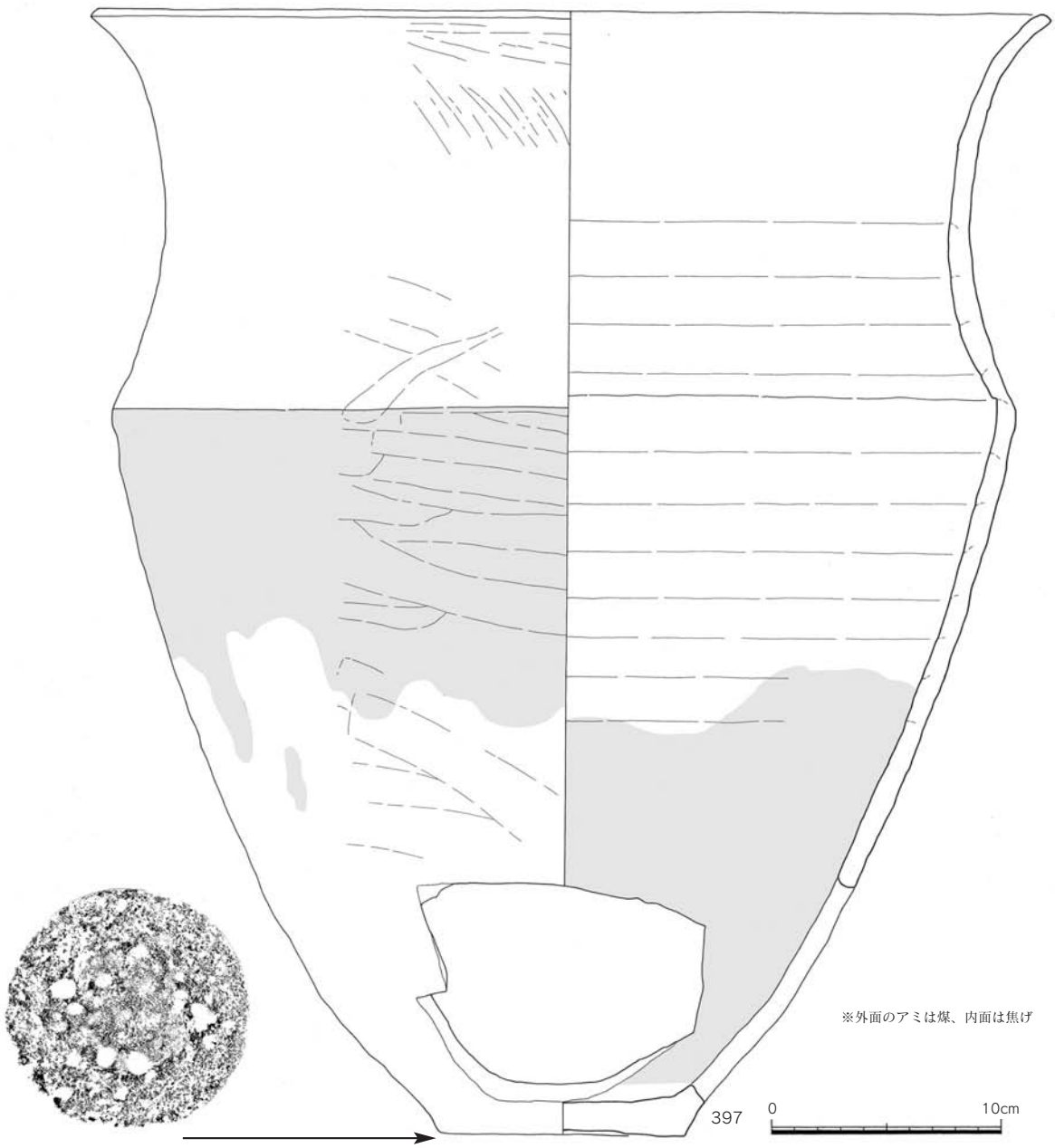


図78　埋甕出土遺物図（1/3）

埋甕出土遺物（図78、写真78）

397は埋甕に使った土器である。口径42.2㎝、器高54.2㎝を測る半精製の深鉢形土器である。口縁部の大部分と胴部屈曲部の一部を欠失する。底部のすぐ上の径約11㎝の略円形を焼成後に穿孔している。外面は胴部屈曲部から上がヘラナデ後ていねいなナデ、屈曲部から下がヘラによるケズリ気味のナデである。内面も同様だが、屈曲部から上には指押さえ痕が残っている。外面屈曲部下と口縁部付近に煤が付着している。内面底部近くには焦げ状のものが付着している。煮炊きに使用したものを転用している。焦げは底から2～3㎝の高さまでは全く付着しておらず、焦げが付着した際このラインまでは水が入り、その上部に焦げた物質が付着したものであろう。また内面の屈曲部から下は粘土帯の接合痕が残っており、粘土帯の幅は2㎝～2.5㎝である。（米倉）

5．包含層（A－1区散布地）の遺物

本調査区では竪穴住居跡、埋甕、土壙のような明確な遺構に伴わないで相当な点数の土器や石器が散布するような状況で出土した。下部にも重なったように出土する部分があり、上下2面の実測図を作成したが、同色の土で土層的に区別はできなかった。これら遺物の検出面は、先の遺構とほぼ同一面であることから、散布する遺物（群）にどのような遺構名をつけるのか、そして時期は埋甕などと異なるのか、つまり集落と関係のある遺構として認識していいのかなど次々に問題となった。

数軒の竪穴住居跡が広場を取り囲み、この広場を中心にして共同作業や祭礼が行われ、また集落の一角には墓地があり、斜面や窪地はゴミ捨て場に利用されていた、、、。こんな縄文時代集落のイメージに合わせて理解しようとしていた。つまり散布している土器は、竪穴住居跡や埋甕などが営まれた集落のすぐ近くに同じ頃捨てられたものと推定した。

今は発掘作業によって耕作土と床土を水平に剥いでいるが、縄文時代の地表はもともと起伏があり、埋甕は割に高い場所に埋葬されたために、後世の削平を受け、一方土器や石器などの遺物が捨てられた窪地は影響を受けずに今回同一レベルで出土したという訳である。発掘時は、このような認識で、集落を強く意識して「散布地」という遺構名を付け、縄文時代集落を構成する重要な生活遺構の一つとした。確かに出土遺物の位置を平面的に見れば、遺物や自然石の多くはSK03土壙、SR01埋甕を最南端にして北東方向に延びて散らばり、さらにその多くが不整形の長く浅い溝状の落ち込みに集中していることが分かる。おそらくこの溝状の落ち込みも埋甕と同様に上部を削平され、その下部のみが残ったと推定できることから、互いに大きな時期差はないというのが発掘時の一応の結論であった。

ではこの溝状落ち込みに含まれないその他の遺物については、どのように理解し、説明できるのだろうか。すでに堆積していた遺物包含層に竪穴住居跡や埋甕などが掘り込まれ、その後沖積地だったために河川の氾濫や浸水によって遺構の上部が削平され土砂が流失し、その際包含されていた遺物だけが洗い出され、今回の調査で先の遺構と同じ面で出土したという想定もできよう。とすれば、竪穴住居跡や埋甕より古い時期の遺物ということになり、集落と切り離して扱うべきである。名称も集落に関係した「散布地」では適切でない。この他にもまだまださまざまな状況が想定できることから本書では、「包含層の遺物」として報告することにした。（力武）

写真79　発掘作業風景

ここでは縄文時代の調査区を設定したA－1区から出土した遺物をまとめて報告する。上記のとおり竪穴住居跡の壁高が10数㎝しかないことから、50㎝以上の削平を受けており、包含層から出土した遺物が原位置にあるのならば、竪穴住居跡より古いのは明らかである。そのため遺構内出土遺物と包含層出土遺物の時期差が問題点の1つとなる。そこで、形態の異なるものが多く出土した深鉢形土器をA～C類に分類して報告し、別章で包含層遺物と遺構内遺物について検討したい。

A－1区から出土した遺物量は約30箱である。これらには本調査のメインである晩期条痕文土器・無文土器等以前の土器がごく少量出土しており、まずそれから記述する。（米倉）

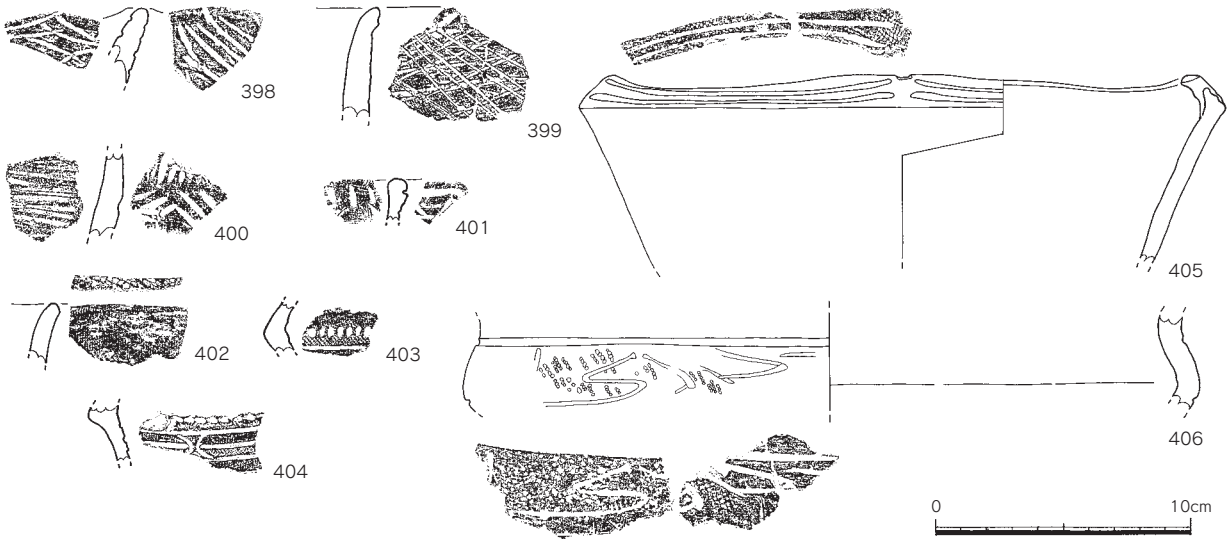


図79　A－1区包含層出土前期～後期土器・所属不明土器図（1/3）

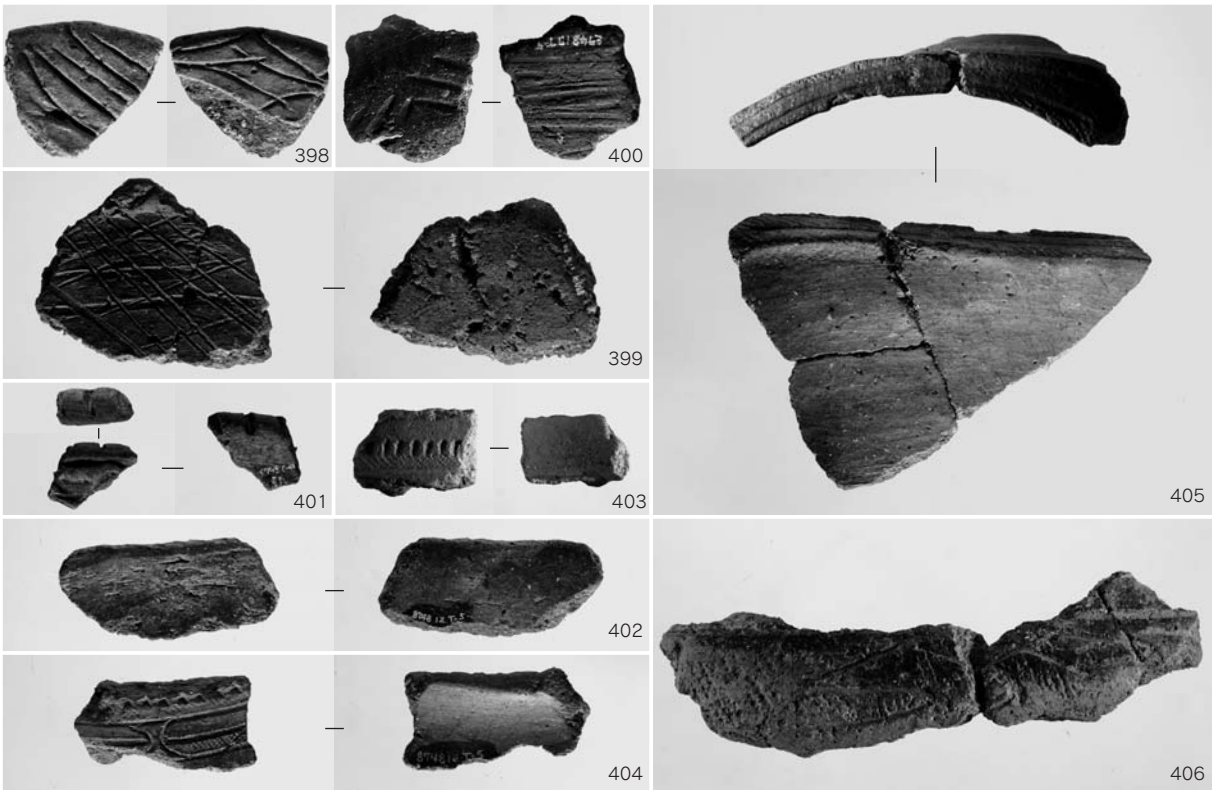


写真80　A－1区包含層出土前期～後期土器・所属不明土器

前期～後期の土器・所属不明の土器（図79、写真80）

398・399は所属不明な土器である。胎土の状況や雰囲気からは後期末から晩期前半の土器ではないかと思われるが、小片のため明確ではない。398は両面に沈線文を施す。小片のため明確ではないが、山形口縁を呈すると思われる。沈線は鋭利なヘラ状工具で施している。399は小片のため傾きが不正確である。外面に鋭利な工具で沈線を各種の方向に引いている。398・399ともに両面ともナデ仕上げである。400・401は前期の土器で、400は内面に貝殻条痕を施し、外面には小さな棒状施文具で沈線を施している。401は外面に沈線を、口唇部に刻目を施している。内面はナデか。402も所属不明。後期か。外面は不明確であるが、工具によるナデ、内面はナデ。口唇部に縄文もしくは貝殻腹縁押圧文を施している。403は頸部屈曲部に列点を施し、その下に縄文と沈線を施している。404は403と同様に頸部に列点を施し、その下に磨消縄文を施している。内面はヘラ磨きに近い。405は波状口縁部分に縄文を施した後、2本の沈線を引いている。ナデているためか、縄文が消えかけている部分があるが、磨いているわけではなく、うっすらと縄文も見えている部分が多く、磨消しているわけではなさそうである。他は両面とも磨きに近いヘラによるナデである。406は二次焼成のためか、器表面の残りが悪い。全面に縄文を施した後、沈線を引き、一部を磨消す。破片の範囲内では、沈線の引き方に規則性は見いだせない。（米倉）

深鉢・鉢（図80～92、写真81～89）

前述のとおり、深鉢は口縁部から頸部の器形によってA～Cの3類に分類した。A類は短い口縁部から外反する頸部に至り、胴部に屈曲部を有するものである。胴部のみの破片はB類と区別が付かないため、B類の項でまとめて掲載した。

A類（図80・81）は比較的胎土に大粒の砂粒を含まず、ていねいなナデや磨研状の調整で、精製に近いもの、もしくは半精製のものが多い。407は半精製で、口径20.6㎝を測る。胎土はやや粗いが、全面ていねいなナデで仕上げている。口縁部に1条、頸部に2条以上の沈線を持つ。煤や焦げの付着はない。408も半精製で、外面はケズリぎみのナデ、内面はナデで仕上げる。口縁部に2条の沈線を持つ。煤や焦げの付着はない。409は外面がヘラ磨研に近い調整を施し、内面はヘラでケズリぎみにナデている。口縁部は沈線状に凹んでいる。胴部屈曲部から下に煤条のものが付着している。両面に小豆大の凹みが多数ある。410は口径26.6㎝を測り、長めの口縁部に5条の沈線を施した精製に近い土器である。両面ともていねいなナデを施している。411は両面ともナデで丁寧に仕上げているが、内面に何らかの条痕状のものが確認できる。胎土はかなり砂質で、他と異なっている。口縁部に沈線を1条施す。412は胎土に砂粒をあまり含まず、両面とも丁寧にナデ仕上げを施した精製に近い土器である。外面の色調が白色に近く、他にない色調を呈している。外面に2条の沈線を施している。413は復元口径43㎝を測る粗製土器で、口縁部を欠失している。かろうじて口縁部と頸部の屈曲部が残っているため、A類とした。器表面が荒れているため明確ではないが、外面には胎土の砂粒が動いた痕跡と工具痕らしきものがあることから、ナデ仕上げの前にヘラ状工具で調整を施しているようである。内面はていねいなナデ仕上げを施している。煤や焦げは認められない。内面に黒斑がある。414は口径38.4㎝を測る半精製の土器である。外面は橙色～白っぽい色調で、黒斑があり、ていねいなナデ仕上げである。口縁部には鋭利な工具でつけた沈線が2条巡る。内面は黒っぽい色調で、ヘラによるケズリぎみのナデで仕上げている。頸部上部に、径5㎜、深さ4㎜ほどの非貫通の焼成後の穴があるが、胎土中の礫が抜け落ちた跡か。焦げや煤は認められない。

415～427は小片である。小片のため、深鉢ではなく、鉢あるいは浅鉢の可能性もある。全面丁寧な

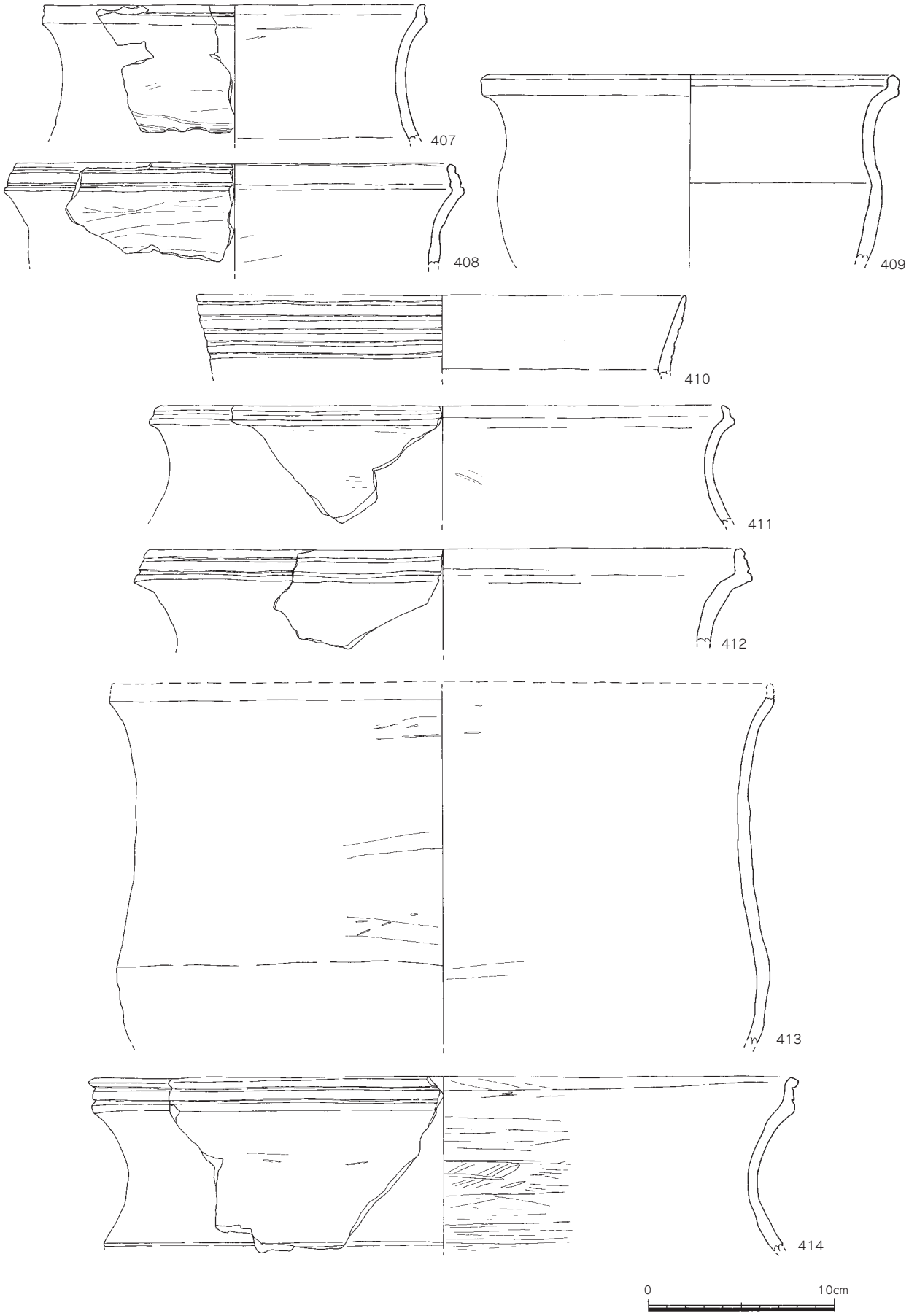


図80　A－1区包含層出土A類深鉢土器図 1（1/3）

ナデを施している。415は白色系の色調を呈している。418は傾きが不確かである。423の外面には、ヘラ調整による痕跡が明瞭に残っているが、その下に条痕状の条線が見られるが、何の調整かはわからない。425は黒色を呈しており、あるいは鉢かもしれない。427は大口径の破片で、口縁部に2重の沈線を施している。胎土は顔料を塗ったように器表面が赤味を帯びているが、二次焼成のためか黒化しているため明瞭ではない。

428～433・438・439はB類深鉢の口縁部である（図82～84）。口縁部からそのまま頸部に移行し、頸部と胴部の境に屈曲を有する器形である。貝殻条痕を施した粗製のものが多い。

428は口径37.6㎝、推定器高40㎝前後を測る。口縁部の欠落が多くて不明瞭だが、刻目がありそうである。外面は淡黄褐色を呈し、条痕を施す。条痕は右下がりに引いた後、不規則に沈線のように1本が左下がりに引かれ、さらにその後に右下がりの1本づつ線が引かれている。条痕は条線の太さから貝殻のようである。1本すつの線は貝殻を傾けて1本だけが付くように引いたものか。胴部屈曲部の上には沈線が1条巡る。内面は指押さえの後に全面横ナデであるが、恐らく指によるヨコナデであろう。胴部下部には条痕らしき痕跡が見られる。大破片であるが、煤や焦げの痕跡は認められない。429は全体の2/3近くが遺存している。口径31.5㎝、器高36㎝を測る。胎土はかなり粗く粗製の土器である。外面は貝殻条痕を施した後、胴部中央から上はナデを施しているが、条痕は完全には消えていない。内面は比較的ていねいにナデ仕上げを行い、条痕は確認できない。部分的に線状に痕跡が残っており、ヘラ状工具でナデたものと考えられる。胴屈曲部のすぐ上に、幅1㎝、高さ2㎝ほど縦方向に粘土を削り取った部分があり、その部分だけ内面が膨らんだように飛び出ている。意識的にしたものか偶然の産物かはわからない。外面口縁部と胴部屈曲部直下に煤条の痕跡が、内面胴下部に焦げ状の痕跡が見られるが、明瞭ではない。器表面の各所に圧痕状の凹みが見られるが、その多くは砂粒が抜け落ちたものであろう。

430は口径18㎝を測る鉢もしくは深鉢である。外面口縁部直下に横方向のハケ目状の痕跡が見られるが、ナデ仕上げのため原体は不明である。板ナデか。内面はヘラでナデているようである。両面に小豆大の窪みが無数にある。胴部屈曲部下に煤状のものが見られるが不明瞭である。431は図ではわかりづらいが、破片の下部が外反しており、B類に入れた。白色系の色調を呈する。外面は2～3本を単位とする一見ハケ目状の調整が見られるが、板ナデか。内面はていねいにナデている。両面に小豆大の窪みがある。432は全体白色系の色調である。破片割れ口の一部が二次焼成を受けている。両面ともていねい

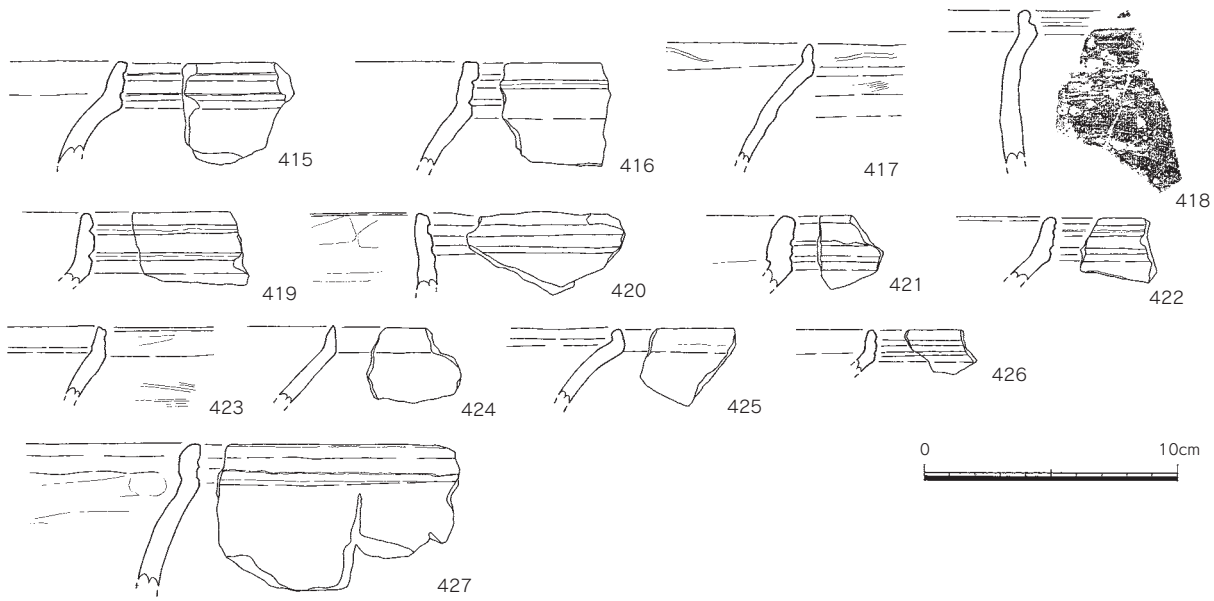


図81　A－1区包含層出土A類深鉢土器図 2（1/3）

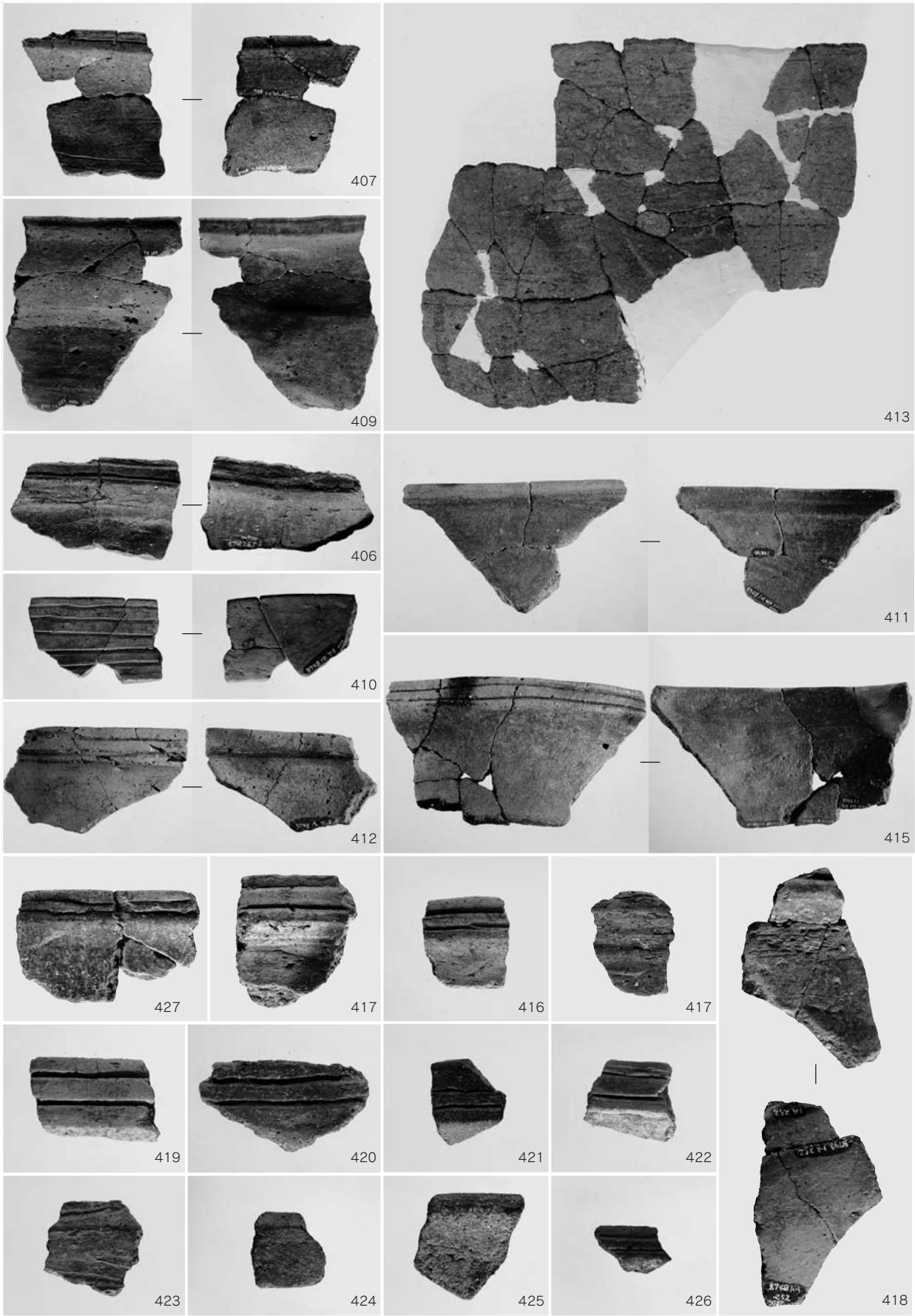


写真81　A－1区包含層出土A類深鉢土器

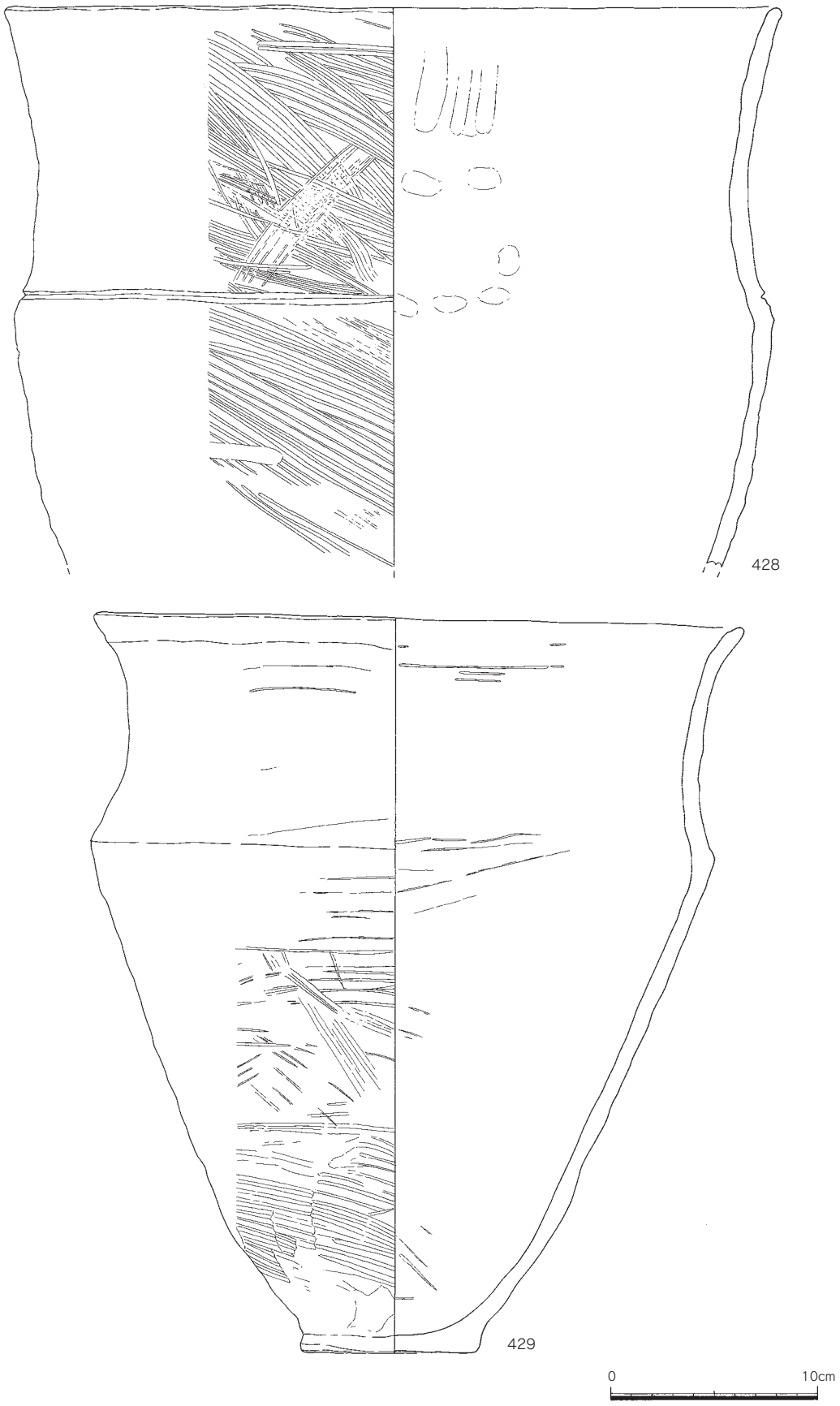


図82　A－1区包含層出土B類深鉢土器図 1（1/3）

写真82　A－1区包含層出土B類深鉢土器 1

にナデているが、内面にはヘラ状工具らしき痕跡が見られる。両面に小豆大の窪みが無数にある。433は破片の下部が大きく外反しつつあることからB類に入れたが、C類の可能性もある。口径38.2㎝を測る。外面には貝殻条痕を施す。内面は貝殻条痕を施した後、口縁下のみヘラ状工具でナデている。胴部内面と口縁端部外面に黒斑がある。438・439は破片の最下端で外に屈曲することからB類に入れた。ともに屈曲部の外面をヘラで削りだして段を作っている。

434・435～437・440～455はA類またはB類の胴部屈曲部の破片である。434は胴部最大径43.4㎝を測る。調整は両面ともナデ仕上げであるが、外面胴下部には条痕らしき痕跡が諸処に見られる。外面に煤状のものが付着している。435は両面ともヘラ状工具でナデている。外面にはヘラの痕跡が明瞭に残るが、内面はていねいにナデている。胴部最大径42.9㎝を測る。436は、外面屈曲部のやや下から上には貝殻条痕が明瞭に残る。それから下は粘土が不定形に瘤状に突起している部分があり、少なくとも全面を条痕やヘラなどで均してはいない。瘤状部分の下はヘラで削った痕跡があり、かなりおおまかにヘラでケズリぎみにナデ、部分的に削り取らなかった部分が瘤状に残ったものであろう。内面は器面の保持が悪いが、屈曲部周辺にヘラの痕跡と見られる跡が確認できる。ヘラナデであろう。外面に煤状のものが付着している。437は屈曲部より上がナデ仕上げ、下が貝殻条痕で煤状のものが付着している。内面は指押さえの後ヘラナデか。440は焼成が極めて良く、色調も他と異なって明るい淡橙色を呈している。外面には貝殻以外の工具でナデを施して条痕状を呈している。内面は貝殻条痕の後、ナデ仕上げである。441は屈曲部から上に2種類の貝殻条痕を施している。幅の広い方が2枚貝腹縁によるもので、狭いものが巻き貝によるものか。後者は前者の後に部分的に施されている。内面は2枚貝腹縁によるものである。445は屈曲部すぐ上に沈線を1条巡らしている。448は外面に沈線状の調整が2条ある。449は小さい棒状施文具または指で施した沈線状のものが2条確認できるが、破片が小さく不明確である。452は内面に焦げ状のものが付着している。454は径の大きな土器で、内面に小豆大の窪みが多くある。

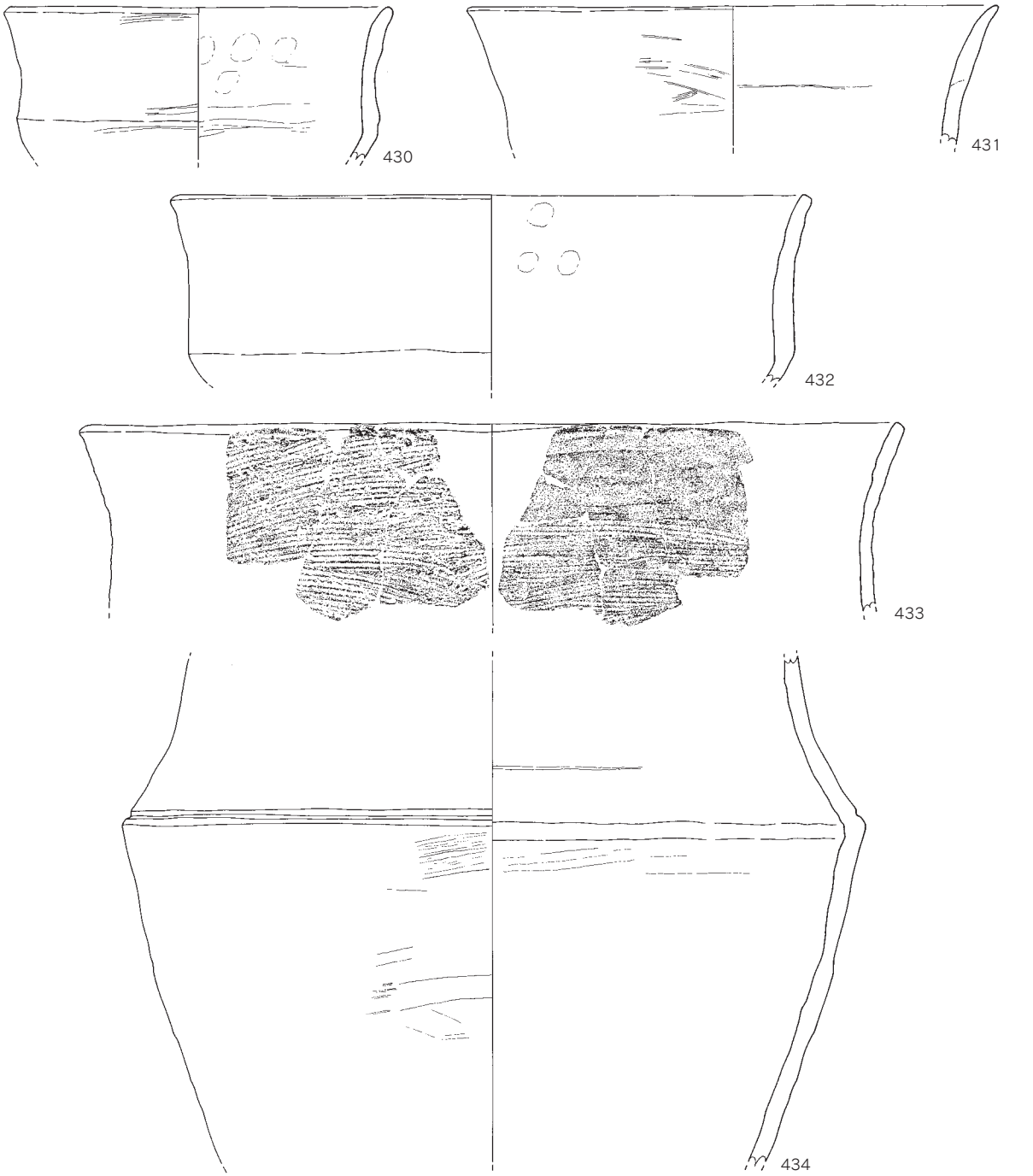


図83　A－1区包含層出土B類深鉢土器図 2（1/3）

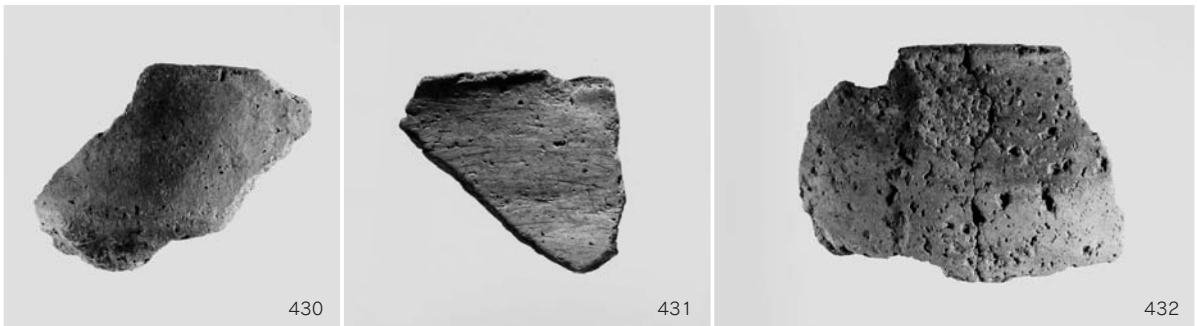


写真83－1　A－1区包含層出土B類深鉢土器 2

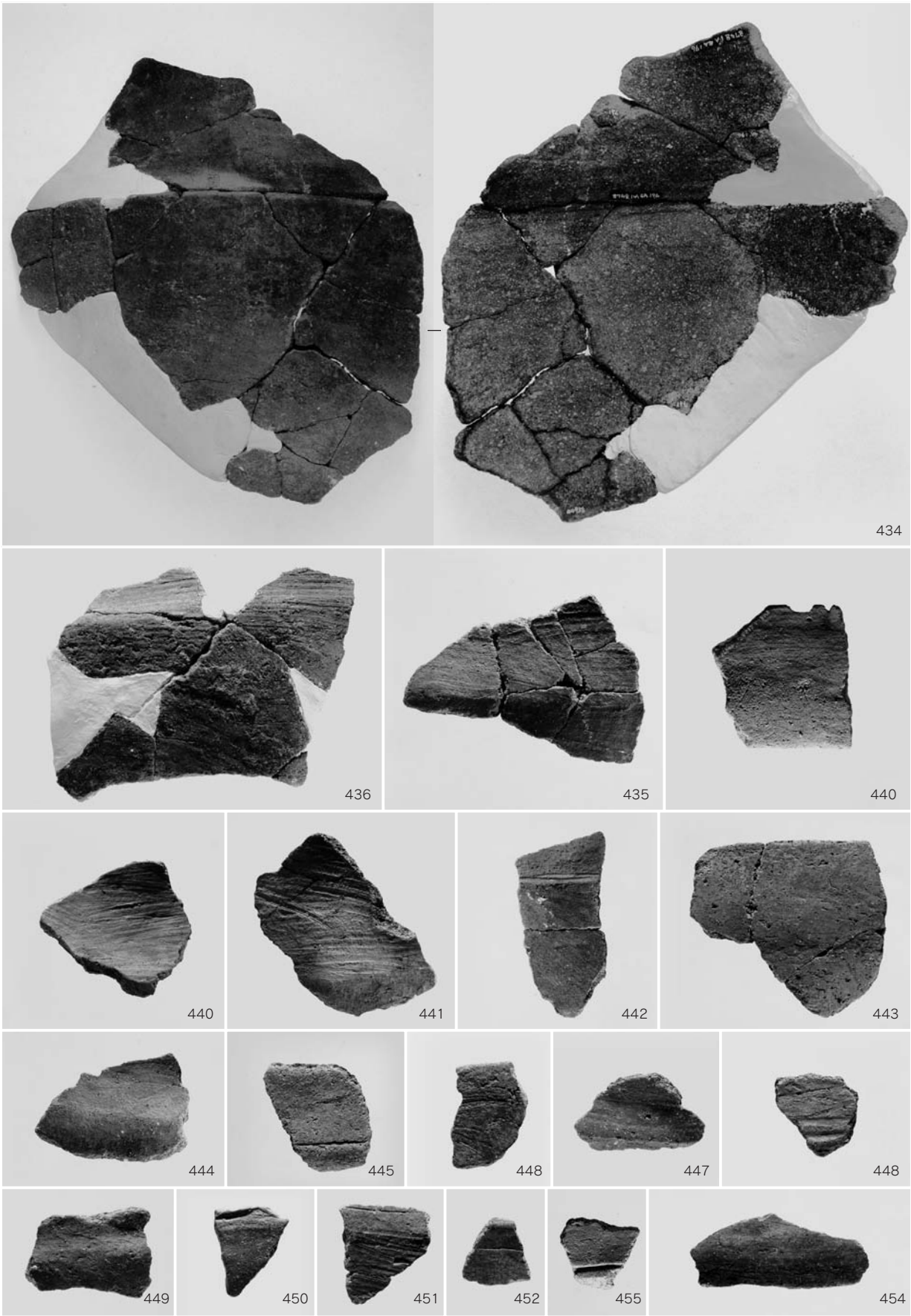


写真83－2　A－1区包含層出土B類深鉢土器 2

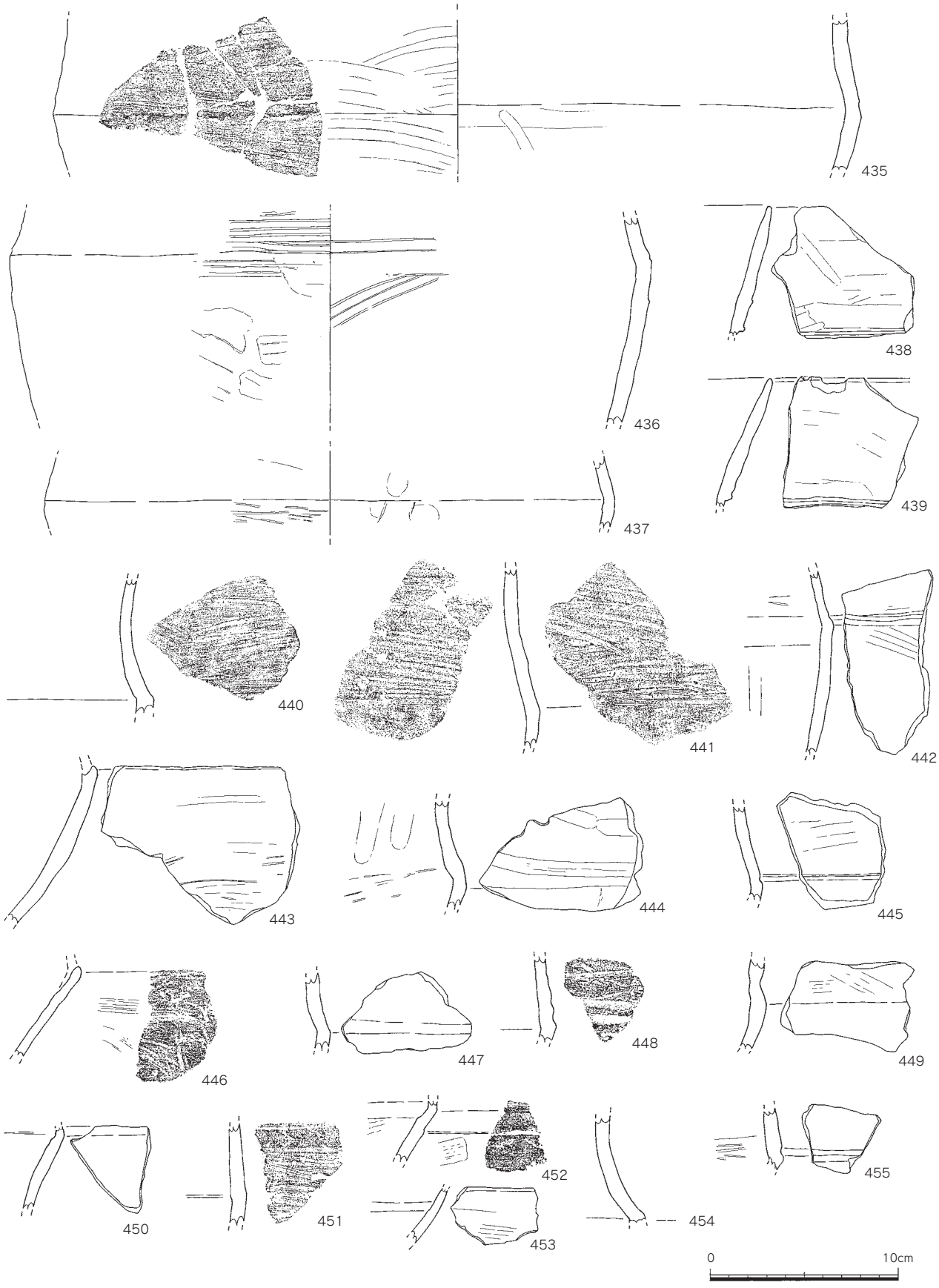


図84　A－1区包含層出土A・B類深鉢土器図（1/3）

456～557はC類口縁部である。直行もしくは直線的に外傾し頸部がなく、途中屈曲をもたずにそのまま胴部・底部に移行する形態である。口縁端部がわずかに外反するものや、胴部が屈曲ぎみのものなども含む。456は口径38.6㎝を測る粗製品である。外面口縁直下とその下で異なる貝殻を使用した条痕を施している。口縁直下に比べ、その下の条痕は条線間の幅が狭い。内面は横方向にナデを施しているが、ヘラと指を併用しているようである。両面に小豆大～大豆大の窪みが無数にある。内面下部は黒変しているが、両面とも煤や焦げの痕跡はない。457は明るい色調で被熱の痕跡は見あたらない。外面は横方向にナデを施しているが、ナデの前に擦過痕が認められるが、何によるものか判然としない。内面も同様であるが、内面の場合は貝殻条痕のような印象を受ける。両面に小豆大～大豆大の窪みが無数にあるが、このうちのいくつかには窪み内に線が確認できる。小さな種子の圧痕か。458は外面に貝殻条痕を施す。内面はナデ調整で仕上げている。両面に窪みが多いが、特に米粒大の大きな窪みが多い。口径は小片で不確かだが、41.6㎝を測る。459は外面に貝殻条痕を施すが、それ以外の条線もわずかに確認できる。内面は横方向のナデ仕上げで、指によるものか。小豆大～大豆大の窪みが無数にある。口径は40㎝前後を測る。460は外面をヘラ状工具でケズリ気味にナデた後、条痕を斜めに施すが、全面ではなく条痕のない部分もある。条痕は貝殻ではなさそうである。内面は横方向のナデ調整であるが、ヘラによるものか。両面に窪みが無数にある。口縁部は両面とも黒変しているが、焦げや煤の付着はない。

461は口縁端部のみ外反させているが、粘土を継ぎ足して外反させているようである。深鉢もしくは鉢になるかもしれない。両面橙色系の明るい色調で、ていねいにナデ仕上げを施している。火を受けた痕跡はない。462は粗製深鉢で、外面は0.5～1㎝幅のヘラ状工具でケズリ気味にナデを施し、全体の工具痕による凹凸が激しい。内面はていねいなナデを施すが、工具の痕跡がわずかに確認できる。口縁部に煤状の痕跡がわずかに確認できる。両面とも小豆大～大豆大の窪みが無数にある。463は粗製深鉢で、外面は貝殻条痕を施すが、条痕に切られる条線があり、繊維状のナデ具のようである。口縁直下のみヘラ状工具によるナデを施している。内面は指押さえ・ナデ仕上げである。煤・焦げの付着はないが、被熱により胎土が脆くなっている。両面に小豆大ほどの窪みがあるが、中には5・6本の線を持つ大豆大の窪みがある。464は口径34.4㎝を測る粗製土器である。外面には浅い貝殻条痕を施す。内面はナデ仕上げであるが、その前に条痕を施しているようである。小さな窪みはない。465は口径33.8㎝を測る。口縁下でやや屈曲するが、そのまま胴部に移行するものと思われる。外面は0.6～1㎝ほどのケズリ気味のナデ、内面は指押さえ及びナデで仕上げている。

466は小片のため径は不明確だが約20.5㎝を測る。外面は横方向の貝殻条痕を施し、内面はていねいなナデ調整で仕上げている。かすかに煤状のものが付着している。467は斜めに貝殻条痕を施し、一部を指によるヨコナデで消している。内面はていねいなナデ仕上げる。両面に窪みが多い。468は両面ともナデで仕上げる。外面には煤が付着している。特に内面には小豆から大豆大の窪みが無数にある。469は口径21㎝を測る半精製の深鉢である。外面は条痕を施すが、原体は浅い条線で板状のものか。内面はていねいにナデ仕上げを行っている。破片の右下端部に焼成後の穿孔が施されている。口唇部には刻目が施されているようであるが、もともと浅い上に摩滅を受けているため明瞭ではない。470は口唇部を平坦に作っている。外面には条痕のように横方向に細かい線がついているが、板状工具によるナデであろう。内面も同様である。471は口径28.6㎝の粗製土器で、外面はヘラ状工具で横にナデているが、一部に斜め方向の条痕状の線が切っている。この線は1ないし2本が単位で原体はわからない。内面もヘラ状工具を使用しているが、横にケズリ気味に強くナデているため、ナデた部分が凹線のようになり、器面の凹凸が激しい。外面は二次焼成のため器面の剥落が見られる。472は口径26㎝の粗製深鉢で、外面は口縁部がヘラ(板)でナデており、ナデの際の線は明瞭に見えるものの比較的ていねいにナデている。

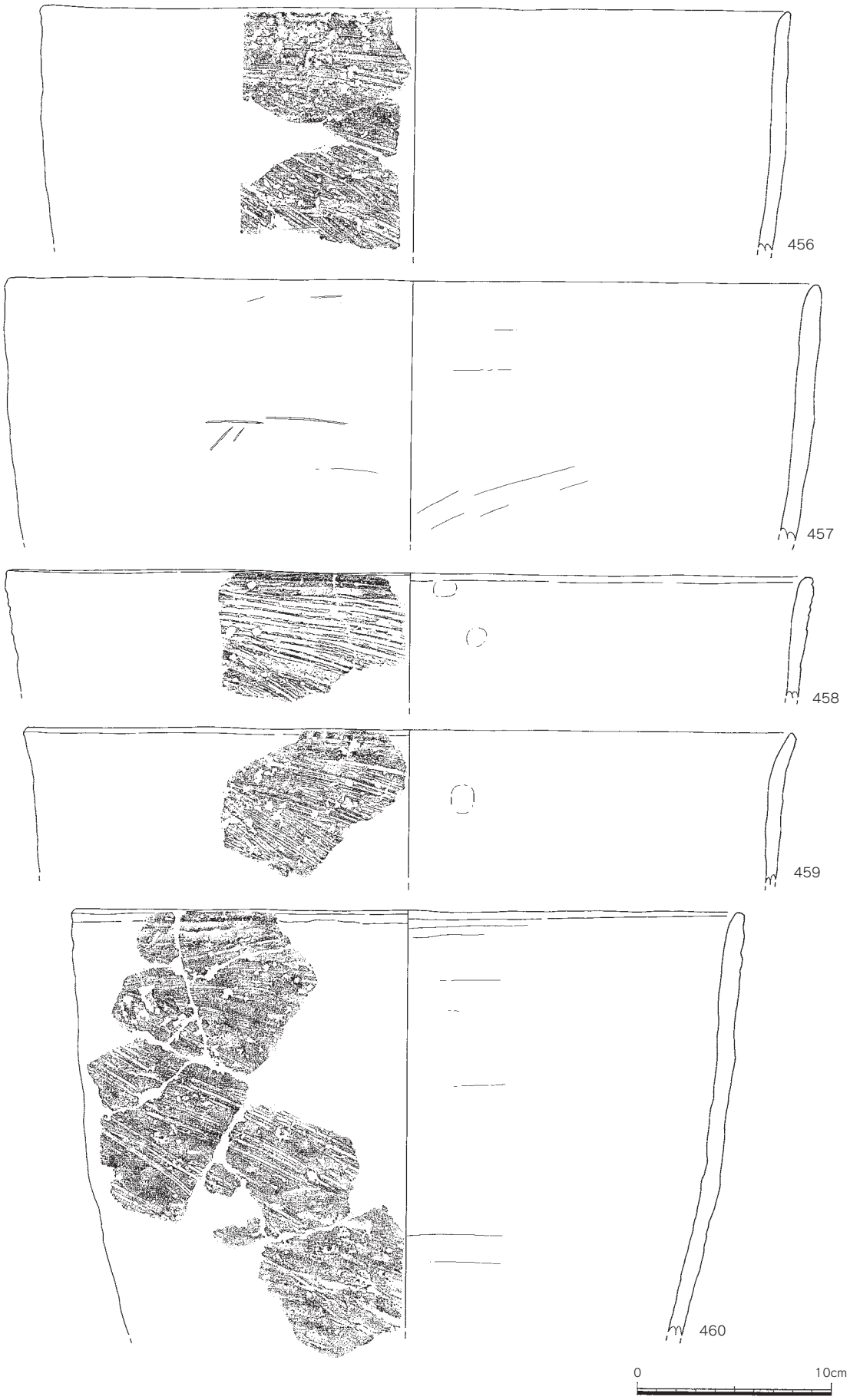


図85　A－1区包含層出土C類深鉢土器図 1（1/3）

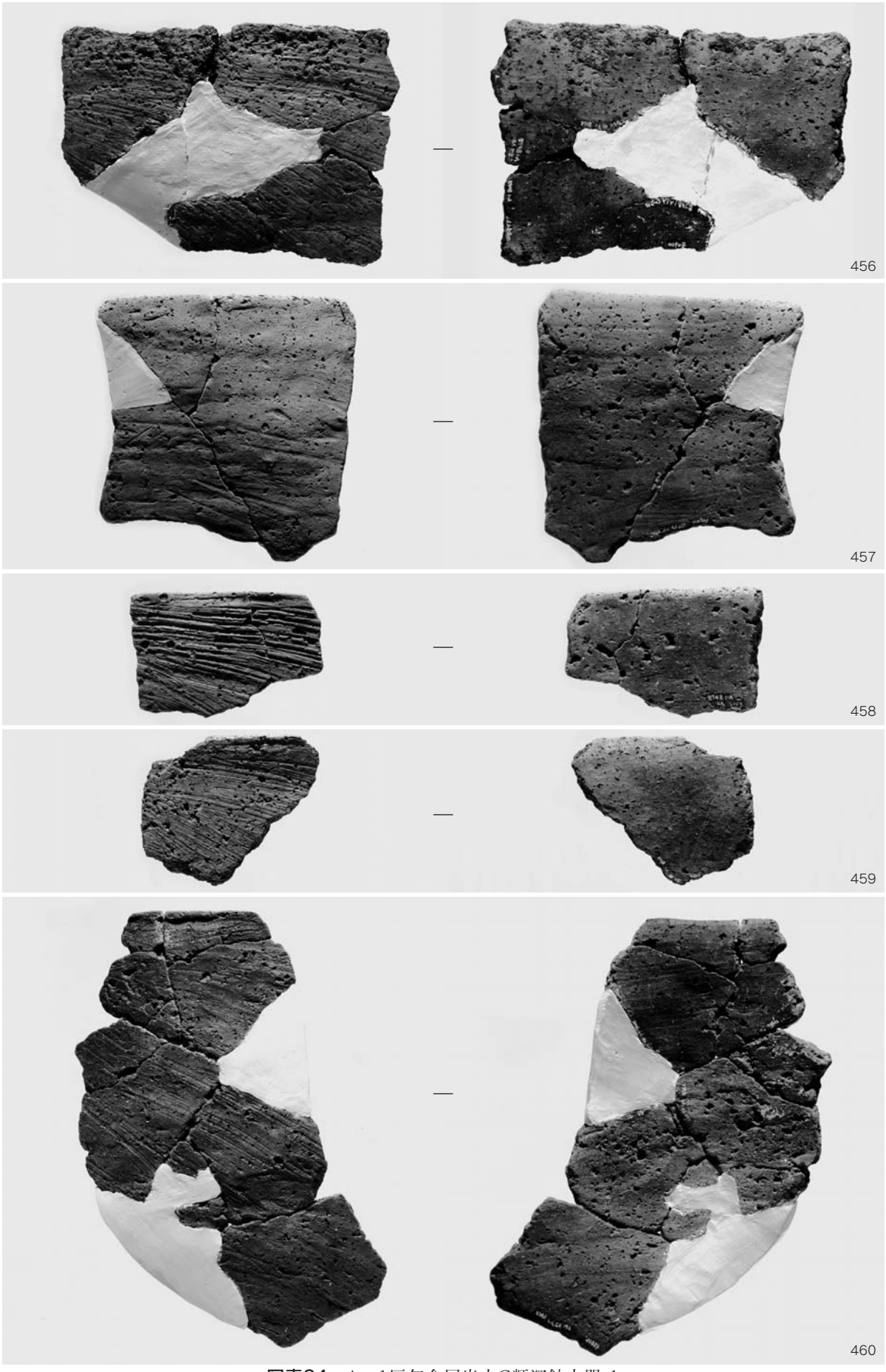


写真84　A－1区包含層出土C類深鉢土器 1

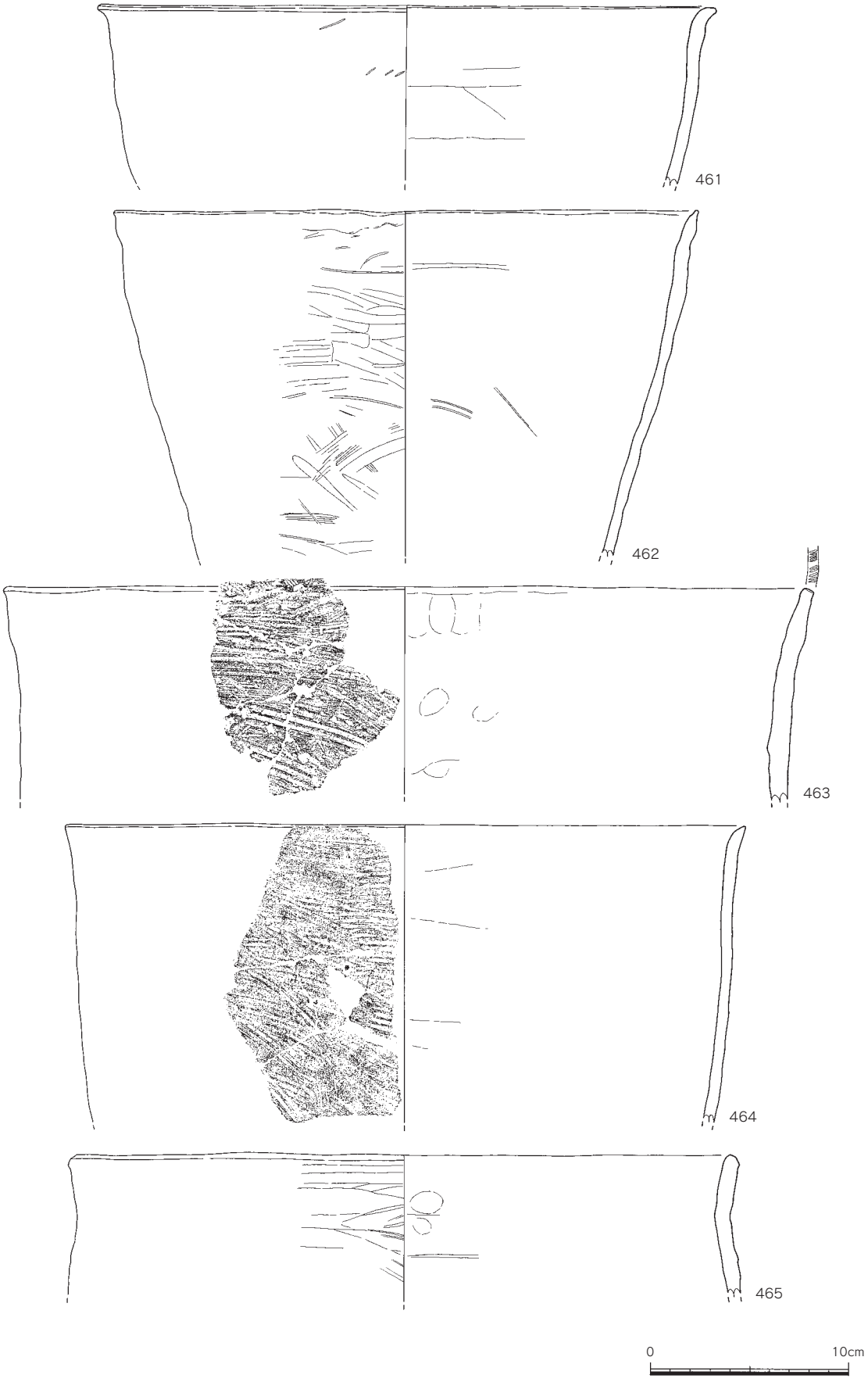


図86　A－1区包含層出土C類深鉢土器図 2（1/3）

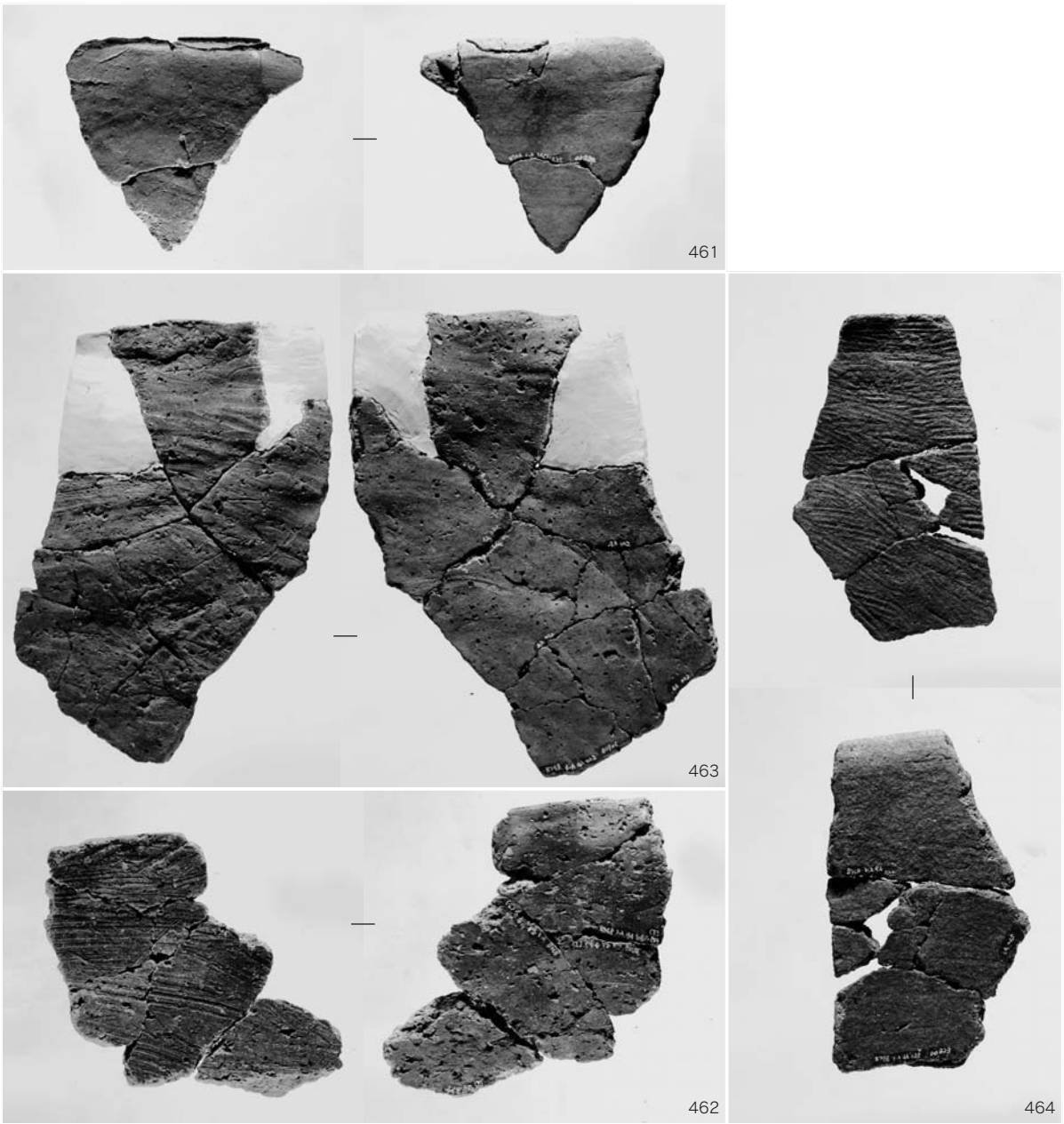


写真85　A－1区包含層出土C類深鉢土器 2

口縁端から5㎝ほど下以下は、幅2㎝前後のヘラ状工具でケズリ気味に粗くナデているが、ナデた際にヘラからはみ出た粘土をそのままにしているため、ナデ調整の痕跡が明瞭に判別できる、胴部も同様だが、ケズリ気味にナデている。内面もほぼ同様の調整であるが、胴下部は比較的ていねいで、ナデの単位がわからない。口縁部外面に煤の痕跡がある。両面に小豆大の窪みが無数にある。473は外面はヘラ状工具によるナデ、内面はナデ仕上げである。外面口縁部直下に沈線を1条巡らし、胴上部に縦と斜めの沈線を組み合わせて文様を描いている。474は小片で径は不正確である。両面ともていねいなナデ仕上げを施している。色調は、特に裏面が顔料を塗ったように赤い。476は、外面はていねいにナデているが、径3㎝ほどの浅い窪みが2か所ある。粘土接合部を指で押したものか。内面は指押さえの後、ケズリ気味のナデ調整である。両面に小豆大の窪みがあるが、特に内面に多い。

477～557は比較的小さな破片で、中にはB類を含んでいる可能性もある。477～527は直立に近いものか内湾気味の口縁部片である。477は粗製土器で、外面はヘラ状工具でほとんどケズリに近い調整で

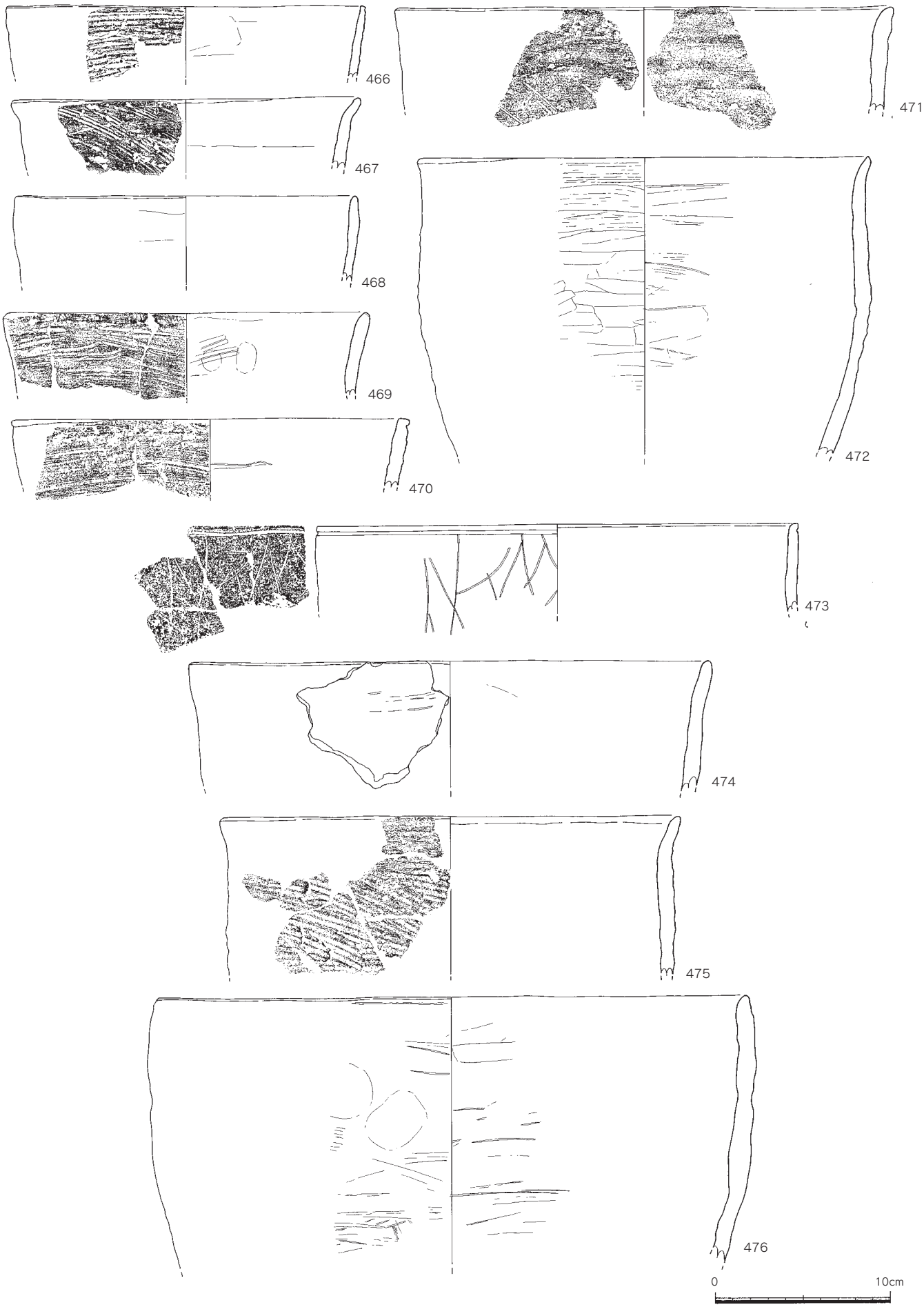


図87　A－1区包含層出土C類深鉢土器図 3（1/3）

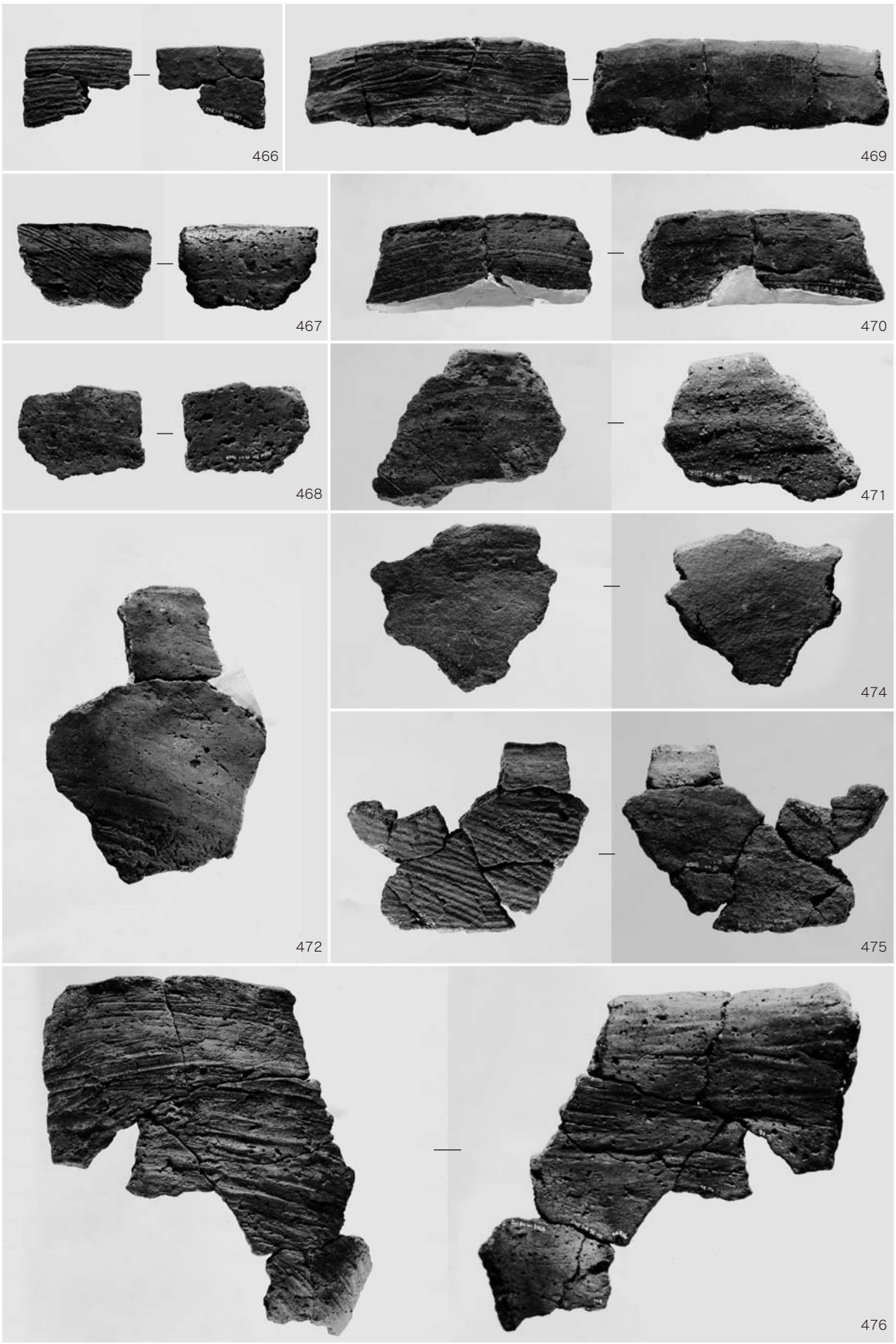


写真86　A－1区包含層出土C類深鉢土器 3

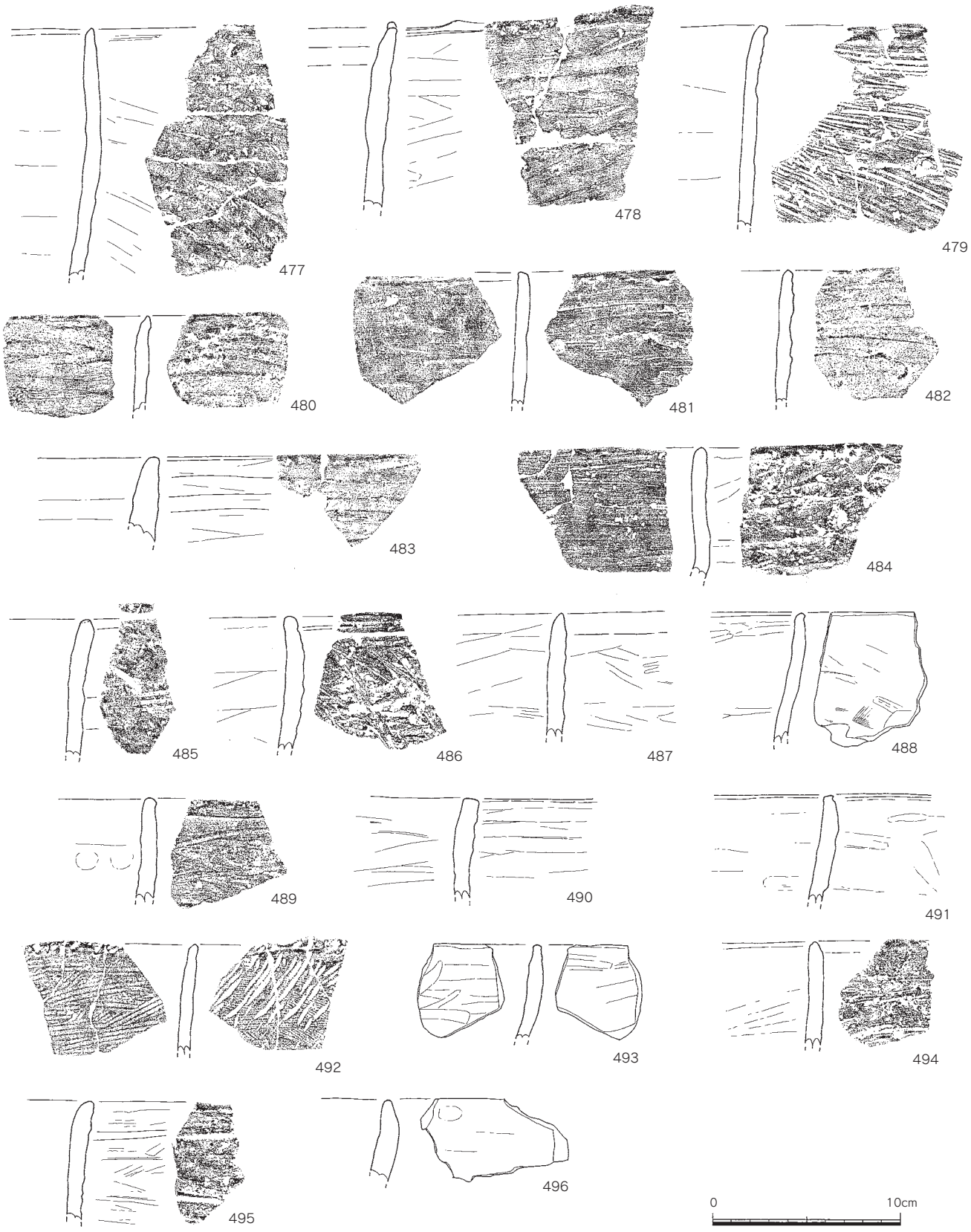


図88　A－1区包含層出土C類深鉢土器図 4（1/3）

ある。内面はナデ。両面に窪みが多い。外面口縁部に煤または焦げ状のものが付着している。478は口径40㎝前後の大型土器である。外面は指によるケズリと思われ、約1㎝幅でケズリの跡がみみず腫れ状を呈している。両面に窪みが多い。479は外面が貝殻条痕、内面はナデ仕上げである。口唇部はヘラの先端で浅い沈線状を成している。480は両面ともケズリに近いナデ調整。内面は特に1単位が明瞭に分かる。内面は漆黒色を呈している。481は両面とも板状工具でていねいにナデ仕上げを行った半精製土器である。482の外面はケズリによってみみず腫れ状を呈している。内面はていねいなナデである。481と482は小さな窪みはほとんどない。483は器壁が1㎝以上と厚い。外面をヘラ状工具でナデており、各ナデの単位の間がみみず腫れ状を呈している。484は外面は粗く削る。内面は板（ヘラ）状工具によるナデ仕上げ。割れ口にも被熱の痕跡が認められる。両面とも小さな窪みが多い。485の外面は貝殻条痕とヘラナデか。ヘラで短沈線状を成す部分がある。内面はていねいなナデ仕上げ。486は口縁直下に沈線が1条巡る。外面はヘラによるケズリか。条痕の後ナデの可能性もある。外面には小さな窪みが極めて多い。内面はきれいにナデている。487は口縁端部を横方向にヘラで幅約1㎝ほど面取りするようにナデている。その下はかなり粗いケズリか。内面はきれいにナデ仕上げを施している。488は両面ともていねいなナデで、外面に煤の痕跡がある。489は両面ともヘラナデである。490は両面ともヘラによるケズリ気味のナデ仕上げ。砂粒が極めて多い。491は両面ともていねいなナデで、口唇部はヘラで面取りしている。外面に煤が付着している。492は外面に目の細かい条痕もしくは板目を施した後、左下がりの短沈線を無秩序に多く引いている。内面は貝殻条痕を施しているが、外面より目が粗く、恐らく外面はハケ目のような調整であろう。口唇部にはヘラで深く切ったような刻目が施されている。胎土や焼成が良好な土器である。別時期の土器である可能性もある。また557の胴部片は同じ調整・同じ文様であり、同一個体の可能性もある。493は全体に内湾する土器で、鉢の可能性もある。両面ともヘラで調整しているが、内面は調整の跡が凹線のようである。494は両面ケズリ気味のナデ。495は外面がケズリ気味の調整であるが、工具はわからない。一部がみみず腫れ状を呈する。496は先端部が尖る。全体にやや内湾している。両面ナデ調整。

497は復元口径20.9㎝を測るが、小片のため不確かである。両面とも条痕を施し、外面に煤が付着する。498は内湾する口縁部である。両面とも粗いナデで、内面に小さな窪みが多い。499は口縁部の下に段が付いている。500は両面とも白い色調である。外面には条痕の後、口縁部はナデ仕上げを施す。内面はていねいなナデである。501は横方向に条線が多く見えるが、条痕か別の工具痕か判断が付かない。内面はナデである。両面窪みが多い。502は器壁が1㎝を超える。破片最下部が中に入っており、あるいはA類の可能性もある。両面ヘラで粗くケズリ、特に内面は洗濯板状を呈している。503は外面にかなり目の細かい一見ハケ目のような調整を施している。板ナデか。煤が付着した痕跡がある。504はかなり粗いケズリである。小さな窪みが無数にある。505は焼成の大変良好な土器で、内面はていねいにナデている。506は逆に焼成が悪い。外面に煤がわずかに付着している。507は両面ともヘラでケズリ気味にナデている。外面に粘土がボタン状に付着しているが文様ではないであろう。508は工具は不明だが両面ともナデている。外面は細いヘラ状工具か。509は内面口縁直下にヘラ状工具で押し、沈線状を成している。圧痕状の窪みがある。510は外面に条痕が施されているが、原体はわからない。十字に条痕が施されている。511はヘラもしくは指によるケズリ気味のナデで、一部が凹線状を成している。内面口縁部直下は貝殻条痕か。512の外面は貝殻条痕である。口唇部には不明確であるが、刻目が施されている。513はていねいにナデている。小さな窪みが多い。514は波状口縁を成している。492と調整も同じで同一個体であろう。515はハケ目状の調整である。板ナデか。沈線が5条あるが、このうち3本はヘラでつけている。他は調整に伴うものであろう。516は磨研に近いナデ調整である。517は両面

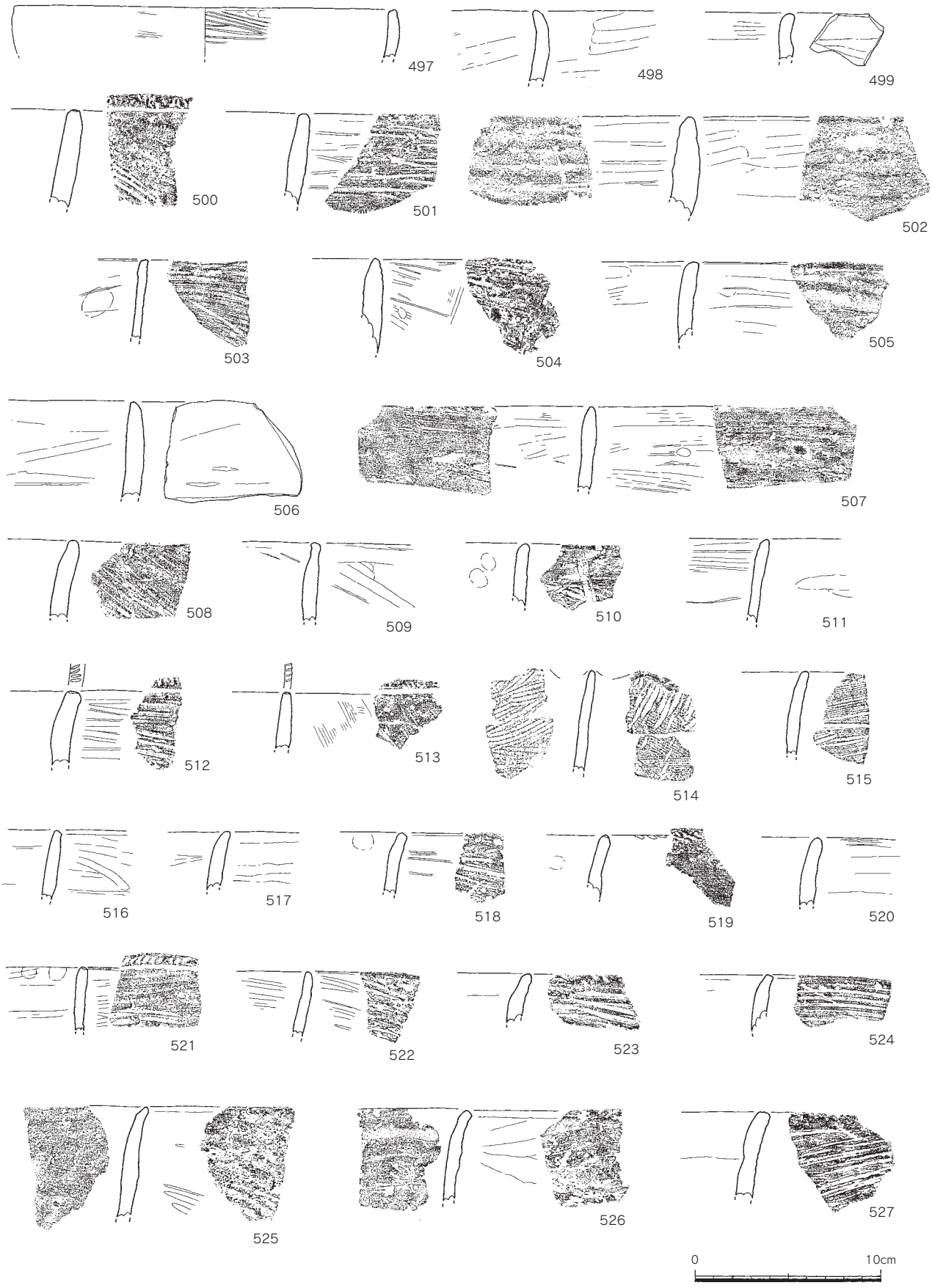


図89　A－1区包含層出土C類深鉢土器図 5（1/3）

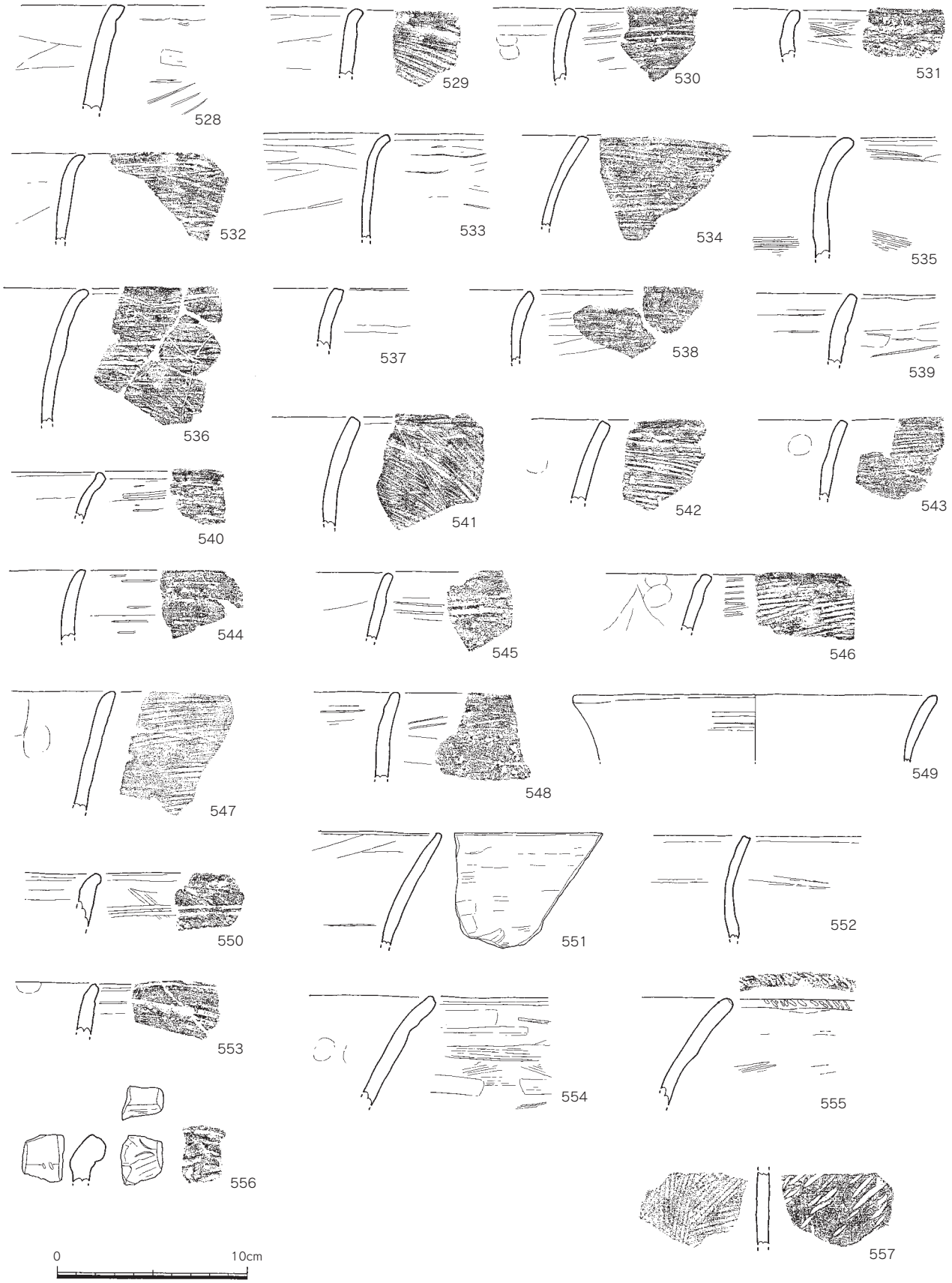


図90　A－1区包含層出土C類深鉢土器図 6（1/3）

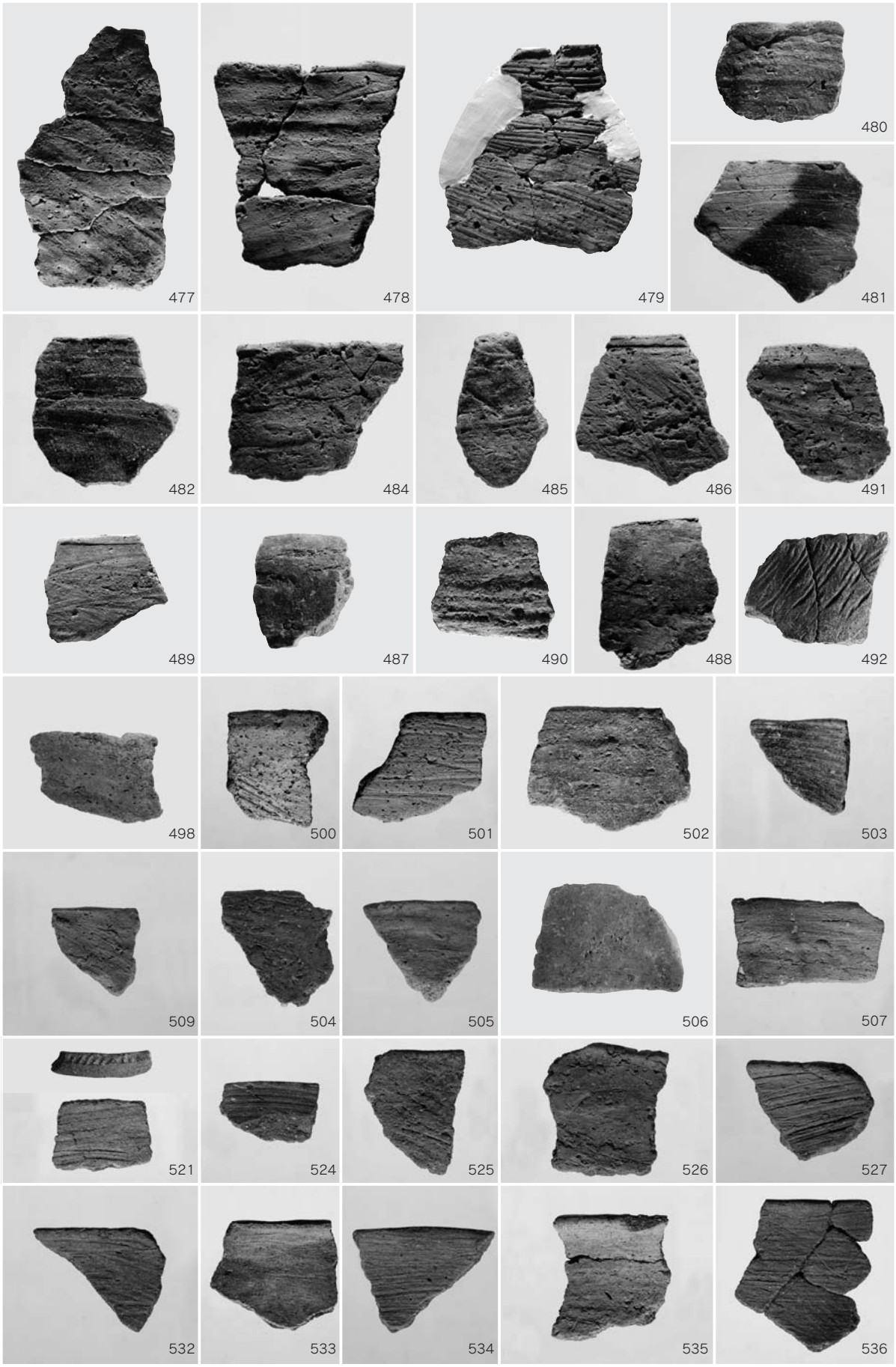


写真87　A－1区包含層出土C類深鉢土器 4

ともナデ仕上げである。518は外面に横方向の条線があるが、幅の広いものと微細な幅のものが同じ間隔で認められ、工具の推定がつかない。繊維状のものか。519は磨研に近いナデ調整である。520も両面ナデ調整であるが、表面は粗い。両面に窪みが多数ある。521は外面に条痕の後にナデを施すが、条痕の工具は不明。口唇部には刻目を施している。522も外面に条痕を施すが、貝殻条痕か。内面はナデ仕上げである。523は外反するが、図よりやや開くかも知れない。外面に貝殻条痕を施す。524も外反する口縁部片である。外面には貝殻条痕を施す。内面はナデ仕上げである。525の外面はケズリか。かなり器面が荒れている。526は内面を磨研状にていねいにナデているが、かすかにその下に条痕状の条線が確認できるが、明瞭ではない。またナデの際に一部粘土を取りすぎて凹線状になる部分がある。外面はケズリか。527は横方向に条痕状の条線があるが、板ナデによる板目ではないか。ただし破片の下部に幅の異なる条線があり、こちらは貝殻条痕の可能性がある。内面はナデであるが、その下に横方向の条線がかすかに確認できる。

528は口縁端部に粘土を貼り付け、口唇部をヘラで押さえて平坦にし、その際粘土を外に突出させて突帯文土器のように端部を外に突出させている。破片の最下部には斜めに鋭い工具で沈線を3本引いている。両面ともナデ仕上げである。529も同様の方法で端部を外に突出させている。外面は貝殻条痕、内面はていねいなナデ仕上げである。530はわずかに外反し、外面に条痕を施している。531は528・529ほど明確ではないが、口唇部を平坦にしてわずかに端部を外に突出させている。内面は磨研のようなナデである。532はわずかに条痕が残るが、ナデ仕上げである。533は両面ともヘラでていねいにナデている。外面口縁端部の急激に外反する部分はヘラで押さえた跡が小さな段状に残っている。534は外面に条痕を施している。535は端部が急激に外反する。図にある調整線はヘラナデを数回行った痕跡である。内面は漆黒色を呈する。536は外面に貝殻条痕を施すが、斜めに数本不規則な線が引かれている。537は口唇部を平坦に作る。538は外面の原体不明の条痕を施しているが、条線が見えにくくなるほど煤が付着している。539は外面をヘラ状工具でけずった後にナデを施している。540は口縁端内面を突出させ、鉢形土器の可能性もある。外面は粗くケズリを施している。541は外面に条痕を施しているが、条痕は板状工具によるものか。542は外面に貝殻条痕を施し、口唇部は平坦に作っている。両面に小豆大の窪みが多くある。543も貝殻条痕を施し、口唇部は平坦に作っている。544は外面横方向に擦痕状に線が数本入っているが、ケズリの跡か。煤が付着している。545はかなり粗い条痕の上からナデ調整を施している。546は外面に貝殻条痕を施している。内面は被熱のためかピンク色になっている部分がある。547は外面に貝殻条痕を施す。内面は横方向にナデ調整を施しているが、ナデの後に外面とは異なる施文具で縦方向に条痕を部分的に施している。548は両面とも削った後にナデ調整を施している。549は口径19.2㎝を測る。外面は条痕の後指によるナデ、内面はナデ仕上げである。口唇部は口唇部の幅より狭い工具で削って平坦にしている。550は外面に条痕を施している。横方向の2本の線は沈線か。煤が付着している。551はかなり大口径である。両面ともナデ仕上げであるが、外面に板状工具のような痕跡がある。口縁端内面を鋭利な工具で削って沈線状を成している。552は外面が条痕の後にナデ、内面は指押さえの後にナデである。553は深く幅の広い条痕が2条のみ残り、条痕の後にナデ仕上げか。554は外面をヘラで粗く削り、煤が付着している。口唇部は中央が沈線状を成している。両面に大豆大の大きな窪みが多くある。555は両面ともやや粗く磨研状にナデを施している。内面は被熱のためか漆黒色を呈して器面が剥落している。556は厚手のくの字に折れ曲がる異質の口縁部と思われるが、土製品の可能性もある。557は492・514と同一個体の可能性が高いと思われる胴部片である。同一個体とすると、内面の貝殻条痕の方向が異なっていることから、口縁部よりやや離れた位置のものと思われる。そうなると、外面の文様はほぼ全面に施されていたと考えられる。

558～561は小型の鉢に分類できるものである。558は口径26.2㎝、復元器高17㎝前後を測る。器壁が1㎝近い厚手の鉢形土器である。口唇部には大きな刻目を施している。外面は条痕を施した後に全体にナデを施すが、条痕の原体はわからない。内面はナデ仕上げであるが、条痕状の条線もかすかに確認できる。二次焼成のためか器面が脆くなっている。大粒の砂粒をかなり多く含み粗い。559は胴部径12㎝を測る。内面には粘土の接合痕が約1.5㎝おきに見られる。外面はナデ調整で、煤が全面に付着している。561は口径10.6㎝を測る小形の鉢と思われるが、外面には煤が付着している。560は口径13.1㎝を測る。胴部屈曲部からすぼまっていく鉢形の器形と思われる。口縁部は波状を呈する可能性がある。外面は粗く恐らくヘラでケズリ気味に横方向にナデている。条線が多く見られるが、一定間隔ではなく方向も微妙に異なり、ケズリ時についたものと思われる。内面はナデ調整で粘土接合痕が残る。頸部に焼成後の穿孔が施されている。

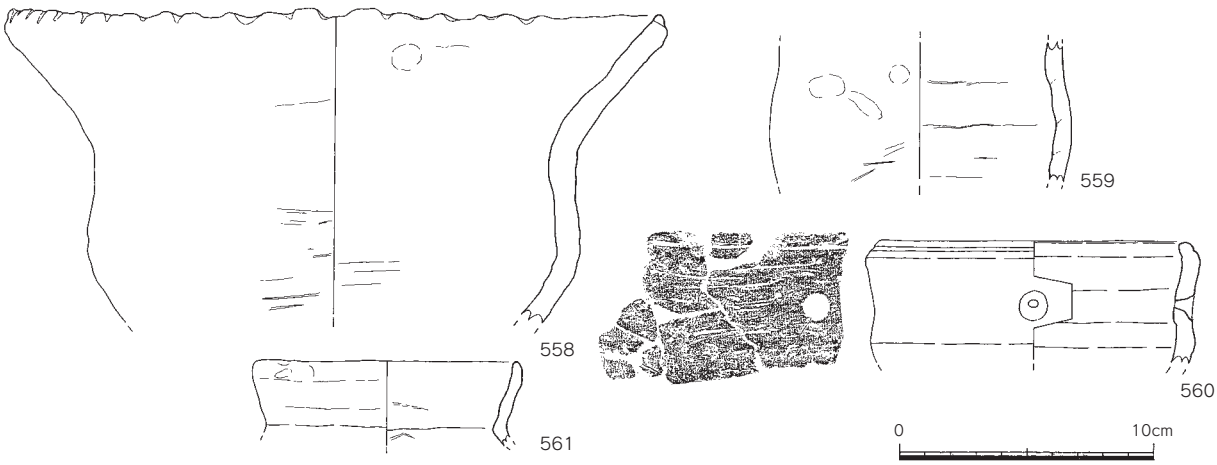


図91　A－1区包含層出土その他の深鉢・鉢土器図（1/3）

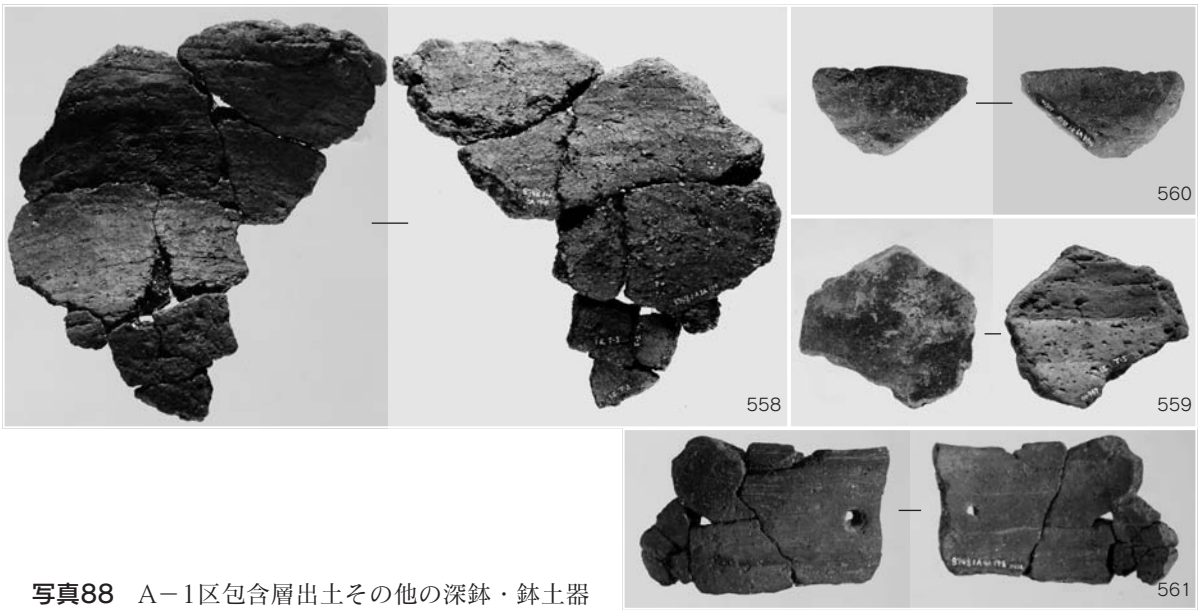


写真88　A－1区包含層出土その他の深鉢・鉢土器

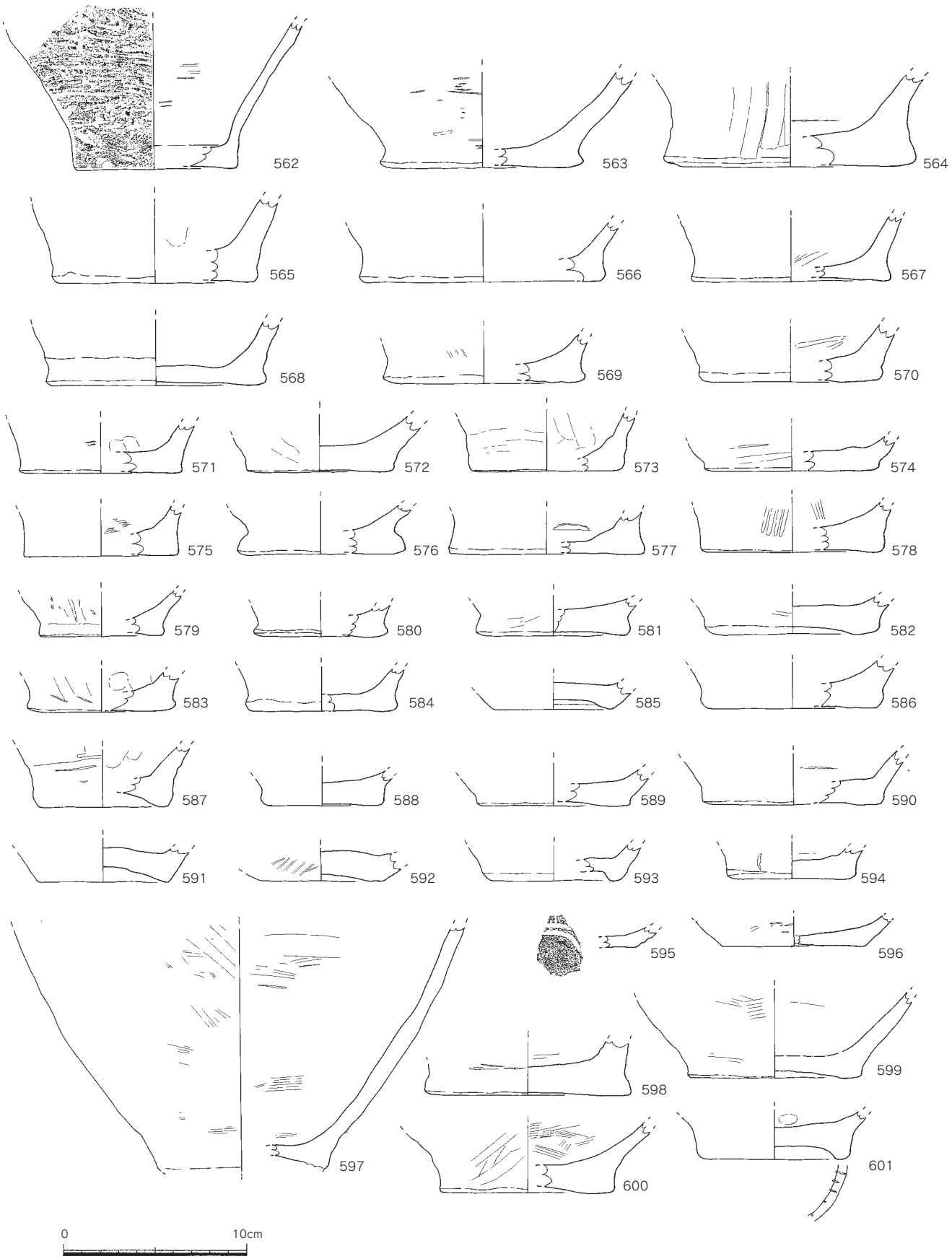


図92　A－1区包含層出土深鉢土器底部図（1/3）

562～601は深鉢・鉢の底部である。562は被熱のためか赤化し、脆くなっている。外面には原体不明の条痕、内面は条痕の後ナデ仕上げを施している。特に内面に無数の窪みがある。563は胴部への立ち上がりをすぼめている。両面ナデ仕上げ。564は底の器壁が1.5㎝と厚い。外面は縦方向にヘラで削っている。無数の窪みがあるが、外底部に長さ1.5㎝のドングリ状の窪みもある。565以降は小さな破片が多い。566・567は小豆大の窪みが無数にある。568は底径26.2㎝を測る。570は焦げの痕跡が見られる。572は白色に近い色調で底径8㎝を測る。575も白色系の色調である。576は底部円盤貼り付けである。578は外面に条痕もしくはハケ目状の調整が施されている。弥生土器の可能性もある。581の外底部には窪みが1か所に10個ほどあるが、他の窪みのように石の脱落や種子の圧痕のようではなく、径5㎜ほどの棒を押しつけたような跡である。582は底部接地面（陶磁器で言う畳付）と胴部外面はナデ調整であるが、外底部上げ底部分は磨研に近いナデを施している。大粒の砂粒をかなり多く含み、内底部器表面には砂粒が多く露出しているが、外底部上げ底部分はまったく砂粒が見えない。585も上げ底であるが、接地面部分は粘土を接合して作っている。588の外底部は磨研状であるが、中央に土器製作時の敷物ような痕跡がかすかに確認できる。589は内底部に深い条痕があるが、貝殻条痕か。590は両面に無数の小豆～大豆大の窪みがあるが、窪みの中に3本前後の線を持つものがある。591は上げ底であるが、粘土円盤の周りに粘土を貼り付け、その後ヘラでケズリながら磨研状にナデ仕上げをして作っているようである。592も上げ底で態度の砂粒が見えないような磨研状を呈するが、中央のみ凹凸があり砂粒が露出している。593は上げ底というより高台のような底部である。595は鉢の底部か。全面黒色磨研に近く、浅鉢の可能性もある。立ち上がり部分に横方向に2条の沈線が巡り、さらにその上に2本の縦方向の沈線が施されている。597は両面ともほぼ全面ナデ仕上げであるが、ナデの前にケズリを施した痕跡が残っている。外面上部に煤状の痕跡がある。598は外底部にドングリ

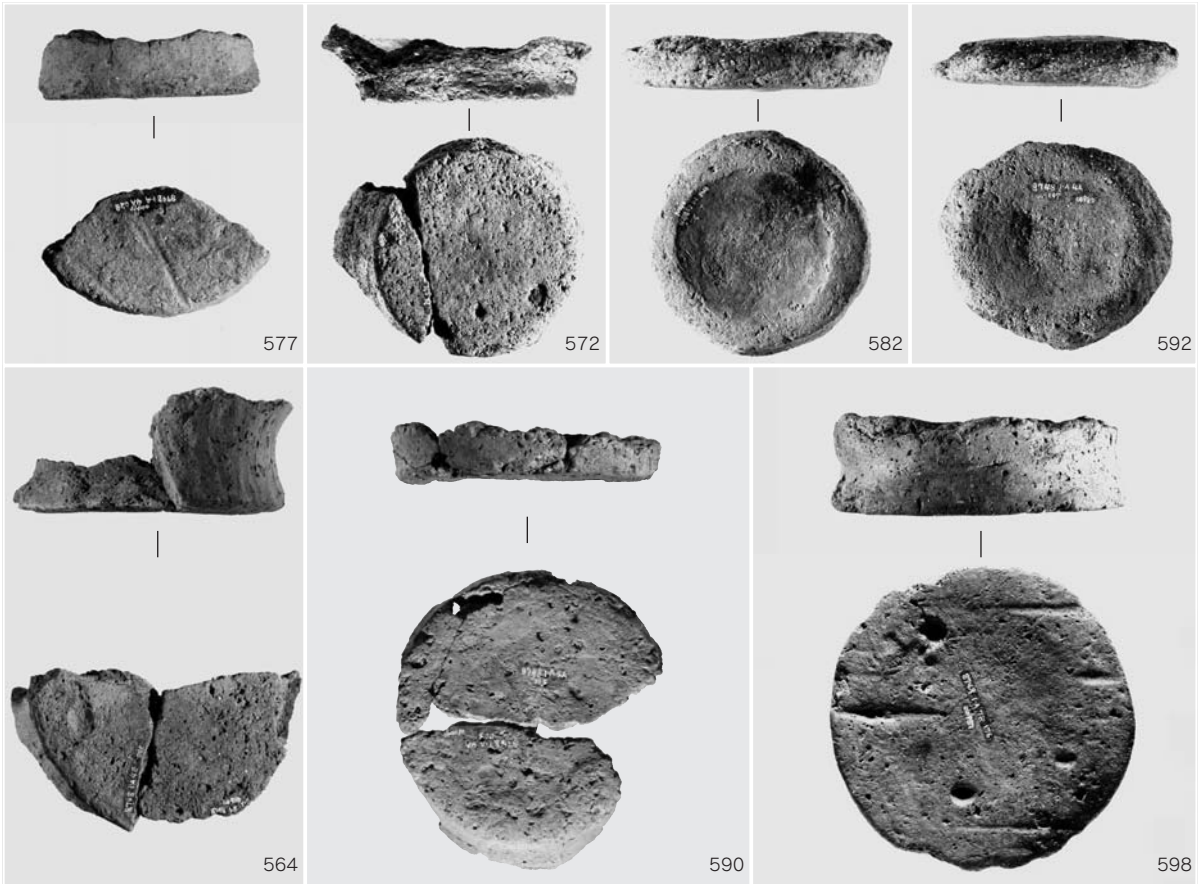


写真89　A－1区包含層出土深鉢土器底部

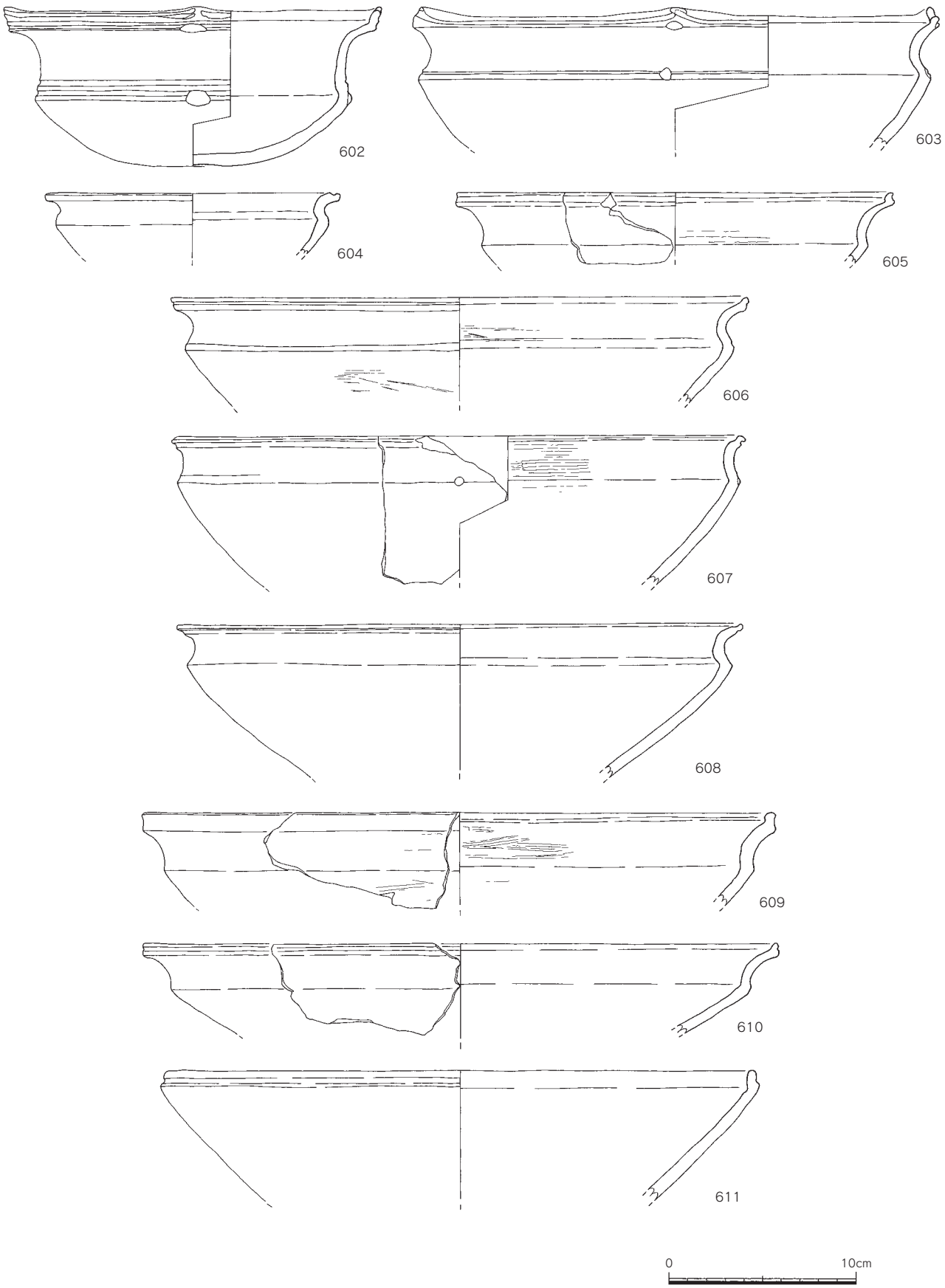


図93　A－1区包含層出土浅鉢土器図 1（1/3）

大の窪みがある。さらに3つと短沈線状のものが同方向に3本あるが、何の跡か分からない。600は外面をヘラ状工具（？）で斜めに掻き上げている。内面は条痕が施されているが、工具は分からない。601の外底部接地面（畳付部分）にヘラ状の工具を突き刺した刻目が施されているが、その後ナデ調整のためか、あるいは土器製作時に底部を下にしたためか刻みの半分が潰れている。

602からは浅鉢である（図93～95、写真90～92）。602はいわゆる黒色磨研土器であるが、黒色を顔料もしくは漆を塗布しているようで、その多くが剥げている。黒色は胴部屈曲部から上に点々と残っている。素地の色調は褐色を呈している。口縁部は小さな波状を呈し、その部分の口縁下の屈曲部を切って押点のようにしている。押点は胴部屈曲部にも施している。調整は内底部を除いて両面とも磨研であるが、内面はやや粗い。603も同様の器形・調整だが、黒色の痕跡が見あたらない。文様構成もほぼ同じだが、口縁部の沈線が1本少ない。604～610は601・602に比べて頸部の長さが短い。調整は両面とも磨研もしくは磨研に近いナデであるが、内面の方が粗い調整である。604は炭素吸着による黒色磨研土器である。607・609は破片が小さく径は不確か。610はわずかに波状を呈しそうだが、他は破片内には波状部分はない。色調は610のみ黒色を呈し、605～609は黄褐色系の色である。611は頸部を持たない。両面とも磨研を施している。

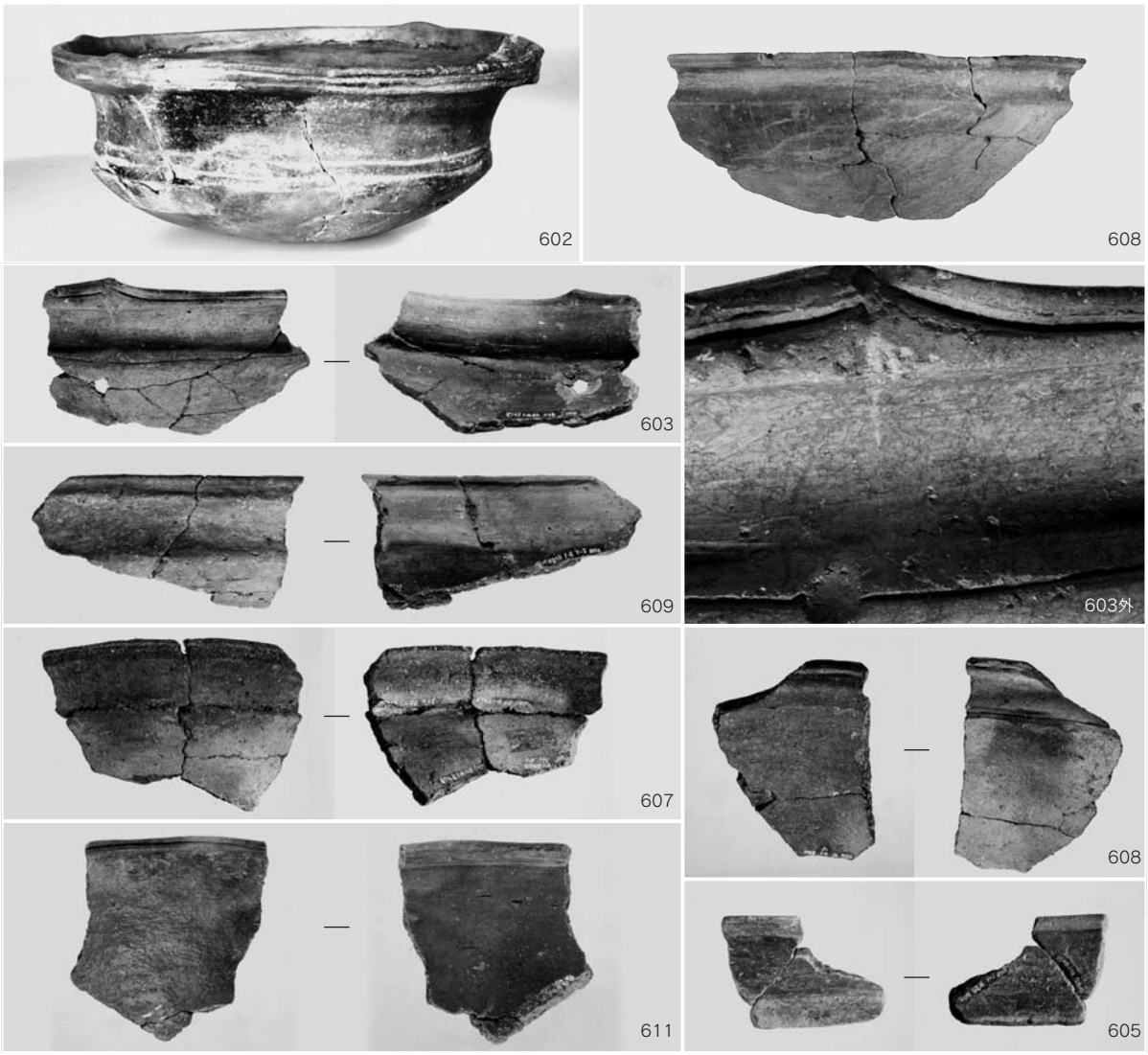


写真90　A－1区包含層出土浅鉢土器 1

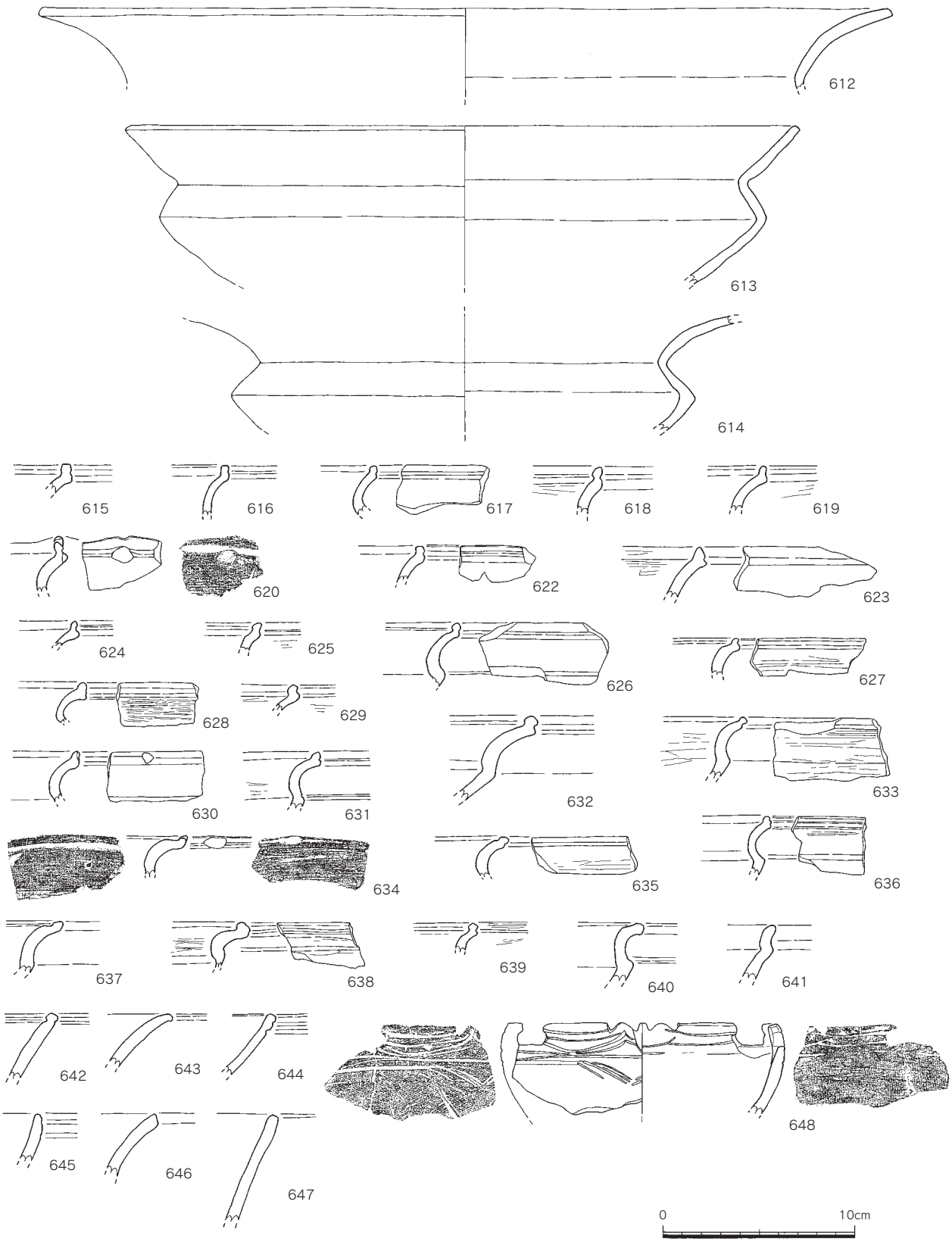


図94　A－1区包含層出土浅鉢土器図 2（1/3）

612～614はほぼ同形態のもので、調整は両面とも磨研である。615～644は浅鉢の小片である。618が外面が白色に近い色調である。623の外面には黒色のものが付着している。煤の可能性も皆無ではないが、深めの沈線内にも付着していることから顔料の可能性がある。内面口縁部には短い沈線状の部分があるが、磨研時についたものか。627も黒色顔料塗布の可能性がある。632は両面とも全面黒色を呈するが、顔料塗布ではない。640・641は口縁部の形態が639までと異なる。640は一見貝殻条痕のような細かい条線が見られるが、ヘラ磨研の跡であろう。ただし、表面は風化のためかツルツルしていない。642～644は無頸の浅鉢もしくは鉢である。いずれも両面磨研調整で、褐色系の色調である。645は内湾する口縁部で2条の沈線を施している。647は小片のため傾き不明であるが、図より傾きが大きい可能性が強そうである。648は全体に椀形を呈し、口縁部に切り込みを入れる。外面と内面口縁部付近に直線と弧状の沈線を施しているが、内面の沈線は調整で潰れている。調整は両面ともていねいなヘラ磨研である。胎土はやや粗いが、大変堅い焼成である。

649から657は浅鉢の底部である。649は底径8.2㎝を測る。外面ケズリに近い調整であるが、外面は淡い赤褐色を呈しており、赤色顔料を塗布しているようである。650は底径が大きく、粗製に近いため鉢あるいは深鉢の可能性もある。651は小底径の上げ底で、胴部への立ち上がりはかなり開いている。652もほぼ同形態である。外底部から胴部に点々と黒色顔料らしきものが付着している。全面磨研を施している。653・654は650と同じく粗製土器で大底径の土器であるが、立ち上がりが開く。655はかなり粗い胎土であるが、両面にていねいに磨研を施している。656は立ち上がりの角度が他に比べて開かず、底径も大きい。鉢・深鉢の底部の可能性もある。657は黄白色系の色調で、全面ていねいに磨研を施している。658は底部と胴部の境がわからないほど立ち上がり角度が水平に近い。外

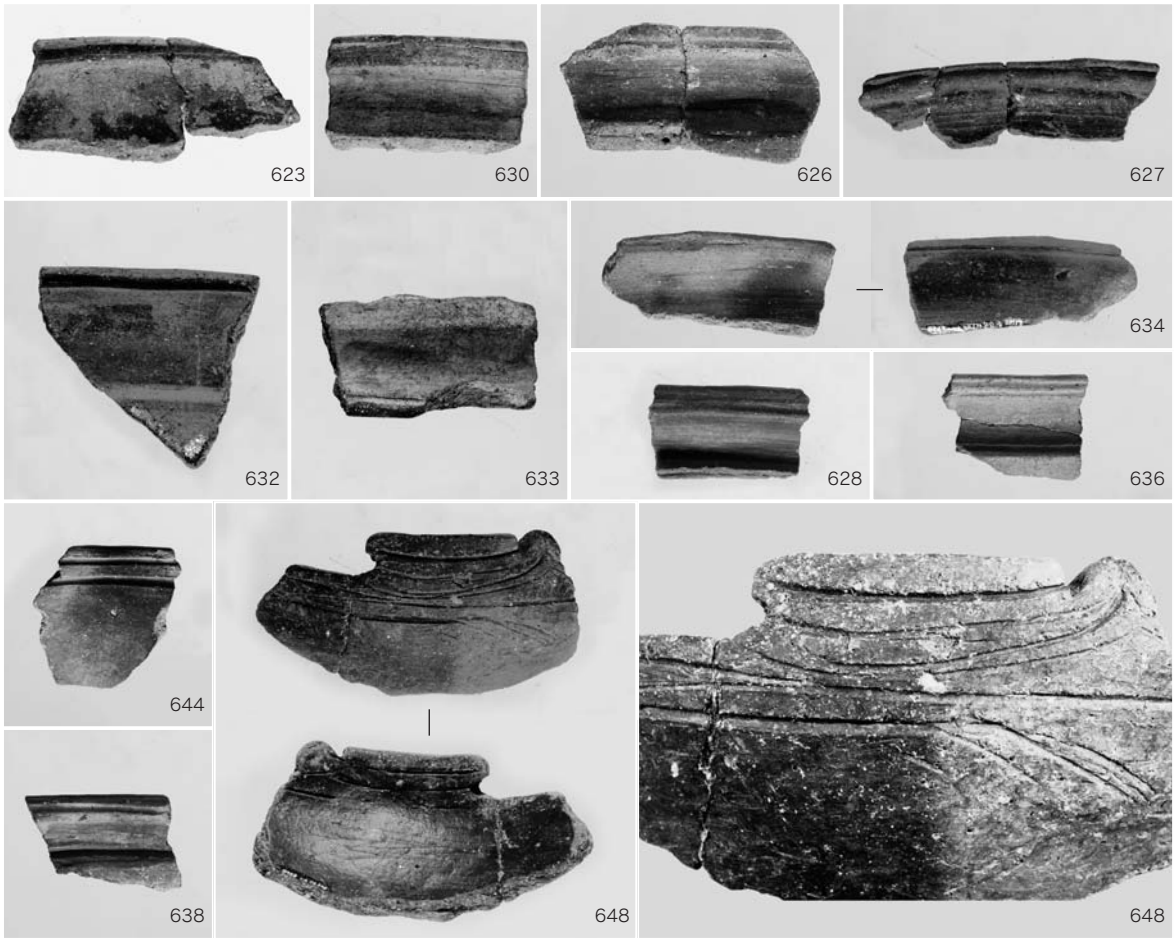


写真91　A－1区包含層出土浅鉢土器 2

底部に組織痕らしきものが確認できるが、その後の調整で大半が消されている。また外底部の色調は白色系で黒色顔料塗布のような部分がわずかにあるが、不明瞭でよくわからない。659は上げ底で外面に磨研に近い調整を施すことから浅鉢の底部に分類した。内面に焦げもしくは煤が全面に付着しているが、破片断面にも同様のものが付着している。外面には焦げや煤は認められないことから、破片の状態で二次焼成を受け片面と断面部分に煤が付いたものではないだろうか。（米倉）

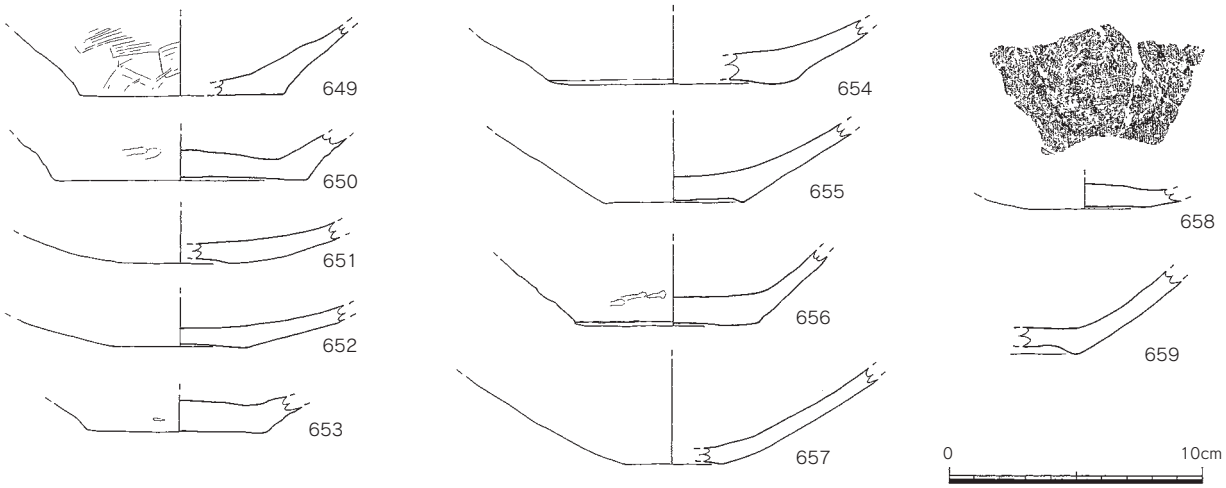


図95　A－1区包含層出土浅鉢土器底部図（1/3）

写真92　A－1区包含層出土浅鉢土器底部

土製品（図96、写真93）

包含層全体で有孔土製品が3点、不定形土製品が1点出土した。SC01だけで5点出土したのに比べると少ない。661は直径7.5～7.7㎝、厚さ2.6㎝を測る断面形は楕円形に近い。図の鋭利な工具で付けた直線と弧線を組み合わせている。図の右平面には中央の孔の左右に深さ数㎜の窪みがある。左の窪みはほぼ円形で、右の窪みは押し引きのような形態である。意識的な文様か不明である。胎土も焼成も極めて良い。中央の孔は焼成後穿孔か。662は割れていることと表面がかなり剥離していることから焼成時に破損した可能性がある。文様は確認できず、孔もない。剥離していない部分では砂粒はほとんど見えていないが、表面剥離している部分には大小の砂粒が多く見え、表面のみの観察では胎土の状況がよくわからない。663も大きく破損している。胎土は粗く、整形も良くない。小片であるが、文様部分が残っている。664は形の定かではない土製品である。粘土をひねって焼いただけの製品のようにも見える。（米倉）

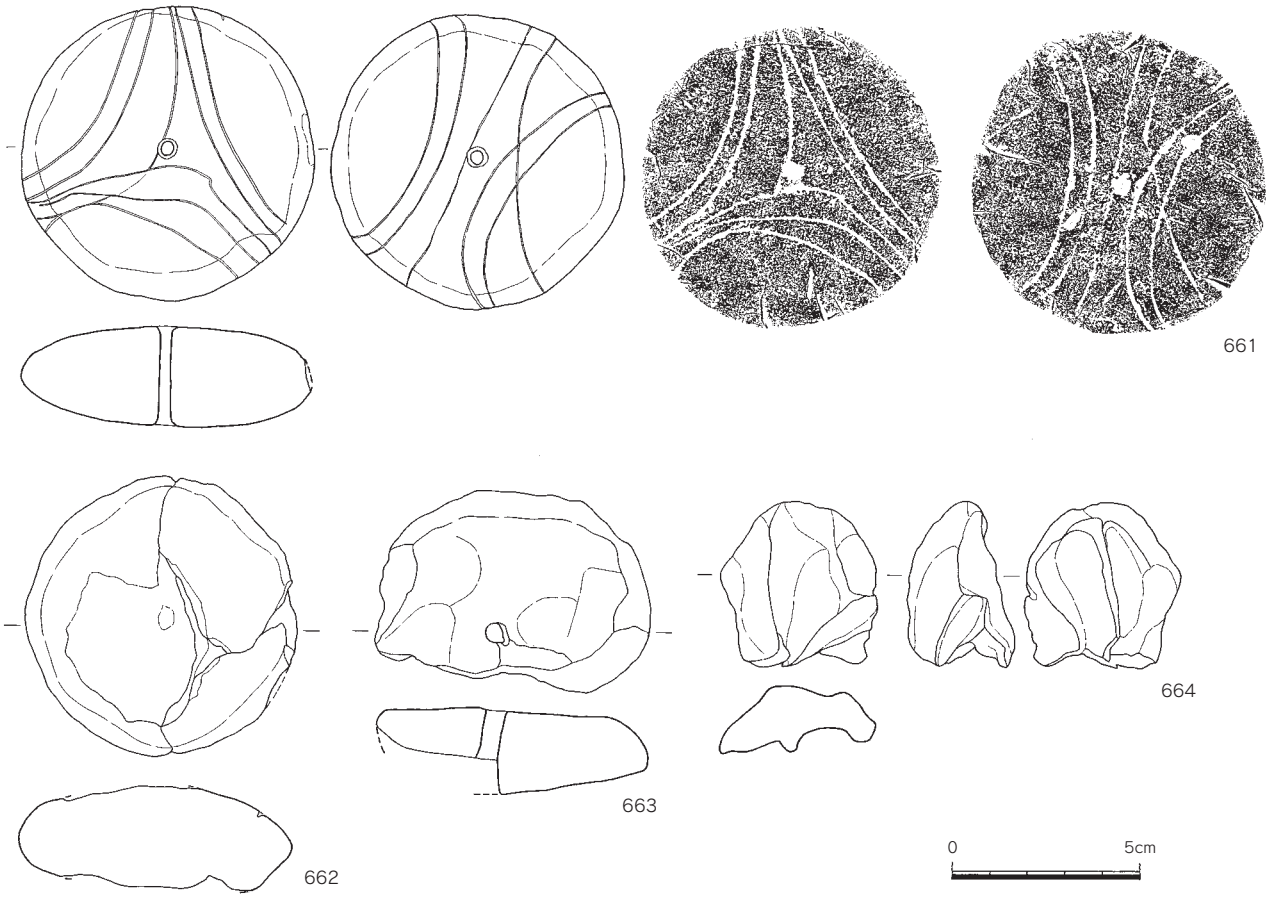


図96　A－1区包含層出土土製品図（1/2）

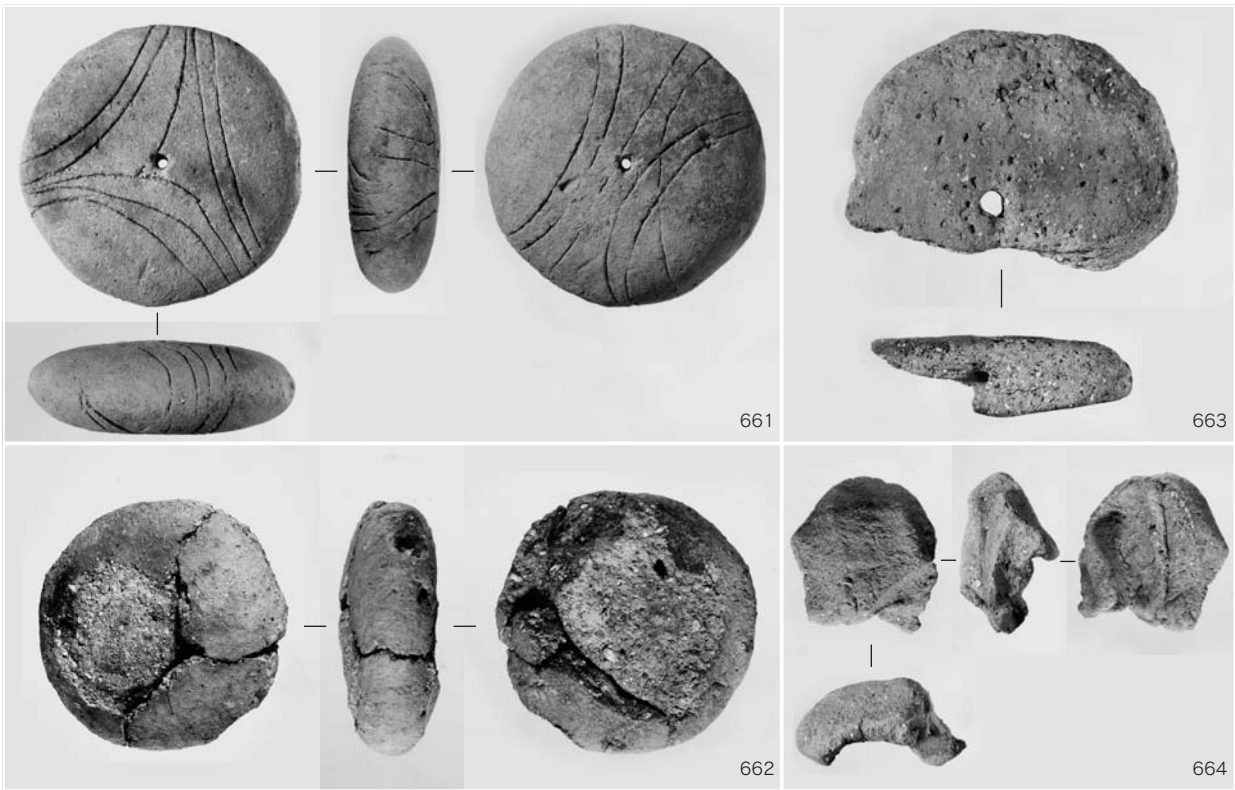


写真93　A－1区包含層出土土製品

石器（図97～110、写真94～102）

剥片・チップを含めた石器は確認できた総箱数はコンテナ約10箱で、このうち利器・残核の全点抽出と実測を目指したが、利器の抽出はほぼ終えたが、全点実測はできなかった。また残核・UF等については最終的な点数把握についてもできていない。確認できたA－1区包含層から出土した石器の点数は、石鏃及び同未製品23点、石匙1点、スクレイパー8点、石錐3点、打製石斧・同未製品もしくは磨製石斧未製品18点、磨製石斧5点、磨石（敲石兼用等も含む）11点、使用痕ある剥片・加工痕ある剥片68点、残核10以上・クサビ形石器8点で、特に最後の4器種については、さらに点数が増えるものと思われる。また本調査で玄武岩の剥片・チップが出土していることから、打製石斧や磨製石斧の製作を行っているのは明らかであるが、打製石斧と磨製石斧未製品については、一見だけでは識別困難なものがあり、これについては本節とは別に検討する。

665～687は打製石鏃及び同未製品である。665は漆黒色黒曜石製で、縦長剥片を利用し、両面に素材時の剥離面を残している。従って調整は周縁に押圧剥離を施しているのみである。666は漆黒色黒曜石製で、横長の不定形剥片を素材としている。片面に主要剥離面を残し、反対の面は不規則な調整を行っている。調整は細かな縁辺調整まで及んでいるが、右脚の部分に白い石の混入部分があり、そこで折損していること、全体が厚いことなどから失敗品の可能性が考えられるが、左側面の縁辺調整が細かすぎることから見れば、小型のスクレイパーの可能性も考えられる。667は漆黒色黒曜石製で上半部を欠失する。調整はていねいではない。668は安山岩製で縁辺調整は粗い。669は漆黒色黒曜石製で全体がロケットのように五角形に近い形である。全体ていねいに押圧剥離を施している。670・671は漆黒色黒曜石製で、ていねいな剥離を加えている。672は漆黒色黒曜石で、両面に素材時の剥離面を残しているが、その状況からいわゆる刃器状の縦長剥片を使用しているものと思われる。先端部をわずかに欠失している。673は安山岩製で、片脚と先端部を欠失している。674は逆ハート形で漆黒色黒曜石である。675は安山岩製で左面の中央は当初の剥離面が遺存している。676はわずかに灰色を帯びた黒曜石製で、両脚と先端部を欠失する。677は漆黒色黒曜石製で、縦長剥片を素材にし、主要剥離面を残している。678は全体が丸みを帯びた形で、漆黒色黒曜石製。主要剥離面側は基部を除いてほとんど調整を行っておらず、反対面側からの剥離で全形を作っている。679は漆黒色黒曜石製で、刃器状の縦長剥片のごく細かい調整を行っただけで全形を作り上げている。680も679と同様に縦長剥片を微細な縁辺調整だけで作ったものと思われるが、縦半分に割れているため、あるいは石鏃でない可能性もある。漆黒色黒曜石製。681も縦半分に割れている。漆黒色黒曜石製である。682は漆黒色黒曜石製で、両面素材の剥離面を残している。縦断面が主要剥離面側に弓なりに反っている。先端の一部を欠失しているが、その部分があっても先端は尖っていない可能性が高く、669のような石鏃を作ろうとして失敗したものではないだろうか。683は灰白色の縞を持つ黒曜石製で、両脚と先端部を欠くが、先端部はガジリである。調整はかなり粗いが製品であろう。684は黒色黒曜石製である。主要剥離面の一部を残している。先端部は丸みを帯びた調整を行い、基部の抉りや脚もないため、石鏃でない可能性も考えられるが、基部の抉りに当たる部分に下からの剥離があることと、先端部の剥離が調整というより潰れた状況であるため、製作途中のものと判断した。685は漆黒色黒曜石製である。両側からのいくつかの大きな剥離で全形が作られ、たまたま石鏃の形をしている可能性もあるが、先端部近くに押圧剥離が数か所施されているため、石鏃未製品とした。686は縦長剥片を素材としている。自然面が多く残り、調整もほとんど施されていないが、基部に抉りが形成され一部で細かい縁辺調整も行われていることから未製品とした。687も同様のもので、刃器状の縦長剥片であるが、基部の抉り部分と脚部分に調整が見られる。

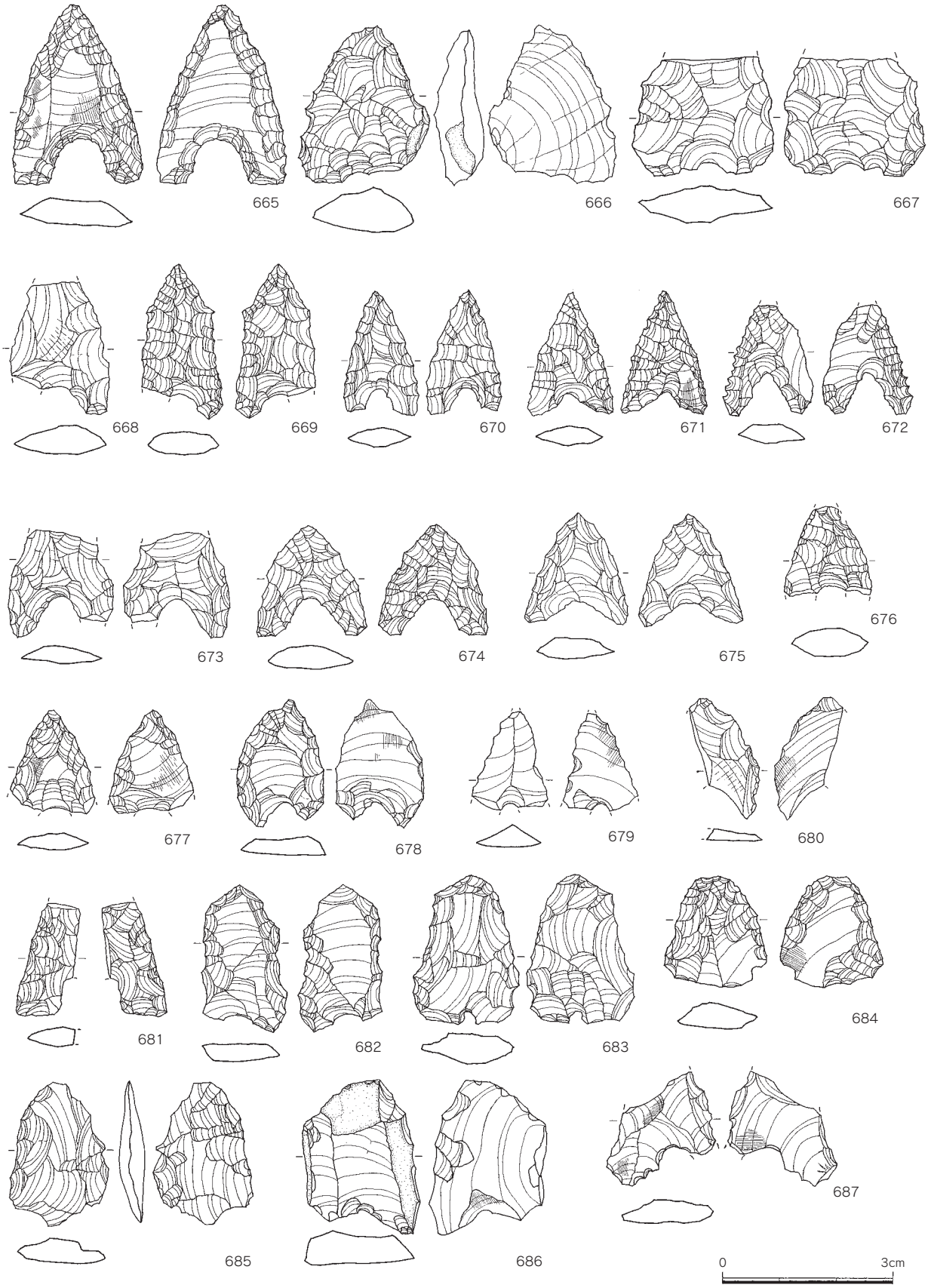


図97　A－1区包含層出土石器図 1（石鏃）（1/1）

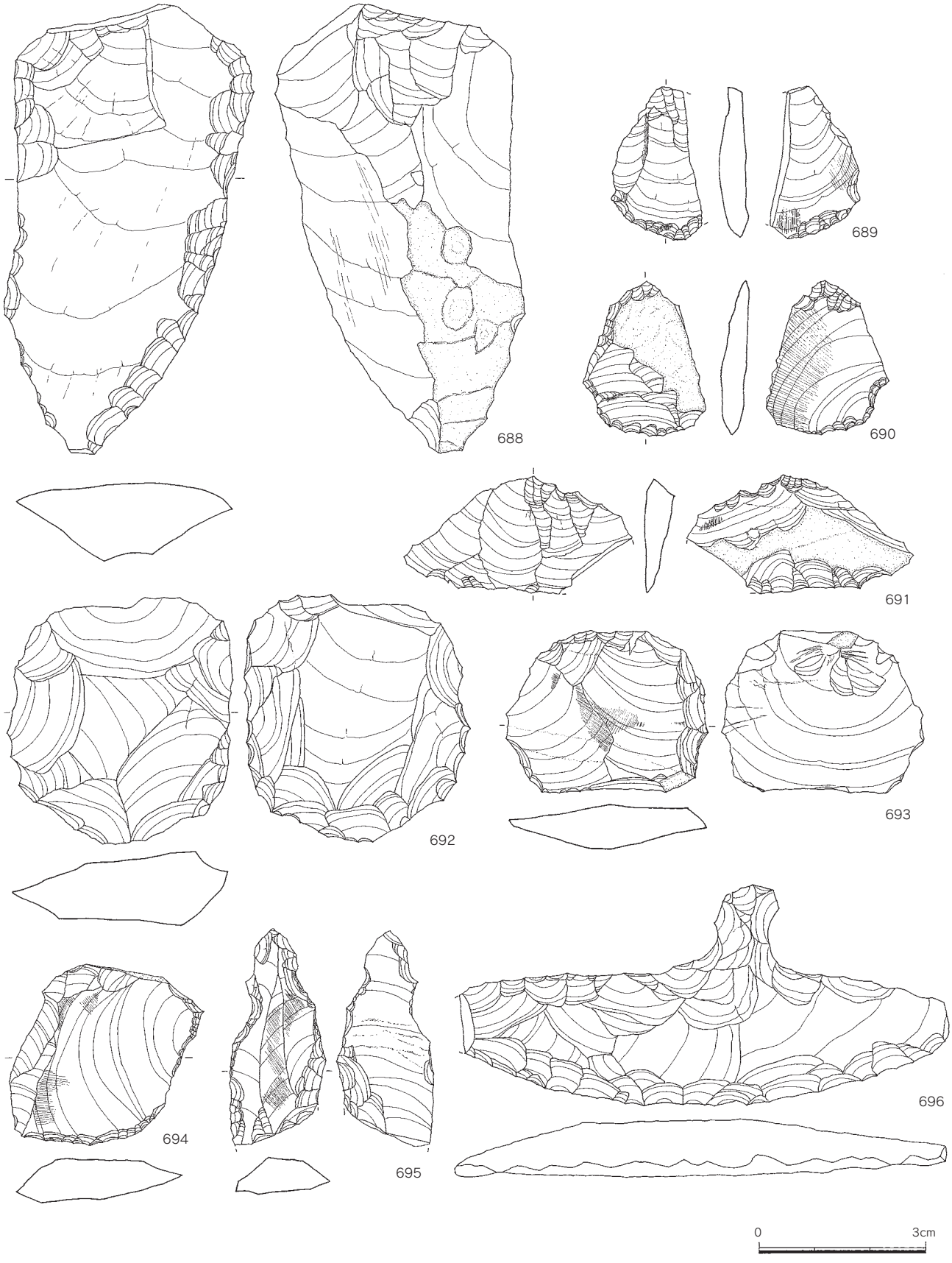


図98　A－1区包含層出土石器図2（スクレイパー・石匙）（1/1）

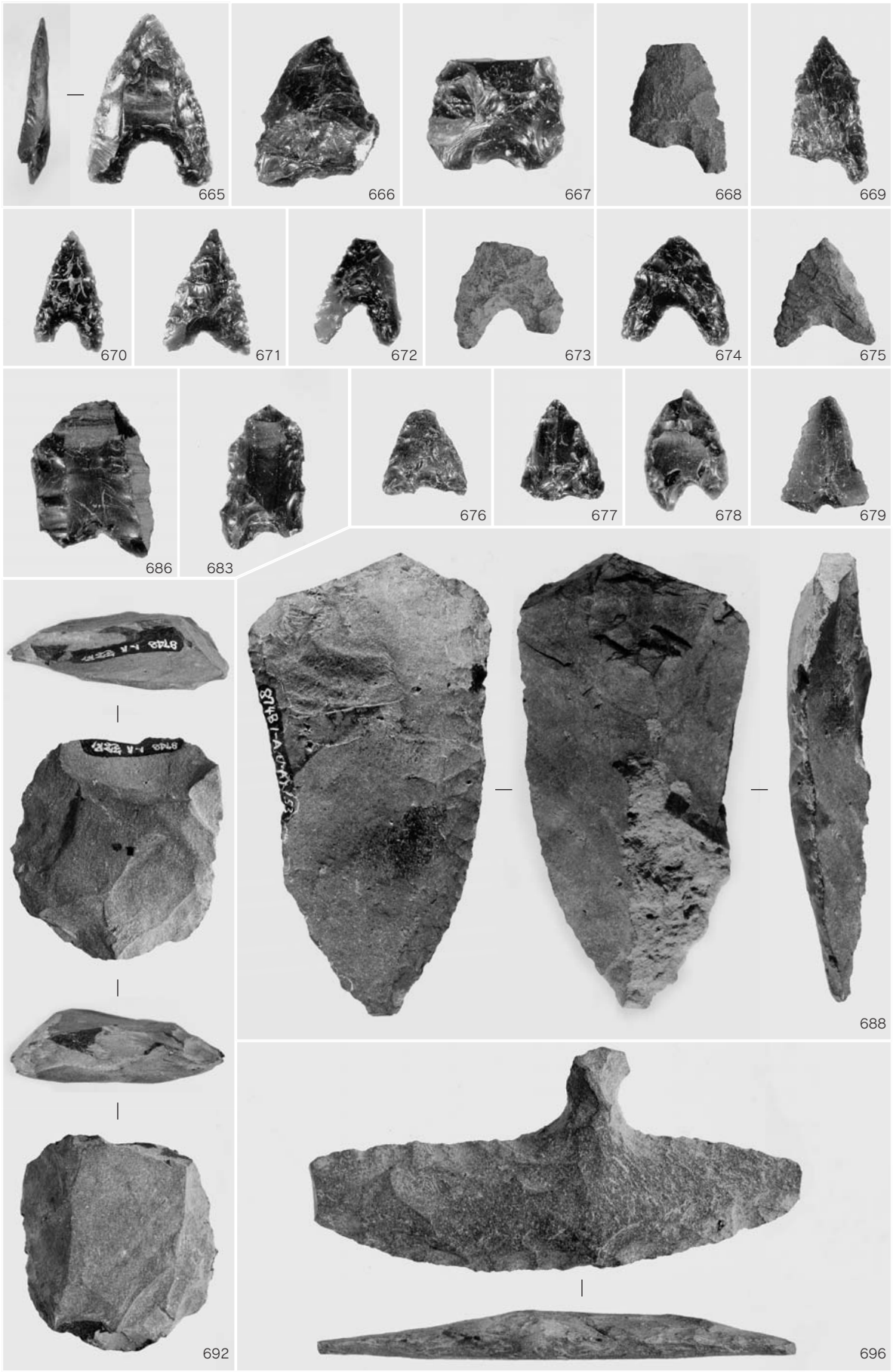


写真94　A－1区包含層出土石器 1（石鏃・スクレイパー・石匙）

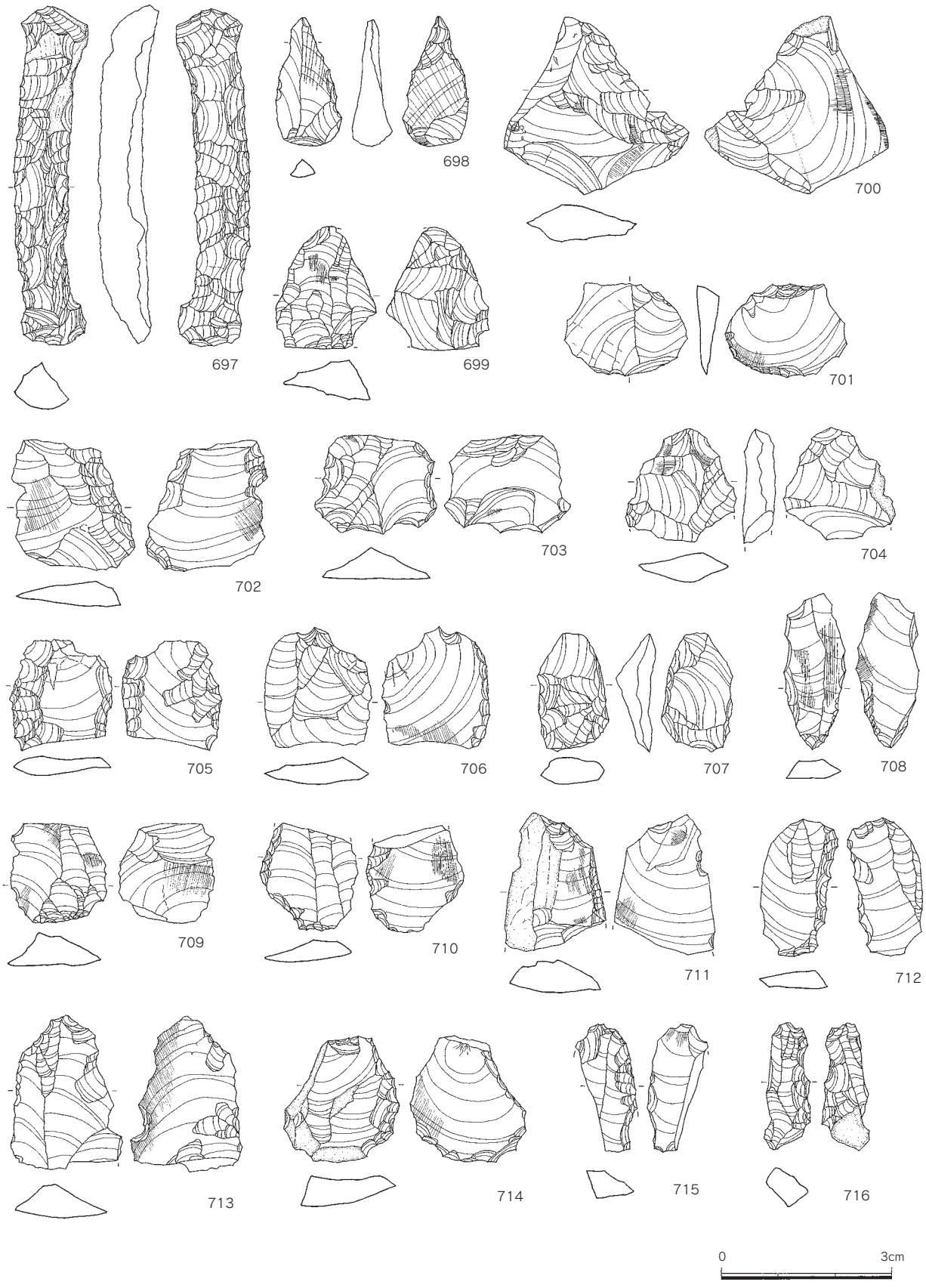


図99　A－1区包含層出土石器図 3（1/1）

688～695はスクレイパーである。688はサヌカイト製の縦長剥片を使用している。主要剥離面側の右側縁に押圧剥離で一辺全面に調整を行っている。左側縁には右より小さな押圧剥離を基部側2／3に施している。反対面には自然面が残っている。689は漆黒色黒曜石製で、縦長剥片の先端辺に両側から細かな調整を加えているのみである。スクレイパーではない可能性もある。690も同様の石器であるが、上部にも調整を加えている。石鏃の未製品の可能性も考えられるが、基部に当たる部分には全辺同じ小さな剥離を加えているのみであることから、石鏃に至るものではないであろう。691は漆黒色黒曜石製で、片面に自然面が残り、薄手の表皮はがしの剥片を使用している。主要剥離面には全面に粗めの二次調整を加え、自然面が残った面は、縁辺部に細調整を雑に加えている。692はサヌカイト製で両側縁に粗い交互剥離の調整を加えている。調整が大きいことから何かの未製品の可能性もある。693 は漆黒色黒曜石で不純物が少し混じる。横長剥片を素材とする。主要剥離面にはバルブがそのまま残り、周縁もほとんど調整を加えていない。反対面には右側縁のほぼ全面と左側縁の一部に縁辺加工を施している。694 は漆黒色黒曜石製で不純物が多い。主要剥離面の下から右の縁辺に細かい剥離調整を施し、特に下辺の一部は使用によりエッジが潰れている。反対面には調整はほとんどなく、擦痕が多く付いているが、いつ付いた擦痕かわからない。695は頭部下の両側にノッチを付け、身の両側縁に調整を施した縦形の石匙の形態をしているが、左右のノッチ部分・頭部先端の調整と素材時の剥離面・その他の調整部分の2者のパティナがまったく異なっている。パティナの相違が各調整時の剥離面によって異なることから、埋まったときの状況など自然環境の相違に由来する物ではなく、明らかに時代が異なる剥離と言える。切損面は3つの割れ面があり、そのうち割れ口の大部分を占める2つの割れ面は新しいパティナで、残りの一番小さな割れ面が古いパティナである。つまり、古い時期に縦長剥片の一部に調整を加えた石器を作り、下部の一部を折損したため廃棄し、さらに後の時代にそれを習得した者がノッチを入れ石匙状に加工したと考えられる。696は長さ8.8㎝を測るサヌカイト製の横形の石匙で、全面にていねいな調整を施している。

697は異形の石器である。漆黒色黒曜石製で、一見電話の受話器のような形態を成しているが、平面形・側面形ともに弓なりに反っている。ていねいな押圧剥離を繰り返し全形を作り上げている。一部に自然面が残っている。断面形は三角形を呈しているが、右端の平面図の左右両側縁はエッジ部分が潰れている。残るもう一辺はそのような痕跡は認められない。何らかの使用によるものと考えられる。長さ6.0㎝を測る。698は石錐である。半透明の黒色黒曜石製であるがパティナが古い可能性もある。加工はほぼ先端部のみに施している。先端部の摩耗が激しい。699は漆黒色黒曜石製の不定形剥片で、半分割れているが、遺存面の側縁に加工が施されている。700は漆黒色黒曜石製で、左平面図の右側縁にブランティングぎみに調整が施され、左側縁に使用痕が認められる。上端は自然面である。701は漆黒色黒曜石製で、主要剥離面の左側縁に細かい調整を加えている。使用痕はよくわからないが、右側縁が折損しており、あるいはこちらが使用面か。702はやや透明感の低い漆黒色黒曜石製で、片側縁に加工を施し、反対側縁に使用によると思われる剥離が認められる。703は両側縁に細かい調整を施している。上部を折損しているため、何かの製品かもしれない。透明感の悪い黒色黒曜石製。704はややくすんだ黒色の黒曜石製で、下部を折損している。両面とも左右から大きな加工を施して折り、石鏃未成品の可能性もある。一部に自然面が残っている。705は透明感の強い黒色黒曜石製で、両側縁に細かい調整を施し、そのうち片側縁には使用によるものか潰れた部分がある。706は漆黒色黒曜石製で片側縁に細かい加工を施し、反対側縁には使用痕が認められる。707は上部を欠損している。左右両側縁から長めの押圧剥離が施され、その後に細かい調整が施されている。エッジ部分は潰れた状況を呈している。あるいは石鏃等の失敗品を転用したものか。708はややくすんだ漆黒色黒曜

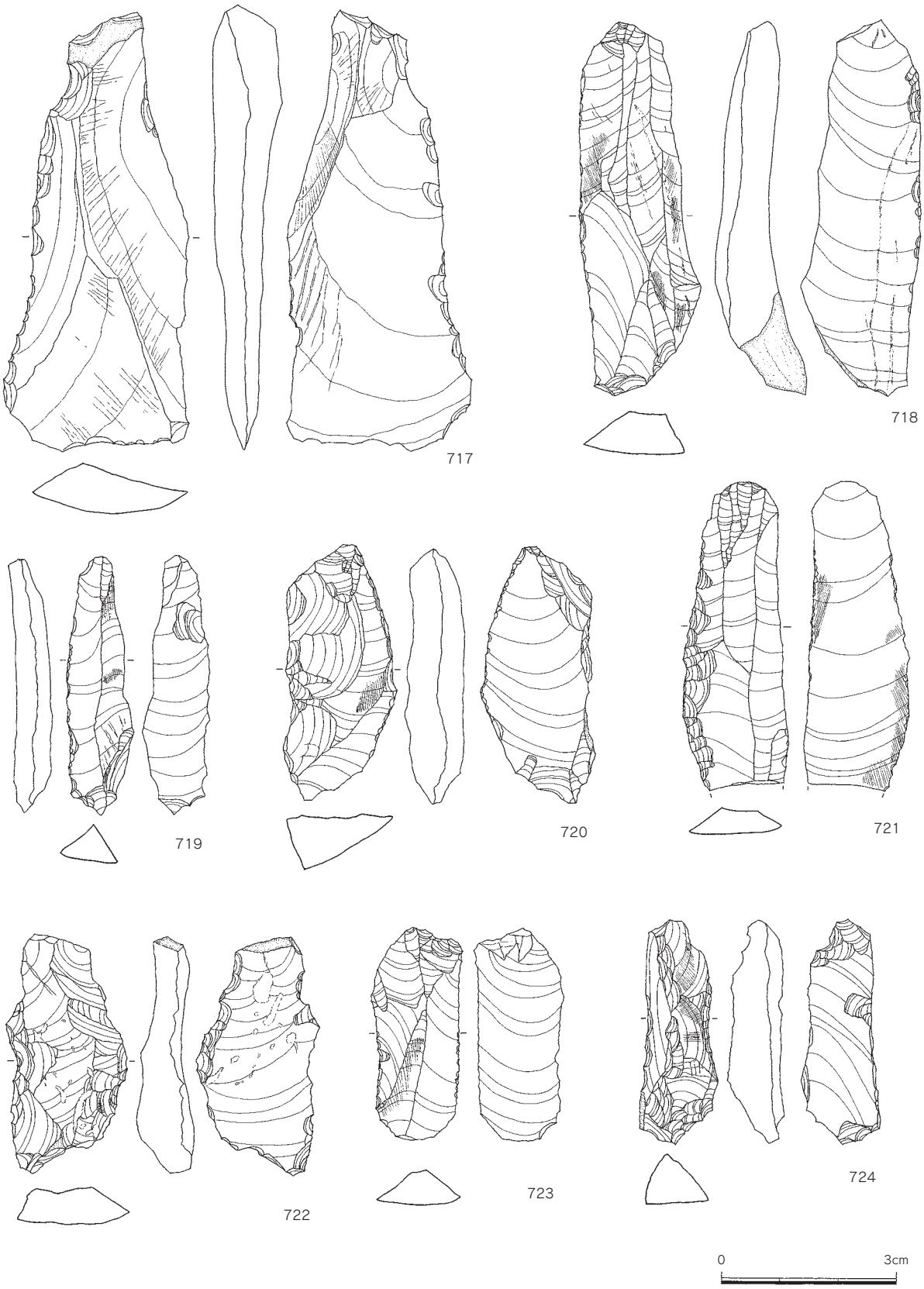


図100　A－1区包含層出土石器図 4（1/1）

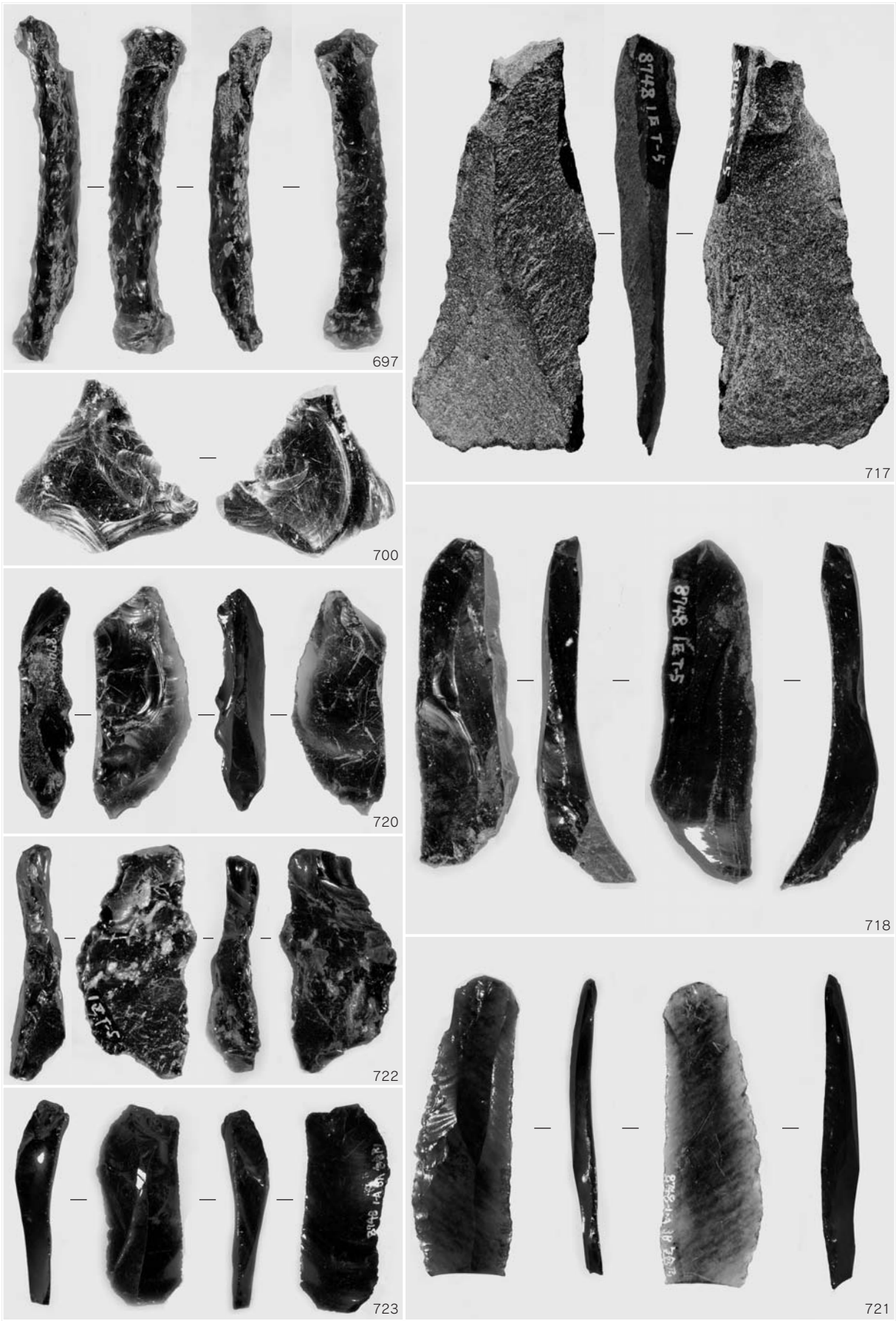


写真95　A－1区包含層出土石器 2（スクレイパー他）

石製で、左側縁の下部に細かい調整を施し、中央から上に使用痕が認められる。709は両側縁に使用痕が認められる。710は縦長の刃器状剥片を使用した漆黒色黒曜石製。片側側縁のブランティング状の加工を施し、反対側縁には使用によると思われる剥離が確認できる。711は刃器状の縦長剥片を使用している。片側側縁に細かい調整を施している。反対側縁は使用痕か加工痕かわからない微細剥離が確認できる。712は片側側縁に細かい加工を施している。713は縦長剥片の片側縁に細かい調整を施している。上端部に使用痕らしきものが観察できる。片側側縁の全辺に細かい調整を加えている。反対側縁の剥離はガジリ。パティナがやや進んでいる。714は片側縁に石鏃の押圧剥離状の調整を加えている。715は半折している。遺存面の側縁に調整を施している。上端部にも調整が及び丸く作っているが、図の左上の剥離はガジリである。716は厚みのある縦長剥片の鋭角な一辺に加工を施している。エッジ部分はほとんど潰れており、使用によるものか。

717はサヌカイト製のスクレイパーであるが、基部にノッチを作っている。ノッチがある辺（左辺）には両側から細かな調整剥離を加えている。下辺と右辺の上部には使用時の微細剥離がある。右辺の下についている剥離はガジリである。718は漆黒色黒曜石製だが不純物が多い。左縁辺に使用痕と思われる刃こぼれがある。主要剥離面と表面の一次剥離面の剥離方向は、上下二方向で全て同一でない。719は漆黒色黒曜石製。断面形が二等辺三角形を呈する縦長剥片のを利用する。二等辺三角形の頂点の辺に微細剥離が連続してみられるが、交互剥離を成していることからも使用ではなく加工である。先端部に上部方向からの剥離があり、この部分が欠損していると考えられ、あるいは彫器等の製品の可能性が高いと思われる。720は透明感の強い黒色黒曜石製で、A面の左側辺部に粗い調整加工を施している。右縁辺は剥片の鋭い刃をそのまま刃部として利用し、使用痕がついている。図の側面図の反対面は平坦な自然面である。721はやや半透明の黒色黒曜石製。縦長剥片を素材とし、主要剥離面にはバルブが残っている。左側辺は片面側からだけの押圧剥離を連続して加えている。頭部も上からの調整を行い丸い頭部を作っている。右側縁は使用時についてと思われる微細剥離がついている。722は漆黒色黒曜石製で、白色の不純物がかなり多い。下側の面は尖っておらずに図の断面形に近い形を成し、一部に自然面を残している。縦長剥片の両縁辺に調整を加えているが、右側縁下部は剥離が潰れた状態になっており、使用によるものかも知れない。723は漆黒色黒曜石製。縦長剥片を素材とする。両側辺に使用によると思われる刃こぼれがある。下部は欠失している。724は漆黒色黒曜石製。断面形は二等辺三角形を呈し、短い辺の大半は風化面及び自然面である。縁辺のほとんどに剥離が認められるが、調整による剥離と使用による剥離の峻別がしづらいが、先端部に明らかに細かな調整が施されており、例えば石錐などの何かの未製品と考えられる。

725は縦長剥片の両側縁に調整を施しているが、ともに片面からのみ調整を加え、それぞれ反対の面から調整を行っている。先端部が欠損しているが石錐ではないだろうか。漆黒色黒曜石製で自然面が残っている。726は不純物をわずかに含む漆黒色黒曜石製。パティナが進んでいるが、周縁の微細剥離部分のパティナは新しく、あるいは素材剥離時と加工時の時期が異なる可能性もある。微細剥離は上部から右側縁にかけて見られる。727は漆黒色黒曜石製。上部に打面調整痕があり、主要剥離面にはバルブが残る。両側縁に使用痕が認められる。下辺の半分には微細調整が施され、残りの半分は切損している。微細調整は下面からの剥離で、切損後に調整を行っていることから、いわゆるつまみ形石器を作り出したものではない。加工の意味は不明である。728は漆黒色黒曜石製で不純物が多い。下端は使用によると思われる潰れが認められり、ごく細かな階段状剥離が見られる。上端は細かな加工によって頭部を丸く作っている。729は半透明の黒色黒曜石製。両側縁に使用痕と思われる粗い刃こぼれが認められる。両側の同じ位置に深い剥離があるのは偶然か。擦痕が多い。730は漆黒色黒曜

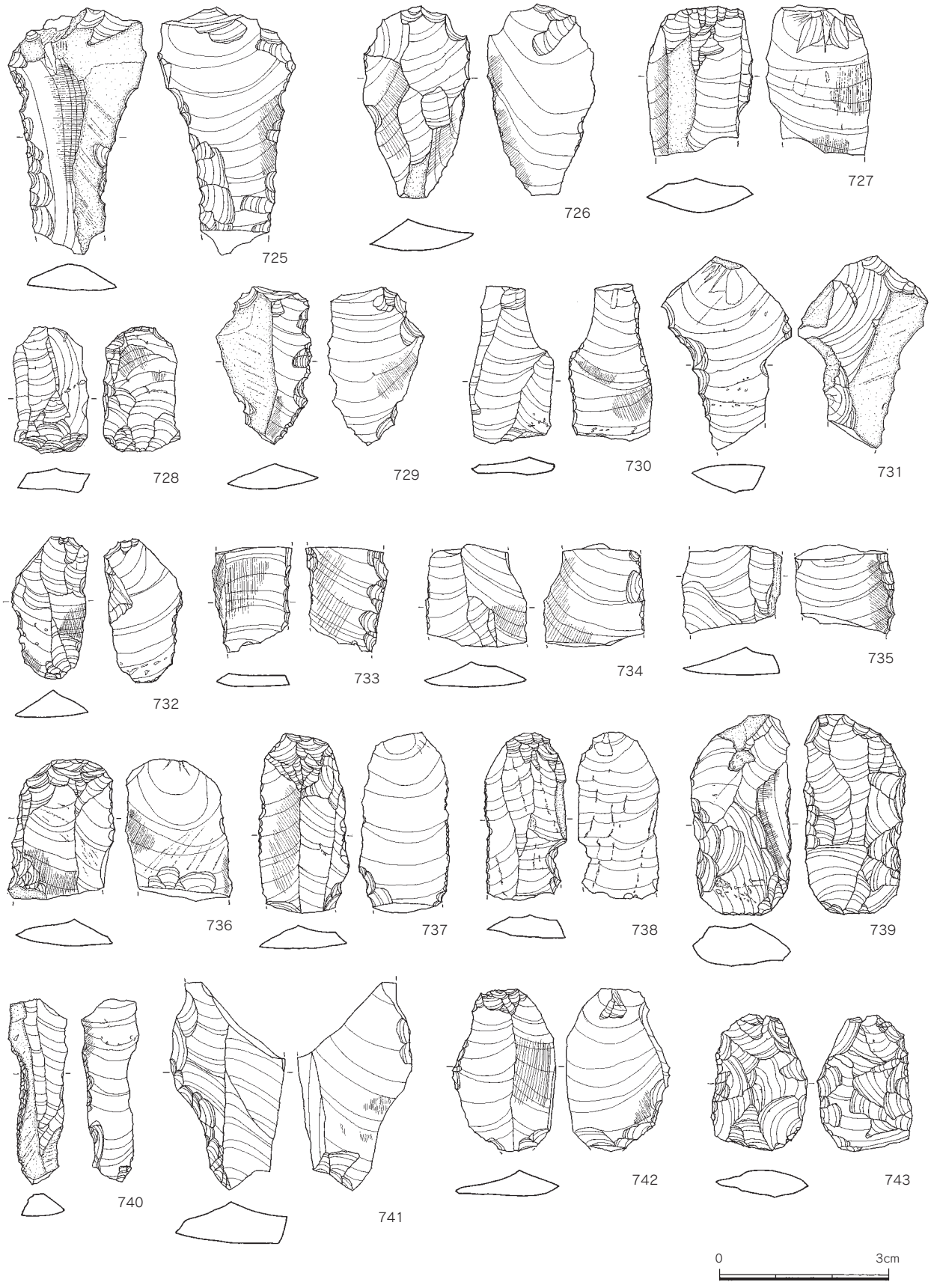


図101　A－1区包含層出土石器図 5（1/1）

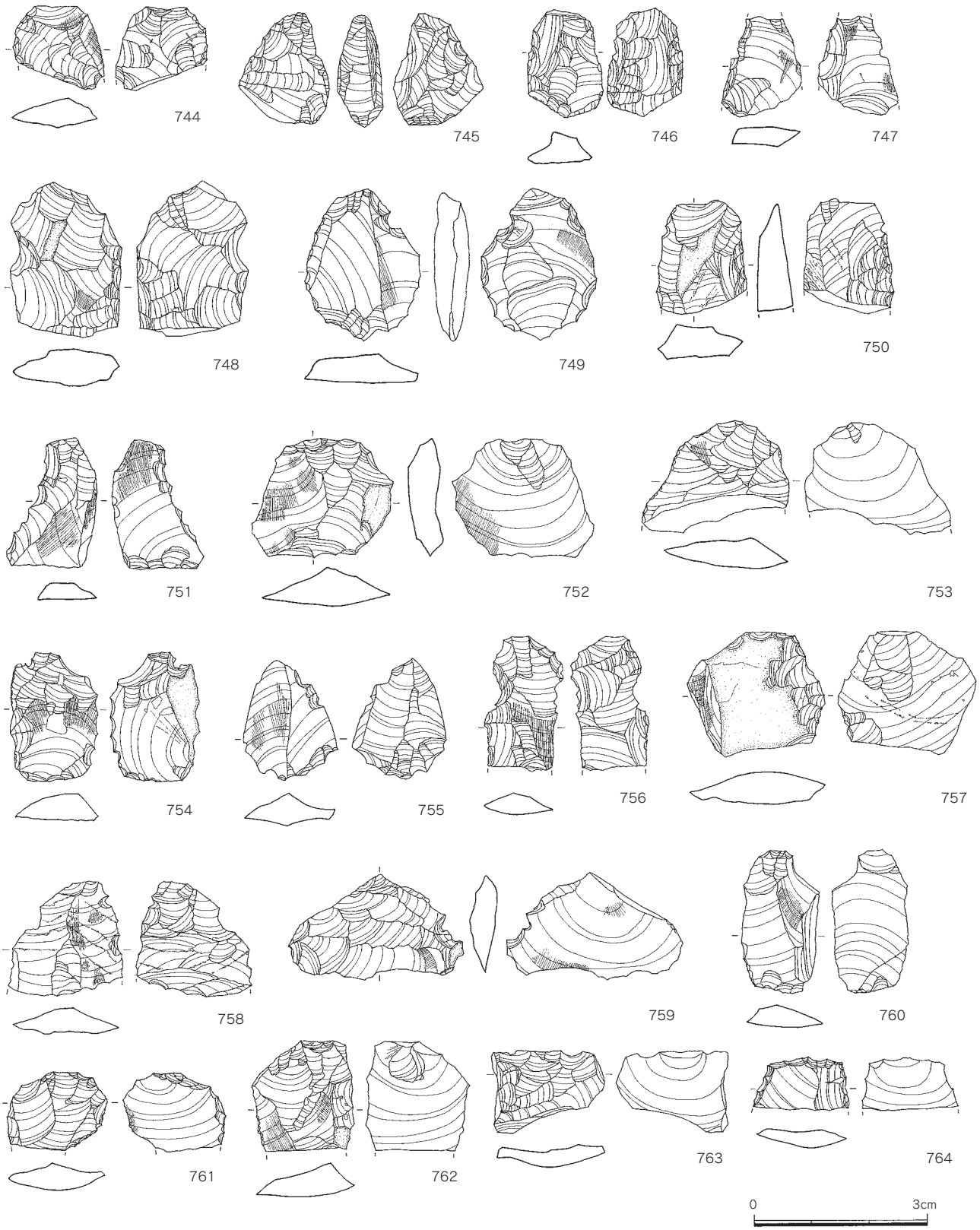


図102　A－1区包含層出土石器図 6（1/1）

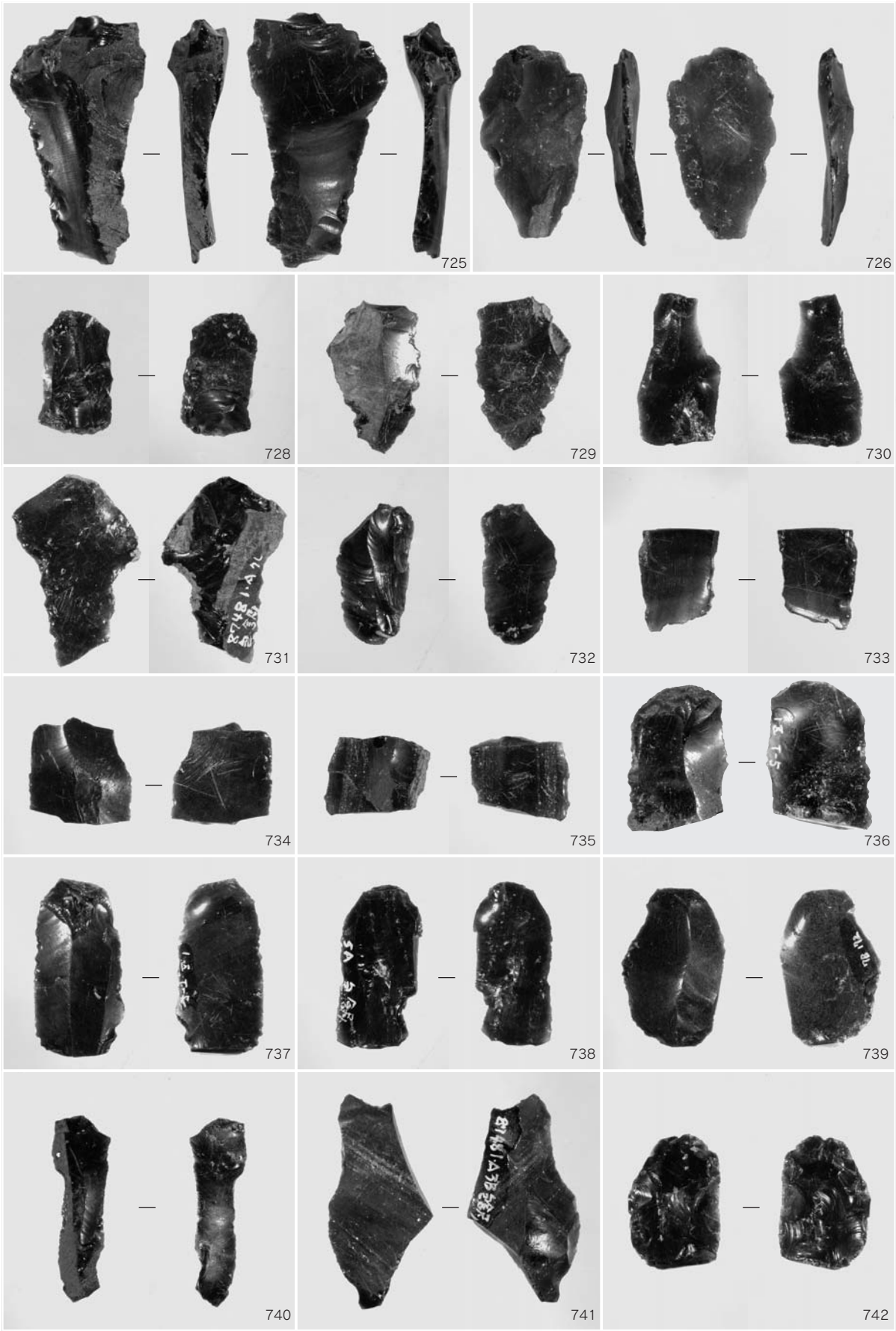


写真96　A－1区包含層出土石器 3（UF他）

石製。頭部は自然面で、表面右側縁は頭部から中央にかけて、左側縁は中央から下端に、表面から主要剥離面側に細かい加工を施している。下縁は潰れ、階段状剥離を成しており、使用痕であろう。731は725と形態・加工の位置などよく似ており、石錐であろう。732は漆黒色黒曜石製。両側縁に使用痕と思われる細かな刃こぼれがある。733は半透明の黒色黒曜石製。右側縁は加工を施した後に、使用による潰れが見られ、左側縁は刃こぼれ状の使用痕が認められる。主要剥離面側には擦痕がついているが、使用時のものかどうか不明。734は漆黒色黒曜石製。両側縁に使用痕と思われる細かな刃こぼれが認められる。735は黒色黒曜石製で縞を持つ。不純物が多い。片面片側辺に細かな剥離調整が認められる。破片中には使用痕らしきものは認められない。736は漆黒色黒曜石製。両側縁に細かい調整を施している。頭部にも微細な調整を加えた後、使用のためか先端部が潰れているようである。737・738もほぼ同形態である。739は漆黒色黒曜石製で不純物が多い。ほぼ全面に2次加工を施し、自然面が残る上部以外の3辺に使用痕が認められる。左側辺は特に著しく、刃が潰れ細かな階段状剥離が見られる。740は縦長剥片の片側辺に使用痕と思われる刃こぼれが認められる。表面の左半は自然面であるが、その縁辺の一部に調整を加え、ノッチ状に作っている。741はパティナが進んでおり、時期が異なるものと思われる。片側縁に加工を加え、一見ポイント状を呈するが折損部分が多く何の石器か不明。742はやや灰色味を帯びた黒色黒曜石製で、両側縁に使用痕が認められる。743はやや半透明の黒色黒曜石製。両面ともほぼ全面に二次加工を施している。片側辺から下端にかけて使用痕が確認できる。

744は漆黒色黒曜石製で不純物が多い。縁辺に粗い調整を加えている。745は漆黒色黒曜石製。全面に剥離調整を施す。両側辺から先端にかけて、両面から細かな2次加工を施し尖頭状にしている。両側辺から先端の部分と下端部分は刃潰れ状になっている。746は漆黒色黒曜石製。使用痕が著しく細かな階段状剥離が見られ、刃も潰れ状になっている部分がある。747は透明度の低い黒色黒曜石製。左縁辺のみに加工を施すし右側縁に使用痕が認められる。748は漆黒色黒曜石製。比較的大きな剥離調整を全面に加える。右下側縁に小さな交互剥離を施し、その部分が刃潰れ状になっている。749は漆黒色黒曜石製。左側縁には使用痕があり、右側縁は調整と思われる微細剥離がある。750は不純物が多い漆黒色黒曜石製。両側縁に細かな加工を施した後、刃潰れ状になっている。使用によるものであろう。751は不純物が多い漆黒色黒曜石製。左側辺と下端に調整を加える。右側縁び使用による微細剥離があり、下端は刃が潰れ状になっている。752は半透明の黒色黒曜石製。上下両端を使用したと思われ、上端は潰れた状態になっており、下端は階段状の剥離が見られる。753はやや半透明な黒色黒曜石製。表面は全面にやや粗い二次加工を加える。下辺を除く全周縁辺に使用痕と思われる刃こぼれが認められる。754は不純物が多い漆黒色黒曜石製。横長剥片を素材としている。下端に微細剥離と刃潰れが見られるが使用痕か。755は漆黒色黒曜石製。下辺は刃潰れ状になっている。756は漆黒色黒曜石製。薄手の縦長剥片を素材とし、頭部下の両側に1回の剥離のみでノッチ状に作っている。左側縁下部に使用痕がある。757は不純物の多い漆黒色黒曜石製で、片面に自然面を多く残しており1回目の剥片素材で、主要剥離面にはバルブが残る。右側面に細かな調整を加えている。下半が折損しているためか、使用痕らしきものは確認できない。758は不純物が多い漆黒色黒曜石製。二次調整は加えられていない。759はやや半透明の漆黒色黒曜石製。横長剥片を使用。左側縁から雑な剥離調整とを施している。下辺は刃こぼれ状を呈しており、使用痕か。760は漆黒色黒曜石製。上下両端に細かな調整があり、楔状である。特に下辺は潰れた状態になっている。761は漆黒色黒曜石製。縦長剥片上端は潰れた状態で階段状剥離になっている。右側縁に使用痕らしきものが確認できる。762は漆黒色黒曜石製。上辺は階段状剥離を成してやや潰れ状になっているが、打面調整か。左側縁に使用痕らし

きものが観察できる。763は白色の不純物が多い漆黒色黒曜石製。横長剥片を素材とする。上辺と左辺から加工を加えている。764は漆黒色黒曜石製。左縁辺に細かな調整を加える。右側縁に使用痕らしきものが認められる。

765～770は石核である。石核は図示した以外に不定形剥片を剥ぎ取った小型の黒曜石製残核が相当数あるが、時間的不足により実測まで至らなかった。総点数は30点以上はある。765は長さ7.1㎝を測る大型の漆黒色黒曜石製石核である。不純物が多い。下面は全面自然面で、側面にも1か所自然面を残している。打面の位置は一定していない。相当数の剥片を剥出していると思われるため、最初の剥片については明確ではないが、最終剥出剥片はやや横長の不定形剥片である。打面調整を行った形跡は明確ではない。766は漆黒黒曜石製で不純物が多い。上下両面に自然面が残り、その周辺が潰れる状態になり細かな階段状剥離が見られる。小型の残核となりさらに剥片を取ろうとしたが、失敗したものか。あるいは何かに使用した跡であろうか。剥出した剥片は小型の縦長剥片が主体であると思われる。767は漆黒黒曜石製。小形の残核で相当数の剥片を取っているものと思われる。打面転移も激しい。最終面では小型の横長剥片を剥出している。768は漆黒黒曜石製で自然面が残ってる。自然面が残っている面では打面調整を行っている。最終面で剥出した剥片は小型の縦長剥片と不定形剥片である。打面の転移が多い。769は黒色黒曜石製で、不純物を少量含む。自然面が3カ所で残り、元々の大きさはさほど大きくない角礫に近いものであったと推察できる。縦長剥片を剥出した痕跡もあるが、最終面では小型の不定形剥片を取っている。770は漆黒黒曜石製である。一面は自然面である。縦長剥片を剥出した痕跡もあるが、最終面ではやや大きめの横長剥片と小型の不定形剥片を取っている。打面の転移が激しい。

771～778は上下両方向から剥離を加えたもしくは加わった剥片で、端部に使用によるエッジの潰れが認められ、クサビ形石器に分類できるものである。771は不純物がやや多い漆黒黒曜石製である。薄手の剥片を素材にしている。全面加工が加わり主要剥離面はほとんど残っていない。ほとんどの剥離のパティナが古く、左面の右上の剥離のみパティナが新しい。上下両端に階段状剥離が見られ、エッジ部分が潰れている。この部分は古いパティナの部分である。772は漆黒黒曜石製。やや厚手で、縦長の剥片を取った残核を利用したとも思われるが、切り合いを考慮しても各剥片が小さく、二次調整かと思われる。上下両端部が潰れ、一部階段状剥離を成している。773は漆黒黒曜石製。片側側縁に自然面を残しており、この自然面を打点とする縦長剥片を素材にしていると考えられる。この素材を折り取り、横方向にくさび状に使用したものと思われる。使用した上下両端はエッジが潰れた状態を呈し、使用時にできたと考えられる細かい剥離が両縁ともに見られる。また一部は階段状剥離を成している。774も漆黒黒曜石製で、不純物がやや多い。縦長剥片を素材とし、他の剥片より薄い。他の剥片と同様に上下両端部が潰れた状態になり、両側から使用に伴う縦方向の細かい剥離が入っている。775は漆黒色色で不純物は少ない。全形は小さいが厚みがある。両側辺に使用痕が認められ、刃は潰れた状態で、細かな階段状の剥離が認められる。776は透明度の高い漆黒黒曜石製で、薄い縦長剥片を素材とする。大きな加工は行っていない。側縁は樋状剥離のようである。上端に潰れ痕と使用によると思われる細かな剥離が見られる。下端は意図的案微調整を加えているが、その部分がわずかに潰れ状になる。777は漆黒黒曜石製。やや厚みのある縦長剥片を素材としている。長軸の上下両端は刃が潰れ状になり、階段状の剥離が見られる。また端部の形態は丸のみ石斧のように一方が抉れたようになっている。778も不純物を少量含む漆黒黒曜石製で、薄い縦長剥片を素材にしている。上下両端に潰れ痕が認められ、片面に上下方向からの細長い剥離面を持ち、もう片面は下に階段状の剥離が認められる。

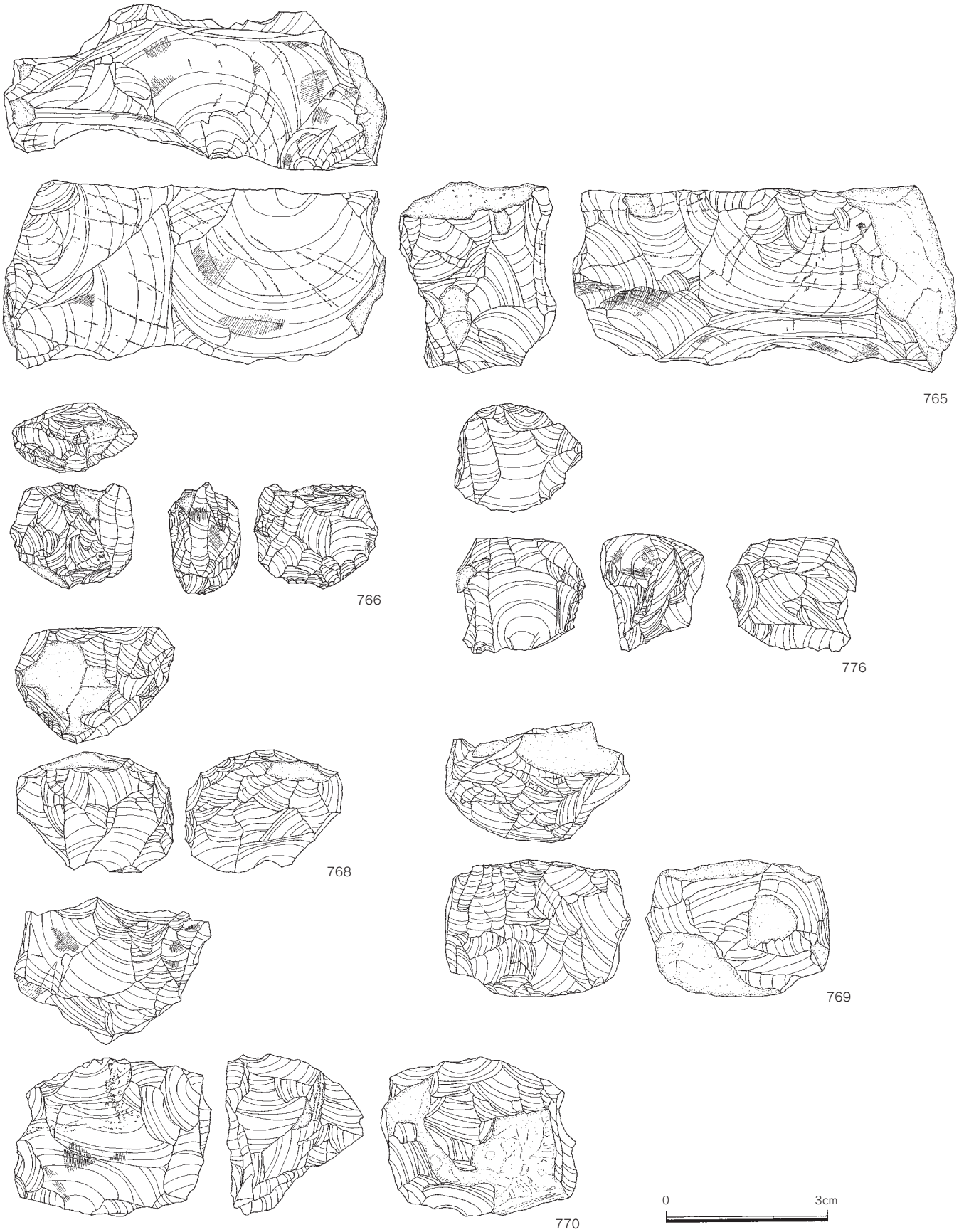


図103　A－1区包含層出土石器図 7（石核）（1/1）

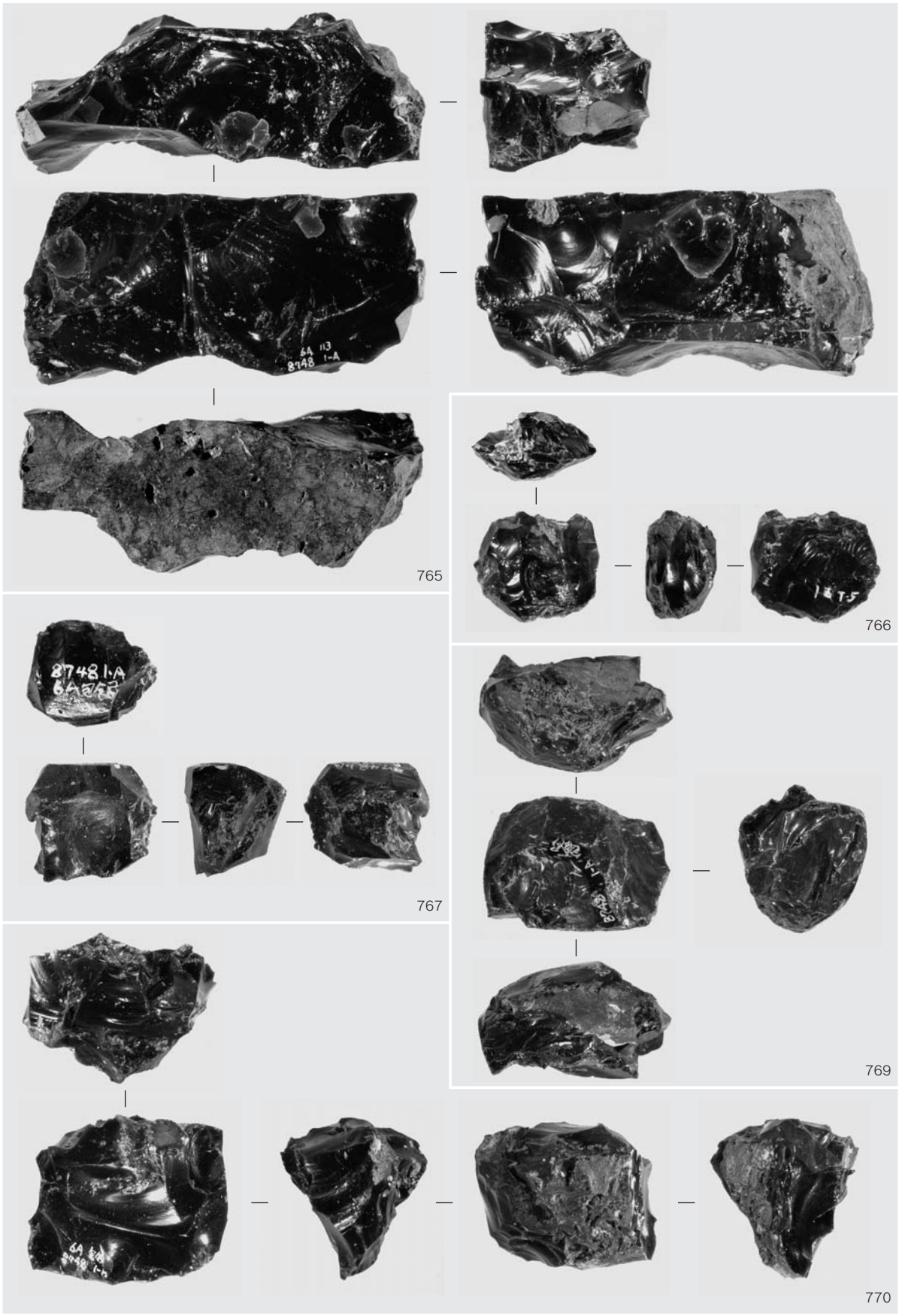


写真97　A－1区包含層出土石器 4（石核）

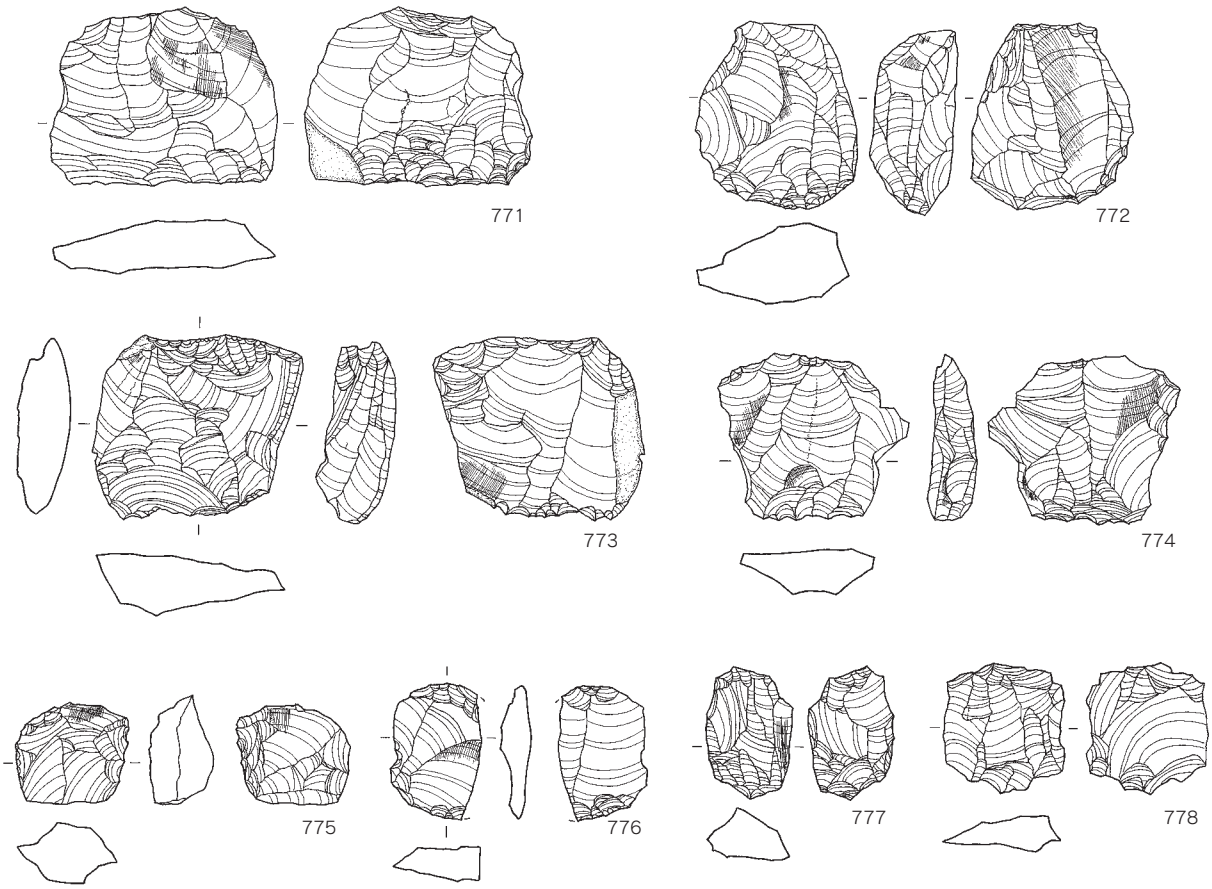


図104　A－1区包含層出土石器図 8（クサビ形石器）（1/1）

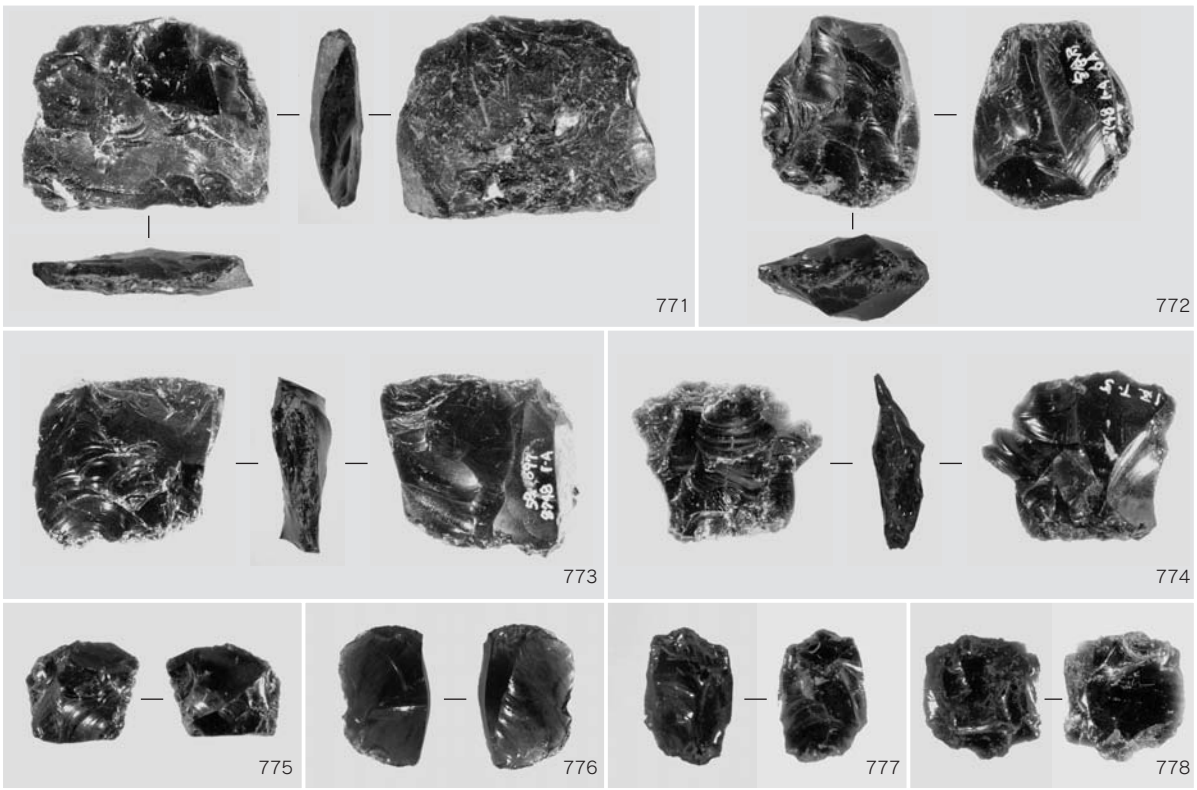


写真98　A－1区包含層出土石器 5（クサビ形石器他）

779～797は打製石斧または打製石斧・磨製石斧の未製品と思われる。779は暗青灰色を呈する安山岩製である。現存長10.3㎝、最短幅5.6㎝、最大幅8.7㎝、厚さ2.4㎝を測る。上部を欠失する。大型・厚手の縦長剥片を素材にし、全面粗い打割調整の後、3縁辺全周に交互剥離を施している。大型のスクレイパーの可能性もあるが、細かな調整がないことから石斧と思われる。刃部部分の幅と基部側の幅が大きく異なり、刃部近くの調整が進んでおらず、厚さ2.4㎝であることなどから打製石斧の未製品と考えられる。780は白色に近い玄武岩製で、ごく一部に黒い別の鉱物らしきものが付着している。比較的小型で撥形を呈する。全体に磨滅がすすみ、特に刃部の摩耗がひどく、打製石斧として使用したものであろう。長さ10.3㎝、幅6㎝、厚さ2.4㎝を量る。781は黄色味を帯びた灰白色の玄武岩製。長さ11.9㎝、幅5.8㎝、厚さ2.3㎝を測る。全形は出来上がっている。剥片を素材にしているものと思われる。片面の刃部から大きな剥離が入り、刃部を下から見ると丸ノミ形のような形状をしている。使用によるものというより、素材時の時のものからではないだろうか。打製石斧である。782は灰色の堆積岩を使用した打製石斧である。川原石を半割し、周縁調整のみを加えたもので、大半は自然面である。長さ11.5㎝、幅6.1㎝、厚さ1.9㎝を測る。783も堆積岩を使用している。扁平な川原石に縁辺調整を施し、両面とも中央部は自然面である。調整はかなり粗く、未製品ではないだろうか。刃部先端の一部はガジリである。長さ11.7㎝、幅5.7㎝、厚さ1.5㎝を測る。784は白色の玄武岩製で、縦長剥片を素材としている。基部下両側を大きな剥離でノッチ状に仕上げ、有肩打製石斧の形を成している。先端部の細かな交互剥離も終了している。使用痕跡等はわからない。長さ12.1㎝、幅7.7㎝、厚さ2.4㎝を測る。785は黄色味を帯びた灰白色を呈する玄武岩製であるが、他より汚い印象を受ける。表面の荒れもひどく、素材の状況が読み取れない。二次加工面と中央部分の色合いが異なることから見れば剥片素材ではないものと考えられる。扁平な自然礫に周縁調整を施しているのみである。下部は大きく3回の剥離が見られることから折損ではなく、調整の一部と思われる。このまま打製石斧として使うには剥離面の角度が大きすぎる。未製品か。長さ11.8㎝、幅7.9㎝、厚さ2.4㎝を測る。786は白色に近い玄武岩製。折損品で上下がわからないが、先端部には交互剥離を施しており、当調査の他の製品で、交互剥離を施しているのはほぼ刃部であることから刃部の破片と考えられる。そうすると、刃部の約1／3は厚みが取れておらず、未製品の可能性が高くなる。表面には一部自然面を残した横長剥片を利用している。長さ幅7.9㎝、厚さ2㎝を測る。788は玄武岩製。縦長剥片を素材としている。主要剥離面側は青灰色で、表面は灰白色系の色調で両面の色が異なっている。表面左側からは大きな剥離を施して階段状剥離を成しているが、この部分が取りすぎの可能性もある。ただし刃部は概ね交互剥離を成し、頭部も調整が行われている。全体に摩耗が激しいため、製品か未成品かの区別がつきにくい。いずれにしろ打製石斧である。789も玄武岩製。灰白色系の色調で摩耗が激しい。横長剥片を利用している表面上部は自然面が残っており、柱状の原石から第一打で剥ぎ取った剥片と思われる。表面下部を大きな剥離で取り去り、その後に周縁調整を施しただけであるが、刃部はすでに鋭く、打製石斧として充分使用可能であるが、使用しているかどうか明瞭ではない。790は緑色片岩系の石材を使用している。表面はほぼ全面自然面で、川原石を利用したものであろう。裏面は調整が進み、ほぼ磨製石斧の形態を成しているが、刃部を取りすぎていること、敲打・研磨の痕跡が認められないことから未製品（失敗品）と思われるが、刃部の一部が潰れており、あるいはこのまま使用した可能性もある。791は玄武岩製の有肩打製石斧である。刃部の摩耗が激しく、使用した製品と思われる。縦長剥片を素材としている。792も玄武岩製。主要剥離面側はほぼ平坦で摩耗が進んでいるため剥離の方向が良くわからないが、横長剥片ではないかと思われる。表面は頭部側と刃部側から大きく剥離し、刃部は交互剥離が施されている。全面の調整も終わり、刃部の消耗も進んでいることから使用した製

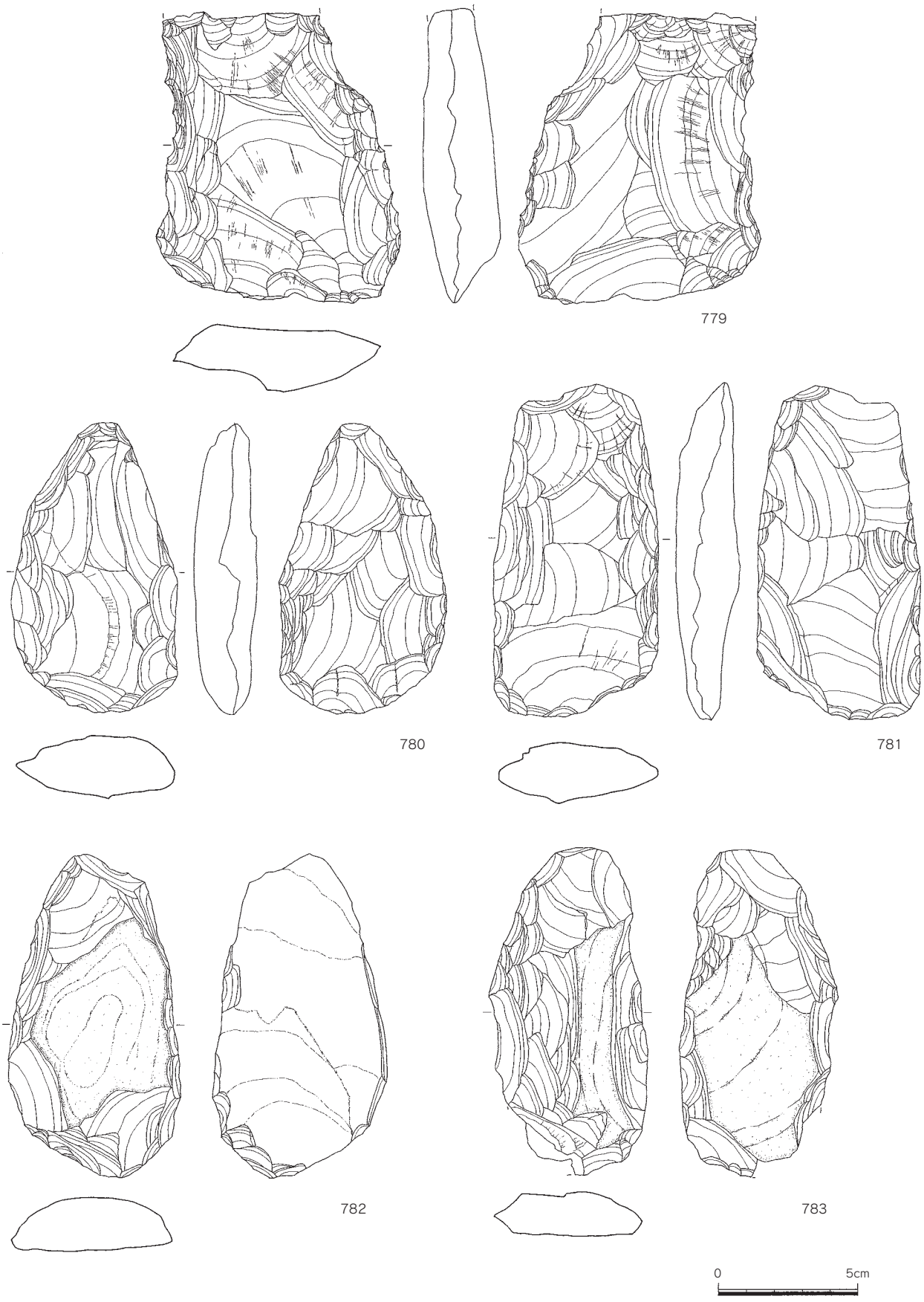


図105　A－1区包含層出土石器図 9（石斧・同未製品）（1/2）

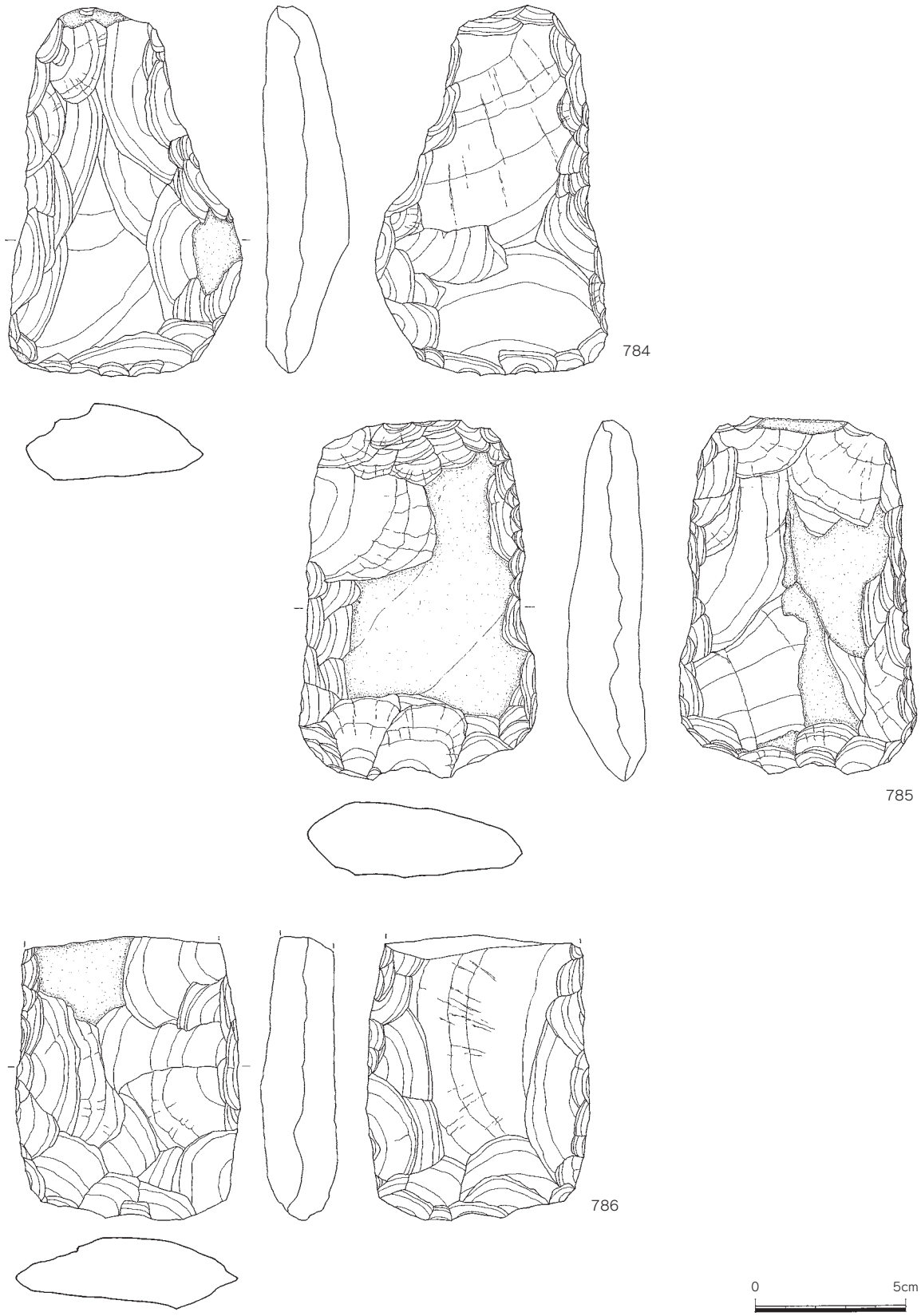


図106　A－1区包含層出土石器図 10（石斧・同未製品）（1/2）

図107　A－1区包含層出土石器図 11（石斧・同未製品）（1/2）

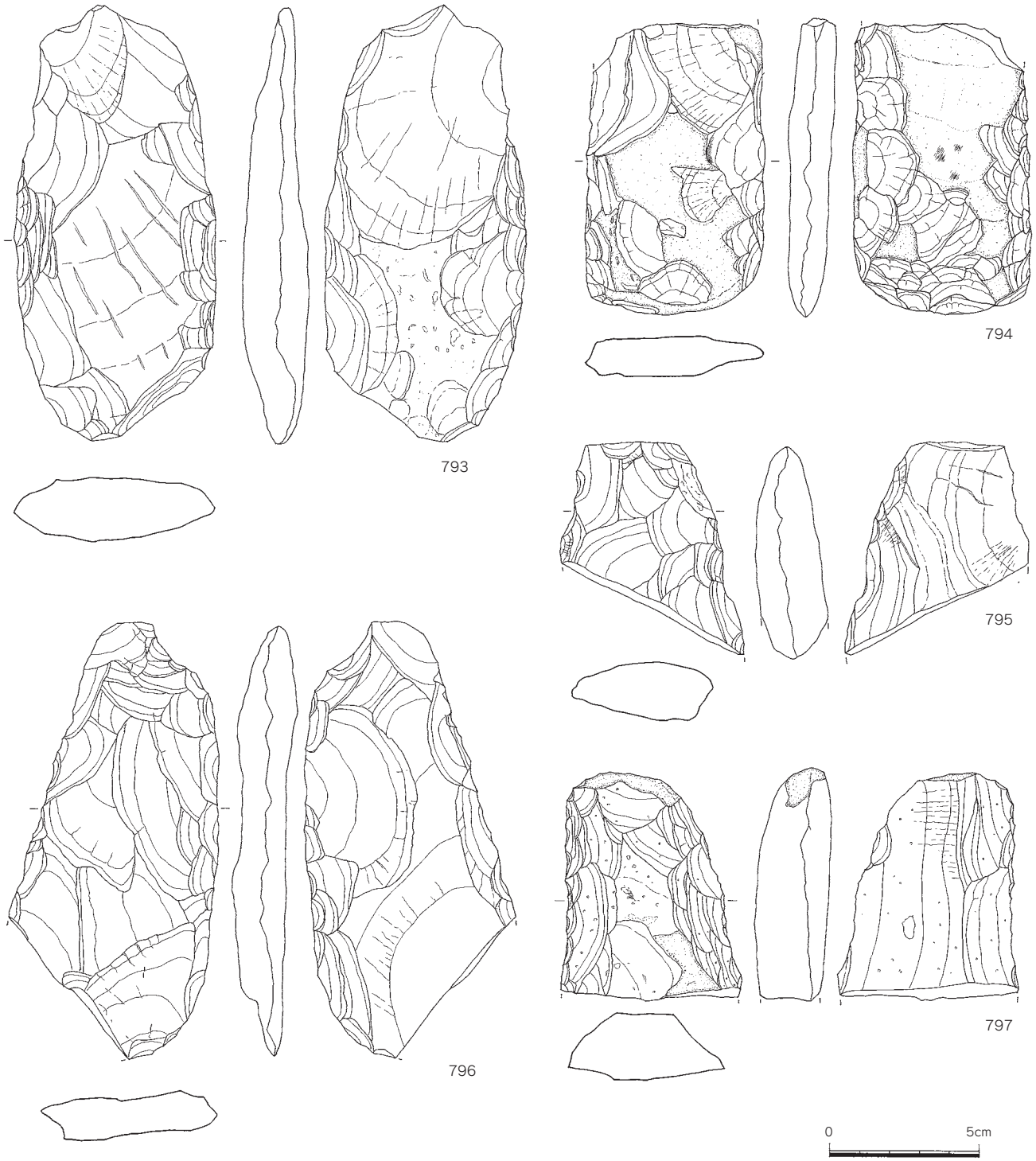


図108　A－1区包含層出土石器図 12（石斧・同未製品）（1/2）

品であると思われる。

793は玄武岩製。図の左面は青灰色で右面は灰白色系の色調である。右の面には自然面が残る。左面は明瞭ではないが、大きな剥離のように描いた部分は自然による風化剥離面ではないかと思われる。両端部ともにエッジが鋭くなっており、天地が不明で図の逆の可能性もある。右図の上部分が大きく剥離し薄くなっていることから考えれば、天地逆の可能性が高いようにも思われる。打製石斧の完成

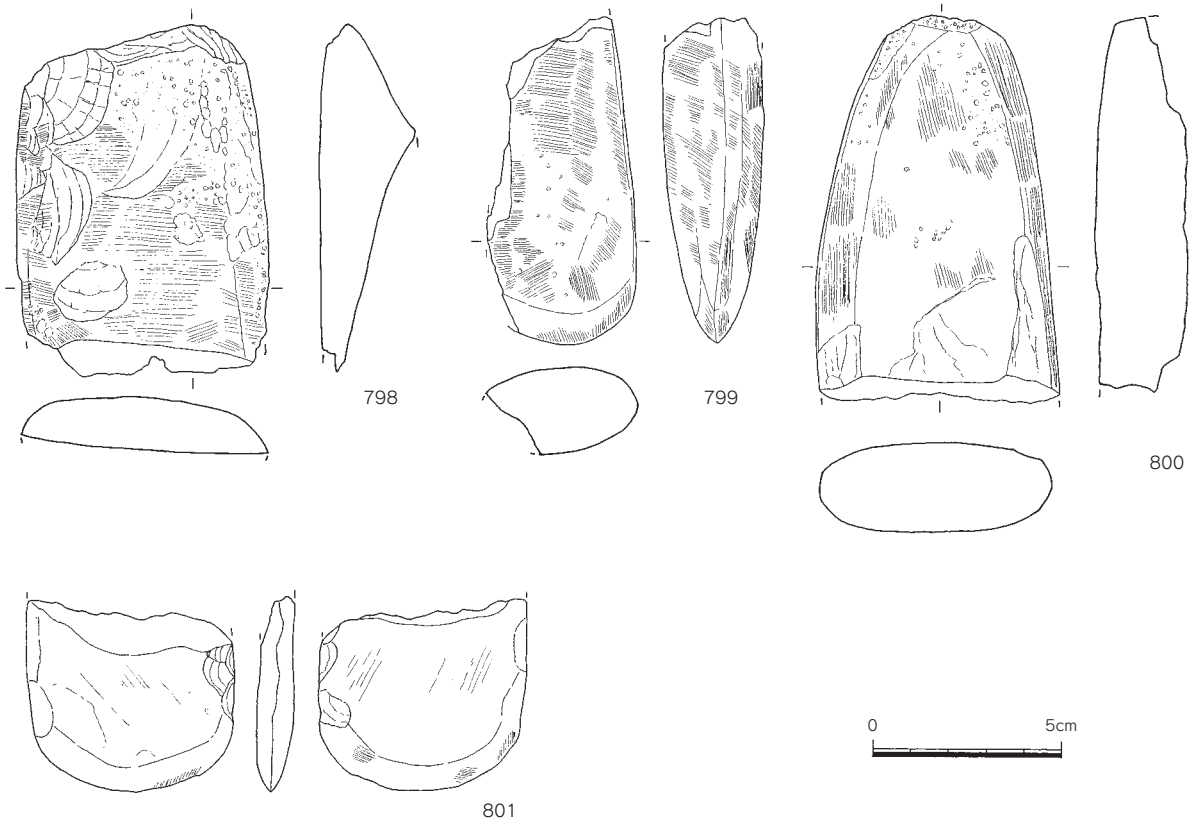


図109　A－1区包含層出土石器図 13（石斧）（1/2）

品か。794は安山岩製か。両面ともに自然面が大きく残る。右図の剥離の多くは自然風化による剥離か。左面の多くは人為的な調整が進んでいる。右図の自然風化面には一見研磨状の擦痕が認められるが、短く単発的で、自然についたものではないかと思われる。風化の進んだ板状の素材を使用したものと思われる。795は玄武岩製で、横長剥片を素材としている。頭部調整と側面調整はともにほぼ終了しているものと思われ、製品の可能性が高い。打製石斧か。796も玄武岩製。薄い縦長剥片を素材にしている。刃部を欠損しているが、失敗品なのか、製品として破損したものかわからない。いずれにしろ打製石斧である。表面は各方向から剥離が施されているが、他の打製石斧の完成品に比べると調整がかなり粗いため未製品の可能性が高いのではないかと思われる。797は安山岩製。横長剥片を素材にしている。中央と頭部に自然を残している。厚さの割に幅が狭く、周縁調整の角度はかなり急である。打製石斧に不可能な厚さではないが、全形から見ればむしろ磨製石斧未製品と考えた方が良さそうである。

798～801は磨製石斧である。798は安山岩製。上下両側を欠失し、さらに図の反対側もない。表面左右両側に敲打痕が残り、中央部は研磨が施されている。大型の磨製石斧であろう。799は蛇紋岩製（？）の小型磨製石斧である。残存部分は完全に研磨が施されている。刃部先端が使用のために小さく欠けている。緑白色のきれいな色調である。800は緑泥片岩製である。扁平な川原石を素材としており調整の痕跡や敲打痕は認められず、図の表面は研磨を施しているが、裏面は研磨の痕跡も認められ

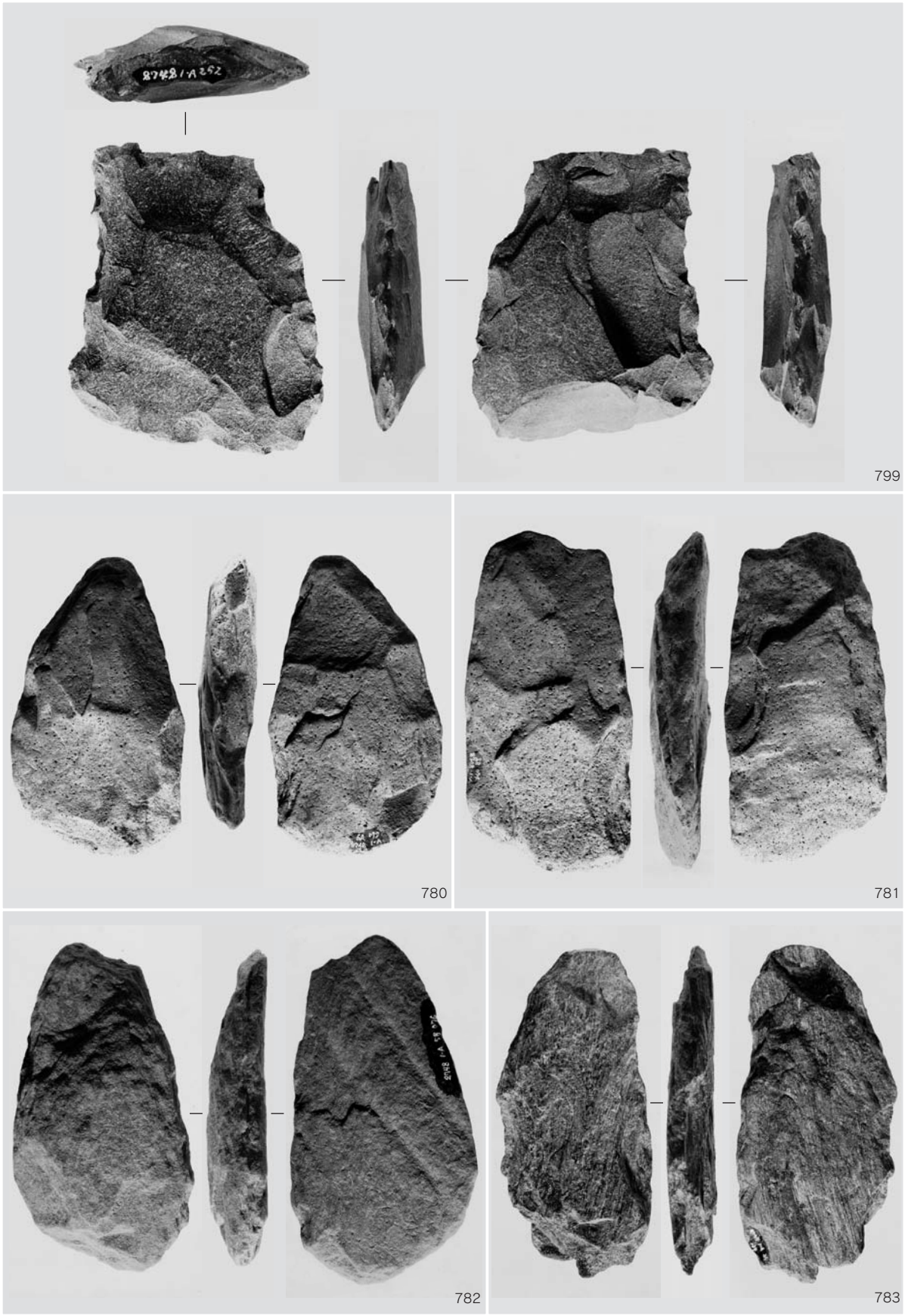


写真99　A－1区包含層出土石器 6（石斧・同未製品）

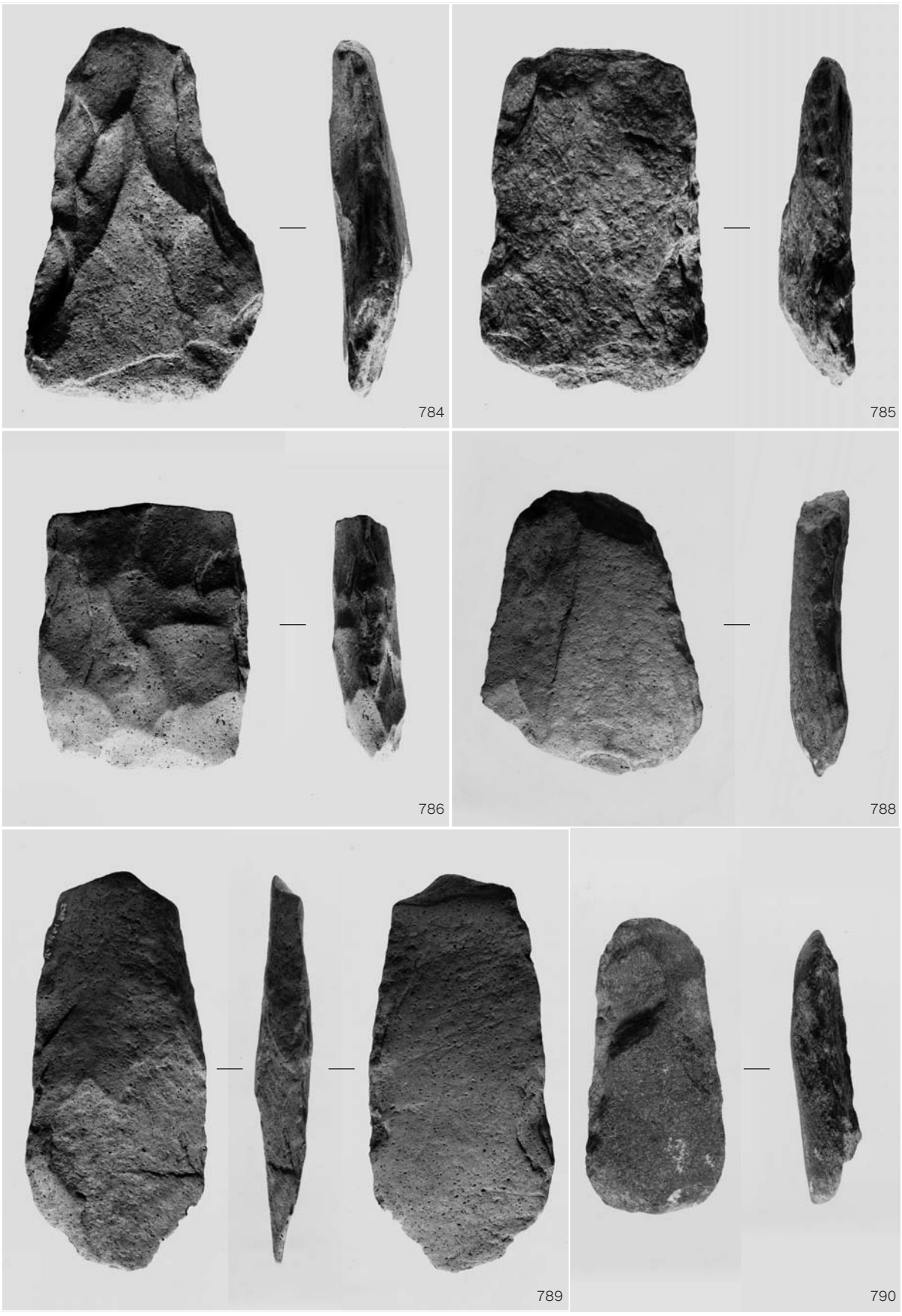


写真100　A－1区包含層出土石器 7（石斧・同未製品）

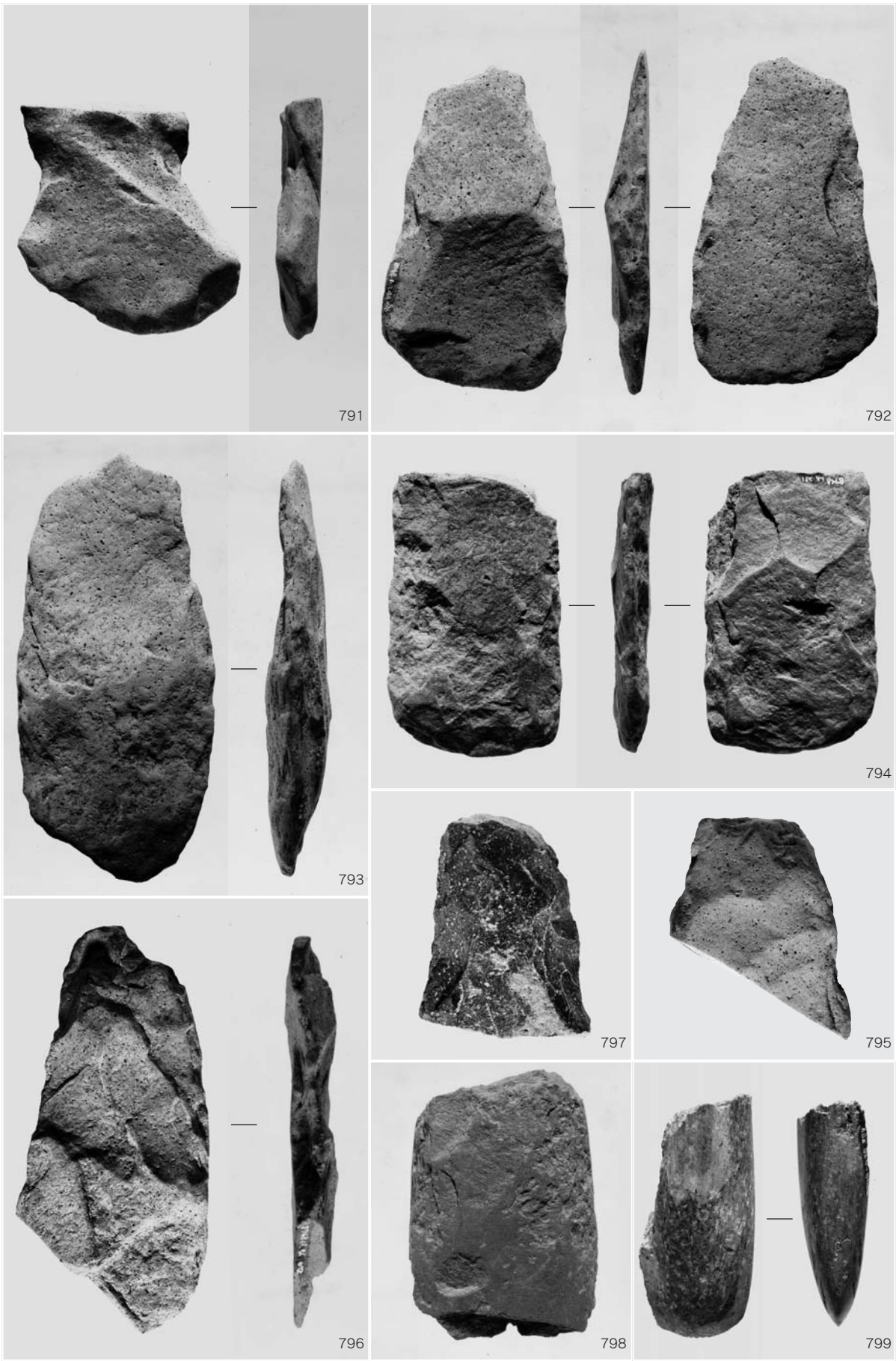


写真101　A－1区包含層出土石器 8（石斧・同未製品）

ない。下半分を欠失しているため、あるいは磨石の可能性もあるが、形態から磨製石斧と判断した。801は小形の磨製石斧である。刃部をU時形に整形して研磨を入念に施している。刃部の上の部分は両面とも剥落したような状況でやや凹んでいるが、これが当初からのものか破損時に剥げ落ちたものか明瞭ではない。

802～812は磨石・敲石・石皿等である。802は花崗岩製である。両側縁が欠けているが、ともに側縁が飛び出した部分のみが破損しているようで、さほど大きくならない。両面が摩耗状態になったいるが、明らかな磨り跡等は確認できず、磨石・石皿ではない可能性もある。803も花崗岩製。ほぼ全

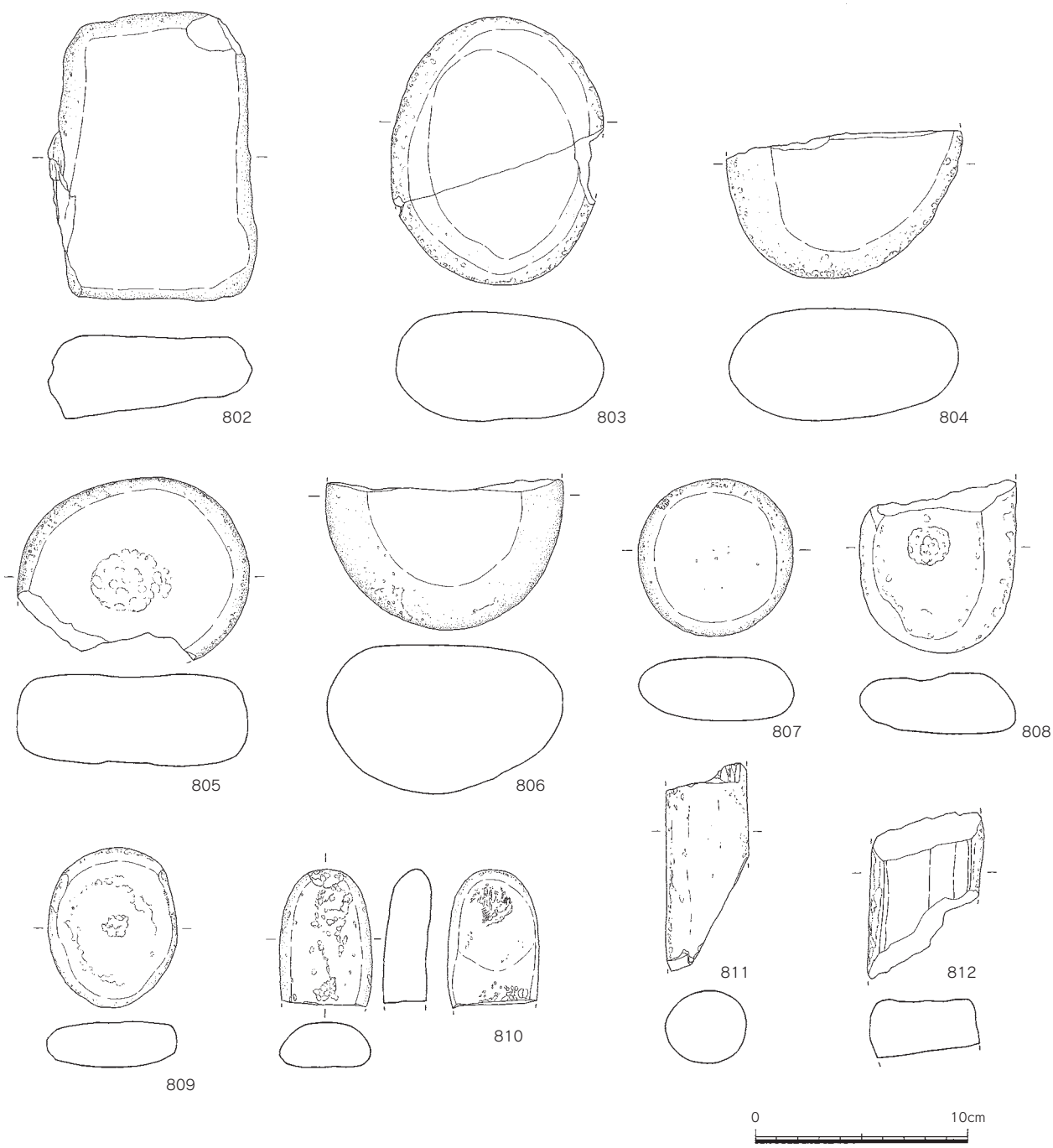


図110　A－1区包含層出土石器図 14（磨石類）（1/3）

面磨かれている。上下端部がわずかにざらついており、あるいは敲いた痕跡かも知れない。804も花崗岩製。ほぼ全面磨かれている。端部には敲打痕が残っており、磨石兼敲石である。805は砂岩質の石材である。全面磨かれており、平面部分と側縁部分は明瞭な稜を成している。側面は中心部がざらついていることと、端部の一部が欠けていることは、敲いた痕跡かも知れない。また両面中央部もわずかに凹みざらついている。806は大型の磨石で砂岩質の石材である。ほぼ全面磨かれているが、特に片面の研磨が進んで平坦面を成し、側面との境は稜を成している。807は玄武岩製か。全面磨かれているが、稜はまったくなく、自然石の可能性もあるが、側縁はわずかにざらついている。808は花崗岩製？。かなり摩滅が進んでいるため一部を除き磨いた痕跡は明確ではない。中央部分が径2㎝ほど凹んでおり敲いた痕跡であろう。809は全体的に摩滅しているが、磨かれているかどうか良くわからない。両面中央が凹んでいる。敲打痕であろう。810は断面形が蒲鉾状を呈する。全面良く磨かれているが、特に蒲鉾の平らな面の磨かれ方が著しい。蒲鉾の凸の面と先端部に敲打状の痕跡が付いている。また平らな面の先近くにも敲打状の痕跡と擦痕が付いている。811は堆積岩である。片面が著しく研磨され、中央を挟んで両側が浅い溝状に凹んでおり、砥石と思われるが、小片のため判断不可能。812は表面に節理の筋が見られる。全面磨かれている。自然による可能性もあるが、石棒の可能性も考えられる。（米倉）

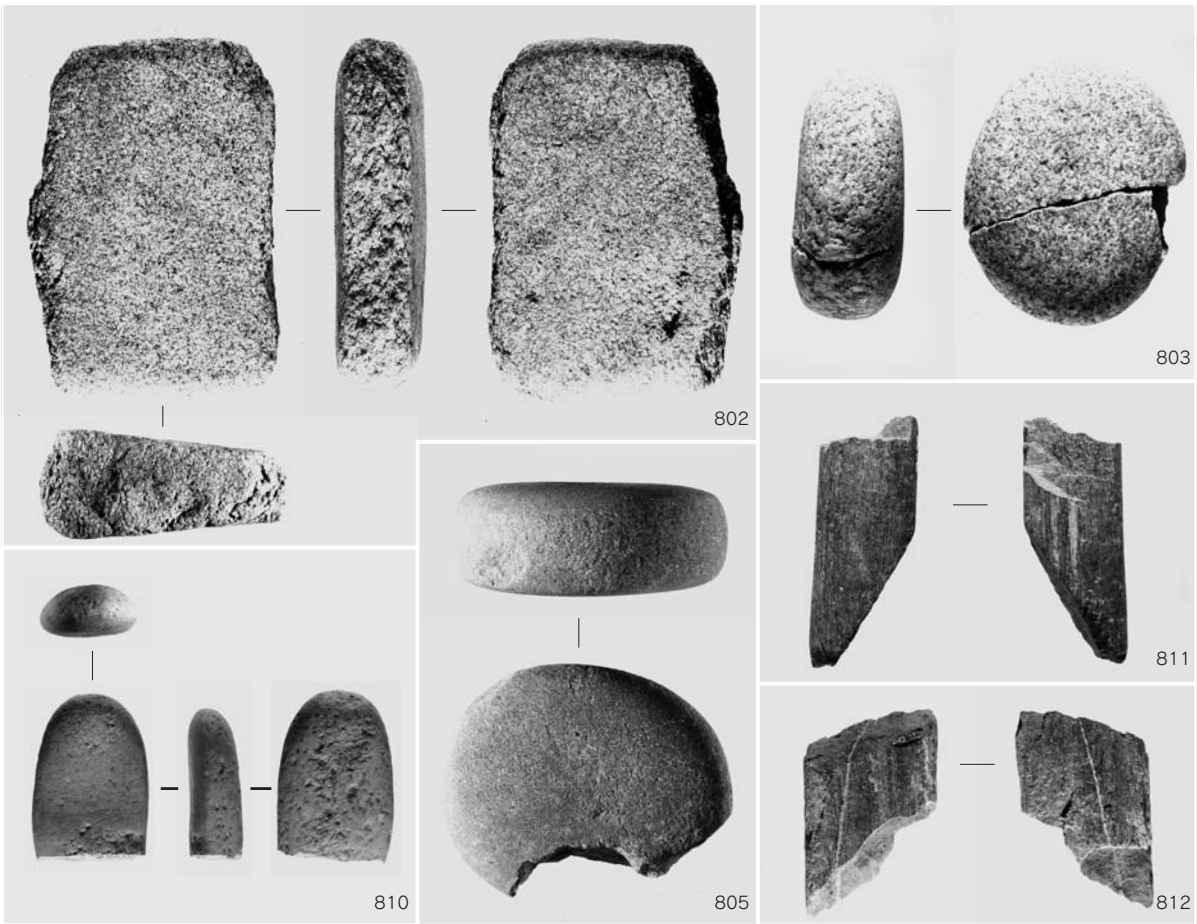


写真102　A－1区包含層出土石器 9（磨石類）

6．トレンチ出土遺物

調査前に予定地内全域に試掘トレンチを設定し、遺物・遺構の検出状況によって発掘調査区を設定したが、調査期間が短かく全面調査を行うのが不可能であったため、縄文時代の遺物が特に集中した4～7号トレンチ部分に調査区を限定した。その他のトレンチでも大なり小なり縄文時代の遺物が出土しており、ここではこれらトレンチから出土した縄文時代遺物について記載する。トレンチは重機で掘削したため、細かい出土状況は不明であるが、第4節の1で述べたとおり、本調査区では遺物包含層がほとんど存在せず、表土と表土下数㎝内から出土しており、各トレンチも同様な状況であったと思われる。

7号トレンチ出土遺物（図111、写真103）

7号トレンチは本調査を実施したA－1区のすぐ西側に位置する。813は口径37.1㎝を測る粗製深鉢である。両面とも板（ヘラ）状工具でケズリ気味になでている。口唇部も同様の調整で平坦に作っている。両面とも小豆～大豆大の窪みが無数にある。外面には口縁部に煤または焦げの付着した痕跡がある。814は半精製に近い深鉢である。外面は浅い条痕を施し、内面はていねいなナデ仕上げである。口縁部端は外面を断面三角形にカットして尖らせている。また口縁部端内面にはかすかに沈線を巡らせている。815は粗製深鉢で、外面は条痕を施している。内面はナデ仕上げであるが、かすかに条痕らしき条線が確認できる。816は粗製深鉢である。外面には目の大きい貝殻条痕を施し、内面はていねいなナデ仕上げである。外面には煤が付着している。817は粗製深鉢である。口縁部と頸部には段に近い屈曲をつける。口縁部には2条の沈線を巡らせている。両面ともナデ仕上げである。外面は黄褐色、内面は黒色に近い色調である。818は半精製の浅鉢である。両面ともヘラ磨研を施しているが、やや粗い819は精製の浅鉢である。両面黒色を呈し、ていねいなヘラ磨研を施している。820は半精製の鉢と思われる。外面に2条、内面に1条の細い沈線が巡る。両面ナデ仕上げで、胎土に微細な砂粒を多量に含んでいる。821は粗製深鉢の底部で、二次焼成のためか、かなり脆くなっている。調整は両面とも工具（ヘラ状か）でケズリに近いナデである。822は精製浅鉢の底部である。

823～836は石器で、確認できたものはすべて図化した。823は石錐で、ややくすんだ黒色を呈する。横長剥片を素材とし、片面はほぼ全面自然面で、原石から剥ぎ取った剥片をそのまま利用。先端になる部分のみに加工を施してドリルにしている。基部は折損している。824も石錐で、不純物をわずかに含む漆黒黒曜石製。横長剥片を素材とする。片面側からのみ2次加工を施す。左側縁辺は細かな調整を施し、右側縁辺は先端部分に1回の打撃を加えて抉りを入れている。主要剥離面にはバルブが残る。825は不純物をわずかに含む漆黒黒曜石製。細長くやや厚手の剥片を素材とする。長軸に平行な4面の細長い剥片が認められ、それぞれ剥離方向は上下2方向から施されている。樋状剥離にはなっていないが、先端部が潰れており彫器であろうか。826はわずかに半透明の黒色黒曜石製。片面は上下2方向から2次加工を施す。もう片面は主要剥離面をそのまま残しており、バルブが残る。側面に細長い樋状の剥離面がある。彫器であろう。827はわずかに半透明の黒色黒曜石製で、パティナが古い。縦長剥片で打面を調整している。両側辺部に不規則な微細剥離があり、使用痕と思われる。微細剥離の一部は刃が潰れた状態で摩滅している。基部下両側にノッチ状の調整が施されている。828は不純物が多い漆黒黒曜石製。縦長剥片で、両側縁に使用痕と思われる刃こぼれが認められる。それ以外の加工は施されていない。829は不純物をわずかに含む漆黒黒曜石製。横長剥片を素材。右側に使用痕と思われる刃こぼれが認められる。片面左側の大部分は欠損しており、欠損部の上縁には細かな加工痕が認められる。先端部分も欠損しており、石錐の可能性が高い。830は不純物をわずかに含

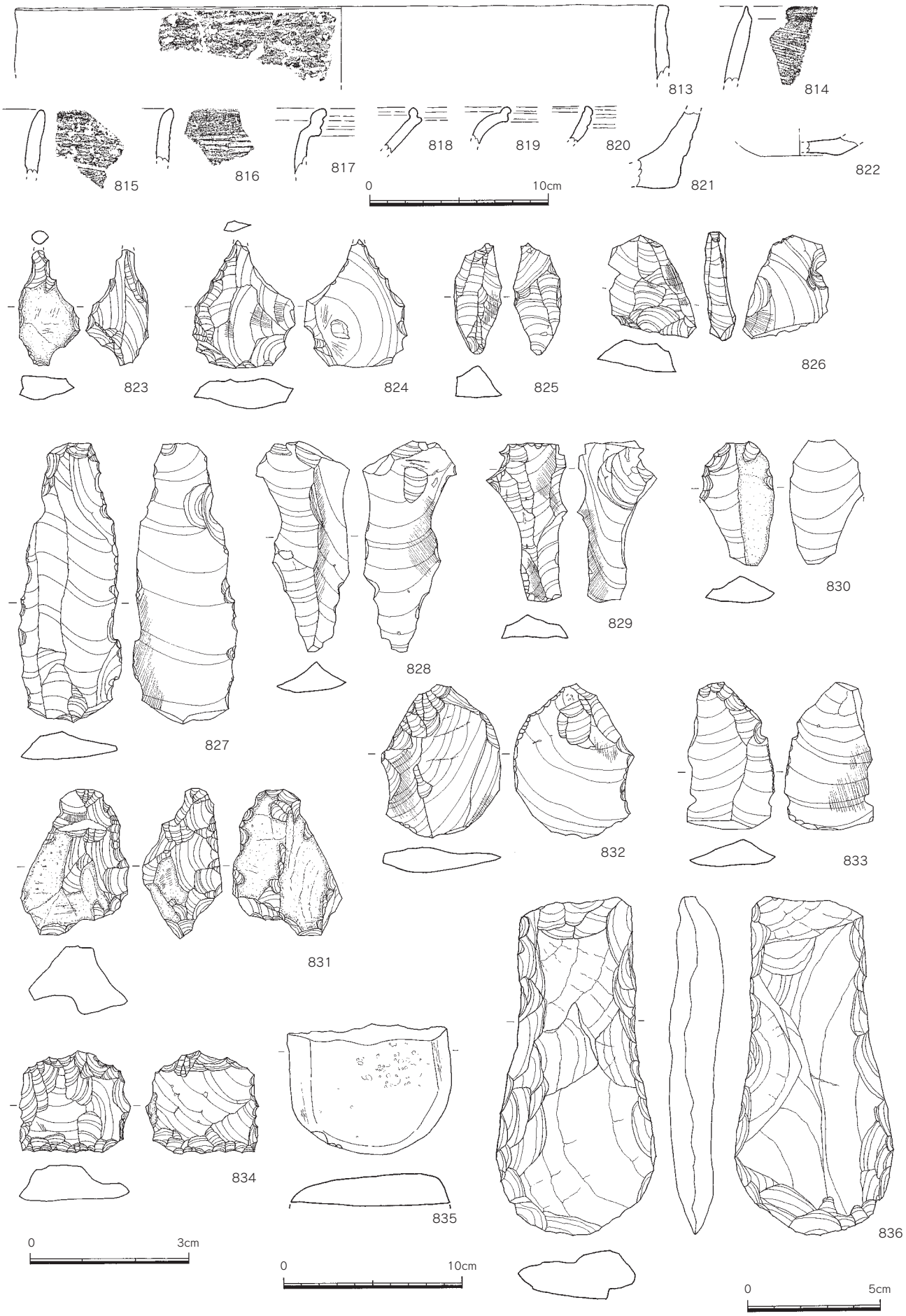


図111　7号トレンチ出土遺物図（1/1・1/2・1/3）

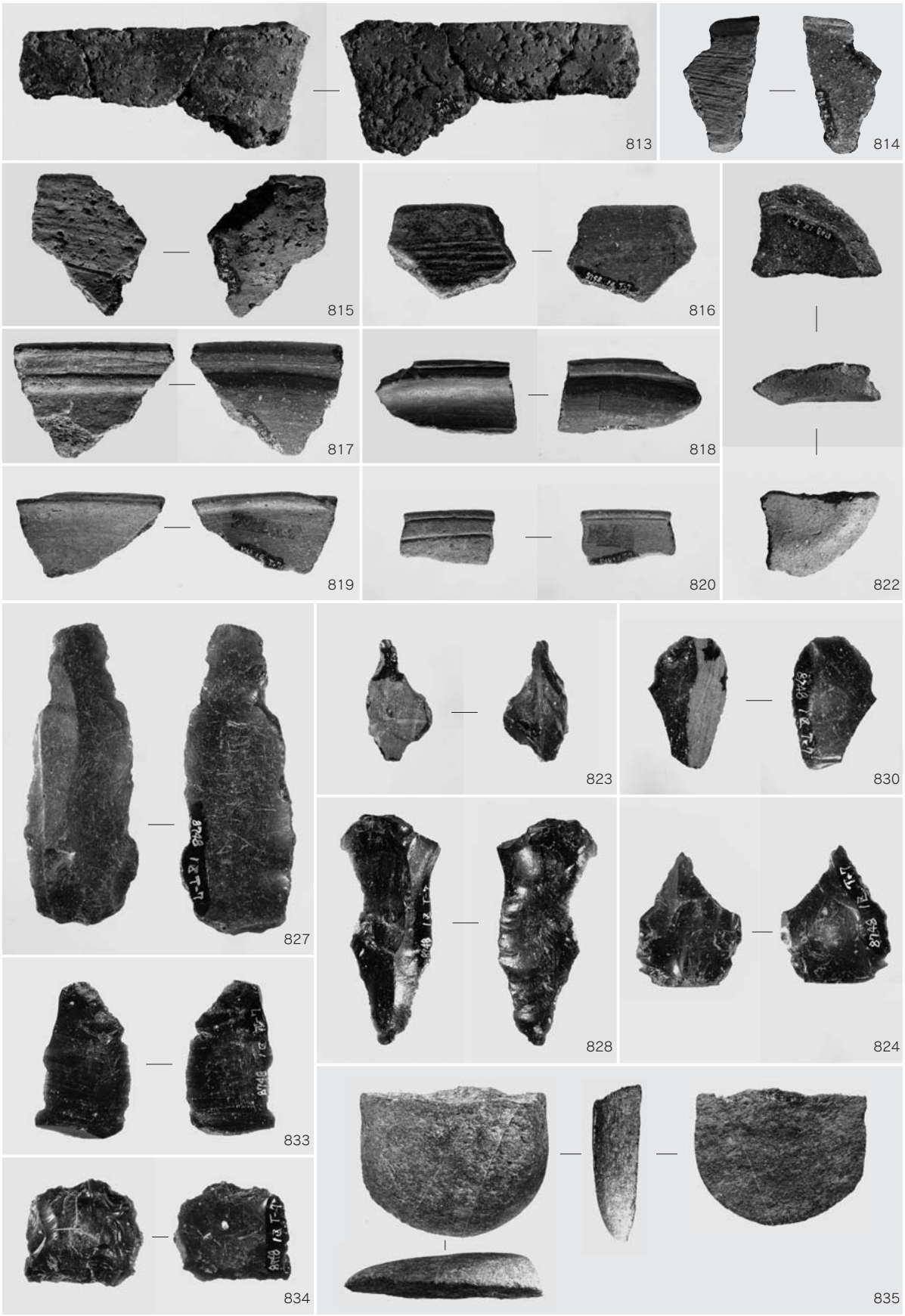


写真103　7号トレンチ出土遺物

む漆黒黒曜石製。縦長剥片で、片面の左側縁辺のみに、細かな調整を加える。その面の半分は、原石面を残したままである。主要剥離面のパティナは古く、微細加工痕と折損部のパティナのみが新しい。831は漆黒黒曜石製である。両面に自然面を残した厚手の不定形剥片で、片面の一部に細かな調整が施されている。832は漆黒黒曜石製。幅の広い縦長剥片で、表面左上には樋状剥離のような剥離の部分に微細な加工が施されている。下半部は本来半円形を呈していたと考えられ、一部が使用によって欠損し、他の部分にも刃こぼれ状の使用痕が認められる。833はわずかに半透明の黒色黒曜石製。縦長剥片を利用。両側縁辺に使用痕と思われる細かな刃こぼれが認められる。834は漆黒黒曜石製。不純物が多い。上下両端は微細な加工を施した後、使用によると思われる階段状剥離が重なり、さらに刃が潰れた状態になっている。835はほとんどが自然に摩滅した可能性が高いが、右側面のみ磨った平坦を成して磨った可能性が高いので、掲載した。836は有肩打製石斧である。表面は灰白色で、裏面は黄色味がかっている。両面の埋まっていた時の土壌条件の相違によるものであろう。頭部にガジリが1ヶ所あるが、その部分のみ黒色に近い色調である。薄い横長剥片を素材とし、周縁調整・頭部調整を行った製品である。全体がやや摩滅しているためか刃部の使用痕は明確ではない。

9号トレンチ出土遺物（図112、写真104）

9号トレンチはA－1区のすぐ南側に位置している。837は半透明の黒色黒曜石製。縦長剥片を素材とする。基部は折損。表面の右側には長めの押圧剥離を施し、主要剥離面の右側には細かい調整を施している。石鏃と思われるが、先端部が完全に尖っていない。折損しているとも思われるが明確ではない。838は漆黒黒曜石製の縦長剥片で、不純物をやや含む。下縁左側に舌を作るように微細な加工が施され、左側縁には細かな刃こぼれ状の使用痕がある。839はやや半透明の黒色黒曜石製で、縞状である。縦長剥片で、片側辺の一部に使用痕と思われる細かな刃こぼれが認められる。840は白色粒子

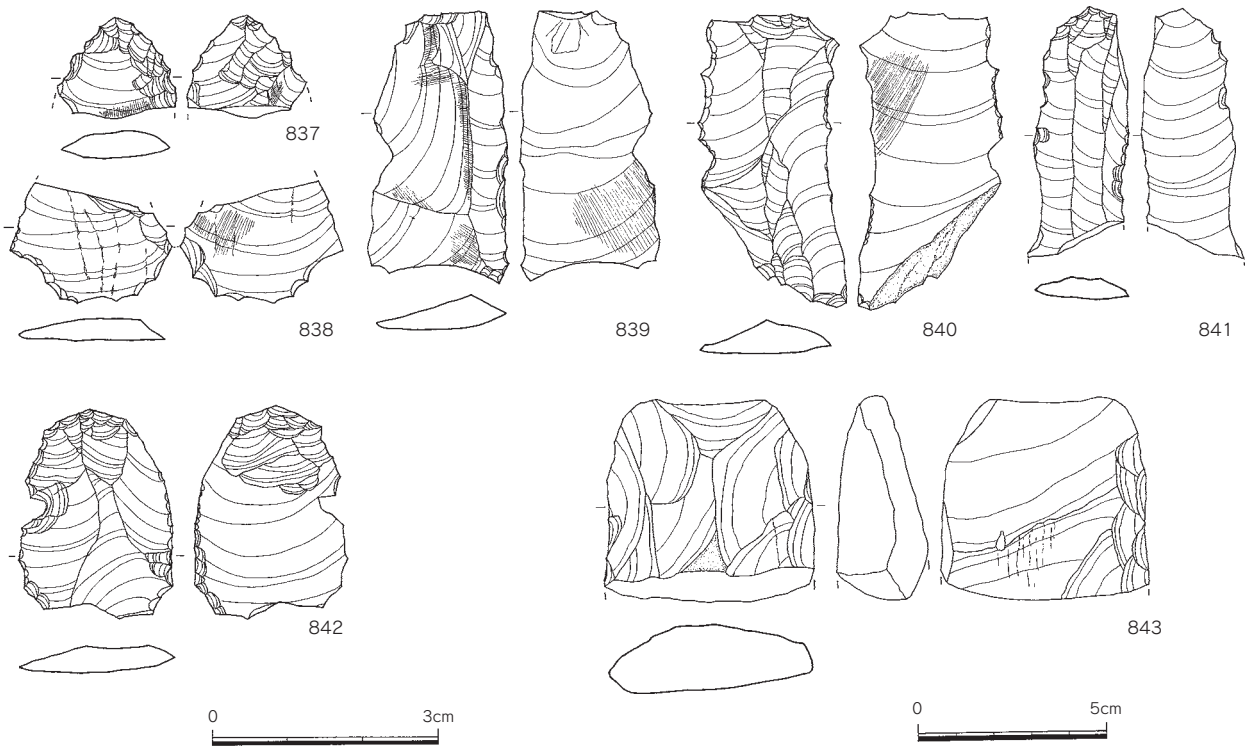


図112　9号トレンチ出土遺物図（1/1・1/2）

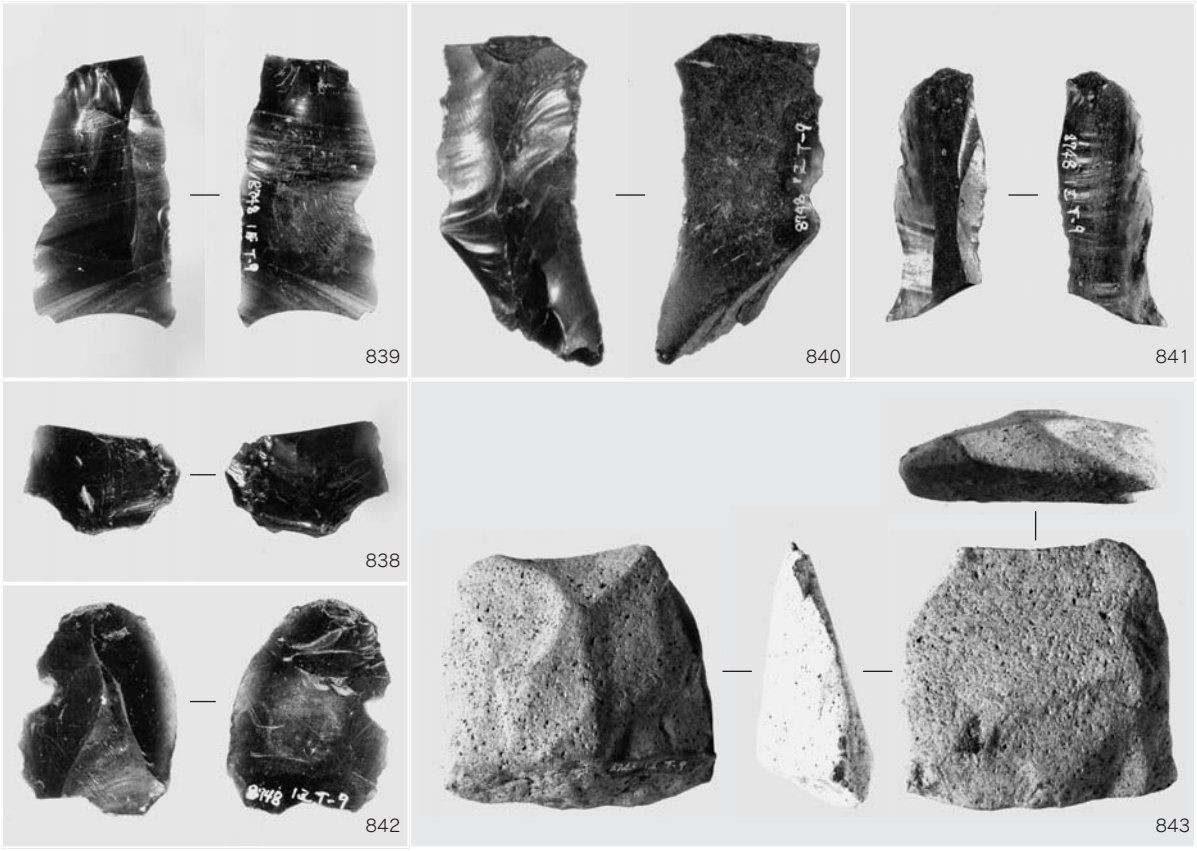


写真104　9号トレンチ出土遺物

をかなり含む灰黒色黒曜石製で、あたかも一見パティナが古いように見えるやや曇りがある。縦長剥片で、原石面がわずかに残る。打面・バルブは取り除かれている。右側縁辺に細かな調整を施し、左側縁には使用痕と思われる刃こぼれがある。841は半透明の黒色黒曜石製。縦長剥片を素材とする。表面上端部に細かな剥離調整を加える。両側縁辺一部に使用痕と思われる刃こぼれが認められる。また右側縁上部と左側縁下部が折損しているのも使用に伴うものであろう。842は漆黒黒曜石製。幅の広い縦長剥片で、バルブを剥離によって取り除いている。その際についたのか、あるいは剥片剥離時についたのか先端部が潰れた状態である。表面右側縁辺と左側縁辺下半に使用痕が認められる。左側縁中央に加工によりノッチが作られている。下半縁辺は刃が潰れた状態で、先端は欠損。843は玄武岩製石斧。縦長剥片を素材とする。灰白色に近い色調で、表面の粒子が飛んだように抜けている。表面は全面に粗い調整を施し、主要剥離面側は片側側縁に縁辺調整が施されている。打製石斧であろうが、製品か未製品か、さらには刃部か基部かも判断しづらいが、製品であるならば、まったく交互剥離がないことから基部であろう。幅5.6㎝、厚さ2.4㎝を測る。

10号トレンチ出土遺物（図113、写真105）

10号トレンチは9号トレンチの南に位置している。844は精製の浅鉢で、わずかに波状を呈する口縁部片である。両面ともていねいなヘラ磨研を施し、器面に光沢がある。845は漆黒黒曜石製。縦長剥片で、表面左側縁から下側縁に二次加工を施す。下端部は縁辺が潰れた状態で、剥離が階段状剥離を成している。先端部も使用痕らしきものが認められる。846漆黒黒曜石であるが、パティナが進んでいるのか光沢がない。厚みのある縦長剥片で、打面部分が後の剥離で取り除かれている。表面左側

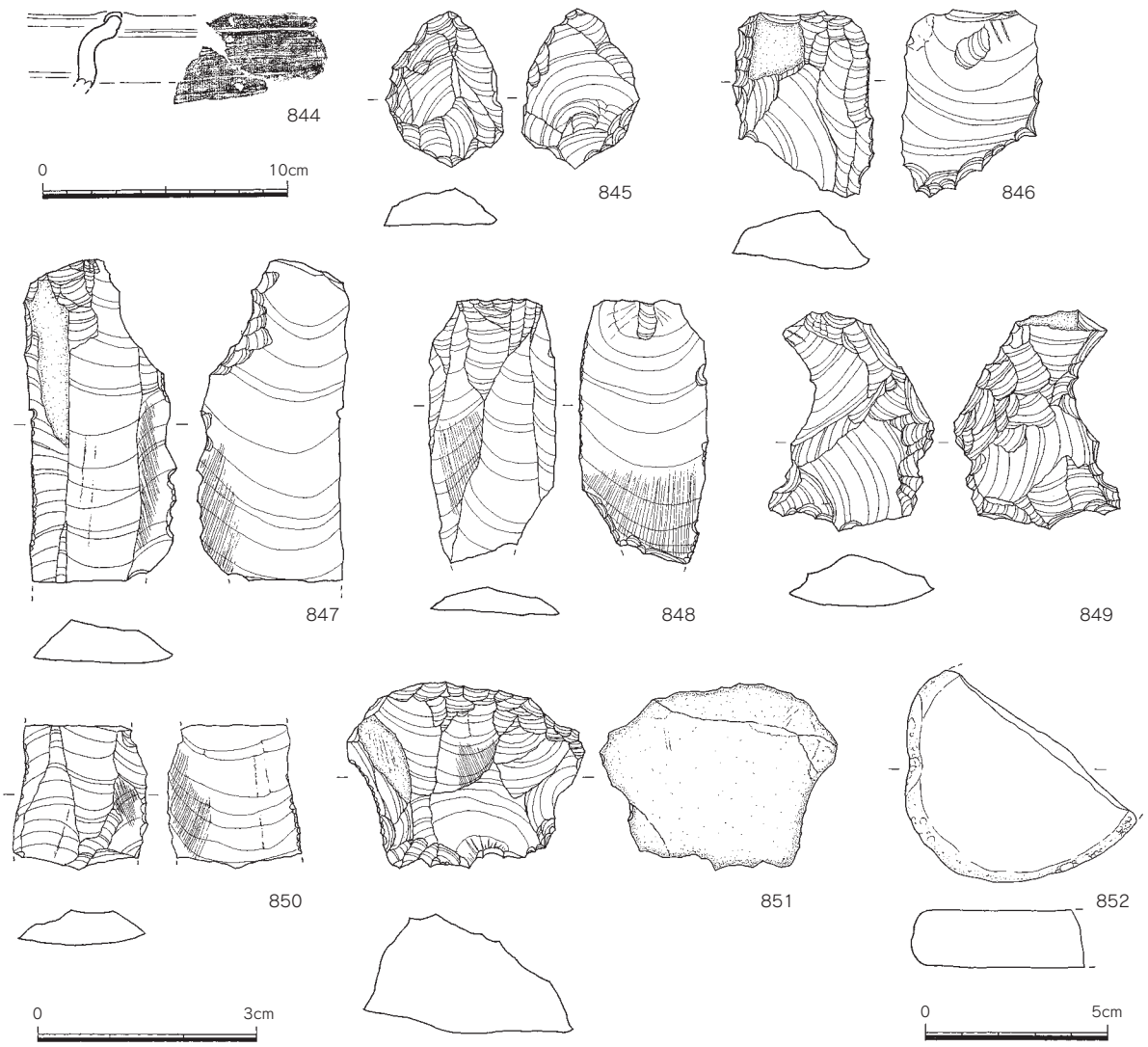


図113　10号トレンチ出土遺物図（1/1・1/2・1/3）

縁にはやや粗い調整を加え、下側縁には細かな調整を施している。また右側縁には使用痕と思われる微細剥離が認められる。847は良質な漆黒黒曜石製。一部に表皮を残した縦長剥片である。右側縁はかなり粗い使用痕が残り、刃こぼれがひどい。左側縁にも使用痕があるが、こちらの側は刃こぼれが少ない。848は透明度の強い漆黒黒曜石製。かなり薄手の縦長剥片である。上縁に細かな調整があるのは打面調整の痕跡か。下部は折り取られているようであるが、折り取った後の下縁と右側縁を結ぶ斜めの部分には二次加工を施している。両側縁には使用痕が残っている。849はややくすんだ黒色黒曜石製。縦長の不定形剥片で、打面は自然面である。主要剥離面の左側縁から大小の調整を加えている。素材剥離面はほとんど残っておらず、打面は原石面を残したまま。850は良質な漆黒黒曜石製。縦長剥片で、両端を欠損しているが、折り取った可能性もあるか。両側縁に使用痕と思われる刃こぼれが認められる。851は漆黒黒曜石製の石核。片面は全面自然面で、剥片剥離面にもごく一部に自然面が残り、原石は比較的小さな礫である。従って刃器状の縦長剥片を取ることは不可能で、最終剥離面に残っているような、小型の不定形剥片のみを取ったものと思われる。852は花崗岩製の石錘で、扁平な円礫を素材にし、側面に浅い抉りを入れる。また側面は全面敲打のような痕跡が残る。両面はつるつるであるが、自然による摩耗の可能性が高い。

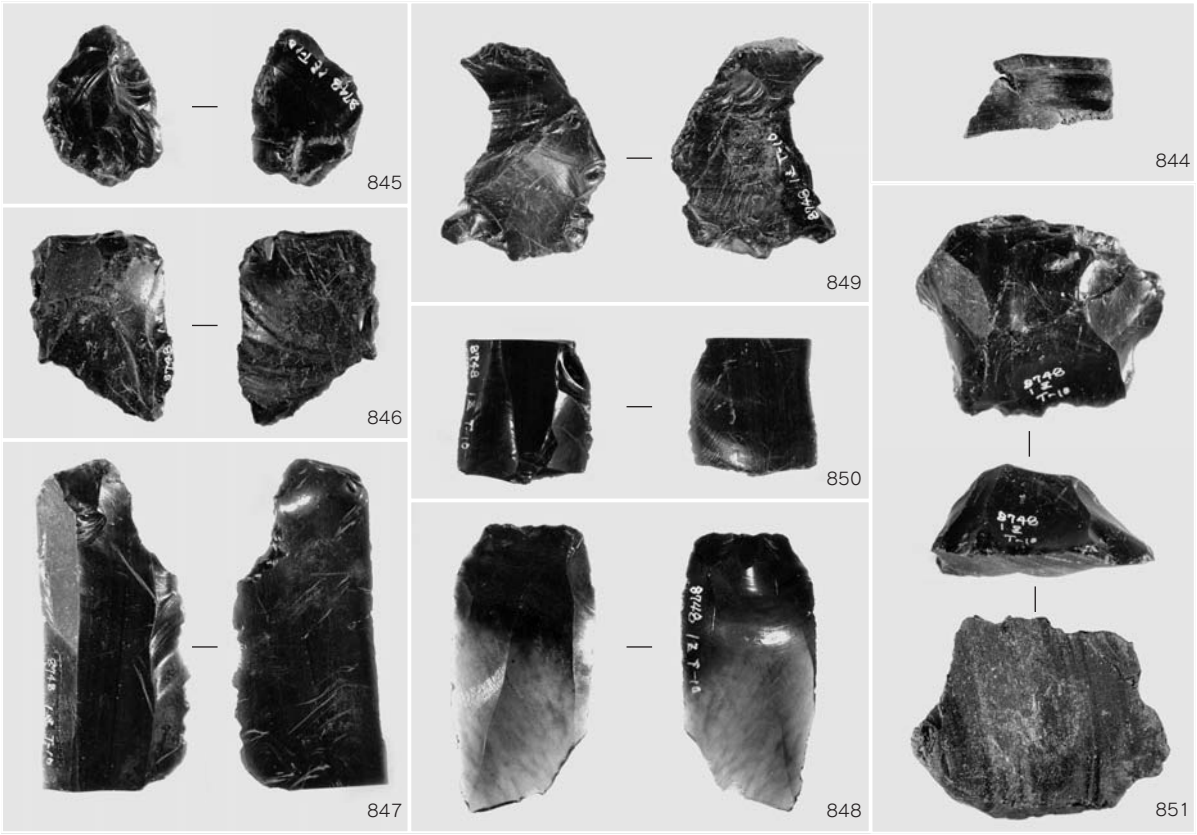


写真105　10号トレンチ出土遺物

11号トレンチ出土遺物（図114、写真106）

11号トレンチはA－1区の最南端に位置している。総量はビニール袋1袋である。853は粗製深鉢で、外面は全面に条痕を施しているが、各方向の条痕が施されている。また条痕には幅の違う2種類の工具が使われている。内面の上部は条痕を施し、下部はヘラ工具によるナデで仕上げている。両面に小豆～大豆大の窪みが無数にある。854は精製土器で、鉢か。わずかに波状を呈すると思われる。口縁部に2条の沈線を施し、両沈線間の下寄りに押点を施している。調整は両面ともていねいなヘラ磨研である。外面は茶色系で、内面は黒色を呈する。855は半精製の深鉢である。外面はかなり雑な磨研に近いナデで、ヘラでなでた跡が段差になっている。内面も同様の調整であるが、外面に比べていねいである。外面にはわずかに煤が付着し、内面は熱のためか一部の器表面が剥落している。856は粗製の深鉢で、器壁が1㎝を越え厚い。両面とも貝殻条痕を施しているが、内面口縁部近くはナデ消している。小さな窪みはまったく見られない。857は不純物を多く含む漆黒黒曜石製。横長剥片の左側縁と下縁に加工を施している。下縁には使用痕も認められ、左側縁のエッジ部は潰れた部分がある。858はやや白色がかった黒色黒曜石製の縦長剥片である。両縁な刃こぼれが認められる。859は玄武岩製。横長剥片を素材としている。全体に風化が激しい。表面中央部分は原石面の可能性がある。左図の下端左側のカーブが生きていれば、刃部近くの厚みが大きく、上下反対の可能性もあるが、図の上端部は交互剥離を成さず、先端部も鋭くないため頭部としたが、使用による摩滅によって刃が鈍化している可能性もある。小形の打製石斧と考えられるが、未製品の可能性もある。860は安山岩製で、扁平な川原石の両側を敲いて窪ませている。わずかに緊縛痕らしきものが確認できる。石錘であろう。

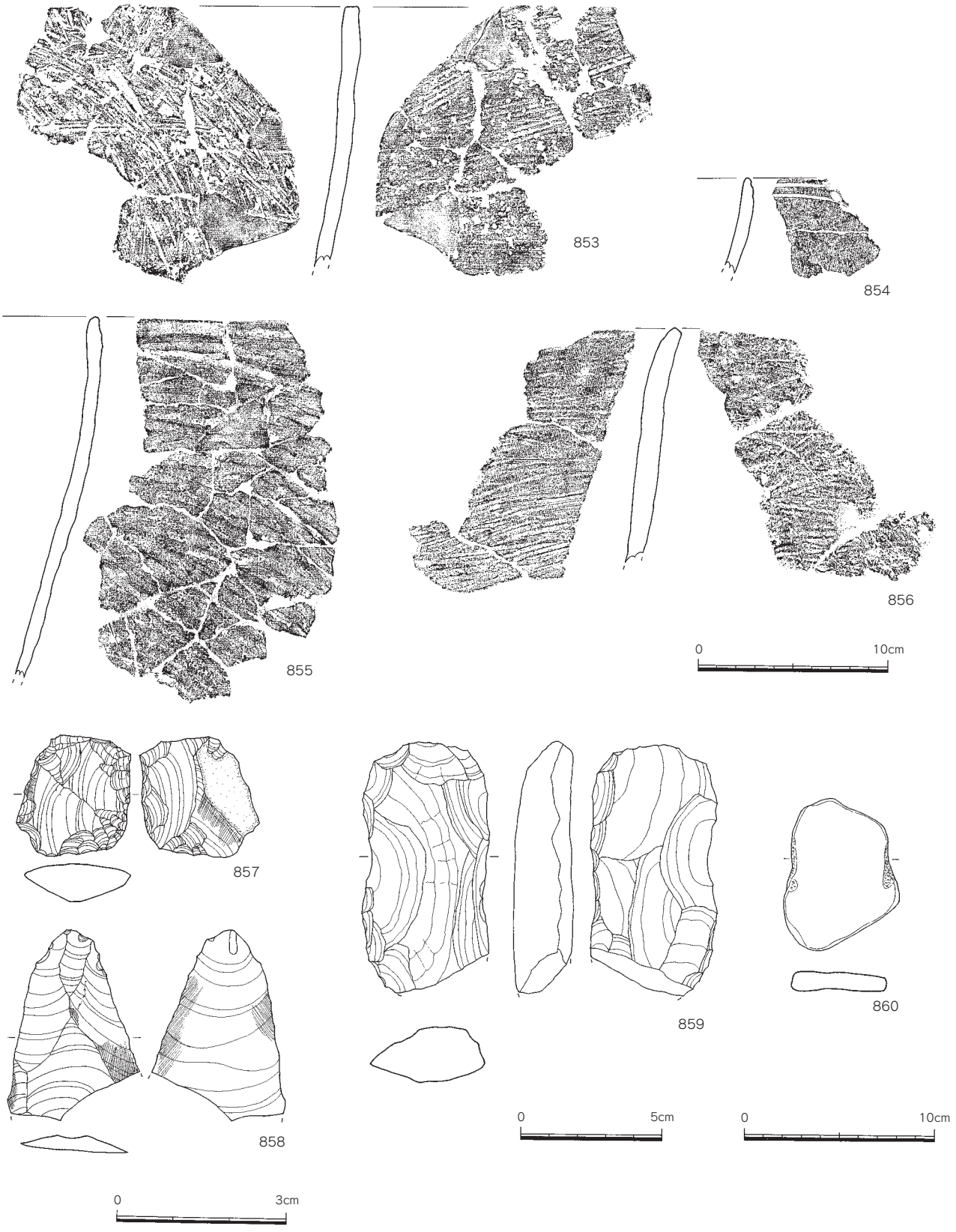


図114　11号トレンチ出土遺物図（1/1・1/2・1/3）

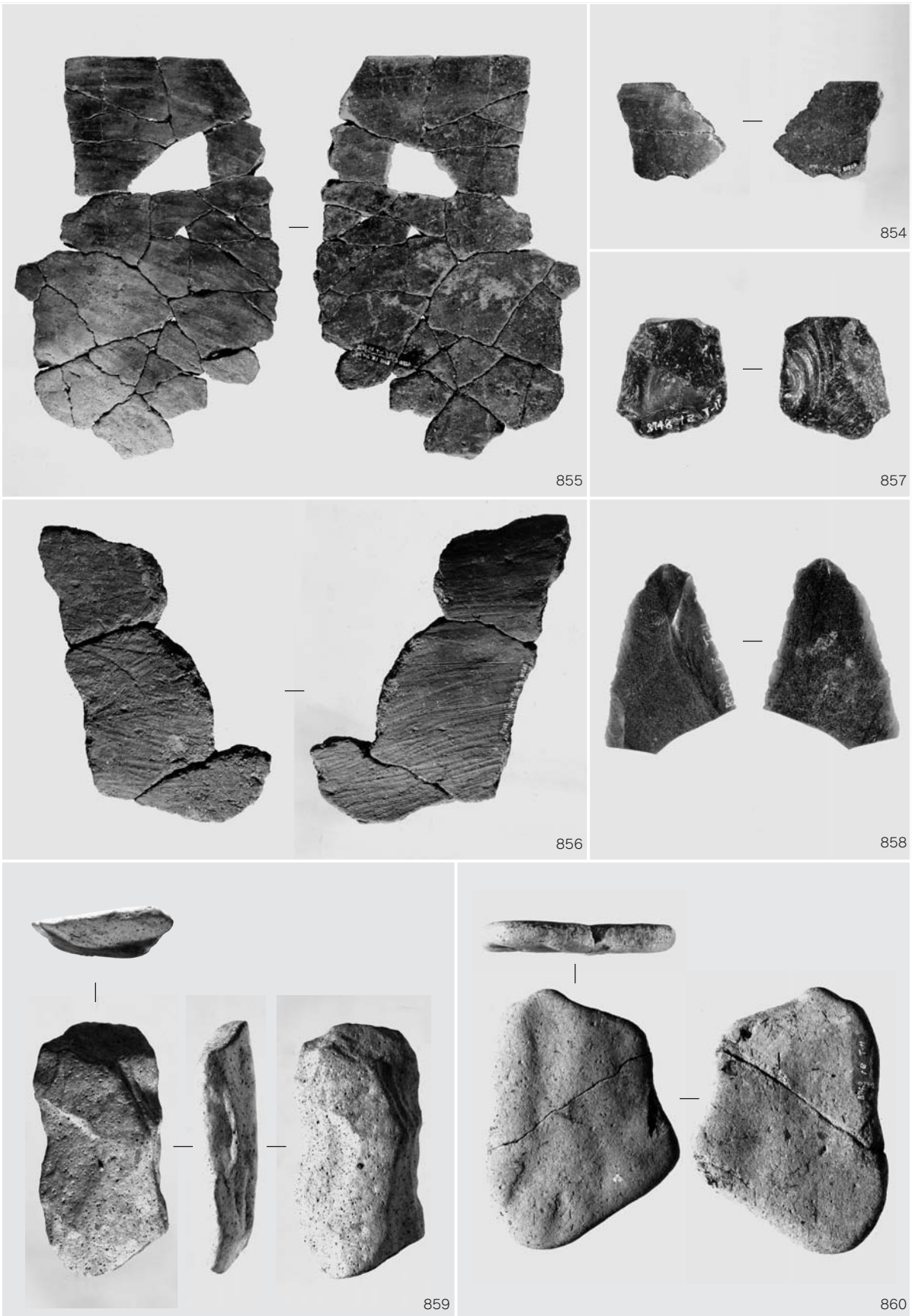


写真106　11号トレンチ出土遺物

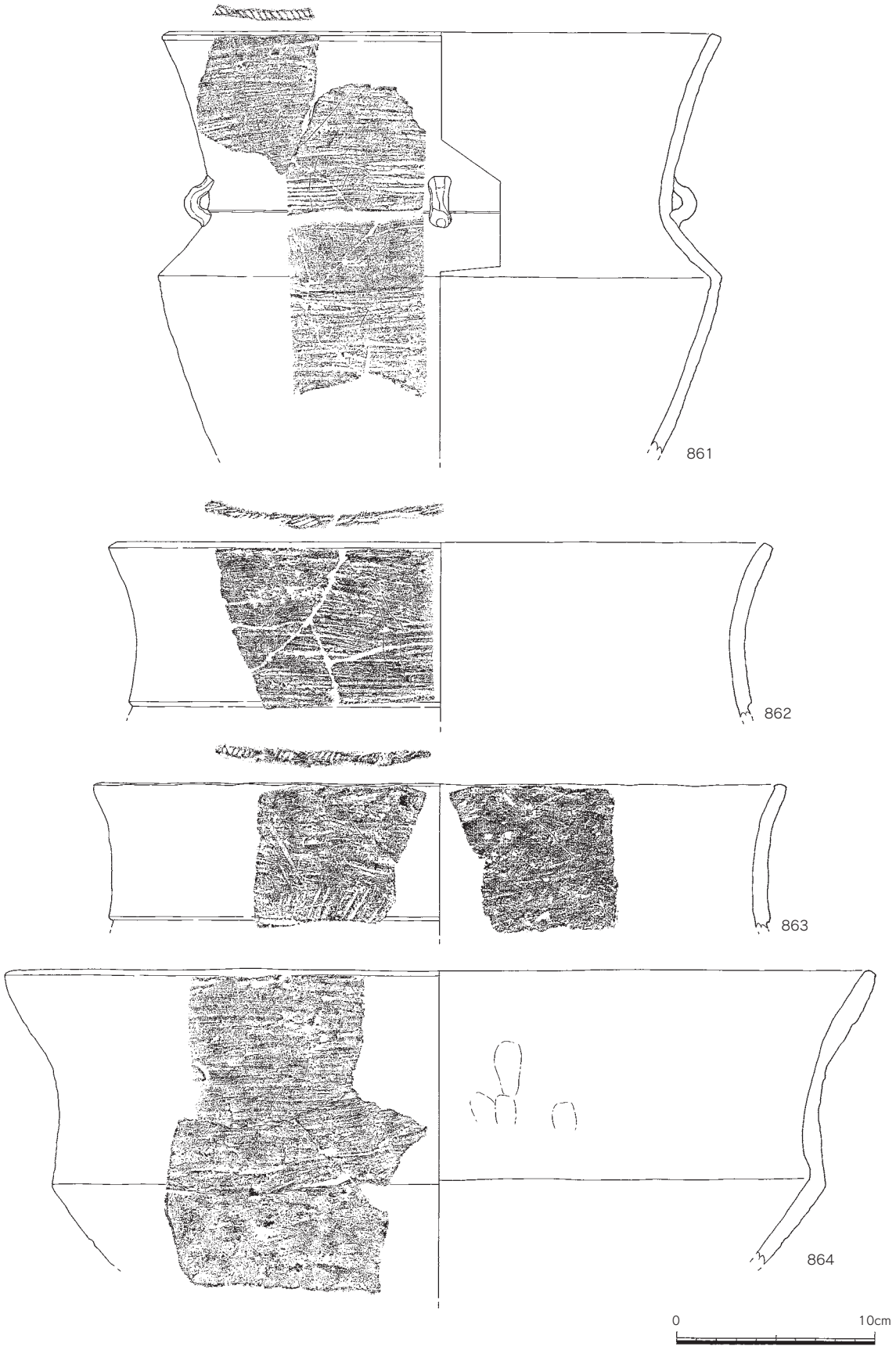


図115　14号トレンチ出土遺物図 1（1/3）

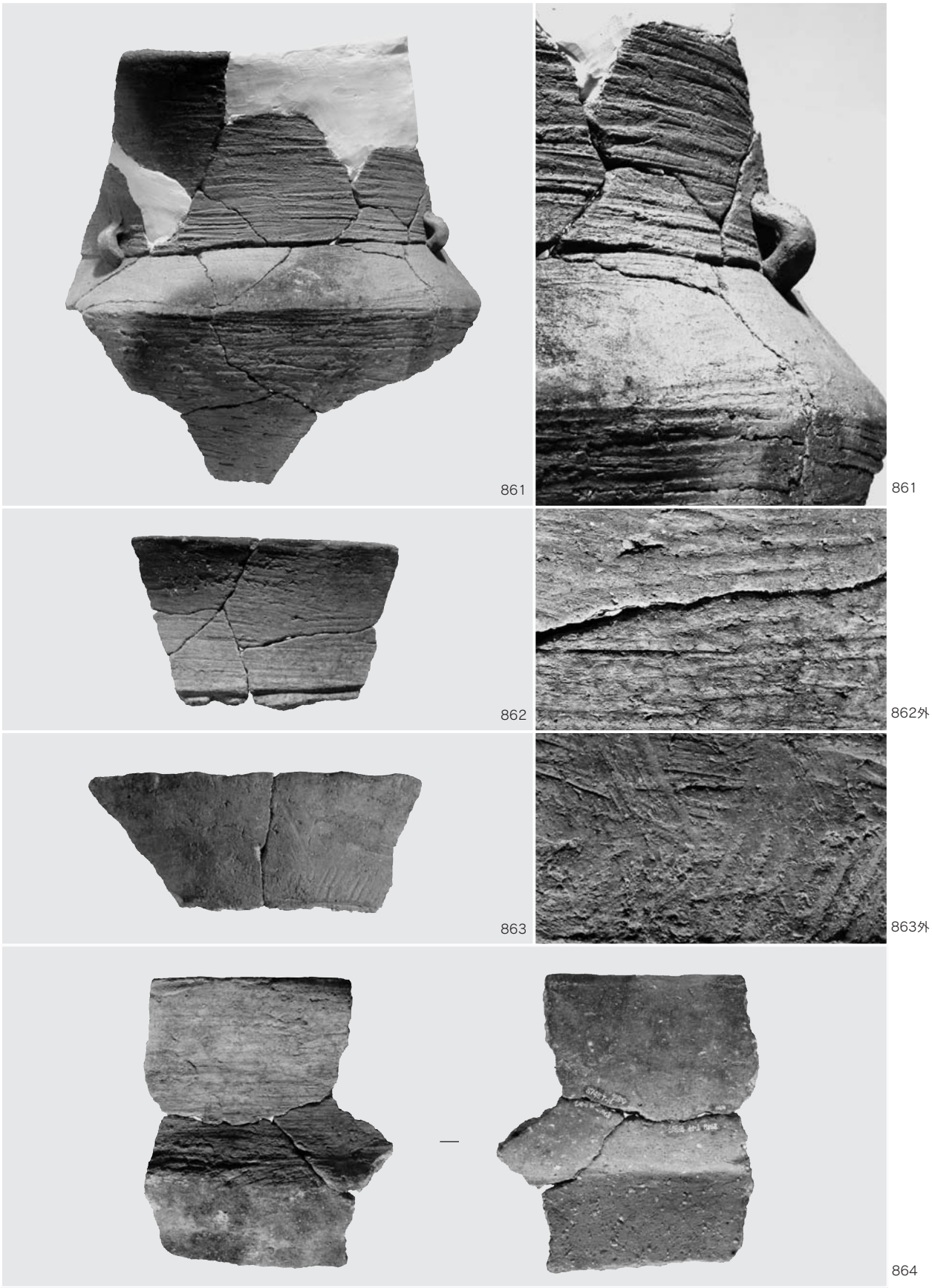


写真107　14号トレンチ出土遺物 1

14号トレンチ出土遺物（図114～119、写真106～111）

14号トレンチはA－1区の南、B－1区の最北端に位置する。コンテナ1箱が出土し、A－1区以外では最も多く出土した。861は口径28.2㎝を測る粗製の深鉢であるが、四耳壺のような形態をしている。図の1／3近くが遺存している。把手は平坦なもので4ヶ所に付く。口縁部外面と胴部は横方向の貝殻条痕を施し、頸部屈曲部から胴部屈曲部の間は貝殻条痕をナデ消している。内面口縁部は横方向のナデ（指ナデか）、頸部から胴部はヘラによるケズリ気味のナデである。肩部の一部に煤状のものが付着している。胎土には大小の砂粒を多く含み粗いが焼成は良い。862は粗製深鉢で口径33.5㎝を測る。外面は貝殻条痕を施し、内面はていねいなナデ仕上げである。口唇部に短沈線状の刻目を施しているが、遺存部のうち半分は斜めに、半分は横方向に施している。胎土には大粒の砂粒を多く含んでいる。両面に小豆大の窪みが多い。863は口径34.9㎝を測る粗製深鉢である。外面は横方向の

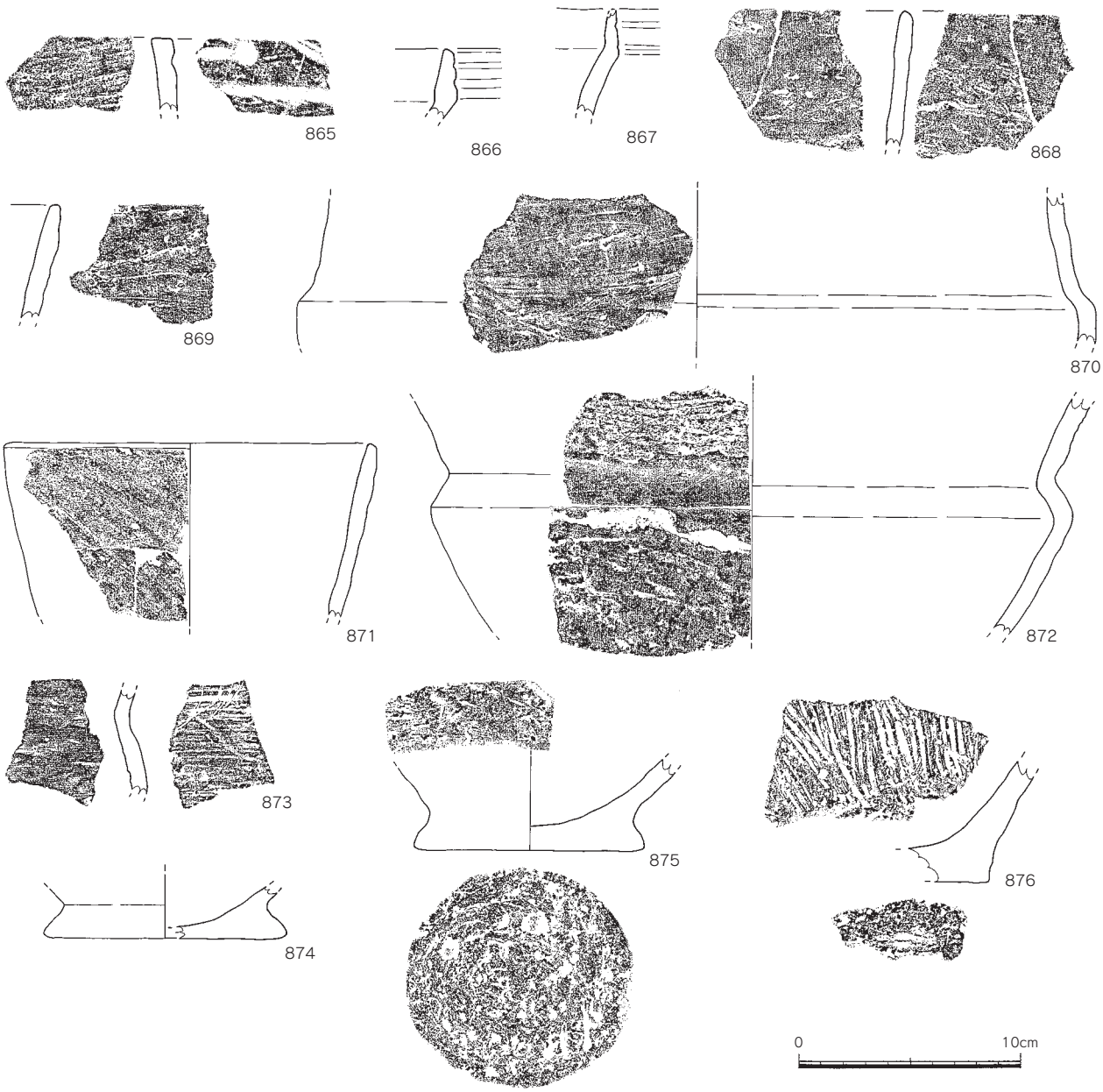


図116　14号トレンチ出土遺物図 2（1/3）

条痕を施した後、粗くナデ仕上げを施しているが、頸部近くの一部のみナデの後に縦方向に短く貝殻条痕を施している。内面はヘラによるナデ仕上げであるが、わずかに条痕らしきものも確認できる。口唇部はやや複雑である。大きく3つにわけられる。口唇部をヘラで平坦にして斜めに刻目を施した部分、同じく平坦にはしているが、刻目を施していない部分、口唇部を尖らせて内や外に引いて倒している部分の3つである。864は口径43.9㎝を測る粗製深鉢で861の器形に近い。調整は口縁部から胴部屈曲部外面が貝殻条痕、胴部外面がナデ仕上げで、内面はナデ仕上げである。胎土には大粒の砂粒を多く含み粗く、焼成も良くない。胴部屈曲部から下に煤が付着している。

865は阿高系の小片で、胎土に滑石を含んでいる。凹線文を施す。外面はナデ調整で、内面はケズリ気味のナデ調整である。866は半精製の深鉢で、口縁部に沈線を2条施している。両面ナデ仕上げ

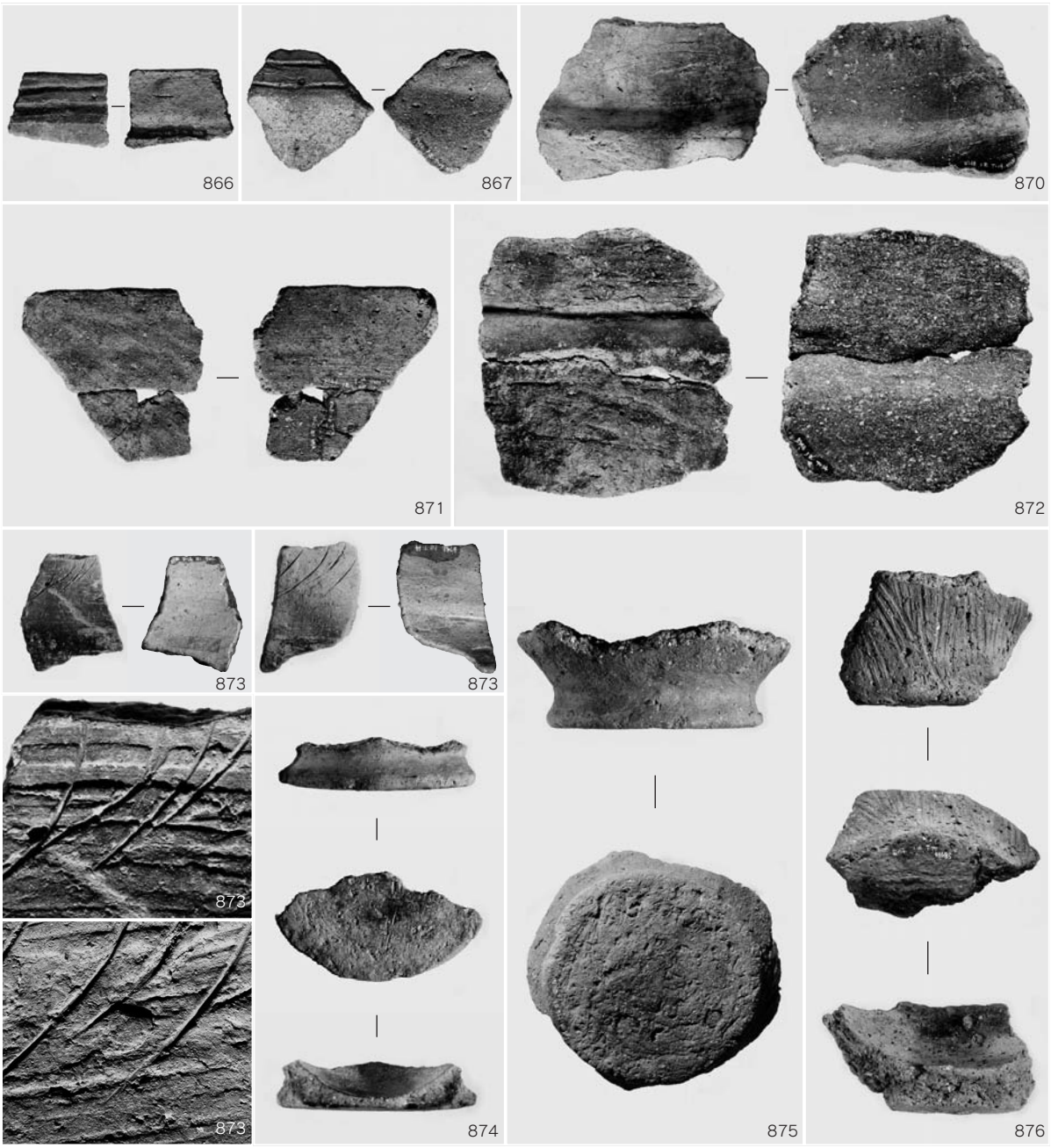


写真108　14号トレンチ出土遺物 2

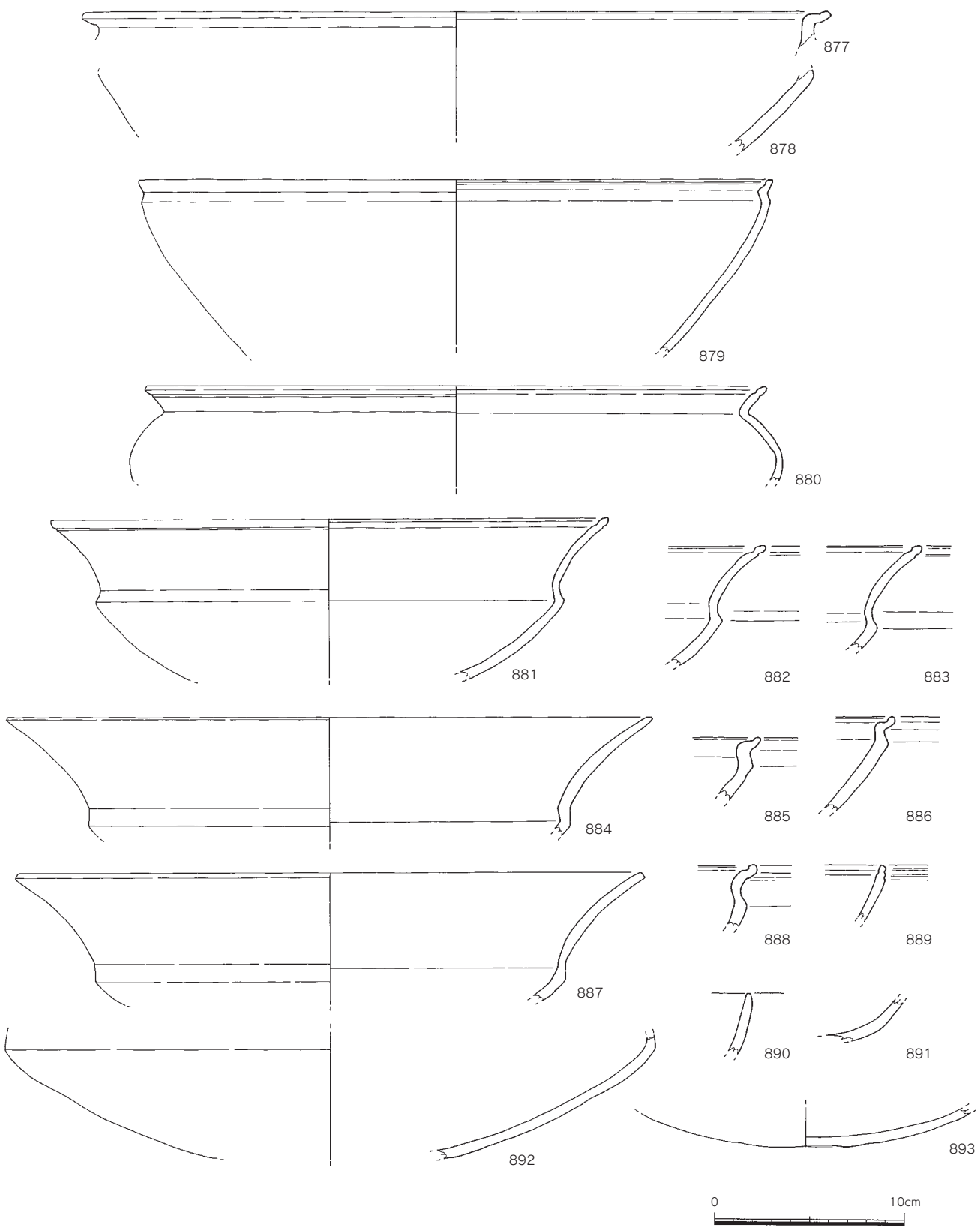


図117　14号トレンチ出土遺物図 3（1/3）

であるが、外面には条痕が施されていた可能性がある。867は粗製の深鉢で、口縁部に沈線を2条施している。両面ともナデ仕上げである。色調は白味が強い。868は粗製深鉢で、外面は条痕を施した後にナデか。内面はナデ仕上げである。869は白味が強い色調の粗製深鉢である。外面は口縁部がナデ、その下がヘラ状工具によるケズリ気味のナデで、内面はナデ仕上げを施している。870は粗製深鉢で、外面はヘラによるナデか。条痕らしき線も確認できる。内面はナデ仕上げで被熱のため黒変している。871は口径16.8㎝を測る小型の粗製深鉢である。外面は指によるケズリ気味のナデ調整で、内面は指によるヨコナデと思われる。外面には煤がかすかに付着している。872は粗製深鉢で、胴部屈曲部に煤が厚く付着している。調整は外面口縁部が貝殻条痕、肩部がナデ仕上げ、胴部が条痕の後

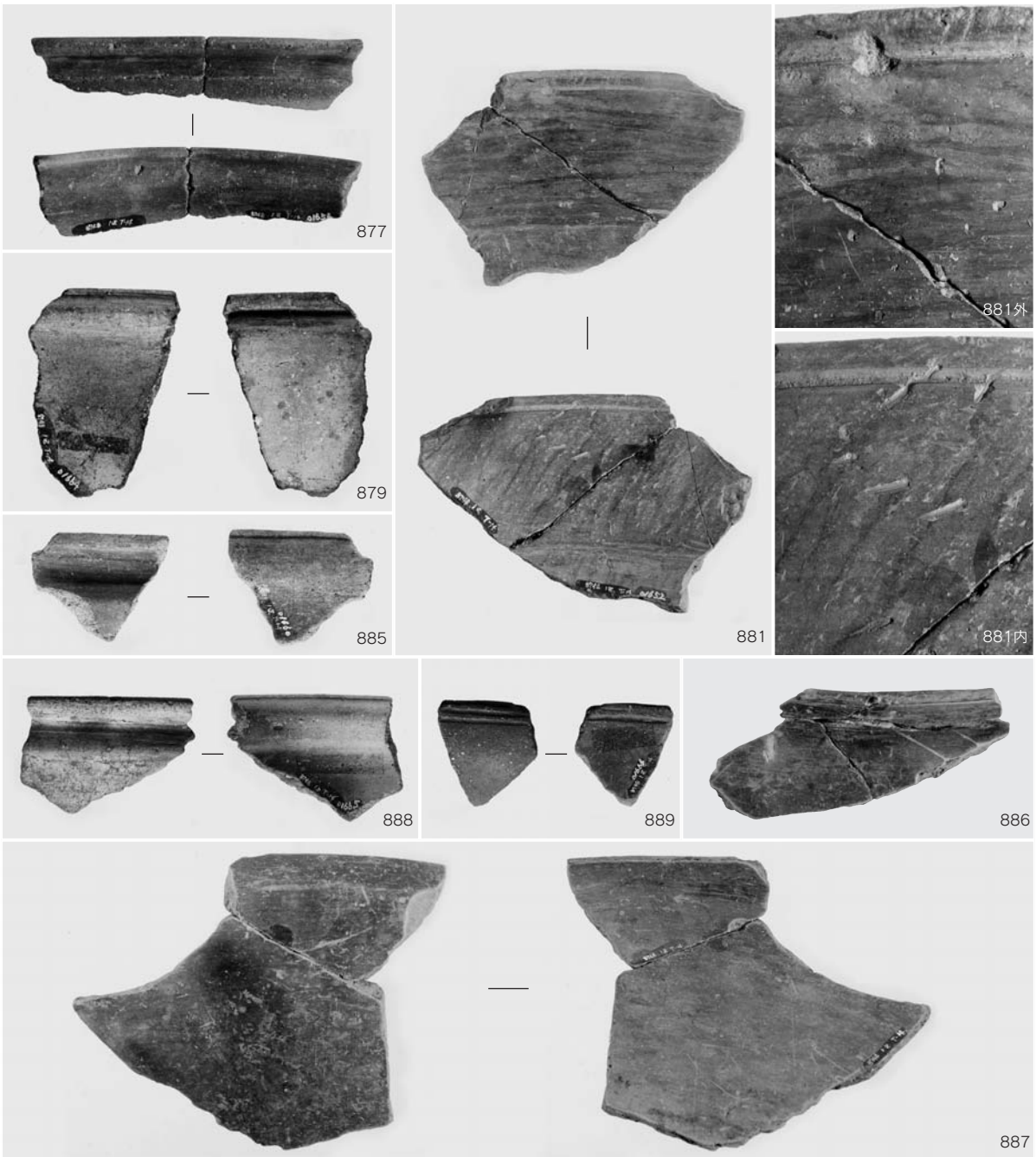


写真109　14号トレンチ出土遺物 3

ナデ仕上げである。内面は全面ナデ仕上げである。大粒の砂粒を大量に含み非常に胎土が粗い。873は半精製の深鉢で屈曲する胴部片である。外面に条痕を施した後、鋭利な工具で斜めに払うような沈線を連続して施している。内面は白味が強い色調で、ていねいになでている。同一個体の破片がもう1片ある。874は粗製深鉢の底部で、調整はほぼ全面ナデ仕上げを施している。875は底径10.3㎝を測る粗製深鉢の底部である。胴部外面は板状工具または指によるナデ仕上げ、内面はていねいなナデ調整である。外底部には爪を押しつけたような形状の圧痕が無数に付いている。何の圧痕かわからない。内底部からやや上がった遺存部の最上部に焦げ状のものがわずかに付着している。876は粗製深鉢の底部で、外面及び外底部には条痕を施している。内面はナデ仕上げである。外面の色調は赤い。両面に小豆から大豆大の窪みが多くある。

877～893は浅鉢である。877は口径39.7㎝を測る精製の浅鉢である。両面ともていねいなヘラ磨研を施している。口縁部直下に煤状のものが付着した痕跡があるが明瞭ではない。878も精製で両面ともヘラ磨研を施すが、外面はやや粗く施している。879は口径35.4㎝をはかる精製土器で、両面にていねいな磨研を施している。880は肩の強く張る器形で口径32.7㎝を測る。両面ヘラ磨研である。881と883は同一個体の可能性がある。両面ていねいなヘラ磨研でやや灰色がかった色調である。882も同種の浅鉢で、内面からサンショウ類の圧痕が発見されている。884も同じような器径であるが、口縁部に沈線を持たない。885は両面ていねいなヘラナデを施している。886は淡い褐色を呈しているが、口縁部直下に黒色の付着が若干確認できる。煤の可能性もあるが、本来黒色顔料で着色していたのではないかとも思われるが、遺存部が少なく明瞭ではない。887は884とほぼ同様の器形。887とは若干細部が異なっているが同一個体の可能性もある。888は外面口縁部の沈線が通常よりやや下にある。889は無頸の土器で鉢であろうか。両面ともていねいにナデ仕上げを行っている。かなり砂質の土器で、他と胎土が異なっている。890は鉢か。両面ナデで仕上げる。891～893は底部付近で、いわゆる黒色磨研土器である。

894以降は石器である。894は安山岩製の打製石鏃である。石材中に黒曜石の破片のような石を1点含んでいる。押圧剥離はやや粗い。895は不純物をわずかに含む半透明の黒色黒曜石製。縦長剥片で打面は自然面である。打点・バルブが残存する。両側縁に極めて微細な刃こぼれが認められる。896は不純物が多いやや半透明の黒色黒曜石製。打面と主要剥離面下部の一部に自然面が残っている。表面の下端（自然面の反対面）に細かな調整を施している。主要剥離面側には全体に長くて細い押圧剥離を施しているが、全体の形を整えたものか。897は良質な漆黒黒曜石製。横長剥片を素材とする。打面は自然面で、打点とバルブが残存している。表面には主要剥離面の剥離方向と平行に左右2方向より長い剥離が3つ施されている。この剥片を取る前の縦長剥片の痕跡かとも考えたが、残っている自然面から考えられる原石の形態や剥離の大きさから、この剥片の厚さを調整したものであろう。主要剥離面側は両縁辺に細かな調整を施している。両縁辺の刃は潰れ状になっている。898はわずかに曇った黒色黒曜石製。横長剥辺を素材とする。打面・打点・バルブは剥ぎ取られている。両面両側縁に、両側からの剥離痕が見られ、刃は潰れた状態になっている。先端が折損しているため明確ではないが、くさび形石器としていいと思われる。899は漆黒黒曜石製で、長さの短い縦長剥片。主要剥離面にはバルブが残る。左側縁に使用痕と思われる細かな刃こぼれが認められる。右側縁にある細かな連続する剥離は二次加工か。900は不純物をわずかに含む漆黒黒曜石製。縦長剥片。上端の打面は自然面。表面にも自然面が残る。また主要剥離面にはバルブが残っている表面の右側縁には細かい刃こぼれが認められ、一部は潰れている。左側縁は自然面部分に細かな二次調整を施しており、ここもエッジが潰れた状態になっている。911は良質な漆黒黒曜石製。表面はほぼ全面自然面で、原石面か

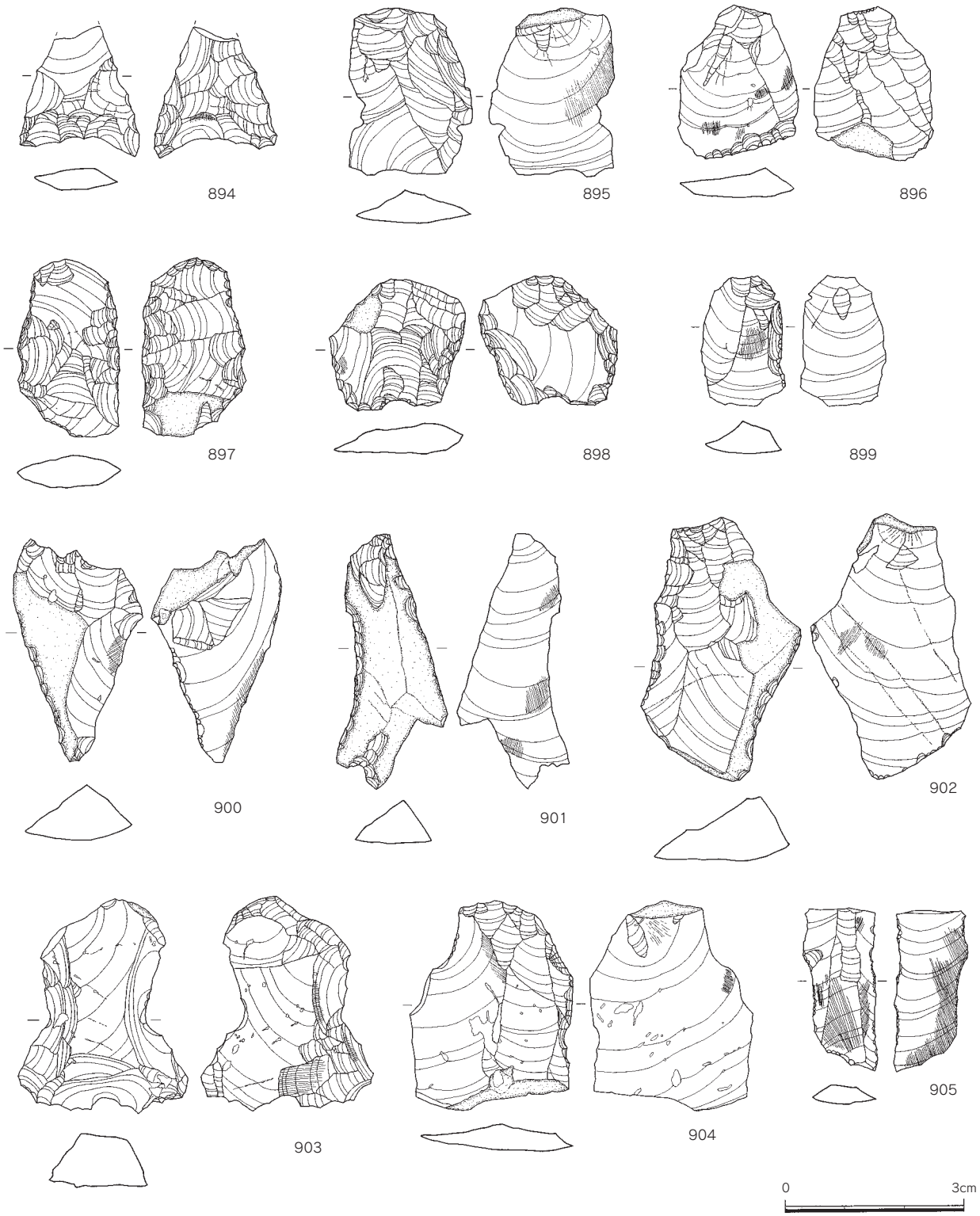


図118　14号トレンチ出土遺物図 4（1/1）

ら最初に剥ぎ取った縦長剥片である。湾曲した左側縁には全辺に二次調整を施し、右側縁はエッジが使用のためか潰れた状態になっている。902はやや不純物がある漆黒黒曜石製。縦長剥片で、主要剥離面にはバルブが残っている。表面左側縁全辺には細かな二次調整が施されている。右側縁下部にも自然面の上に調整が施され、こちら側はエッジが潰れた状態を呈し、反対面に使用の伴うと考えられるフィッシャーが入っている。903は不純物がかなり多い漆黒黒曜石製。かなり厚みのある不定形剥片。主要剥離面側から表面に向かって左右と下の3方向から、ノッチ状に剥離を施しているが、目的が分からない。904は不純物が多いやや半透明の黒色黒曜石製。縦長剥片の表面左側辺に使用痕と思われる細かな刃こぼれが見られる。右側縁にある細かな連続する微細剥離は調整か主要剥離面には打面、バルブが残る。表面下部に原石面がわずかに残り、その部分に自然による径3㎜程度の穴が開いている。905は半透明の黒色黒曜石製。縦長剥片を素材とし、縁辺に使用に伴う微細剥離とフィッシャー

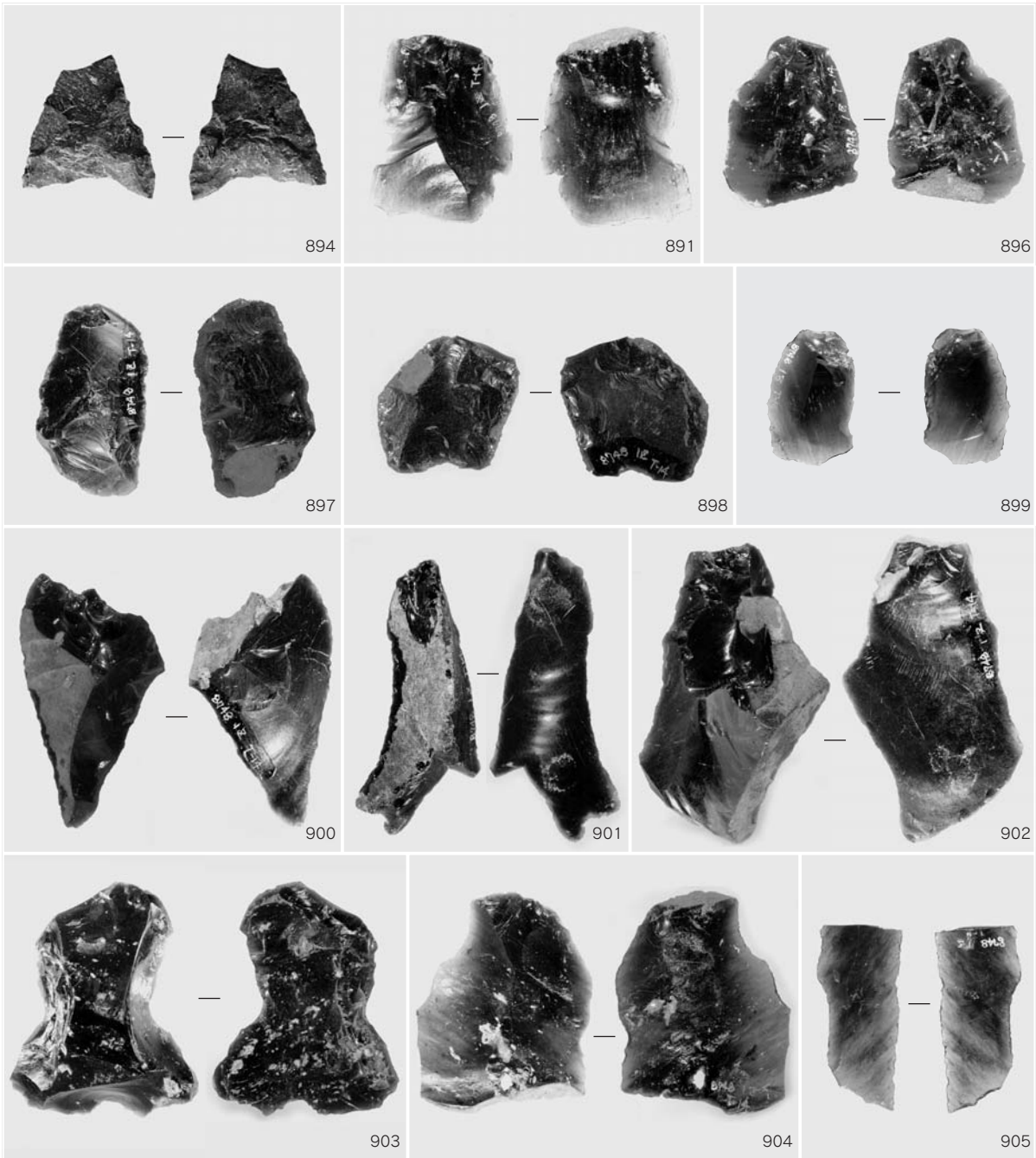


写真110　14号トレンチ出土遺物 4

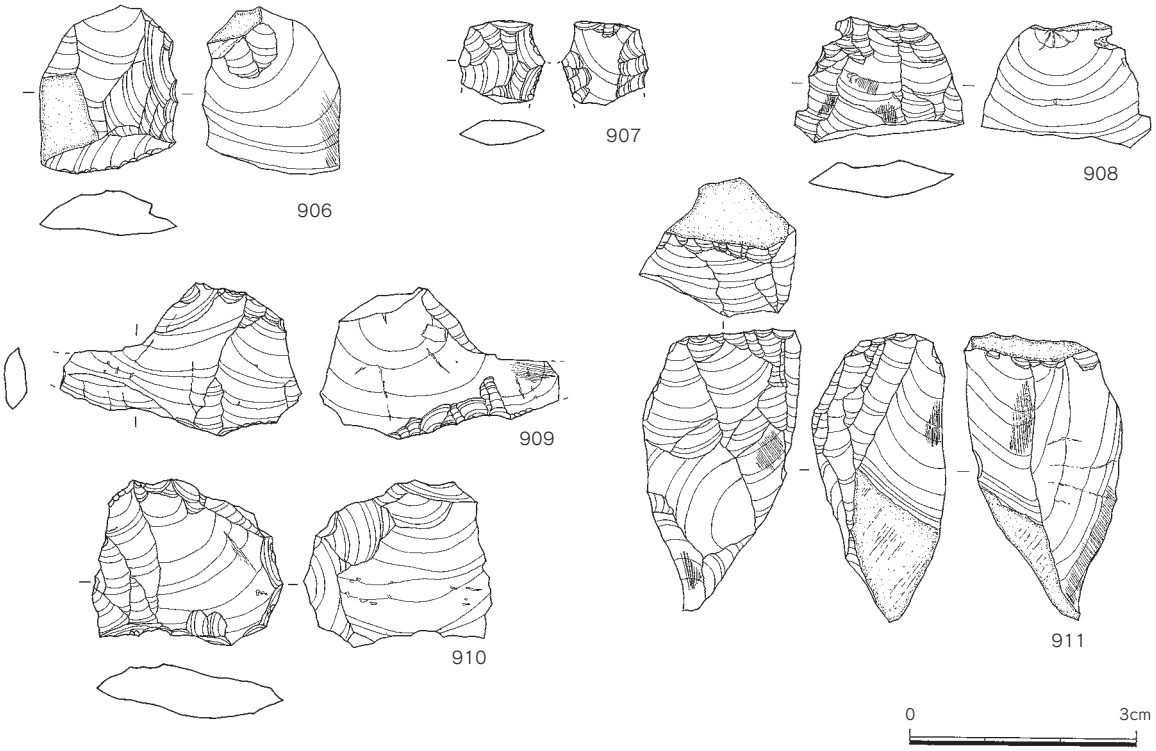


図119　14号トレンチ出土遺物図 5（1/1）

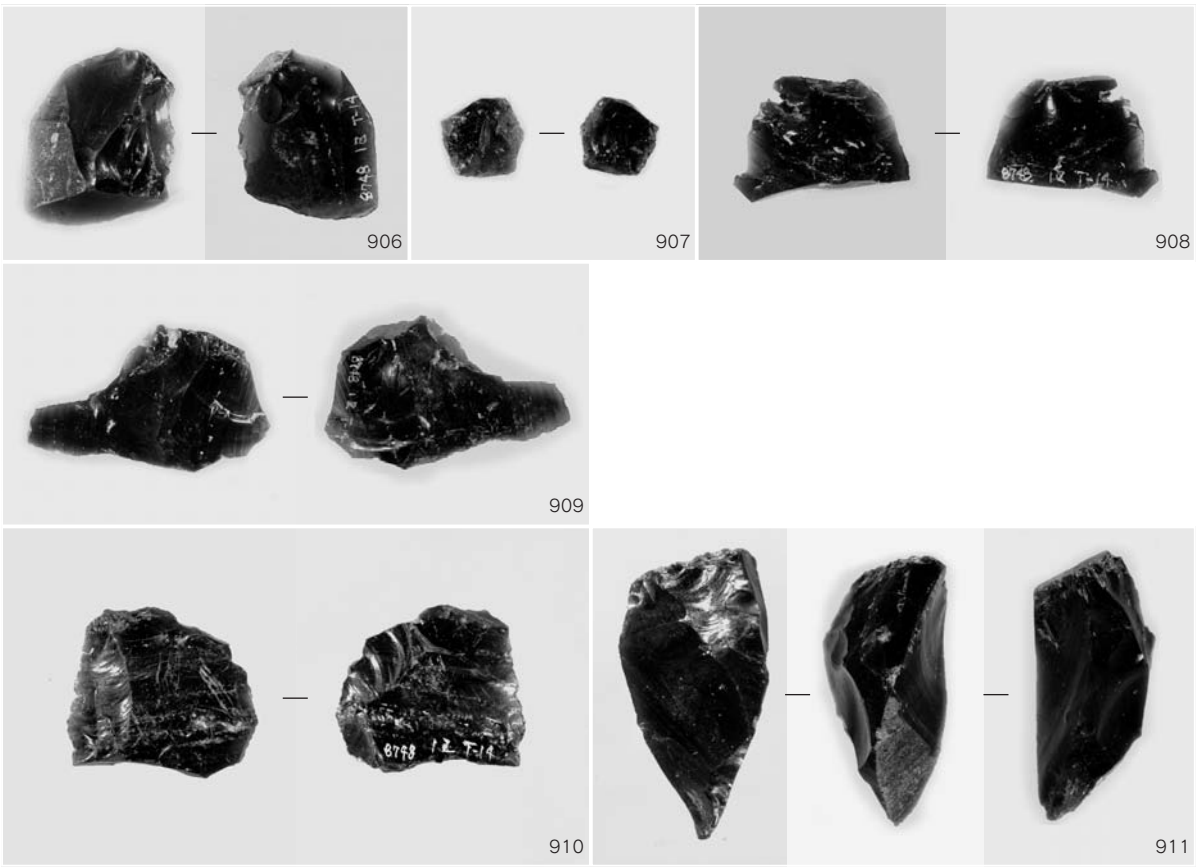


写真111　14号トレンチ出土遺物 5

が認められる。フィッシャーの付く面が左右で異なり、使用時にともに打面側に引いて使用したものと思われる。打面側は意識的に切断したものか。

906は半透明の黒色黒曜石製。打面とは反対側縁辺に、細かな刃こぼれが認められる。主要剥離面にはバルブが残り、打面も残っている。907は不純物を含むやや半透明の黒色黒曜石製の縦長剥片を素材とする。一部を折損する。左右両側縁は潰れた状態で、両方からの細かな剥離痕が見られる。かなり小さいが、くさび形石器か。908は不純物がやや多くわずかに半透明の黒色黒曜石製。片面の打面側縁辺に細かな剥離(階段状)が見られる。剥片の下端部を切損している。主要剥離面にはバルブが残る。909は不純物が多いやや半透明の漆黒黒曜石製。横長剥片で打面が残る。主要剥離面打面の反対側縁辺に細かな連続する加工を施し、その部分が使用のためかエッジが潰れた状態になっている。主要剥離面にはバルブが残る。910は不純物がかなり多い漆黒黒曜石製。厚い不定形剥片で、両面縁辺に粗い剥離調整を施す。左側辺に細かな刃こぼれが認められる。下面は折り取った上に細かい剥離痕が見られるが使用によるものか。打面はわずかに残っているが、バルブはカットしている。911は不純物をわずかに含む漆黒黒曜石製の石核。2面は原石面を打面とした方向から剥離がなされているが、残りの1面は複数の方向から剥離されている。

17号トレンチ出土遺物（図120、写真112）

17号トレンチは3B区の中央南端に位置している。出土遺物は少ない。912は漆黒黒曜石製である。縦長剥片をほとんどそのまま利用し、縁辺調整のみで打製石鏃を作ったと思われるが、上端部にも加工が施されており、先端部が欠損後、別の目的で再加工したものと考えられる。913は漆黒色黒曜石製。パティナが古い。縦長剥片で、縁辺に使用痕と思われる刃潰れが認められる。914は長さ9.8㎝を測る縦長剥片で、良質で透明感の強い漆黒黒曜石製である。上端部左側縁にノッチ状の剥離を施している。両面の上から下まで全辺に微細な連続する剥離が認められるが、二次調整と使用痕がダブっているようで、区別がつかない。下端は折り取ったものか。主要剥離面にはバルブが残る。915は漆黒黒曜石製。縦長剥片を素材とし、打面側を残して折断した剥片を使用。打面とバルブが残る。左右両縁辺に二次調整を加え、右側縁上部はエッジが潰れた状態を呈している。折り取った部分の両側から抉りは浅く、つまみ部も短い。いわゆるつまみ形石器に似る。（米倉）

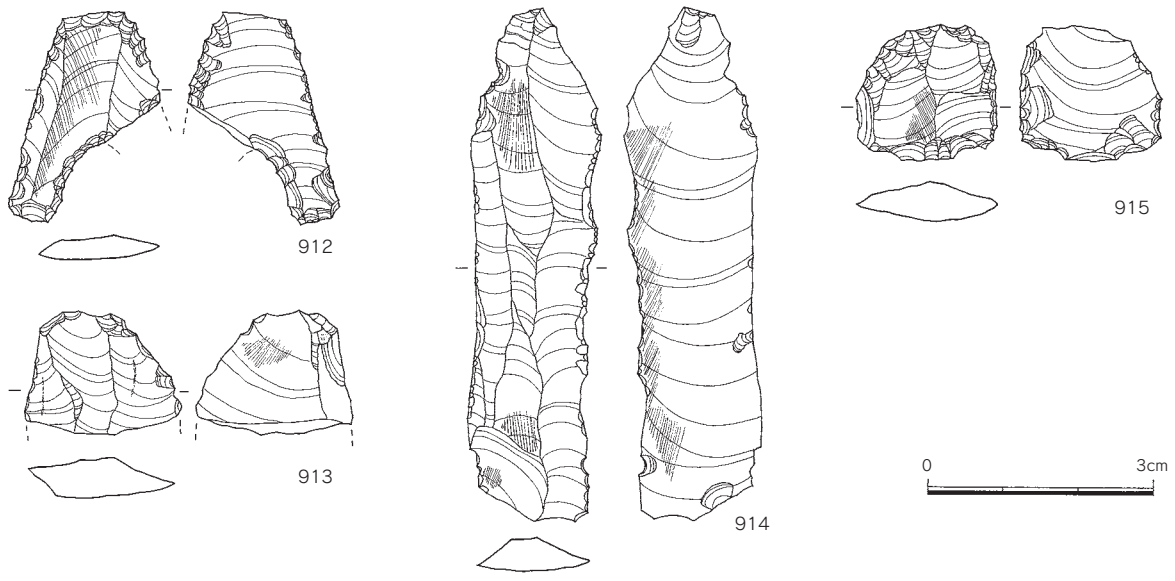


図120　17号トレンチ出土遺物図（1/1）

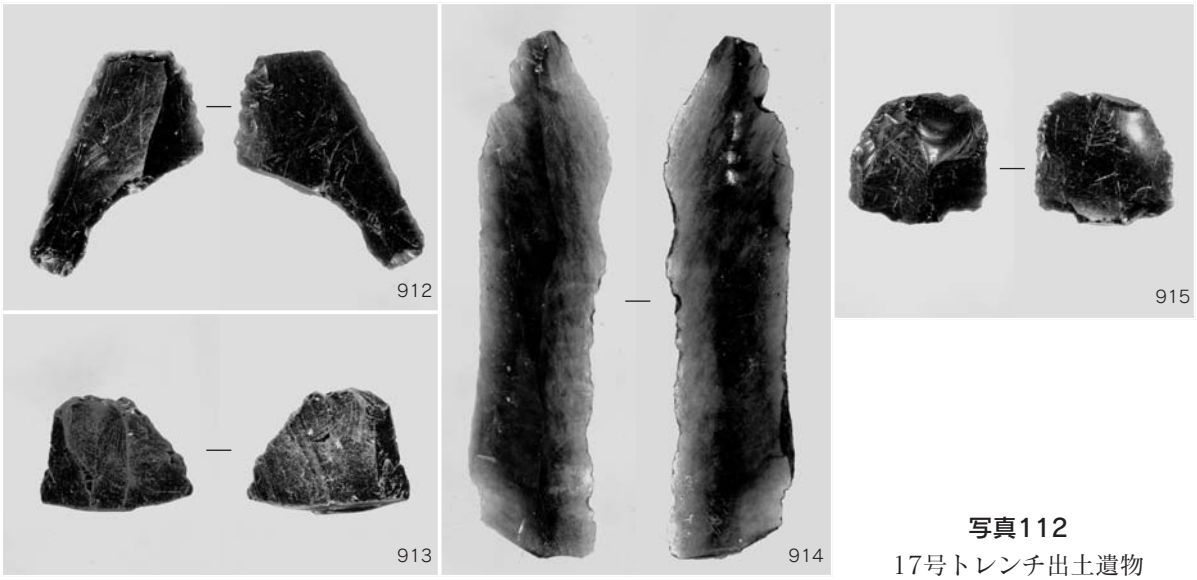


写真112
17号トレンチ出土遺物

7．2・3区の出土遺物（図121～125、写真113～116）

2区3区の弥生時代以降の遺構を主とする調査区では、各遺構の覆土から縄文時代の遺物が出土している。その量はコンテナ2箱近くに及ぶ。以下、出土器種毎に説明する。

916～933は縄文土器である。前期・中期・後期・晩期の各時期の土器が出土しているが、晩期土器がもっとも多い。916は外面に条痕を施した前期の土器である。口唇部には刻目を施し、内面はナデ調整である。917は滑石を多量に含む。外面はやや器面の凹凸がある。口唇部に刻目を施すというよりは、細かい波状口縁に近い。両面ナデ調整である。918も滑石を多量に含んでいる。外面には条痕を施している。口縁部の波状はかなり深い。919も滑石を含む。口縁端部を外につまみ出している。破片下部に太い沈線を2条施している。920も滑石を多量に含む。調整は両面ともナデである。外面には長さ1㎝以上の凹点を大量に施している。921は内湾する口縁部片で、口縁端部に連続する刺突を施し、その下に沈線を施している。両面ナデ調整である。中期の土器。922は内湾する胴部片で、2本の沈線の中のみ縄文を施した磨消縄文土器である。縄文以外の部分はナデ仕上げである。以上はいずれも2区の河川から出土した。

923以降は晩期の土器である。923は口径27.9㎝を測る粗製深鉢である。外面には斜め方向に条線が所々にあり、その上からナデが施されている。条痕であろう。内面はていねいにナデが施されているが、口縁端横方向の条線が残る。こちらはナデに伴うものか。胎土には大粒の砂粒を多く含む。924は全体の1／3程が遺存している。底部はほぼ丸底である。外面は磨研に近い縦方向のヘラナデで、内面は横方向のヘラ磨研である。煤等の付着は見られないが、外面の口縁部のみ摩滅のためざらざらしている。何かの使用痕跡である。色調は黒系の色である。925は精製の鉢で、両面黒色を呈し、ヘラ磨研を施している。926も両面黒色系の色調で、ヘラ磨研を施した、精製の浅鉢である。927は外面が口縁部付近のみ黒色を呈している。他は褐色である。内面は黒色を呈している。両面ともていねいなヘラナデを施している。928は砂質の胎土で、両面ヘラナデを施している。929は両面ともていねいなヘラ磨研を施している。部分的に黒色を呈するが、全体として褐色を呈する。930は浅鉢では珍しく粗製と言ってもいい胎土である。調整もあまりていねいではないナデである。わずかに波状を呈する可能性がある。931は粗製深鉢の底部である。胎土にかなり多くの砂粒を含んでい

る。外底部に煤状のものが付着し、圧痕状の窪みが認められる。932は半精製深鉢か。外底部に長さ3㎝前後、1条の幅3㎜前後で数本が1単位のようになった圧痕がついている。他にも小さな種子状の圧痕も見受けられる。933は大型の粗製深鉢の底部で、外面は橙色系の色調である。外底部には種子状の圧痕がある。934は有孔土製品である。復元径約5㎝を測る。全面ナデで仕上げている。

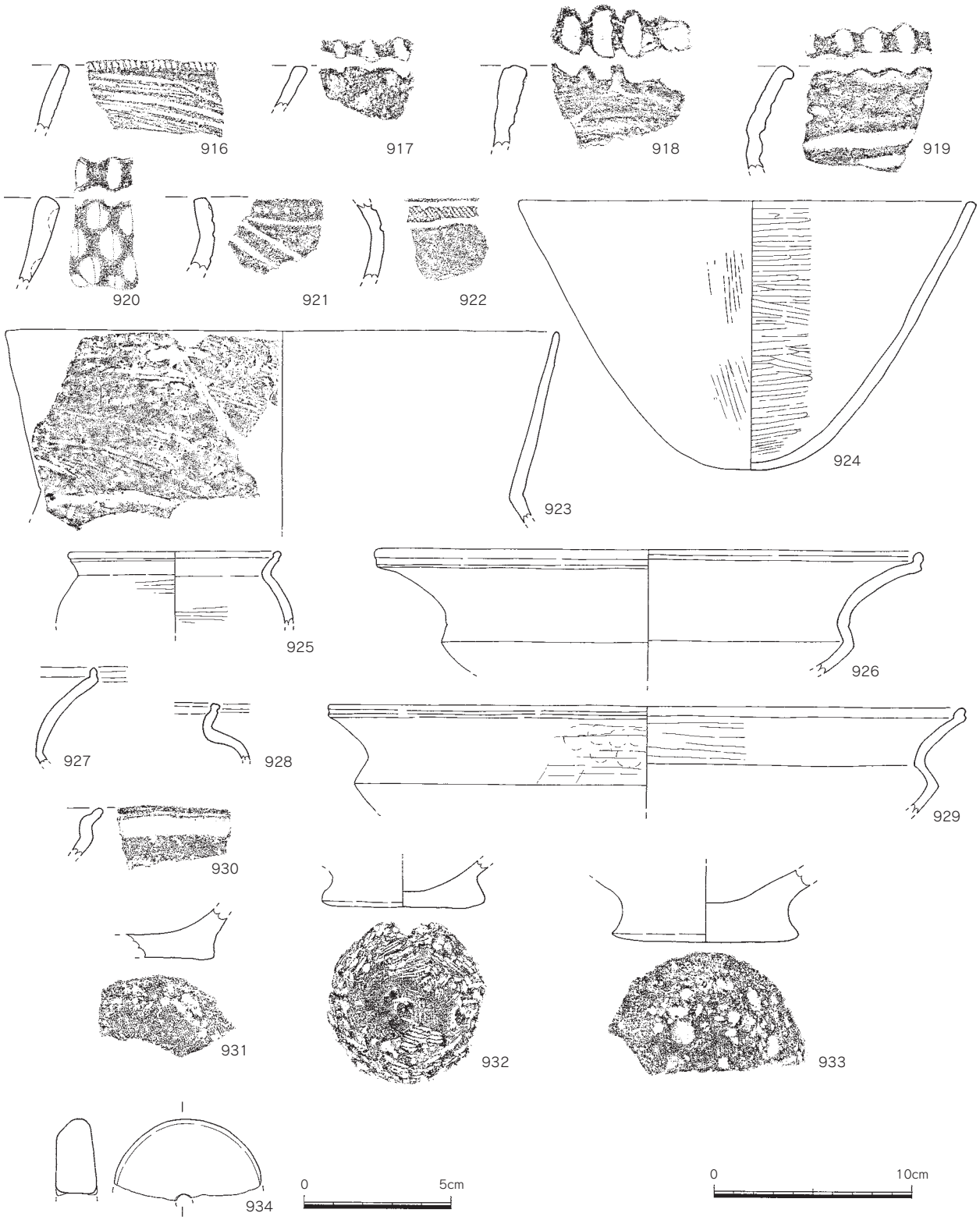


図121　2・3区の出土遺物図 1（土器・土製品）（1/2・1/3）

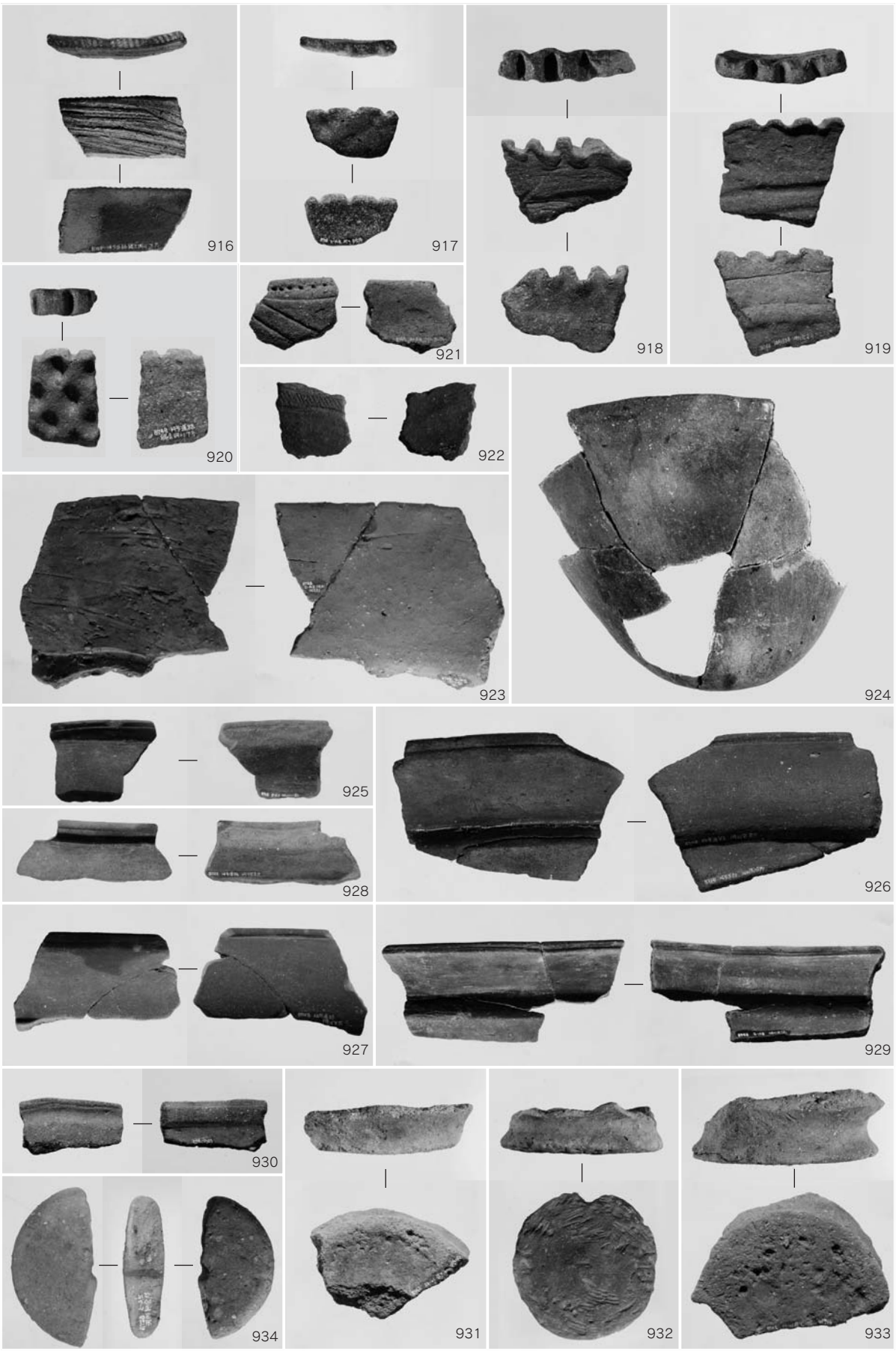


写真113　2・3区出土遺物 1

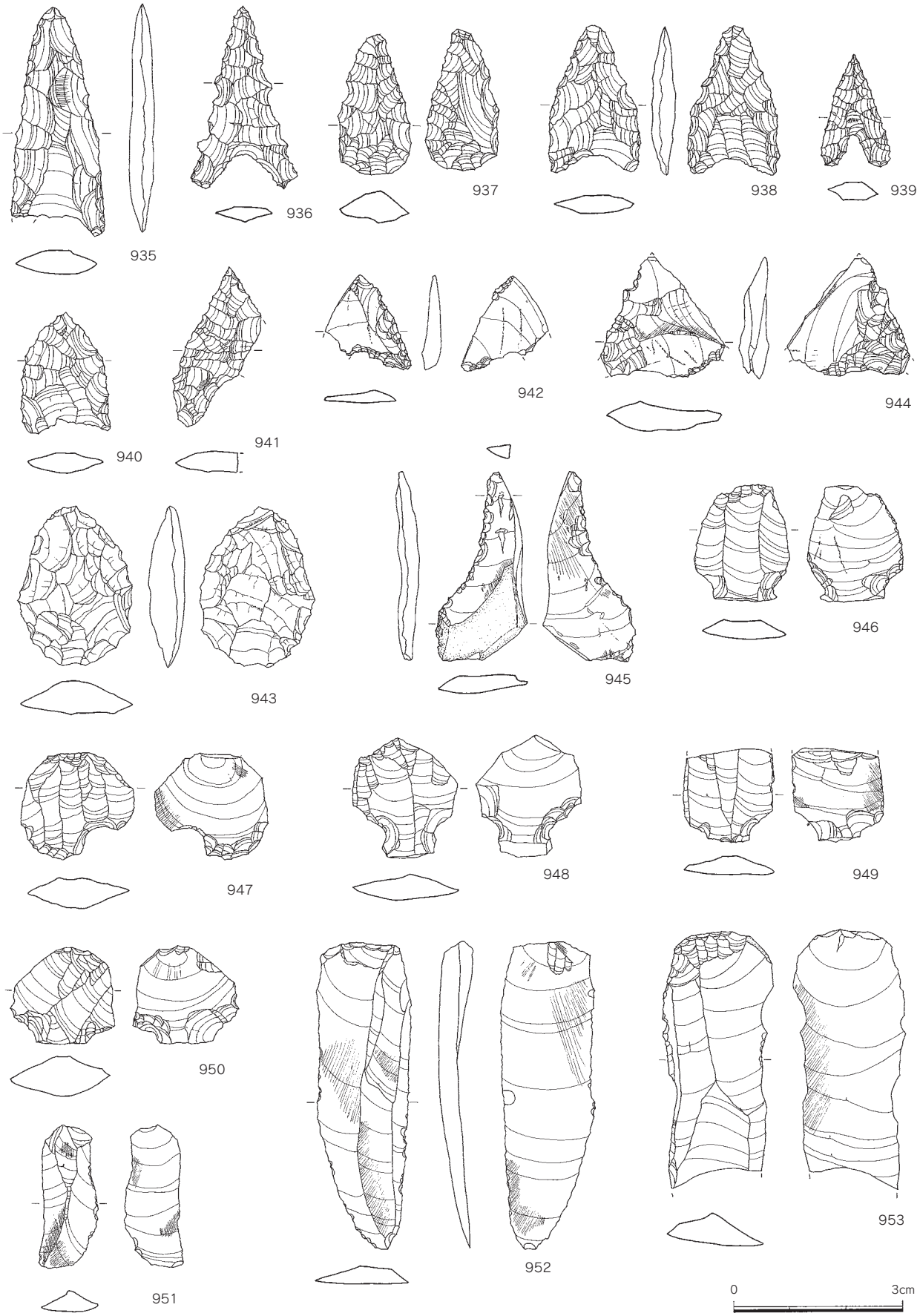


図122　2・3区の出土遺物図 2（石鏃・つまみ形石器他）（1/1）

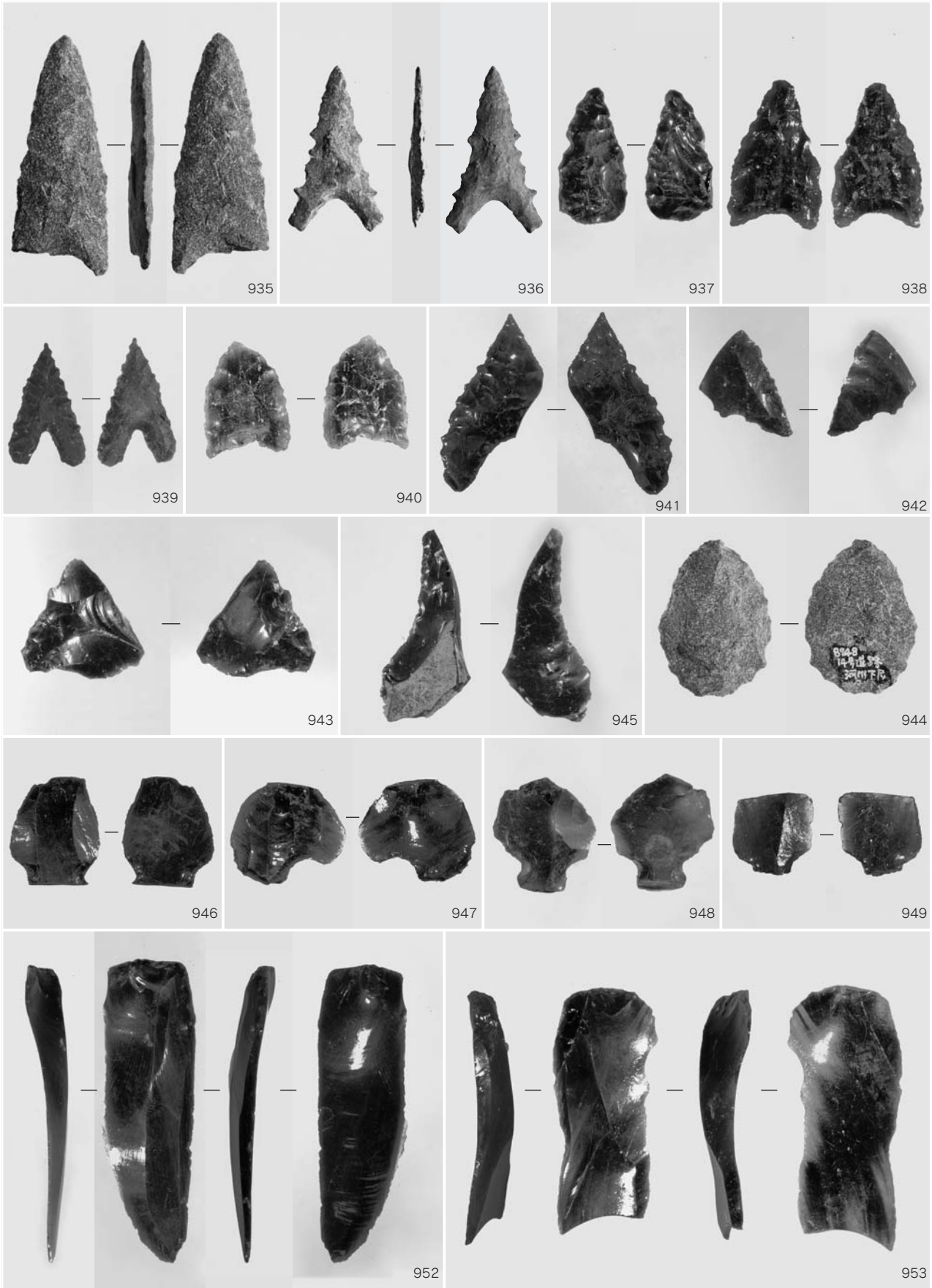


写真114　2・3区出土遺物 2

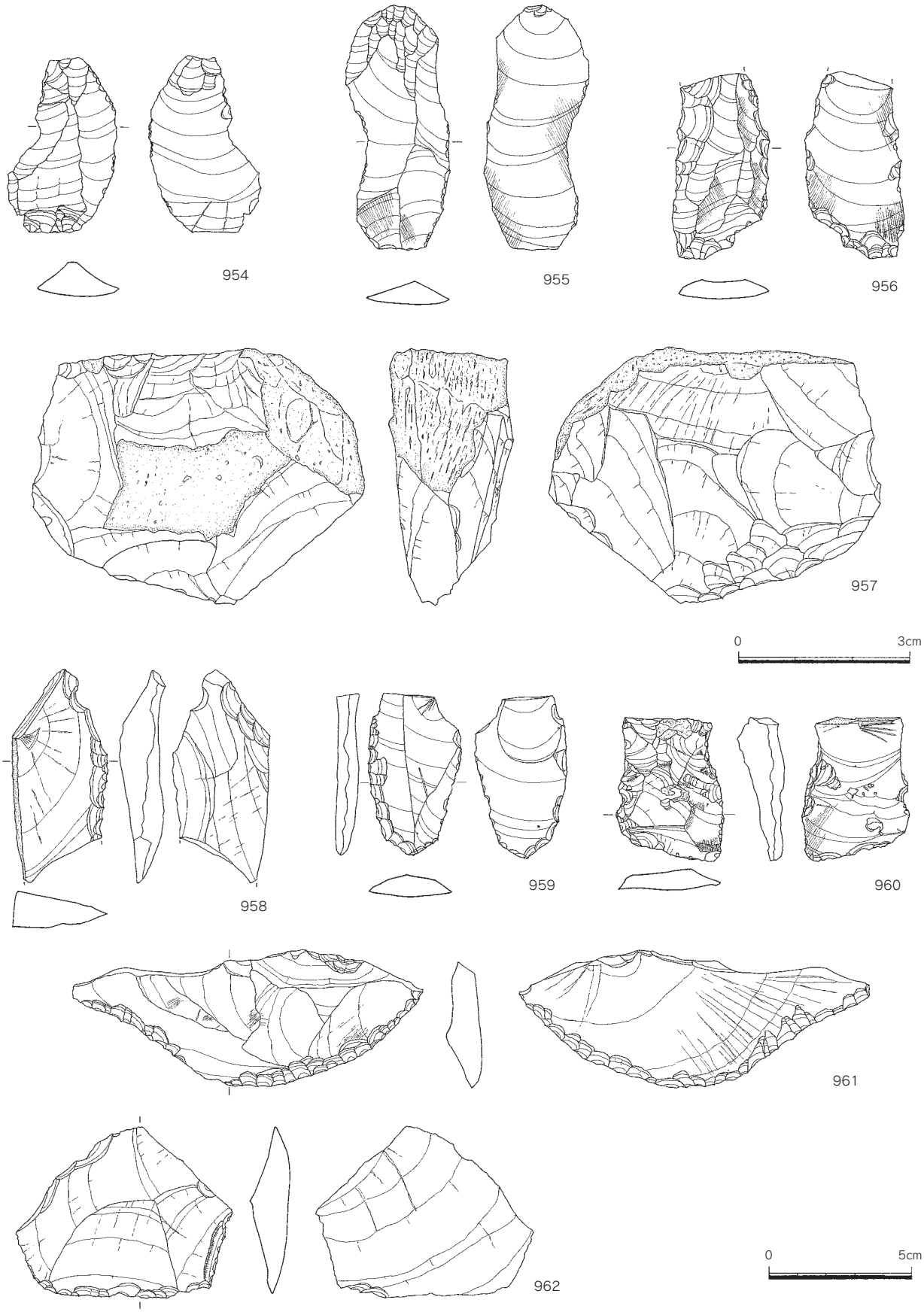


図123　2・3区の出土遺物図 3（UF・スクレイパー他）（1/1・1/2）

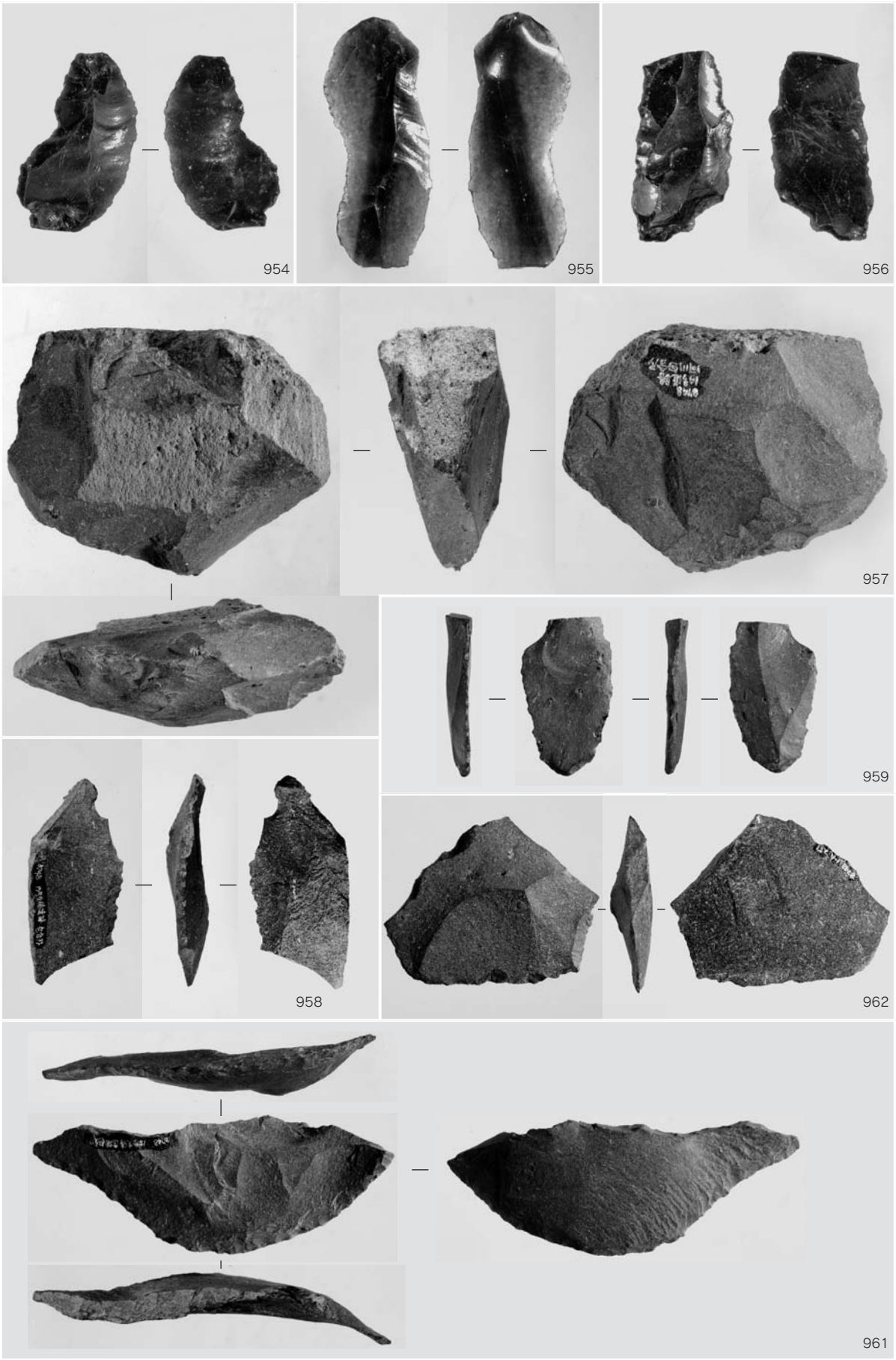


写真115　2・3区出土遺物 3

935～945は打製石鏃である。935は安山岩製で、長さ4.1㎝を測る大型品である。長めの押圧剥離で調整している。936も安山岩製。鋸歯鏃に近い形態を呈している。937は漆黒黒曜石製。粗い横長剥片を素材とする。両脚部を欠損している。938は不純物の多い漆黒黒曜石製。主に長めの押圧剥離で調整している。939は灰色味を帯びた黒色黒曜石製。長さ2㎝の小型品で、細かい押圧剥離で調整している。940は縞の入った黒色黒曜石製。全体に丸みのある形態。941は漆黒黒曜石製。鍬形鏃に似た形態で、細かく長い押圧剥離で調整している。942は漆黒黒曜石製の打製石鏃である。帳面とも剥片剥離時の剥離面が遺存し、周縁調整のみを行っている。下半部を欠失している。943はサヌカイト製の尖頭状石器と通称されているものである表面に周囲からやや大きな剥離を行い大まかな形を作った後に周縁加工を施している。使用痕と考えられるものは認められない。944は漆黒黒曜石製。両側縁に加工を施し、先端部は折れているが尖った先端部を作り出しているものと思われ、石錐の可能性もある。尖った先端の左右の付け根部分はエッジが潰れたようになっている。945は漆黒黒曜石製である。両面とも剥片剥離時の面を多く残し、片面に微細な加工を施している。半分に割れ、先端部も欠失しているため明確ではないが、石錐であろう。946は漆黒黒曜石製。縦長剥片の両側からノッチを入れ折り取ったいわゆるつまみ形石器である。上辺にはバルブ・打面が残っている。両側縁に使用痕らしい微細剥離が認められる。947は縞状を呈する部分がある漆黒黒曜石製。縦長剥片を素材とし、バルブ・打面が残っている。表面にはすべて上から剥がれた細長い剥離が5つ施されているが、これらは下面の抉りに切られているようである。抉りは右側からのみ施され、折り取った部分にはその後に加工が施されており、通常のつまみ形石器とはやや異なる。948はややくすんだ黒色黒曜石製で、バルブ・打面が残る縦長剥片である。両側からノッチを入れ折り取る。右側縁に微細剥離がわずかにあるが、使用痕か。949は透明感の強い黒色黒曜石製つまみ形石器である。縦長剥片を素材とし、打面と反対側に抉りを入れ折り取っている。両側縁に微細剥離が認められる。950は漆黒黒曜石製のつまみ形石器。縦長剥片を素材とし、バルブ付近が残存する。打面近くにある縦方向の階段状剥離は剥片剥離時の打撃に伴うものか。両側縁に刃こぼれ状の微細剥離が見られる。951は漆黒製黒曜石製の縦長剥片で、長さ2.6㎝、幅1.0㎝と小振りである。両側縁と下縁に使用痕と思われる細かな刃こぼれが認められる。952は良質な漆黒黒曜石製の縦長剥片である。両側縁に明瞭な刃こぼれがあるが、特に湾曲している左側の縁辺に激しく刃こぼれしている。953はやや不純物を含む漆黒黒曜石製である。大型の縦長剥片で下部を欠失している。打面部分に残る縦方向の剥離は打点調整の痕跡か。両側縁に刃こぼれ状の使用痕が残る。

954～956も使用痕のある剥片である。954は漆黒黒曜石製。やや不定形の縦長剥片の外湾した縁辺に使用痕と思われる細かな刃こぼれが認められる。下縁は3㎜ほどの平坦な剥離面で、別の剥片を取った跡であろう。955は透明度の強い黒曜石製で、整った縦長剥片の両側辺に使用痕と思われる細かな刃こぼれが認められる。956は漆黒黒曜石製の縦長剥片で、バルブ・打面はない。両側縁と下縁にやや大きめの剥離と細かい剥離が見られるが、剥離部分が潰れる等の状況は伺われない。加工を施しているのは間違いないが、刃器として使用しているわけではなく、あるいは長めの石鏃の未製品の可能性も考えられる。

957は安山岩（サヌカイト？）製の石核であろうか。上面と側縁の一部に自然面を残している。各方向から小さな横長剥片を主に取っているものと思われる。石鏃等に利用するものであろう。下辺には剥片素材を取ったとは思えない加工が施され、エッジが潰れたような状況を呈している。残核をスクレイパーに利用したものか。あるいは残核ではなく、当初から加工を行ったスクレイパーであろうか。958は安山岩製のスクレイパーである。横長剥片を利用し、左図左側縁は自然面である。

両面とも剥片剥離時の面をほとんど残し、周縁調整を行っただけであるが、頭部はノッチを入れて摘み状に加工しており、石匙とすべきであろうか。959は安山岩製の縦長剥片を素材とした小型のスクレイパーである。打面は自然面で、そのまま残している。両側縁から下縁まで細かい加工を加えている。基部にはノッチ状の調整が施されている。960は白い不純物を少量含む漆黒色黒曜石製のスクレイパーである。打面に自然面を残す厚みのある縦長剥片を素材としている。下縁と右側縁の細かい連続する加工が施されており、下縁のエッジは使用のためか、折れている部分がある。961は安山岩製の横長剥片を素材とするやや大型のスクレイパーである。全体が主要剥離面の外側に向かって弓なりに曲がっている。表面にはやや細かな剥離が施されているが、このスクレイパーを作るための剥離ではなく石核から剥片を取った痕跡である。従ってスクレイパーを作るための加工は周縁調整のみである。962は安山岩製のスクレイパーで、縦長剥片を素材としている。両面とも周縁調整のみを施して作っている。左図左上の剥離の一部は新しいものである。

963～968は打製石斧である。963は玄武岩製で、横長剥片を素材としている。頭部はほぼ平坦面をなし、全形は横からの大きな剥離で作っている。片側側縁のみ小さな剥離で加工しているが、反対側縁は細かい剥離を行っていない。刃部側は折損しているものと思われる。全体の形状から失敗品の可能性が高いのではないかと思われる。灰白色を呈する。964も玄武岩製。横長剥片を素材としている。風化が進んでいるので明瞭ではないが表面は自然面と思われる。大きさの手頃な厚めの剥片の片面に加工を施して全形を作っている。刃部は身に比べてやや幅を大きく作り、撥形に近い形状を成している。刃部の交互剥離は摩滅しており、使用によるものであろう。灰白色を呈する。965も玄武岩製。横長剥片を素材としている。上下の刃部と同様の刃先状の交互剥離が右側縁にも入り、上縁左側にも加工状の剥離が認められることから、部を折損した打製石斧と考えたが、上部全体を折損したのではなく、左図の左上のみを折損したスクレイパーとも考えられる。灰白色を呈する。966も玄武岩製で、片側縁に自然面を残す横長剥片を素材としている。上下両側を折損している。左側縁に両側から加工を加えて全形を作っている。自然面側の縁辺にはまったく加工を加えておらず、あるいは打製石鎌状の製品の可能性も考えられる。破片のため、製品か未製品か明らかではない。全体は灰白色を呈するが、自然面のみ黄色味を帯びている。967は緑泥片岩であろう。小型の川原石を素材としているものと思われる。薄目の剥離で全形を作った後に深めの浅い調整で形を整えている。下部を折損しているため、打製石斧か、あるいは小型の磨製石斧の未製品か不明である。968は玄武岩製。薄い横長剥片を素材としている。元々薄い剥片のため、縁辺調整のみで全形を仕上げている。下半部を折損しているが、形状から有肩の打製石斧と思われる。片面は白っぽい色調であるが、主要剥離面は灰色に近い色である。

969～971は磨製石斧である。969は石斧に近い形態をした川原石を素材としている。数カ所窪みが見られるが、調整や敲打でできたものではなく、元々素材にあった窪みのように見受けられ、全面を研磨によって作り上げた可能性が高い。ただし基部のみは調整によって形を整えているようである。970は薄手の磨製石斧である。安山岩製か。厚さは1.6㎝しかない。刃部・基部ともに折損している。全面研磨が施されている。971は玄武岩製磨製石斧の刃部で全面に研磨が施されている。972は花崗岩製の磨石である。両面はほぼ平坦になるまで磨られている。側面も磨かれているが摩滅が進んでいる。973も花崗岩製の磨石で摩滅が激しい。両面から側縁にかけて擦られた跡が明瞭にわかる。敲打痕等は明瞭ではない。（米倉）

図124　2・3区の出土遺物図 4（石斧）（1/2）

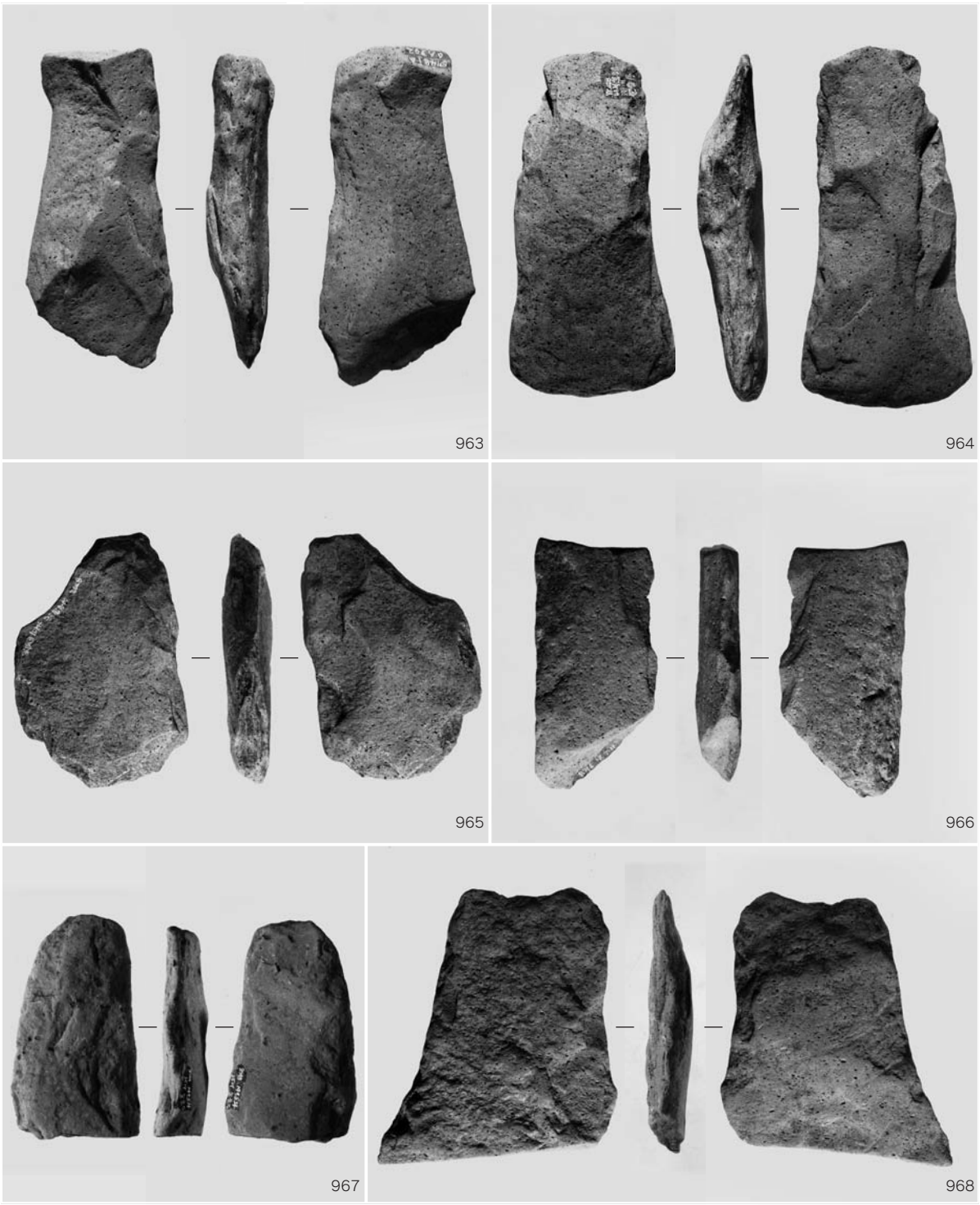


写真116　2・3区出土遺物 4

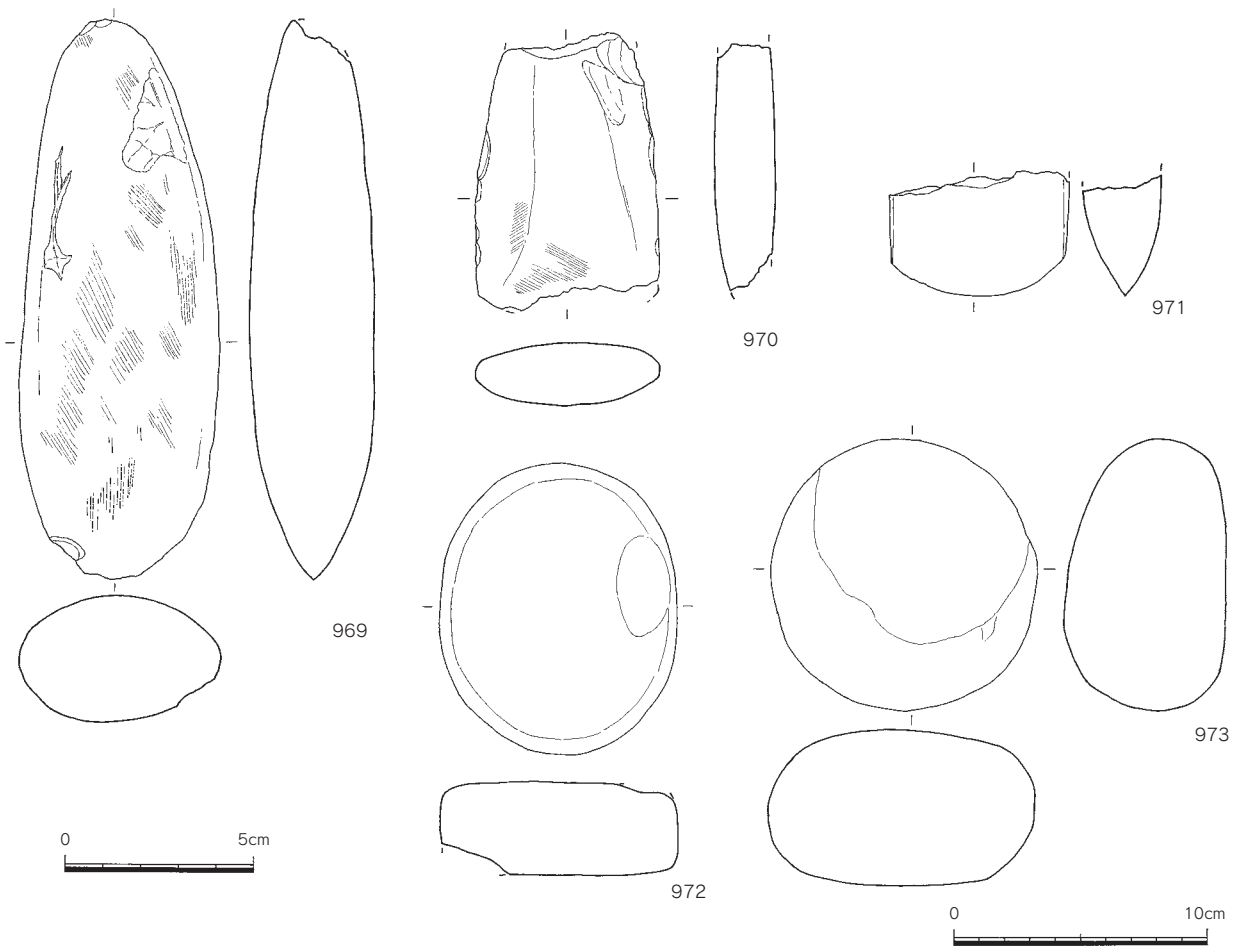


図125　2・3区の出土遺物図 5（石斧・磨石）（1/2・1/3）

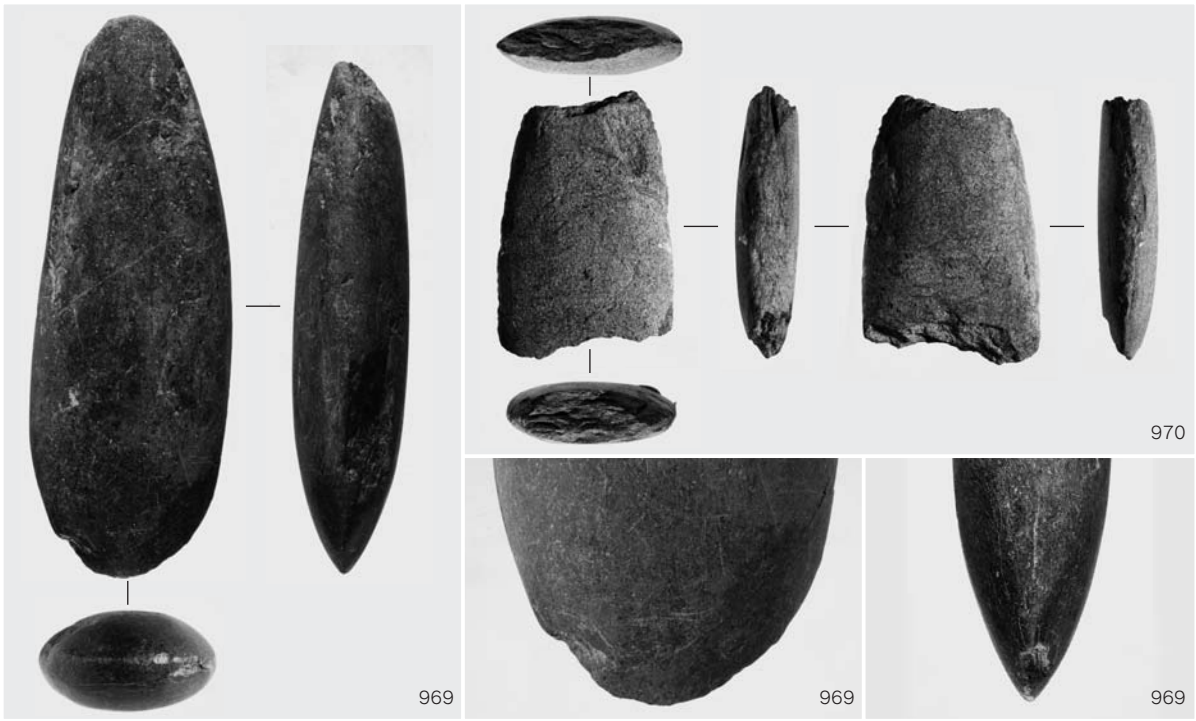


写真117　2・3区出土遺物 5

8．その他の石器関連遺物

本文では石器は何らかの利器や石核について取り上げたが、ここでは、それ以外の原石や剥片の一部について取り上げる。出土した石器・剥片・チップは総量で深さ10㎝のコンテナにいっぱいに詰めた状態で約10箱に及ぶ。そのうち磨石・砥石・磨製石器など大型の石器を除いても約5箱分の石器や剥片がある。さらに図化していない剥片・チップや一部の石器でコンテナ3箱に及ぶ。それらの剥片・チップは、定量分析はできなかったが、出土した剥片等の90％以上は黒曜石で、恐らく95％は超えるものと思われる。さらにその大多数が漆黒色を呈する腰岳産と考えられるものである。下図と次ページに掲載した黒曜石原石はA－1区包含層の3B区から出土したものである。長さ・幅・厚さいずれも10㎝前後の角石で、重さ1,127.5gを量る。全面自然面で、一部黒曜石の黒い部分が所々にわずかに顔を見せているが、その部分は漆黒色を呈している。自然面は堆積岩のように縞状を成している。白色の不純物を所々に含んでおり、当遺跡から出土した黒曜石石器とほぼ同じである。

当調査で出土した石の特徴の一つに、玄武岩製打製石斧及び同未製品が出土していることである。これについてはまとめで再度触れるため、ここでは出土した剥片・チップについて若干触れる。今回の調査では少量ながら玄武岩の剥片・チップが出土した。玄武岩は風化が進み脆くなっており、整理途中一部崩壊したものもあるが、総数で45点ほどの出土である。このうち1点が石器の材料ともなりうる長さ13.5㎝、厚さ3.1㎝の大型の横長剥片で、5点が長さ8～10㎝、厚さ1㎝内外の剥片、約20点が長さ4㎝未満、厚さ1㎝未満の小型の剥片、10数点が長さ1㎝未満のチップの類である。今山遺跡では弥生時代の例ではあるが、石斧制作時に出た大量の石屑のうち、長さ4㎝以下のものをまとめて捨てており、この大きさのものが周縁加工時に出た剥片・チップと考えられる。今回量は少ないとはいえ、この大きさのものが最も多く、またこの大きさのものの大半がSK03から出土している。玄武岩石器と剥片についてはさらにまとめで触れたい。（米倉）

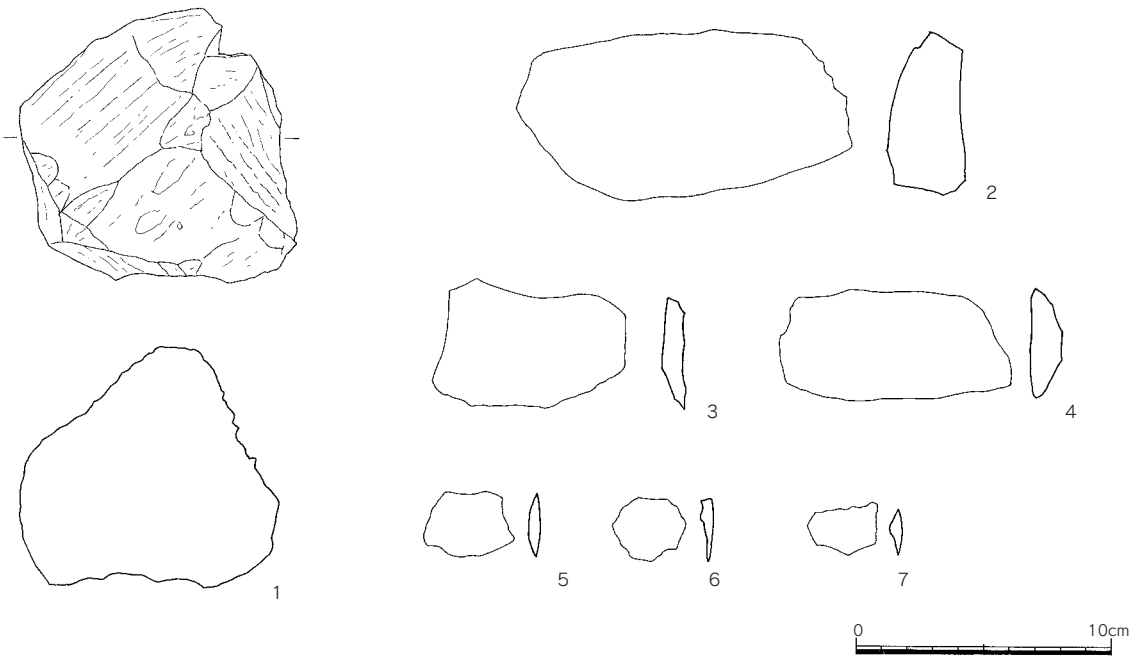


図126　1区出土黒曜石原石実測図及び玄武岩剥片略測図（1/3）

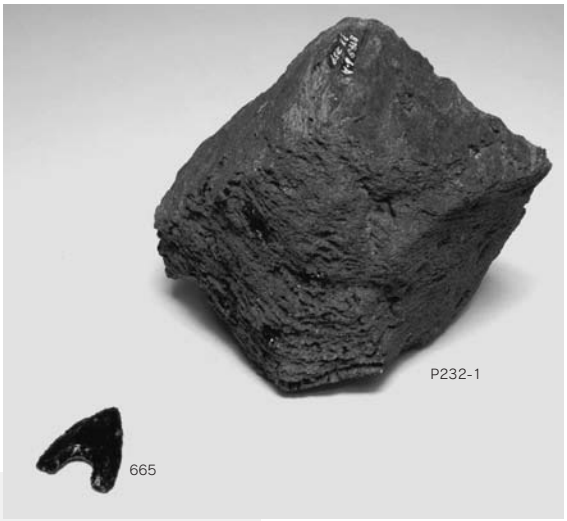


写真118　黒曜石の原石と剥片、玄武岩の剥片

追加資料

ほぼ原稿を書き上げた段階で、見落としていた2点の気にかかる遺物を見つけ出したので、追加資料という形で掲載する。

1は土製品である。製品と呼んでいいかもわからない。長さ4.8㎝、幅2.9㎝、厚さ2.9㎝を測る。胎土には雲母・長石・石英の粒子をやや多く含んでいる。焼成は良好である。色調は前面（中央図）は赤色に近い橙色で、裏面は淡黄色で白色に近い。粘土を捏ねて一部を摘みだして焼いたもしくは焼けたものであるが、中央図真ん中のつまみ出した部分が鼻、その両側のくぼんだ部分が目、鼻の下に短く沈線状にあるのが口と見えなくもない。土偶と呼ぶには稚拙であり、偶然顔に似たとも考えられる。顔料を塗っているわけではなく化粧土のようなもの若しくは焼成時の焼き具合によるものであろうが、顔の前面のみが赤色を呈しているのが気に掛かる。A－1区包含層から出土した。

2は玄武岩製の横長剥片である。長さ9.3㎝、幅4.4㎝、厚さ1.4㎝、重さ50.5gを量る。摩滅がひどいため見落としていたが、片側縁にわずかに周縁調整を施しているようである。問題は刃部と考えられる下辺の部分である。下辺右側には小さな剥離が入っているが、その他の部分は磨製石斧のような形態を示している。摩滅がひどいため明瞭ではないが、手で触ると下辺周辺は磨かれているような印象を受ける。あるいは刃部だけを磨いた小型の磨製石斧とも考えられるが、他の部分に敲打や研磨の痕跡はなく、また剥片本体に加工を加えたのも両側周縁にわずかにそれらしいものが見られるだけで、全体の形状も、縦方向の断面図のとおり、やや弓なりに曲がっており磨製石斧と断言することができない。A－1区包含層出土。（米倉）

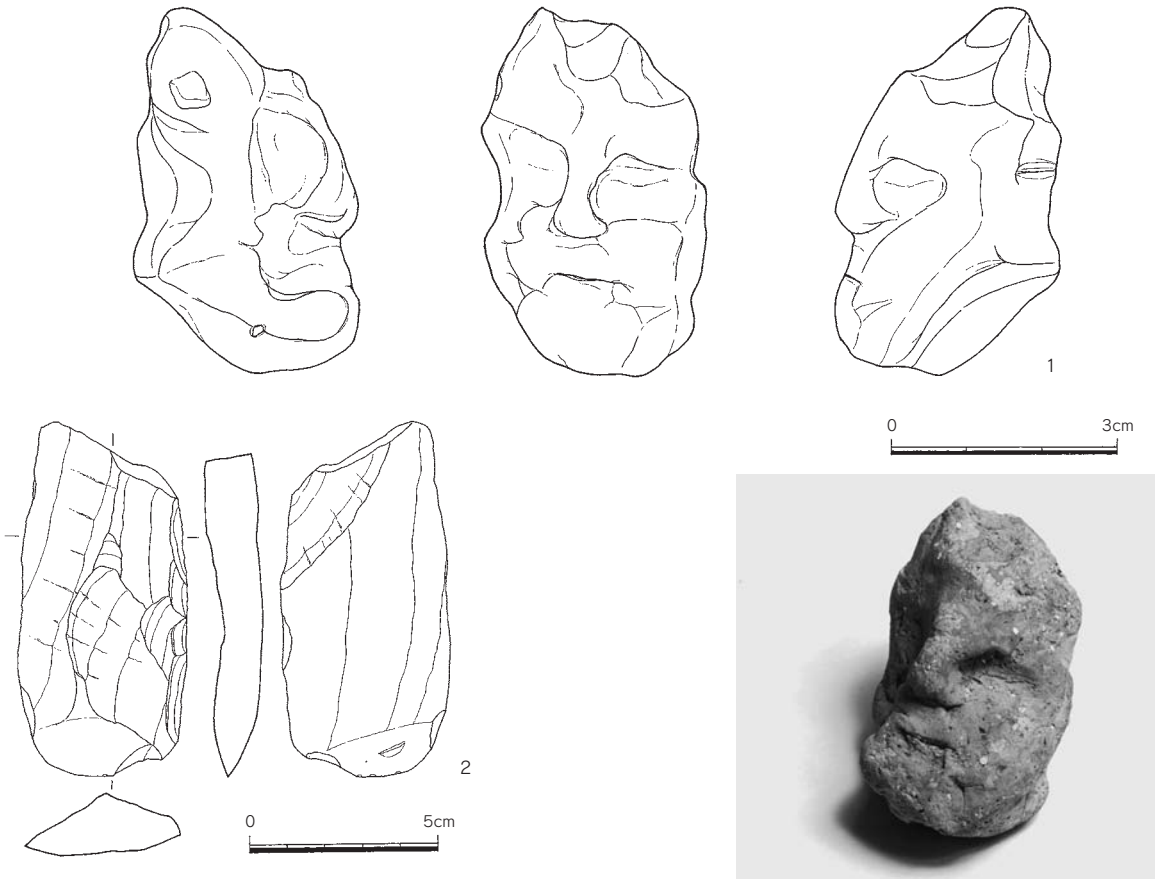


図127　追加資料実測図（1/1・1/2）

写真119　土製品

表3　縄文土器観察表

出土位置の項目で「7B」等の記載はA－1区中のグリッド名、また数字は取り上げ番号

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
47	201	00073	SC01	粗製深鉢	43.0	下半は黄褐色。上半は黒褐色	淡灰褐色～褐色	径1～3mmの砂粒を多量含み、かなり粗い	やや不良	貝殻条痕。口縁付近は指頭痕が残る	ナデ調整。口縁付近は指頭による横ナデ	
47	202	00080	SC01	粗製深鉢	45.0	淡褐色。一部黒灰色	黒色	径1～2mmの白色砂粒を含み、粗い	極めて良好。	条痕（貝殻腹縁による器面調整）を施す	やや丁寧な横方向のナデ調整	
47	203	00061	SC01	粗製深鉢	28.8	下半は明赤褐色。上半は暗褐色	やや暗い淡赤褐色	白色砂粒（～1mm）を含み、粗い	やや良好	底部近くは下から上へ削り、他はナデ調整	粗いナデ調整	
47	204	00066	SC01	粗製深鉢	20.6	下半は淡赤褐色。上半は黒褐色	暗褐色	径1mm程の砂粒を多量含み、きめは粗い	不良	口縁は指頭痕がほぼ等間隔に囲っている	ナデ	口縁部両面にかすかに条痕？
48	205	00070	SC01	半精製深鉢	28.5	褐色～暗褐色	暗褐色	径1～2mm大の砂粒を少量含み、粗い。	やや良好	貝殻条痕後、ユビによるナデ仕上げ	横方向のユビナデ調整	外面上半に一部ススが付着。
48	206	00082	SC01	粗製深鉢	9.6	赤みががった淡黄褐色	白味がかった暗褐色。底部は黒色	径2～3mmの砂粒を少量含む	良好	条痕の後板状工具による斜位のナデか？底部付近はナデ	ナデ調整	内面にスス付着。
48	207	00071	SC01	粗製深鉢	27.8	やや赤みががった黄褐色	下半は黒褐色上半は褐色	砂粒（微細～1mm）を多量含み、極めて粗い	やや良好	貝殻腹縁により器面調整するが、かなり雑	貝殻条痕を施し、ナデによりさらに整形	内面下半部にスス付着。
48	208	00059	SC01	半精製深鉢	19.4	下半は淡赤褐色。上半は暗灰褐色	淡褐色	径1mm程の白色砂粒を含み、きめは粗い	やや良好	屈曲部より上はナデの調整。下半は貝殻条痕の後、粗いナデ	丁寧なナデ調整	底部近くにスス付着。
48	209	00957	SC01	粗製深鉢		淡茶褐色	淡灰色	砂粒をほとんど含まない	やや良好	2枚貝の条痕	条痕の後にナデ	傾きにはやや疑問。
48	210	00057	SC01	粗製深鉢	22.6	上半は暗褐色。下半は暗赤褐色	黒色	径1mm程の白色砂粒を多量に含み、極めて粗い	やや良好	かなり丁寧に、ナデにより器面調整を行っている	口縁；条痕のちナデ、頸以下：ヘラナデ	
49	211	00089	SC01	粗製深鉢	7.0	灰色がかった淡褐色	灰黒色	径1mm程の砂粒を多量含み、かなり粗い	良好	ナデ調整	ナデ調整	外底に木の実と思われる圧痕あり。
49	212	00084	SC01	半精製深鉢？	6.9	淡赤褐色	黒色	径1mm程の砂粒を多量含み、かなり粗い	良好	ナデ調整	ナデ調整。特に丁寧	内面にスス付着。
49	213	00087	SC01	粗製深鉢	8.3	淡黄褐色	黒色	かなり粗大な（径2～3mm）砂粒を少量含む	やや不良	ナデ調整	内底は指頭によるナデ仕上げ	
49	214	00096	SC01	粗製深鉢	12.6	わずかに赤味を帯びた淡黄褐色	わずかに赤味を帯びた淡黄褐色	径2～3mmの砂粒をかなり多量含み、きめは極めて粗い	やや良好	ナデ仕上げ	ナデ	
49	215	00001	SC01	精製浅鉢	30.2	体部上半は黒褐色。下半は淡褐色	淡黒褐色	0.5mm程の砂粒が多量含まれきめはは粗い	良好	かなり精緻な磨研（横方向）が施される	かなり精緻な磨研（横方向）が施される	
50	220	00064	SC01	粗製深鉢	45.8	淡褐色	淡灰褐色	径0.5mm大の白色砂粒を少し含み、やや粗い	やや良好	斜方向にユビナデ	横方向にケズリ	
50	221	00076	SC01	粗製深鉢	40.4	淡褐色	淡褐色	径1～1.5mmの白色砂粒を多く含み、極めて粗い	やや良好	ナデ調整を施した後、条痕文を施す	ナデ調整	
50	222	00069	SC01	粗製深鉢	37.8	淡黄褐色～黒褐色	淡灰褐色	砂粒（微細～径1mm）を少量含み、やや細かい	やや不良	横位と斜位の条痕（貝殻腹縁による器面調整）を施す	横方向のナデ調整	
50	223	00062	SC01	粗製深鉢	36.0	一部淡赤褐色他は黒褐色	やや赤味を帯びた淡黄褐色	微細～3mm大の砂粒を多量含み粗い	やや不良	ナデ調整。（上部は横方向。下部は縦方向）	横方向に削っており、条痕が残る	
50	224	00079	SC01	粗製深鉢	35.4	淡褐色	淡褐色	細かな砂粒を含み、やや粗い	やや良好	横方向貝殻条痕を施す	約8mmの板状調整具で器面調整。浅い条痕が残る	
50	225	00075	SC01	粗製深鉢	34.4	暗褐色～黒褐色	淡灰褐色	砂粒（微細～1mm）を含みやや粗い	やや良好	斜位の条痕（貝殻腹縁による器面調整）を施す	ナデ調整	外面にスス付着。
51	226	00072	SC01	粗製深鉢	24.2	淡赤褐色～暗褐色	淡い赤味がかった淡褐色	白色砂粒（1～2mm）を多量含み非常に粗い	やや良好		丁寧な横方向のナデ調整	
51	227	00068	SC01	粗製深鉢	20.8	黒褐色	淡黄褐色～暗褐色	白色の砂粒（1～3mm）を多く含み、かなり粗い	やや不良	斜位の貝殻条痕	丁寧なナデ調整	外面にはスス付着。
51	228	00063	SC01	粗製深鉢	25.6	淡褐色～暗褐色	淡褐色～暗褐色	径1mm程度の砂粒を多量含み、きめは粗い	良好	ナデ、粘土紐の接合部が残る	ナデ調整	
51	229	00100	SC01	粗製深鉢	22.6	灰茶褐色	灰黒色	1mm大までの砂粒を多く含む	良好	板状工具による横ナデ	横方向のナデ	
51	230	00077	SC01	粗製深鉢		褐色	褐色	砂粒（径1mm程度）を含み、やや粗い	良好	横方向の貝殻条痕を施す	丁寧なナデ調整	
51	231	00065	SC01	粗製深鉢	28.0	暗褐色。部分的に赤褐色	暗褐色。部分的に赤褐色	白色砂粒（径1mm程度）を含み、きめはやや粗い	やや不良	横方向のユビケズリ	丁寧なナデ調整	外面口縁近くにスス付着。
51	232	00074	SC01	粗製深鉢	33.2	淡褐色	淡褐色	径1mm程の白色砂粒を含み、きめは粗い	良好	ナデ調整	ナデ調整	
51	233	00067	SC01	粗製深鉢	28.4	黒褐色	淡灰褐色	微細な砂粒を含み、きめはやや細かい	不良	粗いナデ調整	ナデ調整	全面にススが付着。
52	234	00058	SC01	粗製深鉢	35.6	淡褐色～黒褐色	淡褐色～黒褐色	微細砂粒を多量に、大粒砂粒少量含み、極めて粗い。	良好	条痕を施す	ナデ調整	
52	235	00081	SC01	粗製深鉢	32.9	黒褐色～灰褐色	暗褐色～灰褐色	灰褐色。砂混じりの粗い粒子		口縁直下より凹線による格子文を施す	表面のきめが粗い	
52	236	00056	SC01	粗製深鉢	35.2	淡赤褐色	暗褐色	微細な砂粒を多量に含み、きめは極めて粗い	やや良好	条痕を施す	ナデ調整	

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
52	237	00055	SC01	半精製深鉢	25.6	淡赤褐色	淡赤褐色	径1mm程の白色砂粒を含み、きめは粗い	やや不良	上半はヘラ磨き。屈曲部以下は条痕を施した後、ナデ調整を施したと思われる。	指押さえ・ナデ	
52	238	00052	SC01	半精製深鉢	23.4	暗褐色	褐色	径1mm程の白色砂粒。黒雲母を含み、きめは粗い	やや不良	雑なヘラ磨き	雑なヘラ磨き	
53	239	00060	SC01	半精製深鉢	22.4	黒褐色	底部付近は淡赤褐色で上部は暗褐色。	砂粒(径1～2mm)をごく少量に含み、きめは細かい	良好	上半は丁寧なナデ仕上げ。屈曲部以下は板状工具による調整か	横方向のナデ(ユビ)調整	内面下半にはススが付着。
53	240	00053	SC01	半精製深鉢	21.6	黒褐色	淡褐色	径1mm程の砂粒を含み、きめは粗い	やや良好	ナデ仕上げ	ナデ	
53	241	00101	SC01	半精製深鉢	20.0	黒色がはげ淡茶褐色	淡茶褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	良好	ヘラ状工具による磨研状のナデ。口縁付近は工具による横ナデ	横方向のヘラ状工具によるナデ	
53	242	00054	SC01	半精製深鉢		淡赤褐色・暗褐色	淡褐色	径0.5～2mm程度の砂粒を含み、きめは粗い	やや良好	ナデ仕上げ	ナデ	
53	243	00154	SC01	半精製鉢		茶褐色。胴下部は黒色	胴部は暗灰褐色。頸部は淡橙色	1mm大までの砂粒を含む	良好	頸部は強い横ナデ。胴部は3mm幅の磨研、	頸部はナデ。胴部は弱いケズリの後、磨研を部分的に施す	復元胴屈曲部最大径12.8cm
53	244	00158	SC01	粗製深鉢		淡茶褐色。一部は灰褐色	淡灰色	1mm大までの細粒を含む。金雲母が見られる	良好	2枚貝と思われる深い条痕	板状工具によるナデ。刷毛目と同様に残る	復元胴部最大径21.8cm
53	245	00051	SC01	粗製深鉢	29.7	黒褐色	淡褐色	白色の砂粒(径1mm程度)を多く含み、粗い	やや良好	条痕文を施した後、ナデ消したと思われる		
53	246	00099	SC01炉	粗製深鉢		淡褐色～暗褐色	赤味を帯びた淡褐色・暗褐色	径1mm程の砂粒を多量含み、きめはかなり粗い	二次焼成	指頭によるナデ仕上げ。一部浅い条痕。	かなり丁寧なナデ調整	
54	247	00083	SC01	粗製深鉢	10.0	わずかに赤味を帯びた淡黄褐色	淡褐色	径0.5～3mmの砂粒を含み、やや粗い	やや良好	板状工具によるナデ。底部くびれ部分は指頭による横ナデ	横ナデ・指押さえ	内面にスス付着。
54	248	00098	SC01	粗製深鉢	9.4	淡赤褐色	黒褐色	細かな砂粒を多量含み、きめはかなり粗い	やや良好	粗いナデ調整	粗いナデ調整	内底近くには指押さえの痕あり。
54	249	00088	SC01	粗製深鉢	10.8	白味の強い淡黄褐色	白味を帯びた灰褐色	粗大な砂粒を多量含み、かなり粗い	やや不良	ナデ調整	ナデ調整	
54	250	00085	SC01	半精製鉢	8.4	淡褐色	淡灰褐色	微細～径1mmの砂粒を多量含み、きめはかなり粗い	良好	雑な磨研を施している	かなり丁寧なナデ調整	
54	251	00150	SC01	不明	11.0	灰白色	茶褐色	3mm大までの砂粒を多く含む。大粒の砂粒が多い	良好	板状工具？によるナデ→ナデ	ヘラ状工具によるケズリ→ナデ	底部外面はヘラ状工具によるケズリ。
54	252	00086	SC01	半精製鉢	8.6	淡赤褐色	灰黒色	径1mm程の砂粒を多量含み、かなり粗い	良好	磨研	ナデ調整	
54	253	00091	SC01	粗製深鉢	10.1	暗黄褐色	淡明褐色	砂粒を含み、やや粗い	やや不良	ナデ調整	ナデ調整	
54	254	00090	SC01	粗製深鉢	12.4	淡黄色	白味の強い淡灰褐色	径1mm程の砂粒を含み、やや粗い	やや不良	ナデ調整	ナデ調整	外底に圧痕。編み物か骨か？
54	255	00094	SC01	粗製深鉢	7.6	淡黄褐色	黒色	径2～3mm程度の粗大な砂粒を多量に含む。粗い	やや不良	木の葉をしいて整形したらしく、圧痕が残る	ナデ仕上げ	
54	256	00097	SC01	粗製深鉢	11.4	外底はやや赤味がかった黄褐色	内底は黒色	砂粒は少量含み、きめはやや細かい	良好	ナデ仕上げ	ナデ仕上げ	
54	257	00092	SC01	半精製深鉢	7.6	淡赤褐色	灰黒色	径1mm程の砂粒を多量含み、かなり粗い	やや良好	ナデ仕上げ	ナデ仕上げ	外面にスス付着。
54	258	00151	SC01	不明	10.6	淡橙色	灰白色	2mm大砂粒を微量含むが、きめ細かい	良	ヘラ状工具によるケズリ	ナデ仕上げ	底部は灰白色～淡橙色。
54	259	00157	SC01	不明		茶褐色に淡橙色が混ざる	暗灰色	1mm大の白色砂粒を非常に多く含む	良好	丁寧なナデ	ナデ	
55	260	00012	SC01	精製浅鉢	27.0	淡褐色	黒色。底部褐色気味	微細な砂粒を含み、やや粗い。	良好	細かな横方向のヘラ磨きを施す	細かな横方向のヘラ磨きを施す	
55	261	00005	SC01	精製浅鉢	29.0	暗褐色	暗褐色	径2mm程の粗大な白色砂粒を多量含み粗い	やや良好	一応ヘラ磨きを施しているが粗雑。		口縁は波状口縁で1条の沈線。
55	262	00002	SC01	半精製深鉢	31.0	暗褐色～黒褐色	暗褐色～黒褐色	白色の砂粒(1mm程度)を多量に含みかなり粗い	良好	細かな磨研を施す。胴部屈曲部位下の調整は丁寧でない	細かな磨研を施す。胴部屈曲部位下の調整は丁寧でない	
55	263	00006	SC01	精製椀	31.3	灰黒色。一部淡褐色	黒色	径0.5～1mm程度の砂粒を多量含みきめは粗い	良好	巾2mm程の横方向の細かなヘラ磨き	巾2mm程の横方向の細かなヘラ磨き	
55	264	00007	SC01	精製椀	36.6	淡褐色～黒褐色	黒色	1mm程の白色の砂粒を多量含み極めて粗い	やや良好	丁寧なヘラ磨き	丁寧なヘラ磨き	
55	265	00010	SC01	精製深鉢		淡褐色～黒褐色	黒灰色	0.5～1mm程度の白色の砂粒を多量含み粗い	良好	ヘラ磨研。特に細かく磨研	ヘラ磨研	
55	266	00019	SC01	浅鉢		頸部は灰黒色。胴部は淡灰茶褐色	灰茶褐色	1mm大の砂粒を少量含む	良好	頸部は磨研痕が残り光沢を持つ。胴部はナデ調整で光沢を欠く	ヘラ状の工具で磨く。平骨だが光沢はない。口唇下の沈線はごく浅い	
55	267	00018	SC01	精製浅鉢		灰褐色。胴下部程淡くなる	灰褐色。胴下部程淡くなる	細砂粒を少量含む	良好	3mm幅のヘラ状工具による磨研。胴部はナデたのか磨研痕は薄い	外面とほぼ同様	やや立ち過ぎか。口唇部に沈線が見られる。
55	268	00014	SC01	精製浅鉢		淡茶褐色	淡茶褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	良	板状工具による調整	磨研	

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
55	269	00013	SC01	精製浅鉢か深鉢		淡茶褐色	灰黒色。口縁部は灰色が強い	1mm大までの砂粒を少量含む	良好	前段階の調整面が若干残るが、上から磨研、工具痕は見られない	3mm幅の磨研痕が残る。光沢がある。沈線は棒状工具によるが浅い。	精製にしてはやや粗い。傾きは不明確。
55	270	00016	SC01	精製浅鉢		灰茶色	茶褐色	1mm大までの砂粒を含む	良好	ヘラ磨研	ヘラ磨研	
55	271	00017	SC01	精製浅鉢		灰褐色	灰黒色	1mm大までの砂粒を含む	良好	ヘラ磨研	ヘラ磨研	
55	272	00024	SC01	半精製浅鉢		淡黄褐色	淡橙色	3mm大までの砂粒を多く含む	良	胴部は板状の工具でナデる	胴部は板状の工具でナデる	口縁部は強い横ナデ。
55	273	00003	SC01	精製浅鉢		淡赤褐色	淡赤褐色	微細な白色の砂粒を含みやや粗い	やや良好	ヘラ磨き	ヘラ磨き	
55	274	00004	SC01	精製浅鉢		黒褐色	黒褐色	微細な砂粒を含みやや粗い	良好	丁寧な磨研	丁寧な磨研	
55	275	00027	SC01	精製椀		黒褐色。茶褐色が混ざる	黒灰色	1mm大までの砂粒を非常に多く含む	良	ケズリ状の後ナデ	ナデ	
55	276	00008	SC01	半精製浅鉢		黒褐色	黒褐色	1mm以下の白色の砂粒を含み粗い	やや不良	屈曲部以外は条痕	横方向のヘラ磨研	
55	277	00026	SC01	半精製浅鉢		茶褐色	黄白色。下部は黒灰色	微細砂粒を少量含む	良	ヨコナデ	ヨコナデ	
55	278	00023	SC01	精製浅鉢		灰白色	黒灰色	1mm大までの砂粒を含む	良好	磨研	磨研	
55	279	00030	SC01	椀		灰褐色	やや茶色を帯びた灰色	1mm大の砂粒を少量含む	良好	横方向に8mm幅の削りで粗い調整痕を残す	磨研、ナデにより滑らかである	
55	280	00009	SC01	精製椀	17.7	淡褐色～黒褐色	淡褐色～黒褐色	1mm大の白色砂粒をかなり多量含み、極めて粗い	やや良好	ヘラ磨き	粗雑	
55	281	00028	SC01	精製椀		茶褐色	灰黒色	1mm大の砂粒を少量含む	良好	斜方向の5mm幅の磨研。沈線はヘラ状工具？	4mm幅の磨研痕が残る。平滑で若干の光沢がある	
55	282	00029	SC01	半精製椀		茶褐色	赤茶褐色。一部黒斑	1mm大の砂粒を少量含む	良好	ナデ調整	ナデ調整。内面の方が丁寧で平滑	
55	283	00011	SC01	精製鉢形	4.5	淡白褐色	淡白褐色	微細な砂粒を少量含み、きめはやや細かい	やや良好	ヘラ磨研	ヘラ磨研	やや上げ底。
55	284	00218	SC01	阿高系土器		淡茶褐色。赤味を帯びる	淡茶褐色	1mm大までの滑石混入。微粒多い	良好	丁寧なナデ調整。凹線文。	丁寧なナデ調整	
55	285	00217	SC01	阿高系土器		暗茶褐色	淡茶色	2mm大の滑石砂粒を少量、微細滑石粒を多く含む	良	丁寧なナデ調整。凹線文。	丁寧なナデ調整	内面は接合点が見られる。
60	301	00845	SC03	粗製深鉢	27.2	茶褐色	黒褐色	2mm大の砂粒を含むが少量	やや良好	約1cm幅の工具による横方向のケズリ。下部は斜方向のケズリ。	横方向のケズリ後ナデ。横ナデによる凹部が顕著。気泡が目立つ	
60	302	01557	SC03	半精製浅鉢		黒褐色	やや褐色がかった黒褐色	白色の砂粒(径0.5～1mm)を多量含み、粗い	良好	特に丁寧なヘラ磨研	ヘラ磨研	
62	303	00976	SC04	粗製深鉢	7.2	黄灰褐色	灰茶褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	ケズリ状で粗い。風化を受けている。底面は周状の方向に削ったようである	ナデ	底部
64	304	00801	SC05	粗製深鉢	47.8	暗茶褐色＋淡茶褐色	黒灰色＋茶褐色	微細砂粒を多く含む	やや良好	横方向の軽いケズリ、ナデにより平滑に調整した後、貝殻条痕を施す	口縁は横方向のナデ。脚上部は脂によるケズリか。下部は横ナデ。	
64	305	00875	SC05	粗製深鉢	41.2	淡黄茶色	灰茶褐色～淡黄褐色。一部黒斑	2mm大までの砂粒を含む	やや良好	ケズリの後横ナデ(右→左)	工具を使った調整の後の横ナデ	
64	306	00808	SC05	粗製深鉢	36.0	乳白色	灰白色	1mm大までの砂粒を含む	やや良好	左から右へ、2枚貝による横方向の浅い条痕	ナデ。擦痕がわずかに残る	
64	307	00831	SC05	半精製深鉢	28.5	淡茶白色～淡茶褐色	灰褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	ケズリの後、横ナデ。胴部は磨研に近い	ケズリの後、横ナデ	全体に平滑で丁寧な調整。
64	308	00812	SC05	粗製深鉢		灰黒色	黒褐色～灰黒色	砂粒をほとんど含まない	やや良好	ナデ調整の後、条痕。1本1本が右下から左上へ、同方向に施される	左から右への横方向のナデ	
64	309	00847	SC05	粗製深鉢		灰茶褐色	暗灰褐色	砂粒をほとんど含まない	やや良好	繊維束状の工具による。条痕状にケズリ。単位ははっきりしない。右から左へ	横ナデ	小片のため傾きは不正確。
64	310	00931	SC05	粗製深鉢		明るい茶褐色。口縁直下に煤	茶褐色	微細砂粒を含むが、大きな物はない	やや良好	5～6mm幅のケズリ痕が残るが、全体はナデ	口縁下は6mm幅の断面が弧状を呈す、工具のナデ。下部はナデ	
64	311	00911	SC05	粗製深鉢	約50	灰褐色	暗灰褐色	2mm大までの砂粒を非常に多く含む。金乱雲が目立つ	良好	7mm幅のケズリ痕が顕著	板状と思われる工具によるケズリ状のナデ	1ヶ所焼成後穿孔あり。
64	312	00880	SC05	粗製深鉢		淡橙色～赤味を帯びた淡茶色	灰褐色	1mm大までの砂粒を含む	やや良好	貝殻によると思われる条痕	横ナデ後に、凹線状の半円形の調整痕あり	
65	313	01551	SC05	精製浅鉢	25.0	淡い赤味を帯びた白褐色。		白色の砂粒(ごく細か)を少量含み、きめはやや細かい	やや良好	横位のヘラ磨研を施す。ヘラ巾も0.3cm程度と狭い	かなり丁寧な横位のヘラ磨研を施す。ヘラ巾も0.3cm程度と狭い	口縁外面に焼きむらがあり、黒色を呈する部分もあり
65	314	01545	SC05	精製浅鉢		灰白色	暗灰褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	細かい磨研	細かい磨研	
65	315	01513	SC05	精製浅鉢		暗灰茶褐色	黒色	微細砂粒を含む	やや良好	磨研調整	磨研調整	

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
67	319	00355	SK01	粗製深鉢		茶褐色	淡茶褐色	5mm大までの砂粒を含むが、1mm大の砂粒を非常に多く含む	良好	2cm弱幅の貝殻条痕。条痕の下に、板状工具によると思われる擦過痕あり。	ナデ調整。巾1cm位の板状工具でケズリか？粗く表面に砂粒が露出する	
67	320	00353	SK01	粗製深鉢	28.0	橙色を帯びた茶褐色	橙色を帯びた茶褐色～黄褐色	4～5mm大までの砂粒を含む。1mm大砂粒が非常に多い	良好	貝殻条痕。口縁部のみ横ナデ条痕→ナデ→条痕という調整。	ナデ仕上げ。所々に板状またはヘラ状の工具に調整痕あり。	
67	321	00352	SK01	浅鉢	20.5	暗褐色～黒褐色	淡赤褐色	白色の砂粒（径0.5～1mm）をかなり多量に含み、粗い	やや良好	細かい磨きとナデ	丁寧な磨き	口縁は浅い波状をなす。
67	322	00354	SK01	半精製深鉢		淡黄灰褐色	淡黄灰褐色	微細砂粒を多く含む	良好	丁寧なナデ	丁寧なナデ。粘土帯の接合痕が見られる	口唇部に刻目。口縁外側には爪の跡
69	323	00404	SK02	粗製か半精製深鉢		暗褐色	黄白色～灰褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	良好	丁寧に横ナデ。革でも用いたのか細い横線が見られる。1つは1.6cm幅	横方向の板状工具？による調整。ナデ調整のため1次調整はよく判らない	胴部で屈曲する深鉢の頸部。
69	324	00405	SK02	粗製深鉢		赤茶褐色	上部は茶褐色。下部は淡茶褐色	微細砂粒を少量含む	良好	貝殻条痕の後、他の工具（繊維束？）で調整。口縁部は横ナデ	横方向のヘラ磨き	傾き不明。
69	325	00406	SK02	粗製か半精製深鉢		頸部は暗褐色～灰白色。胴部は黄褐色	灰白色	砂粒をほとんど含まない	良好	丁寧なナデ。平滑で小さな気泡が多い。	丁寧なナデ。7～10mm幅の工具による横方向の調整。	
69	326	00407	SK02	深鉢	9.5	暗茶褐色	茶褐色	2mm大までの砂粒を多く含む。金雲母を含む	良好	粘土溜が所々見られるが、上からナデ。底はヘラ状工具痕が若干見られる	板状工具痕が見られる。底はケズリ痕が見られるがナデ	
71	331	00463	SK03	粗製深鉢	42.0	灰茶褐色	暗茶褐色～暗黒色	2mm大までの砂粒を多く含む	良	細いやや不規則な条痕、繊維質の束にも見えるが2cmくらいの単位が観察される。	わずかに条痕の痕跡が見られるが、ナデてある	
71	332	00464	SK03	粗製（半精製）深鉢	胴部44	淡橙色～黒褐色	淡橙色～黒褐色	微細砂粒を含む	良	胴部は1cm強の幅の平坦な板状の工具でナデる	頸部に整形時の稜が残る	
71	333	00453	SK03	粗製深鉢	22.6	茶褐色	茶褐色	微細砂粒を微量含む	良好	1.5cm幅の単位の条痕。主に横方向。	全体に丁寧なナデ。一部前段階のケズリ調整が見られる	小片のため径は不正確。
71	334	00451	SK03	粗製深鉢	26.6	茶褐色。条痕による凹み部分は黒色	淡茶色。暗灰色に一部黒斑	1mm大までの細粒を少量含む	良好	1cm程の幅を1単位とする条痕。	ナデ。気泡が多い	
71	335	00452	SK03	粗製深鉢	26.0	暗灰褐色	灰黒色	1mm大までの細粒を多く含む	良好	2枚貝によると思われる条痕。2～3cmを1単位とする	丸みを帯びた工具によるケズリ。口縁部に近い程、ナデによりケズリ。	
71	336	00462	SK03	粗製鉢？	14.2	茶褐色	茶褐色	1mm大までの砂を少量含む	ややあまい	板状工具痕がわずかに残るが、全体にナデ調整。やや器面が粗い	横ナデ→ナデ	
71	337	00454	SK03	粗製深鉢		黄灰褐色	黄灰褐色	2mm大までの砂粒を含む	良好	丸みを持った工具痕と板目痕が残る。前者は後者の後の調整か？	板目痕が見られるが、上からナデ	傾き不明。
71	338	00469	SK03	粗製深鉢	9.5	淡灰黄褐色	底は灰褐色。胴は暗褐色	4mm大までの砂粒を非常に多く含む	良	全体に粗く、詳細不明	指圧痕が多く、浅く滑らかな凸凹が多い	
71	339	00470	SK03	半精製深鉢	10.4	淡橙色	淡灰褐色	2mm大の砂粒を微量含む	良	2次焼成によるものか、全体が赤変しており、底は剥落している	底に工具の端によると思われる沈線状の痕跡が見られる	
71	340	00468	SK03	粗製深鉢	11.2	淡黄茶褐色	淡灰褐色	3mm大までの砂粒を多量含む	良	ナデ調整	粗く、詳細不明。底の屈曲部付近は接合痕か整形痕か凸凹が多い	
71	341	00456	SK03	半精製深鉢		茶褐色	暗褐色	1mm大まで砂細粒を多く含む	良好	ケズリ状の1次調整が残る	丁寧な磨研を施す	
71	342	00465	SK03	精製浅鉢		暗茶褐色	灰黒褐色	1mm大までの砂粒を含む	良好	内外ともヘラ状工具？による磨研だが、やや工具が異なる。	磨研痕が2mm以下と細い。光沢がある	
71	343	00457	SK03	半精製？鉢		灰褐色	淡黄白色	砂粒をほとんど含まない	ややあまい	ナデ調整。気泡が多い	ナデ調整。気泡が多い	傾き不明。口径25～30cmくらいか。
73	347	00506	SK04	粗製深鉢	39.6	茶褐色	淡黄褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	良好	ナデの後、下から上へケズリ状の条痕。条痕は工具が不明	ナデ調整。横方向の板状工具痕を残す。粘土帯の凸凹が見られる	
73	348	00507	SK04	粗製深鉢	29.2	灰褐色	淡黄灰色	1mm大までの砂粒を含む	良好	5mm幅の繊維質の工具痕がよく残る。	右から左への横方向のケズリ痕が残る	口縁下に一部ススが付着。口縁部は黒変。
73	349	00502	SK04	粗製深鉢		茶褐色。一部黒変	淡灰褐色	1mm大の砂粒を多く含む	良	まず口縁下を削り、後に胴部を下から上へ削る	削り状の痕跡があるが、やや器面が粗い	
73	350	00503	SK04	粗製深鉢		灰茶褐色	茶褐色	微細砂粒を多く含む	良	ナデ調整の後に、斜方向の条痕。器面が粗く詳細	ナデ調整だが、平滑に仕上がり磨研状である	傾き不明。
73	351	00505	SK04	粗製深鉢		淡橙色。ススか？全体に黒色になる	黄白色	1～2mm大の砂粒を含む	良好	横ナデの後、5mm幅のケズリ	上部の横ナデ部分の方が平滑	傾き不明。

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
73	352	00504	SK04	粗製深鉢		灰茶褐色	淡茶褐色	3mm大までの砂粒を多く含む	良好	粗いケズリ	2～3mm幅の磨研、平滑	傾き不明。
73	353	00509	SK04	精製浅鉢		黄白色	黄白褐色	1mm大までの砂粒を含む	良好	丁寧な磨研。平滑で光沢がある	磨研。平滑だが光沢はない	口唇部、胴屈曲部に鋭い沈線
73	354	00501	SK04	粗製深鉢		黒褐色	灰白色～淡茶褐色	1mm大の砂粒を少量、5mm大の砂粒を微量含む。	良好	斜方向の条痕で凸凹が激しい。条痕の幅が広く、貝殻以外。	所々に条痕の跡痕が見られるが、ナデで消している	天地、傾き不明。
73	355	00511	SK04	粗製深鉢		暗茶褐色	灰褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	良好	ナデた後に浅い条痕。文様状である	ナデ	
73	356	00512	SK04	半精製？深鉢	4.9	赤茶色	淡黄褐色。大部分は黒変	微細砂粒を少量含む。きめ細かい粘土	良好	ナデだが、粘土が薄く貼付されている。底はケズリ状の調整の痕跡が少量見られる	板状工具によるナデの後ナデ	
73	357	00508	SK04	深鉢	4.3	黄灰色	灰茶褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	良	強く横ナデする。上部はケズリ	磨研状のナデ。平滑で光沢がある	内面精製、外面粗製。
73	358	00510	SK04	精製浅鉢		暗茶褐色	暗茶褐色	微細砂粒を少量含む	良好	横方向の磨研。平滑で光沢がある	横方向の磨研。平滑で光沢がある	
75	359	00330	SK05	深鉢	18.3	淡黄灰色	灰茶褐色	微細砂粒を多く含む	良好	ヘラ状工具によるケズリ。	横方向の磨研。光沢があり平滑	内面精製、外面粗製。
75	360	00332	SK05	粗製鉢	18.0	乳白色。一部黒点	淡黄褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや良好	斜方向の浅い条痕	2枚貝による条痕がはっきりと残る	
75	361	00317	SK05	粗製深鉢		淡褐色	淡褐色	ごく微細な砂粒を少量含み、きめは細かい	やや不良	ナデ調整	ナデ調整。巾1cm位の板状工具でケズリか？	
75	362	00333	SK05	粗製深鉢		暗茶褐色	淡灰茶褐色	微細砂粒を含む	やや良好	横ナデの後、ヘラ状工具によるケズリ。装飾のようにも見える	横ナデ	
75	363	00331	SK05	粗製深鉢		茶褐色	茶褐色に灰色、橙色が混ざる	1mm大までの細砂粒を多く含む	やや良好	ケズリ。単位内(1cm弱)に板目か条痕状の凸凹がある	ケズリ。ヘラ状工具による	
75	364	00338	SK05	半精製深鉢		黄白色	黄白色×黒灰色	微細砂粒を少量含む	やや良好	ナデ。断面鋭角の沈線	横ナデ	傾きに疑問。
75	365	00334	SK05	粗製深鉢		乳白色～灰茶褐色	淡灰茶褐色	細砂粒をわずかに含む	やや不良	条痕風ケズリ	横ナデ	
75	366	00339	SK05	半精製深鉢		淡橙色	淡橙色×淡灰褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや良好	横ナデ。2本の沈線を施す	横ナデ及び指押さえ	
75	367	00340	SK05	粗製深鉢		暗灰褐色	黄褐色	2mmまでの砂を含む	やや不良	磨研風のナデ、平滑	接合部が明瞭に見られる。その上下で調整が異なる	
75	368	00342	SK05	半精製深鉢		淡い橙色を帯びた灰褐色	淡い橙色を帯びた灰褐色、茶褐色	1mm大までの砂粒を少量含む	やや良好	横方向のナデ。屈曲部より上に細く浅い沈線あり。下にはケズリ痕	ナデ	
75	369	00341	SK05	半精製深鉢		淡橙色	淡灰色	1mm大までの細砂粒を多く含む	やや良好	巻貝か板目による細密条線の後ナデ	横方向のナデ。ナデ調整前の細密条線見られる	
75	370	00322	SK05	粗製鉢	12.2	淡泊褐色	黒褐色	径2mm程度の粗大な白色砂粒を多量含み粗い	やや良好	板状工具によるナデ	内底の立ち上がりに、指押さえの痕あり	
75	371	00343	SK05	粗製深鉢	11.1	淡橙色～淡橙白色	灰褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	ナデ調整であろうが、粘土溜まりに覆われる	ナデ	
75	372	00323	SK05	粗製鉢		赤味を帯びた淡褐色	赤味を帯びた淡褐色	径1～2mm程の粗大な砂粒を含み粗い	やや不良	条痕を施す	条痕を施す	
75	373	00305	SK05	精製浅鉢	25.6	淡褐色～暗褐色	淡褐色～暗褐色	白色の細かな砂粒を少量含み、きめは細かい	良好	磨研調整。口縁帯と屈曲部に1条の沈線を施す	極めて細かな横方向の磨研調整が施されている。(胴部下半は斜位)。	
75	374	00306	SK05	精製浅鉢		赤味を帯びた暗褐色	赤味を帯びた暗褐色	白色の細かな砂粒を少量含み、きめはやや細かい	やや不良	横方向の細かな磨研調整。	横方向の細かな磨研調整	
75	375	00307	SK05	精製浅鉢		黒色	黒色	白色の細かな砂粒を少量含み、きめはかなり細かい	良好	横方向の細かな磨研調整。	横方向の細かな磨研調整	
75	376	00308	SK05	精製浅鉢		褐色がかった灰黒色	褐色がかった灰黒色	微細な砂粒を含み、きめは細かい	良好	細かなヘラ磨研(横方向)	細かなヘラ磨研(横方向)	
75	377	00310	SK05	精製浅鉢		灰黒色	灰黒色	径2mm程度の砂粒を少量含み、やや細かい	やや良好	ヘラ磨研(横方向)	ヘラ磨研(横方向)	
75	378	00309	SK05	精製浅鉢		淡褐色	淡褐色	微細な砂粒を多く含み、きめはやや細かい	良好	細かなヘラ磨研(横方向)	細かなヘラ磨研(横方向)	
75	379	00313	SK05	半精製鉢		灰黒色	灰黒色	微細な白色砂粒を少量含み、きめは細かい	良好	ナデ調整(横方向)	ナデ調整(横方向)	
75	380	00311	SK05	精製浅鉢		わずかに赤味がかった淡褐色	わずかに赤味がかった淡褐色	白色の砂粒を多く含み、きめはやや粗い	やや不良	ヘラ磨研(横方向)	ヘラ磨研(横方向)	
75	381	00312	SK05	半精製鉢		白味の強い淡褐色	白味の強い淡褐色	径1mm程度の砂粒を多く含み、きめはやや粗い	やや良好	ナデ調整	ナデ調整	波状口縁を為す。
75	382	00316	SK05	半精製鉢	27.2	白味がかった淡黄褐色	白味がかった淡黄褐色	微細な砂粒を少量含み、きめは細かい	やや不良	ナデ調整(横方向)	ナデ調整(横方向)	
75	383	00315	SK05	精製椀		黒色	黒色	径1mm程度の白色砂粒を含み、きめはやや粗い	極めて良好	丁寧な磨研(横方向)	丁寧な磨研(横方向)	
75	384	00321	SK05	精製鉢	5.8	わずかに赤味を帯びた淡白褐色。	内底は黒灰色	径0.5～1.5mmの白色砂粒を多量含み、きめはかなり粗い	良好	ヘラ磨研	条痕状の擦痕あり。後かなり粗いナデ	かなり上げ底。

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
78	397	00351	SR01	埋甕	42.0（口） 10.6（底）	漆褐色～黒褐色	漆褐色～黒褐色	2㎜以下の白色の砂粒を含みやや粗い	良好	上半は粗い横方向の磨研　屈曲部以下は上から下への磨研	板状工具によるナデ	約11cmの径の略円形の穿孔有,器高49.7cm
79	398	01608		精製？鉢		明黄褐色	明黄褐色	2㎜以下の白色の砂粒を含みやや粗い	良好	丁寧なヘラ磨き？の後、線刻文	丁寧なヘラ磨き？の後、線刻文	口縁は波状口縁と思われる。
79	399	01607	3A 046	粗製深鉢		黒褐色	褐色	白色の砂粒(径0.5～3mm)を多量含み粗い	やや不良	丁寧なナデ(ヘラで磨研した感じ)を施した後、斜位の線刻による施文	ナデ調整	
79	400	01613	T5	粗製鉢		灰褐色	淡黄褐色	白色の砂粒(径0.5～3mm、かなり大粒のあり)を含み粗い	やや不良	巾約3mmの工具で沈線文	横位の条痕が残る	
79	401	01614	SC01東トレ	小片により不明		赤褐色	赤褐色	微細砂粒を少量含み、きめはやや細かい	やや良好	丁寧なナデ	丁寧なナデ	
79	402	01612	T5	粗製鉢		やや黒ずんだ淡褐色	やや黒ずんだ淡褐色	1㎜以下の砂粒を多く含みやや粗い	やや良好	ヘラ状工具によりナデ	丁寧なナデ調整	口唇部に縄文？
79	403	01611	3B	精製鉢		やや赤味を帯びた淡褐色	やや赤味を帯びた淡褐色	ごく微細な砂粒を少量含む	良好	ヘラ磨研	ヘラ磨研	
79	404	01610	T5	精製鉢		一部黒褐色	白色を帯びた褐色	微細な砂粒を含み、きめはやや細かい	良好	ヘラ磨研	ヘラ磨研	
79	405	01579	3A 下 3B 289	精製深鉢		明淡褐色	わずかに赤味を帯びた褐色。	白色の砂粒(径0.5～1mm)を多量含み、きめは粗い	良好	横位のヘラ磨研(精緻)	横位のヘラ磨研(精緻)	一部黒色の焼きむらあり
79	406	01609	2A	半精製鉢		屈曲部より上は黒褐色、下部は淡褐色	褐色	砂粒(径1mm)を多く含み、きめは粗い	やや良好	線刻文と沈線木口による文様有	ナデ調整	
80	407	01509	4A	半精製深鉢	20.6	灰褐色	黄褐色×灰褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	横ナデ。下に板状工具によると思われるナデ	ナデ。擦過が見られれる	
80	408	00940	T5	半精製深鉢	25.0	灰褐色	黄茶褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや良好	右から左へのナデ状のケズリ	横方向のナデ。口縁帯には強い横ナデはない	
80	409	01586	249	半精製深鉢		暗褐色	淡褐色	微細な砂粒を含み、きめはやや細かい	やや良好	横位のヘラ磨研	雑なヘラ磨研？	下部に煤状
80	410	01510	T5	精製深鉢	26.6	灰褐色	淡灰茶褐色	微細砂粒を少量含む	やや良好	丁寧なナデ。光沢はないが、平滑。注口土器？	丁寧なナデ。光沢はないが、平滑	
80	411	01506	4A	精製深鉢	31.6	ごく淡い淡黄灰褐色	灰褐色	1mm大までの砂粒、細砂粒を多く含む	やや良好	全体に丁寧なナデ。下に工具を使った調整？	ナデ。下に条痕？	
80	412	01501	T5	精製深鉢	33.5	灰白色	淡黄褐色	砂粒をほとんど含まない	やや良好	横方向のナデ。内面より平滑	ナデ調整	
80	413	00832	4A 015	半精製深鉢	36.0	淡黄茶褐色	淡黄茶白色。一部に黒斑	2～3mm大までの砂粒を含む	やや不良	板状工具によるナデの後、ナデ	板状工具によるナデの後、ナデ	
80	414	01505	4A 015	精製深鉢	38.4	黄褐色～淡橙色	灰褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	横方向の丁寧なナデ	全体にケズリ調整	
81	415	00943		半精製深鉢		灰白色。一部黒変	灰白色	1mm大の砂粒を少量含む	やや良好	横ナデ、板目状の調整痕あり	横方向のナデ	
81	416	01503	6A 167	半精製深鉢		灰白色。一部淡橙色	灰白色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	ナデ調整。一次調整のケズリ状の痕跡有	ナデ調整	
81	417	00945		粗製深鉢		暗茶褐色	黄灰褐色	微細砂粒を含む	やや不良	指ケズリ	ヘラケズリ。4mm幅で横方向	傾きは不確実。
81	418	01587	4A 024	深鉢		淡黄茶褐色	淡灰褐色	3mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	横方向のナデ（板状工具か？	横方向のヘラ磨研	
81	419	01504		精製深鉢		茶を帯びた灰白色	茶を帯びた灰白色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	横方向のナデ	横方向のナデ	傾きに疑問。
81	420	00942	3B	半精製深鉢		暗灰褐色	黄味を帯びた茶褐色	3mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	横ナデの後、ヘラ状工具によるナデ	強い横ナデ	
81	421	01507	T5	半精製深鉢		暗灰色	暗灰色	微細砂粒を多く含む	やや不良	ナデ調整		
81	422	01502	6A 167	精製深鉢？		灰褐色	灰褐色	1mm大までの砂粒を含む	やや良好	丁寧なナデ	丁寧なナデ	傾きに疑問。
81	423	00947	5B 112	半精製深鉢		淡灰茶褐色	淡灰褐色	1mm大までの砂粒を含む	やや良好	2～3mm幅のヘラ。ナデ(横ナデの後)	横ナデ。屈曲部に浅線を施す	
81	424	00944		粗製鉢		淡茶褐色	黒灰色	2mm大までの砂粒が非常に多く含まれる	やや不良	体部に浅い板目。主にナデ調整	ナデ	傾きは不明。
81	425	00946	3B	半精製深鉢		黄白色。器面が粗い	灰褐色	1mm大までの細砂粒を非常に多く含む	やや不良	ナデ。若干の横方向の砂粒の動きの痕跡あり	ナデ	傾きは不確定。
81	426	01508		半精製深鉢？		灰白色	灰白色	微細砂粒を少し含む	やや不良	ナデ調整		
81	427	00941	4A 194	半精製深鉢		茶橙色	淡橙色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	ナデ。その後にもナデていると思われる	横方向のナデ	
82	428	00802	4A 024	深鉢	37.6	淡黄褐色	淡灰褐色	3mm大までの砂粒を多く含む。微細砂粒が非常に多い	良好	貝殻条痕	指押さえの後ナデ、下部に条痕がかすかに有	
82	429	00830	6A 306	粗製深鉢	31.5	灰茶褐色	灰茶褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	全面に条痕を施すが、上部は後にナデ。不規則な条線あり。	全面にナデ調整。固い工具を使用。	
83	430	00882	6A	粗製鉢	18.0	灰褐色(やや青い)。一部橙色	灰褐色～淡灰色	1mm大までの細砂粒を多く含む。白色粒が多い	やや良好	板ナデ？の後ていねいなナデ	指押さえの後ヘラ？ナデ	屈曲部下に煤？

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
83	431	00885	4A 025	半精製深鉢	24.5	乳白色	灰白色～黒灰色	1,2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	板ナデ？	ていねいなナデ	
83	432	00881	3B 289	粗製鉢	29.6	淡黄白色～灰褐色	淡黄白色～淡灰褐色	砂粒をほとんど含まない	やや良好	丁寧なナデ	横方向の丁寧なナデ	種子圧痕らしきもの多い。
83	433	00803	3A 152	粗製深鉢	38.2	茶褐色	黄を帯びた灰茶褐色	1mm大までの細砂粒を非常に多く含む	やや良好	右から左へ横方向の2枚貝によると思われる条痕	横方向の貝殻条痕の後口縁下はヘラナデ	
83	434	00958	4A 196	粗製深鉢	胴部34.4	茶褐色。下部は灰褐色	灰茶褐色	3mm大までの砂粒を多く含む。	やや良好	ナデ仕上げ。	ナデ仕上げ	
84	435	00961	3A下 229	粗製深鉢	胴部42.9	茶褐色	灰黒色	1mm大までの砂粒を含む	やや良好	5.6mm幅のヘラ状工具でナデる。	横ナデ	
84	436	00959	7B6B 175 176 257	粗製深鉢		暗茶褐色	淡灰白色	2mm大までの砂粒を非常に多く含む	やや良好	貝殻条痕の後、胴部は削り状の調整・ナデで仕上げ	屈曲部周辺には貝殻条痕が見られる。下部はナデ	
84	437	00960	3B	粗製深鉢		頸部は茶褐色。胴部は暗茶褐色	灰茶色	2mm大までの砂粒を含む	やや不良	頸部はナデ。ケズリ状の痕跡はある。胴部は右から左へのケズリ	ナデ。木口痕があるが、その動きは不明	天地の判定にやや難あり。
84	438	00970		粗製深鉢		暗灰褐色	黄褐色	1mm大までの砂粒を含む	やや良好	ナデ。工具は不明	ナデ	
84	439	00971		半精製深鉢		淡茶色	灰白色	1mm大までの砂粒を含む	やや良好	横ナデ。屈曲部を鋭くケズリ、その粘土で突帯状	磨研上のナデ。器面が粗いため詳細不明	
84	440	00972	T5	粗製深鉢		橙色～淡橙色	黄褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや良好	条痕風のナデ。1～1.5cmを単位とするが、単位内の筋は細く明瞭	2枚貝による条痕。上からのナデのため不鮮明。屈曲部は横ナデ	傾きには疑問あり。
84	441	00973	6A 109	粗製深鉢		淡灰色～灰白色	黒灰色	2mm大までの砂粒を非常に多く含む	やや良好	上部は2種類の貝殻条痕。胴部は横ナデ	頸部は貝殻条痕。胴部はナデ。	傾きには疑問がある。
84	442	00962	4A 029	半精製深鉢		頸部は灰白色。胴部は茶褐色	黄灰褐色	1mm大までの砂粒を含む	やや良好	頸上部はナデ。下部はケズリ痕跡。胴上部に磨研状の調整	ナデ調整だが、全体に荒れている。胴部に縦方向の調整痕	小片のため傾きは不明。
84	443	00954	4A 043	粗製深鉢		淡赤茶色	黄茶色～黒灰色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	右から左へのケズリの後、ナデ	ナデ	傾きには疑問。
84	444	00963	4A 027	粗製深鉢		頸部は淡灰褐色	灰茶褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	頸部は横ナデ。胴部は板状工具によるナデ	ナデ。胴部にはケズリ痕(右→左)が残る。	傾きには疑問。
84	445	00948	3A下	半精製深鉢		淡橙白色	淡灰色	2mm大までの砂粒が非常に多い	やや不良	ナデ。わずかに擦過が残る	荒れている	傾きに疑問。
84	446	00953		粗製(浅鉢)？		茶褐色	淡橙色	1mm大までの砂粒を含む	やや良好	浅い条痕を施した後、ナデ	ナデ	傾きに疑問。
84	447	00964	6A	粗製深鉢		灰茶褐色	淡灰褐色	2mm大までの砂粒を非常に多く含む	やや良好	板状工具の痕跡。ていねいなナデ調整。胴部は細い条痕	ナデ。器面は粗く、砂粒が露出	傾きは疑問。
84	448	00950	3B下	(半)粗製深鉢		淡灰褐色	淡灰色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	ナデた後、3mm幅の工具でナデ。	ナデ。粗いため詳細不明	傾きに疑問。
84	449	00965	4B 180	粗製深鉢		灰茶褐色	暗灰茶褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや不良	頸部は横方向のナデ	ナデ。接合線が一部露出	傾きには疑問。
84	450	00951		半精製深鉢		淡黄褐色	灰褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや良好	ナデ	ナデ。屈曲部はナデにより凹む	
84	451	00966	3B 277	半精製深鉢		橙色を帯びた茶褐色～灰茶褐色	暗灰色	1mm大までの砂粒を含む	やや不良	頸部は5～8mm幅の刷毛状の調整痕。胴部は横ナデ	横ナデ。器面は平滑	
84	452	00955	3A下	粗製鉢？		淡黄褐色	暗茶褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや不良	体部は横方向の擦過痕	屈曲部は横ナデ。ナデ	傾きには疑問。
84	453	00952	4A 167	半精製鉢？		灰茶褐色	黒灰色	3mm大の砂粒を少量、微細砂粒を多く含む	やや良好	横方向の擦過痕	ナデ。屈曲部は頸部を付ける前に、強くナデる	小片のため傾きには疑問。
84	454	00968	4A 043	半精製深鉢	胴部50cm前後	淡灰茶色	淡黄灰色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	横ナデ	ナデと思われるが、粗く不明	傾きには疑問
84	455	00949	3A下	半精製深鉢		淡黄白色	灰褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	丁寧なナデ。屈曲部はやや上部に、ヘラ状の工具による鋭い沈線	ナデ。屈曲部に幅が細い条痕	小片のため傾きに疑問。
85	456	00904	6A	粗製深鉢	38.6	淡黄白色	淡黄白色～黒褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	2種類の貝殻条痕	ナデ(ヘラ＋指？)	
85	457	00901	4A 029	半精製深鉢	41.9	黄白色。やや橙色を帯びる	黄灰色×灰褐色	1mm未満の細砂粒を含むが微量である	やや不良	横方向の擦過痕。最終的にはナデ調整。	横ナデ	
85	458	00846	4A 193	粗製深鉢	41.6	淡黄茶褐色	灰褐色	1mm大までの砂粒を含む。白色微細砂粒が多い	やや良好	貝殻条痕。	ナデ。口縁下3cmは、横ナデ痕がわずかに残る	口径は不確実。
85	459	00809	3A 046	粗製深鉢	39.8	淡灰褐色	灰褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや不良	2枚貝による横方向の条痕。下に軽い擦過痕	ナデ	口径は不確実。
85	460	00853	4A 192	粗製深鉢	34.7	茶褐色～赤茶褐色	茶褐色	1mm大までの砂粒を含む。白色の微細砂粒が多い	やや良好	ヘラ状工具でケズリ気味のナデの後条痕。	ヘラ状工具によるナデ。全体に横方向の調整痕が残る	傾きは不明確。
86	461	00884	3A下 235	鉢or深鉢	31.4	淡橙色～淡灰色	淡橙色～淡灰色。外面とほぼ同じ	2mm大までの砂粒を含む	やや良好	ていねいなナデ	横ナデ及びナデ。丁寧な調整で平滑	
86	462	00900	4A 002	粗製深鉢	29.6	暗灰褐色・灰茶褐色。	灰茶褐色～灰褐色	2, 3mm大の砂粒を含むが少ない	やや不良	上部は5mm幅の工具で削り、下部は板目状・繊維状の調整痕が残る	全体は丁寧なナデ調整で工具痕あり	
86	463	00813	4A	粗製深鉢	41.3	黒褐色	黒灰色～黄茶褐色	2mm大の砂粒を含む	やや不良	貝殻条痕を横斜め方向に施す。その下に擦過痕あり。	ナデ。指圧痕顕著。気泡が多い	

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
86	464	00823	4A 025	粗製深鉢	34.4	茶褐色	灰茶褐色	1mm大までの細砂粒を含む	やや良好	条痕を全面に施す	横ナデ。条痕あり？	
86	465	00883	4A 037 168	粗製深鉢	33.8	茶褐色	淡橙色×灰褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	6mm～幅の工具によるケズリぎみナデ	横ナデ及びナデ	
87	466	00868	3A下 245	粗製深鉢	20.5	茶褐色(やや灰がかる)	茶褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや良好	2枚貝によると思われる条痕	ナデ	
87	467	00814	4A 013	粗製深鉢	20.0	茶褐色	黄灰白色	砂粒を微量含む	やや不良	5本/cmと細く、密な条痕。	横ナデ	種子圧痕らしきものあり。
87	468	00869	4A 036	粗製深鉢	19.6	暗黄茶褐色	暗黄茶褐色	砂粒をほとんど含まない	やや不良	ナデ調整。	ナデ調整	煤付着
87	469	00844	3B下	粗製深鉢	21.0	灰茶褐色	淡灰茶褐色	微細砂粒を多く含む	やや良好	工具による横方向の条痕を約8cm単位で施す	横方向のヘラ(板状？)工具によるナデ。上からナデ調整	幅1.3cm強の焼成後の穿孔あり。
87	470	00849	3B	粗製深鉢	22.8	淡灰茶褐色	灰茶褐色	3mm大までの砂粒を含む	やや良好	板状工具による、右から左への横ナデ	横方向のナデ	
87	471	00918	4A 191	粗製深鉢	28.6	暗灰茶褐色	黄茶褐色	2mm大までの砂粒を非常に多く含む	やや不良	横ナデの後7～8mm幅の板状工具によるナデ	強い横ナデで横方向に凹帯が形成される。	小片で口径、傾き不確か。
87	472	00836	7B 172	粗製深鉢	26.0	茶褐色	茶褐色	3mm大までの砂粒を含む	やや不良	口縁下は横方向の板ナデ。下部はケズリ痕が顕著に残る	口縁下は横ナデ。下はケズリ・ナデ	
87	473	01606	T4	粗製深鉢		淡褐色	淡褐色	白色の砂粒(径1～2mm)を多量含み、きめは極めて粗い	やや良好	ヘラ状工具によるナデ調整。外面口縁直下に沈線1条、その下に線刻	横方向のナデ調整	
87	474	00910	3A下	半精製深鉢	30.0	やや赤味を帯びた灰褐色	橙色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	ていねいなナデ仕上げ。口縁部直下は、横方向のケズリの痕跡。	ナデ。ナデた方向に筋が見られる	小片のため径は不正確。
87	475	00804	T4	粗製深鉢	26.4	橙色～淡橙色	灰褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	口縁下は横ナデ。その下は条痕。1.5cm幅の単位が観察される	ナデ	
87	476	00907	4A 036	粗製深鉢	34.0	淡黄灰色	灰褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	ケズリの後丁寧なナデ。2ヶ所、径3cmの窪みがある	指押さえの後、ケズリ気味ナデ。口縁直下は強いナデ。	
88	477	00862	4A 038	粗製深鉢		淡黄褐色～黄褐色。一部黒色	上部は黄褐色。下部は灰色	2mm大までの砂粒をわずかに含む	やや良好	ケズリ。あまり砂粒の動きは見られない。	ナデ。種子圧痕らしき物が多い	傾きは小片のため不確実。
88	478	00912	4A 030	粗製深鉢		黄白色	淡灰茶褐色	2,3mm大の砂粒及び微細砂粒を多く含む	やや良好	1cm幅の脂によると思われるケズリ	ナデ	
88	479	00854	4A 014	粗製深鉢		淡黄茶色	灰茶褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや良好	貝殻条痕。口唇部はヘラで面取り。	ナデ。横方向の擦過も所々見られる	傾きは小片のため不明。
88	480	00919	4A 037	粗製深鉢		黄茶褐色	黒灰色	2mm大までの砂粒を多く含む。	やや良好	1cm弱程度の幅の横方向のケズリ	横方向のナデ。単位が顕著	傾きは小片のため不明。
88	481	00864		半精製深鉢		灰黒色～淡黄褐色	灰黒色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	板状と思われる工具によるナデ	横ナデ	
88	482	00908	3B 3A(下) 058 233	粗製深鉢		暗褐色	灰茶褐色～黒灰色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	1cm弱程度の幅の横方向のケズリ	横方向のナデ。	
88	483	00921	3A下 056	粗製深鉢	約42	橙色を帯びた灰褐色	橙色を帯びた黄褐色	3mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	約8mm幅を1単位に、横方向のケズリに近いナデ。ヘラ状工具？	ナデ。強いナデによるのか、横方向に凹線が走る	
88	484	00870	3A 055	粗製深鉢		灰褐色(やや赤味)	灰茶褐色。一部黒変	細砂粒を微量含む	やや良好	ケズリ。	1cm前後幅の工具によるナデ。	
88	485	00858	4A 011	粗製深鉢		淡橙色	暗灰色～淡黄灰色	2mm大までの砂粒を多く含む。5mm大の大粒の砂粒も含む	やや良好	ケズリ風の擦過痕が残るが、一部は2枚貝？の条痕	磨研状の調整が横方向に施される	口唇部に浅く細い刻目が施される
88	486	00865	5B	粗製深鉢		淡黄褐色	灰褐色	微細砂粒は多いが、大きな物(1mm大)はほとんどない	やや良好	2～3mm幅の工具によるケズリか。沈線が1条。	横ナデが切り合う	傾きははっきりしない。
88	487	00916	5B 226	粗製深鉢		淡灰色	茶褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや良好	粗いケズリ	横方向のナデ。下部に若干のケズリ痕	
88	488	00905	6A	精製		茶褐色	塗料によると思われる橙色(他は白乳色)	2mm大の大きめの砂粒を多く含む	やや良好	ケズリ後ナデ	磨研。器面は荒れており、口縁直下のみ調整が残る	外面精製、内面精製。口径25cm程度になると思われる。
88	489	00867	3B下	粗製深鉢		淡橙色	淡黄灰色。一部黒色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	3～4mm幅のヘラ状工具によるナデ	ナデ。丁寧とはいえない	傾きは不正確。
88	490	00906	T5	粗製深鉢		黄茶褐色	灰褐色	2,3mm大までの砂粒を非常に多く含む	やや不良	約1cm幅で強いケズリ	約1cm幅のケズリ。砂粒の動きが顕著	傾きは不確実。
88	491	00903	3A下	粗製深鉢		暗灰茶褐色	灰茶褐色	砂粒をほとんど含まない	やや良好	一物強く削った痕跡が見られるが、最後に全体をナデている	ナデ。一部板状工具によるナデの痕跡あり	傾きは不正確。煤付着。
88	492	00850		粗製深鉢		黒灰色～灰褐色	淡灰茶褐色	2mm大までの細砂粒を含む	やや良好	条痕	条痕	不規則な沈線、口唇部に刻目
88	493	00926		粗製		茶褐色	暗褐色	1mm大までの砂粒を含む	やや良好	横方向のナデ。下に横方向の調整痕が見られる	5cm幅で、磨研状にナデが施されている。	
88	494	00874	3B	粗製深鉢		暗黒褐色	灰黒色	2mm大までの砂粒を非常に多く含む		横方向のケズリ気味ナデ	ケズリ気味ナデ	
88	495	00866		粗製深鉢		橙色(やや沈んだ色)	淡橙色(外面より淡い)	3～4mm大までの砂粒を非常に多く含む	やや不良	粗いナデの後、ケズリ痕を残す調整	横ナデ	傾きは不正確。
88	496	00924	4A 048	粗製深鉢		淡橙色	黄茶褐色	2mm大までの砂粒を非常に多く含む	やや不良	横ナデ	横方向のナデ	
89	497	00879	T4	粗製深鉢	20.9	淡茶褐色。一部スス付着	やや赤味を帯びる淡茶褐色	1mmに満たない微細砂粒を含む	やや不良	軽い条痕をナデ消す	浅い条痕。板目の可能性もある	

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
89	498	00872	T5	粗製深鉢	25前後	黄茶褐色	黄茶褐色	1mm大に満たない細砂粒を含む	やや不良	わずかに板状工具の痕跡、最後はナデ調整	板状工具による調整の後、ナデ	傾きは不正確。
89	499	00894	5下	粗製鉢		淡黄灰色	淡黄灰色	1mm大までの砂粒を含む	やや良好	ナデ。口唇部に1mm弱幅の浅い沈線	ナデ。一部刷毛状の浅い調整痕	
89	500	00856	T5	粗製深鉢		乳白色	白黄色	2,3mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	貝殻条痕の後ナデ	丁寧なナデ	
89	501	00857	4A 215	粗製深鉢		淡黄褐色	淡橙褐色	3mm大までの砂粒を含むが、多くはない	やや良好	横方向の条痕か。1.5cm幅程度の単位	強い横ナデ。横方向に凹部がある	
89	502	00902		粗製深鉢		橙色を帯びた灰茶褐色	淡灰褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	8mm幅のケズリ後ナデ	1cm幅ごとに凸凹を繰り返す。洗濯板状	
89	503	00861	6A 319	粗製深鉢		淡灰褐色・黒色	灰色	2,3mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	3mm幅の単位で刷毛目状の調整痕が残る	擦過痕も残るが、ナデ消している	口唇部下工具による面取り。
89	504	00873	T5	粗製深鉢		茶褐色	黒灰色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	ケズリ。工具は不明。	ナデ。	種子圧痕らしきものあり
89	505	00909		粗製深鉢		淡灰褐色	淡灰茶褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	横ナデ	横ナデ。若干の擦過痕あり	
89	506	00914	3B 268	粗製深鉢	約29	茶褐色～暗茶褐色	灰褐色	砂粒をほとんど含まない	やや良好	ケズリの後丁寧なナデ	板状工具の跡が少し残るが、全体としてナデ	煤が付着する
89	507	00913	3B 271	粗製深鉢	約35	淡黄灰色。一部淡い橙色	灰茶褐色	4mm大までの砂粒を含む	やや良好	右から左へのケズリ。7mm幅の単位を持つ	右から左へのケズリの後ナデ	口径35cm前後と思われる。
89	508	00855	T4	粗製深鉢		暗茶褐色	暗灰茶褐色～黒褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	1cm前後の工具による調整	ナデ	
89	509	00863		粗製深鉢		淡黄灰色	淡黄灰色	2mm大までの砂粒を少し含む	やや良好	6mm単位のケズリ。板状の工具か？	板目状の擦過も残るが、ナデ	
89	510	00838	3A下	粗製深鉢		淡橙灰色	暗灰色	砂粒をほとんど含まない	やや良好	繊維束、貝殻状の工具による条痕。口縁直下はナデ。	ナデ	傾きは不明。
89	511	00893	T4	粗製深鉢		灰茶褐色。一部スス付着	淡灰茶褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	8mm幅の断面に凹状の調整痕が見られる	口縁下に貝殻条痕？が残る。下部はナデ。	
89	512	00828	4A 169	粗製深鉢		茶褐色	灰茶褐色	3～4mm大までの砂粒を含む	やや不良	条痕	ナデ	
89	513	00878	3A 056	粗製深鉢		淡灰色	淡黄褐色	砂粒をほとんど含まない	やや不良	板状工具によるナデ	ナデ。やや粗い	口唇部は浅い刻目を施す。
89	514	00851		粗製深鉢		茶褐色	暗茶褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	縦方向の条痕．沈線	横方向の貝殻条痕	波状口縁を成す。
89	515	00841	3A下 245	粗製深鉢		淡灰茶褐色	淡灰茶褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	刷毛目状の調整	ナデ	口径40cm前後と思われる。
89	516	00871	3B 274	粗製深鉢		灰黒色～淡灰茶褐色	灰黒色	砂粒をほとんど含まない	やや良好	横方向のナデを重ねる	所々に横方向の調整痕が見られるが、ナデ消す	傾きは不正確。
89	517	00877	6A	粗製深鉢		淡黄褐色	淡灰褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	ケズリの後横ナデ	ナデ	
89	518	00818	4A 168	粗製深鉢		赤味を帯びた茶褐色	暗茶褐色	1mm大の砂粒を少量含む	やや良好	繊維束状の工具か	ナデ	
89	519	00897	T5	精製深鉢		淡黄灰色	灰黒色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	磨研痕は見られないが、光沢を持ち平滑な器面	わずかに磨研痕が残る。平滑な器面	
89	520	00895	4A 168	粗製深鉢		淡赤茶褐色	淡茶褐色×黒灰色	2mm大までの半透明白色砂粒を含む	やや不良	横ナデによると思われる窪みが見られる	横方向のナデ	気泡に混じり、種子圧痕が見られる。
89	521	00859	3B	粗製深鉢	約25	淡黄褐色	淡黄褐色	1mm以下の微細細砂粒を非常に多く含む	やや良好	浅い条痕が見られるが、工具は不明。	横方向の擦過痕あるが、明瞭ではない	傾き不明。口唇部に刻目。
89	522	00860	T5	粗製深鉢		茶褐色(やや赤味を帯びる)	淡茶褐色(やや赤味を帯びる)	1mm以下の細砂粒を含む	やや不良	右から左上への粗いケズリ。8mm幅の単位、貝殻か。	3～4mm幅の磨研状のナデ調整	
89	523	00820	T5	半精製深鉢	約40	淡茶褐色	淡茶褐色	細砂粒及び4～5mm大砂粒を含む	やや良好	2枚貝によると思われる条痕	ナデ	傾きにやや不安。
89	524	00819	T5	粗製深鉢		黒灰色	淡灰白色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	条痕	ナデ	
89	525	00835	4A 040	粗製深鉢		赤茶褐色	暗茶褐色	3～4mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	右下から左上へのケズリ。器面は粗い	横ナデ及び板ナデ	
89	526	00834	4A 167	粗製深鉢		茶褐色	暗茶褐色	微細砂粒をわずかに含む	やや不良	ケズリ。粘土溜による凸凹が多い	ケズリ後、横ナデ	
89	527	00810	3B 050?	粗製深鉢		淡灰茶褐色	淡灰茶褐色	微細砂粒を含む	やや良好	横方向の条痕あるいは板目の跡か	ナデ。接合痕あり	
90	528	00886	T5	粗製深鉢		黄灰褐色	黒灰色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	ナデ調整	横方向のナデ。幅1.5cm強	下部には斜方向の沈線が3本
90	529	00827	4A 168	粗製深鉢	約30	淡茶褐色～黒灰色	灰茶褐色	2mm大の砂粒を多く含む	やや良好	条痕の後、口縁部は横ナデ	横ナデ	傾き不確定
90	530	00837	4A 169	半精製深鉢		淡灰褐色	淡橙灰色	1mm大までの砂粒を含む	やや良好	条痕の後はナデ	ナデ	
90	531	00839	4A 168	半精製深鉢		淡灰色	暗灰色	微細砂粒を微量含む	やや良好	調整は横方向のケズリで、板目状を呈す。擦痕も見られる	横ナデ。各ナデ間が稜を成す。	
90	532	00816	4A 007	深鉢	約30	淡黄白色	暗灰色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	条痕が見られるが、軽くナデる程度	磨研状の調整	
90	533	00887	4A 168	半精製深鉢	約27	黄灰褐色	灰褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	5mm幅程度の工具でナデた後ナデ	口縁下2mmは丁寧なヘラナデ。それ以下はナデ	
90	534	00805	T5	粗製深鉢		黄灰色	黒灰色	2mm大までの砂粒を含む	やや良好	1.5cm幅の単位で浅い条痕	1cm幅の横ナデを重ねる。	
90	535	00890	2A 142	半粗製深鉢		乳白色	灰黒色	4mm大までの砂粒を非常に多く含む。	やや良好	所々に板状工具によるナデ痕あり	頸部は横ナデ胴部は板状工具によるナデ	

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
90	536	00806	4A 168 037	粗製深鉢		暗茶褐色	黒灰色	1mm大までの細砂粒を多く含む	やや良好	主に横方向の条痕。全面に施すが、浅く潰れている。	ナデ	
90	537	00896		(半)精製深鉢		淡橙色	黄白色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	横ナデだが、方向がやや一定していない	横ナデ	
90	538	00829	3A下 238	粗製深鉢		黒色に煤けるが地は淡橙色	淡橙色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	横方向の条痕	横ナデ	原体不明。
90	539	00876	6A	粗製深鉢		淡黄褐色	淡黄褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	ケズリの後横ナデ(右→左)	板状工具によるナデの後、横ナデ	
90	540	00843	3B 085	粗製鉢		灰褐色	黒色。光沢がある	微細砂粒を微量含む	やや良好	右から左への横方向のケズリ	横方向の調整痕も見られるがナデ光沢あり	
90	541	00807	7B 172	粗製深鉢		暗茶褐色	茶褐色	1mm大までの砂粒を含む	固い	下から上へ斜方向に1cm～幅の条痕。板状工具か	ナデ	傾きは不正確。
90	542	00822	6A	粗製深鉢		灰茶褐色	灰茶褐色	砂粒をほとんど含まない	やや良好	2枚貝によると思われる条痕。	丁寧なナデ。気泡が多い	径30～35cm前後と思われる。
90	543	00821	T5	粗製深鉢		黄白色。一部黒灰色	暗褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	軽い貝殻条痕	横ナデ	径25～30cm位と思われる。
90	544	00842	5B 077	粗製深鉢		茶褐色。ススが付着	淡灰茶褐色	1mm大までの砂粒を含む	やや不良	右から左への横方向のケズリ	ナデ	
90	545	00826	4A	粗製深鉢		灰茶褐色	灰白色	1～2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	条痕の後ナデ	横ナデ	傾きにやや不安。
90	546	00817	3B	粗製深鉢	25～30	淡茶褐色	淡茶褐色	3mm大までの砂粒を含む	やや良好	横ナデの後、条痕を施す(右→左)	横ナデ	
90	547	00815	6B	粗製深鉢	約40	灰色～黒灰色	黒灰色	2mm大までの砂粒を少量含む	特に固い	ナデ。調整の後、軽く条痕	横ナデ	
90	548	00840	6A	粗製深鉢		暗茶褐色	暗灰褐色	1mm大までの砂粒を多く含む		ケズリ後ナデ。器面に凸凹は少ないが荒い	ケズリ後ナデ。器面に横方向に凸凹があるが、滑らかな器面	
90	549	00811	3A下 238	半精製鉢?	19.2	暗灰茶褐色	暗灰茶褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや良好	条痕の痕跡があるが後にナデ消している。脂の跡が残る横ナデ	脂の跡がよく残る横ナデ	
90	550	00825	5A	粗製深鉢		暗茶褐色	暗茶褐色	砂粒をほとんど含まない	不良	条痕	ヘラ状工具によるケズリ？明瞭な稜を持つ	
90	551	00917	6A 112	粗製深鉢	約28	淡茶褐色	淡茶褐色。外面より淡い	2mm大までの砂粒を1mm弱のものを主に多く含む	良好	板状工具の痕跡が残るが、全体をナデており、はっきりしない	横方向の工具痕が2つ見られるが、全体は横方向のナデ	
90	552	00892	3B 280	半粗製深鉢	約22	淡灰褐色	淡茶褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	軽く条痕が残る。横ナデ	横ナデ	傾きは不明確。
90	553	00824	4A 167	粗製深鉢	約30	茶褐色	灰白色	2mm大までの細砂粒を多く含む	やや良好	条痕の後ナデか	横ナデ	
90	554	00888	4A 032	粗製鉢		赤茶褐色×黒色	淡灰褐色。	2mm大までの砂粒を含む	やや不良	1cm弱幅の工具によるケズリ	ナデ	
90	555	00889	T5	(半)精製深鉢		黄灰茶褐色	灰黒色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	横方向の2～3mm幅の磨研	横方向の2～3mm幅の磨研	口唇部に刻目風に縄文が施される。
90	556	00899		粗製鉢？		灰茶褐色	黄灰褐色	微細砂粒を含む	やや不良	7mm幅の単位のケズリが見られる。	上部はナデ。屈曲部に斜方向に条痕風の調整痕	口縁は山形を呈する可能性もある。
90	557	00852		粗製深鉢		黒灰色～灰褐色	淡灰茶褐色。	2mm大までの細砂粒を含む	やや良好	条痕→短沈線	貝殻条痕	
91	558	00833	2A 140	粗製鉢	26.2	茶褐色一部橙白色が混じる	茶褐色～黄茶褐色が混じる	3mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	胴部は条痕の後ナデ。繊維束状か。頸部はケズリの後にナデ	頸部にケズリ痕が見られる。上部はナデ、その前に条痕か。	
91	559	00967	T4	粗製鉢		茶褐色	やや黄味を帯びた淡茶色	砂粒をほとんど含まない	不良	ナデ。全体に煤が付着	ナデ。接合線が消されていない。	
91	560	00927	6A	粗製鉢	10.6	茶褐色に煤が付着	暗灰色	1mm大までの砂粒を含む	不良	横方向のナデ	ナデ	
91	561	01578	4A 198	半精製深鉢	13.1	暗褐色	暗褐色	白色の砂粒(径1mm)を多量含み、きめは粗い	やや不良	粗いヘラケズリ気味ナデ。横方向の条線が残る。	ナデ調整。雑で粘土接合部痕が残る	頸部中央あたりに焼成後、穿孔
92	562	01020	4A 024	粗製深鉢	18.0	橙白色。底面は橙色	暗橙色	砂粒を含むが微量	やや不良	横方向の条痕。単位は不明確	条痕もわずかに見られるがナデ	
92	563	00989	T5	粗製	11.0	橙色	灰茶褐色。底面は灰白色	2～1mm大の砂粒を多く含む	やや不良	ケズリ(右→左)の後ナデ	横方向のナデ	
92	564	00988	4B 045	粗製	13.6	淡橙白色。底部は淡灰茶色	黄味を帯びる淡灰白色。上部は橙色	2mm大までの砂粒を含む	やや不良	縦方向(下→上)のケズリ	ナデ	
92	565	01010		粗製	11.2	淡橙色	灰褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	固い	ナデ	ナデ	
92	566	01014	6A	粗製	13.3	淡橙白色	茶褐色	微細砂粒を含む	やや不良	ナデ	ナデ	
92	567	01021		粗製深鉢	10.9	橙色。底面は淡い	淡灰茶褐色。底面は暗灰色	微細砂粒を含む	やや良好	内湾部は横ナデ。胴部下部はナデ。	胴下部はナデ。底面はヘラ状工具によるナデ	種子圧痕らしきものあり。
92	568	01006	4A 066	粗製	26.2	淡黄橙白色	灰茶褐色	砂粒をほとんど含まない	やや不良	ナデ。横ナデによるものか、1.5cm高の所にゆるい稜が横方向に入る	ナデ	
92	569	00994		粗製	11.0	黄白色	灰白色	3mm大までの砂粒を非常に多く含む	やや良好	ナデ。条痕が若干残る	ナデ。やや粗い	
92	570	01003	6A	粗製	10.0	淡橙白色	灰茶褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	ナデ	ナデ。4mm幅のヘラケズリの痕跡あり	

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
92	571	01007	3B下	粗製	8.8	黄白色	淡黄灰白色	1mm大までの砂粒を多く含む	良い	ナデ	ナデ	
92	572	01005	5A 055	粗製	8.0	淡橙白色	淡橙白色。底部は茶褐色	2mm大までの砂粒を非常に多く含む	良好	ナデだが凸凹がある	丁寧なナデ	
92	573	01012	4A 008	粗製	8.4	橙茶色	灰茶褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや良好	ナデ	ナデ。指によるナデの痕が残る	
92	574	01008	T5	粗製	9.5	橙白色	淡灰白色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	ナデ。4mm幅の工具による断面が弧になる。	ナデ。粗い	小片のため径は不確実。
92	575	01009	3B 284	粗製	8.4	橙白色	灰白色	3mm大までの砂粒を多く含む	良い	ナデ。下端は横方向。やや上になると縦方向のナデ	底面に横方向の擦過あり	
92	576	00993		粗製	9.2	淡橙色	淡灰褐色	2mm大までの砂粒を含むが、微細砂粒が主体	特に良い	ナデ	ナデ	
92	577	00991	4A 028	粗製	10.8	淡橙色	暗灰褐色	3mm大までの砂粒を多く含む	特に良い	横方向のナデを施す底面は3mmのヘラナデ	ナデ	
92	578	01011	6A	粗製	10.0	橙色×橙白色	淡灰白色	1mm大までの砂粒を多く含む	良好	ナデ。条痕と思われる調整痕が見られる	ナデ。刷毛状の調整痕が残る	弥生土器か？
92	579	00999	6A	粗製	6.8	黒灰色～茶褐色	灰茶褐色	2,3mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	上下方向のケズリ痕がわずかに残り、ナデ仕上げ	ナデ	
92	580	00998	T5	粗製	7.3	橙褐色	灰茶褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	ナデ	ナデ	
92	581	00992	4A 030	粗製	8.4	淡橙褐色	灰黒色	3mm大までの砂粒を非常に多く含む。	やや良好	ナデ。くびれ部に絞り痕状の線が入る	ナデ。鋭く浅い。工具の端部の痕跡か	
92	582	01016	6A	粗製	17.0	淡黄褐色	灰褐色	3mm大までの砂粒を非常に多く含む	良好	ナデと板状工具によるケズリ。底面はナデ。	ナデ。著しく粗い	
92	583	00997	T4	粗製	8.0	橙白色	灰茶褐色	2mm大までの砂粒を含むが、粘土は細かい	大変良い	ナデ	ナデ	
92	584	00996	6A	粗製	8.2	淡橙色	淡灰色	2mm大までの砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ。大きな気泡が目立つ	
92	585	00981	4A 017	粗製？	6.2	灰白色。わずかに橙色を帯びる	灰白色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	ナデ	ナデ	
92	586	01000	T5	粗製	10.0	橙白色	灰茶褐色	3mm大までの砂粒を含む。微細粒を多く含む	不良	ナデ	ナデ	
92	587	00984		粗製	7.0	橙色	灰色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	ケズリ？粘土溜が多い	ナデ	
92	588	01019	3B 007	精製	13.4	淡黄灰色	灰茶褐色	1mm大までの砂粒を含む	良好	丁寧なナデ	ナデ	
92	589	01002	T5	粗製	8.3	淡橙白色	黒灰色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	くびれ部から上に、粘土溜による凸凹がある	底面に条痕	
92	590	01004	4A 005	粗製	10.0	淡橙色	淡灰茶褐色	2mm大の砂粒を微量含む	やや不良	ナデ	ナデ。横方向の擦過が見られる。	
92	591	00982	4A 217	粗製か半精製	7.0	灰褐色×淡橙色が混ざる	暗灰色～淡灰褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	ナデ調整	ナデ調整。条痕かケズリの痕跡。	
92	592	00980	4A 197	粗製	7.0	淡灰橙色	灰褐色～黒灰色	1mm大までの細砂粒を非常に多く含む	やや不良	条痕状の調整痕が残る	ナデ	
92	593	00985	4B 045	粗製	7.0	淡橙白色	橙色	2mm大までの砂粒を非常に多く含む	やや不良	ナデ。やや粗い	ナデ	
92	594	00995		粗製	7.0	淡黄橙色	灰褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	不良	ナデ。厚さ2mmの粘土溜あり	ナデ。横方向の工具痕あり	
92	595	01605	4A 168	精製鉢?		黒褐色	黒褐色	白色の砂粒(径1mm)を多く含み、きめは粗い	良好	丁寧なヘラ磨研	丁寧なヘラ磨研	
92	596	00986		粗製	7.8	淡橙灰色	灰白色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	ケズリ(右→左)。下部はナデ	ナデ。ケズリ痕が見られる	
92	597	01022	3B 279	粗製深鉢	9.2	暗灰茶褐色	黒灰褐色	2mm大までの砂粒を少量含む	不良	ケズリの後ナデ。ナデが行き届かず、ケズリ痕が残る	横方向のナデ。所々横方向の擦痕が残る	
92	598	00987	7B 176	粗製	11.2	胴部はごく淡い橙白色。底は淡灰褐色	淡灰褐色	3mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	ケズリ痕あり。ナデ	ケズリが痕見られる。ナデ	
92	599	01013	4A 6A 013	粗製	9.6	淡橙色	黄白色、淡灰茶色	2mm大までの砂粒を含む	やや不良	ナデ。若干の刷毛状の調整痕が見られる	ナデ	
92	600	01015	6B 122	粗製	9.4	灰茶褐色	灰褐色	2mm大までの砂粒を多く含む	やや良好	ケズリ気味ナデ。8mm幅で斜方向に施す。	細い条痕。	
92	601	00983	T5	粗製か半精製	4.2	淡橙色	淡黄褐色	3mm大までの砂粒を非常に多く含む	やや良好	ナデ	ナデ	
93	602	01550	3B 276 238 270	精製浅鉢	20.2	わずかに赤味を帯びた褐色	暗褐色	白色の砂粒(0.1～3mm)を多く含み、やや粗い	良好	全体にわたって細かなヘラ磨研	頸部から口縁は丁寧な磨磨研。底部付近はナデ。	黒色顔料塗布か
93	603	01549	3A 048	精製浅鉢	28.2	淡黄褐色	暗褐色	白色の砂粒(径1mm)を少量含む	やや良好	横位の丁寧なヘラ磨研	横位の丁寧なヘラ磨研	口縁は浅い波状口縁。
93	604	01553		精製浅鉢	15.8	黒褐色	黒褐色	径0.5mm程度の砂粒を含み、やや粗い	良好	横位の丁寧なヘラ磨研	横位の丁寧なヘラ磨研	口唇上端に沈線を1条囲う。
93	605	01517		精製浅鉢	26.5	茶褐色	淡橙色×茶褐色	微細砂粒を少量含む	良好	横磨研。頸部は単位が細かく、光沢がある	横磨研。多少荒れている。	
93	606	01521	4A 167 156	精製浅鉢	31.0	灰茶褐色	黒色～黒褐色	2mm大までの砂粒を多く含む		磨研に近い横ナデ。2mm以下の細い単位。		
93	607	01524	3A 060	精製浅鉢	30.7	淡橙白色	黒灰褐色	1mm大までの砂粒を微量含む	良好		頸部は磨研痕が残るが、胴部ははっきりしない。	小片のため口径は不確実。

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
93	608	01520	4A 026	精製浅鉢	30.4	淡黄褐色	淡茶褐色	1mm大までの砂粒を含む。黒色鉱物を含む	良好	磨研。後に多少ナデ？	磨研。後に多少ナデ？	
93	609	01516		精製浅鉢	33.8	淡橙色と茶褐色が混じる	頸部は淡橙色。胴部は灰黒色	1mm以下の砂粒を含む	良好	やや粗い磨研。2,3mm幅と狭い	やや粗い磨研。2,3mm幅と狭い	復元口径は不確か。
93	610	01518	4B 045	精製浅鉢	34.2	頸部は灰黒色。胴部は灰褐色～灰白色		2mm大までの砂粒を多く含む	良好	磨研だが器面の荒れのため不明確。磨研の単位は2～0.5mm幅。		
93	611	01572	3A下 231	精製浅鉢		上半は淡褐色下半は黒色	暗褐色	砂粒(0.1～1mm)を多く含み、やや粗い	極めて良好	丁寧な横位のヘラ磨研	丁寧な横位のヘラ磨研	口縁文様帯には凹線を1条めぐらす。
94	612	01566		精製鉢		灰白色	灰色がかった淡褐色	微細な砂粒を含む	やや不良	横位のヘラ磨研(巾0.5cm)	横位のヘラ磨研(巾0.5cm)	
94	613	01564	6A	精製浅鉢		茶褐色	黒色	砂粒(径1～1.5mm)を含み、やや粗い	やや良好	ナデ？全面に煤が付着	丁寧なヘラ磨研	
94	614	01565	6A 220	精製浅鉢		淡褐色	淡褐色	1㎜大の白色粒を多く含み、やや粗い	良好	ヘラ磨研。特に精緻	ヘラ磨研	
94	615	01539	T5	精製浅鉢		暗灰褐色	暗灰褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや不良	磨研	磨研	
94	616	01537	T5	浅鉢か深鉢		淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	1mm大までの砂粒を多く含む	やや不良	磨研	磨研	
94	617	01511		精製浅鉢		茶褐色	茶褐色	細砂粒を含む	良好	ナデ	ナデ	
94	618	01530	4A 168	精製浅鉢		灰白色	灰白色	微細砂粒を含む	良好	やや粗い。磨研の後ナデか。平滑だが光沢なし	磨研	
94	619	01571		精製浅鉢		やや白味を帯びた黒褐色	やや白味を帯びた黒褐色	白色の砂粒径0.5mm)を多く含み、きめは粗い	やや不良	雑なヘラ磨研？	ナデ調整	口縁は波状をなす。
94	620	01532	4A	半製浅鉢?		灰白色	黒灰色	2mm大までの砂粒を含む	良好	横ナデ。砂粒の流れも	横ナデ	
94	621	**欠番**										
94	622	01514	4A 069	(半)精製浅鉢		淡橙色	灰褐色	1mm大までの砂粒を含む	やや良好	ナデ	ナデ	
94	623	01525	T5	精製浅鉢？	約38.5	茶褐色	黄褐色	1mm大までの砂粒を含む	良好	粗く詳細は不明。ナデのようである。	磨研だが、光沢はない	黒色付着
94	624	01534	4A 166	精製浅鉢		灰褐色	灰褐色	微細砂粒を含む	やや良好	横ナデ	粗い磨研	
94	625	01533		精製浅鉢		灰白色	灰褐色	微細砂粒を含む	良好	やや粗い磨研	やや粗い磨研	
94	626	01526	T5	精製浅鉢		灰褐色	灰茶褐色	2mm大までの砂粒を含む	やや良好	粗い磨研	磨研。ナデのためか、上部は単位が観察されない	
94	627	01527	T5	浅鉢		黒褐色	灰黒色	微細砂粒を含む	やや不良	磨研	磨研	黒色付着
94	628	01529	6A	精製浅鉢		灰褐色	灰褐色	微細砂粒を含む	良好	ごく細い磨研	横方向の磨研だが、ナデのためはっきりしない	作りは固い。
94	629	01535		精製浅鉢		灰茶褐色	灰茶褐色	1mm大以下の砂粒を含む	やや良好	磨研	磨研	
94	630	01512		精製浅鉢		淡灰色	淡灰色	微細砂粒を含む。大きなものはない	やや良好	ナデ調整	ナデ調整	
94	631	01531		精製浅鉢		黄灰白色	淡灰色	細砂粒を微量含む	やや良好	磨研。単位見えず平滑	磨研。外ほど平滑でない	
94	632	01552	4A 209	精製浅鉢		黒褐色	黒褐色	微細な白色の砂粒を多く含み、やや粗い	良好	横位の丁寧なヘラ磨研	横位の丁寧なヘラ磨研	口縁部には、沈線を1条巡らす。
94	633	01522	4A 169	精製浅鉢		やや橙色を帯びた淡灰褐色	やや橙色を帯びた淡灰褐色	1mm大以下の細砂粒を含む	やや良好	磨研調整。1単位が2mm強	磨研調整。1単位が2mm強	口唇部内面の沈線はごく浅い。
94	634	01556	3B下	精製浅鉢		ごくわずかに赤味を帯びた淡褐色	ごくわずかに赤味を帯びた淡褐色。	ごく微細な砂粒を少量含みきめはかなり細かい	やや良好	ヘラ磨研(ヘラの巾は0.2cm)	ヘラ磨研(ヘラの巾は0.2cm)	口縁は緩い波状を呈し、突部に押点、
94	635	01528		精製浅鉢		灰褐色	灰褐色	1mm大までの砂粒を含む	やや良好	磨研痕が残るが、やや粗いのとナデにより明瞭でない	磨研痕が残るが、やや粗いのとナデにより明瞭でない	
94	636	01523		精製浅鉢		灰白色	淡灰茶色	微細砂粒をわずかに含む	良好	細い横方向の磨研	細い横方向の磨研	
94	637	01555	4A 063	精製浅鉢		わずかに赤味を帯びた淡白褐色	わずかに赤味を帯びた淡白褐色	径0.5～1mmの白色砂粒を含み、きめはやや粗い	やや不良	横位の丁寧なヘラ磨研	横位の丁寧なヘラ磨研	口縁内面上端に凹線を1条ほど越す。
94	638	01515	4A 167	精製浅鉢		淡灰茶褐色	黒色(光沢あり)	1mm大未満の細砂粒を含む	良好	磨研	磨研	
94	639	01536		精製浅鉢		灰褐色	淡灰色。口唇部は淡橙色	微細砂粒を含む	やや良好	細い磨研	横方向のナデ	
94	640	01554		精製浅鉢		わずかに赤味を帯びた淡白褐色	わずかに赤味を帯びた淡白褐色	白色の砂粒(径0.1～1mm)を含み、きめはやや粗い	やや不良	横位の細かなヘラ磨研	横位の細かなヘラ磨研	口縁上端と頸部屈曲部に1条の沈線
94	641	01558	3A 227	半精製浅鉢		白味の強い淡褐色	白味の強い淡褐色	砂粒(2mm～5mm程度)を多量含み、極めて粗い	やや不良	雑なヘラ磨研？	板状工具回でナデ	浅鉢か深鉢か不明。

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
94	642	01577	T5	精製鉢		白味がかった淡褐色。	暗褐色	微細な砂粒を含み、きめはやや細かい	やや良好	特に丁寧なヘラ磨研	ヘラ磨研	口縁に1条の沈線。口縁付近は黒色の焼きむら
94	643	01567	6A 116	精製鉢		やや灰色がかった淡褐色	黒褐色	粗大な白色の砂粒(3mm)を少量に含む	やや不良	横位のヘラ磨研	横位のヘラ磨研	
94	644	01574	T4	精製椀		淡い白褐色。黒色の焼きむらあり	淡い白褐色	微細な砂粒を含み、きめは細か	極めて良好	極めて精緻なヘラ磨研	極めて精緻なヘラ磨研	口縁外面には2条の沈線をめぐらす。
94	645	01575	T5	精製椀		黒褐色	黒褐色	白色の微小な砂粒を多量含み、きめは粗い	やや不良	ヘラ磨研	ヘラ磨研	
94	646	01568	3B	半精製鉢		茶褐色。ススト付着痕あり	淡褐色。一部黒灰色の焼きむらあり	砂粒(径1mm)を含み、やや粗い	良好	ナデ調整(横位の痕跡が残る)	ナデ調整(横位の痕跡が残る)	
94	647	01569	6A	半精製鉢		わずかに赤色がかった白褐色	赤色がかった白褐色	微細な砂粒を少し含む	良好	ヘラ磨研を施すが、雑である	ヘラ磨研を施すが、雑である	
94	648	01603	4A 205	精製土器		右半分は黄褐色、左半分は黒褐色	黒色	白色の砂粒(0．5～2mm)を比較的多く含み、粗い	良好堅致	巾約3mm程のヘラで、丁寧に磨研(横方向)。	巾約3mm程のヘラで、丁寧に磨研(横方向)。	外面口縁に線刻、内面口縁に横位の沈線3本
95	649	01017	4A 201	精製？	8.2	淡明赤色(丹塗り)	灰茶褐色	1,2mm大までの砂粒を多く含む	良い	横方向のケズリ。底部付近は縦のヘラ状工具による磨研状ナデ	ナデ	
95	650	00978	5A 069	粗製	10.0	淡橙色	淡黄褐色～灰褐色	2mm大までの砂粒を非常に多く含む	やや不良	横方向のケズリ。粘土溜。底部はナデ	ナデ	
95	651	01582	4A 008	精製浅鉢		灰白色がかった淡褐色	灰黒色	砂粒(微細～径2mm)を少量含む	良好	ナデ？	ナデ？	底部径は極く小さく、上げ底。
95	652	01580	4A 014	精製浅鉢		淡褐色。部分的に黒褐色(ススト付着)	暗褐色	径1mm程の砂粒を多量含み、きめはやや粗い	良好	ヘラ磨研	ヘラ磨研	底部径は小さく、やや上げ底。
95	653	00977	6A	粗製	7.2	淡橙色	淡灰褐色	2mm大までの砂粒を非常に多く含む	やや不良	ケズリ(右→左)後ナデ	ナデ	底部
95	654	00979	6A	粗製？	9.6	淡橙色	暗灰褐色	1mm弱大の白色砂粒を非常に多く含む	やや不良	ナデ	ナデ	
95	655	01581	6A	半精製浅鉢		白味の強い淡褐色	黒色	白色の砂粒(微細～2mm)を多量含み粗い	良好	ヘラ磨研	ヘラ磨研	
95	656	00975	083	粗製か半精製	7.2	淡灰茶色	淡黄灰色	1mm大までの砂粒を含む	良好	ナデ調整。横方向のヘラ？の痕跡あり	丁寧なナデ調整	底部
95	657	01583	4A 168	精製鉢		黄白褐色	白味がかった明褐色	砂粒を少量含む	不良	ヘラ磨研	ヘラ磨研	
95	659	01585	3A 048	精製？鉢		白灰色がかった淡褐色	黒灰色	白色の砂粒(径1mm)を多量含み、極めて粗い	良好	底部外面はヘラ削り	ナデ調整？	わずかに上げ底気味
95	660	01584	3A下 245	半精製鉢		白味の強い淡褐色	黒褐色。煤が付着	白色の砂粒(1～2mm)を含み、やや粗い	やや不良	ヘラ磨研？	ナデ。(もしくは磨研？)	
111	813	01755	T7	粗製深鉢		淡褐色	淡褐色	微細な砂粒を少量含む	良好	板状工具でナデ。方向は一定せず	ナデ調整	煤付着痕あり
111	814	01758	T7	半精製深鉢		淡褐色	暗褐色	1mm以下の白色粒を多量含み、粗い	良好	浅い条痕。口縁の屈曲部分はナデ	ナデ調整	
111	815	01756	T7	粗製深鉢		褐色	淡褐色	砂粒(径1mm)を多く含み、粗い	良好	条痕	ナデ、はじめに条痕か	
111	816	01757	T7	粗製深鉢		明褐色。煤付着痕あり	灰黒色	砂粒(径0.5～1mm)を含み、やや粗い	やや良好	口縁以下約1cmは、無文帯。それ以下は横位の条痕	丁寧なナデ調整	
111	817	01754	T7	粗製深鉢		やや茶色がかった黄褐色	灰黒色	白色の砂粒(0.5～3mm)を多量含み粗い	やや良好	ナデ調整	ナデ調整	沈線2条をめぐらせる。
111	818	01752	T7	半精製浅鉢		淡褐色	淡褐色	砂粒(径0.5mm)を含む	良好	横位のヘラ磨研	横位のヘラ磨研	やや幅広の沈線が1条めぐる。
111	819	01751	T7	精製浅鉢		黒褐色	黒褐色	微細な砂粒を少量含む	やや良好	横位のヘラ磨研	横位のヘラ磨研	外面に凹線を1条めぐらす。
111	820	01753	T7	半精製鉢		淡褐色	淡褐色	微細な砂粒を多量に含む	やや良好	ナデ	ナデ	口縁内面に1条、外面に2条の沈線
111	821	01760	T7	粗製深鉢		淡赤褐色	暗褐色	白色の砂粒(径1～1.5mm)をかなり多量含み極めて粗い	良好	板状工具？でナデ	板状工具？でナデ	底部
111	822	01759	T7	精製		白味の強い黄白色	黒色	微細な砂粒を多量含み、きめはやや粗い	良好	丁寧なナデ調整	丁寧なナデ調整	
113	844	01801	T10	精製浅鉢		暗褐色	暗褐色	1mm以下の砂粒を少し含む	良好	横位の細かなヘラ磨研	横位の細かなヘラ磨研	波状口縁。
114	853	01822	T11	粗製深鉢		褐色	褐色	細かな砂粒を少量含む	やや不良	条痕を施すが、方向は一定しない	上半は条痕、下半は板状工具でナデ	煤付着痕が認められる
114	854	01824	T11	精製椀		暗褐色	黒褐色	白色の砂粒(0.5mm)を多く含みやや粗い	良好	丁寧なヘラ磨研。	丁寧なヘラ磨研	外面口縁に2条の沈線、下の沈線上に押点を施す
114	855	01821	T11	半精製深鉢		淡褐色で、部分的に暗褐色	黒褐色	砂粒(径0.5～1mm)を含み、きめはやや粗い	やや良好	かなり雑な磨研状ヘラナデ	雑な磨研状ヘラナデ	煤付着痕あり
114	856	01823	T11	粗製深鉢		淡赤褐色	淡赤褐色	粗大な砂粒を多量含み、きめはかなり粗い	良好	条痕を施す	条痕を施す。内面口縁近くは、上からナデ消している	
115	861	01675	T14	粗製深鉢	28.2	淡褐色	淡褐色～赤褐色	白色の砂粒(径0.5～2mm)を多量含み、粗い	やや良好	貝殻条痕が残るが、肩部のみナデて条痕を消す。	口：ヨコナデ、他は横方向のケズリ気味のヘラナデ	肩部に一部煤付着

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
115	862	01673	T14	粗製深鉢	33.5	淡褐色	灰褐色	粗大な砂粒(2mm)を多量含み極めて粗い	やや良好	条痕。口唇部に斜位の刻目を押圧。	丁寧なナデ調整	煤付着痕あり
115	863	01676	T14	粗製深鉢	34.9	褐色	褐色	砂粒(微細～2mm)を多量含み極めて粗い	やや不良	条痕を施した後、粗いナデ調整。	ナデ仕上げ	
115	864	01674	T14	粗製深鉢	43.9	屈曲部以下は暗褐色、以上は淡褐色。	屈曲部から上は黒褐色、下は淡褐色。	白色の砂粒(径1～3mm)を多量に含み、極めて粗い	やや不良	貝殻条痕が横方向に残る	ナデ調整	
116	865	01686	T14	深鉢		やや黒ずんだ淡赤褐色	淡赤褐色	やや粗大な砂粒(径0.5～2mm)を多く含む。滑石を含む	やや良好	ナデ。指頭により施文	横方向の削り	中期(阿高系)
116	866	01671	T14	半精製深鉢		黒褐色	淡褐色	砂粒(径1～2mm)を多く含み、きめは粗い	やや良好	ナデ、条痕が先か？	ナデ	外面に沈線が2条めぐる。
116	867	01672	T14	半精製深鉢		白味の強い淡褐色	白味の強い淡褐色	微細な砂粒を多量含み、きめは粗い	不良	ナデ調整	ナデ調整	外面に2条の沈線をめぐらす。
116	868	01678	T14	粗製深鉢		褐色。一部黒色	褐色。一部黒色	砂粒(1～2mm)を多く含み、きめは粗い	やや良好	条痕を施した後、ナデ？	板状工具によるナデ	
116	869	01679	T14	粗製深鉢		白味の強い淡赤褐色	白味の強い淡赤褐色	3mm大の砂粒を多量含み、極めて粗い	良好	板状工具によるナデ	丁寧な横位のナデ	
116	870	01681	T14	粗製深鉢		白味の強い淡黄褐色。	灰色	2～3mm大の砂粒を多量含み、極めて粗い	やや不良	板状工具による？ナデ	横位のナデ調整	
116	871	01677	T14	粗製深鉢	16.8	暗褐色	暗褐色	粗大な砂粒(2～3mm)を多く含み粗い	やや不良	斜位のナデ(指？)	丁寧な横位のナデ	
116	872	01680	T14	粗製鉢		黒褐色。煤付着	黒色	3mm以下の白色砂粒をかなり多量含み、極めて粗い	やや不良	頸部は条痕。肩部以下はナデ。胴部は条痕後、粗くナデ	ナデ調整	肩部の稜が明瞭。
116	873	01682	T14	半精製深鉢		淡灰褐色	やや赤味を帯びた淡白褐色	微細な砂粒を少量含み、きめはやや細かい	やや不良	横位の条痕。屈曲部やや上に線刻で施文？	ヘラ削り(磨研？)	
116	874	01683	T14	粗製深鉢		淡赤褐色	黒褐色	3mm以下の白色粒を多量含み、極めて粗い	やや良好	ナデ調整	ナデ調整	底部
116	875	01684	T14	粗製深鉢	10.3	褐色	灰黒色	粗大な白色粒を多量含み、極めて粗い	良好	板状工具等によるナデ。	ナデ	底部
117	876	01685	T14	粗製深鉢		淡赤褐色	淡赤褐色	3mm以下の白色粒を多量含み、極めて粗い	良好	下から上へ条痕	ナデ	底部
117	877	01656	T14	精製浅鉢	39.7	黒褐色	黒褐色	砂粒を少量含み、きめは細かい	良好	精緻なヘラ磨研。	精緻なヘラ磨研	ススト付着痕あり
117	878	01657	T14	精製浅鉢		黒褐色	黒褐色	砂粒を少量含み、きめは細かい	良好	ヘラ磨研。	精緻なヘラ磨研	
117	879	01655	T14	精製浅鉢	35.4	明黄褐色。黒色のむらあり	淡褐色	微細な砂粒を多量含み、きめはやや粗い	やや不良	横位の精緻なヘラ磨研	横位の精緻なヘラ磨研	口縁部。口縁内面に段を有する。
117	880	01661	T14	精製鉢？	32.7	灰色がかった淡褐色	灰色がかった淡褐色	砂粒はほとんど含まずきめは極めて細かい	やや不良	ヘラ磨研。	ヘラ磨研。	口縁内外面に沈線を1条施す。
117	881	01651	T14	精製浅鉢		淡褐色で部分的に黒褐色	淡褐色	砂粒はごく少量、きめは細かい	良好	丁寧な横方向の細かな磨研調整	丁寧な横方向の細かな磨研調整	内外面に沈線を1条施す。
117	882	01653	T14	精製浅鉢		白味の強い淡黄褐色	くすんだ淡黄褐色	ほとんど砂粒を含まない	やや良好	横位の精緻なヘラ磨研	横位の精緻なヘラ磨研	
117	883	01652	T14	精製浅鉢		やや灰色がかった淡褐色	淡褐色	ほとんど砂粒を含まない	やや良好	横位の精緻なヘラ磨研	横位の精緻なヘラ磨研	沈線1条を施す。883と同一個体？
117	884	01658	T14	精製鉢		暗褐色	黒褐色	微細な砂粒を少量含む	やや不良	横位の精緻なヘラ磨研	横位の精緻なヘラ磨研	口縁部
117	885	01665	T14	精製浅鉢		淡白褐色	淡白褐色	微細な砂粒を少量含む	良好	横位のヘラナデ	横位のヘラナデ	
117	886	01664	T14	精製浅鉢		淡褐色	淡褐色	砂粒(径1～1.5mm)を含みやや粗い	良好	横位のヘラ磨研	横位のヘラ磨研	
117	887	01659	T14	精製鉢		黒褐色。部分的に淡黄白色	灰黒色	微細な砂粒を含む	やや不良	横位のヘラ磨研	横位のヘラ磨研	
117	888	01660	T14	精製浅鉢		やや赤味を帯びた淡白褐色	やや赤味を帯びた淡白褐色	細かな砂粒を少量含む	やや不良	頸部上部に浅い沈線が1条ある	凹線が1条ある	
117	889	01666	T14	精製鉢		灰色がかった淡褐色	灰色がかった淡褐色	微細な砂粒を少量含む	やや不良	口縁外面に2条の沈線がある	口縁内面に1条の沈線がある	
117	890	01667	T14	精製鉢		淡赤褐色	淡赤褐色	砂粒(微細～径1mm)を含みやや粗い	やや良好	雑なヘラ磨研？	ナデ調整	
117	891	01663	T14	精製椀か浅鉢		黒褐色	黒褐色	1mm以下の白色の粒を多く含みやや粗い	良好	ヘラ磨研	ヘラ磨研	底部
117	892	01654	T14	精製浅鉢		黒褐色	灰色がかった淡褐色	砂粒はほとんど含まず、きめはかなり細かい	やや良好	横位の精緻なヘラ磨研	横位の精緻なヘラ磨研	径はやや不正確。
117	893	01662	T14	精製浅鉢		黒褐色	黒褐色	細かな砂粒を多量含みやや粗い	良好	ヘラ磨研？	精緻なナデ調整	底部
121	916	Y103	2・3区	深鉢		灰白色	灰白色～黒色	1mm以下の白色粒を少量含む	良好	条痕	ナデ	前期
121	917	Y106	2・3区	深鉢		灰白色	白色	滑石を多量に含む	良好	ナデ	ナデ	阿高系
121	918	Y104	2・3区	深鉢		赤色	黄灰色	滑石を多量に含む	良好	条痕	ナデ	阿高系
121	919	Y108	2・3区	深鉢		明褐灰色	にぶい黄橙色	滑石を多量に含む	良好	ナデ	ナデ	阿高系
121	920	Y102	2・3区	深鉢		にぶい橙色	にぶい赤褐色	滑石を多量に含む	良好	ナデ	ナデ	阿高系
121	921	Y101	2・3区	深鉢		にぶい褐色	にぶい橙色	1mm大の石英・白色粒多量に含む	良好	ナデ	ナデ	船元系
121	922	Y105	2・3区	深鉢		赤色	暗褐色	1mm大の石英・白色粒・黒色粒多量に含む	良好	ナデ・縄文	ナデ	磨消縄文

挿図番号		登録番号	出土位置	器種	口径・底径	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外面色調	内面色調			外面調整	内面調整	
121	923	Y110	2・3区	深鉢	27.9	灰黄褐色	にぶい黄橙色	2・3㎜大の石英・白色粒やや多く含む	良好	条痕＋ナデ	ナデ	
121	924	Y117	2・3区	深鉢	23.1	黒褐色～淡黄色	黒褐色～淡黄色	1㎜以下の白色粒子少量含む	良好	ヘラ磨研(ていねいなナデ)	ヘラ磨研(ていねいなナデ)	
121	925	Y114	2・3区	鉢	10.8	黒色	黒色	微細白色粒子少量含む、精良	良好	ヘラ磨研	ヘラ磨研	
121	926	Y116	2・3区	鉢		黒色～暗灰黄色	黒色～暗灰黄色	微細白色粒子少量含む、精良	良好	ていねいなナデ	ていねいなナデ	
121	927	Y111	2・3区	精製浅鉢		黒色	黒色	微細白色粒子少量含む、精良	良好	ヘラ磨研(ていねいなナデ)	ヘラ磨研(ていねいなナデ)	
121	928	Y115	2・3区	精製浅鉢	29.8	黒色	黒色	微細粒子少量含む、精良	良好	ヘラ磨研(ていねいなナデ)	ヘラ磨研(ていねいなナデ)	
121	929	Y113	2・3区	精製浅鉢	32.5	黒色～灰黄褐色	黒色～灰黄褐色	微細粒子少量含む、精良	良好	ヘラ磨研	ヘラ磨研	
121	930	Y109	2・3区	半精製浅鉢		暗灰黄色	暗灰黄色	1㎜以下の白色粒子少量含む	良好	ナデ	ナデ	
121	931	01907	2・3区	粗製土器深鉢		淡黄褐色	淡黄褐色	1mm程の砂粒を多量含み、きめは極めて粗い	やや不良	ナデ	ナデ	底部
121	932	01905	2・3区	粗製土器深鉢	10.1	わずかに赤味を帯びた淡黄褐色	淡白褐色	砂粒(1～1.5mm)、黒雲母を多く含み、きめは粗い	やや良好	ナデ	ナデ	底部。外底部に網物と思われる圧痕が残る。
121	933	01906	2・3区	粗製土器深鉢	9.4	淡赤褐色	暗褐色	1～3mmの砂粒を多量含み、きめは極めは粗い	やや良好	ナデ調整	ナデ調整	底部。外底部に木の実？の圧痕が多数残る。

表4　縄文時代土製品観察表

挿図番号		登録番号		法量(cm)					色調		胎土	焼成	調整	備考
				器種	長さ	幅	厚さ	孔径	外面色調	内面色調				
56	286	00203	SC01	有孔土製品	11.1	9.3	2.2	外径20cm前後 内径0.4cm	淡黄褐色	灰黒色	粗大な砂粒を多量含み、かなり粗い	不良	ナデ仕上げ	深鉢底部を利用。焼成後、穿孔。
56	287	00202	SC01	有孔土製品	15.8	7.0	6.1	不明　割れている	赤褐色	赤褐色	比較的粗大な砂粒を多く含み、粗い	不良	全面ナデ仕上げ	
56	288	00201	SC01	有孔土製品	5.7	5.0	1.1	0.5	淡赤褐色	淡赤褐色	微細～径0.5mmの砂粒を含み、やや粗い	やや良好	丁寧なナデ仕上げ	
56	289	00204	SC01	土製品	7.1	5.0	2.3		白っぽい淡黄褐色。	白っぽい淡黄褐色。	白色の砂粒(径1mm程度)を多量含む	やや良好	ナデ仕上げ	
56	290	YA 1	SC01	土製品(おはじき形)	3.0	2.0	1.0		灰白色	黄灰色	2mm以下の砂粒を含む	良好	条痕ナデ	回りをきれいに面取りしている
69	327	00403	SK02	有孔土製品	7.5	7.5	2.1	0.5　cm	淡褐色～褐色(黒色のむらあり)	淡褐色～褐色(黒色のむらあり)	白色の砂粒(径0.1～1.5mm)を多量含み、極めて粗い	やや良好	全面ナデ仕上げ	
75	385	00301	SC02	有孔土製品	4.5	3.1	残存部分1.5	不明	淡赤褐色	淡赤褐色	白色の砂粒(径1mm程度)を少量含む。きめは粗い	やや不良	表面に線刻で施文	
96	660	00601	6B	有孔土製品	7.7	7.5	2.6	0.3	淡褐色。黒褐色の焼きむらあり	淡褐色。黒褐色の焼きむらあり	1mm程の白色の砂粒を含み、きめはやや粗い	やや良好	丁寧なナデ仕上げ	両面にゆるい円弧状の線刻を施す。
96	661	00602	6A	有孔土製品	7.2	7.2	2.8		やや灰色がかった淡黄褐色	やや灰色がかった淡黄褐色	粗大な砂粒を多量含み、かなりきめは粗い	やや不良	丁寧なナデ仕上げ	
96	662	00603		有孔土製品	7.1	4.8(半欠)	2.2	0.5	淡赤褐色。下方は灰黒褐色	淡赤褐色。下方は灰黒褐色	粗大な白色の砂粒を多量含み、きめはかなり粗い	やや不良	丁寧なナデ仕上げ	
96	663	00610	4A 168	土製品	4.5	4.0	1.4		淡黄褐色	淡黄褐色	細かな砂粒を多量含み、きめは粗い	やや良好	ナデ、指押さえ	手づくねで制作。
121	934	Y107	包含層	有孔土製品	5.0	2.5(半欠)	1.4	0.5		淡黄褐色	2mm程の白色砂粒を含む		ナデ仕上げ	

表5　縄文時代石器観察表

挿図番号		登録番号	出土位置等	器種	法量(cm・g)				石材	備考
					長さ	幅	厚さ	重さ		
49	217	00209	SC01	打製石斧or未製品	6.0	5.3	1.5	53.3	玄武岩	刃部は欠損
49	218	00680	SC01	磨製石斧未製品	8.1	7.0	3.6	252.7	玄武岩	刃部のみ遺存,基部の可能性あり
49	219	00211	SC01	砥石	25.9	14.0	5.2	2,450	砂岩	片面のみ使用。
57	291	00212	SC01	打製石鏃	2.2	1.2	0.3	7.2	安山岩	
57	292	00213	SC01	使用痕剥片	3.0	5.5	1.2	16.7	サヌカイト	
57	293	00214	SC01	使用痕剥片	4.0	1.5	0.4	7.6	漆黒色黒曜石	
57	294	00215	SC01	加工痕剥片	2.8	1.6	0.6	6.8	漆黒色黒曜石	
58	295	00205	SC01	磨製石斧	12.8	4.9	3.4	258.6	結晶片岩	
58	296	00206	SC01	磨製石斧	11.6	6.0	3.3	337.5	安山岩	敲石に転用
58	297	00207	SC01	扁平打製石斧	10.3	6.2	1.2	107.2	玄武岩	ローリングをうけて磨滅している。
58	298	00208	SC01	磨石	6.2	6.5	4.9	278.9	花崗岩	
58	299	00210	SC01	小型石皿	15.5	9.6	1.6	306.5	砂岩	
58	300	00216	SC01	石皿	19.1	10.4	9.6	1,261	花崗岩	
65	316	00609	SC05	打製石鏃	3.2	2.0	0.4	2.8	漆黒色黒曜石	
65	317	00681	SC05	打製石斧?	8.5	6.3	2.4	188.3	玄武岩	磨製石斧の未製品の可能性
65	318	00675	SC05	磨石	9.3	7.6	4.7	512.9	花崗岩	敲石兼用
69	328	00401	SK02	使用剥片	5.8	8.6	1.9	34.3	安山岩	
69	329	00408	SK02	磨製石斧未製品?	8.2	6.2	2.8		玄武岩	基部は欠損。打製石斧未製品？
69	330	00402	SK02	磨製石斧未製品?	13.6	7.8	2.8	328.3	玄武岩	打製石斧未製品？
71	344	00473	SK03	磨製石斧未製品?	6.2	4.0	3.1	54.4	玄武岩	基部。全体にローリングを受ける。
71	345	00472	SK03	打製石斧	6.0	5.7	1.2	58.1	玄武岩	刃部は欠損。未製品の可能性。
71	346	00471	SK03	砥石	13.9	12.3	4.0	844.2	花崗岩質	被熱。石皿？。
76	386	00302	SK05	石錐	3.2	1.9	0.6	2.9	漆黒色黒曜石	
76	387	00303	SK05	縦長剥片	2.6	1.6	0.3	0.8	灰黒色黒曜石	パティナが古い
76	388	00328	SK05	加工剥片	2.1	2.0	0.5	0.7	漆黒色黒曜石	
76	389	00325	SK05	打製石鏃	1.6	1.4	0.3	0.1	漆黒色黒曜石	
76	390	00304	SK05	つまみ形石器	1.6	2.0	0.4	0.4	漆黒色黒曜石	
76	391	00326	SK05	使用剥片	2.3	1.3	0.2	0.4	漆黒色黒曜石	
76	392	00327	SK05	使用剥片	3.3	1.6	0.3	0.1	漆黒色黒曜石	
76	393	00346	SK05	使用剥片	1.9	1.7	0.7	0.8	漆黒色黒曜石	
76	394	00345	SK05	使用剥片	2.5	1.4	0.6	1.4	漆黒色黒曜石	
76	395	00344	SK05	使用剥片	1.4	1.9	0.4	0.5	漆黒色黒曜石	
76	396	00324	SK05	石錘	7.8	5.7	1.4	83.9	安山岩	
97	665	00607	T5	打製石鏃	3.2	2.3	0.5	2.7	漆黒色黒曜石	
97	666	00717	T5	打製石鏃	2.7	2.3	0.8	3.6	漆黒色黒曜石	
97	667	00619		打製石鏃	2.1	2.5	0.6	3.3	漆黒色黒曜石	先端部欠損。
97	668	00695	T4	打製石鏃	2.4	1.7	0.5	1.9	安山岩	
97	669	00614		打製石鏃	2.7	1.4	0.4	1.7	漆黒色黒曜石	五角形
97	670	00606	4A	打製石鏃	2.2	1.3	0.3	1.8	漆黒色黒曜石	
97	671	00613		打製石鏃	2.2	1.5	0.3	1.6	漆黒色黒曜石	
97	672	00605	3B	打製石鏃	1.9	1.6	0.3	1.6	漆黒色黒曜石	
97	673	00612		打製石鏃	1.9	1.8	0.3	1.3	安山岩	
97	674	00611		打製石鏃	1.9	1.9	0.4	1.0	漆黒色黒曜石	
97	675	00630		打製石鏃	1.9	1.8	0.3	0.2	安山岩	
97	676	00696	SC01の東側トレンチ	打製石鏃	1.5	1.6	0.5	0.3	灰黒色黒曜石	脚部欠損
97	677	00615		打製石鏃	1.8	1.5	0.3	0.3	漆黒色黒曜石	
97	678	00654	4A　168	打製石鏃	2.2	1.5	0.4	0.8	漆黒色黒曜石	
97	679	00714	T5	打製石鏃	1.7	1.3	0.4	0.5	漆黒色黒曜石	
97	680	00698	SC01の東側トレンチ	打製石鏃	2.2	1.2	0.2	0.5	漆黒色黒曜石	
97	681	00768		打製石鏃	2.0	1.1	3.0	0.9	漆黒色黒曜石	先端と縦半分欠損
97	682	00618		石鏃未成品	2.6	1.5	0.3	2.7	漆黒色黒曜石	
97	683	00616		石鏃未成品？	2.2	2.0	0.6	4.0	黒色黒曜石	灰色の縞がある
97	684	00767		石鏃未成品？	2.0	1.8	0.4	2.8	黒色黒曜石	
97	685	00711	T5	石鏃未製品？	2.5	1.7	0.4	3.4	漆黒色黒曜石	
97	686	00617		石鏃未成品？	2.2	2.0	0.6	4.2	漆黒色黒曜石	
97	687	00716	T5	石鏃？	2.0	1.9	0.4	1.2	漆黒色黒曜石	

挿図番号		登録番号	出土位置等	器種	法量(cm・g)				石材	備考
					長さ	幅	厚さ	重さ		
98	688	00634		スクレイパー	8.1	4.5	1.4	43.9	サヌカイト	片面は自然面が残る。
98	689	00732	T5	スクレイパー	2.8	1.7	0.6	2.9	漆黒色黒曜石	
98	690	00733	T5	スクレイパー	2.8	2.2	0.5	2.8	漆黒色黒曜石	
98	691	00728	T5	スクレイパー	2.1	4.1	0.5	3.5	漆黒色黒曜石	片面は自然面が残る。
98	692	00635		スクレイパー	4.5	4.0	1.3	26.9	サヌカイト	
98	693	00687	6A	スクレイパー	2.9	3.6	0.8	8.5	漆黒色黒曜石	
98	694	00754		スクレイパー	3.3	3.5	0.7	8.6	漆黒色黒曜石	異なるパティナが存在
98	695	00713	T5	縦形石匙	3.9	1.7	0.6	4.7	漆黒色黒曜石	不純物が多い。異なるパティナが存在
98	696	00633		横形石匙	8.8	4.0	0.9	24.2	サヌカイト	
99	697	00608	T5	異形石器	6.0	1.3	0.8	5.5	漆黒色黒曜石	使用痕らしき潰れあり。
99	698	00699	SC01の東側トレンチ	石錐	2.2	1.2	0.3	1.8	黒色黒曜石	
99	699	00726	T5	加工剥片	2.2	1.8	0.7	1.0	漆黒色黒曜石	
99	700	00625		使用剥片	3.1	3.3	0.6	5.1	漆黒色黒曜石	
99	701	00702	SC01の東側トレンチ	加工剥片	1.6	2.1	0.4	1.5	漆黒色黒曜石	不純物がやや多い。
99	702	00752		加工・使用剥片	2.3	2.2	0.5	2.1	漆黒色黒曜石	
99	703	00624		加工剥片	1.7	2.2	0.6	2.0	漆黒色黒曜石	やや半透明。
99	704	00715	T5	加工剥片？	2.0	2.0	0.5	1.7	黒色黒曜石	ややくすんだ色調。
99	705	00707	T5	加工剥片	1.9	1.8	0.4	0.9	黒色黒曜石	透明感強い。
99	706	00683	6A	加工・使用剥片	2.1	1.9	0.5	2.4	漆黒色黒曜石	白色の不純物が混入。
99	707	00727	T5	加工・使用剥片	2.1	1.3	0.5	1.6	漆黒色黒曜石	
99	708	00718	T5	加工・使用剥片	2.7	1.1	0.3	0.9	漆黒色黒曜石	
99	709	00749		使用剥片	1.8	1.7	0.6	3.0	漆黒色黒曜石	
99	710	00761		使用剥片	1.9	1.7	0.4	2.2	漆黒色黒曜石	
99	711	00701	SC01の東側トレンチ	使用剥片	2.5	1.4	0.6	2.7	漆黒色黒曜石	
99	712	00655	4A	加工・使用剥片	2.4	1.3	0.3	1.4	漆黒色黒曜石	
99	713	00737	252	加工剥片	2.7	1.9	0.6	2.8	漆黒色黒曜石	
99	714	00760		加工剥片	2.2	2.0	0.6	2.1	漆黒色黒曜石	
99	715	00738	252	加工剥片	2.3	1.1	0.5	0.3	漆黒色黒曜石	
99	716	00650	3B	使用剥片	2.2	0.8	0.7	1.1	漆黒色黒曜石	
100	717	00736	T5	スクレイパー兼使用剥片	7.6	3.1	0.8	15.8	サヌカイト	
100	718	00722	T5	使用剥片	6.4	2.1	0.7	7.4	漆黒色黒曜石	
100	719	00719	T5	使用剥片	4.5	1.2	0.6	1.1	漆黒色黒曜石	
100	720	00700	SC01の東側トレンチ	使用剥片	4.3	2.0	0.9	4.7	黒色黒曜石	
100	721	00604	3B	使用剥片	5.3	1.8	0.5	1.6	黒色黒曜石	
100	722	00721	T5	使用剥片	4.1	2.0	0.6	3.2	漆黒色黒曜石	
100	723	00682	6A	使用剥片	3.6	1.5	0.6	1.2	漆黒色黒曜石	
100	724	00720	T5	使用剥片	3.9	1.3	0.9	2.1	漆黒色黒曜石	
101	725	00751		石錐？	4.4	2.5	0.5	2.6	漆黒色黒曜石	
101	726	00743		使用剥片	3.4	1.9	0.6	3.3	漆黒色黒曜石	パティナが古い
101	727	00744		使用剥片	2.6	1.8	0.6	2.9	漆黒色黒曜石	
101	728	00748		使用剥片	2.3	1.4	0.5	2.7	漆黒色黒曜石	
101	729	00759		使用剥片	2.8	1.7	0.4	3.0	漆黒色黒曜石	
101	730	00746		使用剥片	2.8	1.5	0.3	1.4	黒色黒曜石	
101	731	00693	7C	石錐？	3.4	2.4	0.5	3.6	漆黒色黒曜石	
101	732	00745		使用剥片	2.5	1.4	0.5	1.0	漆黒色黒曜石	
101	733	00747		使用剥片	1.9	1.5	0.2	0.6	黒色黒曜石	
101	734	00764		使用剥片	1.8	1.7	0.5	1.5	漆黒色黒曜石	
101	735	00762		加工剥片	1.5	1.7	0.5	1.6	黒色黒曜石	
101	736	00706	T5	使用剥片	2.6	1.9	0.5	2.3	漆黒色黒曜石	
101	737	00705	T5	使用剥片	3.2	1.6	0.4	2.2	漆黒色黒曜石	
101	738	00667	5A	使用剥片	2.9	1.4	0.4	1.1	漆黒色黒曜石	
101	739	00666	5A	使用剥片	3.5	1.7	0.8	4.6	漆黒色黒曜石	
101	740	00765		使用剥片	3.3	1.0	0.4	1.0	漆黒色黒曜石	
101	741	00651	3B	不明石器	3.7	2.1	1.7	3.9	黒色黒曜石	パティナが古い
101	742	00692	7B　172	使用剥片	2.9	1.8	0.5	1.9	灰色味を帯びた黒色黒曜石	

挿図番号		登録番号	出土位置等	器種	法量(cm・g)				石材	備考
					長さ	幅	厚さ	重さ		
101	743	00708	T5	使用剥片	2.4	1.7	0.5	1.8	黒色黒曜石	全面加工
102	744	00724	T5	加工剥片	1.4	1.6	0.5	1.3	漆黒色黒曜石	
102	745	00659	4A	加工・使用剥片？	1.9	1.6	0.8	2.4	漆黒色黒曜石	
102	746	00660	4A	使用剥片	1.9	1.8	0.5	2.0	漆黒色黒曜石	
102	747	00697	SC01の東側トレンチ	使用剥片	1.8	1.4	0.3	1.2	黒色黒曜石	
102	748	00647	3B	使用剥片	2.7	1.9	0.7	3.6	漆黒色黒曜石	
102	749	00712	T5	使用剥片	2.6	2.0	0.5	2.4	漆黒色黒曜石	
102	750	00658	4A 026	使用剥片	1.9	1.6	0.6	2.1	漆黒色黒曜石	
102	751	00704	SC01の東側トレンチ	使用剥片	2.3	1.6	0.3	1.5	漆黒色黒曜石	
102	752	00731	T5	使用剥片	2.1	2.5	0.7	2.8	黒色黒曜石	
102	753	00725	T5	使用剥片	2.0	2.6	0.5	1.5	黒色黒曜石	
102	754	00656	4A	使用剥片	2.2	1.5	0.5	1.9	漆黒色黒曜石	
102	755	00648	3B	使用剥片	2.1	1.7	0.6	1.6	漆黒色黒曜石	
102	756	00661	4A	使用剥片	2.3	1.4	0.4	1.5	漆黒色黒曜石	
102	757	00694	T4	加工剥片	2.1	2.4	0.5	2.8	漆黒色黒曜石	
102	758	00668	5A 163	剥片	2.0	2.0	0.4	1.8	漆黒色黒曜石	
102	759	00729	T5	使用剥片	1.8	3.1	0.5	2.2	漆黒色黒曜石	
102	760	00723	T5	使用剥片	2.5	1.4	0.4	1.6	漆黒色黒曜石	
102	761	00763		使用剥片	1.4	1.8	0.5	1.7	漆黒色黒曜石	
102	762	00766		使用剥片	1.9	.1.8	0.7	2.2	漆黒色黒曜石	
102	763	00657	4A	使用剥片	1.9	2.0	0.4	1.4	漆黒色黒曜石	
102	764	00750		使用剥片	0.9	1.7	0.3		漆黒色黒曜石	
103	765	00690	6A 113	石核	3.5	7.1	3.1	68.0	漆黒色黒曜石	
103	766	00730	T5	石核?	2.0	2.3	1.3	5.2	漆黒色黒曜石	
103	767	00689	6A	石核	2.1	2.4	2.2	9.2	漆黒色黒曜石	
103	768	00632		石核？	2.2	2.9	2.1	13.8	漆黒色黒曜石	
103	769	00631		石核	2.5	3.4	2.2	18.8	黒色黒曜石	
103	770	00688	6A	石核	2.9	3.6	2.7	23.1	漆黒色黒曜石	
104	771	00709	T5	楔形石器	2.3	3.0	0.7	5.2	漆黒色黒曜石	パティナが古い。一部新しいパティナの剥離あり。
104	772	00685	6A	楔形石器	2.5	2.2	1.1	5.8	漆黒色黒曜石	
104	773	00674	5B 097	楔形石器	2.4	2.8	0.8	5.6	漆黒色黒曜石	
104	774	00710	T5	楔形石器	2.2	2.5	0.6	2.1	漆黒色黒曜石	
104	775	00686	6A	楔形石器	1.3	1.5	0.8	1.5	漆黒色黒曜石	
104	776	00703	SC01の東側トレンチ	楔形石器	1.8	1.2	0.6	1.3	漆黒色黒曜石	
104	777	00649	3B	楔形石器	1.8	1.1	0.7	1.1	漆黒色黒曜石	
104	778	00684	6A	楔形石器	1.7	1.6	0.5	0.9	漆黒色黒曜石	
105	779	00739	252	打製石斧	10.3	8.7	2.4	236.4	安山岩	未製品？
105	780	00679	6A 079	打製石斧	10.3	6.0	2.4	169.1	玄武岩	
105	781	00672	5B 074	打製石斧	11.9	5.8	2.3	197.3	玄武岩	
105	782	00673	5B 076	打製石斧	11.5	6.1	1.9	166.4	堆積岩	
105	783	00639	2A 139	打製石斧	11.7	5.7	1.5	151.3	堆積岩	
106	784	00741	251	打製石斧	12.1	7.7	2.4	252.4	玄武岩	
106	785	00742	248	打製石斧	11.8	7.9	2.4	307.6	玄武岩	未製品？
106	786	00646	3B 065	打製石斧	9.4	7.9	2.0	242.8	玄武岩	未製品？
107	788	00734	T5	打製石斧	10.5	4.9	2.2	152.4	玄武岩	
107	789	00664	5A	打製石斧	13.6	6.3	1.8	182.6	玄武岩	
107	790	00652	4A 028	磨製石斧未製品？	10.1	8.0	1.6	152.0	緑泥片岩	
107	791	00677	6A 299	打製石斧	9.1	8.4	1.2	146.6	玄武岩	
107	792	00653	4A 035	打製石斧	11.6	6.6	1.4	151.2	玄武岩	
108	793	00678	6A	打製石斧	14.5	6.7	2.1	256.0	玄武岩	
108	794	00740	251	打製石斧	9.7	5.9	1.4	119.4	玄武岩	
108	795	00735	T5	打製石斧	7.1	6.1	2.0	100.6	玄武岩	
108	796	00665	5A	磨製石斧未製品？	14.5	7.0	1.7	197.6	玄武岩	
108	797	00662	5A	石斧？	7.7	6.0	2.3	130.7	安山岩	(石鎌？)
109	798	00640	3B 051	磨製石斧	9.3	6.6	1.5	182.3	安山岩	
109	799	00645	3B 289	磨製石斧	8.7	4.0	2.3	109.7	蛇紋岩？	
109	800	00691	7B 256	磨製石斧	10.4	6.5	2.4	268.9	緑泥片岩	
109	801	00636		磨製石斧	5.2	5.5	1.0	41.5	輝緑凝灰岩？	
110	802	00644	3B 295	石皿	13.7	10.0	3.9	813.2	花崗岩	

挿図番号		登録番号	出土位置等	器種	法量(cm・g)				石材	備考
					長さ	幅	厚さ	重さ		
110	803	00643	3B　296	磨石	12.6	10.0	5.1	944.6	花崗岩	
110	804	00642	3B　297	磨石	7.0	11.2	5.2	517.3	花崗岩	
110	805	00670	5B　258	磨石	10.9	9.2	4.1	666.5	砂岩	
110	806	00669	5B　075	磨石	7.3	7.3	3.0	233.0	花崗岩	
110	807	00638		磨石	8.2	7.4	2.8	249.7	砂岩	
110	808	00641	3B　298	磨石	7.1	11.1	7.0	711.3	砂岩	
110	809	00637		磨石？	7.5	6.1	2.1	174.0	結晶片岩？	
110	810	00671	5B　086	磨石	6.5	4.4	2.1	107.0	砂岩	
110	811	00676	6A　117	砥石?	7.8	5.4	2.7	138.0	石墨片岩？	
110	812	00663	5A	石棒？	9.8	3.9	3.4	163.2	石墨片岩？	
111	823	01763	T7	石錐	2.1	1.1	0.4	1.6	黒色黒曜石	
111	824	01762	T7	石錐	2.4	1.9	0.6	3.9	漆黒色黒曜石	
111	825	01767	T7	彫器	2.1	0.8	0.6	1.5	漆黒色黒曜石	
111	826	01770	T7	彫器	1.7	1.8	0.5	2.0	黒色黒曜石	
111	827	01761	T7	使用剥片	5.3	2.0	0.5	6.6	黒色黒曜石	パティナが古い。
111	828	01776	T7	使用剥片	4.0	1.7	0.5	3.3	漆黒色黒曜石	
111	829	01772	T7	石錐	3.0	1.5	0.4	2.0	漆黒色黒曜石	
111	830	01766	T7	使用剥片	2.3	1.4	0.5	2.0	漆黒色黒曜石	
111	831	01780	T7	加工剥片	2.8	2.0	1.3		漆黒色黒曜石	
111	832	01769	T7	使用剥片	2.9	2.2	0.5	3.3	漆黒色黒曜石	
111	833	01777	T7	使用剥片	2.8	1.6	0.5	2.9	黒色黒曜石	
111	834	01764	T7	楔形石器	1.9	2.1	0.7	3.5	漆黒色黒曜石	
111	835	01782	T7	磨石	7.4	9.1	1.7	204.4	緑泥片岩	
111	836	01781	T7	打製石斧	12.8	6.0	1.9	164.2	玄武岩	
112	837	01796	T9	石鏃	1.3	1.6	0.4	2.5	黒色黒曜石	
112	838	01795	T9	使用剥片	1.5	2.1	0.3	3.3	漆黒色黒曜石	
112	839	01794	T9	使用剥片	3.6	1.8	0.4	4.0	黒色黒曜石	縞状の黒曜石
112	840	01791	T9	使用剥片	4.0	1.8	0.4	4.8	灰黒色黒曜石	
112	841	01792	T9	使用剥片	3.3	1.3	0.3	3.0	黒色黒曜石	
112	842	01793	T9	使用剥片	2.8	2.0	0.3	4.4	漆黒色黒曜石	
112	843	01797	T9	打製石斧	5.2	5.5	2.4	75.8	玄武岩	
113	845	01806	T10	使用剥片	2.2	1.6	0.5	2.1	漆黒色黒曜石	
113	846	01805	T10	使用剥片	2.6	1.9	0.8	4.4	漆黒色黒曜石	パティナが古いか。
113	847	01802	T10	使用剥片	4.4	2.0	0.6	6.1	漆黒色黒曜石	
113	848	01803	T10	使用剥片	3.6	1.8	0.3	3.3	漆黒色黒曜石	
113	849	01807	T10	使用剥片	3.0	2.2	0.7	4.4	黒色黒曜石	
113	850	01804	T10	使用剥片	2.0	1.8	0.5	3.4	漆黒色黒曜石	
113	851	01808	T10	石核	2.6	3.3	1.6	12.8	漆黒色黒曜石	
113	852	01809	T10	石錘	5.5	6.2	1.6	80.7	花崗岩	
114	857	01826	T11	使用剥片	2.1	2.0	0.7	3.3	漆黒色黒曜石	
114	858	01825	T11	使用剥片	3.4	2.4	0.2	2.6	黒色黒曜石	
114	859	01827	T11	打製石斧	8.9	4.5	2.0	110.1	玄武岩	
114	860	01828	T11	石錘	8.0	6.1	1.0	62.9	安山岩	
118	894	01719	T14	石鏃	2.2	2.0	0.4	1.6	安山岩	
118	895	01716	T14	使用剥片	2.8	2.0	0.5	2.9	黒色黒曜石	
118	896	01704	T14	使用剥片	2.5	2.0	0.5	2.3	黒色黒曜石	
118	897	01701	T14	使用剥片	3.0	1.7	0.5	3.4	漆黒色黒曜石	
118	898	01702	T14	楔形石器	2.2	2.3	0.5	3.4	黒色黒曜石	
118	899	01713	T14	使用剥片	2.1	1.4	0.5	1.7	漆黒色黒曜石	
118	900	01706	T14	使用剥片	3.3	2.2	0.9	4.5	漆黒色黒曜石	
118	901	01705	T14	使用剥片	4.3	1.8	0.7	3.8	漆黒色黒曜石	
118	902	01709	T14	使用剥片	4.4	2.4	1.0	7.6	漆黒色黒曜石	
118	903	01710	T14	加工剥片	3.5	2.9	0.9	9.0	漆黒色黒曜石	
118	904	01708	T14	使用剥片	3.5	2.7	0.4	4.8	黒色黒曜石	
118	905	01718	T14	使用剥片	2.7	1.2	0.3	2.2	黒色黒曜石	
119	906	01711	T14	使用剥片	2.2	1.8	0.6	2.5	黒色黒曜石	
119	907	01703	T14	楔形石器？	1.1	1.1	0.3	0.1	黒色黒曜石	

挿図番号		登録番号	出土位置等	器種	法量(cm・g)				石材	備考
					長さ	幅	厚さ	重さ		
119	908	01715	T14	縦長剥片	1.7	2.2	0.5	1.3	黒色黒曜石	
119	909	01707	T14	使用剥片	3.2	2.0	0.3	2.5	漆黒色黒曜石	
119	910	01712	T14	使用剥片	2.1	2.5	0.6	4.4	漆黒色黒曜石	
119	911	01717	T14	石核？	3.7	2.0	1.9	9.7	漆黒色黒曜石	
120	912	01833	T17	石鏃	2.7	1.6	0.3	2.5	漆黒色黒曜石	先端部欠損後別の石器に再加工
120	913	01832	T17	使用剥片	1.6	2.1	0.5	2.5	漆黒色黒曜石	パティナが古い
120	914	01831	T17	使用剥片	6.9	1.8	0.4	6.1	漆黒色黒曜石	
120	915	01834	T17	つまみ形石器	1.8	1.9	0.5	3.0	漆黒色黒曜石	
122	935	Y14	2・3区	打製石鏃	4.1	1.7	1.7	3.4	安山岩	片脚欠
122	936	Y8	2・3区	打製石鏃	3.2	1.9	0.3	2.0	安山岩	鋸歯状
122	937	01904	2・3区	打製石鏃	2.5	1.3	0.6	2.4	漆黒色黒曜石	両脚欠
122	938	Y13	2・3区	打製石鏃	2.6	1.6	0.3	2.5	漆黒色黒曜石	
122	939	Y16	2・3区	打製石鏃	2.0	1.3	0.3	1.7	黒色黒曜石	灰色味を帯びている
122	940	Y17	2・3区	打製石鏃	2.1	1.6	0.4	2.7	黒色黒曜石	縞状
122	941	Y15	2・3区	打製石鏃	2.8	1.6	0.4	2.5	漆黒色黒曜石	片脚欠
122	942	IK1	2・3区	打製石鏃	1.7	1.6	0.2	0.5	漆黒色黒曜石	
122	943	IK2	2・3区	尖頭状石器	2.8	2.1	0.6	3.3	サヌカイト	
122	944	IK3	2・3区	石錐？石鏃？	2.1	2.1	0.5	1.6	漆黒色黒曜石	
122	945	IK4	2・3区	石錐	3.4	1.6	0.4	1.5	漆黒色黒曜石	
122	946	01901	2・3区	つまみ形石器	2.1	1.7	0.3	2.3	漆黒色黒曜石	
122	947	01910	2・3区	つまみ形石器？	1.9	2.0	0.5	1.9	漆黒色黒曜石	縞状
122	948	01914	2・3区	つまみ形石器	2.1	1.9	0.5	2.7	くすんだ黒色黒曜石	
122	949	01912	2・3区	つまみ形石器	1.7	1.6	0.3	1.4	黒色黒曜石	
122	950	01913	2・3区	つまみ形石器	1.8	1.9	0.7	1.6	漆黒色黒曜石	
122	951	01911	2・3区	使用剥片	2.6	1.0	0.4	1.0	漆黒色黒曜石	
122	952	Y13	2・3区	使用剥片	5.5	1.6	0.3	5.1	漆黒色黒曜石	
122	953	01902	2・3区	使用剥片	4.6	2.0	0.5	4.8	漆黒色黒曜石	
123	954	01908	2・3区	使用剥片	3.1	1.8	0.6	2.7	漆黒色黒曜石	
123	955	01909	2・3区	使用剥片	4.3	1.6	0.4	3.1	黒色黒曜石	
123	956	01903	2・3区	使用剥片	3.3	1.7	0.3	3.2	漆黒色黒曜石	
123	957	IK5	2・3区	石核	5.8	4.5	2.1	58.7	安山岩	
123	958	Y11	2・3区	スクレイパー	7.4	3.3	1.3	28.4	安山岩	
123	959	Y12	2・3区	スクレイパー	5.7	3.3	0.7	14.4	安山岩	
123	960	IK10	2・3区	スクレイパー	5.0	3.8	1.6	22.5	漆黒色黒曜石	
123	961	01915	2・3区	スクレイパー	12.4	4.6	1.2	64.0	安山岩	
123	962	Y10	2・3区	スクレイパー	7.7	6.0	1.3	51.5	サヌカイト	
124	963	Y5	2・3区	打製石斧	10.5	4.9	2.2	72.0	玄武岩	
124	964	Y2	2・3区	打製石斧	11.5	5.5	2.0	165.0	玄武岩	
124	965	Y7	2・3区	打製石斧	8.0	5.6	1.7	99.0	玄武岩	
124	966	Y4	2・3区	打製石斧	8.2	4.0	1.4	72.0	玄武岩	
124	967	Y8	2・3区	打製石斧	7.3	4.2	1.3	64.0	玄武岩	
124	968	Y20	2・3区	打製石斧	8.8	7.3	1.6	122.0	玄武岩	
125	969	Y1	2・3区	磨製石斧	14.8	5.2	3.3	392.0	緑泥片岩	
125	970	Y3	2・3区	磨製石斧	7.2	4.9	1.6	90.0	頁岩質？	
125	971	Y21	2・3区	磨製石斧	3.1	4.8	2.1	44.0	頁岩質？	
125	972	Y6	2・3区	磨石	11.6	9.5	3.6	686.0	花崗岩	
125	973	Y9	2・3区	磨石	10.7	10.6	6.2	1,012.0	花崗岩	

9．小　結（縄文時代のまとめ）

本調査における縄文時代の遺構・遺物についてまとめるが、筆者の勉強不足・時間不足で十分な検討をすることができず、いくつか気づいた点を列挙することでその責としたい。

1　遺構と土器

検出した遺構群のうち明確に竪穴住居と考えられるのはSC01の1軒のみである。中央に土器を埋めた炉を持ち、5本の柱からなっている。覆土中には土器の他多くの大石があり、人為的に投棄したと考えられている。つまり床面出土土器（本文の遺構説明では中面）と覆土上層では時期が異なる可能性がある。まずこの点を確認する。

本調査で出土した土器のうち包含層出土深鉢をA～Cの3類に分類した。A類は短い口縁部から屈曲部を持って外反する頸部に至り、胴部に屈曲部を有するもの、B類は口縁部から頸部への移行が屈曲部を持たずに続くもの、C類は口縁部から底部まで屈曲部を持たずにそのまま続くものである。後期の縄文施文が消失した後から弥生時代初頭に至る土器編年はいくつかの案が出されているが、下山覚氏の深鉢形土器の器形の変遷図によると、口縁部～胴部の形態のみを見ると本遺跡のA類はⅠ・Ⅱ類、B類はⅣ・Ⅴ類に当てはまる。九州の晩期土器を広く編年した水ノ江氏の編年では、北部九州の広田1式から4式、掘田1式・2式の各時期の土器を含んでいる。他氏の編年案でもほぼ同様である。ただしC類土器はいくつかの器形を含んでおり細別可能である。福岡市周辺の縄文時代後期後半から晩期前半によく出るタイプの土器であり、数時期のものを含んでいると考えられる。浅鉢についても同様に各時期のものを含んでおり、量の大小はあるものの、ほぼ晩期前半～中頃を網羅する土器群が出土している。これらの土器群は地点により異なる可能性がある。例えば14号トレンチ出土の874の深鉢底部はいわゆる張り出し底であるが、このタイプはA－1区では出土していない。また2・3区出土の928の胴部が強く張り出した浅鉢は、やはりA－1区では出土していない。しかしA－1区以外の出土遺物が少なく、またA－1区でも遺物を10mグリッドで取り上げているため、検討することは極めて困難である。SC01床面から出土したのは、その大半がC類深鉢で、B類が1点（なだらかな屈曲部がある208も含めると2点）と破片にA類が1点含まれている。覆土から出土したものには口縁部が短めのA類も大破片が含まれている。床面と覆土から出土したC類深鉢で異なる点がある。床面で出土したものは口縁部が外傾するのに対して、覆土から出土した土器は口縁部が直立するいわゆる砲弾形を呈した土器が多い。包含層出土のC類土器を見ると、覆土出土土器と同じく砲弾形を呈するものが多い。一方床面・覆土出土深鉢に共通するのは、調整にヘラナデを施したものがほとんどないのに対し、包含層出土のものにはヘラナデを施したものが多い。浅鉢は床面も覆土も大破片の出土がほとんどないが、同じタイプのものが包含層からも出土している。SC05では内面にヘラナデを施したものある。その他の遺構は小片が多いが、SK01・SK04が砲弾形に近く、SK03が外傾形に近い。今回は勉強不足もあり、時期の検討を行う時間的余裕がないが、今後の土器編年や遺構の研究にとっての好資料といえよう。

1基出土した埋甕は、福岡市内でも晩期の遺跡でよく出土する遺構の1つである。出土した甕は、外面に煤がつき、内面には内底部のやや上から胴下半部に焦げが付着した、煮炊きに使ったものである。埋置は土器を傾け、下になる部分に焼成後の穿孔を施しており、埋葬施設と考えて大過ないものと考えられる。検出した場所は竪穴住居を含む遺構群の中で、棺と考えた場合は大人が入る大きさではなく、子供の遺骸を日常の土器に入れて生活空間に葬ったと理解することも可能であろう。

深鉢形土器のうち、本文中で繰り返し述べているが、器表面に小豆大～大豆大の窪みを無数に持つ土器と、窪みのない土器が存在する。窪みの中には明らかに種子の圧痕を含んでいることから、単純に考えれば胎土中に混和剤として植物種子等を含んでいるものと、含まないものの2者が存在することになる。これが意味することは2つの可能性がある。1つは土器の製作地が異なること。もう1つは土器の製作季節が異なることである。ここではこれ以上触れないが、当遺跡以外でもこの種の土器が存在するものと思われ、今後の検討課題である。

調査区中央で検出した河川下層からは突帯文土器が出土している。その中には少量古式のものも含まれている。縄文時代では黒川式土器まで出土しており、あるいは地点を変えながら、晩期初頭以降継続した生活が営まれた可能性も考えられよう。（米倉）

2　石器・石器素材について

すべての遺構・包含層から出土した石器は未実測分も含めて、石鏃及び同未製品36点、スクレイパー15点、石匙2点、打製石斧は計27点、打製石斧または磨製石斧未製品と考えられるもの4点、磨製石斧未製品と認定したもの2点、磨製石斧9点、砥石3点、磨石13点、石皿2点、石錐8点、彫器2点、石錘3点、楔形石器13点、つまみ形石器7点、使用痕・加工痕ある剥片115点以上、石核数十点以上、異形石器1点等である。基本的には全点の石・石器を見て分類したものの、時間不足による石器の未実測・石器の認定漏れは避けられない。定型的な石器についてはほぼ問題はないと思われるが、特に使用痕・加工痕ある剥片と石核については大幅な点数の増加が考えられる。またこれらの石器とは別に、コンテナ3箱分の剥片・チップが出土したが、そのほとんどが黒曜石で、それ以外に少量のサヌカイトを含む安山岩と玄武岩がある。土器の量に比べて、あるいは黒曜石剥片の多さに比べて定型石器の少なさ、使用痕のある剥片の多さが目に付く。本来は石器組成等から見た生業の復元を行うべきであるが、時間不足のため2つの気づいた点についてのみまとめたい。

①　玄武岩製石斧の製作について

本調査では本文中で述べたように玄武岩製の打製石斧が出土した。石斧に使う玄武岩の唯一の産地と言っていいのは福岡市西区横浜に所在する今山遺跡である。他にも西区毘沙門山や呑山も知られているが、実際にその場所で採れる玄武岩をどれほど利用したか明らかではない。また広い目で見れば、入り江を挟むとはいえ3遺跡は近隣の遺跡である。今山遺跡では弥生時代の石斧製作は以前から知られていたが、昭和59年に調査を行った第6次調査で、山頂部の調査区で弥生時代の太形蛤刃石斧の下の層から有肩打製石斧の未製品と思われるものが出土した（図A）。また第8次調査では今山の東麓で縄文時代前期から後期初頭の石斧未製品が出土し、その中に打製石斧と考えられるものも存在した。

本調査で出土した磨製石斧と打製石斧（未製品の可能性のものも含む）の全点を見ると（グラフ）、

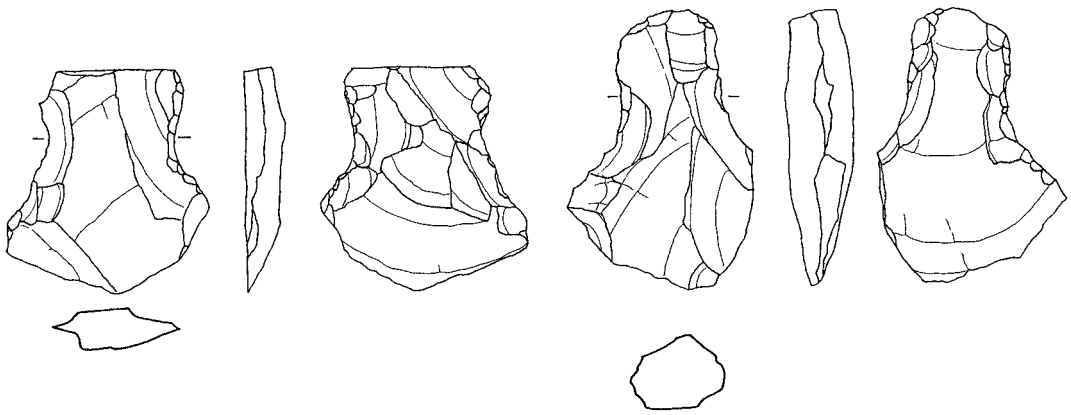


図128　今山遺跡第6次調査頂上部出土有肩打製石斧未製品（縮尺不明）
（今山遺跡現説パンフレットより）

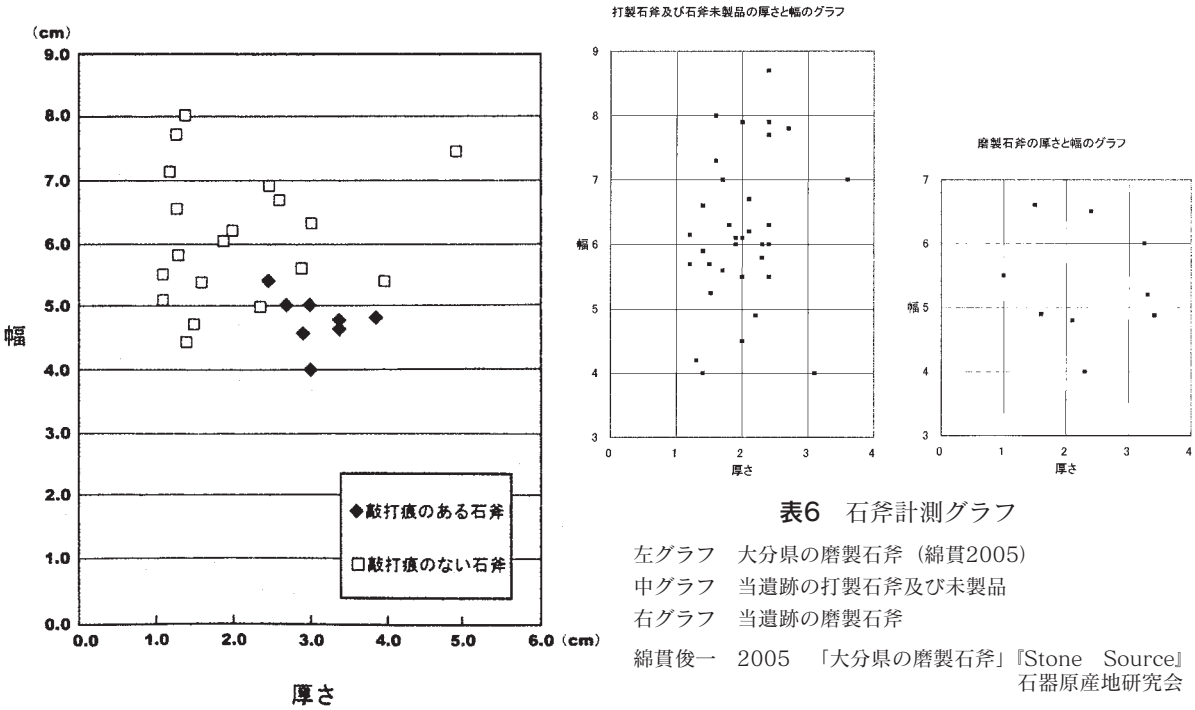


表6　石斧計測グラフ

左グラフ　大分県の磨製石斧（綿貫2005）
中グラフ　当遺跡の打製石斧及び未製品
右グラフ　当遺跡の磨製石斧

綿貫俊一　2005　「大分県の磨製石斧」『Stone　Source』石器原産地研究会

かなりばらつきがあるが、打製石斧のうち厚さ2.5㎝を超えるものは磨製石斧未製品ではないかと推定したものである。特に厚さ3㎝を超える2点は形状から見ても磨製石斧未製品と考えて良いものと思われる。一方磨製石斧の厚さについては欠損品が多いため、実際は多くが厚さ3㎝前後になるものと思われ、薄手のものは801と970の2点のみである。つまり全9点中厚さ2.5㎝未満の磨製石斧は2点である。ただし追加資料の1点が磨製石斧ならばは10点中3点となる。打製石斧の素材の特徴として、剥片を素材としたものが多いという点である。磨製石斧の未製品の可能性が高い2点を除いた31点の内、間違いなく剥片素材のもの22点、剥片素材と思われるが破片が小さい等で断言できないもの5点、剥片素材ではない可能性が高いもの4点で、断言できないものについても剥片素材である可能性が高く、最小値で71%、最大値で87%が剥片素材である。一方磨製石斧について、今調査での玄武岩製磨製石斧の出土は、不明確な剥片素材の追加資料分以外に素材の不明確な小片が1点あるが、それらの磨製石斧は追加資料分を除いてすべて礫素材と考えられる。

一方、打製石斧と打製・磨製石斧の未製品の区別は、完形品に近ければ厚さや形態である程度の判断はできようが、ある程度加工が進んだ段階で敲打以前の特に頭部の破片だと、峻別はきわめて難しい。特に薄い礫素材の破片はすべてのパターンが考えられ、現段階での明確な差はとらえがたい。剥片や石屑の出土などから判断しなければならないか。

当調査で出土した玄武岩の剥片・チップは本文にあるとおり少量である。その出土地点はSK05から3点、1区包含層で15点、2・3区で2点で以上はいずれも中・大型の剥片や原石の小破片が主体で小さな剥片・チップはあわせて5点しかない。一方SK03からは1㎝以上の剥片が32点出土したが、そのうち中・大型のものは4点のみで、残りはすべて長さ3㎝未満の薄手のものである。SK03は本文中にあるように磨製石斧の未製品の可能性が高いものが出土しており、これらの薄手の小型剥片が石斧製作時に出たものと理解することができる。

磨製石斧・打製石斧は後期～晩期に増加し、この時期に土器胎土中から栽培種の圧痕が確認されている（付篇参照）。玄武岩製打製石斧・磨製石斧もこの時期に増加しており（敦賀2005、吉留他）、農耕の導入に対応したものである可能性が高まっている。今後、各遺跡のデータを点検し、縄文時代の玄武岩製磨製石斧・打製石斧の製作と流通に関する理解を深めなければならない。

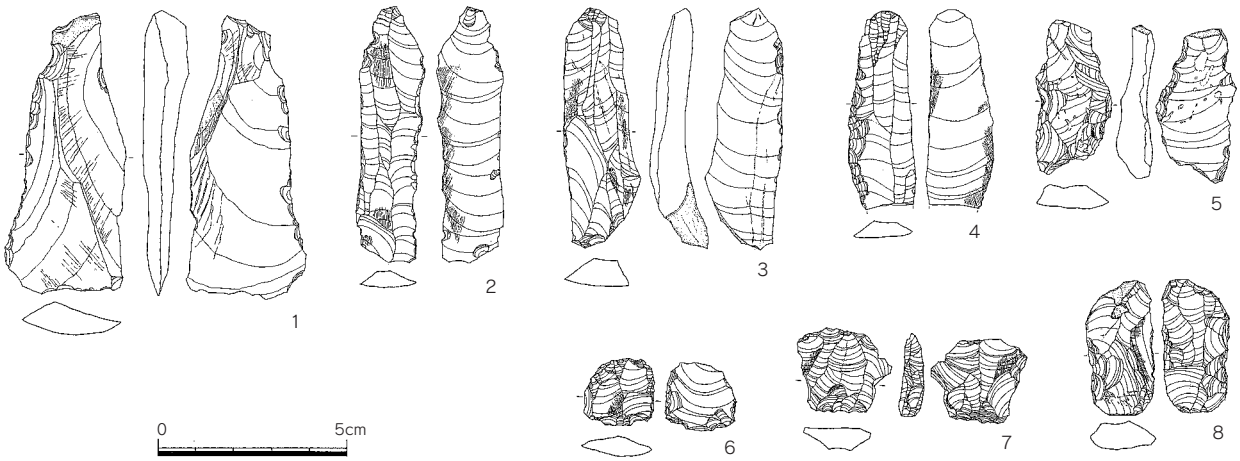


図129　各種の使用痕・加工痕ある剥片

②使用痕ある剥片・加工痕ある剥片及び刃器について

当調査で最も多く出土した石器はいわゆる使用痕ある剥片・加工痕ある剥片である。この中には刃器と呼んで良い定型的な縦長剥片を含み、またいわゆるつまみ形石器に使用痕らしきものが見られるもの（6）もある。さらにはくさび形石器と呼ばれる、両極につぶれたエッジと使用に伴うと思われる上下両方向からの剥離を持つ石器（7）もこれにいれても良いかも知れない。

このうち鈴桶技法によるほぼ同形態の縦長剥片でも、両側縁に使用痕のみがあるもの（2・3）、片側縁に加工が施され反対側縁に使用痕があるもの（4）、上部にノッチ状の剥離を伴うもの（1・2・5）等いくつかの形態がある。連続する小剥離を施したものはサイドスクレイパーとすべきかも知れないが、本書では反対の刃部に使用痕を伴い、同形態で使用痕のみがある方が多いことから使用痕ある剥片とした。加工を施した目的については検討が必要である。これらの使用痕を顕微鏡で観察すべきであるが今回はできなかった。今後は形態分類と顕微鏡による使用痕が必須になる。（米倉）

3　遺跡の立地など

最後に遺跡の立地について検討する。縄文時代の遺構が検出された地点は層の状況から沖積層と考えられる。右図の地質図のとおりである。調査区の南西側は低位段丘であるが、これは扇状地の末端が低位段丘化したものである。近隣の四箇遺跡では縄文時代前期の遺物は地山である砂礫層直上のシルト層で発見され、後期の遺物はさらにその上の泥炭層及び砂層上で発見されている。前期と後期で四箇遺跡周辺の環境が大きく変わっていることが推察できる。これは縄文海進後の海退とあわせて平野の沖積化が進んだ結果と考えられ、それに合わせて集落の占地条件も当然変わったであろう。農耕の開始による集落占地の変化と合わせて考えなければならない問題の1つである。さらに、上述のように四箇遺跡では砂層の下から前期の遺物が出土しており、弥生や縄文晩期のさらに下の層の確認は必須である。これらの積み重ねが、考古学のみならず、平野の形成史にも役立つことは言うまでもない。（米倉）

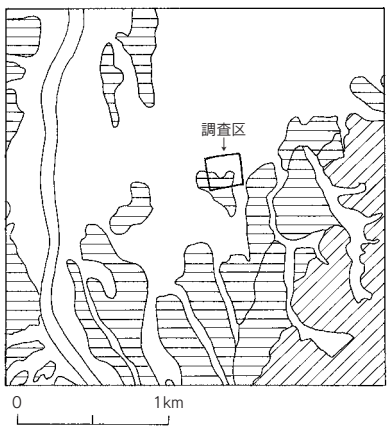


図130　調査区周辺地質図
(1/50,000)
※横線は砂礫台地Ⅰ～Ⅲ,斜線は山地,丘陵

引用・参考文献については頁の都合で図の引用以外について掲載できませんでした。著者の方々には深くお詫びいたします。

付篇　福岡県重留遺跡における土器圧痕の検討

山崎　純男（福岡市教育委員会文化財部）

1．はじめに

筆者らが土器についた植物種子や昆虫等の圧痕の研究を始めてからはや3年が過ぎた。圧痕研究の契機は縄文時代の農耕問題を研究するにあたって最も問題となる栽培植物の探索において、コンタミネーションを避けて時期が決定できる確実な資料として土器についた圧痕資料に注目したからに他ならない。実際、圧痕を意識的に1点1点の土器にあたって探索を進めると、一遺跡から数10例の圧痕資料を確認することができた。これまで圧痕で確認した種子にはイネ（?）、オオムギ、アワ、ヒエ、ハトムギ、マメ類、シソ、ゴボウ等の栽培植物をはじめとして、カジノキ、イノコズチ、キク類、ナス属、イネ科、エノコログサ、ドングリ類、かつて、熊本県ワクド石遺跡で籾痕とされたワクド石タイプの種子圧痕やワラビの羽片等の葉の圧痕、コクゾウムシ、コナラシギゾウムシ、ないしはハイイロチョッキリの幼虫など雑草や昆虫類がある。これら土器に残された圧痕例を集成することによって、栽培植物や集落の周辺の植物、あるいは栽培植物の害虫が明らかになることが判ってきたことは大きな収穫である。これら圧痕と出土石器等の遺物あるいは遺跡のあり方等を総合することによって縄文時代の生業、特に農耕問題について、その実体に迫ることができると考えている。

ここで紹介する圧痕資料は、福岡県福岡市重留遺跡の出土土器の中から検出した圧痕土器である。発掘担当者の力武卓治氏の好意で重留遺跡出土の縄文土器全てを観察・検討することができた。縄文土器はコンテナ50箱分である。小破片を含めた全ての土器、土製品は数万点に上る。この中から実体顕微鏡の観察で検出した圧痕資料は約30点である。これらの土器の圧痕についてレプリカを作成し、その後走査電子顕微鏡によって観察した。レプリカの作成、走査電子顕微鏡の観察は、以下の方法で実施した。1．圧痕資料を超音波洗浄機により洗浄。2．圧痕部にアクリル樹脂パラロイドB－72の5～10%溶液を塗布。3．GE東芝シリコーンTSE350と硬化剤CE621を100：1の割合で混ぜたシリコーンを圧痕部に注射器で充填。4．シリコーンが硬化した後、レプリカを圧痕から取り出す。土器については最初に塗布したアクリル樹脂をアセトンで拭き取る。5．レプリカを走査電子顕微鏡で観察する。走査電子顕微鏡は福岡市埋蔵文化財センターに設置されているPhilips・XL30cp走査電子顕微鏡を使用した。検眼に際しては対象をあらゆる角度から観察、倍率も15～2000倍の範囲で表面の組織を観察し、特徴的な部分については写真撮影を行う。6．写真をもとに図鑑、現生標本と比較しながら同定を行う。圧痕の同定は圧痕の遺存状態に左右され、特徴的な部分が遺存しているとは限らず、極めて困難である。同定については今後さらに植物学者に教示を得ながら検討を加えていくので、変更するものがあることを断っておく。

2．遺跡の立地と概要

重留遺跡の存在する早良平野は西側を飯盛山―長垂山山塊で限られ、東側を油山山塊および油山から派生した鴻巣山を中心とした低丘陵によって東の福岡平野と分断されている。南側は背振山脈で限られ、平野の開口部である北側は博多湾（玄界灘）に面し、完結性のある小平野をなしている。平野の中央よりやや西にかたよって、背振山脈に源を発する室見川が北流し、博多湾に注いでいる。平野部には有田・小田部の洪積台地をはじめとして、幾つかの洪積台地が点在するが、その大部分は室見川をはじめとする河川の沖積作用によって形成されている。早良平野における遺跡の分布は、その立地から大きく分けて、1．洪積台地上に立地する遺跡群、2．平野を囲む山麓部に立地する遺跡群、3．沖積微高地に立地する遺跡群に集中分布している。

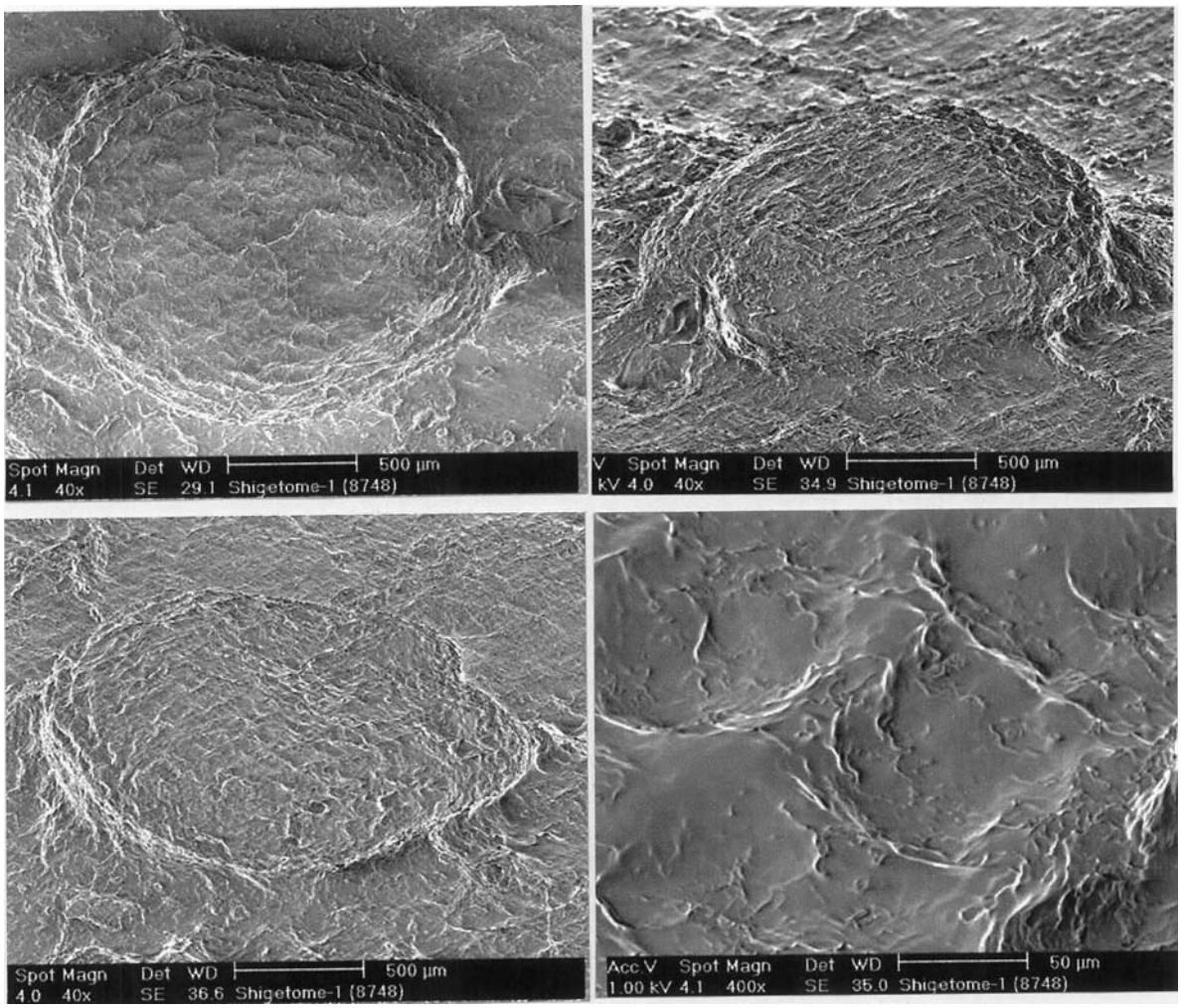
重留遺跡群は早良平野の中央東よりの室見川と金屑川に挟まれた沖積微高地上に位置している。標高約25～28mで、現状は水田となっていて、表面的には沖積微高地の存在はわからない。縄文時代の遺跡はA－1区を中心に約3000㎡の範囲に展開している。この地区の基盤土は、暗黄灰色の細かい土と砂が入り混じった扇状地特有の土である。遺構は竪穴住居跡1＋α棟、貯蔵穴1基、埋甕1基、土坑4基が確認されている。住居跡、その他の遺構は径30mほどの広場を中心にその周囲に分布している。出土遺物には、晩期前半を中心に後期後半から晩期にかけての土器をはじめ、紡錘車等の土製品、磨製石斧、打製石斧、スクレイパー類、磨石、石皿等の石器がある。小規模であるが福岡市では集落の全容が明らかになった唯一の例である。早良平野における縄文時代晩期前半の拠点集落と考えられる。

3．重留遺跡の圧痕資料の観察

資料1（遺物番号874800137・本文図未掲載）

土器：粗製深鉢形土器口縁部小破片。口縁は平坦で、端部は丸く収めている。口縁部はわずかに内傾するがほぼ直線的に立ち上がる。外面は粗雑な指仕上げの上から板状の工具による斜位の条痕が施される。内面は横方向のやや粗雑なヘラナデ調整で仕上げている。胎土には多量の細かい砂粒を混入していて、良質でない。焼成は良好。色調は外面が褐色、内面が暗灰褐色をなし、一部に黒斑がみられる。

圧痕：外面の右端、口縁直下に1か所、内面の左端の口縁直下に1か所の計2か所に存在する。内面の圧痕は圧痕主体の燃焼による二次加熱によって黒変している。ドングリ等の堅果類の果皮の圧痕と考えられるが詳細は不明。外面の圧痕は径1.5mmの円形で極めて小さい。胎土中に深く入り込んでいるが、二次加熱による変色は認められない。実体顕微鏡の観察では、圧痕内面に組織らしいものが見えるが、判然としない。レプリカの走査電子顕微鏡の写真は第1図に示した。



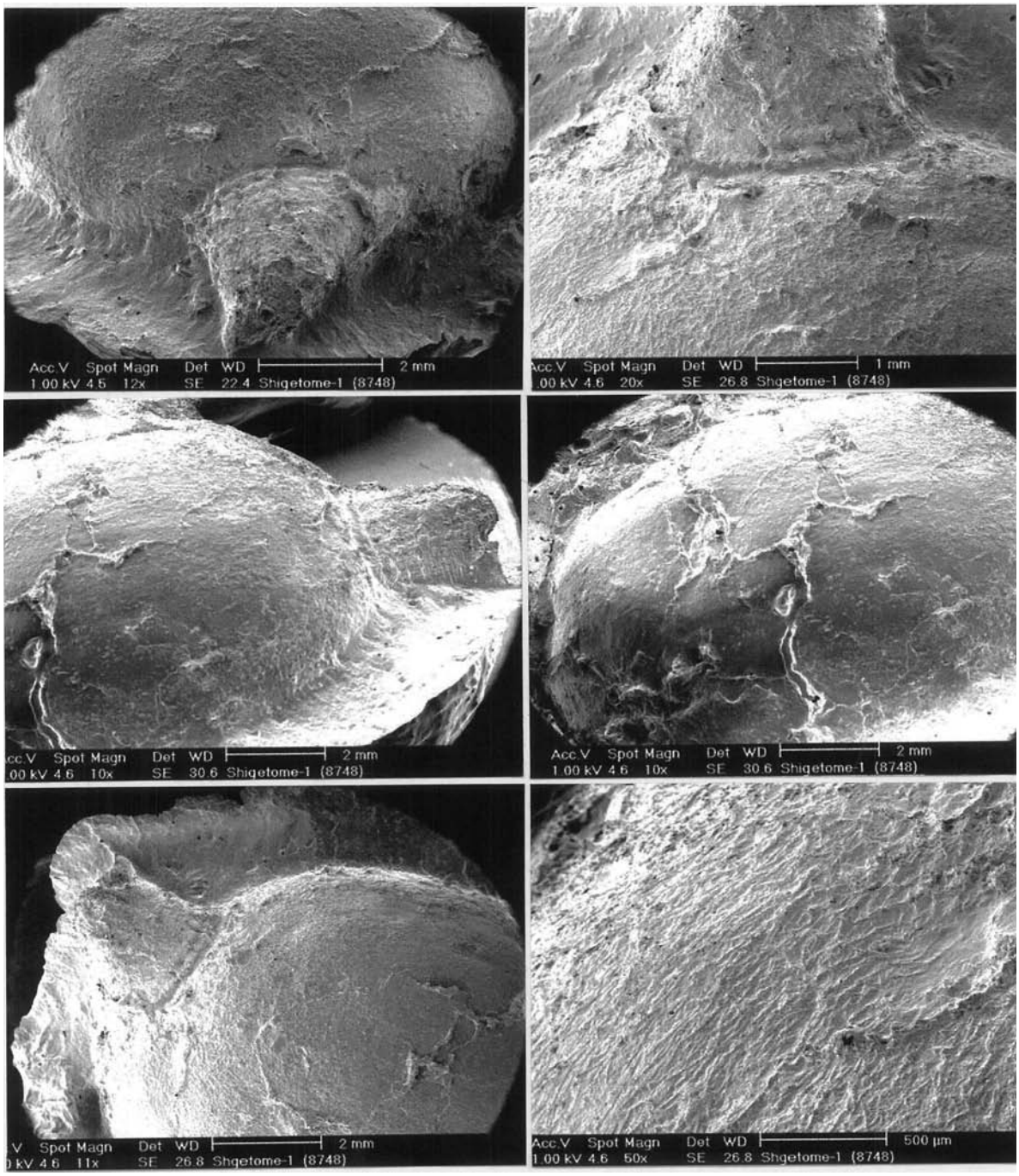
第1図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真Ⅰ

左上は平面形の全形、下は側面、右上は左下の逆の側面、下は種皮の拡大写真である。平面形は広い卵形でヘソは長軸の中央よりやや片よっている偏平で全体に浅い凹点による網目模様がある。長さ1.75mm、幅1.40mmを測る。ナス属の植物の種子と考えられる。

資料2（遺物番号874800157・図54-259）

土器：深鉢形土器の底部小破片。平底であるが底部端が遺存せず、形態、径等は不明。胎土には石英・長石等の砂粒を多量に混入し、良質でない。焼成は良好、色調は外面が暗褐色、内面が黒灰色をなす。

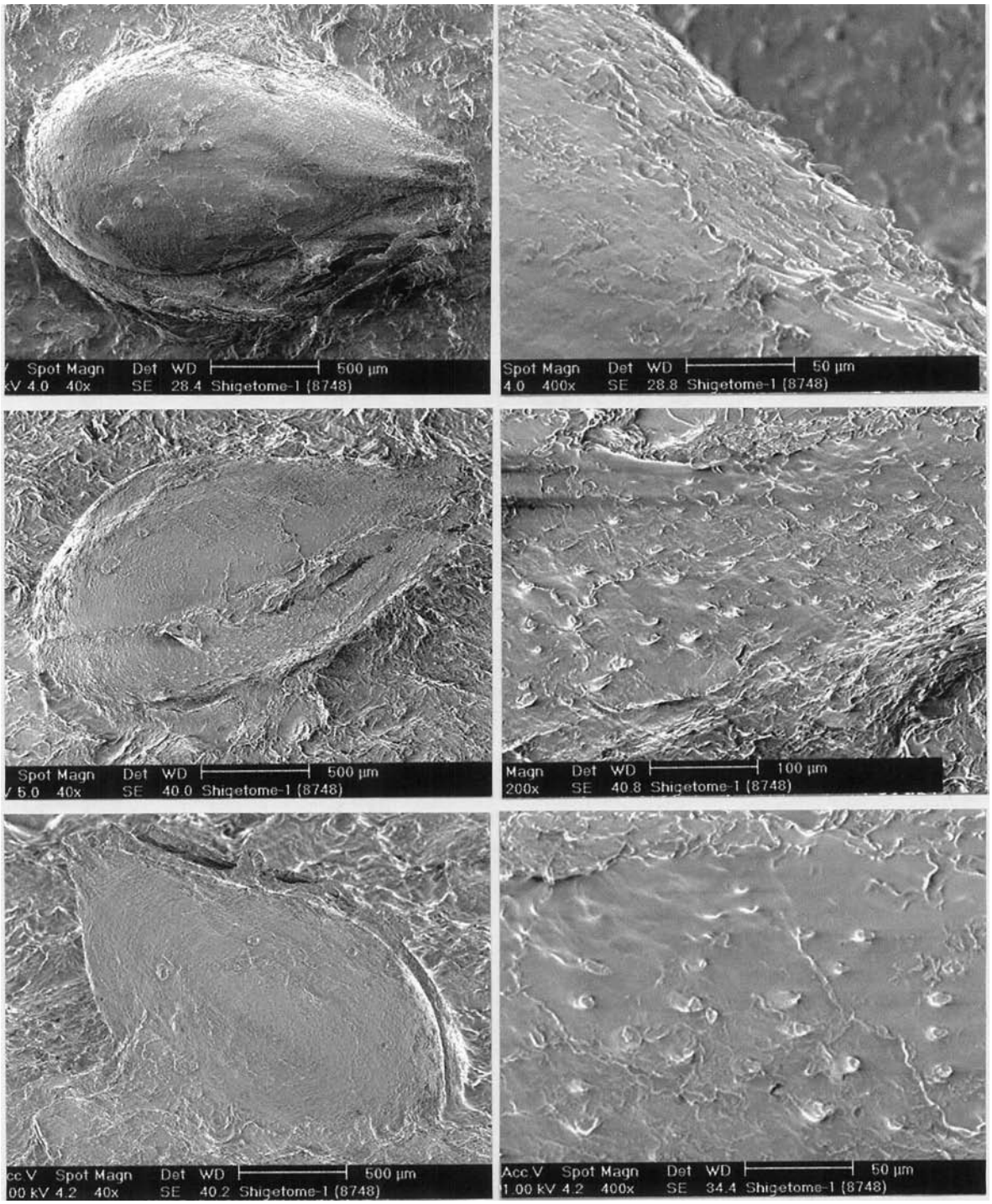
圧痕：外底面に確認した大型の圧痕である。圧痕の約半分を欠損している。肉眼でも容易にドングリ類の圧痕であることがわかる。第2図に走査電子顕微鏡写真を示した。写真左上は花柱側から、中は側面、下は上面から、右上は花柱基部拡大、中・下は果皮の拡大写真である。全形が不明なため種は明らかにできないが、照葉樹のドングリと考えられる。現存の長さ7.07mm、現存の幅5.12mmを測る。



第2図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真Ⅱ

資料3（遺物番号878400330・図75-359）

土器：粗製深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部は平坦である。器形は口縁から緩やかな弧を描き、胴部に向かって広がる。復元口径20cm、外面には横方向の粗い貝殻条痕が施され、内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。口縁部より約3cm下った所に穿孔途中の凹みがある。胎土には石英・長石の砂粒を比較的多量に混入しているが良質である。焼成は良好、色調は外面が黄褐色で、一部に黒斑がある。内面は褐色をなす。SK－05出土。



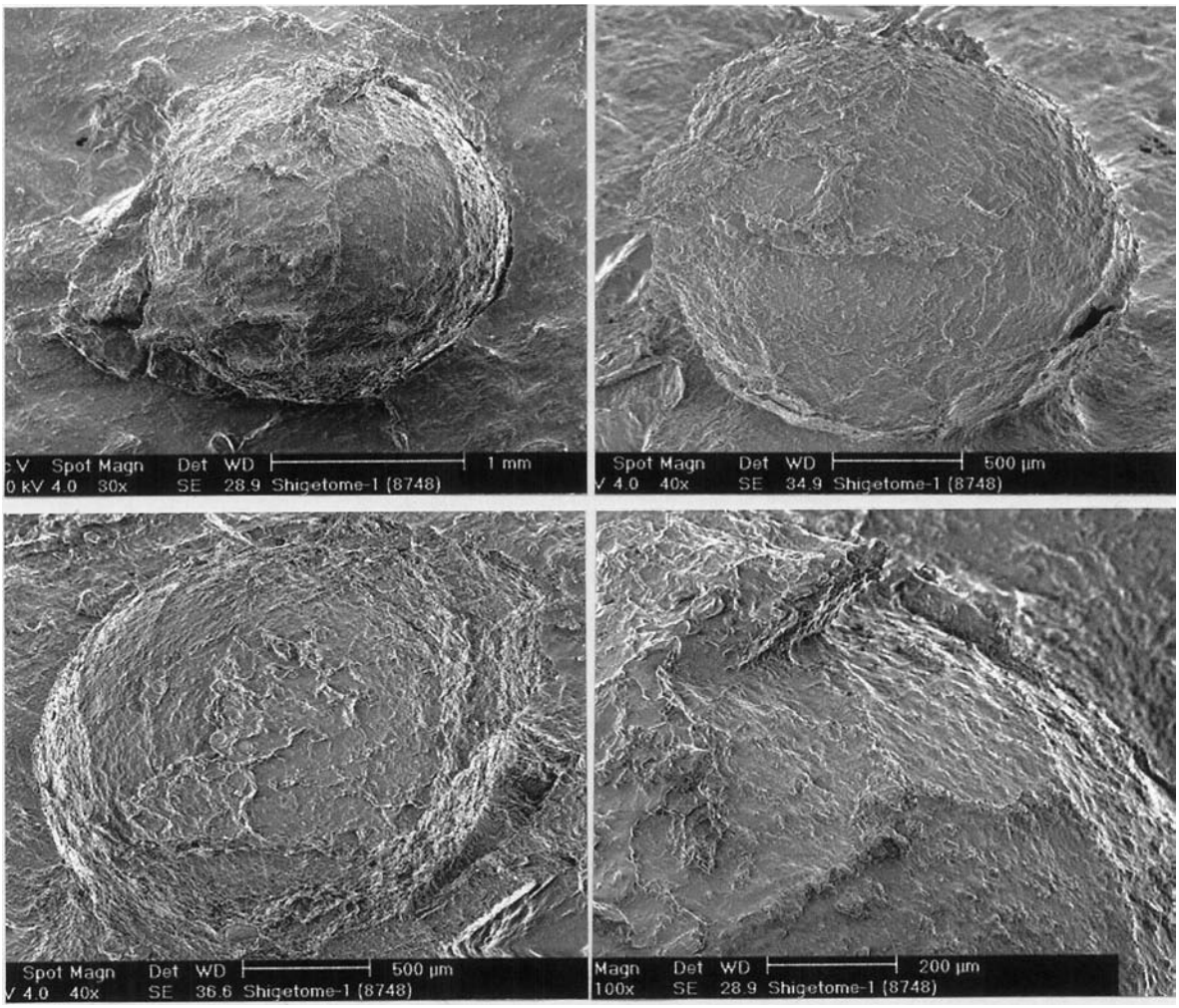
第3図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真Ⅲ

圧痕：内面の右端、口縁より約1cm下った所に存在する。土器の表面が剥離した部分に確認した圧痕で、元来は胎土中に深く入り込んでいる。圧痕は径1.5mmの円形で極めて小さい。圧痕は圧痕主体の燃焼による二次加熱によって内部が黒変し、周囲の胎土も厚さ1mmが同様に黒変している。最初から開口していたと考えられる。実体顕微鏡の観察では、圧痕の側面に段状になった稜線が確

認できる。レプリカの走査電子顕微鏡写真は第3図に示した。写真左上は平面形の全形、中は側面形、下は逆から見た側面である。右側は穎の拡大写真である。全形では外穎と内穎のずれが見られ、穎果には乳頭状の突起列が見られる。形状や突起列からアワと考えられる種子である。長さ2.04mm、幅1.37mmを測る。後章において検討を加える。

資料4（遺物番号874800353・図67-320）

土器：粗製深鉢形土器の口縁部小破片である復原口径20cm前後、口縁は平坦である。器形は口縁がややすぼまり、胴部方向に直線的に広がる。口縁端部がわずかに外反する。外面には横位から斜位の貝殻条痕が鮮明に施される。内面は横位のヘラナデ調整。胎土には多量の石英・長石の砂粒

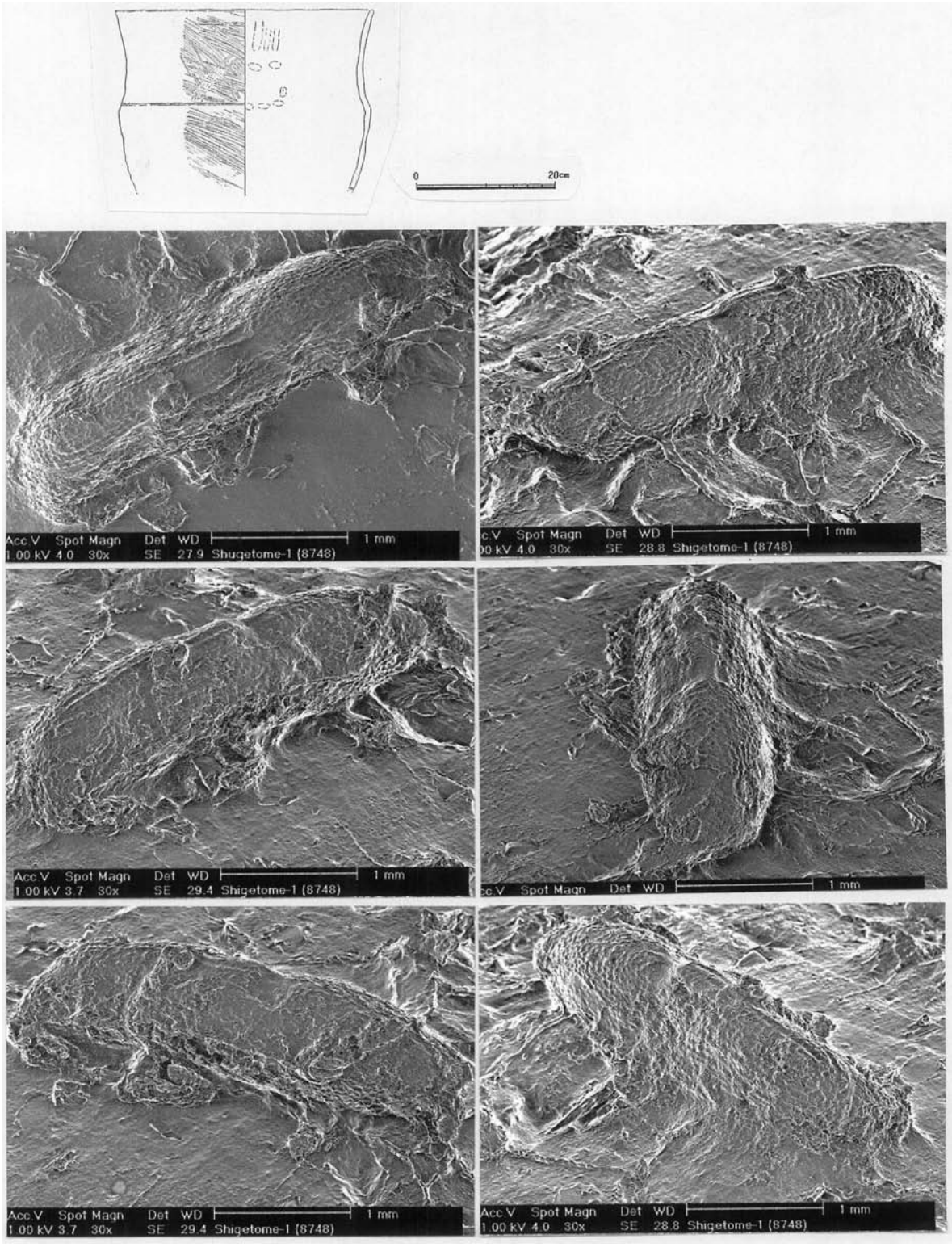


第4図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真Ⅳ

を混入しているため良質ではない。砂粒は粒がそろわずやや大きい粒も含んでいる。焼成は良好、色調は内外面共にやや明るい黄褐色をなす。

圧痕：内面の右端部の中央部（口縁より約4cm下った所）に存在する。圧痕は径2mm前後の円形で極めて小さい。圧痕の大部分は胎土中に深く入り込んでいる。また、圧痕内面は圧痕主体の燃焼

による二次加熱によって黒変している。圧痕の保存状態は極めて良好である。実体顕微鏡の観察では網目状の組織が観察できるが、圧痕の所々に砂粒が顔を出していて圧痕主体を良く反映していない部分があるが種子圧痕であることは間違いないものと考えられた。レプリカの走査電子顕微鏡写



第5図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真Ⅴ

真は第4図に示した。写真左上は圧痕の平面形、下は側面、左上は逆方向からみた側面、下は種皮の拡大写真である。種子全体に細い隆線で網目文様がある。網目の中には顆粒状の突起がある。シソ科植物の種子である。後章において検討を加える。長さ1.75mm、幅1.87mmの不整楕円形をなす。

資料5（遺物番号874800802・図82-428）

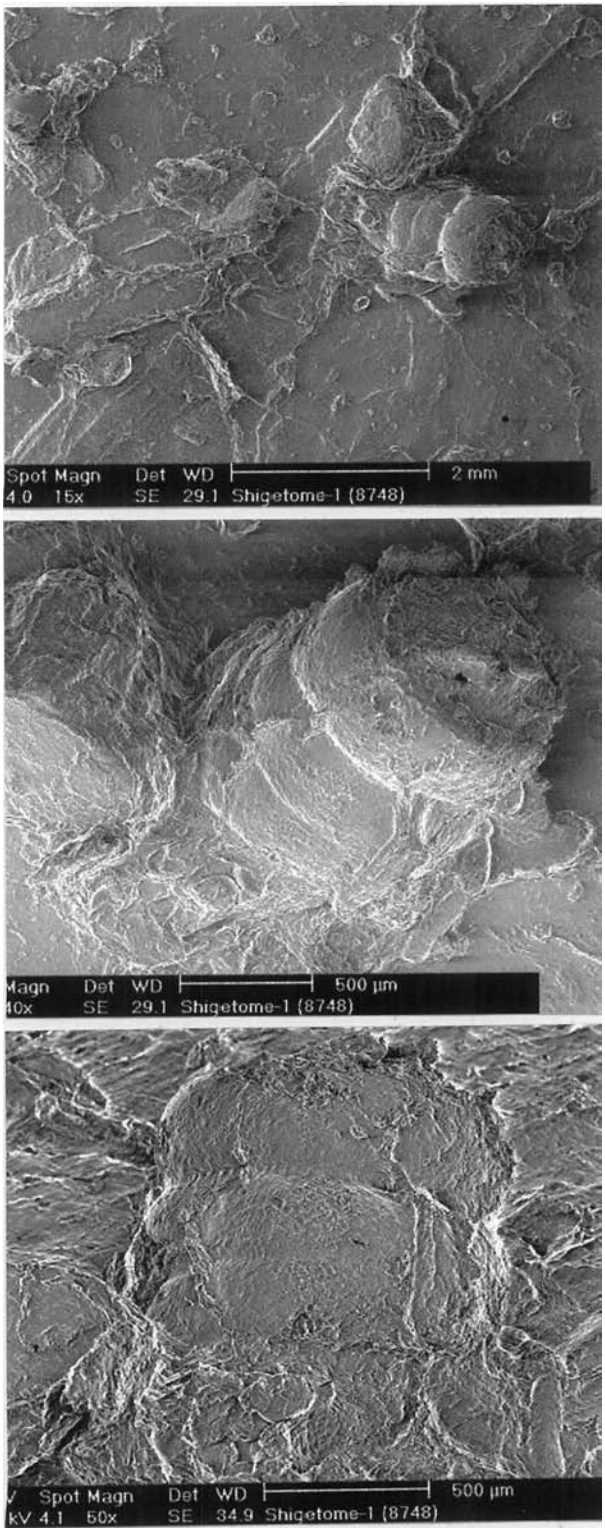
土器：大型の粗製深鉢形土器である。胴下半から底部にかけて欠損するが、約4分の1を残す大きな破片である。器形は底部からやや丸みをもって外傾しながら立ち上がるが、胴部はあまり張らない。体部中位でくの字形に屈曲して胴部から頸部に移行する。胴部と頸部の境には太い沈線一条を施している。頸部はゆるやかに内傾しながら立ち上がり、中位でやや外反しながら口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。復元口径40cm、胴部屈曲部径45cmを測る。器高は40cm以上と考えられる。外面の胴部には右下がりの粗い貝殻条痕が途切れなく長く施されている。頸部も同様の貝殻条痕が施されるが、それに直交するように幅1cm前後の粗いヘラによる条線が施され、貝殻条痕との間に菱形の文様を構成している。また、口縁下の幅1cmは条痕の上にヨコナデの調整が施され、条痕を消している。内面は横方向のヘラナデ調整が施されているが、粘土接合部が比較的明瞭に残り、凹凸が著しい。胎土には石英・長石、金雲母の砂粒を多量に混入していて、良質でない。焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面が灰褐色をなす。

圧痕：内面の屈曲部より上の中央部に存在する。肉眼の観察では圧痕として識別できない。保存状態は極めて良好である。他の圧痕と異なり、圧痕本体の燃焼による圧痕内部の色調の変化は見られない。実体顕微鏡の観察では節と顆粒状の突起が確認できコクゾウムシの可能性が考えられた。レプリカの走査電子顕微鏡の写真は第5図に示した。写真左上は圧痕の平面形、中・下は腹側から、右上・下は背側から、中は頭部側からの写真である。吻と足を欠損していて、圧痕の残りがやや不良で像がやや不鮮明であるが、点刻列等からコクゾウムシと同定できる。体長3.47mm、幅0.90+mmを測る。

資料6（遺物番号874800874・図88-494）

土器：粗製深鉢形土器の口縁部破片。口縁は直線的に外反する。外面は横位のヘラケズリ状の調整の上に横位のヘラナデを加えている。内面は横位のヘラ研磨で仕上げている。胎土には砂粒を混入しているが良質。焼成は良好、色調は内外面とも黄褐色で、内面に黒斑がみられる。Ⅲ層出土。

圧痕：内面の右端部中央に存在する。径1.0mmの円形をした小さい圧痕である。圧痕は胎土中に深く入り込んでいる。圧痕内面は圧痕主体の燃焼による二次加熱によって黒褐色に変色している。実体顕微鏡の観察では組織は確認できないが、長軸に直交した横線が確認できる。昆虫の幼虫と考えられる。レプリカの走査電子顕微鏡の写真は第6図に示した。写真上から下に倍率を上げている。昆虫の幼虫であることは間違いないと考えられるが、欠損していて完全でないので種の同定は困難である。他の資料から考えると、ドングリにつく昆虫の幼虫と考えられる。長さ1.40mm、幅1.06mmを測る。



第6図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真Ⅵ

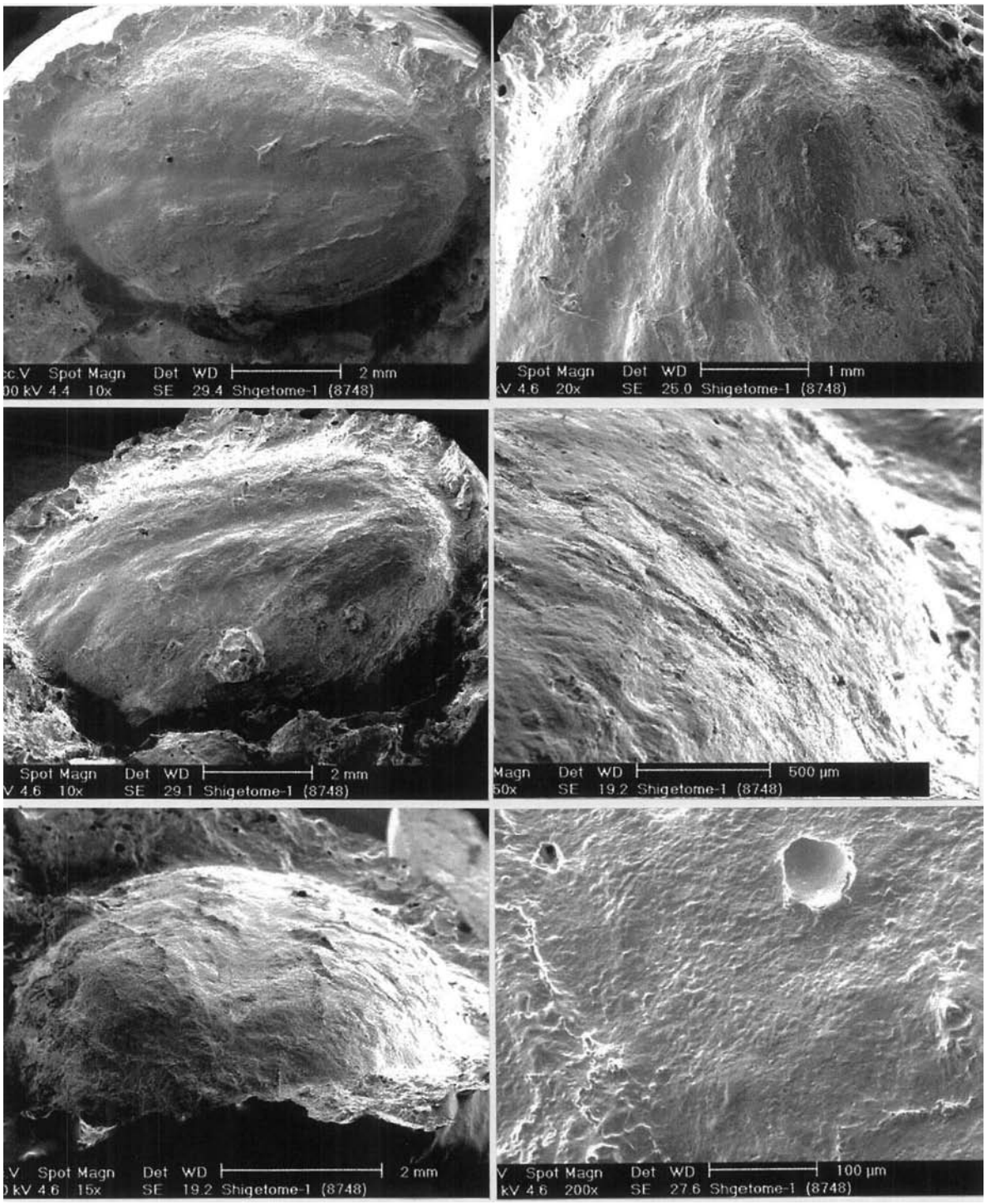
資料7（遺物番号874800996・図1－14）

土器：粗製深鉢形土器の底部破片。底部復元径10cm、安定した平底である。底部端はわずかに外に張り出すが丸く収めている。体部は外傾しながら直線的に立ち上がる。外面は横方向の指ナデ調整、内面は多方向からの指ナデ調整である。胎土には石英、長石の砂粒が多量に混入しているが、それにもまして堅果類の果皮と考えられる物質と貝殻片が混和材として多量に混入されている。これら混和材は土器の焼成時にそのほとんどが消失して、圧痕として無数の穴となっているが、今回は特別な場合を除いて圧痕として取り上げていない。焼成は良好、色調は外面が暗黄褐色、外底部は赤褐色、内面は灰褐色～灰黒色をなす。

圧痕：前述したように混和材とされた堅果類の果皮、貝殻片の圧痕は無数にあるが、その中で全形の判別できるものはない。ここで取り上げた圧痕は大きな種子圧痕と考えられるもので、底部から体部への移行部断面に存在する。圧痕は肉眼でも判別できる大型の種子の圧痕である。内面は圧痕主体の燃焼による二次加熱によって黒変している。実体顕微鏡の観察では圧痕の中央部に隆起した稜線が確認できる。レプリカの走査電子顕微鏡写真は第7図に示した。写真左上は上面から、中は側面から下は短辺側から、右側は種皮の拡大写真である。種子の全形がないため種は明らかにできない。現存の長さ7.59mm、幅5.83mmを測る。

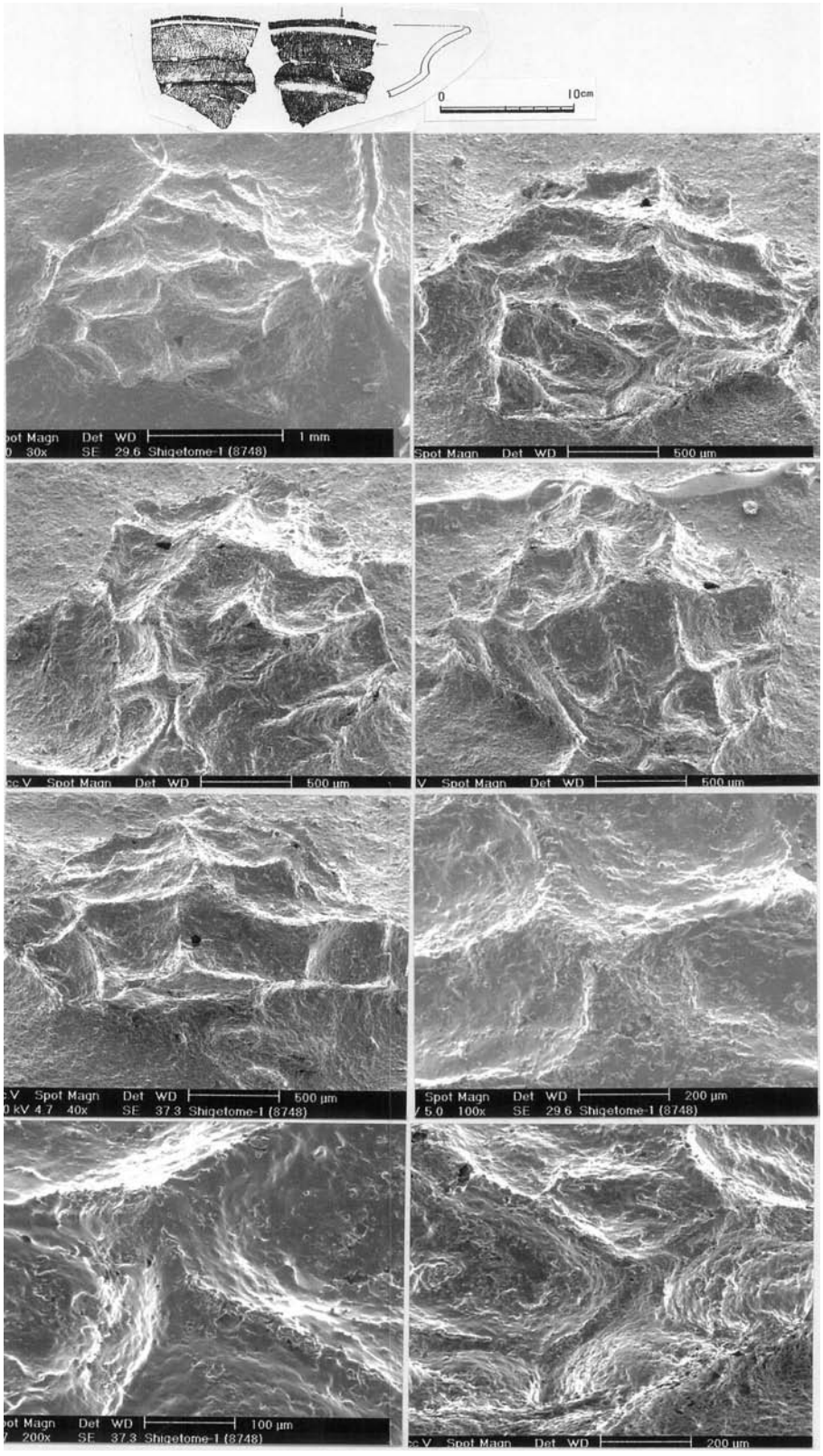
資料8（遺物番号874801653・図117-882）

土器：精製浅鉢形土器の破片である。胴下半部から底部にかけて欠損するが、概略の器形はわかる。胴部は大きく外傾しながら、わずかに丸みを持ちながら立ち上がり中位でくの字形に屈曲し、



第7図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真Ⅶ

内側に短く入り込む。そこからさらに大きく反転し、外反しながら口縁部にいたり、口縁端部は丸くおさめている。屈曲部の内外面には稜線が形成される。外面の口縁直下には沈線一条がめぐる。内面にも同様に凹線一条がめぐり、段が形成される。内外面共に横方向の丁寧なヘラ研磨調整が施される胎土にはほとんど砂粒が混入されず、極めて良質である。



第8図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真Ⅷ

圧痕：内面の口縁直下の頸部に存在する。圧痕は径2.5mmの円形をなす。他の圧痕資料と同様に

圧痕主体の燃焼によって黒く変色している。実体顕微鏡の観察では、内面に楕円形の突起状の粒が観察できる。レプリカの走査電子顕微鏡の写真は第8図に示した。圧痕正面と角度を変えてみた写真とその拡大写真である。平面形は横広卵形で表面には大きな凹みが隣り合って存在する。サンショウ類の種子であり、イヌザンショウと考えられる。長さ2.50mm、幅1.6mmを測る。

資料9（遺物番号874801655・図117-879）

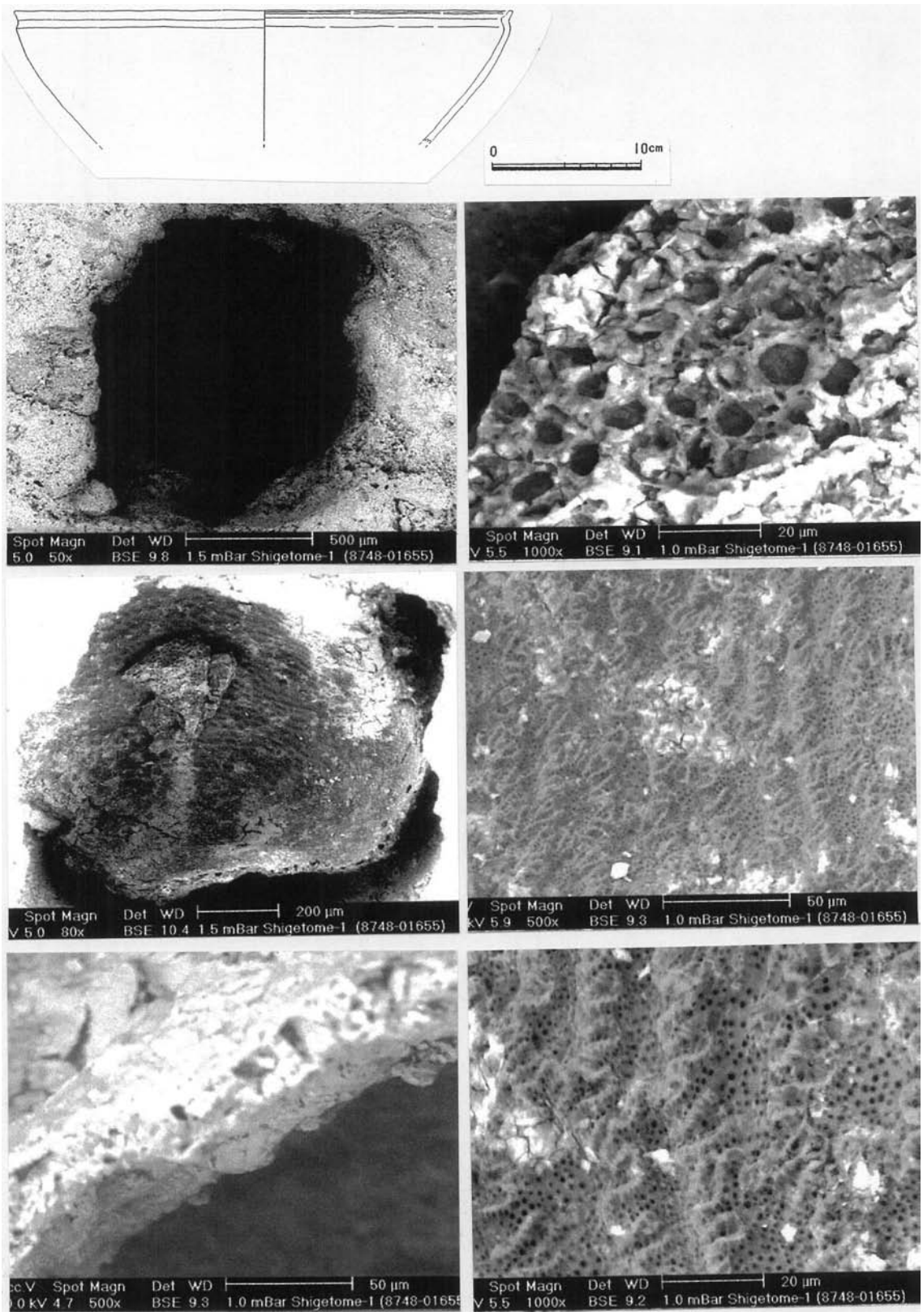
土器：精製浅鉢形土器で底部を欠損する。全体の約4分の1が遺存している。体部は大きく外傾しながら立ち上がり、口縁部近くでくの字形に内側に屈曲し頸部を形成している。屈曲部外面には鋭くないが稜線ができる。頸部は極端に短く、すぐに外反し口縁となる。口縁部内側には凹線一条がめぐり、段を形成する。頸部内側は大きく内側に突き出るが、稜線は形成されず、丸くなる。内外面共に横方向の丁寧なヘラ研磨調整で仕上げている。胎土には石英、長石の細かい砂粒を混入しているが、精選され極めて良質である。焼成は堅致、色調は外面が黄褐色、内面が黒褐色をなす。復元口径30cm、復原器高20cm前後である。

圧痕：内面の頸部存在する圧痕1は径1.0mm前後の円形である。肉眼では圧痕であるか否かの判別は困難である。実体顕微鏡の観察では圧痕の内部に種子の本体が炭化して遺存している。圧痕の周囲は種子の燃焼によって黒変している。圧痕の走査電子顕微鏡の写真は第9図に示した。写真左上は圧痕の開口部である。中は圧痕の内部に残っている炭化した種子の一部である。下は種子の殻の拡大写真である。右上は炭化した殻の表面。中・下はからの内部の拡大写真である。遺存状態も良く貴重な資料である。圧痕（炭化した現物）は全体に丸みをもっている。写真右上の黒点は乳頭突起が剥離した痕と考えられ、また下の殻の裏側の拡大写真は穎果の表面組織の「長細胞」と見られ、炭化部分はアワの有ふ果外穎側の殻と見られる。後章で検討を加える。

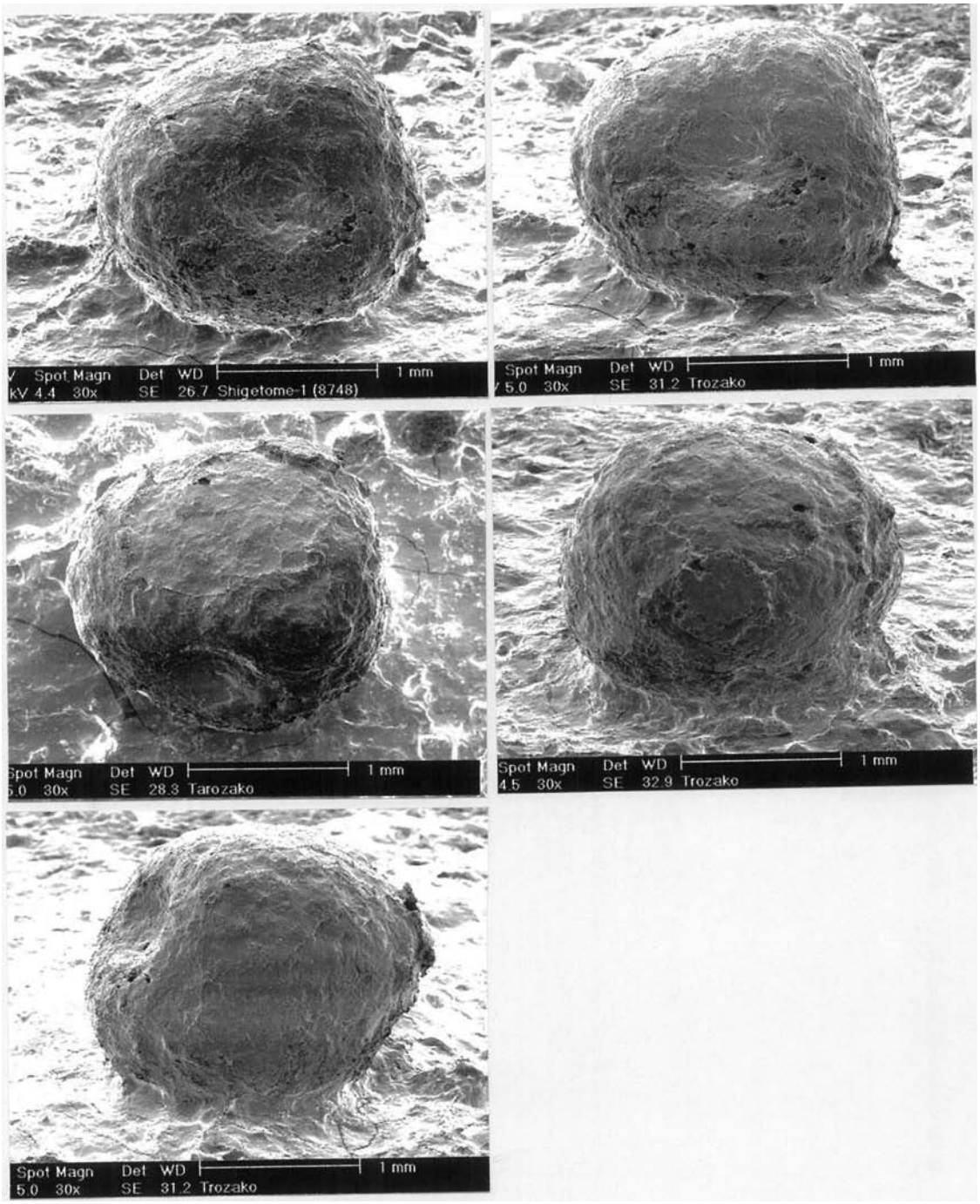
資料10（遺物番号874806003－1・未図化）

土器：粗製深鉢形土器の胴部破片。胴部はやや丸みをもって立ち上がる。外面は右下がり斜方向の粗いヘラナデ調整の上に左下がりの条線が施されている。ススの付着が顕著である。内面はやや粗いヨコナデ調整である。胎土には石英、長石の砂粒が若干混入されている。また、堅果類の果皮と考えられるものが少量混入されている。焼成は良好。色調は外面が黒灰色、内面が黒褐色をなす。

圧痕：内面の中央部に存在する。圧痕は径1.5mmの円形をした極めて小さいものである。胎土中に深く入り込み、圧痕内面は圧痕主体の燃焼による二次加熱のため黒く変色している。実体顕微鏡の観察では圧痕は球形をしているが、1ヶ所にコブ状にふくれた部分があり胚の痕跡と考えた。レプリカの走査電子の写真は第10図に示した。左上は凹み側から、中は圧痕の正面形、下は側面から、右上は凹み側から、下は上の逆の方向からの写真である。球形で何かの種子と考えられるが、表面の組織等が残っていないので明らかにし難い。



第9図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真Ⅸ

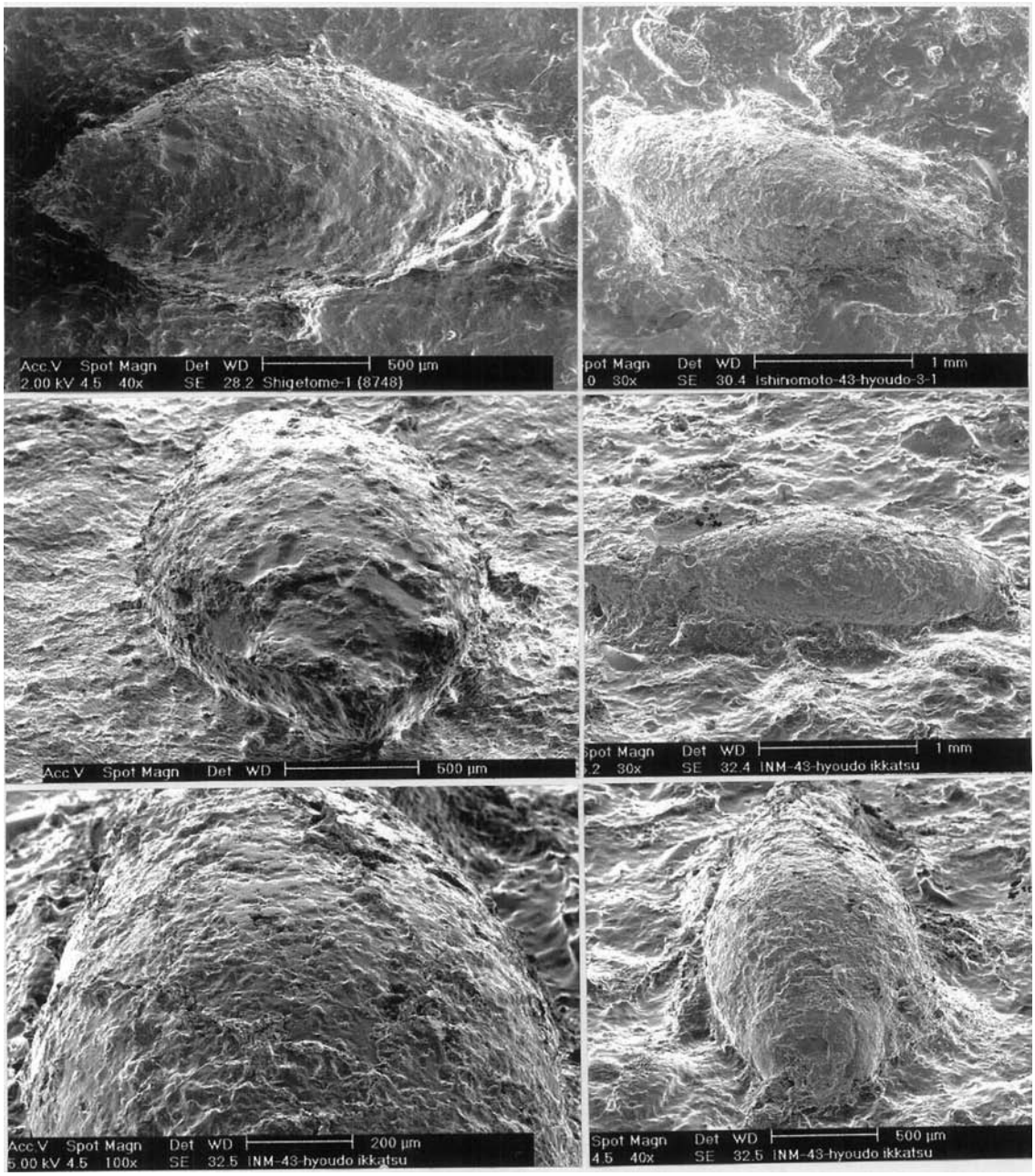


第10図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真X

圧痕の長さ2.07mm、幅1.78mm、厚さ1.73mmを測る。

資料11（遺物番号874806003－2・未図化）

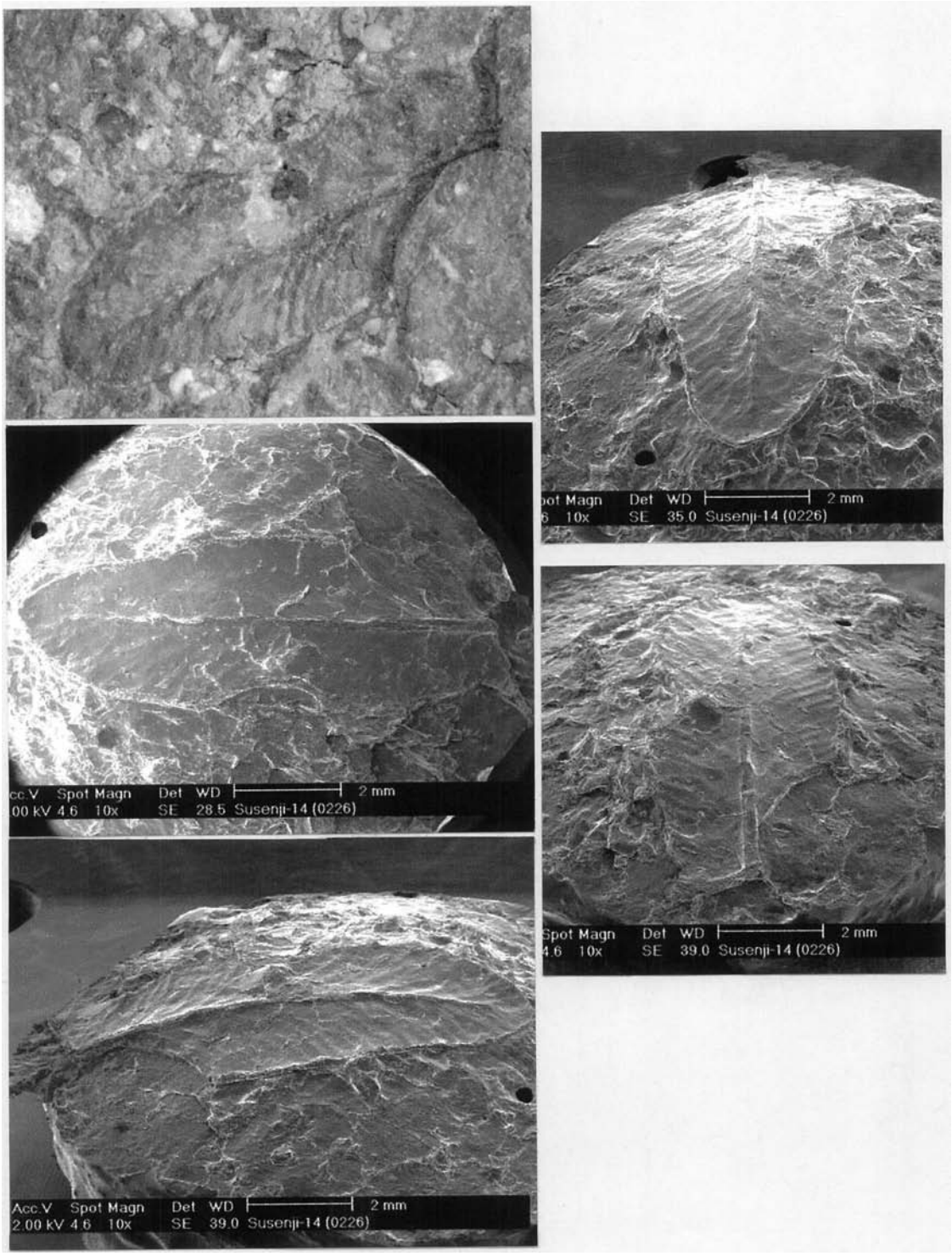
土器：小型の精製深鉢形土器の胴部破片。外面は右下がりのやや粗雑なヘラ研磨調整を施している。ススの付着が顕著である。内面はヨコナデ調整である。胎土には石英、長石、金雲母の細かい砂粒を混入しているが、比較的良質である。焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面が灰褐



第11図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真ＸＩ

色をなす。

圧痕：内面のやや左に偏った下半部に存在する。圧痕は1.5mm×1.0mmの楕円形をした極めて小さい。圧痕内部は圧痕主体の燃焼による二次加熱によって黒色に変色している。実体顕微鏡の観察では長軸の両端部が尖り、形態的にはエノコログサ等の種子に近いが、表面の組織等は観察できない。レプリカの走査電子顕微鏡の写真は第11図に示した。写真左上は平面の全形、中は先端側から、下は種皮の拡大、右は全形、中は側面、下は基盤側からの写真である。平面の全体型は細い楕円形で先端が尖る。形状からはイネ科植物の種子と見られるが定かでない。種皮の



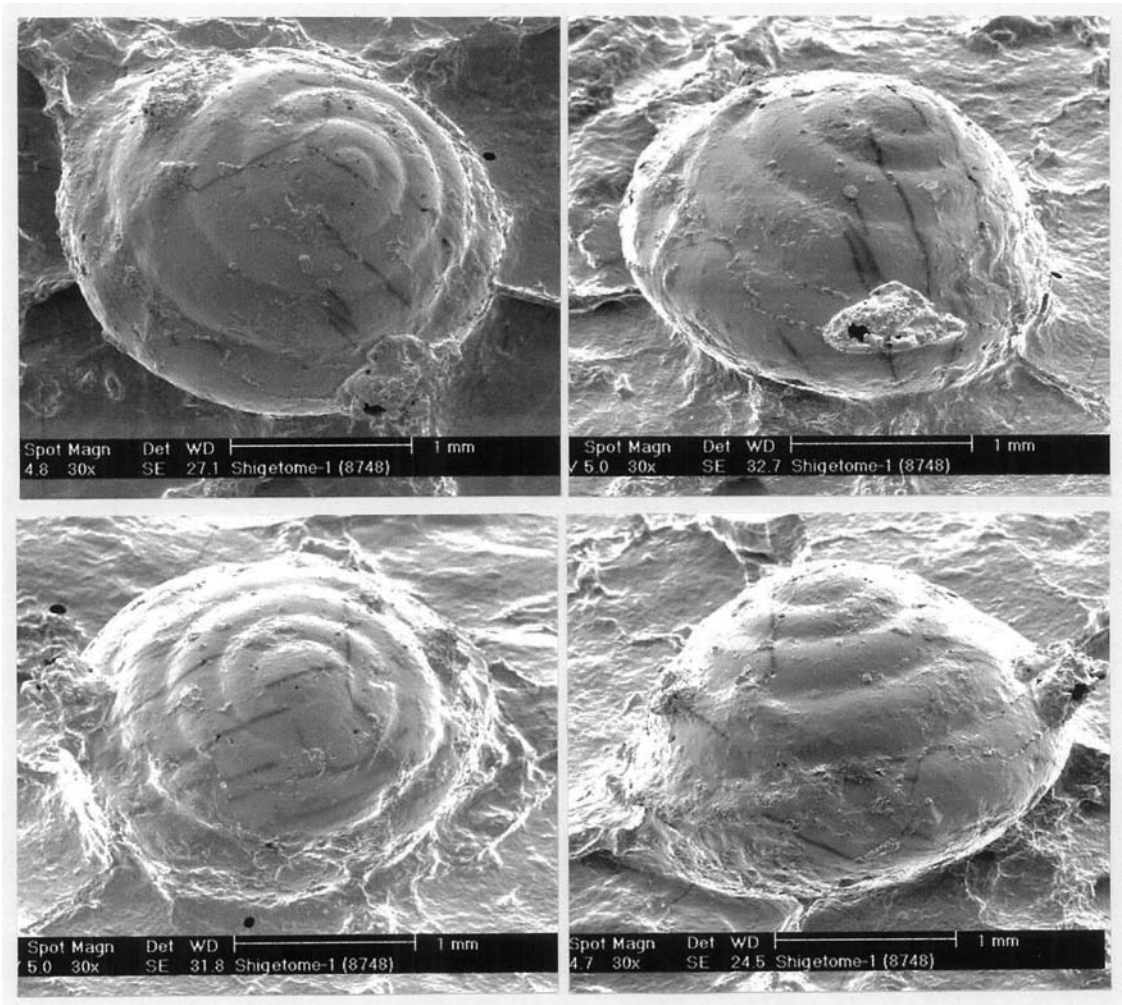
第12図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真ＸⅡ

組織が明らかにできないので種は不明である。

資料12（遺物番号8748060118・図未掲載）

土器：粗製深鉢形土器の胴部破片。外面は右下がりの粗い条痕を施した後、上からヘラナデ調整が施され、細かい条線がついている。内面は横方向の丁寧なヘラナデ調整である。胎土には石英、長石、金雲母の砂粒が多量に混入されている。焼成は良好、色調は外面が褐色、内面が褐色～黒色をなす。

圧痕：外面の中央部の上位に存在する。通常の圧痕に見られるような二次的な加熱による変色はみられない。肉眼でも圧痕と識別できる大きな圧痕である。圧痕の内部に中軸に沈線があり、それを軸として羽状に細かい沈線が派生している。実体顕微鏡の観察では圧痕の周縁に沈線がめぐり、羽軸からのびる小羽軸は縁側で二股に分かれていることが確認できる。実体顕微鏡写真とレプリカの走査電子顕微鏡写真は第12図に示した。写真左上は実体顕微鏡の全形写真、中以下は走査電子顕微鏡の写真である。中は平面全形、下は側面側から、左上は先端側から、下は基部側からの写真である。羽変の縁が僅かに内側に巻いていることや小羽軸の特徴からワラビの羽片の

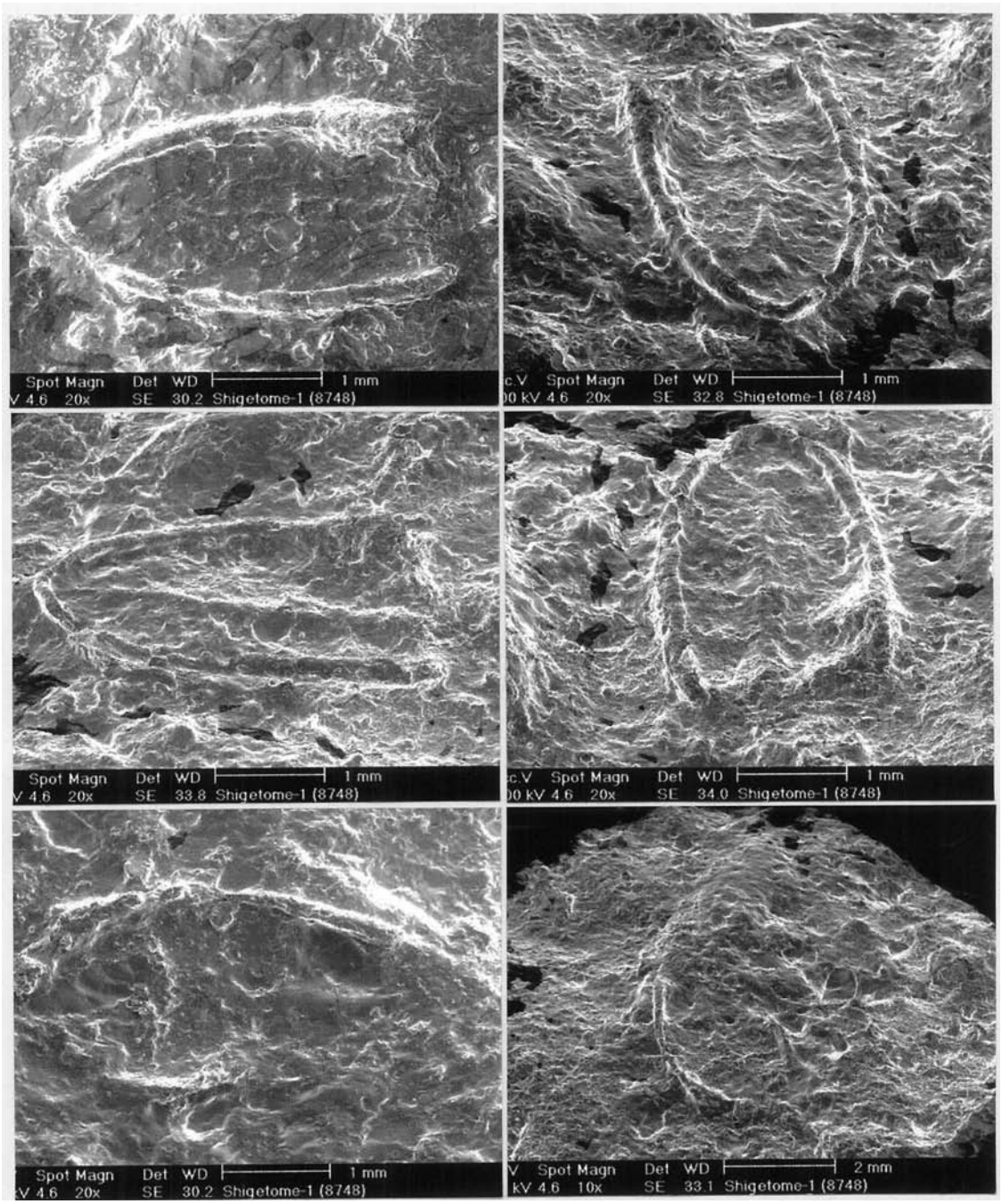


第13図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真ⅩⅢ

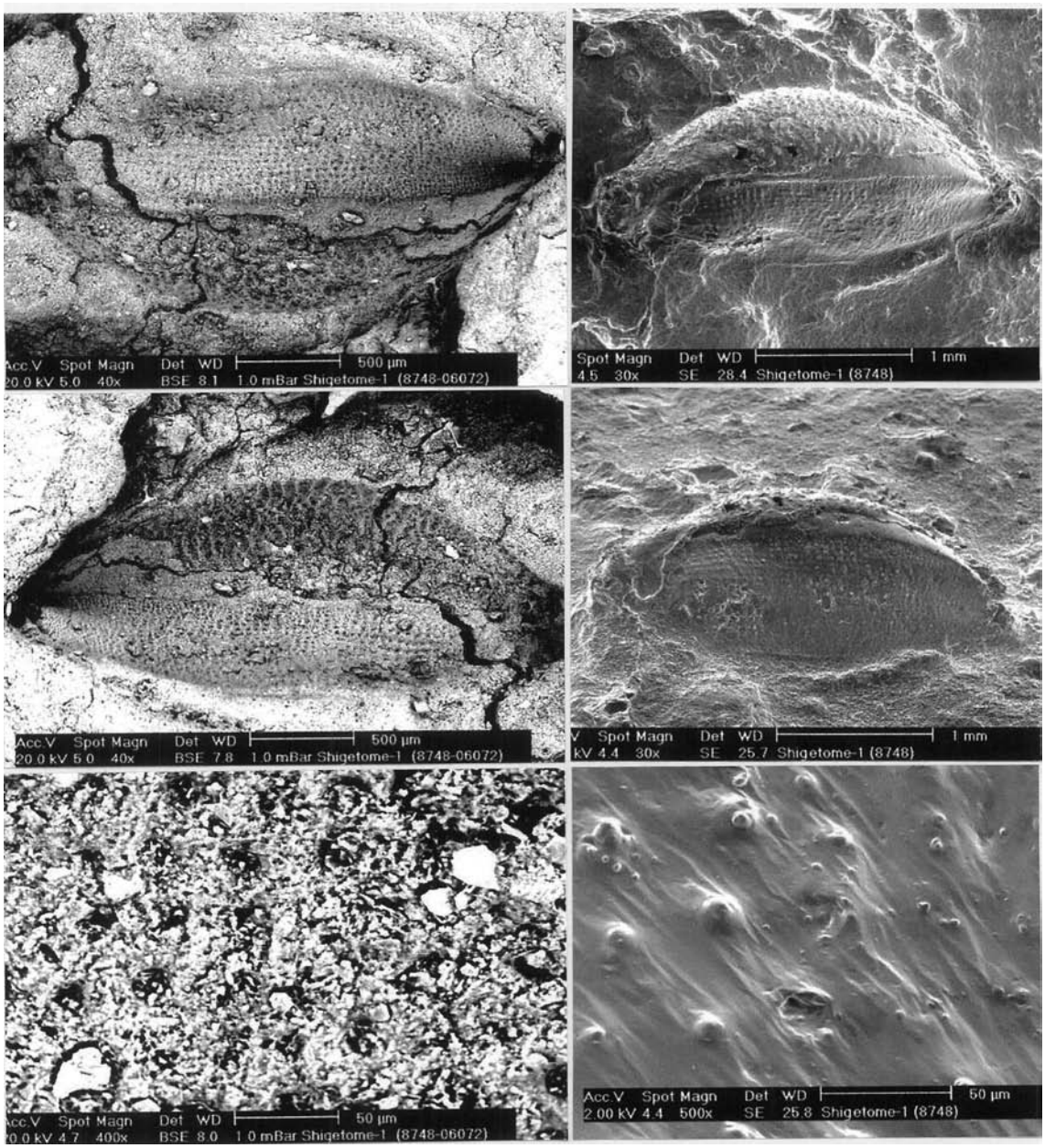
圧痕と考えられる。長さ8.93mm、幅4.06mmを測る。後章において検討を加える。

資料13（874806027－1・未図化）

土器：粗製浅鉢形土器の胴部小破片。外面は横方向のやや粗いヘラ研磨調整、内面は横方向のヘラ研磨調整である。胎土には石英、長石のやや大きめの砂粒が混入されているが、それにもまして堅果類等の果皮と貝殻片が多量に混入されていて、土器には無数の穴があいていて、土器胎



第14図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真ⅩⅣ



第15図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真ＸＶ

土としては不良である。焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面が白灰色をなす。

圧痕：外面の上端の左端部に存在する。径2.0mm前後の円形をした圧痕である。圧痕は胎土中に深く入り込んでいる。圧痕内面は圧痕主体の燃焼による変色はみられない。実体顕微鏡の観察では渦巻き状の線が確認できる。混和材として混入された巻き貝の殻頂部と考えられる。レプリカの走査電子顕微鏡の写真は第13図に示した。写真左上は平面形の全形、下も同様の写真である。

右上は側面、下は逆の側面である。径2.43mmを測る小型の巻貝、陸産の貝と考えられる。

資料14（874806027－2・未図化）

土器：粗製深鉢形土器の胴部小破片。外面は横方向のやや粗いヘラケズリ状の調整、内面は横方向のヘラナデ調整であるが、部分的に凹みを生じている。外面にはわずかにススが付着している。胎土には石英、長石のやや大きめの砂粒が混入されているが、比較的良質である。焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面が白灰色をなす。

圧痕：内面の中央部から右端部にかけて2ヶ所に存在する。ポジ圧痕である。圧痕は土器表面に線状に輪郭が現れている。輪郭線は肉眼でも確認できる。実体顕微鏡の観察では一方の圧痕の中軸に沈線が確認できた。圧痕の走査電子顕微鏡の写真は第14図に示した。上4枚が圧痕1，下2枚が圧痕2の写真である。写真左上は圧痕1の平面形、中は側面から、下は圧痕2の平面形、右上は圧痕1の先端側から、中は基部側から、下は圧痕2の基部側からの写真である。共に同一種の圧痕と考えられる。遺存状態の良いのは圧痕1であるが、それでも圧痕としての遺存状態は悪い。かろうじて中軸に隆線とそれから羽状に分岐する隆線が確認できる。縁辺が内側に巻き込まれている特徴はワラビに類似している。圧痕1は長さ3.89mm、幅2.0mm、圧痕2は長さ2.28mm、幅1.90mmを測る。

資料15（874806072―1・未図化）

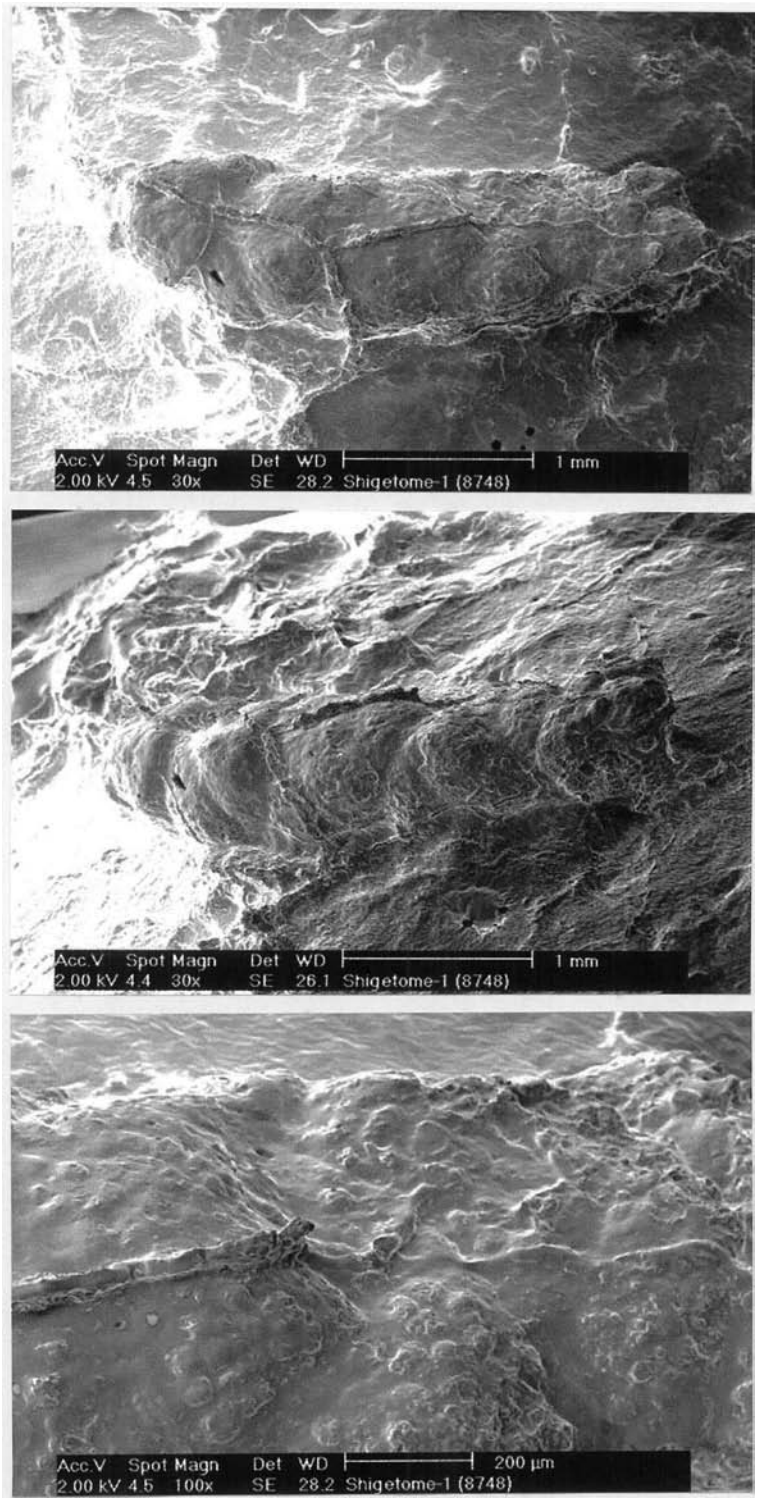
土器：粗製深鉢形土器の頸部小破片。外面は右下がりの斜方向のやや粗いヘラナデ調整を加えるが、ヘラナデが部分的で、工具の条線が斜方向に残る。器面はヘラナデが充分でないために凹凸がみられる。内面は横方向のヘラナデ調整である。胎土には石英、長石、金雲母の細かい砂粒が多量混入されているが、砂粒の粒子がそろい比較的良質である。焼成は良好、色調は外面が赤黄色、内面が赤褐色をなす。

圧痕：内面の右端部近くに存在する。径2.7mm×1.0mm前後の楕円形をした小さな圧痕である。圧痕本体の燃焼による二次加熱のため圧痕が変色するような現象は見られない。肉眼では圧痕として判別できない。実体顕微鏡の観察では圧痕の遺存状態が極めて良好であることがわかる。一部に穎が炭化せずにそのままの状態で残っている可能性が強い。実体顕微鏡の写真は第15図の左側に示した。また、レプリカの走査電子顕微鏡の写真は右側に示した。写真左上は圧痕を正面から見たところで、内穎と外穎の写真、中は内穎側から外穎を見た写真、下は乳頭突起列、右上は内穎と外穎、中は内穎側から、下は乳頭突起列である。穎果の全形は長楕円形である。内穎側は偏平で、外穎側は丸みをもっている。形態的特徴等からエノコログサと考えられる。穎果の長さ2.76mm、厚さ1.11mmを測る。後章において検討を加える。

資料16（874806072－2・未図化）

土器：粗製深鉢形土器の胴部小破片。外面は斜方向のやや粗いヘラ研磨調整を加える。内面は横方向のヘラナデ調整である。胎土には石英、長石の砂粒が多量混入されていて、あまり良質ではない。焼成は良好、色調は内外面共に黒褐色をなす。

圧痕：内面の下端の右端部近くに存在する。径3.0mm×1.0mm前後の長楕円形をした小さな



第16図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真ⅩⅥ

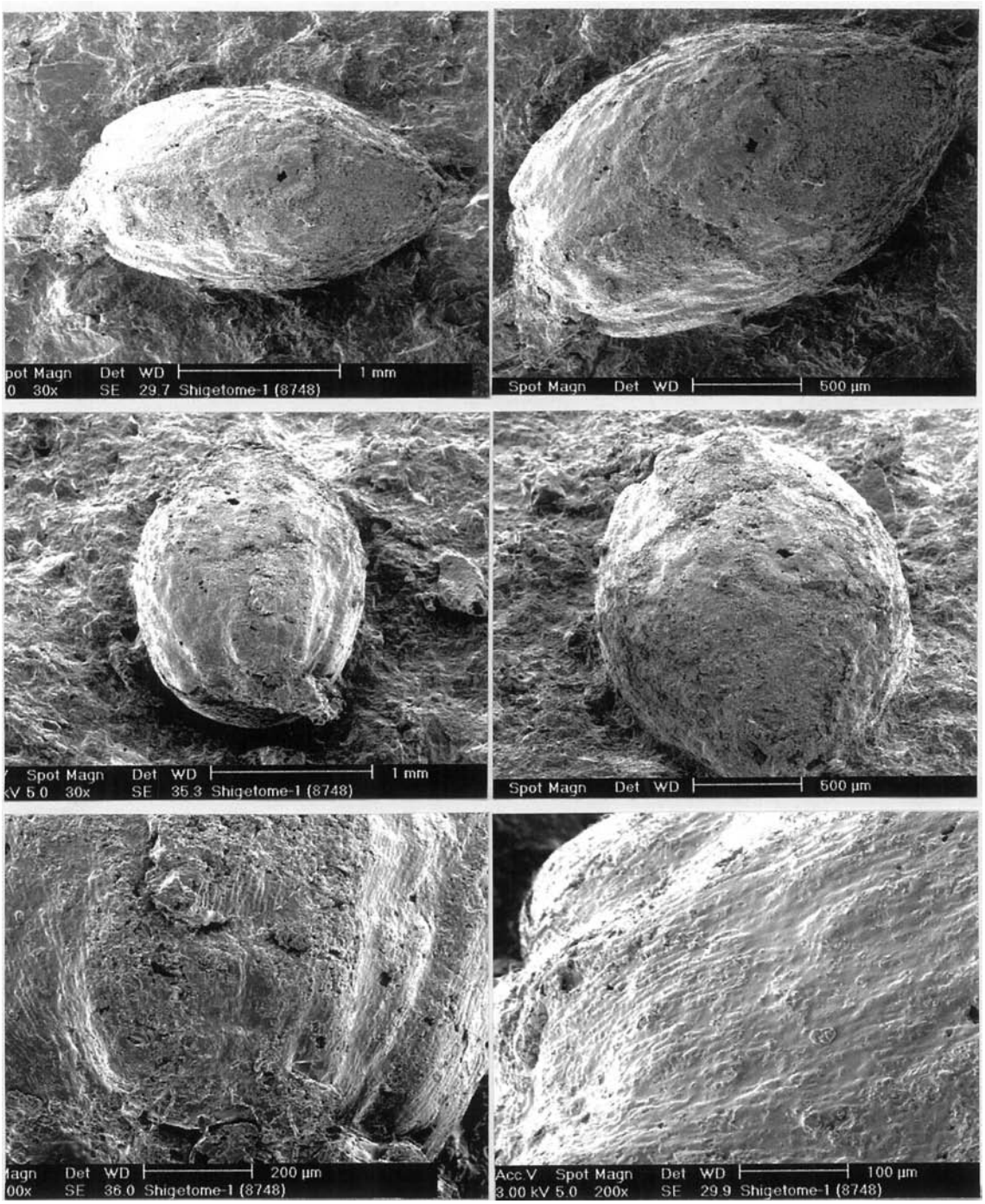
圧痕である。圧痕は胎土中に深く入り込んでいる。圧痕内面は圧痕主体の燃焼による二次加熱により黒褐色に変色している。実体顕微鏡の観察では長軸に直交して数条の線が確認でき、昆虫の幼虫の圧痕とみられる。レプリカの走査電子顕微鏡の写真は第16図に示した。写真上は圧痕の正面からの写真、中は側面、下は拡大写真である。拡大写真では全身に顆粒状の突起がある。昆虫の幼虫であることは間違いないと考えられるが、種の特定はできない。

資料17（8748－m001・未図化）

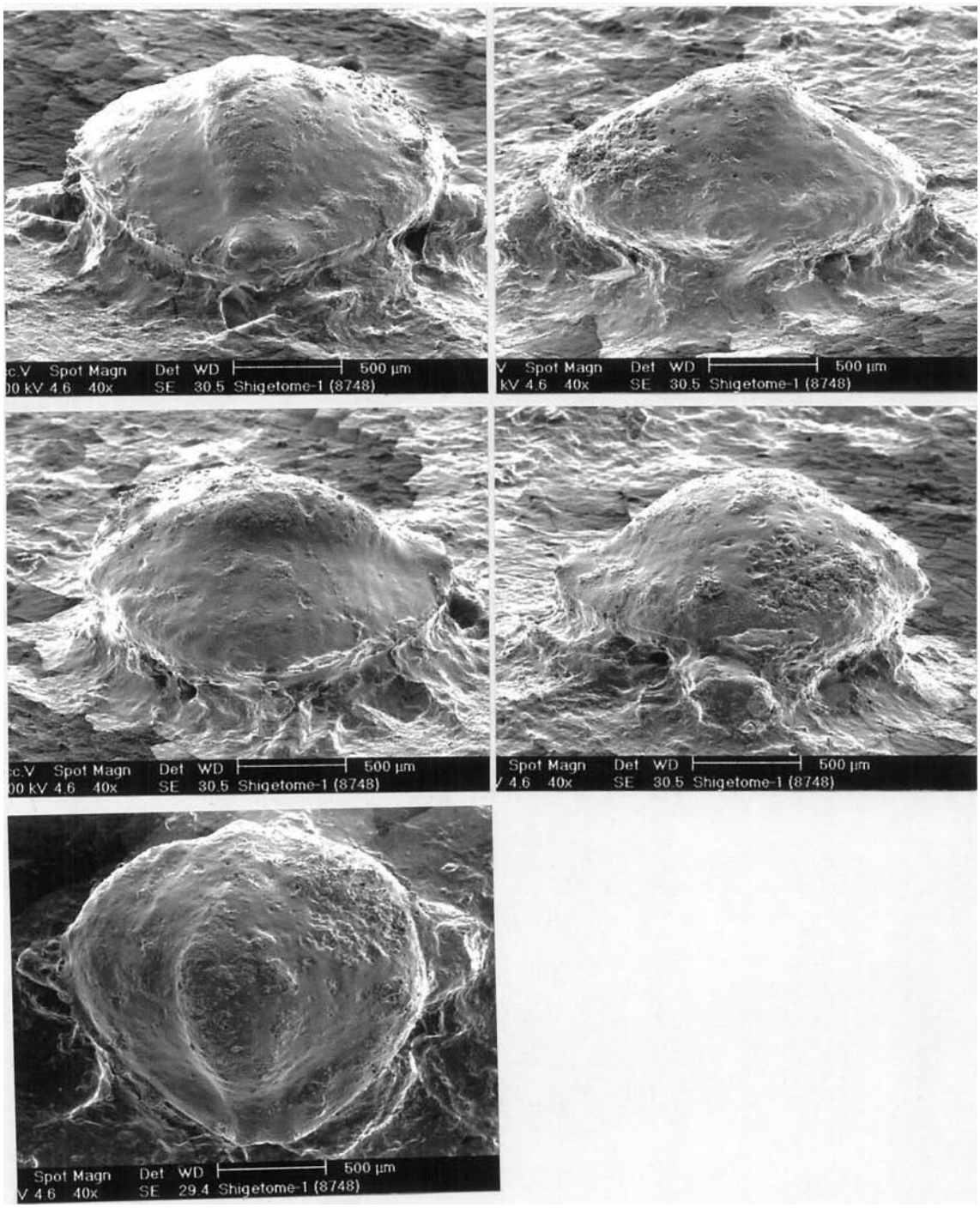
土器：粗製深鉢形土器の胴部小破片。外面は横方向のヘラナデ調整。内面は横方向のヨコナデ調整である。胎土には石英、長石の砂粒が少量混入されている。また、堅果類等の果皮と貝殻片が混入されていて、土器には点々と穴があいているが、比較的良質である。焼成は良好、色調は外面が灰褐色、内面が黒褐色をなす。

圧痕：内面の上端中央部に存在する。器面が剥離した部に確認した圧痕で、径2.0mm×1.0mm前後の楕円形をした小さな圧痕である。圧痕は胎土中に深く入り込いる。圧痕内面は圧痕主体の燃焼による二次加熱のために黒変している。肉眼でも圧痕の判別がつくほど保存状態は極

めて良好である。実体顕微鏡の観察では基盤周辺に稜線が二本確認できる。レプリカの走査電子顕微鏡の写真は第17図に示した。写真の左上は平面形、中は基盤側、下は基盤周辺の拡大写真、右上は平面形の拡大、中は先端側から下は果皮の拡大写真である。種子の全形は楕円形で先端部がやや尖る。基盤周辺には4本前後の稜線が確認できる。種子全体に凹凸がある。果皮には細か



第17図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真ⅩⅦ



第18図　重留遺跡の圧痕の電子顕微鏡写真

い条線が観察できる。種子であることは間違いないと考えられるが、種は明らかにできない。

資料18（8748－m002・未図化）

土器：粗製深鉢形土器の胴部小破片。外面は指ナデ調整を加えた後、右下がりの斜方向のヘラナデ調整を加えている。表面には工具による条線が平行線状に残っているが、器面の凹凸によっ

てヘラナデがおよんでいない部分があり、指ナデ調整のまま残っている。内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。外面には部分的であるがススが付着している。胎土には石英、長石の細かい砂粒が混入されているが極めて良質である。焼成は良好、色調は内外面共に黒褐色をなす。

圧痕：内面の中央部に存在する。径1.5mm前後の円形をした極めて小さな圧痕である。圧痕は胎土中に深く入り込んでいる。圧痕内面は圧痕主体の燃焼による二次加熱のために黒変している。保存状態は極めて良好である。実体顕微鏡の観察では中心部が紡錘形に深くなっているのが確認できた。レプリカの走査電子顕微鏡の写真は第18図に示した写真左の上二枚と右二枚は側面、左下は平面形である。全形は横広卵形をなす。片面は丸みをもって膨らみ中央部が帯状に一段高くなる。長さ1.69mm、幅1.65mmを測る。種は不明である。

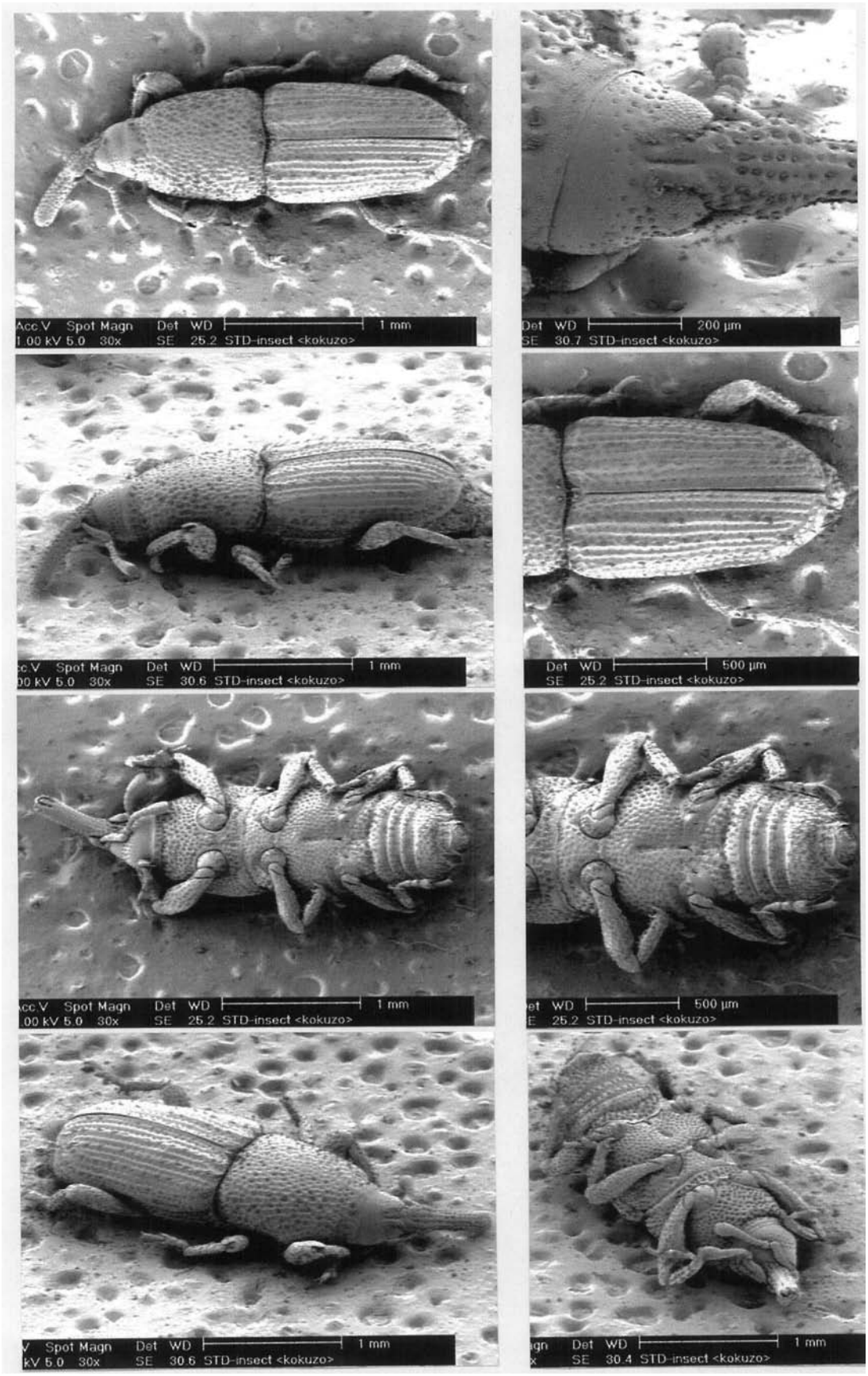
4．圧痕の同定

重留遺跡の土器から検出した圧痕は前節で示した18例である。種類としてはナス属、ドングリ類、アワ、アワの炭化物、エノコログサ、シソ科、イヌザンショウ、植物の種子ではあるが種が明らかにできない不明種、ワラビの羽片、巻き貝、コクゾウムシ、昆虫の幼虫等である。検出した圧痕資料としては明らかにできたのは植物種子が最も多く、次いで昆虫類と昆虫の幼虫、植物の羽片、陸産貝類と続く。これら生物遺存体がどのような理由により、土器の胎土中に入り込むのであろうか、現時点では明らかにできない問題点の一つである。

重留遺跡から出土した縄文式土器の量はコンテナ50箱分がある。破片の点数は明らかにできないが数万点におよんでいると考えられる。その中の18点に圧痕があるわけであり、圧痕の出現率は極めて低い。ただし、この数値はドングリ等の堅果類の果皮の圧痕や貝殻の圧痕を除いたものである。ドングリ類の果皮の圧痕や貝殻の圧痕は殆ど全ての土器に顕著に見出すことができ、その数は極めて多量である。土器の表面全体がそれらの圧痕によって占められているといっても過言ではない。この現象は早良平野を中心とした後・晩期土器に顕著であり、一部、糸島平野の土器にも及んでいる。これらドングリ類等の堅果類の果皮や貝殻の砕片は土器胎土に混和材として混入されたと考えられる。が圧倒的に多いが故に他の圧痕が検出しにくいという難点があり、ドングリ類や貝殻類の圧痕以外の圧痕の検出率が他の遺跡に比較して著しく低くなっている。これらの圧痕の示す植物の同定を改めて検討することにする。

コクゾウムシ

先ず、コクゾウムシからみていこう。第19図に現生のコクゾウムシの走査電子顕微鏡の写真を示した。コクゾウムシ族にはコクゾウムシ（Sitophilus zeamais Motschulsky）,ココクゾウムシ（Sitophilus oryzae (LINNE)）,グラナリアコクゾウムシ（Sitophilus granarius (LINNE)）、アシナガコクゾウムシ（Laogenia formosana HELLER）、ササコクゾウムシ（Diocalandra sasa MORIMOTO）、カミヤササコクゾウムシ（Diocalandra kamiyai MORIMOTO）、コササコクゾウムシ（Diocalandra elongate ROELOFS）、サ



第19図　現生コクゾウムシの電子顕微鏡写真

トウキビコクゾウムシ（Myocalandra　exarata (BOHEMAN)）、バショウコクゾウムシ（Polytus　mellerborgi (BOHEMAN)）等がいる。それぞれつくものが異なり、コクゾウムシ、ココクゾウムシ、グラナリアコクゾウムシはコメ・ムギ・トウモロコシ等の穀類、アシナガコクゾウムシは琉球、台湾に分布する。ササコクゾウムシは日傘やスダレなどの乾燥したタケ類につく。カミヤササコクゾウムシは枯竹に集まる。コササコクゾウムシはスズタケ・メダケ等を加害する。サトウキビコクゾウムシは沖縄ではサトウキビを加害し、熱帯ではタケやラタンの害虫として知られている。バショウコクゾウムシはバナナの害虫である。サトウキビコクゾウムシは琉球・台湾・東南アジアに分布し、バショウコクゾウムシは琉球・アジア熱帯・ハワイ・マダガスカルに分布している。分布からアシナガコクゾウムシ・サトウキビコクゾウムシ・バショウコクゾウムシは除外される。また、アシナガコクゾウムシは体長5.9～7.1mm、ササコクゾウムシは体長3.9～5.2mm、カミヤササコクゾウムシは体長5.8～7.4mm、ココクゾウムシは2.0～2.8mmである。コクゾウムシは体長2.9～3.5mmを測り、上記のコクゾウムシ族と重複しないので大きさで区別できる。体長2.9～3.5mmを測り、大きさが重複するコササコクゾウムシはコクゾウムシに比較して細身であり、形態的に分離することができる。（林・森本・木元1984）

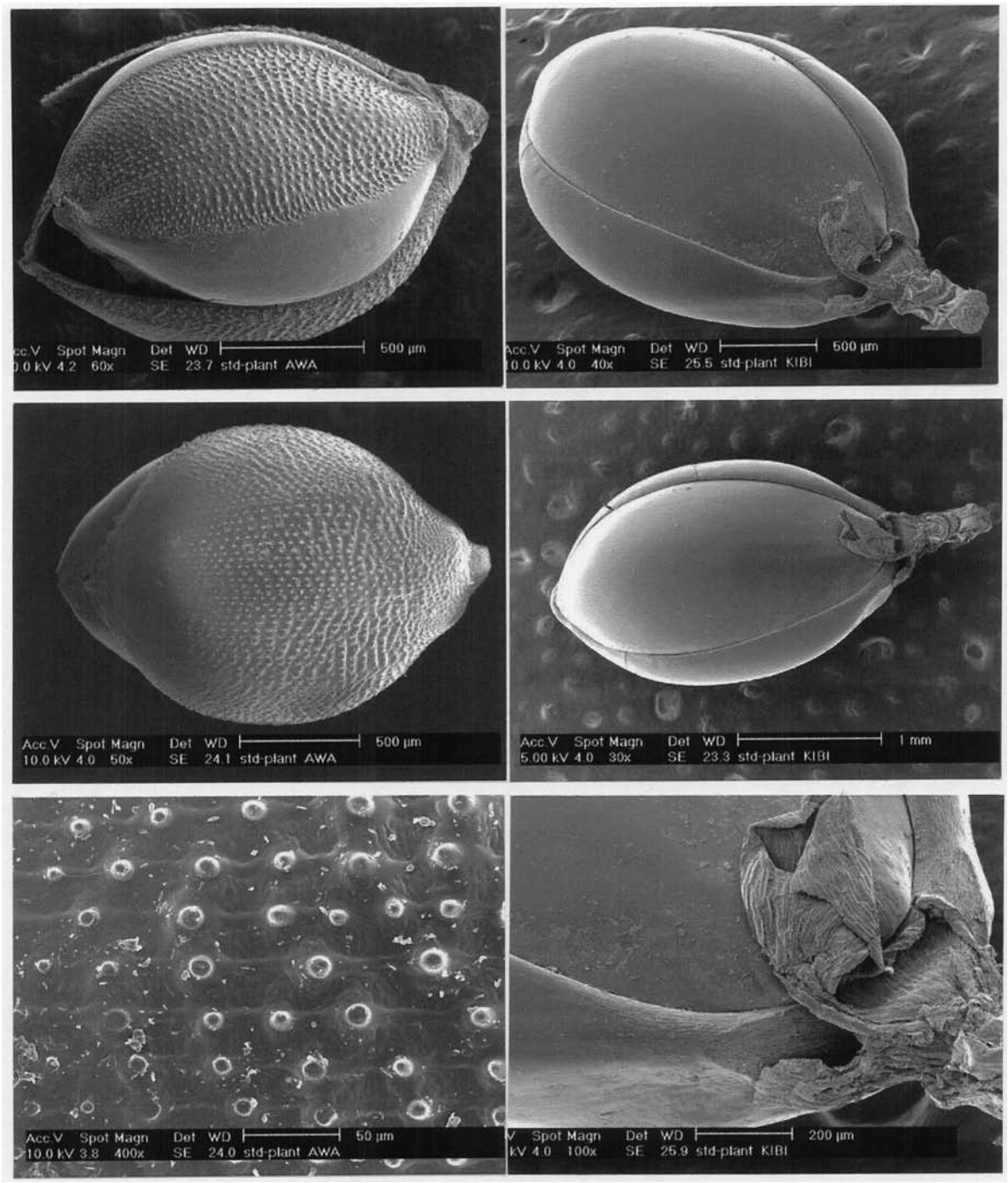
重留遺跡のコクゾウムシの圧痕例は資料5の1例のみである。圧痕としてはやや遺存状態が悪く、画像が不鮮明で判別し難いが、吻を欠損しているが頭部、胸部、腹部の区別はつく。前肢、中肢、後肢はいずれももげていて、基節を残すのみである。前胸背板、上翅には密な点刻が観察できる。後述する他遺跡のコクゾウムシの圧痕と比較しても本例がコクゾウムシの圧痕であることは明らかである。なお、コクゾウムシの同定については九州大学農学部名誉教授・森本桂先生に多くのご教示を得た。

第19図に示した現生コクゾウムシの走査電子顕微鏡写真は左側が全形写真で、右側に部分の拡大写真を示した。写真左上が背面の全形、中上が側面全形、中下が腹面全形、下が中上の写真の逆の側面全形の写真である。右側上は背面から見た頭部の拡大、吻の付け根に複眼の目が観察できる。中上が上翅の拡大、点刻列が観察できる。中下が後胸部から腹部にかけての拡大。腹部の点刻が明瞭に観察できる。下は頭部側から見た腹面の全形である。

アワ

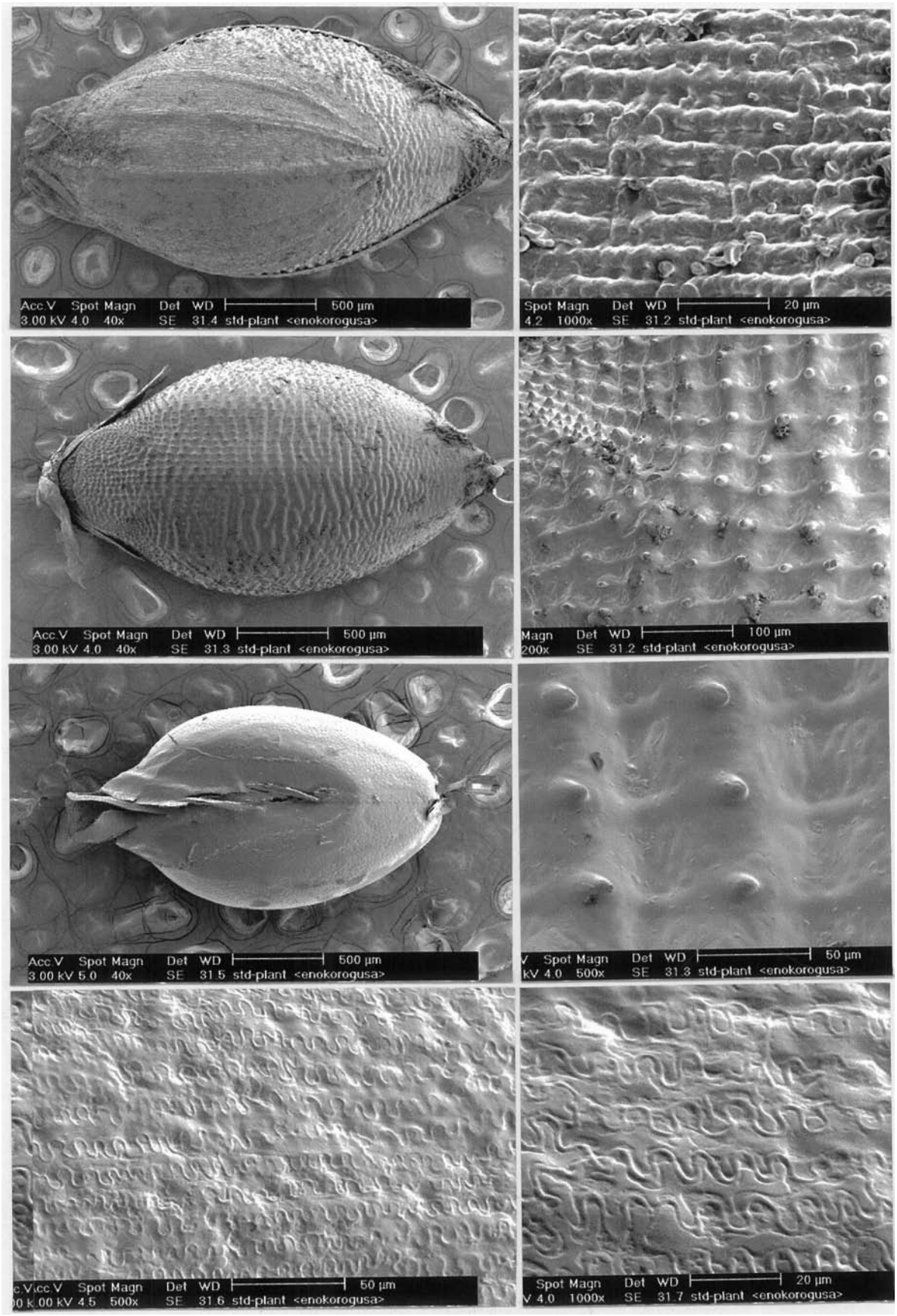
第20図にアワとキビの走査電子顕微鏡の写真を示した。左側がアワ、右側にモチキビの写真を示したキビは重留遺跡では確認されていないが参考資料として示した。

重留遺跡では資料3と資料9の2点にアワの圧痕を確認した。資料9の圧痕内部にはアワの現物が炭化した状態で遺存している。資料3ではほぼ全形が良好な状態で残っている。第1包穎と第2包穎、護穎はなく小花のみである。第1小花と第2小花の間に若干のずれがみられる。穎果には乳頭状の突起列がきれいに並んでいて、形状を加味するとアワであることが明確である。資料9は内部に種子が炭化した状態で残っているために、圧痕の遺存状態は明らかにできないが、炭化種子を走査電子顕微鏡で観察した。第9図にその写真を示した。改めてここで写真の説明を行う



第20図　現生アワ・モチキビの電子顕微鏡写真

ことにする。第9図の左中は遺存している炭化種子の全形である。炭化種子は圧痕に入り込んでいるので、観察できるのは果皮の内側であるが、幸いに、炭化種子の一部が欠けて、内側に落ち込んで表面が上を向いているので、表面の観察ができる。写真右上がその拡大写真である。表面の遺存状態は剥離が見られ遺存状態はきわめて悪い。表面には穴が無数にあいているのが確認できる。穴には比較的大きい穴（径10ミクロン）と小さい穴（径2ミクロン前後）の二者があり、大きい穴は列をなして並んでいる。定かでないが乳頭突起列が剥離した後の状態を示していると



第21図　現生エノコログサの電子顕微鏡写真

考えられる。左側下の写真は果皮の表面の拡大写真である。これまで土器の中に炭化種子として残っていた例は福岡市周船寺遺跡、長崎県肥賀太郎遺跡、熊本県太郎迫遺跡にある。太郎迫遺跡例はサンショ類と考えられるが、大部分が土器の胎土に深く入り込み明らかにできない。周船寺遺跡例、肥賀太郎遺跡例は走査電子顕微鏡の観察の結果では共にシソであった。粒子の大きさも本例と殆ど同じである。それらの断面と比較して明らかに異なることを確認した。右側の中、下の写真は穎果の表面の長細胞の拡大写真である。紐状のものがねじれているのが観察できる。アワ長細胞の特徴を良く示している。ただし、長細胞の間にみられる小さな孔は表面にはみられないものである。内側にのみあると考えられるが、まだ確認していない。今後、資料にあたって確認したいと考えている。

エノコログサ

アワと類似していて、その差はきわめて小さい。重留遺跡から1例の圧痕を確認した。第21図と第22図の左側に現生のエノコログサの走査電子顕微鏡の写真を示した。第21図の左上の写真は第1小花の護穎側から見た全形である。右上の写真は包穎の拡大写真である。長細胞の間に蝶々形の特徴的な細胞が確認できる。写真左の中上は第1包穎、第2包穎、第1小花の護穎を取り除いた状態の全形である。内穎には細点が密布している。写真右の中上、中下は内穎の細点の拡大である。乳頭突起列が規則的に並んでいるのが確認できる。写真左側の中下は種実の全形である。胚の部分がくぼんでいる。写真下は穎果の表面の拡大写真である。長細胞の状態が良く観察できる。

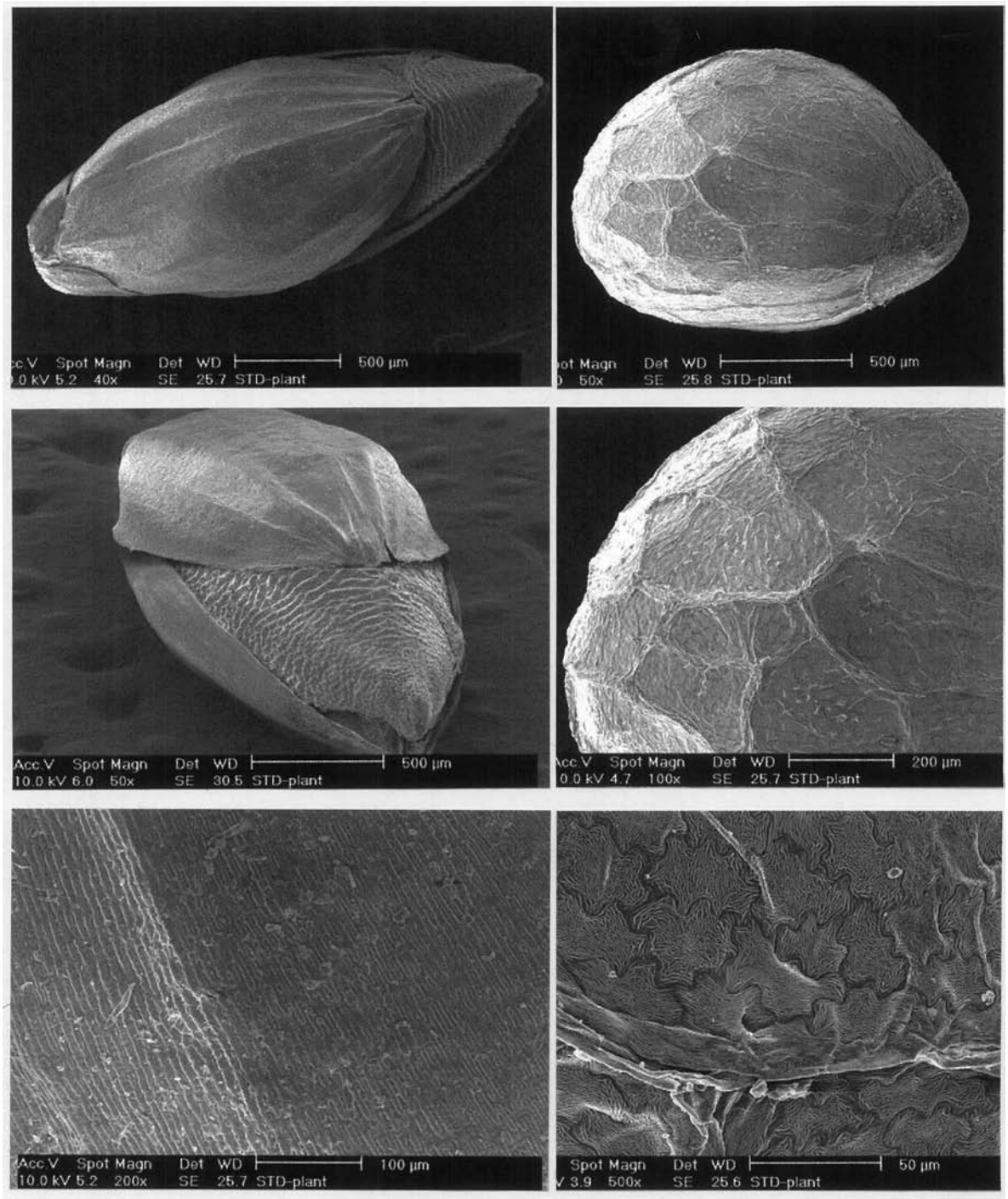
重留遺跡で確認したエノコログサの圧痕のレプリカの写真、第15図と現生のエノコログサと比較検討してみよう。圧痕は包穎がとれて、第21図左側中上の状態と全く同じである。形態的にも良く類似している。アワと比較して丸みがなく、全体に細長い。また内穎の細点の拡大写真も全く同じで、乳頭状の突起列も規則正しく並んでいる。包穎の特徴的な細胞が確認できていないが、形態やその他の特徴からエノコログサとして間違いないと考えられる。

シソ

第22図の右側にシソの走査電子顕微鏡写真を示した。シソの圧痕は先にあげた炭化種子も含めては熊本県石の本遺跡、ワクド石遺跡、長崎県肥賀太郎遺跡、福岡市周船寺遺跡で確認されている。重留遺跡では圧痕1例が確認されている。

第22図右側上は分果の全形。中は拡大、下はさらに拡大した写真である。分果は偏球形をなす。背面が丸く、覆面の正中線は鈍稜、着点は大型で、背腹両面におよんでいる。着点の上縁近くに一個の横稜がめぐっている。果皮には浅い凹みによる大型網目模様がある。

大きく拡大すると、写真下にみるようなワラジ状の組織が確認できる。

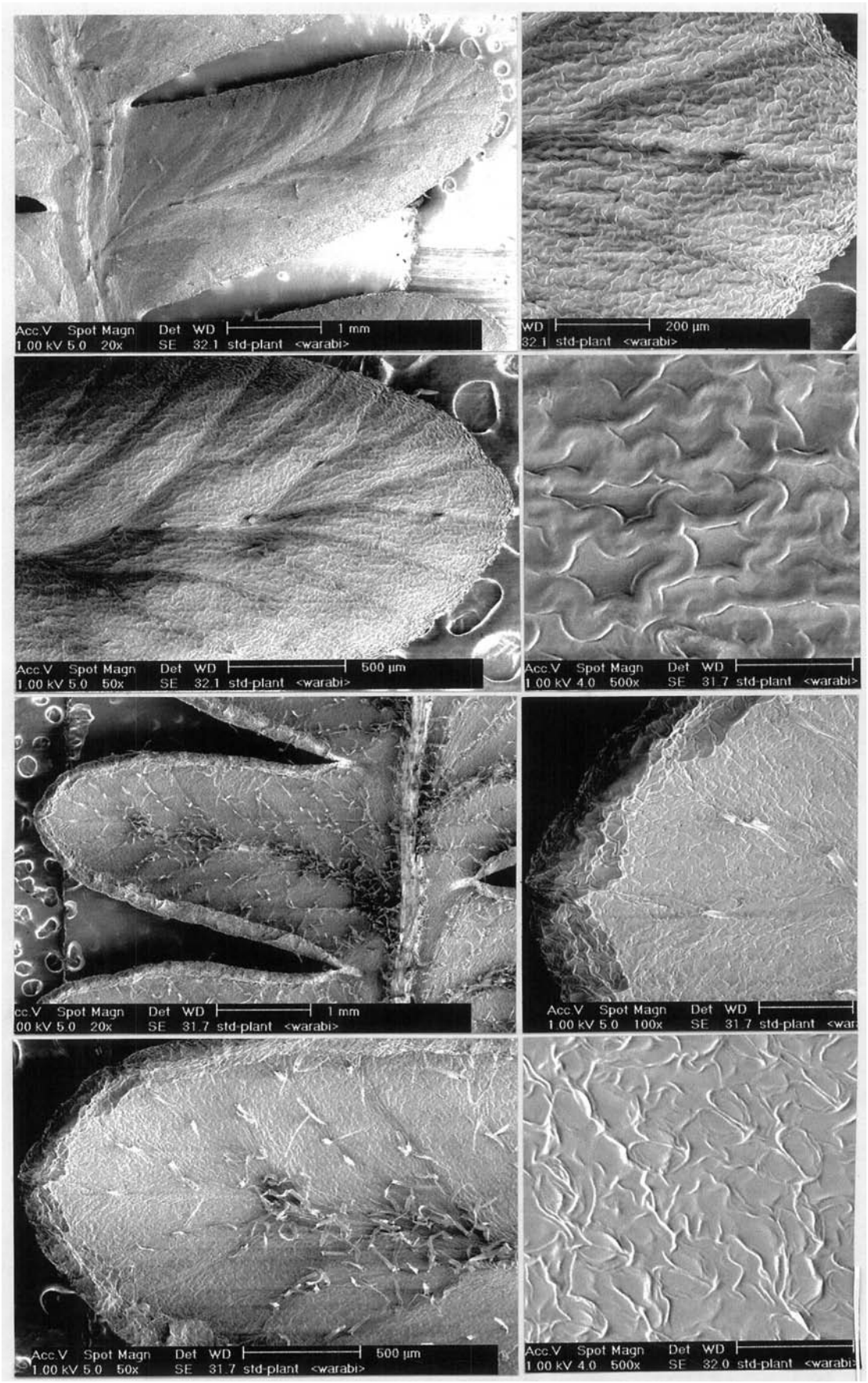


第22図　現生エノコログサ・シソの電子顕微鏡写真

第4図に示した圧痕にも大型の網目模様が明確に認められる。明らかにシソ科の分果であることが判る。大きさからエゴマの種類ではなく、シソの一種と考えられる。

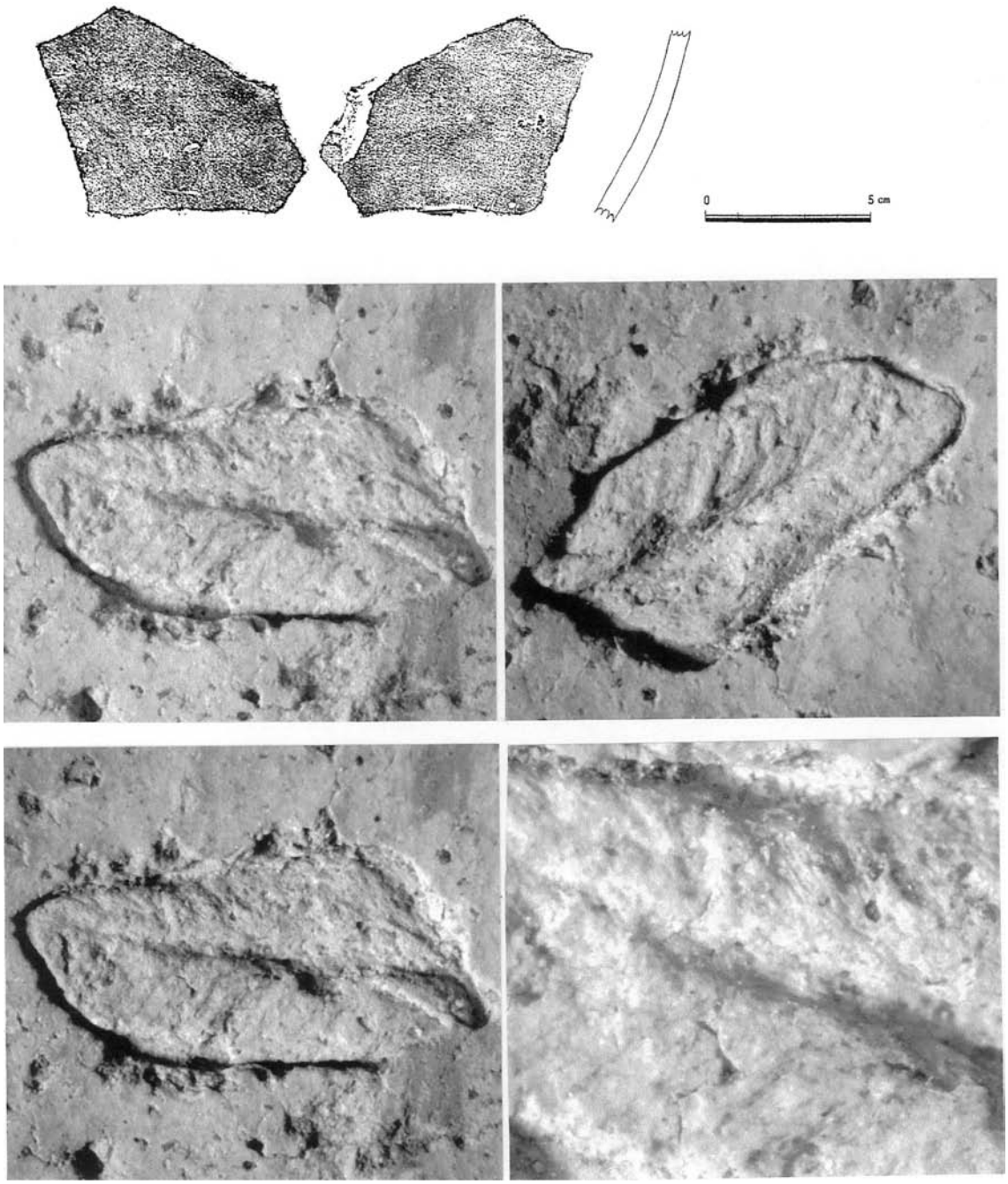
ワラビ

注目される圧痕にワラビの羽片と考えられる圧痕がある。第12図と第14図に示した写真がその圧痕である。検討するために第23図に現生のワラビの羽片の走査電子顕微鏡の写真を示した。第

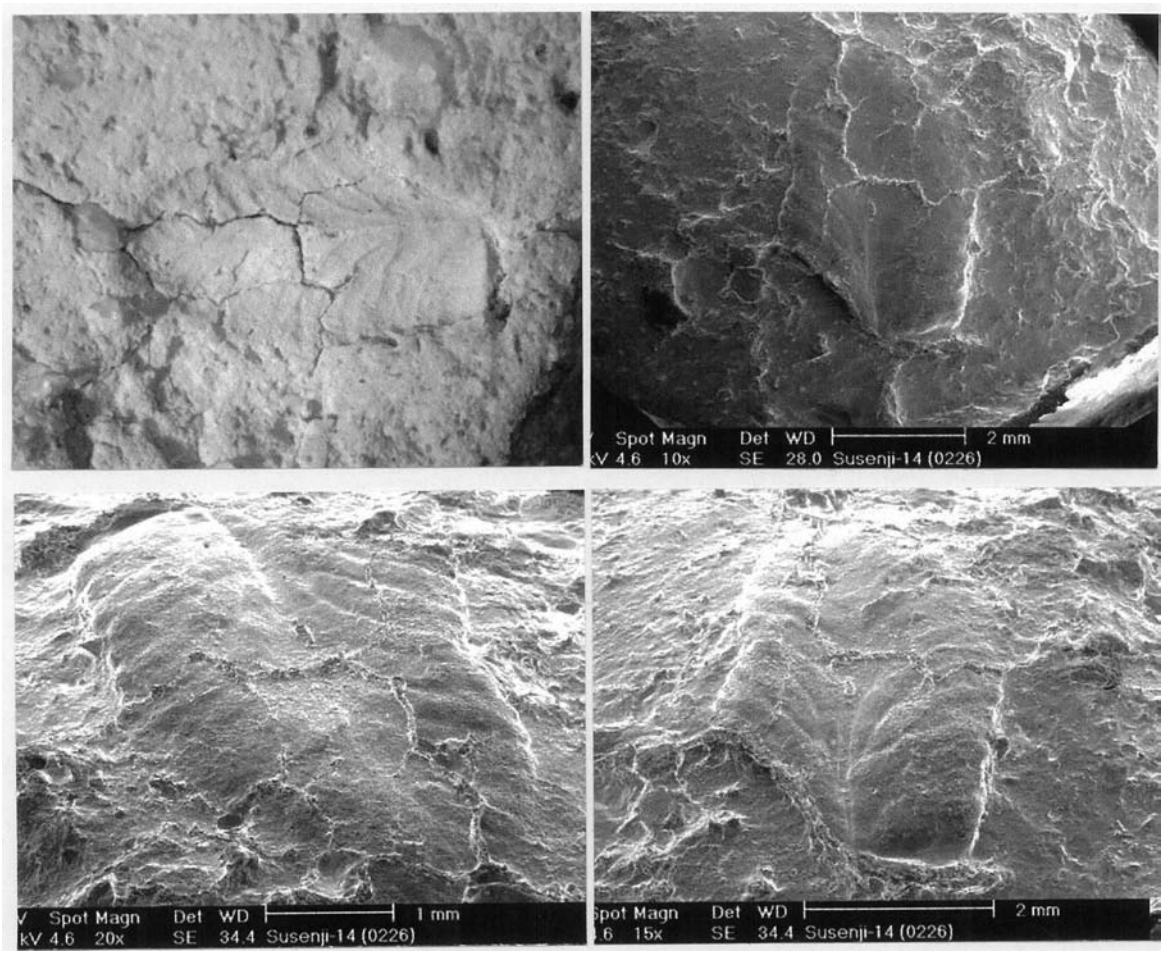


第23図　現生ワラビの電子顕微鏡写真

23図の左側上はワラビの羽片の表面の全形、中上は羽片表面先端の拡大写真、中下はワラビ羽片の裏面の全形、下は羽片裏面先端の拡大写真である。右側の上は羽片表面の先端部をさらに拡大したものである。中上はさらに拡大して細胞の状態を見た写真である。中下は羽片の裏面の先端部を拡大した写真である。下はさらに拡大して細胞の状態の写真である。以上からワラビの羽片の特徴をあげると、写真左側の中下の羽片の裏面の全形にみることができる。一つは羽片の縁が裏面側にわずかに巻き込む特徴がある。もう一つの特徴は拡大写真でも明確であるが、羽軸からのびる小羽軸の先端が縁に近いところで二つに分かれる事である。この二つがワラビの羽片の特徴である。



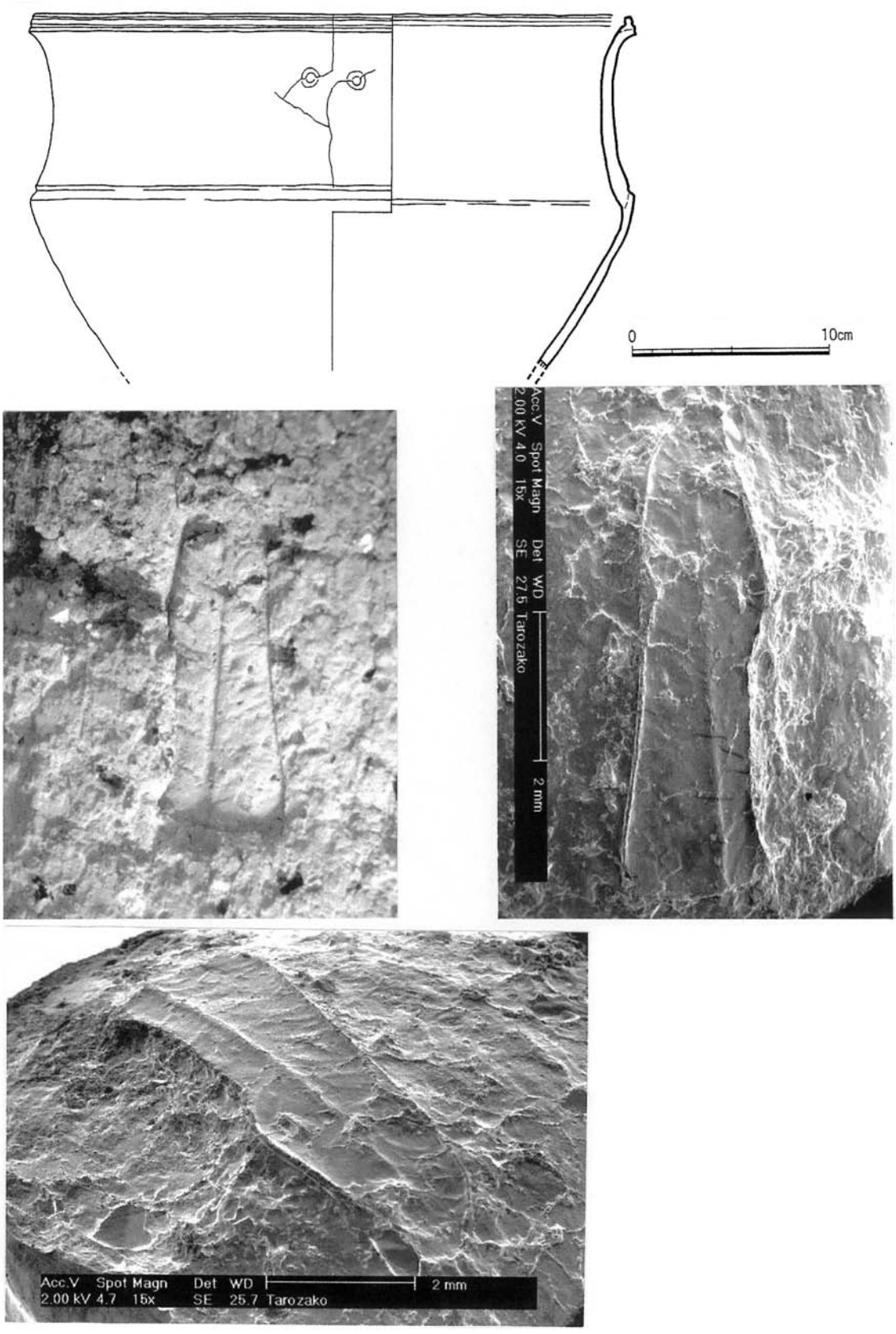
第24図　熊本県石の本遺跡のワラビ圧痕



第25図　福岡市周船寺遺跡のワラビ圧痕

重留遺跡で確認したワラビ羽片は第12図と第14図に示した。第12図に示した圧痕は晩期前半と考えられる粗製深鉢形土器の胴部破片の外面についている。圧痕は遺存状態はきわめて良好である。小さい羽のような圧痕である。圧痕では圧痕の縁に細い沈線がめぐっているように見えるが、レプリカの走査電子顕微鏡写真では縁が内側にわずかに巻き込んでいる。また羽状になっている小羽軸は明瞭で先端が二つに分かれている。ワラビ羽片の特徴を良く示している。よって、この圧痕はワラビ羽片の裏面の圧痕である。第14図の圧痕は第12図に示した圧痕同様に晩期前半と考えられる粗製深鉢形土器の胴部小破片の内面に確認したものである。同じような圧痕が2ヶ所に存在する。圧痕は走査電子顕微鏡写真でみても判るように遺存状態は良好ではない。羽片と考えられる圧痕は縁が細かい沈線をめぐらしたようになっている。レプリカでは内側に巻き込んだように盛り上がっている。圧痕の内側の羽軸や小羽軸は不明瞭であるが、本資料もワラビ羽片の裏面の圧痕とみて良いと考えられる。

ワラビ羽片の圧痕の確認は考古学的にはきわめて重要である。ワラビは根にデンプンを蓄えるた



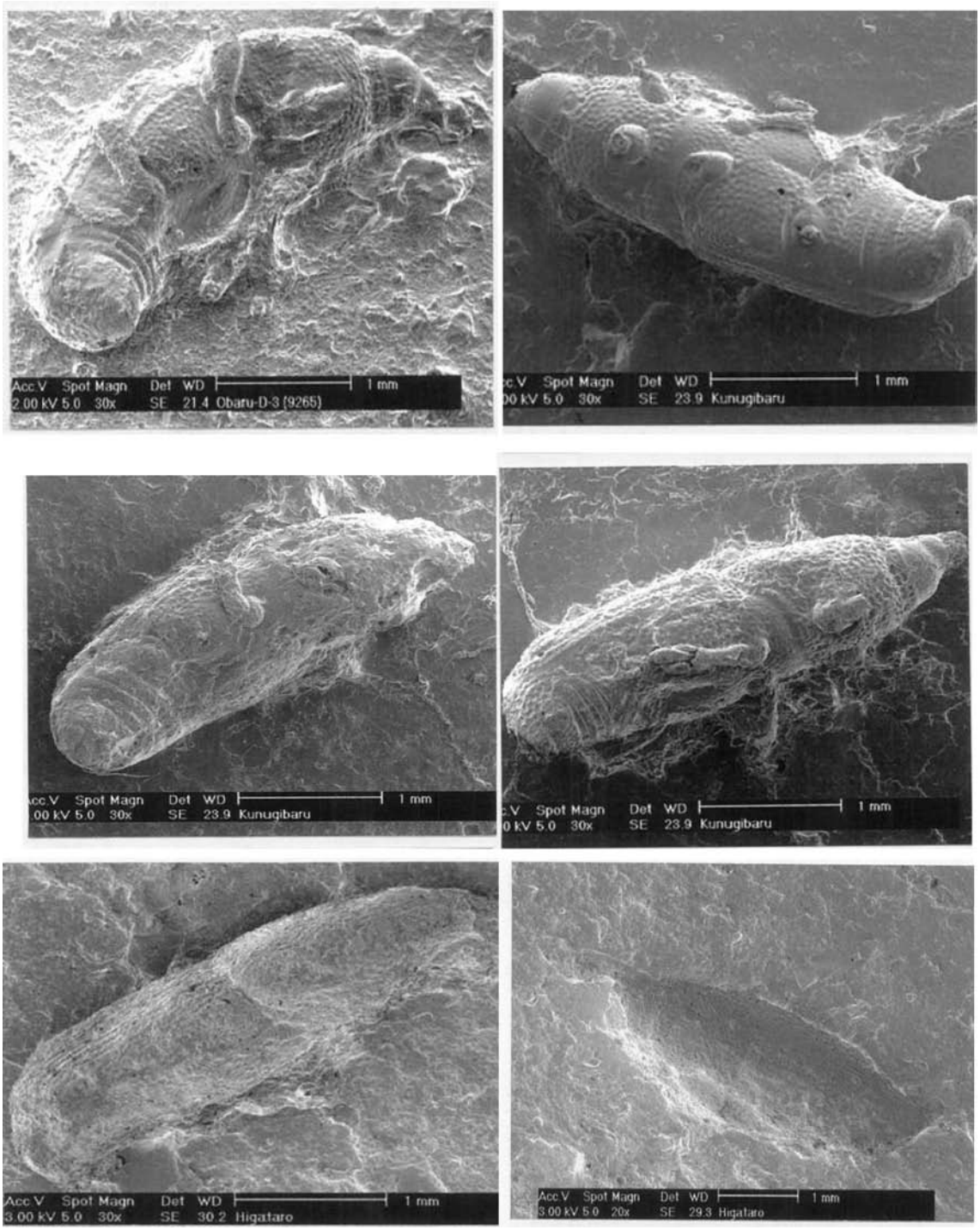
第26図　熊本県太郎迫遺跡のワラビ圧痕

め、現在でも根を掘り出してデンプンをとってワラビ餅を作っている。縄文時代にあっては重要な根茎類の食料源である。これまでは根茎類の食料源として民俗学的な視点から推測されてきたが、考古学においてワラビと縄文時代の関係が把握できたのは初めてである。他遺跡でもワラビの羽片の圧痕が確認できているので、ここで合わせて紹介しておくことにする。

これまでワラビの羽片の圧痕が確認されているのは熊本県石の本遺跡、太郎迫遺跡、福岡市周船寺遺跡の三ヶ所である。石の本遺跡の圧痕写真は第24図に、周船寺遺跡の圧痕写真は第25図に、太郎迫遺跡の圧痕写真は第26図に示した。石の本遺跡例は晩期前半の天城式土器に否定される精製の鉢形土器ないしは深鉢形土器の胴部破片の外面についている圧痕である。実体顕微鏡写真の観察では圧痕の縁には細かい沈線がめぐり、圧痕の中央部に羽軸が走り、その左右に小羽軸が羽状に展開している。小羽軸はあまり明瞭とはいえないが先端部は二つに分かれている部分が観察できる。縁の沈線部分は羽片の縁が裏面に向かって巻き込んだ状態を示していると観察され、圧痕の特徴からワラビの羽片の裏面の可能性が強い。周船寺遺跡例は晩期後半の黒川式土器の深鉢形土器の胴部小破片の内面についた圧痕である。圧痕の遺存状態はきわめて良好である。第25図の写真左上は実体顕微鏡の写真である。他はレプリカの走査電子顕微鏡の写真である。圧痕他の例と異なり縁の沈線（裏面への巻き込み）はなく、レプリカの走査電子顕微鏡の写真では全体に膨らみをもっている。羽軸、小羽軸も明瞭で小羽軸の先端は二つに分かれている。圧痕の特徴からワラビの羽片表面の圧痕であることは明確である。太郎迫遺跡例は後期末の御領式の深鉢形土器の頸部内面に確認した圧痕である。第26図の上に土器の実測図を示した。写真左上は実体顕微鏡の写真で、他はレプリカの走査電子顕微鏡の写真である。圧痕はやや細長い。圧痕の縁の周囲には細かい沈線がめぐっている。羽軸、小羽軸の遺存状態もきわめて良好である。小羽軸は先端部で二つに分かれている。縁の特徴や小羽軸の特徴からこの圧痕もワラビの裏面の圧痕であることは明らかである。ワラビについては次章において改めて触れる事にする。

5．圧痕からみた生業－根茎類採集と縄文農耕

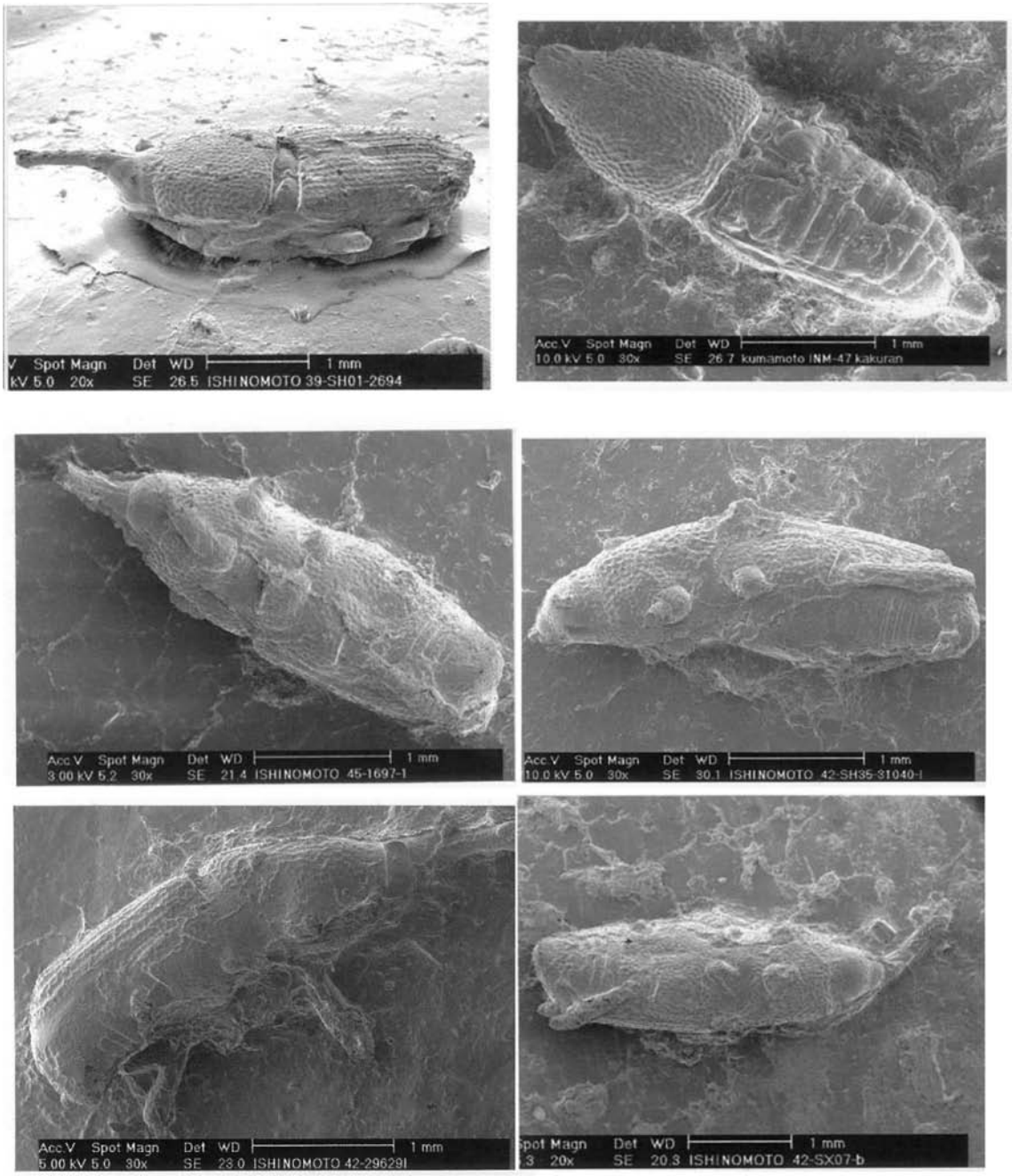
以上重留遺跡の土器に残された圧痕について検討を加えてきた。検討の結果、出土土器の大部分に無数に認められるドングリ類を含んだ堅果類の果皮の圧痕と貝殻の圧痕を除いて、確認した圧痕は、植物種子ではナス属、アワ2点、シソ科、イヌザンショウ、エノコログサ、不明4種、ドングリ類2点があり、昆虫としてはコクゾウムシ、不明種の幼虫2種、その他、陸産の巻き貝1点がある。これら圧痕の中で特に重要なのは栽培植物あるいは、それらが存在することからコメ、ムギ等穀類の存在を間接的に示す昆虫（害虫）が存在することである。栽培植物としてはアワの存在がある。アワの資料は2点ある。1点は圧痕のみであるが、他の1点は圧痕の中にアワの現物が炭化した状態で遺存している。また、シソ科として分類した種子は詳細な種は不明ながらシソの可能性が強く、栽培植物の一つとして考えられる。昆虫（害虫）として確認したコクゾウムシはコメ、ムギ、トウモロコシにつく害虫である。ただし、トウモロコシは日本列島への伝来時期が新しく、天正7年



第27図　コクゾウムシの走査電子顕微鏡写真

（上左・大原D　遺跡、上右・中左・中右・柊原貝塚、下左・下右・肥賀太郎遺跡）

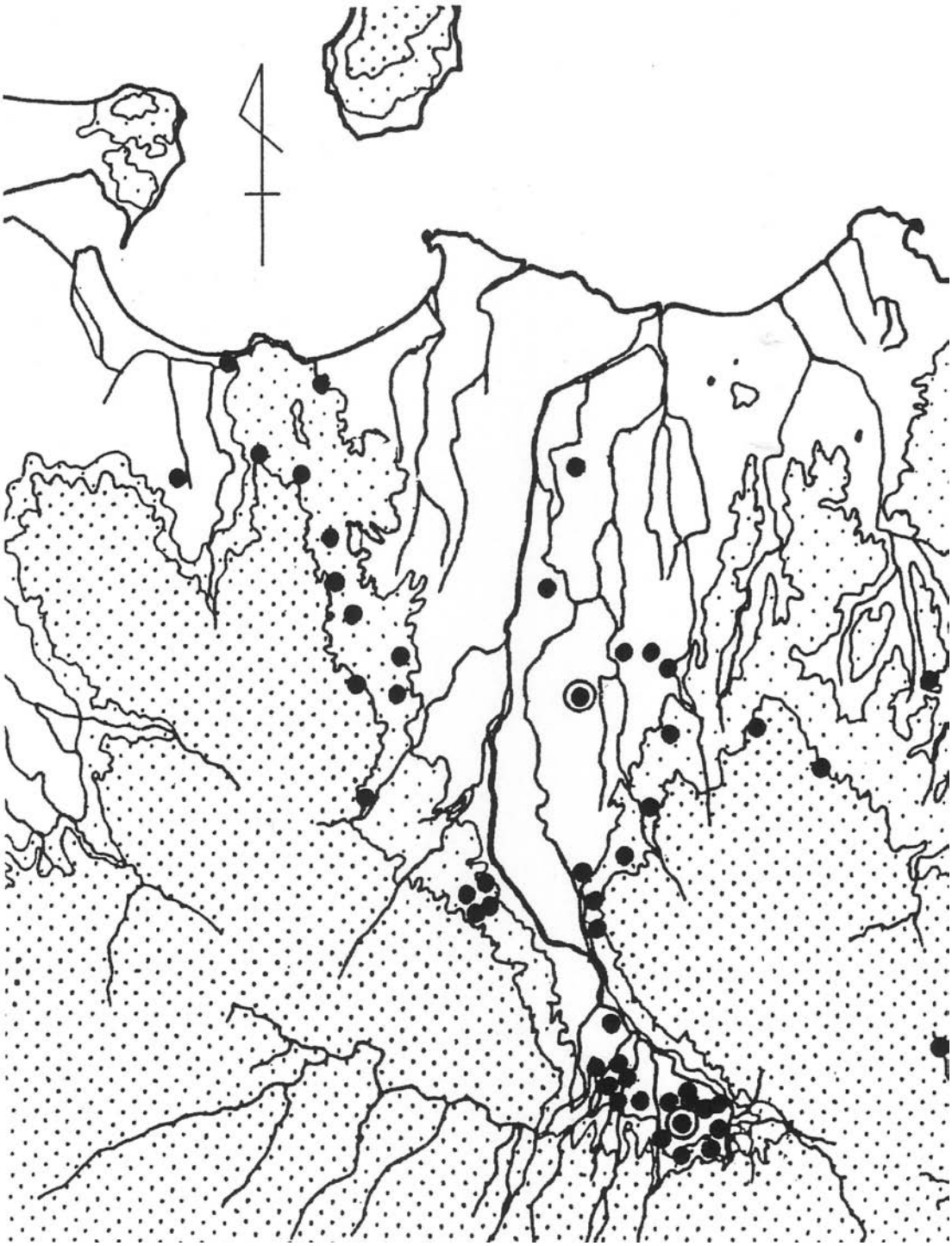
（1579）ポルトガル人が長崎に伝えたというのが最初とされているので、縄文時代にはコクゾウム



第28図　コクゾウムシの走査電子顕微鏡写真（石の本遺跡）

シのつく穀類からは除外される。よって、コクゾウムシからその存在が予想できる穀類はコメ、ムギ類に限定できる。すなわち、重留遺跡の圧痕から可能性として想定できる栽培植物は、イネまたはムギ、あるいはイネ、ムギの両者とアワ、シソが存在したことになる。栽培植物の存在、即、農耕の存在を証明するものではないが、コクゾウムシは穎がついたままの種子には吻によって孔を開けることができないので、害する事はできない。また繁殖するためにはある程度の量が必要である。よって、コクゾウムシがつくのは穎が取り除かれたもの、すなわち脱穀され貯蔵されていることが

必要である。そうであればコクゾウムシが存在することは、縄文時代に穀類が脱穀、貯蔵されていたことを意味し、間接的に農耕が存在したことを示している。コクゾウムシは重留遺跡以外にも複数の遺跡から圧痕として検出されている。第27、28図にコクゾウムシの走査電子顕微鏡を示した。第27図の左上が福岡市大原D遺跡の晩期前半の深鉢形土器に確認されたコクゾウムシ、吻の一部、



第29図　早良平野における晩期後半の遺跡分布

足は腿節以下を欠損している。右上・中の左右が鹿児島県柊原遺跡の晩期の深鉢形土器に確認したコクゾウムシである。前者同様に吻の先端部、足は基節、転節を遺すのが殆どである。下の左右は長崎県肥賀太郎遺跡の晩期の土器に確認されたコクゾウムシである。他のコクゾウムシの圧痕に比較して遺存状態が悪くかろうじて点刻列の存在からコクゾウムシと判別できる。共に足を欠損している。吻については片方は欠損しているが、他方はほぼ完全に残っている。第28図は熊本県石の本遺跡のコクゾウムシである。7例以上のコクゾウムシの圧痕があるが、6例を図示した。走査電子顕微鏡写真の左上は晩期・古閑式の精製浅鉢形土器に確認した圧痕である。足を除いてほぼ完全残っている。上右は天城式の精製深鉢形土器に確認した圧痕である。圧痕で最初に確認したコクゾウムシである。極めて遺存状態が良好であるが吻と上翅を欠損している。目の複眼の状態も観察できる。中右・左は遺存状態が類似している。吻の先端部を欠損する。足は基節、転節を除いては殆ど遺存していない。中左は後期末の御領式の精製浅鉢形土器に確認された圧痕、中右は天城式の深鉢形土器に確認された圧痕である。写真下左・右のコクゾウムシは比較的遺存状態は良好である。吻もほぼ完全に残っている。足は前者同様に基節、転節を遺すものが多いが部分的には腿節が残っている。下左は天城式の深鉢形土器、下右は後期・御領式の精製浅鉢形土器に確認した圧痕である。

以上、重留遺跡の圧痕とそれに関連する九州における圧痕の諸例を見てきた。その結果、九州においては縄文時代後期後半から晩期にかけて農耕が行われていたのはほぼ確実となってきた。ではどのような農耕が行われたのであろうか。重留遺跡おける石器粗製をみてみよう。石器組成は石鏃・同未製品36点、スクレイパー15点、石匙2点、打製石斧27点、打製石斧または磨製石斧未製品と考えられるもの4点、磨製石斧未製品2点、磨製石斧9点、砥石3点、磨石13点、石皿2点、石錐8点、彫器2点、石錘3点、楔形石器13点、つまみ形石器7点、使用痕・加工痕ある石器115点、異形石器1点の計260点以上がある。これらの石器でこれまで農耕的とされた石器は打製石斧であるが、中九州の火山灰台地の打製石斧の数に比較するとその数は余りに少ない。それでも数が増え、石器構成の1割を占めることは注目される。先にみたようにワラビ等の根茎類の採集具としての使用が考えられる。重留遺跡の石器組成で考えられる農耕形態は何であろうか。ここでは磨製石斧とその未製品に注目しておきたい。磨製石斧は樹木の伐採具として評価され、磨製石斧の破損品はその使用場所に廃棄される傾向が強い事を考えれば、集落内の磨製石斧の構成比率はあまり問題とはならない。そうすれば磨製石斧が必要とされる焼畑農耕が最も可能性が強いことになる。焼畑農耕においては耕作具はあまり必要ではなく、除草用の打製石斧が数本あれば事足りる。また、狩猟具である石鏃の存在も注目される。石器組成の14%弱を占めている。焼畑耕地が開かれることによって、食物連鎖が起こり、後期後半から晩期にかけて狩猟活動が活発になることは先に指摘したところである（山崎2007）。

次に遺跡分布から検討をすすめよう。第29図は早良平野の晩期後半(胴部破片等で時期が限定できないもので可能性あるものも含める)の黒川式土器を中心に遺跡の分布を整理したのである。沖積地の自然堤防上に立地する遺跡は少なく10ヶ所未満、その中に拠点集落と考えられる遺跡が2ヶ所

にある。早良平野のほぼ中央部に位置する田村遺跡と早良平野の奥部、盆地状に展開する脇山地区のやや東南に片寄った、扇状地上に位置する脇山遺跡である。田村遺跡は後世に削平され残存状況は良くなく、埋甕2基、土坑が残っているに過ぎないが、土器、石器の遺物は広範囲にわたって出土する。脇山遺跡は遺構としては埋甕があるにすぎないが、遺物は比較的まとまって出土している。開田による削平が著しい。両遺跡間は直線距離にして約6㎞離れている。山麓斜面の小遺跡は平野を囲む山地の標高20～100mの間に点々と散在し、脇山地区では扇状地斜面に同様に点々と散在している。これらの遺跡の発見は大型の圃場整備事業、宅地造成に伴い偶然発見したものばかりである。特に宅地造成に伴う調査は、試掘調査を実施しても遺跡が発見されることは稀で、普通は地表に現われた古墳等が調査対象となるため、小規模遺跡の存在は、現在発見されている以上に存在したことは充分考えられることで未調査のまま破壊された可能性は強い。今後、未調査区域も入れると小規模遺跡は現状の数倍にも膨れあがると考えられる。

小規模遺跡は数ヶ所の沖積平坦地に立地するものを除けば、大部分は丘陵斜面に立地していることは先にも述べた。丘陵斜面の傾斜角は3～20°の範囲で、最も多いのは5～10°の範囲である。遺物には土器と石器がある。土器には浅鉢、深鉢があるが、片寄りはみられない。石器には石鏃、石匙、スクレイパー、磨製石斧、打製石斧、磨石、凹石等がみられ磨製石斧、石匙、石鏃等が比較的目立つ。磨製石斧は厚みのあるものが多く、樹木の伐採具として使用されたと考えられる。また完形品が非常に少なく、半折したものや一部を欠損したものが多い。このことはこれらの石斧が小規模遺跡周辺で使用されたことを示していると共に、小規模遺跡の意味をも暗示している。

民族事例にみる集落を囲む焼畑耕地の分布と第29図の大規模遺跡を囲むように丘陵斜面に分布する小規模遺跡のあり方が極めて類似していることがわかろう。民族事例では、焼畑耕地には畑小屋(出作小屋)が併設されることは普通であり、筆者は小規模遺跡が畑小屋(出作小屋)に関連したものと考えている。また、早良平野には拠点集落と考えられる大規模遺跡が二ヶ所存在することからみて、二つの集団領域が存在したと考えられる。なお脇山地区の小規模遺跡の分布が扇状地上に集中しているのは、周辺の山地斜面が全く開発されず残っているためであり、今後、斜面の開発に伴い小規模遺跡が増加していくことは疑いなかろう。また、やや時間が遡る重留遺跡の段階の状況が明らかになると考えられる。

山崎純男2007「九州縄文時代生業活動の展開」第17回九州縄文研究会福岡大会『九州における縄文時代早期前葉の様相』

報告書抄録

ふりがな	いるべじゅうに
書名	入部XII
副書名	重留遺跡第1次調査報告
巻次	XII
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第925集
編著者名	力武卓治　常松幹雄　米倉秀紀　山崎純男
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810－8621　福岡市中央区天神1丁目8－1　TEL092－711－4667
発行年月日	西暦2007年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しげとめいせきだいいちじちょうさ 重留遺跡第1次調査	ふくおかしさわらくしげとめ 福岡市早良区重留	40132	8748	33° 31′ 52″	130° 20′ 06″	19870112 ～19870330	23,000	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
重留遺跡 第1次調査	集落	縄文時代晩期から古墳時代	縄文時代晩期：竪穴住居1以上＋土壙5＋埋甕1＋包含層、弥生時代早期～前期：自然流路、弥生時代後期～古墳時代前期：自然流路、古代以降：土壙＋小溝	縄文時代：土器＋石器＋土製品、弥生時代～古墳時代：土器＋石器＋木製品＋種子、古代以降：土師器＋陶磁器	

要約	入部地区圃場整備事業に伴う第1次調査に当たる。調査区は、四箇遺跡群の南東側に隣接しており、縄文時代晩期の竪穴住居跡、土壙、埋甕、散布地などで構成された小集落を確認した。小規模ではあるが縄文時代集落の発見は福岡市で初である。この集落の東側には、弥生時代早期から古墳時代に至る自然河道が北流しており、井堰や護岸状の遺構が設けられていた。

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第925集

入部（いるべ） XII

— 重留遺跡第1次調査報告 —

2007（平成19）年3月30日

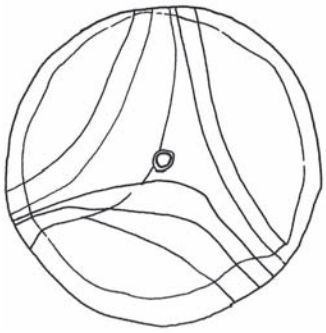
発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
電話　092-711-4667

印　刷　三栄印刷株式会社
福岡市博多区千代1丁目6番1号
電話　092-631-3336

入部XII

Irube XII

Result of the first excavation of Shigetome-ruins
Report on Archaeological Research in Fukuoka City vol.925



福岡市埋蔵文化財調査報告書第九二五集

二〇〇七

福岡市教育委員会

2007

The Board of Education of FUKUOKA CITY
Japan